

勸群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第106集  
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第4集

# 矢 田 遺 跡

平安時代住居跡編 (1)

1 9 9 0

群 馬 県 教 育 委 員 会  
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
日 本 道 路 公 団





助群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第106集  
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第4集

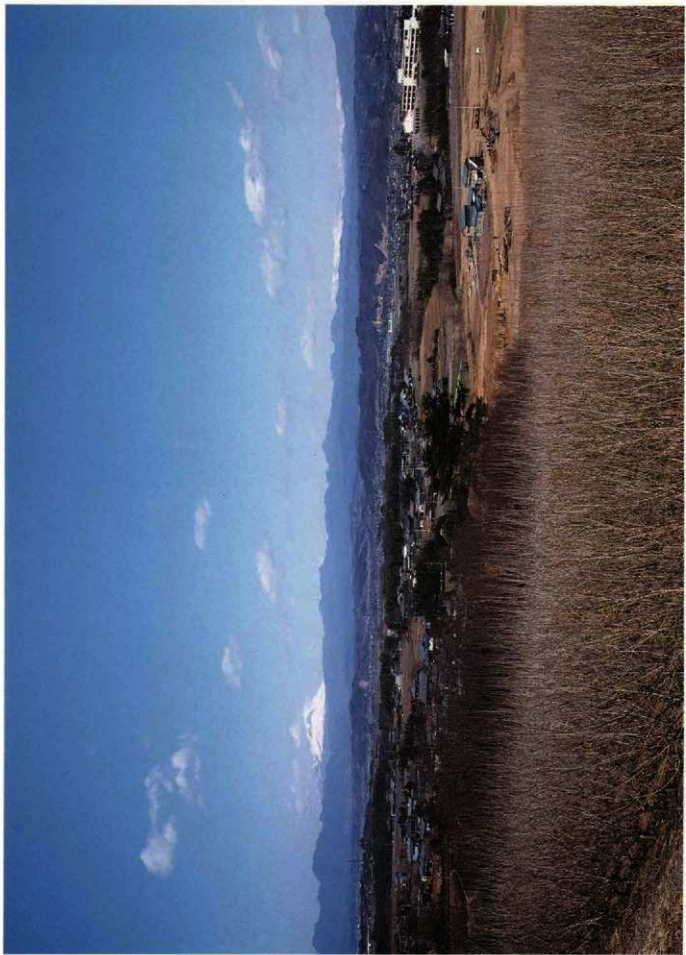
# 矢 田 遺 跡

平安時代住居跡編 (1)

1 9 9 0

群 馬 県 教 育 委 員 会  
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
日 本 道 路 公 団

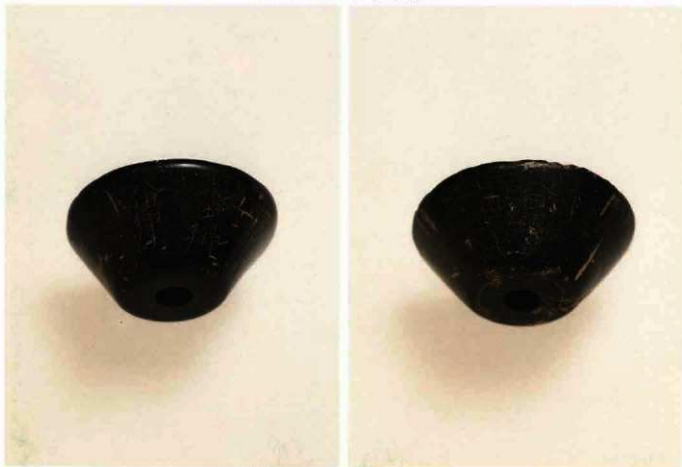




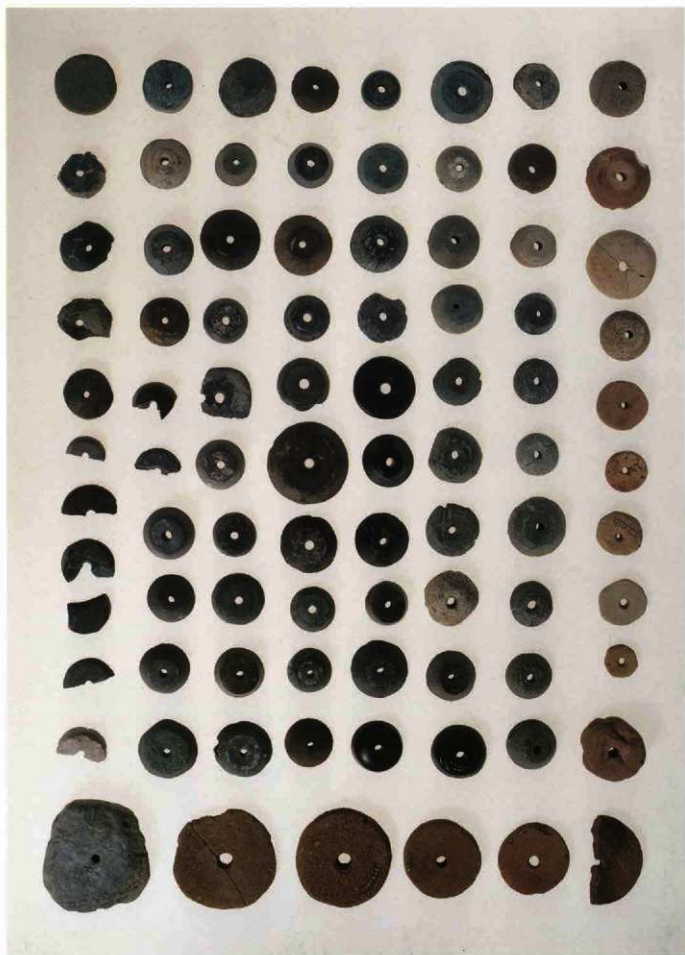
南側の丘の上から臨む大田道峠(右側)と周辺の風景



線刻を有する紡錘車(83号住居跡出土)



線刻を有する紡錘車 左は50号右は79号住居跡出土



矢田遺跡出土の石製紡錘車および類似石製品



121号住居跡出土繊維（資料1）



121号住居跡出土繊維（資料2）

## 序

関越自動車道の藤岡インターチェンジから分かれ、長野県・新潟県へと通じる上信越自動車道の建設工事は、西上州の地に大きく前進し、橋梁工事・山腹の掘削工事等によって、景観も大きく変わってまいりました。

矢田遺跡のある吉井町は、上野国甘楽郡、後の多胡郡の地域にあたり、国指定特別史跡「多胡碑」をはじめ多くの文化財に恵まれたところです。この遺跡は多胡郡矢田郷と目されており、調査の進展に伴い古墳時代から平安時代にかけて連続と続いた大集落であることがわかっただけでなく、文字資料も多く出土し、古文献とのかかわりにも深く関心が持たれることになりました。

当遺跡は吉井インターチェンジ（仮称）部分にあたり、広大な面積を持ち、事前調査による遺物散布の多さから、発掘調査は昭和61年度から平成2年度まで継続しています。整理事業は平成元年度から開始し、年度毎に報告書を刊行する計画をたて、今回、第一冊目の刊行がなったものです。

報告書の刊行にあたり、日本道路公団・群馬県教育委員会・吉井町教育委員会をはじめ多くの関係の方々、また、発掘調査・整理事業にあたられた多くの皆様の御指導・御援助をいただきましたことに厚くお礼申し上げます。

本報告書が、古代の上野国及び甘楽の谷を見極めていくうえに役立てられ、本県の歴史研究の一助となることができれば幸いに存じます。

平成2年3月

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水一郎





## 例 言

- 1 本書は関越自動車道（上越線）建設工事に伴い事前調査された「<sup>○</sup>矢田遺跡」の発掘調査報告書である。本書は、平安時代住居跡編(1)として、矢田遺跡における調査成果の分冊の1である。
- 2 矢田遺跡は、群馬県多野郡吉井町大字矢田の周辺に所在し、大字名を遺跡名に使用している。
- 3 本発掘調査は、日本道路公団の委託を受けた群馬県教育委員会が、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託して実施されたものである。
- 4 実際の発掘調査及び整理事業は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団内に上越線地域埋蔵文化財調査を目的に設置された、関越道上越線調査事務所（多野郡吉井町南陽台に所在）が担当した。
- 5 調査期間及び担当者
  - (1) 発掘調査 調査期間 昭和61年4月1日～(平成2年3月31日現在調査継続中)  
調査担当者 鬼形芳夫(専門員、昭和63年度以降課長)、中沢 悟(主任調査研究員)、内木真琴(調査研究員)、春山秀幸(調査研究員)、関口功一(調査研究員)、富田一仁(調査研究員)
  - (2) 整理 整理期間 平成元年4月1日～平成2年3月31日  
整理担当者 春山秀幸
  - (3) 事務 常務理事 白石保三郎(昭和61～63年度)、邊見長雄  
事務局長 井上唯雄(昭和61・62年度)、松本浩一  
管理部長 大沢秋良(昭和61年度)、田口紀雄  
調査研究部長 上原啓巳(昭和61～63年度)、神保侑史  
関越道上越線調査事務所所長 井上 信(昭和61～63年度)、高橋一夫  
総括次長 片桐光一、次長 原田恒弘(昭和62年度)、徳江 紀  
課 長 長谷部達雄(昭和61年度)、鬼形芳夫  
庶務課 係長代理 黒澤重樹(昭和61～63年度)、宮川初太郎  
主任 国定 均、須田朋子  
臨時職員 山崎郁夫、神戸市四郎、松井留男、町田康子、本城美樹、後閑玲子、田中智恵美
- 6 報告書作成関係者
  - 編 集 春山秀幸
  - 本文執筆 第1章第1節 徳江 紀、第2節 春山、第2章 内木真琴、第3章については、春山と内木が主に行い、他に鬼形、中沢、関口が行った。第4章は、第1節 外山政子、第2・3・5節 春山、第4節 関口。
  - 遺構写真 鬼形芳夫、中沢 悟、内木真琴、春山秀幸、関口功一
  - 遺物写真 佐藤元彦(財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団技師)
  - 遺物観察 春山秀幸
  - 整理補助 石井 緑、柿田順子、黒澤 汎、古賀文江、小林幸子、斎藤文江、高田文子、本間敏子
  - 委託関係 航空写真は群馬高館に、遺構測量、遺構・遺物トレースは測量所に依頼した。

炭化種子の同定は髙井ノ・サーヴエイ、炭化繊維の分析は駒山梨文化財研究所・繊維考古 中田節子氏にそれぞれ委託した。(付篇に所収)

- 7 出土遺物・図面は一括して、群馬県埋蔵文化財調査センターの収蔵庫に保管してある。
- 8 報告書作成にあたり、下記の諸機関、諸氏に御教示、御指導をいただいた。記して謝意を表する次第である。(敬称は略させて戴きました)

井川達雄、梅沢重昭、大江正行、大木紳一郎、女屋和志男、鹿沼栄輔、唐澤保之、菊池 実、小林昌二、小安和順、陣内主一、須田 茂、関 和彦、関 晴彦、田口正美、津金澤吉茂、東野治之、平川 南、布目順郎、松田 猛、松村和男、右島和夫、茂木由行、矢野建一、吉井町教育委員会

9 発掘調査従事者

青木いせ、天田文子、新井克巳、新井幸子、新井すみ子、新井高子、新井まつ子、新井 緑、新井富貴子、新井真弓、飯塚和良、飯塚初代、飯塚 房、伊倉茂登子、今井 好、浦野千代子、江原まさ子、達藤秀子、大木みさ子、大木みつ、落合君子、鬼形田鶴子、加藤節子、金井すみ江、金井はる、金沢友次、神戸ハツエ、神戸 啓、喜多川源造、木村ハナ子、工藤きみよ、栗原 清、黒沢敦子、黒沢京子、小島八重子、小林愛子、小林きよ子、小林善三、小林初美、佐藤八千代、斎藤友枝、斎藤初子、斎藤英子、斎藤政宏、斎藤美知子、志賀シゲ子、志賀 大、紫藤カヲル、紫藤 孝、藤崎とよ、柴崎太郎、島田八千代、清水千代、白井精一、神保恵子、神保すみ江、神保 進、杉田きくの、鈴木ふさ子、鈴木幸男、高田 嵩、高田三枝子、高橋千恵子、高橋ちよ子、高橋春代、滝沢利子、竹内栄子、建部すみ子、田中みき江、田端春治、佃 清、寺尾克代、中村いち、棚島静子、棚島豊純、野口節郎、野口照子、野中正江、長谷川良一、長谷川高子、林 敏子、原口葉子、平田 昇、藤本ひろ子、本間敏子、松本タツノ、松本良子、三ヶ島富二郎、三木時一、宮下憲子、村上繁代、百瀬美子、森 利子、森 基司、矢田部喜代美、山崎孝子、湯浅安代、吉田良子、吉田たづ江、吉田一子、若林さく子、若林てい子、若林トヨ子 (五十音順)

上記以外にも周辺地域の多くの方々のご協力を受けた。

## 凡 例

- 1 各遺構実測図の縮尺は次のとおりである。

住居跡 1/60、竈、貯蔵穴等付属施設 1/30を原則に、基準としてスケールを配している。

- 2 遺構実測図に記した断面基準線等は、いずれも海拔標高を表わす。
- 3 遺構実測図中の方位記号は座標北を示す（国土地標第IX系）。
- 4 遺物実測図の縮尺は次のとおりである。

土器については、坏・埴・皿等は1/3、甕・羽釜・甗・壺等は1/4、瓦1/5、紡錘車・土鍾1/2、砥石・鉄製品1/3を基本としており、それ以外はその都度縮尺を示した。実測図には各縮尺のスケールを示し、また、実測図中の遺物番号末尾に縮尺率を記している。

- 5 遺構及び遺物実測図中のスクリーントーンは下記のことを示す。

(遺構)  遺構下部  焼土  灰  粘土

(遺物)  灰釉陶器施軸部分  黒色処理部分

その他の場合は、その都度示す。

遺構図面に関しては、必要に応じ遺物分布のドット図を作成したがシンボルマークは下記のことを示す。

● 土器 △ 石 ▲ 鉄製品 ■ 瓦 ★ 石製紡錘車 ☆ 鉄製紡錘車 □ 鈎帯

- 6 出土遺物については遺物観察表を用いて記した(観察表目次は省略した)。なお、遺物番号は遺物実測図、遺構実測図内遺物番号、遺物観察表遺物番号、写真図版遺物番号に一致する。
- 7 遺物観察表中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財団法人色彩研究所色票監修「新版標準土色帖」1988年版を使用している。
- 8 住居跡の面積値は、プランメーターで3回計測し、その平均値を用いている。

# 目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
挿図目次	
表 目 次	
図版目次	
抄 録	
第1章 発掘調査に至る経緯及び経過	
第1節 発掘調査に至る経緯	3
第2節 調査の方法と経過	4
1 調査の方法	4
2 調査の経過	4
第2章 地理的環境および歴史的環境	
第1節 地理的環境	6
第2節 矢田遺跡をとりまく歴史的環境	7
第3節 遺跡の層序	18
第3章 平安時代の遺構と遺物	
第1節 概 要	19
第2節 竪穴住居跡と出土遺物	23
第4章 若干の考察およびまとめ	
第1節 矢田遺跡の平安時代のカマドと煮沸具	263
第2節 矢田遺跡出土の紡錘車から	274
第3節 出土した文字資料	281
第4節 ヤタおよびヤタ部について	285
第5節 ま と め	290
付 篇	
1 矢田遺跡121号住居跡出土繊維	
2 矢田遺跡121号住居跡出土の炭化種子同定	
写真図版	
付 図	

## 挿 図 目 次

第 1 図 矢田遺跡調査区およびグリップ配線図	第 59 図 91号住居跡出土遺物実測図
第 2 図 矢田遺跡周辺地域の遺跡分布図	第 60 図 92号・(311号)住居跡実測図
第 3 図 多胡郡城概念図(1)	第 61 図 92号住居跡出土遺物実測図(1)
第 4 図 多胡郡城概念図(2)	第 62 図 92号住居跡出土遺物実測図(2)
第 5 図 基本層序概念図	第 63 図 94号住居跡実測図
第 6 図 矢田遺跡遺構分布図	第 64 図 94号住居跡出土遺物実測図(1)
第 7 図 8号住居跡実測図	第 65 図 94号住居跡出土遺物実測図(2)
第 8 図 8号住居跡出土遺物実測図(1)	第 66 図 97号住居跡実測図
第 9 図 8号住居跡出土遺物実測図(2)	第 67 図 97号住居跡電突実測図
第 10 図 33号住居跡実測図	第 68 図 97号住居跡出土遺物実測図
第 11 図 33号住居跡出土遺物実測図	第 69 図 98号住居跡実測図
第 12 図 36号住居跡実測図	第 70 図 101号住居跡実測図
第 13 図 36号住居跡電突実測図	第 71 図 101号住居跡出土遺物実測図
第 14 図 36号住居跡出土遺物実測図(1)	第 72 図 121号住居跡実測図
第 15 図 36号住居跡出土遺物実測図(2)	第 73 図 121号住居跡出土遺物実測図(1)
第 16 図 37号住居跡実測図	第 74 図 121号住居跡出土遺物実測図(2)
第 17 図 37号住居跡出土遺物実測図	第 75 図 122号住居跡実測図
第 18 図 40号住居跡実測図	第 76 図 122号住居跡出土遺物実測図(1)
第 19 図 40号住居跡出土遺物実測図(1)	第 77 図 122号住居跡出土遺物実測図(2)
第 20 図 40号住居跡出土遺物実測図(2)	第 78 図 123号住居跡実測図
第 21 図 42号住居跡実測図	第 79 図 123号住居跡出土遺物実測図(1)
第 22 図 42号住居跡出土遺物実測図	第 80 図 123号住居跡出土遺物実測図(2)
第 23 図 46号住居跡実測図	第 81 図 133号住居跡実測図
第 24 図 46号住居跡出土遺物実測図(1)	第 82 図 133号住居跡出土遺物実測図(1)
第 25 図 46号住居跡出土遺物実測図(2)	第 83 図 133号住居跡出土遺物実測図(2)
第 26 図 47号住居跡実測図	第 84 図 134号住居跡実測図(1)
第 27 図 48号住居跡実測図	第 85 図 134号住居跡実測図(2)
第 28 図 48号住居跡出土遺物実測図	第 86 図 134号住居跡出土遺物実測図
第 29 図 50号住居跡実測図	第 87 図 135号住居跡実測図
第 30 図 50号住居跡出土遺物実測図(1)	第 88 図 135号住居跡出土遺物実測図(1)
第 31 図 50号住居跡出土遺物実測図(2)	第 89 図 135号住居跡出土遺物実測図(2)
第 32 図 75号住居跡実測図(1)	第 90 図 137号住居跡実測図(1)
第 33 図 75号住居跡実測図(2)	第 91 図 137号住居跡実測図(2)
第 34 図 75号住居跡出土遺物実測図(1)	第 92 図 137号住居跡出土遺物実測図
第 35 図 75号住居跡出土遺物実測図(2)	第 93 図 138号住居跡実測図
第 36 図 75号住居跡出土遺物実測図(3)	第 94 図 138号住居跡電突実測図
第 37 図 76号住居跡実測図(1)	第 95 図 138号住居跡出土遺物実測図
第 38 図 76号住居跡実測図(2)	第 96 図 139号住居跡実測図
第 39 図 76号住居跡出土遺物実測図(1)	第 97 図 139号住居跡電突実測図
第 40 図 76号住居跡出土遺物実測図(2)	第 98 図 139号住居跡出土遺物実測図(1)
第 41 図 78号住居跡実測図	第 99 図 139号住居跡出土遺物実測図(2)
第 42 図 78号住居跡出土遺物実測図	第 100 図 139号住居跡出土遺物実測図(3)
第 43 図 79号住居跡実測図	第 101 図 140号住居跡実測図(1)
第 44 図 79号住居跡電突実測図	第 102 図 140号住居跡実測図(2)
第 45 図 79号住居跡出土遺物実測図(1)	第 103 図 140号住居跡出土遺物実測図(1)
第 46 図 79号住居跡出土遺物実測図(2)	第 104 図 140号住居跡出土遺物実測図(2)
第 47 図 83号住居跡実測図	第 105 図 141号住居跡電突実測図
第 48 図 83号住居跡出土遺物実測図	第 106 図 141号住居跡実測図
第 49 図 86号住居跡実測図	第 107 図 141号住居跡出土遺物実測図(1)
第 50 図 86号住居跡出土遺物実測図	第 108 図 141号住居跡出土遺物実測図(2)
第 51 図 87号住居跡実測図(1)	第 109 図 142号住居跡電突実測図
第 52 図 87号住居跡実測図(2)	第 110 図 142号住居跡出土遺物実測図
第 53 図 87号住居跡出土遺物実測図(1)	第 111 図 143号住居跡出土遺物実測図(1)
第 54 図 87号住居跡出土遺物実測図(2)	第 112 図 143号住居跡実測図(1)
第 55 図 90号住居跡実測図	第 113 図 143号住居跡実測図(2)
第 56 図 90号住居跡出土遺物実測図(1)	第 114 図 143号住居跡出土遺物実測図(2)
第 57 図 90号住居跡出土遺物実測図(2)	第 115 図 143号住居跡出土遺物実測図(3)
第 58 図 91号住居跡実測図	第 116 図 144号住居跡実測図(1)

第1178号	144号住居跡実例(2)	第180号	231号住居跡実例
第1180号	144号住居跡出土遺物実例(1)	第181号	231号住居跡出土遺物実例
第1190号	144号住居跡出土遺物実例(2)	第182号	233号住居跡実例(1)
第1200号	145号住居跡実例	第183号	233号住居跡実例(2)および出土遺物実例
第1210号	145号住居跡実例	第184号	234号住居跡実例
第1220号	145号住居跡出土遺物実例(1)	第185号	234号住居跡出土遺物実例
第1230号	145号住居跡出土遺物実例(2)	第186号	235号住居跡実例
第1240号	145号住居跡出土遺物実例(3)	第187号	236号住居跡実例
第1250号	145号住居跡(廻り方)出土遺物実例(4)	第188号	236号住居跡出土遺物実例
第1260号	182号住居跡実例	第189号	237号住居跡実例
第1270号	182号住居跡出土遺物実例	第190号	237号住居跡出土遺物実例(1)
第1280号	183号住居跡実例(1)	第191号	237号住居跡出土遺物実例(2)
第1290号	183号住居跡実例(2)	第192号	260号住居跡実例
第1300号	183号住居跡出土遺物実例(1)	第193号	260号住居跡出土遺物実例
第1310号	183号住居跡出土遺物実例(2)	第194号	261号住居跡実例
第1320号	183号住居跡出土遺物実例(3)	第195号	261号住居跡出土遺物実例(1)
第1330号	183号住居跡出土遺物実例(4)	第196号	261号住居跡出土遺物実例(2)
第1340号	186号住居跡実例	第197号	263号住居跡実例
第1350号	186号住居跡出土遺物実例	第198号	263号住居跡出土遺物実例
第1360号	188号住居跡実例(1)	第199号	264号住居跡実例
第1370号	188号住居跡実例(2)	第200号	264号住居跡出土遺物実例
第1380号	188号住居跡出土遺物実例(1)	第201号	265号住居跡実例(1)
第1390号	188号住居跡出土遺物実例(2)	第202号	265号住居跡実例(2)
第1400号	188号住居跡出土遺物実例(3)	第203号	265号住居跡出土遺物実例
第1410号	189号住居跡実例(1)	第204号	266号住居跡実例
第1420号	189号住居跡実例(2)	第205号	266号住居跡出土遺物実例
第1430号	189号住居跡出土遺物実例	第206号	268号住居跡実例
第1440号	191号住居跡実例	第207号	268号住居跡出土遺物実例
第1450号	191号住居跡出土遺物実例	第208号	269号住居跡実例
第1460号	198号住居跡実例(1)	第209号	269号住居跡実例
第1470号	198号住居跡実例(2)	第210号	270号住居跡実例
第1480号	198号住居跡出土遺物実例(1)	第211号	270号住居跡および出土遺物実例
第1490号	198号住居跡出土遺物実例(2)	第212号	271号住居跡実例
第1500号	200号住居跡実例	第213号	272号住居跡および出土遺物実例
第1510号	200号住居跡実例	第214号	274号住居跡実例
第1520号	200号住居跡出土遺物実例(1)	第215号	274号住居跡出土遺物実例
第1530号	200号住居跡出土遺物実例(2)	第216号	275号住居跡実例
第1540号	201号住居跡実例	第217号	276号住居跡実例(1)
第1550号	201号住居跡実例	第218号	276号住居跡実例(2)
第1560号	201号住居跡出土遺物実例(1)	第219号	276号住居跡出土遺物実例(1)
第1570号	201号住居跡出土遺物実例(2)	第220号	276号住居跡出土遺物実例(2)
第1580号	205号住居跡実例	第221号	277号住居跡実例(1)
第1590号	205号住居跡出土遺物実例	第222号	277号住居跡実例(2)
第1600号	206号住居跡実例	第223号	277号住居跡出土遺物実例(1)
第1610号	207号住居跡実例	第224号	277号住居跡出土遺物実例(2)
第1620号	207号住居跡出土遺物実例	第225号	280号住居跡実例
第1630号	208号住居跡および出土遺物実例	第226号	280号住居跡出土遺物実例
第1640号	221号住居跡および出土遺物実例	第227号	281号住居跡実例
第1650号	225号住居跡実例	第228号	281号住居跡実例
第1660号	225号住居跡出土遺物実例	第229号	281号住居跡出土遺物実例
第1670号	226号住居跡実例	第230号	282号住居跡実例
第1680号	226号住居跡実例	第231号	282号住居跡出土遺物実例
第1690号	226号住居跡出土遺物実例(1)	第232号	284号住居跡実例(1)
第1700号	226号住居跡出土遺物実例(2)	第233号	284号住居跡実例(2)
第1710号	227号住居跡実例	第234号	284号住居跡出土遺物実例(1)
第1720号	227号住居跡実例	第235号	284号住居跡出土遺物実例(2)
第1730号	227号住居跡出土遺物実例	第236号	285号住居跡実例
第1740号	228号住居跡実例	第237号	285号住居跡実例
第1750号	228号住居跡出土遺物実例	第238号	285号住居跡出土遺物実例
第1760号	229号住居跡実例	第239号	300号住居跡実例(1)
第1770号	229号住居跡出土遺物実例	第240号	300号住居跡実例(2)
第1780号	230号住居跡実例	第241号	300号住居跡出土遺物実例
第1790号	230号住居跡出土遺物実例	第242号	306号住居跡実例(1)

第243図	306号住居跡実測図②	第259図	331号住居跡出土遺物実測図
第244図	306号住居跡出土遺物実測図①	第260図	335号住居跡実測図
第245図	306号住居跡出土遺物実測図②	第261図	335号住居跡出土遺物実測図①
第246図	308号住居跡実測図	第262図	335号住居跡出土遺物実測図②
第247図	309号住居跡実測図①	第263図	矢田遺跡・平安時代のカマド①
第248図	309号住居跡実測図②	第264図	矢田遺跡・平安時代のカマド②
第249図	309号住居跡出土遺物実測図①	第265図	煮沸用土器の使用痕
第250図	309号住居跡出土遺物実測図②	第266図	古墳時代後期のカマドとカメ
第251図	314号住居跡実測図	第267図	転用した土器の使用痕
第252図	314号住居跡出土遺物実測図①	第268図	矢田遺跡出土紡錘車の計測値
第253図	314号住居跡出土遺物実測図②	第269図	穿孔具に関する資料
第254図	316号住居跡実測図	第270図	紡錘車の使用痕のバターン
第255図	316号住居跡出土遺物実測図	第271図	矢田遺跡における紡錘車の出土状況
第256図	317号住居跡実測図	第272図	文字・記号資料①
第257図	331号住居跡実測図①	第273図	文字・記号資料②
第258図	331号住居跡実測図②		

## 表 目 次

第 1 表	整理工程表	第 3 表	住居跡一覧表
第 2 表	矢田遺跡周辺の遺跡 ①矢田遺跡周辺の主要遺跡 ②矢田遺跡周辺の古墳および古墳群 ③矢田遺跡周辺の遺物散布地	第 4 表	ヤタおよびヤタ部の地域的分布
		第 5 表	上野国内のヤタおよびヤタ部

## 図 版 目 次

図版 1	鍋川流域航空写真	図版 52	309号住居跡
図版 2	矢田遺跡全景航空写真	図版 53	314号住居跡
図版 3	矢田遺跡遠景(牛伏山より)	図版 54	316・317号住居跡
	矢田遺跡遠景(南側丘陵上より)	図版 55	331号住居跡
図版 4	矢田遺跡・西谷川の谷	図版 56	335号住居跡
図版 5	第4次調査区全景写真	図版 57	8・33・36号住居跡出土土器
図版 6	第5次調査区全景写真	図版 58	36・37号住居跡出土土器
図版 7	8・33号住居跡	図版 59	37・40・42号住居跡出土土器
図版 8	38号住居跡	図版 60	42・46号住居跡出土土器
図版 9	37・40号住居跡	図版 61	48・50・75号住居跡出土土器
図版 10	42号住居跡	図版 62	75・76号住居跡出土土器
図版 11	46号住居跡	図版 63	76・78・79・83・86号住居跡出土土器
図版 12	47・48・50号住居跡	図版 64	86・87・90号住居跡出土土器
図版 13	75号住居跡	図版 65	90・91・92号住居跡出土土器
図版 14	76・78号住居跡	図版 66	92・94号住居跡出土土器
図版 15	79号住居跡	図版 67	94・97・101・121号住居跡出土土器
図版 16	83・86・98号住居跡	図版 68	121・122・123・133号住居跡出土土器
図版 17	87・90号住居跡	図版 69	134・135・137・138・139号住居跡出土土器
図版 18	91号住居跡	図版 70	139号住居跡出土土器
図版 19	92・94号住居跡	図版 71	139・140号住居跡出土土器
図版 20	97・101・121号住居跡	図版 72	140・141・143号住居跡出土土器
図版 21	122・264・123・133・137号住居跡	図版 73	143・144号住居跡出土土器
図版 22	134・135・138号住居跡	図版 74	144・145号住居跡出土土器
図版 23	139号住居跡	図版 75	145・182号住居跡出土土器
図版 24	140号住居跡	図版 76	183号住居跡出土土器
図版 25	141・142・143号住居跡	図版 77	183・186号住居跡出土土器
図版 26	143号住居跡	図版 78	186・188・189・198号住居跡出土土器
図版 27	144号住居跡	図版 79	198・200号住居跡出土土器
図版 28	145号住居跡	図版 80	201・205・208・225・226・227号住居跡出土土器
図版 29	182・183号住居跡	図版 81	228・229・230・231・233・236・237・260・261号住居跡出土土器
図版 30	186号住居跡	図版 82	261・263・264・265・266・270・274・276号住居跡出土土器
図版 31	188号住居跡	図版 83	276・277号住居跡出土土器
図版 32	189号住居跡	図版 84	277・280・281・282・284号住居跡出土土器
図版 33	191・198号住居跡	図版 85	284・285・300・305・309・314号住居跡出土土器
図版 34	200・201号住居跡	図版 86	314・316・331・335号住居跡出土土器
図版 35	205・206・207・208号住居跡	図版 87	瓦(1)
図版 36	221・225・226号住居跡	図版 88	瓦(2)
図版 37	227・228号住居跡	図版 89	瓦(3)
図版 38	229・230・231号住居跡	図版 90	羽口・埴輪・土器
図版 39	233・234・235・236号住居跡	図版 91	鉄製品
図版 40	237・260・261号住居跡	図版 92	紡錘車(1)
図版 41	263号住居跡	図版 93	紡錘車(2) 石製品(1)
図版 42	265・266号住居跡	図版 94	石製品(2)
図版 43	268号住居跡	図版 95	石製品(3)
図版 44	269・270・271号住居跡	図版 96	文字資料(1)
図版 45	272・274号住居跡	図版 97	文字資料(2)
図版 46	275・276号住居跡	図版 98	121号住居跡出土炭化種子
図版 47	277号住居跡	図版 99	亮麗・整備作業状況
図版 48	280・281・282号住居跡	図版100	矢田の台地上の風景
図版 49	284・285号住居跡		
図版 50	300号住居跡		
図版 51	306・308号住居跡		



## 抄 録

### 1 遺跡の概略

本遺跡は群馬県多野郡吉井町大字矢田に位置する。本遺跡の調査は、昭和62年4月1日から開始され、現在（平成元年末）も発掘調査は継続して行われている。東西方向に連なるこの河岸段丘面は県内でも有数の遺跡地帯として知られており、本遺跡に隣接する部分にも各時代の遺跡の存在が知られ、その内容が明らかになりつつある。

なお、本遺跡周辺は、北方1.5kmにある「多胡碑」や『続日本紀』との関連から、「上野国多胡郡八（矢）田郷」に比定されてきた。今回の調査においては、文献上の問題として語られてきた八（矢）田郷について、考古学からのアプローチが行われたという点で重要であろう。調査の成果にはこれに対応する集落の存在、「八田郷」線刻のある紡錘車をはじめとする文字資料が存在しており、集落の規模や時期的展開などから当地の古代史研究は発展的な進展がなされるであろう。

### 2 遺構数量

本遺跡は、現在も発掘調査が継続している状況であり、本開発に伴う調査部分の遺構総数およびその内容の詳細は把握されない。しかし平成元年末の段階での調査成果の概略は以下のとおりである。

種 別	時 代	数 量	備 考
竪穴住居跡	縄文中期	3	加曾利E3、埋塞（屋外）5基や土坑が検出されている
	古墳前期	5	遺物は少量である
	古墳後期～平安	690	調査継続中であり、さらに増加する見込み
掘立柱建物跡		18	
住居状遺構		15	竪穴住居に近い規模で電等の付属施設を持たない竪穴
溝		50	方形の区画をなすものもある
井 戸		13	
この他、土器廃棄場 2、粘土探掘坑 1、小鍛冶 2、方形居館址 1、ピット多数などがある。			

◎ 本報告は上記の内、平安時代の竪穴住居跡95軒を対象としている。

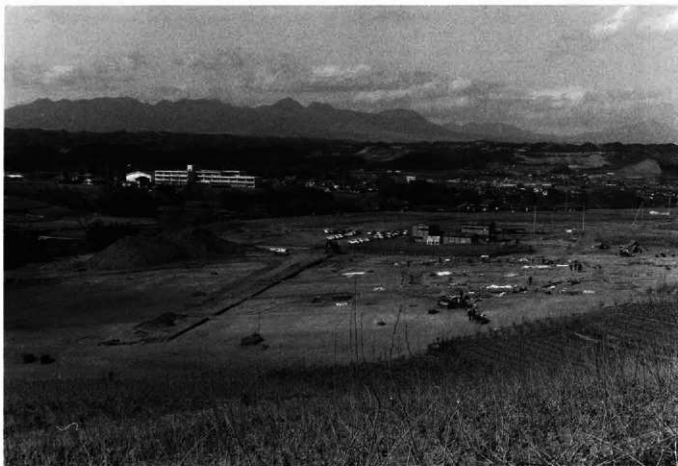
### 3 まとめ

吉井町大字矢田の台地上に広がる広い平坦面および緩傾斜面には、縄文時代前期の土器片の散布が知られ、また縄文時代中期の集落の存在が判明している。また古墳時代前期には再び集落が営まれる。しかし、継続的に集落が営まれるのは古墳時代後期以降であり、奈良時代・平安時代まで安定した在り方を示している。

なお、本調査区の北側の接続道路部分においても矢田遺跡の成果に対応する調査結果が示されており、地形的な連続性から見ても、集落の範囲は北側の台地の先端にまで広がっていることが判明している。

本報告中では、多数の土器をはじめとし、「八田郷 八田郷 八田郷 家郷」「八田郷 八田郷 八田郷 大」をはじめとした線刻のある石製紡錘車4点などの文字資料が含まれている。また、火災住居の床面から出土した炭化した繊維および種子の分析を行い、平安時代の衣食住に関する希少なデータが示された。

今後の調査の成果も含め、膨大な情報が提示されるものと期待されている。



広大な台地土で進められる矢田遺跡の調査（南側の丘陵傾斜部から）

写真左上の山は、標名山。その手前には、富岡丘陵が通っている。富岡丘陵と矢田遺跡の立地する上位段丘面との間には、錦川の流れと、下位段丘面の広がりがあるが、この写真では見えない。左上の大きな建築物は、吉井町立中央中学校であり、弥生時代後期以降の集落が発掘された川内遺跡にあたる。

#### 整製作業風景

広大な調査区から出土した数々のものの整製作業。  
後の標に復元された土器が並んでいる。



や た い せき  
矢 田 遺 跡



## 第1章 発掘調査に至る経緯及び経過

### 第1節 発掘調査に至る経緯

関越自動車道上越線・藤岡市～長野市間の基本計画が昭和47年に決定してから、文化財に関する調査は整備計画策定のための関連公共事業調査（昭和49年）をはじめとし、昭和55～56年に同じく行われている。昭和49年には、基本計画ルートに対する文化財側の基本的な考え方、即ち文化財保護法の遵守・指定文化財の扱い・文化財に対しては県教委と協議すること等を示し、昭和55～56年にかけての調査は、想定されるルートを中心に埋蔵文化財包蔵地の面積を約100万㎡とした。

以後、日本道路公団による計画は進捗し、昭和56～57年にかけて、路線の発表があった。昭和59年11月、道路公団より県教委に対し分布調査の依頼があり、文化財保護課は調査を実施、同60年3月、発掘想定面積を、ほぼ100万㎡とする回答を行っている。その後、上越線地域埋蔵文化財調査計画の策定が行われ、調査実施年度は昭和61～66年の6年間（後、修正があり昭和65年度＝平成2年度に変更）、調査機関は、群馬県埋蔵文化財調査事業団を中核にし、事業団の担当は富岡市以東となった。

昭和61年4月、県埋蔵文化財調査事業団内に、上越線関係を専門とする「関越道上越線調査事務所」を開所し、調査に入った。

矢田遺跡は、上神保遺跡・田篠遺跡・内匠下高瀬遺跡と同じく昭和61年当初から調査を行っている。吉井インターチェンジ（仮称）にあたる当遺跡は、インター中心部・それにつながる東側本線部分と西側本線部分及び料金所方向に向かう北側部分の約90,000㎡にわたる広大な面積を占めるが、地形等からみて一つの遺跡としたものである。

調査期間は約5年を見込み、インター中心部から北側方面、そしてインター東側本線部分へと進む大まかな計画を立て、建設工事の進展があればそれぞれに対応することで公団とも協議を行った。

調査は、STA №109～111にかけてのインターにつながる東側部分から開始され、次々と住居跡を検出し、大規模な集落が展開することが確実となった。

以後、調査の進展に伴い、古墳時代後期～平安時代にかけての竪穴住居跡を中心に680軒余（平成元年11月現在）を調査し、今後増加していくこととなる。現在までの調査面積及び調査軒数は次のとおりである。

昭和61年度 約22,000㎡ 約180軒 昭和63年度 約18,000㎡ 約170軒

昭和62年度 約17,000㎡ 約170軒 平成元年度 約12,000㎡ 約100軒（11月現在）

矢田遺跡の整理は、膨大な資料の蓄積から短期間の整理事業では終了できないことから、平成元年度から毎年継続して行うこととした。整理の基本方針として、地域を区切ることが困難なため、時代別（地域は加味する）に実施し、最終整理で全体をまとめることとしている。今年度は平安時代住居跡の一部を報告する。

（付）昭和63年度は、県埋蔵文化財調査事業団が創立されて10周年にあたり、記念行事が持たれたが、上越線地域では、10月に矢田遺跡を会場とし「多胡郡がつくられたころ」をテーマに上越線地域発掘調査の成果を発表した。会場となった矢田遺跡では、復元住居4棟、そのまわりに水田・畑を配して古代の景観を復元、さらに火おこし、土器づくり等、見学者に参加を呼びかける体験コーナーを企画した。これに対し、7,500名を越す参加者があり、盛況の内に終了している。

## 第2節 調査の方法と経過

### 1 調査の方法

本調査区は、吉井インターチェンジ予定地域及び、その前後の本線部分よりなる。建設工事用測量杭における、STA No106～113がほぼ矢田遺跡の調査範囲に該当する。この範囲内を、調査区南西端の国家座標  $X=+26,800$ 、 $Y=-75,000$ を原点として5m四方のグリッドを設定した。グリッドの設定水準点の移動は測設が実施した。なお、発掘調査は、地形及び道路等の条件から便宜的に第1次調査区～第11次調査区に区分し、これに応じて進行的に実施した。

### 2 調査の経過

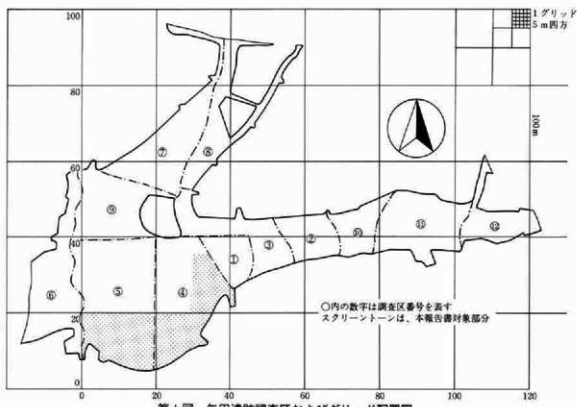
#### ①発掘調査

調査工程は、昭和61年度は第1次～第4次調査区、昭和62年度は第4次調査区継続及び第5次調査区、昭和63年度は第5次調査区継続及び第6次・第7次調査区の調査に加え第10次調査区の試掘調査を行い、平成元年度以降も調査は継続されている。詳細に関しては調査終了後に一括して示す予定であり、本分冊においては上記板略のみ記し、省略させて載く。なお、先にもふれられているようにこの間、2度の現地説明会及び、郵評馬場埋蔵文化財調査事業団創立10周年事業の野外展会場などを通して、多数の県民、更に県外からの見学者が訪れており、発掘調査と並行して普及活動においても多くの成果が上げられている。

#### ②整理作業

整理作業は、発掘調査と一部並行して平成元年度4月1日から開始され、吉井町南陽台の上越線事務所内の整理棟で行われ、担当1名、補助員7名で実施した。

概要は以下の通りであり、また第1表を参照されたい。



4月上旬	整理作業諸準備
4月中旬～6月中旬	土器の分類・接合及び復元 遺構図面修正 鉄器保存処理 遺物写真撮影
6月下旬～9月上旬	土器実測（大形品の一部には3スペースを使用） 遺物写真撮影 トレース外注開始 1日研修（6/20行田遺跡・光厳寺裏遺跡・原西遺跡）
9月中旬～10月下旬	瓦、砥石等遺物実測、拓本、レイアウト
11月上旬	図面作成（遺物分布図作成、スクリーントーン貼付等）
11月中旬～	図面版下作成、写真版下作成 遺物観察表作成
12月22日	入札
1月以降	校正、収蔵作業等

第1表 整理工程表

区分	月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	備考	
遺物整理	分類、復元	■■■■■													
	実測			■■■■■											一部に3スペース使用
	拓本							■■■■■							
	トレース			●保存処理			■■■■■		■■■■■					外注	
	版下作成					■■■■■			■■■■■						
	写真撮影		■■■	■■■			■■■	■■■							
	写真版下作成								■■■■■		■■■■■				
	図面作成	■■■■■								■■■■■					
	トレース				■■■■■									外注	
	版下作成								■■■■■		■■■■■				
遺構整理	写真版下作成	■■■■■							■■■■■		■■■■■				
	土器観察表							■■■■■							
	原本文					■■■■■									
	その他									入札★		■■■■■		校正、収蔵	

## 第2章 地理的環境および歴史的環境

### 第1節 地理的環境

#### 1 鍋川と河岸段丘

矢田遺跡の立地する台地上から北方には、甘菜の谷を形成する鍋川が見下ろされる(第2図)。鍋川は、長野県境近くに源を発し、甘菜郡南牧村・下仁田町・富岡市・甘菜町・多野郡吉井町を東流し、藤岡市西方の上落合付近で鮎川を合わせ、やがて烏川に合流する。この間、流路は細かく蛇行を繰り返し、谷の地形を形成している。周知のとおり鍋川は右岸域に典型的な河岸段丘地形を発達させている。これに対し左岸域には河岸段丘の発達ほとんど認められず、川の流れは富岡丘陵の南縁部を浸食し、部分的に急峻な崖線が形成されている。左右両岸の地形の差異は、鍋川右岸域の支流が合流点付近で鍋川の流れに対し逆方向に注ぎ込む、いわゆる「反Y字現象」が見られることから、南側の関東山塊の地殻運動による隆起現象が、北西方向の傾斜運動を導き、鍋川の蛇行帯中心線が北方へ移動したことに起因するものと考えられている<sup>(1)</sup>。

鍋川右岸域に発達する上位・下位と呼称される2段の河岸段丘は、甘菜町を北流する雄川を境に東西でやや異なる様相を見せる。西側では下位段丘は幅広い広がりをもつが、上位段丘面は狭小で、傾斜も険しく南西の山塊へと連続する。しかし、雄川の東側では上位・下位段丘ともに広範な平坦面の広がりを見せ、さらに上位段丘の南側には1段高い浸食地形とされる平坦面がひかえている。

鍋川左岸域には河岸段丘はあまり発達しておらず、部分的に下位段丘面が認められるにとどまる。しかし、申田川流域の吉井町前原・西沢周辺では、下位段丘面より上位のやや傾斜をもつ平坦面が認められ、右岸域の上位段丘に対応するものと考えられる。

鍋川河床から下位段丘までの比高差は10~15mを測り、また上位段丘までは50~60mに及ぶ。下位から上位段丘への地形変換点の大部分は、崖線もしくは急傾斜面を成しているが、一部では崖線部の崩落により形成されたと考えられる微高地も認められる。下位段丘面は従来平坦面として一様に把握されてきたが、微地形の認識も必要となっている。

#### 2 矢田遺跡の立地

雄川以東の河岸段丘地形は、鍋川へ向かって北流する幾多の支流の浸食により分断されている。分断されたそれぞれの段丘に対しては、第2図に示したように便宜上、名称が与えられている。しかし実際にはそれぞれの段丘はさらに細かい浸食を受け、南北に伸びる細長い台地地形を呈している。

矢田遺跡は、大きく見ると大沢川と土合川により分断された段丘の上位面にあたり、多胡段丘上に立地することになる。このうち本遺跡は、多胡段丘の東部、西は西谷川、東は土合川に挟まれた南北に伸びる台地上を占めている。この台地も、さらに浸食による南北、または東西方向への小支谷が形成され複雑な地形を呈している。なお矢田遺跡西縁を画する西谷川は、調査の結果、谷の中央部付近を蛇行する旧河川の流路が確認されており、現在台地の縁辺を深く刻む流れは、人為的な流路の変換であることが明らかになっている。



## 第2節 矢田遺跡をとりまく歴史的環境

### 1 概 要

矢田遺跡の北方約1.5kmの下位段丘面には、いわゆる「多胡碑」(31)が存在する。周知のとおり「多胡碑」は、「山ノ上碑」(32)、「金井沢碑」(33)と合わせて上野三碑と呼称され、さらには日本三古碑の一にも加えられている。時期的に最も古い「山ノ上碑」が辛巳歳(681年)、新しい「金井沢碑」が神亀三年(726年)と近い年代の中で建碑されているが、該期の金石文は全国的にも稀であるのかかわらず、これら三碑が近接して存在する在り方は、本地域の特色と言える。

「多胡碑」の碑文や、「続日本紀」三月辛亥条によれば、和銅4年(711年)に片岡郡・緑野郡・甘楽郡の一部を削いて多胡郡を設置したことが記されている。また「倭名類聚抄」に見られる郷名にあたる地名も本地域周辺には現存しており、従来からそれぞれの位置が推定されてきた。本遺跡の遺跡名に用いた吉井町大字矢田の字名もそれら文献上にみられる、「八(矢)田」郷に由来するものと考えられている。

文献から語られることが多かった本地域において、考古学的調査の端緒となったのは昭和18年、吉井町・稲荷塚古墳(43)の発掘調査であった。これを皮切りに一本杉古墳(44)とこれに近い城古墳など古墳を主体とした調査が進められた。昭和26年になると、著名な入野遺跡(26)の調査が実施され、群馬県下の古代集落研究の基礎的資料が提示されるに至った。その後は、東吹上遺跡(14)の調査を経て、黒熊遺跡群(29)や川内遺跡(23)など開発の増加に伴い発掘調査が行われた。

単発的な、発掘調査により本地域の考古学的資料が蓄積されている状況の中、本地域を横断する関越道上信越線建設事業が決定し、事前調査として各地で大規模な発掘調査が実施されることとなった。この調査により多くの考古学的成果が期待され、「多胡碑」を含めたこれまでの研究に対する再評価も含めて、本地域の歴史的環境が解明されて行くものと思われる。

### 2 遺跡の分布

本項では、これまでの行われてきた発掘調査の成果に加え、矢田遺跡周辺地域で実施した分布調査の結果作成された遺物散布地の分布図を踏まえ、本地域の歴史的環境に迫り、地域の中に見る矢田遺跡の位置付けにふれていく。(本文中の数字は、遺跡分布図・表に対応する。)

#### ① 旧石器時代

本地域の旧石器時代の遺跡は、これまで余り知られていない。「吉井町誌」には、多比良新堀付近、神保植松付近(6)で表面採集された石槍の記述があり、それ以外の少数の資料もやはり出土状況の不明なものであった。

今回の開発に伴う調査では、神保富士塚遺跡(5)において黒曜石製の石槍が、浅間板鼻黄色軽石層(As-Yp)付近で出土し、層位が明確になった。また多胡蛇黒遺跡(7)でも石槍が表面採集されている。

いずれも、上位段丘上縁辺部から確認されており、今後も当該地形部から浅間板鼻褐色軽石層前後の層位の資料が増加するものと見られる。しかし、矢田遺跡の立地する台地上の試掘調査では旧石器時代の資料は出土していない。

なお本地域は、赤城山南麓地域の岩宿Ⅰ文化を包含する層位に比定される部位は、灰白色を呈する粘土層になっており、該期の文化層の存在は不明である。

② 縄文時代

縄文時代の遺跡は鍋川の兩岸に分布が認められるが、時期により異なる様相を見せる。早期の遺跡は確認例が少ない。多比良中城付近で尖底土器が出土したというが、不明点が多い。入野遺跡では土器片の出土が知られるが、遺構は確認されていない。いずれも鍋川右岸上位段丘上にあたる。

前期には遺跡数の増加が見られる。遺跡の分布は、鍋川右岸の丘陵上から北側斜面部に集中しており(19～21、26～28)、また上位段丘上にもわずかながら広がりが見られる。左岸域では、東吹上遺跡(14)が知られる。なお、鮎川左岸の合流域ではやや様相が異なり、扇状地上にも分布が認められる。矢田遺跡南部の丘陵上には黒浜式から諸磯式にかけての土器片の散布が見られ、矢田遺跡の調査区内においてもわずかながら該期の土器片が採集されている。

中期になると、遺跡数はそれまでに比して激増する状況が現れる。遺跡の立地は、それまでの丘陵上、上位段丘中心の在り方から、下位段丘にも分布が広がり、多様化する傾向が認められる。鍋川左岸域においても、富岡丘陵南端部の高所での分布が見られる。なお、これまで存在が知られていた馬庭・岩井周辺の下位段丘上では、今回の分布調査の際には確認されなかった。矢田遺跡の立地する台地のほぼ中央部からは、加曾利EⅢ式の竪穴住居3軒と埋壘5基が検出されており、集落の存在が確認されている。他に阿玉台式の散布も報告されている。

後期では、鍋川右岸域の下位段丘(13・18・28)、上位段丘(25・30)や、南部の丘陵上(26)に分布が見られるが、全体に減少傾向がみられる。

晩期になると、段丘上には遺跡の痕跡がほとんど認められなくなり、塚原遺跡(34)が知られるにとどまる。周辺地域を含めて、遺跡数の激減する状況がある。しかし、鮎川左岸扇状地では遺跡数減少の傾向は見られず、遺跡の立地が台地上から低地へと転換している様相があるように思える。

矢田遺跡では後・晩期の遺物は認められない。

③ 弥生時代

本時代の遺跡の大半は、鍋川右岸の上位段丘上に立地しており、中でも長根段丘・神保段丘と多胡段丘には濃密であり、殊に前者では顕著である。

藤岡市の沖積低地にある沖II遺跡からは、本地域周辺における弥生時代初源期の好資料が得られている。しかし、鍋川の河岸段丘上からはこの時期の遺跡は知られていない。

これに後出する中期の遺跡は、右岸丘陵上および上位段丘にかけてのなだらかな斜面上に位置している。稲荷山遺跡(22)、長根羽田倉遺跡(④)、神保富士塚遺跡(⑤)、神保松遺跡(⑥)が知られるが、いずれも住居跡以外の、再葬墓や貯蔵穴など土坑内からの資料に限られている。

後期には、遺跡数の増加と共に立地の多様化が現れる。右岸上位段丘から南丘陵部にわたる斜面では、長根安坪遺跡(③)、多胡付近(73)が、上位段丘中央平坦面から先端部には西馬脇遺跡(20)、川内遺跡(23)、入野遺跡、黒熊遺跡群(29)などの他、長根(63)や、高(64)の周辺でも分布が認められる。また、下位段丘では権現堂(10)、上位段丘先端から下位段丘への微高地部では祝神遺跡(27)が知られる。一方、左岸域では東吹上遺跡(14)で土器片の出土が報告されており、分布調査では確認されなかったものの、申田川流域の足沢日影周辺の丘陵上から東傾斜部(2・3)については、地形的に存在が予想される。

川内遺跡の立地する台地に隣接し、同様の地形を示す矢田の台地上であるが、この時期の明確な生活の痕跡は認められていない。上位段丘上に、大規模な集落が営まれる周辺の動向の中、いかなる位置付けがなされるのか興味深い。

なお、本地域においては集落に対応する生産址などが確認されておらず、弥生時代の生活の在り方に関しては不明な部分が多い。

#### ④ 古墳時代～平安時代

瀬川左右両岸の河岸段丘上においては、分布調査の結果によれば、古墳時代（特に後期）から平安時代に至る遺物散布地は複雑に重複しており、分離し得ない状況にあり第2図では「土師器散布地」として一括して扱った。

「土師器散布地」として認識されたのは、以下の地域である。（(I)～(III)は右岸域、(IV)・(V)は左岸域）

##### (I) 天引川―大沢川

- ・長根段丘上一帯 長根安坪遺跡 (⑤)、西場脇遺跡 (20) などが含まれる。
- ・神保段丘上一帯 長根羽田倉遺跡、神保富士塚遺跡、神保植松遺跡、折茂東遺跡などの遺跡が含まれる。
- ・片山・長根段丘 天引川沿いに発達する微高地上、および小棚、片山、本郷など段丘先端部周辺。
- ・上位段丘南の丘陵部から上位段丘への傾斜部。

##### (II) 大沢川―土合川

- ・多胡段丘上一帯 入野遺跡、川内遺跡、多胡蛇風遺跡などが知られ、矢田遺跡（櫛谷戸遺跡を含む）もここに立地し、発掘調査の成果が多い。
- ・吉井段丘上 中央付近の微高地上、および北側先端部周辺。
- ・上位段丘南丘陵部から上位段丘への傾斜部。柳田遺跡 (24) などが含まれる。

##### (III) 土合川―鮎川

- ・深沢白石段丘上一帯 黒熊遺跡群および、郷土 (96)、藤岡市北原 (99) 周辺。
- ・三木段丘中央部の平坦部に分布が見られる。
- ・上位段丘南丘陵上から上位段丘への傾斜部。黒熊中西遺跡 (⑨)、黒熊八幡遺跡 (⑩)、黒熊栗崎遺跡 (⑪) など含まれ、起伏に富んだ地形を示す。
- ・鮎川左岸扇状地。藤岡市下郷 (94)、緑埜 (28) 周辺。

##### (IV) 申田川下流域

- ・下位段丘平坦面から段丘先端部周辺。富岡遺跡 (⑬) および、久保 (71) が含まれる。
- ・丘陵部。東吹上遺跡 (⑭) のある緩傾斜面の他、平坦部の (73)、(2) (3) (72) など斜面上での分布がみられる。

##### (V) 馬庭段丘周辺

- ・丘陵部から段丘面への地形変換点に形成された微高地上。中光寺 (75) 周辺。
- ・馬庭段丘中央平坦部から段丘先端部。宿 (76)、西口 (102)。
- ・馬庭段丘中央の微高地上。岩井 (104) 周辺。

分布調査の結果、「土師器散布地」に関しては以上のような分布の特徴が確認された。

以下においては、分布調査で得られた当該期の遺跡の立地や広がりに関する情報と、これまでに行われた発掘調査等によって得られた成果とを照らし合わせて、古墳時代以降における周辺の地域社会に関する在り方を時代をおって述べる。

(古墳時代)

古墳時代前期では弥生時代後期同様、銅川右岸の上位段丘から南丘陵上にあたる範囲を中心に分布している。長根安坪遺跡(③)、西場臨遺跡(⑩)、神保富士塚遺跡(⑤)、神保植松遺跡(⑥)、折茂東遺跡(21)、川内遺跡(23)、入野遺跡(26)、黒根遺跡群(29)など多くが知られている。しかし、下位段丘では藤岡市・上落合周辺に認められる程度である。

矢田遺跡の台地中央部を中心とした部分では、石田川式の壑穴住居跡が5軒検出されており集落の存在が確認されている。

中期の遺跡は折茂東遺跡以外は知られておらず、立地に関しては不明な部分が多い。もっとも本時期の土器の変遷の認定に関しての問題点もあり検討の余地が多い。

後期には遺跡は急激に増加してくる。銅川右岸域では特に上位段丘上の分布が顕著である。著名な入野遺跡(26)は矢田遺跡東方の台地上に立地している。その他、長根羽田倉遺跡、川内遺跡、折茂東遺跡などをはじめとして、銅川左岸を含めて当期の遺跡は地域内全域で認められるようになる。矢田遺跡が安定した集落として継続的な展開を見せるのも、本時期以降といえる。

生産力の増大・発展を背景とし集落が急激な勢いで増加する中、本地域においても各地で古墳が築かれている。集落遺跡との対応関係についての問題もあり、以下、本地域の古墳の消長について概略する。

銅川流域は古墳の分布が県内でも有数の密度で分布している。このうち流域における初期古墳としては、富岡市・南後箇茶白山古墳、同茶白山西古墳が知られている。吉井町周辺では、上位段丘上に占地する悪行寺裏古墳(29)が古相を呈し、5世紀前半代に位置付けられる。

6世紀以降、各地に古墳群が形成される。

右岸下位段丘には、東原古墳群((4))、高木古墳群((9))、塚原古墳群((10))があり、6世紀後半から7世紀前半は段丘中央部に、中葉以降は先端部へと分布が移る傾向がみられる。右岸上位段丘では、長根段丘、神保段丘、多胡段丘に濃密な分布がみられるが、下位段丘に比べ不規則な変遷を示す。安坪古墳群((30))、神保古墳群(31~34)、多胡古墳群(38)は埴輪を伴う段階から形成され、6世紀後半以降に連続して築造されて行く本地域の中核的古墳群と言える。この他、川内古墳群((133))、山王山古墳群((41))、中天水古墳群((37))、塩古墳群(35・36)が相次いで形成されている。

左岸域についてみると、下位段丘中央平坦部から先端部に分布が認められ、まず、段丘東部の微高地上に伊勢塚古墳群(19)、岩井古墳群(18)が6世紀後半頃から築造される。これ以降、7世紀後半頃には馬場塚古墳群((5))、八幡塚古墳(18)、御穴塚古墳((154))、西瀬古墳群((12))が築かれている。

銅川・鮎川合流域の河岸段丘上は、県内屈指の古墳群である。5世紀前半には、墳丘主軸長140mを誇る前方後円墳の白石船岡山古墳(26)が築かれており、この時期には地域の統合が開始されたことが窺われる。同時期には、高崎市東南部に大鶴巻古墳、浅間山古墳などの首長墓級の大前方後円墳が存在し、当時の支配領域などの問題点を提起している。6世紀には墳丘主軸長146mを誇る七興山古墳((22))が築かれている。これ以降は、鮎川左岸上位段丘上に、多数の中・小古墳が続々と築かれ、流域で古墳が消滅する7世紀後半頃までこのような状況がみられる。なお周辺には7世紀中頃を中心に、伊勢塚古墳(21)を代表とする「模倣積み」の石室を有する古墳が多く分布しており、この地域を特徴付けている。

また、県内では稀少な横穴墓である薬師穴横穴群((17))も注意される。

以上のような、时期的・地域的な古墳の変遷が当地域では認められるが、8世紀初頭に至り、銅川右岸上位段丘上に築造された載石切組横石室を有する、多比良古墳((42))、多胡薬師塚古墳(39)の築造を最後

に古墳は消滅する。

#### (奈良時代)

奈良時代には、冒頭でふれたように多胡郡建郡という歴史的な事象に関する記録が認められ、この時期の遺跡の展開が前代と比較して大きな差異があるのか注目される。

発掘調査の成果と分布調査からは、奈良時代の遺跡の分布は銅川右岸の上位段丘上に濃密な分布をもつことが判明しており、古墳時代後期の在り方をほぼ踏襲している状況が認められている。

矢田遺跡では100軒を越す住居跡の存在が確認されている。このほか西側に隣接する川内遺跡や、関越道上越線の路線にあたった上位段丘上の各調査（長根羽田倉遺跡、神保植松遺跡など）においても該期の集落の存在が知られている。それらは古墳時代後期以降ほぼ継続的な集落の展開を示すが、地点によっては奈良時代の段階において断絶する様相が指摘される集落も認められる。しかしこのことが実際に奈良時代に居住域の変化に結び付くとは分布調査の結果からは考えにくく、限定された調査範囲を越えた認識が要される。矢田遺跡の調査では古墳時代から奈良時代、平安時代に互っての台地上における集落の展開はいずれの時期も南北に伸びる台地の全域に及ぶものの、分布の密度には偏りが認められる。古墳時代後期は台地の奥部では疎だが中央部から先端部にかけてはまとまった分布がある。奈良時代もこれに類するがやや周縁部に分散した住居のまとまりもみられ、平安時代には台地の奥部にかけて分布の中心が移っている。このような若干の地点の変遷はあるようだが、住居跡の分布のみにとどまらず生産域も含めて、集落の範囲・展開を把握する必要があり、今後の成果が待たれる。

本地域の遺跡の展開は、銅川右岸の上位段丘面を中心に拠点的とも言える集落が存在することが特徴付けられる。南北に長い台地上からこれに付帯する生産域としての谷地部や下位面への働き掛けが想定されるが、調査の成果や分布調査の結果もこれを肯定するものと見られる。

本地域には「多胡碑」、「続日本紀」にみられる「多胡郡」の建郡に関しての記載が残されている（参考資料参照）。この問題に関しては多くの研究史があり、ここでは触れないが、各郡の比定に関する研究の2者を第4・5図にあげる。地名等の限定された資料による研究段階における比定作業に加え、考古学的な情報が蓄積されて行くなかで、より具体的な内容の資料群の分析をととして再評価が促される段階にきている。

#### (平安時代)

平安時代には、奈良時代の遺跡の展開に近い在り方がみられる。継続的な変遷をみせる集落はやはり銅川右岸の上位段丘上に立地している。200軒以上の竪穴住居跡が検出されている矢田遺跡をはじめとし神保富士塚遺跡、黒熊栗崎遺跡など多くの遺跡が認められている。これらの中には上位段丘上に広がりを見せる遺跡や、谷に分散された小さな尾根上に散在して展開する遺跡などが知られている。また、銅川の左岸域にも遺跡の存在が認められている。

この時期で注意されるのは銅川低位段丘面への進出の顕在化である。調査そのものが上位段丘面に比較して限定されており、全体的な在り方については不明な点が多いものの、これまでの調査からは遺構の密度が低く、前代からの継続性を認めにくい散在した状況が知られる。この地域には来里水田の痕跡（時期の上限については問題が残る）が広範に認められており、これらの展開と上位段丘上の規模の大きな継続性をもつ集落と、新たに低位の地域に進出する集落との関連などを考慮する必要性もある。

### 3 ま と め

さて、矢田遺跡周辺の銅川流域の遺跡や分布調査の成果をもとに、旧石器時代から平安時代に至るまでの

## 第2章 地理的環境および歴史的環境

この地域の歴史的環境に関して文を進めてきた。これまでの発掘調査の資料の蓄積が限られている本地域であり、それぞれの資料の間隙を分布調査という方法を通してわずかながらでも埋められればと考えた。なお当然限られた時間内の調査活動であったため、細部では精度にかけるとは否めないが発掘調査の及ばない地域についての情報の把握については有効であったと思われる。今後は、更に地形の綿密な分析を含めて、居住域、生産域などの想定を進め、地域史の解明へ迫りたい。

なお、平安時代以降の遺跡の分布を含めた本地域の状況に関しては、今回は省略し以後の報告内で述べる。

### ☆参考資料

#### 「多胡碑」銘

弁官符上野國片岡郡緑野郡甘  
良郡併三郡内三百戸郡成給羊  
成多胡郡和銅四年三月九日甲寅  
宣左中弁正五位下多治比真人  
太政官二品德履親王左大臣正二  
位石上尊、右大臣正二位藤原尊

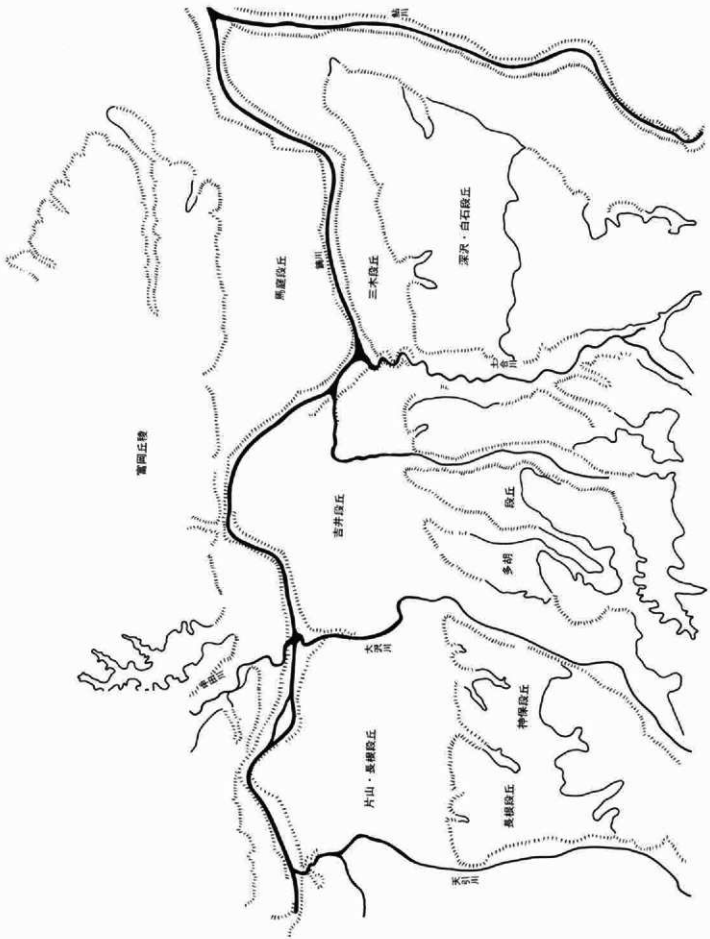
#### 「続日本紀」

和銅四年三月辛亥（中略）

割上野國甘良郡織雲韓級矢田大家緑野郡武美片岡郡山等六郷別置多胡郡

#### 参考文献

- 尾崎善左衛門 1974 『吉井町誌』 吉井町誌編さん委員会編  
尾崎善左衛門 1980 『上野三碑の研究』  
関口功一 1984 「上野國多胡郡山部郷に関する寛書」『信濃』第38巻 第11号  
群馬県史編さん委員会編 1985 『群馬県史 資料編4』 原始古代4  
同 1986 『群馬県史 資料編2』 原始古代2



富岡丘陵

馬鹿丘陵

吉井丘陵

片山・裏柳丘陵

深沢・白石丘陵

多胡

神保丘陵

長根丘陵

大井川

荒川

菅沼川

荒川







多胡碑附近の略図



第3図 多胡郡域概念図(1) (坂岡 1974)



1 多胡碑 2 辛科神社 3 入野遺跡 4 黒根河遺跡

第4図 多胡郡域概念図(2) (岡口 1984)

第2表 矢田遺跡周辺の遺跡

## ①矢田遺跡周辺の主要遺跡

No	遺跡名	立地	遺跡の概要	備考
①	矢田遺跡	上位段丘	縄文時代中期集落、古墳時代前期・後期、奈良時代、平安時代の集落跡。多数の住居跡ほか。	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988・89 『年報6・7』 本報告
②	椿谷戸遺跡	上位段丘	縄文時代中期住居跡2軒、古墳時代前期1軒、後期25軒、奈良時代14軒、平安時代13軒、中世土坑1ほか。	吉井町教育委員会 1989 『椿谷戸遺跡発掘調査報告書』
③	長根安坪遺跡	上位段丘	縄文時代中期住居跡1軒、配石遺構1、弥生時代後期4軒、古墳時代初期方周溝墓3、住居跡8、奈良平安住居跡。	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989 『年報7』
④	長根羽田倉遺跡	上位段丘	縄文土穴、弥生中・後期土坑。古墳前～後期、奈良、平安時代集落13軒。古墳後期の祭祀跡。B経石下水田、近世墓。	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988・89 『年報6・7』
⑤	神保富士塚遺跡	上位段丘	縄文前期住居跡1軒、埋室1、弥生中期中土坑1、古墳後期22軒、奈良17軒、平安44軒ほか。	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989 『年報7』
⑥	神保橋松遺跡	上位段丘	榑松城内郭、外郭の調査、縄文、弥生、古墳から平安の遺構遺物検出。	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989 『年報7』
⑦	多胡松風遺跡	上位段丘	旧石碓ポイント。古墳時代後期の住居跡。奈良、平安時代の住居跡。	調査中
⑧	多比良治部野遺跡	上位段丘	古墳時代中期・後期の住居跡。	調査中(平成元年12月末現在)
⑨	黒熊中西遺跡	上位段丘	奈良、平安時代の住居跡。その他多数の遺構、遺物。	調査中(平成元年12月末現在)
⑩	黒熊八幡遺跡	上位段丘	奈良、平安時代の住居跡。	調査中(平成元年12月末現在)
⑪	黒熊面崎遺跡	上位段丘	古墳時代住居跡1軒、平安時代27軒、小鍛冶2、掘建柱1、墓壇3、平地神社跡。	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989 『年報7』
⑫	白石根串遺跡	上位段丘	縄文時代前期の住居跡。	平成元年6月調査終了
⑬	白石大御堂遺跡	鮎川左岸	縄文時代中期住居跡1軒。園地を伴う中世寺院跡、中世後期以降火葬墓、土坑墓。	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989 『年報7』
⑭	東吹上遺跡	上位段丘	縄文前期、中期、弥生中期、後期包含層。古墳時代後期住居跡1軒、平安時代1軒(?)。	群馬県立博物館研究報告 第8集 1973 『東吹上遺跡』
⑮	富岡遺跡	下位段丘	縄文時代前期、中期遺物包含層。平安時代住居跡4軒、浅間B経石の縄層堆積。	吉井町教育委員会 1989 『富岡遺跡』
⑯	川福遺跡	下位段丘	奈良から平安時代住居跡5軒、竪穴3、溝2、土壇1、土器集中地点1。	吉井町教育委員会 1986 『川福遺跡調査報告書』
⑰	雑木塚遺跡	下位段丘	覆舟の割瓦、重弧文華なし瓦瓦多数出土。家跡の可能性が指摘されている。	吉井町誌編さん委員会 1974 『吉井町誌』
⑱	砂井戸遺跡	下位段丘	縄文後期～平安時代の遺物散布。	吉井町誌編さん委員会 1974 『吉井町誌』
⑲	道六神遺跡	下位段丘	平安時代住居跡1軒、溝6条、土壇1。	吉井町教育委員会 1986 『道六神遺跡』
⑳	西馬場遺跡	上位段丘	縄文早期、中期の遺物散布、古墳時代前期住居跡1軒、古墳時代後期3軒、平安時代2軒、遺物集中地点1。	吉井町教育委員会 1987 『西馬場・長根・谷遺跡調査報告書』
㉑	折茂東遺跡	上位段丘	弥生時代後期住居跡4軒、周溝墓1、古墳時代前期4軒、中期4軒、後期14軒、平安時代13軒。	吉井町教育委員会 1987 『東吹上遺跡・折茂東遺跡』
㉒	福岡山遺跡	上位段丘	縄文中期から弥生時代にかけての遺物が散布。	吉井町誌編さん委員会 1974 『吉井町誌』
㉓	川内遺跡	上位段丘	縄文中期土壇、弥生後期、古墳前期・後期、奈良・平安の集落跡。	吉井町教育委員会 1982 『川内遺跡一図版編一』
㉔	柳田遺跡	上位段丘南縁	古墳時代後期、奈良・平安時代の集落、矢田遺跡南側に隣接する。	吉井町教育委員会 1989 『柳田遺跡発掘調査報告書』
㉕	東沢遺跡	上位段丘	古墳時代後期住居跡5軒、奈良時代2軒、平安時代3軒。	吉井町教育委員会 1987 『東吹上遺跡・折茂東遺跡』
㉖	入野遺跡	上位段丘	縄文前期、弥生後期、古墳前期、後期の集落跡。	尾崎喜左衛門 1962 『入野遺跡』など
㉗	祝神遺跡	下位段丘	弥生後期の遺物散布。その他古墳時代以降近世に至る土器・陶磁器の破片もある。	外山和夫 『信濃』 第34巻 第4号 1982 信濃史学会
㉘	塚原遺跡	下位段丘	縄文中期、縄文晩期から弥生初期包含層。平安時代住居跡1軒、ピット群。	吉井町教育委員会 1983 『塚原・黒熊第1遺跡発掘調査報告書』
㉙	黒熊遺跡群	上位段丘	縄文前期・中期、弥生後期、古墳前期から平安時代の遺構、遺物など。	吉井町教育委員会 1981-85 『黒熊遺跡群調査報告書』(1)～(5)など

## 第2章 地理的環境および歴史的環境

No.	遺跡名	立地	遺跡の概要	備考
㉔	竹沼遺跡	下位段丘	旧石器、縄文中期住居跡3軒、弥生後期から古墳前期4軒、古墳後期17軒、滑石工房址9軒、歴史時代1軒ほか。	藤岡市教育委員会 1978 「F1 群馬県藤岡市竹沼遺跡」
㉕	多胡碑	下位段丘	吉井町大字池字御門に所在。日本三碑の一に数えられる。和暦4年(711)、多胡郡設置に関する記念碑とされる。	「吉井町誌」1974、「群馬県史 資料編4」1985など。
㉖	山ノ上碑・ 山ノ上古墳	丘陵上	高崎市山名町字山神谷に所在。山寄の円墳と墓碑。辛巳歳(681)の紀年銘あり。	「群馬県史 資料編4」1985など
㉗	金井沢碑	丘陵上	高崎市観小堀町字金井沢に所在。「神亀三年」(726)の紀年銘あり。入信表白の碑とされる。	同上

### ㉔ 矢田遺跡周辺の古墳および古墳群

No.	名称	立地
(1)	小棚古墳群	下位段丘
(2)	丹山古墳群	下位段丘
(3)	八幡塚古墳	下位段丘
(4)	東京古墳群	下位段丘
(5)	馬場塚古墳	下位段丘
(6)	北原古墳群	下位段丘
(7)	下池古墳群	下位段丘
(8)	下沼古墳群	下位段丘
(9)	高木古墳群	下位段丘
(10)	塚原古墳群	下位段丘
(11)	池内郎塚古墳	下位段丘
(12)	御穴塚古墳	下位段丘
(13)	石神塚古墳群	下位段丘
(14)	小串古墳群	下位段丘
(15)	松木瀬古墳	下位段丘
(16)	西浦古墳群	下位段丘
(17)	基跡穴塚古墳	下位段丘北側丘陵段侵食崖
(18)	岩井古墳群	下位段丘
(19)	伊勢塚古墳群	下位段丘
(20)	新沼山古墳	下位段丘
(21)	伊勢塚古墳	下位段丘
(22)	七瀬山古墳	下位段丘

No.	名称	立地
(23)	旗田古墳群	下位段丘
(24)	泉子塚古墳群	上位段丘
(25)	十二天塚古墳	上位段丘
(26)	白石稲荷山古墳	上位段丘
(27)	白石古墳群	鮎川左岸城跡伏地
(28)	緑塚古墳群	鮎川左岸城跡伏地
(29)	悪行寺裏古墳	上位段丘
(30)	安野古墳群	上位段丘
(31)	神保古墳群(神保塚支群)	上位段丘
(32)	神保古墳群(北山下支群)	上位段丘
(33)	神保古墳群(東志免木支群)	上位段丘
(34)	神保古墳群	上位段丘南側丘陵斜面
(35)	福古墳群(松山支群)	上位段丘南側丘陵
(36)	福古墳群(金堀塚支群)	大沢川左岸城跡侵食地
(37)	中天水古墳群	大沢川右岸城跡侵食地
(38)	多胡古墳群	上位段丘
(39)	多胡薬師塚古墳	上位段丘
(40)	川内古墳群	上位段丘
(41)	山王山古墳群	上位段丘
(42)	多比良古墳	上位段丘
(43)	稲荷塚古墳	上位段丘
(44)	一本杉古墳	上位段丘

### ㉔ 矢田遺跡周辺の遺物散布地

No.	時期	立地・その他
1	縄文	下位段丘北側
2	縄文中期	下位段丘北側丘陵段斜面
3	縄文中期 古墳～平安	下位段丘北側丘陵段斜面
4	縄文	下位段丘北側丘陵
5	縄文	下位段丘北側丘陵西斜面
6	縄文	下位段丘北側丘陵
7	縄文	下位段丘北側丘陵
8	縄文	下位段丘北側丘陵
9	縄文	下位段丘
10	縄文	下位段丘
11	縄文	下位段丘
12	縄文	下位段丘
13	弥生後期	弥生後期
14	縄文中期～後期	下位段丘
15	縄文前期～中期	上位段丘
16	縄文中期	上位段丘・長根安野遺跡を含む
17	縄文	上位段丘
18	縄文中期	上位段丘

No.	時期	立地・その他
18	縄文前期～後期	上位段丘・長根別田遺跡を含む
19	縄文前期～中期	上位段丘南側丘陵
20	縄文前期	上位段丘南側丘陵
21	縄文前期	上位段丘南側丘陵
22	縄文前期	大沢川左岸城跡侵食地
23	縄文	上位段丘
24	縄文	上位段丘
25	縄文中期	上位段丘
26	縄文前期～中期	上位段丘南側丘陵
27	縄文前期	上位段丘南側丘陵
28	縄文前期	上位段丘南側丘陵
29	縄文中期	上位段丘
30	縄文中期	上位段丘
31	縄文中期	上位段丘
32	縄文	上位段丘
33	縄文	上位段丘
34	縄文	上位段丘
35	縄文中期	上位段丘
36	縄文	上位段丘
37	縄文中期	上位段丘

## 第2節 矢田遺跡をとりまく歴史的環境

No.	時 期	立 地 ・ そ の 他
38	縄文前期	上位段丘南側丘陵
39	縄文中期	上位段丘
40	縄文前期～中期	上位段丘南側丘陵
41	縄文中期	上位段丘南側丘陵
42	縄文	上位段丘南側丘陵
43	縄文	上位段丘南側丘陵
44	縄文中期	上位段丘
45	縄文中期～後期	鮎川左岸城跡状地
46	縄文中期～後期	鮎川左岸城跡状地
47	縄文中期～後期	鮎川左岸城跡状地
48	縄文前期～後期	鮎川左岸城跡状地
49	縄文	上位段丘
50	縄文前期～中期	上位段丘
51	縄文	上位段丘
52	縄文 古墳～平安	上位段丘
53	縄文前期	上位段丘
54	縄文前期	上位段丘
55	縄文前期	上位段丘
56	縄文	下位段丘
57	縄文前期～後期	下位段丘
58	縄文前期～後期	上位段丘
59	縄文中期～後期	上位段丘
60	縄文	下位段丘
61	縄文中期～後期	鮎川左岸城跡状地
62	弥生後期	下位段丘北側丘陵平ら部
63	弥生後期	上位段丘
64	弥生後期	上位段丘
65	弥生後期	上位段丘
66	古墳～平安	下位段丘北側丘陵上
67	古墳～平安	下位段丘北側丘陵上
68	古墳～平安	下位段丘北側丘陵西斜面
69	古墳	下位段丘
70	古墳	下位段丘北側丘陵西斜面
71	古墳～平安	下位段丘

No.	時 期	立 地 ・ そ の 他
72	古墳～平安	下位段丘北側丘陵
73	古墳～平安	下位段丘北側丘陵
74	古墳～平安	下位段丘
75	古墳	下位段丘
76	古墳～平安	下位段丘
77	古墳～平安	下位段丘
78	平安	下位段丘
79	古墳～平安	下位段丘
80	古墳～平安	下位段丘
81	古墳～平安	下位段丘
82	古墳～平安	上位段丘
83	古墳～平安	上位段丘
84	古墳～平安	上位段丘南側丘陵
85	古墳～平安	上位段丘
86	古墳～平安	上位段丘
87	古墳～平安	上位段丘
88	古墳～平安	上位段丘
89	古墳～平安	上位段丘
90	古墳～平安	上位段丘
91	古墳～平安	上位段丘南側丘陵
92	古墳～平安	鮎川左岸城跡状地
93	古墳～平安	上位段丘
94	古墳～平安	鮎川左岸城跡状地
95	古墳～平安	上位段丘
96	古墳～平安	上位段丘
97	古墳～平安	下位段丘
98	古墳～平安	下位段丘
99	古墳～平安	上位段丘
100	古墳～平安	下位段丘
101	古墳～平安	下位段丘
102	古墳～平安	下位段丘
103	古墳～平安	下位段丘
104	古墳～平安	下位段丘
105	古墳～平安	下位段丘

### 第3節 遺跡の層序

矢田遺跡は、前章で述べたように竊川右岸の上位段丘上に位置している。南から北へ向かって緩やかな傾斜で下る段丘面では、表土の耕作土の堆積が薄く、これを除去すると直ちにいわゆる関東ローム層が見れる。これは段丘を浸食・分断する谷部への土砂の流出に加えて、広い段丘上は通年日照度が高く、冬季は西方から甘藷の谷を吹き抜ける「浅間おろし」の影響による、風化・浸食作用が大きいに起因している。

本遺跡の基本土層は以下に示すとおりである。

第I層 いわゆる表土。黒褐色を呈する耕作土であり、多量の浅間A軽石（As-Ap）を含有する。層厚は地点により大きく異なり、尾根上では50cm以上を測るが、傾斜部では10cm以下である。

第II層～第VII層は、いわゆる関東ローム層である。

第II層 明黄褐色ローム層。層厚は平均20cmほどである。浅間板鼻黄色軽石（As-Yp）を含み、特に下部では密度が高く一部ブロック状を成す。全体に粒子は粗く、粘性は弱い。

第III層 暗黄褐色ローム層。層厚は平均40cmである。白色細粒子（径2～3mm）を若干含む。第II層に比して粒子は細かく粘性をもつ。

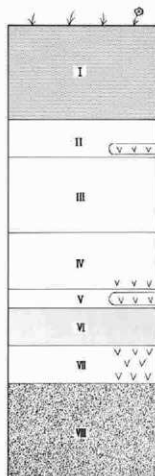
第IV層 暗黄褐色ローム層。層厚は平均30cmを測る。第III層に比較して粒子が粗く、下部には浅間板鼻褐色軽石（As-Bp）を含む。

第V層 明黄褐色ローム層。浅間板鼻褐色軽石がブロック状に多量含まれ、非常に堅緻である。層厚は平均10cmである。

第VI層 暗褐色ローム層。層厚は平均20cmを測る。少量の浅間室田軽石（As-Mp）を含みやや粘性をもつ。いわゆる暗色帯に類する状況を示すが赤城山麓の暗色帯とは対応しない。

第VII層 浅間室田軽石を主とする層である。上半部は橙褐色、下半部は乳白色を呈する。通水層であり、非常に多量の水分を含む。層厚は30cmほどである。

第VIII層 灰白色粘土層。本層は、非常に厚く堆積しており、下部は基盤層になる。本層上部に始良丹沢バミスとみられるガラス質の火山灰が認められる。



第5図 基本層序概念図

## 第3章 平安時代の遺構と遺物

## 第1節 概 要

本遺跡は、抄録でもふれたように縄文時代中期、古墳時代前期を経て、古墳時代後期の段階から大きな規模で安定した集落が営まれていることが判明している。調査段階ではこれら600軒を越す非常に多数の住居跡が、複雑に重複した状況で検出されている。平安時代の住居跡はこれらの4割近い比率を占めている。平安時代の住居跡は、調査区南部の第1・4・5次調査区の広い尾根上から傾斜部にかけてほぼ全域に濃密な分布が認められている。これに対し北側の第7・8次調査区はやや分布が散漫になっている。しかし、さらに北側の吉井町調査地点（椿谷戸遺跡）においても平安時代の竪穴住居跡の分布が知られており、南北に伸びる段丘上のほぼ全体に集落の広がりがあるものと考えられる。

本報告においては、第4・5次調査区の南半部を主として扱っており、住居軒数は95軒を数える。尾根上に立地する住居跡は比較的残存状況が良好なものも認められるが、西側の西谷川の刻む谷へ向かって傾斜する部分の住居跡は、土砂の流出等の浸食を受け全体として残存状況は不良なものが多い。浸食により失われた住居跡も存在する可能性もある。また第5次調査区の中央部には東西方向に入る埋没谷が確認されている。報告書中の住居跡の概略は以下のとおりである（第3表）。

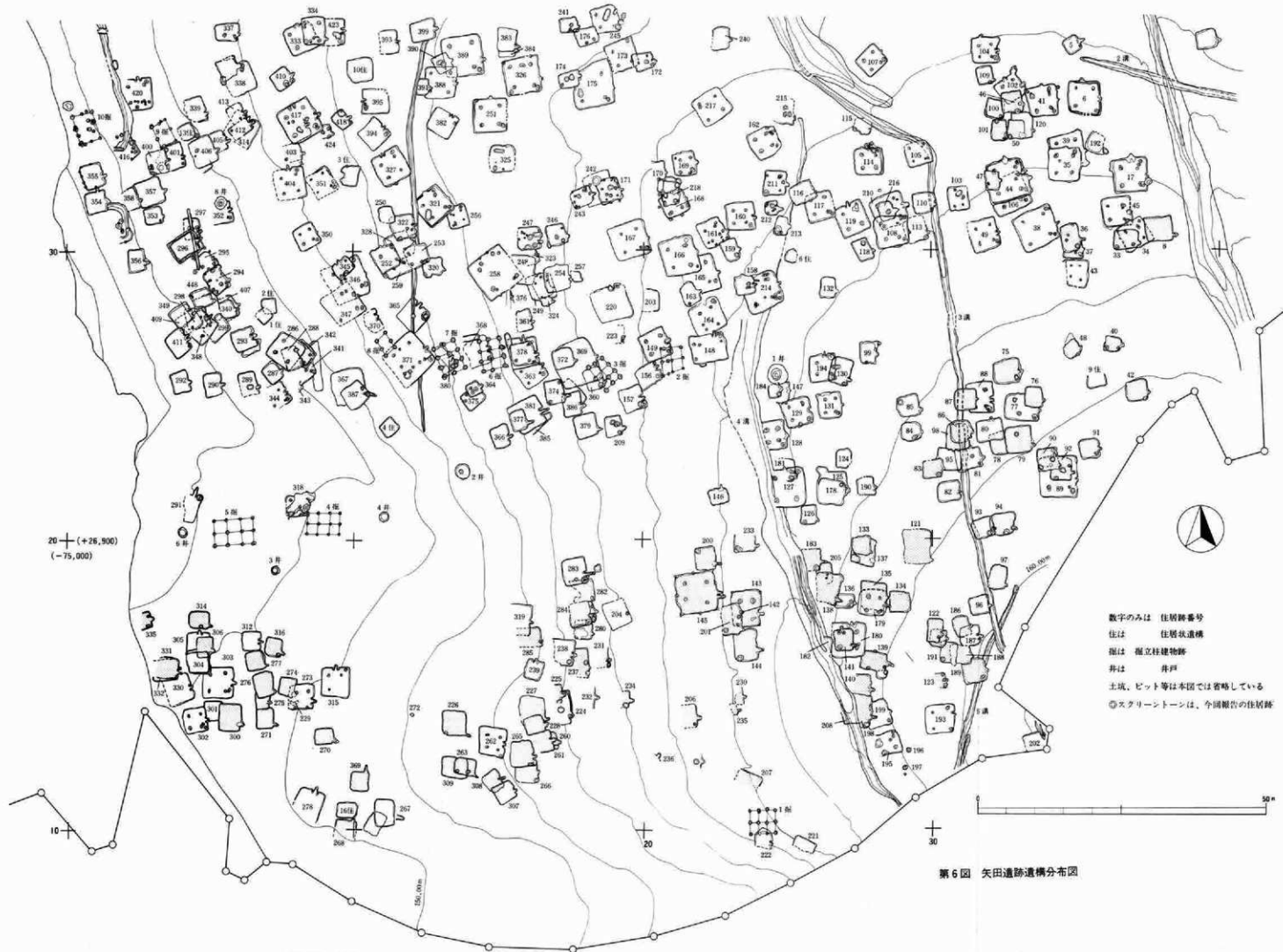
第3表 住居跡一覧表

住居%	平面形	規模(m)	面積(m <sup>2</sup> )	壁高(cm)	主軸方向	カマド	貯蔵穴	柱穴	周溝	備	考
8	長方形	4.30×4.75	17.96	17	N-87°-E	東電 石組	—	—	—		
33	長方形	3.40×4.20	13.01	20	N-71°-E	東電 石組	—	—	—		
36	長方形	4.72×3.25	12.94	39	N-61°-E	東電 石組	○	—	—		
37	正方形	3.65×3.38	4.36	21	N-80°-E	東電 石組	○	—	—		
40	長方形	2.54×2.74	6.08	10	N-105°-E	東電	○ <sub>2</sub>	—	—		
42	正方形	3.60×3.52	11.40	18	N-81°-E	東電	○ <sub>2</sub> ?	—	—		
46	正方形	3.60×3.50	12.47	20	N-36°-E	東電 石組	○	—	—		
47	長方形	3.30×2.40	7.02	8	N-90°-E	東電	—	—	—		
48	長方形	2.60×3.00	6.24	9	N-48°-E	東電	○	—	—		
50	正方形	3.00×3.17	8.96	10	N-100°-E	東電	○?	—	—		
75	長方形	4.85×4.38	15.71	39	N-88°-E	東電	○	—	—		
76	長方形	3.48×3.00	9.34	28	N-90°-E	東電	○	—	—		
78	長方形	2.60×3.75	9.07	13	—	—	—	—	—		
79	正方形	4.58×4.64	18.82	24	N-60°-E	東電 石組	—	—	—	竈の作り変えあり	
83	正方形	3.30×3.20	8.74	21	N-84°-E	東電	○	—	—		
86	正方形	3.60×3.54	10.11	31	N-82°-E	東電	—	—	—		
87	正方形	3.66×3.70	—	26	N-94°-E	東電 石組	—	—	—		
90	正方形	3.60×3.90	12.97	12	N-81°-E	東電	?	—	—		
91	正方形	3.50×3.30	9.16	25	N-85°-E	東電	○	—	—		
92	正方形	3.50×3.86	12.97	3	N-85°-E	東電 石組	○	—	—		
94	長方形	4.40×3.90	14.38	23	N-89°-E	東電 石組	○	—	—		
97	長方形	3.10×4.40	11.28	12	N-117°-E	東電	—	—	—		
98	長方形	3.90×4.50	15.88	18	N-80°-E	東電 石組	—	—	—		
101	長方形	2.80×3.65	8.49	21	N-90°-E	東電	○?	—	—		
121	長方形	4.65×6.00	26.08	23	N-94°-E	東電 石組	○ <sub>2</sub> ?	—	—		
122	長方形	2.67×4.26	9.96	9	N-90°-E	東電	—	—	—		
123	長方形	0.88×2.5	—	—	N-72°-E	東電	○ <sub>2</sub>	—	—		
133	正方形	3.15×3.36	8.64	20	N-90°-E	東電 石組	—	—	—		
134	正方形	2.50×2.45	11.06	24	N-5°-W	北電	—	—	—		
135	正方形	4.47×4.97	20.60	21	N-82°-E	東電	—	—	—		
137	長方形	4.10×4.95	—	20	N-95°-E	東電	?	—	—		
138	長方形	3.35×5.34	18.54	19	N-105°-E	東電	—	—	—		

## 第3章 平安時代の遺構と遺物

住居No	平面形	規模(m)	面積(m <sup>2</sup> )	壁高(cm)	主軸方向	カマド	貯蔵穴	柱穴	周溝	備考
139	長方形	4.46×3.10	—	39	N-100°-E	東壁	○ <sub>2</sub>	—	—	竈口に瓦埋設
140	?	4.50×3.50	(8.48)	32	N-98°-E	東壁 石組	—	—	—	—
141	正方形	3.43×3.80	10.72	5	N-90°-E	東壁 石組	—	—	—	—
142	—	—	—	—	—	東壁?	—	—	—	—
143	長方形	5.18×6.15	27.59	41	N-93°-E	東壁 石組	—	○ <sub>1,4</sub>	—	—
144	長方形	3.93×5.60	19.14	37	N-80°-E	東壁	○	—	—	—
145	正方形	6.90×6.90	43.40	65	N-60°-E	東壁	—	○ <sub>2</sub>	—	竈の作り変えあり
182	—	—×3.55	—	25	N-80°-E	東壁	—	—	—	—
183	長方形	3.12×3.85	10.38	20	N-85°-E	東壁 石組	○	—	—	—
186	長方形	2.70×3.83	8.39	25	N-73°-E	東壁	—	—	—	—
188	長方形	3.56×2.95	9.96	14	N-80°-E	東壁	—	—	—	平瓦埋設
189	正方形	4.20×4.12	(13.34)	14	N-67°-E	東壁	○	—	—	—
191	正方形	3.45×3.30	9.88	28	N-90°-E	東壁	○	—	—	—
198	—	—×5.50	13.78	35	N-90°-E	東壁 石組	○	—	—	—
200	長方形	3.53×4.02	12.56	17	N-80°-E	東壁	○	—	—	—
201	長方形	3.47×5.40	16.04	16	N-95°-E	東壁	○	—	—	ふいごの羽口が支脚に転用
205	—	—	—	27	—	—	—	—	—	—
206	—	—×2.70	9.91	2	N-90°-E	東壁	—	—	—	—
207	—	3.00×—	5.49	19	—	—	—	—	—	—
208	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—
221	—	3.86×—	6.93	11	—	—	—	—	—	—
225	—	—×3.33	—	8	N-85°-E	東壁 石組	○	—	—	—
226	正方形	4.12×4.36	16.00	15	N-100°-E	東壁	○	—	—	竈内から円筒埴輪出土
227	—	4.20×—	—	6	N-100°-E	東壁	—	○	—	拡張あり
228	正方形	3.37×3.10	9.44	4	N-70°-E	東壁	—	—	—	—
229	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
230	—	—	—	9	N-83°-E	東壁 石組	—	—	—	—
231	—	—	—	3	N-90°-E	東壁	○	—	—	—
233	—	3.5×—	9.29	12	N-90°-E	東壁 石組	○	—	—	—
234	—	—×2.88	3.44	2	N-76°-E	東壁	○	—	—	—
235	—	—×2.05	1.70	8	N-80°-E	東壁	—	—	—	—
236	—	—	—	—	N-33°-E	東壁 石組	—	—	—	—
237	—	—×5.07	—	20	N-90°-E	東壁	○	—	—	—
260	—	—×3.32	—	5	N-76°-E	東壁	○	—	—	—
261	—	—×3.70	—	22	N-76°-E	東壁	—	—	—	—
263	長方形	3.60×2.85	—	11	N-120°-E	東壁 石組	○	—	—	—
264	正方形	3.38×3.14	8.08	32	N-89°-E	東壁	—	—	—	—
265	正方形	4.47×4.50	16.65	3	N-81°-E	東壁	○	—	—	—
266	—	3.70×—	10.27	1	N-79°-E	東壁	○	—	—	—
268	正方形	3.32×3.60	11.50	23	N-30°-E	北壁	—	—	—	—
269	正方形	3.35×3.10	9.61	6	N-7°-E	北壁	—	—	—	—
270	長方形	3.35×2.80	7.61	15	N-80°-E	東壁	—	—	—	—
271	長方形	2.83×3.62	9.82	9	N-80°-E	東壁 石組	—	—	—	—
272	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
274	正方形	2.77×3.20	7.72	21	N-110°-E	—	—	—	—	—
275	—	2.57×—	—	12	N-85°-E	東壁	—	—	—	—
276	長方形	3.50×4.36	12.82	22	N-80°-E	東壁	—	—	—	—
277	正方形	3.40×3.32	9.12	36	N-80°-E	東壁 石組	○	○	—	—
280	正方形	3.28×3.22	9.32	21	N-90°-E	東壁 石組	—	—	—	—
281	—	3.00×—	—	12	N-80°-E	東壁 石組	○ <sub>2</sub> ?	—	—	—
282	—	3.9×—	—	32	N-10°-W	北壁	○	—	—	—
284	—	3.65×—	—	17	N-80°-E	東壁	○	—	○	—
285	—	—×3.44	12.17	6	N-80°-E	東壁 石組	—	—	—	—
300	長方形	4.03×4.90	17.50	22	N-97°-E	東壁	—	—	—	—
306	長方形	2.90×3.37	9.13	40	N-83°-E	東壁 石組	—	—	—	竈の造り変え
308	長方形	3.10×3.45	8.94	10	N-45°-E	東壁	—	—	—	—
309	長方形	4.50×3.73	13.85	40	N-96°-E	東壁 石組	—	—	—	—
314	正方形	3.50×3.30	9.21	28	N-100°-E	東壁 石組	○?	—	—	—
316	正方形	2.43×3.20	8.23	18	N-110°-E	東壁	○?	—	—	—
317	—	—	—	—	—	東壁	—	—	—	—
331	—	—×4.18	—	28	N-100°-E	東壁 石組	—	—	—	—
335	—	—×2.80	3.50	17	N-72°-E	東壁 石組	○	—	—	—





数字のみは 住居跡番号  
 住は 住居炊爨跡  
 楯は 楯立柱建物跡  
 井は 井戸  
 土城、ピット等は本図では省略している  
 ◎スタースーションは、全圖解の住居跡



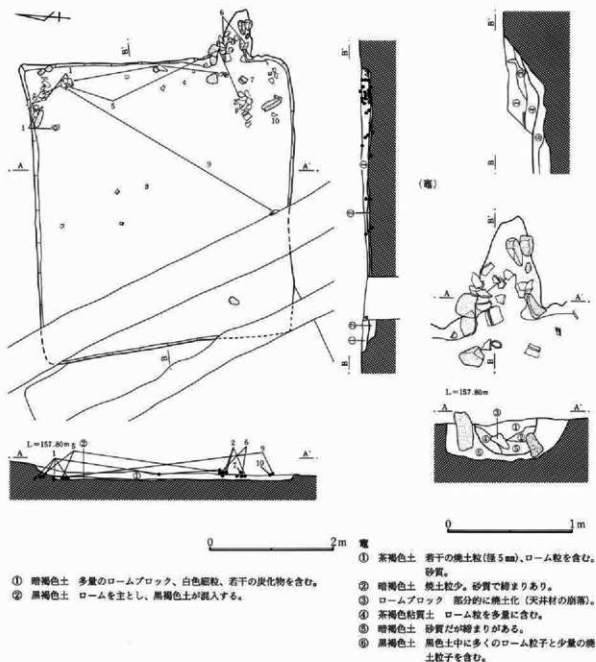
## 第2節 竪穴住居跡と出土遺物

## 8号住居跡 (第7~9図、図版7・57・87)

本住居跡は、第1次調査区西端の平坦部にあり、31・32-38・39グリッドに位置する。

重複関係としては、先行する34号住居跡(古墳後期)の覆土を掘り込んで構築されている状況が確認されている。また部分的に擾乱を受けている。

住居の掘り込みは、黄褐色ローム層にまでおおよが上部の浸食が著しく、残存状況は良くない。平面形は、東西4m30cm、南北4m75cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-87°-Eを示す。壁は最大で17cmが残存する



第7図 8号住居跡実測図

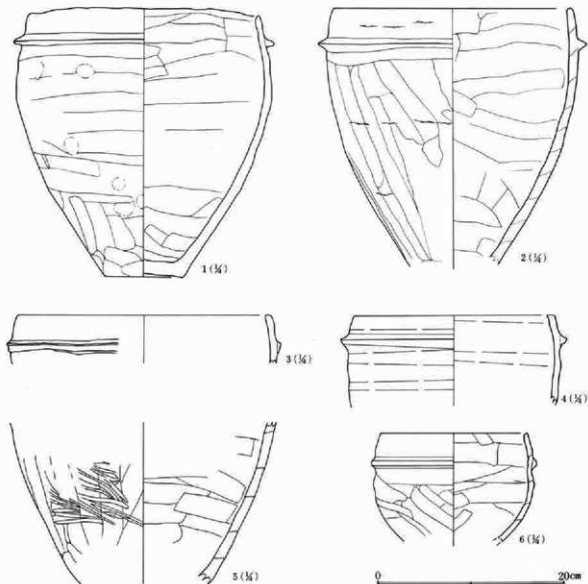
### 第3章 平安時代の遺構と遺物

程度である。床面は、部分的に貼り床が施されている。中央部付近は叩き締められており堅緻であるが、周辺部はやや軟弱である。床面には、柱穴や、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。

掘り方は、若干の凹凸が認められる程度であり、明瞭な掘り込みは認められなかった。覆土も余り残存せず堆積状況は判然としなない。

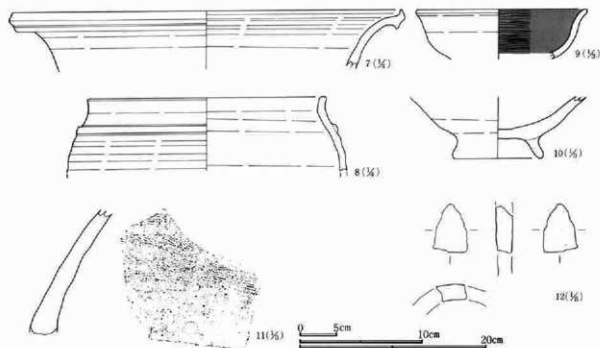
竈は、東壁の東南コーナー寄りの位置に構築されている。石組の竈であり、袖部や、燃焼部の一部には構築材として使用された石が、埋設された状況で検出されている。焚き口は竈穴の壁部分に位置し、燃焼部は、壁の外側に張り出している。焚き口部の幅45cm、張り出し方向80cmを測る。なお、支脚は遺存しない。

出土遺物は、竈周辺および、北東コーナー部分に集中している。竈内からは多数の羽釜が出土し、竈の補強材に使用されたものも含まれている。また散乱した状況の接合関係も認められる。竈周辺では、竈の構築に使用され火熱により赤化した石があり、北東コーナーでも数点の石が出土している。この他に、高台付埃や、瓦の破片なども出土している。



第8図 8号住居跡出土遺物実測図(1)

## 第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第9図 8号住居跡出土遺物実測図(2)

## 8号住居跡出土遺物観察表

調査番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (長)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
8-1 57	須恵器 羽蓋	床面周辺 片に残存	口(24.0) 底(8.0) 高(28.4)	①小石、砂粒を多量 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい褐色 一部橙色	口縁部やや内傾し、端部は面取りせず丸い。外面には輪横痕、指痕あり。胴上半横撫で。口縁部横撫で。内面は横方向足撫で。	
8-2 57	須恵器 羽蓋	甕周辺 片に残存	口(25.4) 底— 高(27.3)	①小石、砂粒を多量 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい褐色～褐色	胴部は直らず口縁部はやや内傾、端部面取りせず。外面は縦方向の弱い稜角状の整形。口縁部横撫で。内面は横方向足撫で。	歪み顯著
8-3	須恵器 羽蓋	甕周辺 片に残存	口(27.2) 底— 高(5.1)	①砂粒多量、白色細粒 ②酸化焰、やや硬質 ③黄褐色	脚は低く歪む。口縁端部は丸い。内外面ともに横方向の撫で。	
8-4	須恵器 羽蓋	甕内 片に残存	口(21.5) 底— 高(9.5)	①砂粒、白色細粒 ②酸化焰、硬質 ③橙色	口縁部やや内傾し、端部は面取り状。脚は断面三角形やや上向きで鋭利。外面は口クロ整形。内面一部横方向の足撫で。	
8-5	須恵器 羽蓋	甕内へ 床面 片に残存	口— 底— 高(17.0)	①小石、砂粒を多量 ②酸化焰、やや硬質 ③褐色～にぶい褐色	外面縦方向の足撫で。部分的に磨き調整がみられる。内面は横方向の足撫で。	
8-6 57	須恵器 羽蓋	甕内 片に残存	口(15.6) 底— 高(11.4)	①小石、砂粒多量、白色細粒 ②酸化焰、やや硬質 ③橙色	胴部は全体に丸みをもち口縁部内傾。外面下半部は斜方向への足撫で、上半分は口クロ整形を残す。内面は横方向足撫で。	備付者 鍋状の形態を呈する
9-7	須恵器 羽蓋	床面 片に残存	口(41.8) 底— 高(6.2)	①白色細粒多量、細砂粒 ②還元焰、硬質 ③オリブ灰色	口縁部強く外反、外面折り返し、端部は内傾気味につまみあげる。内外面とも口クロ整形。	
9-8	須恵器 羽蓋	甕内 片に残存	口(25.4) 底— 高(7.7)	①砂粒を多量、白色細粒 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴上部大きく膨らみ、口縁部は短く外反気味に立ち上がる。脚は低く断面台形を呈する。内外面とも口クロ整形。	胴形膨化
9-9 57	須恵器 塊	床面 片に残存	口(13.5) 底— 高(3.9)	①砂粒、白色細粒、黒炭物 ②酸化焰、硬質 ③(外)褐色 (内)にぶい黄褐色	体部下平に張りを持ち、口縁部は外湾する。外面は口クロ整形。内面は横方向の丁寧な研磨。	内面一部やや黒変
9-10	須恵器 塊	床面 高台へ 体部	口— 底(7.0) 高(4.8)	①砂粒、白色細粒 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい黄褐色	体部下平やや張りを持つ。口縁部は外反気味に開く。底部回転糸切り後、丁寧な付高台。口クロ整形。	

第3章 平安時代の遺構と遺物

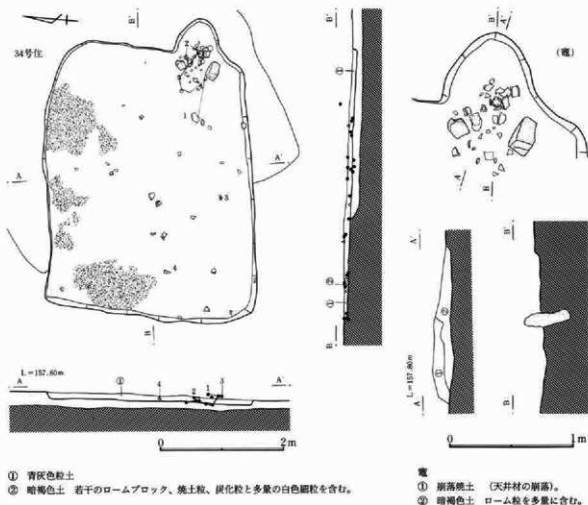
押印番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	流量(cm) (g)	①粘土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
9-11	須恵器 埴	竈内 頸部残 存	口一 底一 高(9.4)	①白色細粒、細砂粒少 ②還元焰、硬質 ③オリーブ灰色	胴部との接合部、粘土帯で欠損。外反する。 4条1単位の放射状が施される。内外面口ク ロ整形。内面には自然釉が見られる。	
9-12 87	瓦 丸瓦	覆土中 破片	厚 2.1	①白色細粒多量、砂粒 ②還元焰、硬質 ③黒褐色	一枚造り、凸面側で。凹面布目。	吉井・藤岡系

33号住居跡 (第10・11図、図版7・57・93)

本住居跡は、第4次調査区の東側の平坦部にあり、31-37・38グリッドに位置する。

重複関係としては、先行する34号住居跡(古墳後期)を切っている状況が確認されている。

住居の掘り込みは、大半は34号住居跡の覆土中に施されており、確認は困難であった。全体に残存状況は不良だが、壁高は20cmほどが検出されている。北東のコーナーはやや円みを帯びるが、ほぼ長方形の平面形を呈し、南北4m20cm、東西3m40cmを測る。床面は全体に良く叩き締められており、中央部付近は殊に堅緻である。なお床面の西半部には青灰色粘土が薄く貼り込まれている状況が確認されている。貯蔵穴および柱穴、周溝は検出されなかった。



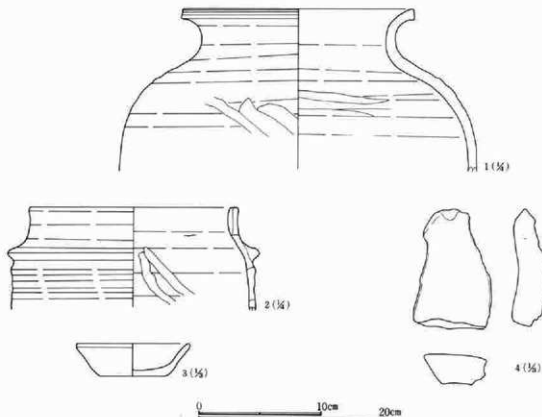
第10図 33号住居跡実測図

掘り方に関しては不明な点が多いが、明瞭な掘り込みは施されないものと見られる。

覆土は、暗褐色土1層が認められるのみである。

竈は、北東隅に寄った位置に築かれている。残存状況は不良であるが、焚き口部分には火熱を受けた砂岩の袖石が、左右とも埋設された状態で検出された。袖石には補強用の石が寄せられており、周辺からは竈材に使用された青灰色粘土が出土している。焚き口は壁の内側になり、燃焼部は壁の内外に及び、ほぼ中央部に棒状の石を利用した支脚が残存している。煙道は突出する。焚き口幅33cm、煙道方向90cmを測る。

遺物は、竈内に集中しており、床面には小破片が散漫に分布している程度である。須恵器甕、羽釜の他に砥石の出土がみられる。



第11図 33号住居跡出土遺物実測図

33号住居跡出土遺物観察表

棟図番号 図版番号	土器類別 器種	出土状況 残存状況	流量 (cm) (#)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
11-1 57	須恵器 甕	竈周辺 1/4残存	口(24.8) 底— 高(17.0)	①砂粒、白色細粒 ②酸化焰、やや硬質 ③にょい褐色	胴上部丸く膨らみ、口縁部外湾、端部は面取り。内外面ロクロ整形。外面下半部は斜方向の旋削り。	内外面の一部に煤付着(破損後)
11-2	須恵器 羽釜	竈内 1/4残存	口(22.3) 底— 高(10.9)	①砂粒 ②酸化焰、硬質 ③にょい赤褐色	口縁部は胴部から内傾した後、ほぼ直立。端部は薄い面取り。内外面ロクロ整形。内面一部に斜方向の旋削り。	外面胴上部に煤付着
11-3	須恵器 皿	床面+3 底部及び 体部一部	口(9.1) 底(5.2) 高2.6	①細砂粒、白色細粒 ②酸化焰、やや軟質 ③褐色	ロクロ整形。底部回転未切り。	
11-4 93	砥石	床面+2 完形	長8.8 幅6.2 厚2.7	重185	使用面は、縦方向の著しい作業により光沢を帯びる。縦方向の細かい磨痕もみられる。裏面は割離整形痕を残す。	

### 第3章 平安時代の遺構と遺物

#### 36号住居跡 (第12~15図、図版8・57・58・93・97)

本住居跡は、第4次調査区の東側の平坦部にあり、30・31-35・36グリッドに位置する。

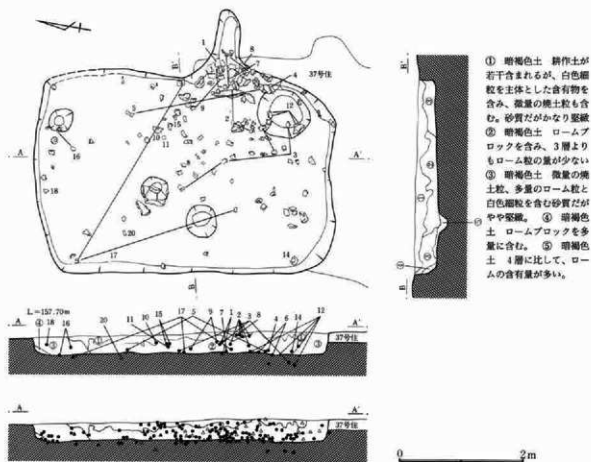
重複関係としては、先行する37号住居跡(平安)の北半部を掘り込んで築かれている状況が確認されている。

住居の掘り込みは黄褐色ローム層におよび、壁は最大40cmと比較的良好な残存状況である。南北3m25cm、東西4m72cmの長方形の平面形を呈し、主軸方向はN-61°-Eを示す。床面は、ローム面を直接使用しており、貼り床は施されていない。床面はよく締まっており、殊に中央部周辺は堅緻である。貯蔵穴は東南コーナー部分に設けられており、直径87cmのほぼ円形を呈し、深さは36cmを測る。柱穴、周溝は検出されていない。なお床面中央やや北西寄りの位置には、作業台と考えられる上部が平坦な石が埋設されている。

覆土は、4層に分層され、自然堆積状況を示している。

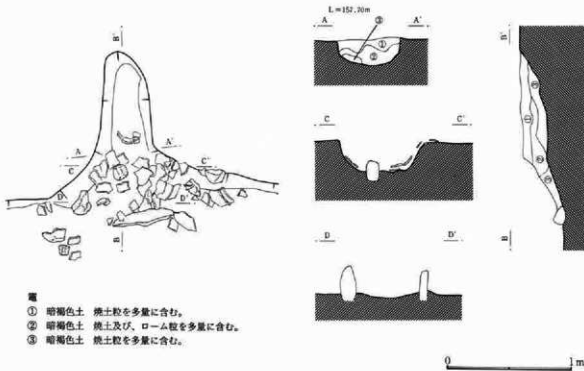
竈は、長辺である東壁の中央よりやや南側に寄った位置に構築されている。焚き口部は壁際になり左右の袖石が埋設された状況で検出された。また、この前部には板状の天井石が転落した状態で出土している。燃焼部は壁の外側に張り出し、さらに煙道部は細く突出する。燃焼部中央には支脚が遺存している。焚き口幅48cm、煙道方向130cmを測る。燃焼部内には多数の羽釜の破片が出土しており、補強材と考えられるものが多い。竈の構築には青灰色の粘土が使用されている。

出土遺物は、床面および覆土中から全面にわたり、垂直分布には大きなばらつきが認められる。多数の破片が出土しているが、個体への復元率は低い。

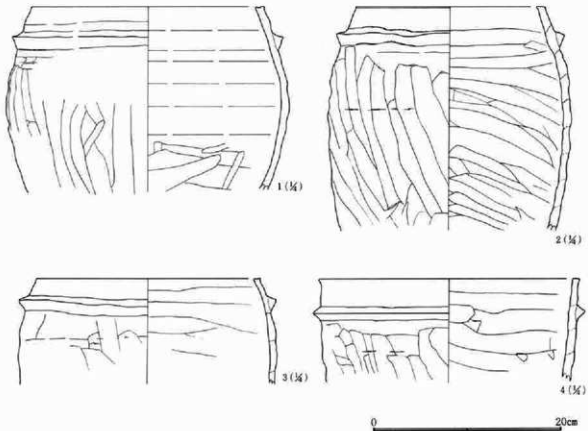


第12図 36号住居跡実測図



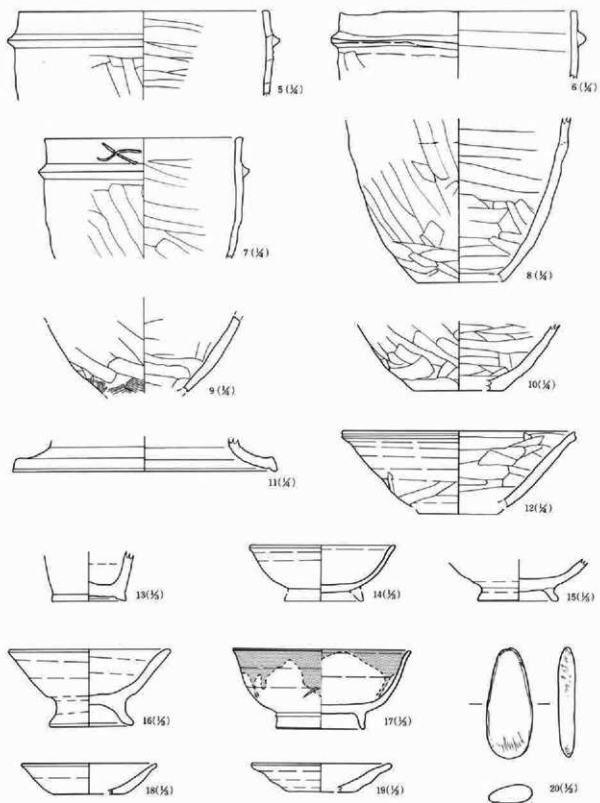


第13図 36号住居跡遺実測図



第14図 36号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物



第15図 36号住居跡出土遺物実測図(2)

36号住居跡出土遺物観察表

探出番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備 考
14-1 57	須恵器 羽蓋	甕内 胴部互 高(19.4)	口(24.8) 底— 高(19.4)	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③褐色～明赤褐色	胴上部は丸く膨らむ。口縁部は内傾し、端面 面取り。外面上端ロクロ。胴部縦方向の寛削り。 内面ロクロ整形。下半部の一部寛削り。	内面に有機物付 着
14-2 58	須恵器 羽蓋	甕周辺 互残存	口(20.0) 底— 高(23.4)	①小石、砂粒少量 ②酸化焰、やや硬質 ③褐色～明赤褐色	胴部の張りは弱く、口縁部もやや内傾する程 度。輪痕あり。口縁部および内面ロクロ整 形。外面縦方向の寛削り。内面下半寛削り。	残存状況の半分 ほど黒変
14-3 57	須恵器 羽蓋	甕土中 互残存	口(23.9) 底— 高(10.8)	①砂粒、白色細粒 ②酸化焰、硬質 ③(外)暗 赤褐色(内)明赤褐色	口縁部は胴部から緩やかに内傾。胴は断面三 角形。内外面ロクロ整形後、胴部外面は縦方 向の寛削り。	
14-4 57	須恵器 羽蓋	床面+13 互残存	口(27.8) 底— 高(10.8)	①砂粒 ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	胴部から口縁部はやや外側へ直線的に開く。 口縁端部面取り。内面及び外面口縁部はロク ロ整形。胴部外面は縦方向の寛削り。	
15-5 57	須恵器 羽蓋	床面+5 ～13 互残存	口(26.8) 底— 高(9.0)	①砂粒 ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	口縁部はわずかに内傾する。端部は面取り。 口縁部および内面ロクロ整形。胴部外面は縦 方向の寛削り。	内面有機物付着
15-6 57	須恵器 羽蓋	床面+3 ～5 互残存	口(25.4) 底— 高(7.2)	①砂粒 ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	口縁部はわずかに内傾する。端部は面取り。 口縁部および内面ロクロ整形。胴部は縦方向 の寛削り。罫は凸凹。	
15-7 58・97	須恵器 羽蓋	甕内 互残存	口(21.2) 底— 高(12.7)	①砂粒 ②酸化焰、硬質 ③褐色	胴部は深らず、口縁部は直立気味に立ち上 がる。口縁部および内面ロクロ整形。胴部は縦 方向の寛削り。	口縁部外面に 「×」の寛記号
15-8 58	須恵器 羽蓋	床面+6 下半部 互残存	口— 底(9.0) 高(17.2)	①砂粒～小石 ②酸化焰、やや軟質 ③ ぶい赤褐色 一部灰褐色	胴部は緩やかに高曲して立ち上がる。外面 面削り。内面寛削り。	
15-9 58	須恵器 羽蓋	甕内～ 床面+6 胴下部互 高(7.9)	口— 底(9.0) 高(7.9)	①砂粒、白色細粒 ②酸化 焰、やや軟質 ③(外)ぶ い赤褐色 (内)灰褐色	胴下部外面は斜方向の寛削り。最下部は磨き た。内面横方向の寛削り。	
15-10 58	須恵器 羽蓋	床面+16 底部周辺 互残存	口— 底 9.6 高(7.0)	①砂粒、小石、白色細粒 ②酸化焰、やや軟質 ③灰オリーブ色	胴部下部斜方向、最下部横方向の寛削り。内 面は横方向の寛削り。底部寛削り。	
15-11 58	須恵器 甕	床面+4 頸部互残 存	口— 底(28.3) 高(3.5)	①砂粒、白色細粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③ぶい黄褐色～明黄褐色	頸部は胴部から「く」の字状に開き、端部は 下にやや突出する。内外面ロクロ整形。	
15-12 58	須恵器 鉢	貯蔵穴内 互残存	口 25.2 底— 底(8.0)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③褐色～暗赤褐色	体部はほぼ直線的に開く。口縁端部はわずかに 外反し、面取りされる。内外面ともロクロ 整形されるが、不定方向の無でもある。	輪痕み強が部分 的に認められる
15-13 58	須恵器 甕	甕土中 互残存	口— 底 5.9 高(3.5)	①砂粒、白色細粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	体部は内湾して立ち上がり端部は小さく外反 する。内外面ともロクロ整形(右回転)。底部 回転軸で調整。	
15-14 58	須恵器 高台付埴 高台付埴	床面+5 互残存	口11.6 底(3.8) 高(3.8)	①細砂粒少 ②酸化焰、やや軟質 ③ぶい黄褐色	体部はわずかに内湾気味に立ち上がる。付高 台、下部に糸縁1条。内外面ロクロ整形。底 部回転軸で調整。	口縁～底にかけ 一部黒変
15-15 58	須恵器 高台付埴	床面+7 体部下 互残存	口— 底(6.4) 高(3.4)	①砂粒少量 ②酸化焰、やや軟質 ③ぶい褐色	体部下半部に張りをもち内湾して立ち上 がる。高台部はわずかに外反するが直線的。内 外面ともロクロ整形。底部回転軸で調整。	
15-16 58	須恵器 高台付埴	床面+13 体部外欠 損	口13.0 底 6.7 高 6.1	①砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③ぶい褐色	体部は底部からやや段をなして直線的に立ち 上がる。高台下部は外反して開く。内外面と もロクロ整形。	
15-17 58	灰輪陶器 高台付埴	甕土中 互残存	口(14.8) 底(7.2) 高(6.3)	①緻密 ②良好、磨練 ③灰白色	体部下半は丸く張りをもち、直線的に開き端 部はわずかに外反。高台部は高く直線的。内 外面ともロクロ整形。掛け掛け。	胎土は掛け掛け
15-18 58	須恵器 甕	床面+19 互残存	口(10.8) 底(6.0) 高(2.4)	①砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③黄褐色～明黄褐色	体部は直線的に開く。口縁端部は薄く反り気 味。内外面ともロクロ整形。底部寛削り。	
15-19 58	須恵器 甕	甕土中 互残存	口(11.2) 底— 高(2.2)	①砂粒、白色細粒 ②酸化焰、やや軟質 ③ぶい褐色～ぶい黄褐色	体部は直線的に開く。内外面ともロクロ整形。 外面は整形により段をなす。底部は寛削り。	
15-20 93	砥石	床面 完形	長 8.5 幅 3.6	厚1.5 重78	自然石利用。両面端部には擦痕が認められ、 側面にも擦痕がある。	輝岩

### 第3章 平安時代の遺構と遺物

#### 37号住居跡 (第16・17図、図版9・58・59)

本住居跡は、第4次調査区東側の平坦地にあり、30・31-35・36グリッドに位置する。重複関係としては、後出する36号住居跡(平安)により北半部を破壊されている状況が認められる。

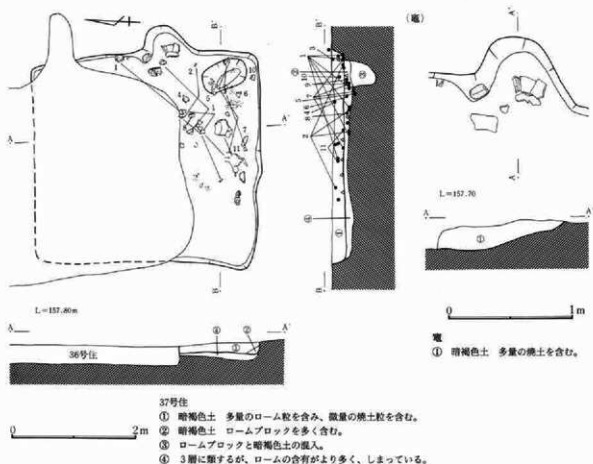
住居の掘り込みは黄褐色ローム層に及んでおり、良好に確認された。36号住居跡の重複はあるが、北東コーナー部分が僅かながら残存しており、南北3m38cm、東西3m65cmのほぼ正方形の平面形を呈することが確認された。主軸方向はN-80°-Eを示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり21cmを測る。床面は、貼り床が施されているが、さほど堅く締まっていない。貯蔵穴は東南隅に設けられており、長軸73cm、短軸44cmの楕円形の形状をとり、垂直の立ち上がる深さは55cmを測る。貯蔵穴内及びその周辺部には、多量の青灰色粘土の分布が見られる。柱穴、周溝は検出されなかった。

掘り方は、わずかな起伏があるのみで明瞭な掘り込みは検出されなかった。

覆土は、暗褐色土1層のみだが自然堆積と考えられる。

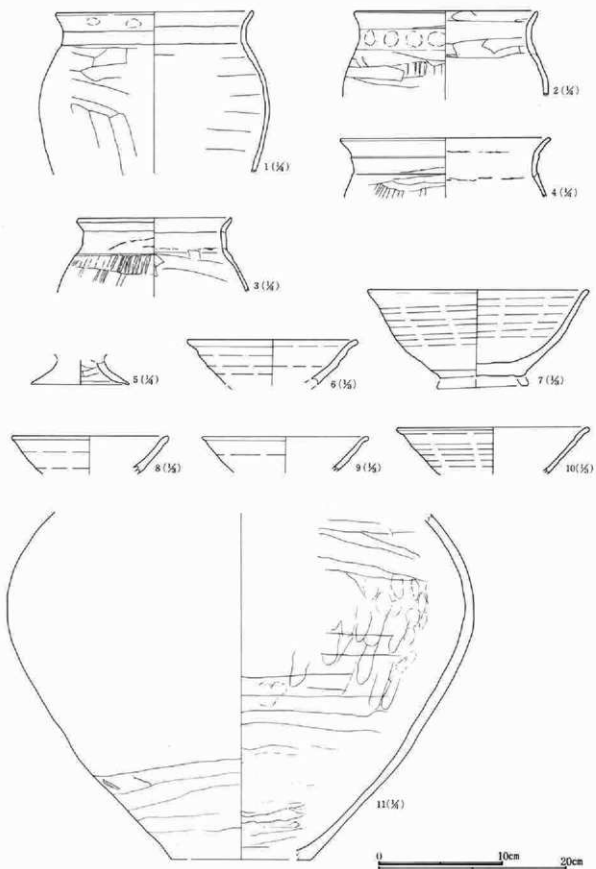
竈は、東壁の中央よりやや南に寄った位置に構築されている。残存状況は不良だが、左袖石が埋設された状況で検出された。燃焼部は壁の内外に互るものと見られ、張り出しは弱い。燃焼部幅は75cm、煙道方向57cmを測る。なお竈前部周辺を中心に青灰色粘土の分布が見られる。

遺物は、竈内、貯蔵穴周辺と床面残存部分全域に散乱して出土している。土師器壺、須恵器環・埴があり、竈内出土の須恵器大壺胴部破片は、竈補強材として用いられている。



第16図 37号住居跡実測図

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第17図 37号住居跡出土遺物実測図

### 第3章 平安時代の遺構と遺物

#### 37号住居跡出土遺物観察表

坪図番号 図版番号	土器種類	出土状況 残存状況	流量 (cm) (径)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整・成形技法の特徴	備考	
17-1 58	土師器 壺	貯蔵穴～ 床面周辺 ×残存	□(21.0) 底— 高(17.0)	①砂粒、白色細粒 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい褐色～褐色	「コ」字状口縁。内面もわずかに稜をなす。 外面 口縁部横撫で。胴部縦削り。内面 荒撫で。唇厚は比較的厚い。	外面一部に傷付着	
17-2	土師器 壺	+15 ～6 ×残存	□(19.6) 底— 高(9.0)	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③褐色～にぶい赤褐色	「コ」字状口縁。内面の稜は弱い。外面 口縁部横撫で。胴部縦削り。内面 荒撫で。唇厚は比較的厚い。	内面に焼痕による円形剥落あり	
17-3 58	土師器 壺	甕内～ -3 ×残存	□(16.4) 底— 高(7.8)	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③褐色	「コ」字状口縁。内外面とも口縁部の稜は明確。口縁部面取り状。口縁部横撫で。胴部縦削り。内面 荒撫で。	内外面に付着物がみられる	
17-4	土師器 壺	床面+21 ×残存	□(22.4) 底— 高(6.2)	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③褐色～赤褐色	「コ」字状口縁。内面の稜は弱い。口縁部横撫で。外面は強い。胴部外面 縦削り。内面 荒撫で。	内面に付着物	
17-5	土師器 台付壺	掘り方内 台部× 残存	□— 底(10.4) 高(2.5)	①砂粒、霞母 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい褐色～褐色	①砂粒、霞母 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい褐色～褐色	台部は、反り気味に大きく開く。内外面ともに横撫で。	
17-6 59	須恵器 環	床面 ×残存	□(13.6) 底— 高(3.5)	①砂粒、褐色粒子 ②酸化焰、やや軟質 ③(外)明赤褐色 (内)にぶい赤褐色	①砂粒、褐色粒子 ②酸化焰、やや軟質 ③(外)明赤褐色 (内)にぶい赤褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反する。内外面とも口縁部整形。外面は段をなす。	
17-7 59	須恵器 高台付埴	床面～ -15 一部欠損	□(17.6) 底(6.8) 高(6.9)	①砂粒 ②還元焰気味、やや軟質 ③灰黄色～灰白色	①砂粒 ②還元焰気味、やや軟質 ③灰黄色～灰白色	大形の深い体部。内湾気味に立ち上がり、口縁部はやや外反。高台部はわずかな張り付け。内外面口縁部整形。底部回転未切り。	表面やや摩滅、付着物あり
17-8	須恵器 環	床面+3 ×残存	□(12.5) 底— 高(3.0)	①砂粒、霞母 ②還元焰気味、やや軟質 ③オリーブ灰色	①砂粒、霞母 ②還元焰気味、やや軟質 ③オリーブ灰色	体部は内湾気味に立ち上がる。内外面とも口縁部整形。	
17-9 59	須恵器 高台付埴	床面+5 ～3 ×残存	□(13.4) 底— 高(2.8)	①砂粒少 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色～灰オリーブ色	①砂粒少 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色～灰オリーブ色	体部は直線的に開き、口縁部は外反する。内外面とも口縁部整形。	
17-10	須恵器 高台付埴	床面+7 ×残存	□(15.2) 底— 高(3.7)	①砂粒、白色細粒 ②還元焰、やや軟質 ③オリーブ灰色	①砂粒、白色細粒 ②還元焰、やや軟質 ③オリーブ灰色	体部は直線的に開き、口縁部は小さく外反する。内外面とも口縁部整形。内面は丁寧。	外面傷付着
17-11 59	須恵器 大壺	床面+7 ～8 ×残存	□— 底(15.0) 高(36.7)	①砂粒、小石 ②還元焰、やや硬質 ③オリーブ灰色	①砂粒、小石 ②還元焰、やや硬質 ③オリーブ灰色	胴部やや上位で「く」の字状に屈曲気味に張る。内外面ともに横方向の撫で調整。内面には指痕による整形痕が残る。	

#### 40号住居跡 (第18～20図、図版9・59・96)

本住居跡は、第4次調査区南東部、北側に緩やかに傾斜する部分にあり27-37グリッドに位置する。

他の住居跡との重複関係は認められず、単独で存在する。

住居の掘り込みは黄褐色ローム層におよび明瞭に確認されたが、全体に残存状況は不良である。竪穴部の平面形はやや歪んだ長方形を呈し、規模は南北2 m74cm、東西2 m54cmを測る。また主軸方向はN-105°Eを示す。壁は最大10cmが残存するが、西側では状況は悪く、北西部では残存しない。床面は壁の周辺部を中心に貼り床が施されており、叩き締められているが、特に中央部周辺は顕著である。貯蔵穴と考えられるピットは2カ所確認された。竈右隅の南東コーナー部分のものは、径57cm×42cmのやや不整な円形を呈し、深さは39cmを測る。また南西隅においては径55cm×41cm、深さ41cmの楕円形を呈するが、上面には棒状の石が置かれた状況で出土していることから、生活時には閉口していた可能性がある。なお、柱穴、周溝は検出されなかった。

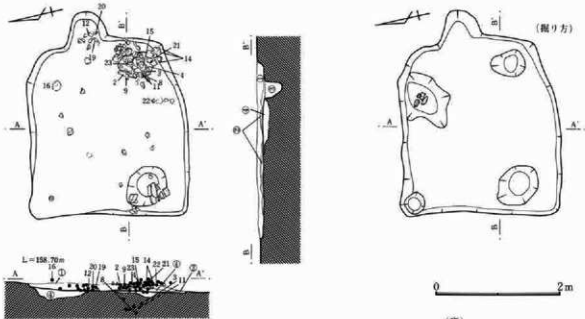
掘り方部分は、比較的平坦であるが、北東コーナー付近の壁際において不整形の土坑が確認された。

覆土は、残存状況が悪いが2層に分層された。

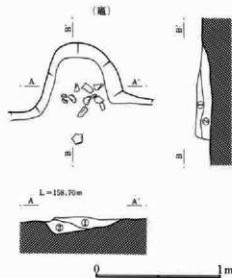
竈は、東壁のほぼ中央に築かれており、残存状況は不良である。燃焼部の掘り込みがわずかに確認される程度だが、壁の内外に互ると見られる。幅63cm、張り出し方向51cmを測る。火床面は若干焼土化している。

第2節 竪穴住居跡と出土遺物

遺物は、南東隅及び南西隅の貯蔵穴周辺に集中しており、その他床面に散漫に分布が見られる。南東隅の貯蔵穴内には環・埴が重ねられてあり、上部は板状の石で覆われていた。

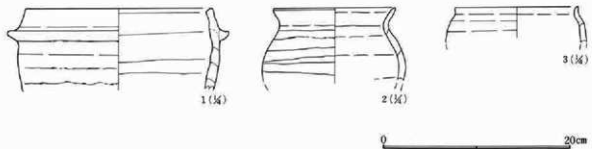


- ① 暗褐色土 ローム粒、白色細粒を多量に含む、非常に緻密。
- ② 暗褐色土 白色細粒を多量に含む。
- ③ 暗褐色土 ローム粒を含む、貯蔵穴。
- ④ 暗褐色土 ローム粒を多量に含む。



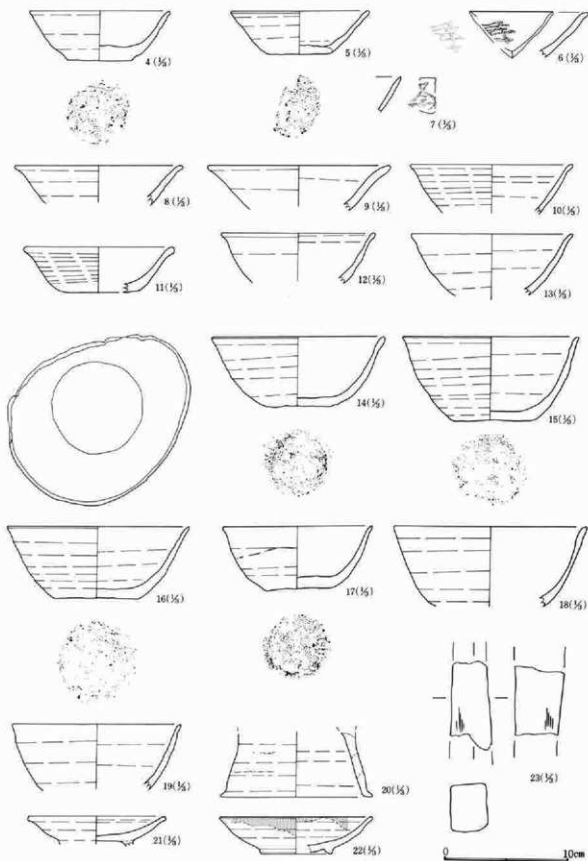
- 竪
- ① 暗褐色土 微量の白色細粒を含む。
  - ② 暗褐色土 焼土粒を含む。

第18図 40号住居跡実測図



第19図 40号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物



第20図 40号住居跡出土遺物実測図(2)



40号住居跡出土遺物観察表

押出番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
20-1 59	須恵器 羽釜	覆土中 片残存	口(20.0) 底— 高(8.6)	①砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③黒褐色～暗オリーブ褐色	口縁部やや内傾し、肩部は面取りされる。筒はやや上向き。外面には横線直取り。内外面ロクロ整形。	煤の付着あり
20-2	土師器 壺	床面+6 片残存	口(13.0) 底— 高(7.7)	①砂粒～小石、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい棕色～にぶい褐色	口縁部「く」の字に外反。胴上部は丸く脹る。内外面ともロクロ整形。	口縁部外面に付着物
20-3	土師器 壺	貯蔵穴内 片残存	口(13.2) 底— 高(3.6)	①砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③灰黄褐色	胴上部は丸く膨らみ、口縁部は短くわずかに外反する。内外面ともロクロ整形。	
20-4	須恵器 坏	貯蔵穴内 底部～口 縁の一部	口(11.1) 底5.3 高3.9	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③浅黄色～明黄褐色	体部下半はわずかに張りを持ち、直線的に立ち上がる。内外面ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り無調整。	
20-5 59	須恵器 坏	覆土中 片残存	口11.0 底5.2 高3.4	①砂粒～小石 ②酸化焰、やや軟質 ③明褐色	体部は底部からほぼ直線的に立ち上がり口縁部へ至る。内外面ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り無調整。	
20-6 96	須恵器 坏	覆土中 片残存	口(11.6) 底— 高(3.8)	①細砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰色～灰オリーブ色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。内外面ロクロ整形。	体部内面に墨書
20-7 96	須恵器 坏	覆土中 口縁部小 破片	口— 底— 高(2.8)	①細砂粒 ②還元焰気味、やや硬質 ③浅黄色	体部はわずかに内湾気味の立ち上がりか。内外面ともロクロ整形。	体部外面に墨書
20-8	須恵器 坏	貯蔵穴内 片残存	口(13.4) 底— 高(3.2)	①砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰色～オリーブ黒色	体部はわずかに内湾気味の立ち上がり、口縁部は小さく外反する。内外面ともロクロ整形。	
20-9	須恵器 埴	竈内 片残存	口(14.6) 底— 高(3.5)	①砂粒～小石 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい棕色～にぶい褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反する。内外面ともにロクロ整形。	
20-10	須恵器 埴	覆土中 片残存	口(13.0) 底— 高(3.9)	①細砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰オリーブ色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。	
20-11	須恵器 坏	床面+3 片残存	口11.8 底6.4 高3.6	①砂粒～小石、雲母 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい棕色 一部黒変	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は肥厚し外反する。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
20-12	須恵器 埴	竈内 片残存	口(12.4) 底— 高(4.0)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい棕色～にぶい褐色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。	
20-13	須恵器 埴	覆土中 片残存	口(12.8) 底— 高(4.9)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい黄褐色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。内外面ともにロクロ整形。	
20-14 59	須恵器 埴	貯蔵穴内 ほぼ完形	口13.8 底5.0 高5.4	①砂粒～小石少量 ②酸化焰、やや硬質 ③浅黄色～にぶい黄色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	内外面一部に黒変
20-15 59	須恵器 埴	貯蔵穴内 口縁部一 部欠損	口(14.0) 底6.0 高6.6	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③ (外)暗黄褐色 (内)黒褐色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	内面に黒付着
20-16	須恵器 埴	床面+2 口縁部欠 欠損	口(14.6) 底6.6 高5.7	①砂粒～小石、白色細粒 ②還元焰、やや硬質 ③緑灰色 口縁部灰色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	垂み顕著
20-17 59	須恵器 埴	覆土中 約片残存	口(12.0) 底5.4 高4.9	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい黄色～黄褐色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	外面一部黒変
20-18	須恵器 埴	床面+2 片残存	口15.4 底— 高(6.3)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③黄灰色 一部黒褐色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部はわずかに肥厚する。内外面ともにロクロ整形。	
20-19	須恵器 埴	竈内 片残存	口(13.4) 底— 高(5.2)	①砂粒、雲母少量 ②酸化焰、やや硬質 ③浅黄色～にぶい黄色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。内外面ともにロクロ整形。	

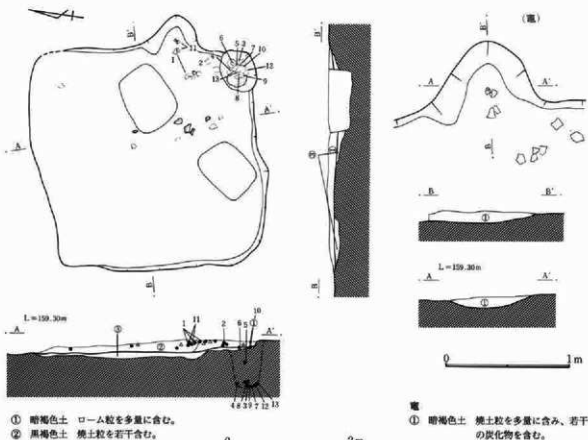
### 第3章 平安時代の遺構と遺物

押函番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状況 残存状況	法量(cm) (K)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備 考
20-20	須恵器 高台付埴	甕内 高台部片	口 一 底(12.2) 高(5.0)	①砂粒～小石、雲母 ②酸化焙、やや軟質 ③浅黄褐色～よい黄褐色	高台部は高く「ハ」字状に開き、端部は外側へ小さく広がる。内外面ともにロクロ整形。付高台。	
20-21 59	須恵器 高台付甕	貯蔵穴跡 片残存 高台欠損	口 10.9 底(5.9) 高(2.2)	①砂粒～小石 ②酸化焙、やや軟質 ③よい黄褐色	体部はやや内湾して開き、口縁端部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。高部は回転糸切り一部無調整。	体部内面上位に一条の沈線が施される
20-22 59	灰釉陶器 高台付甕	床面+4 片残存	口(12.2) 底 5.8 高 2.9	①緻密 ②還元焙、堅微 ③灰白色	体部はやや内湾して開き、口縁端部は小さく外反する。高台部は低く三角形に近い断面形。内外面ともにロクロ整形。施釉は遺り掛け。	外面無軸部以外にも、飛沫状の釉あり
20-23	磁 石	床面+10 両端欠損	長(7.0) 幅 3.9 厚 2.9	重(115)	柱状の砥石。四面ともに使用による摩滅、線条痕がある。	

#### 42号住居跡 (第21・22回、図版10・59・60・96)

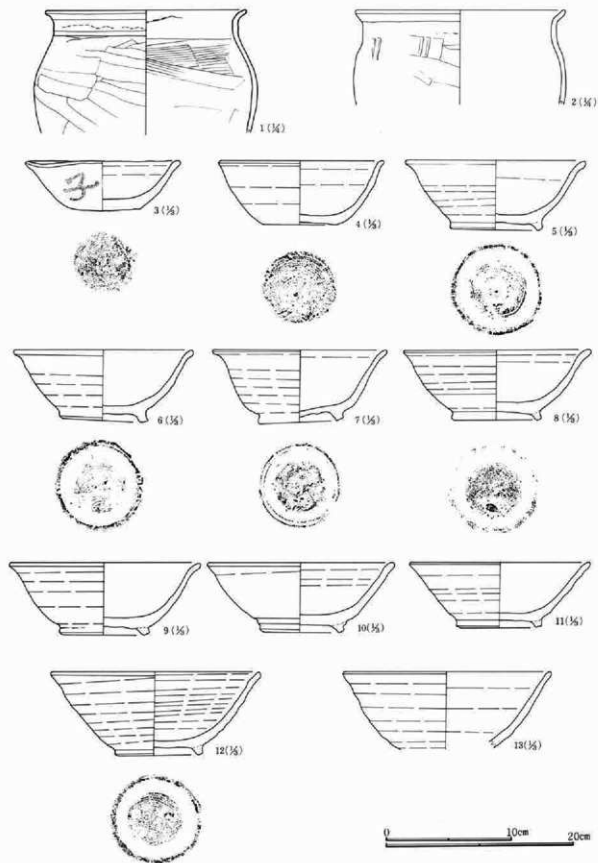
本住居跡は、第4次調査区南東部の北側へ向かう緩傾斜面にあり、25・26-37・38グリッドに位置する。他の住居跡との重複関係は見られず、単独で存在する。

竪穴部の掘り込みは黄褐色ローム層に及ぶが、残存状況が不明瞭なため確認は困難であった。平面形は、南北3m52cm、東西3m60cmのほぼ正方形を呈し、主軸方向はN-81°-Eを示す。壁は南東部で最大18cmを



第21図 42号住居跡実測図

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第22図 42号住居跡出土遺物実測図

### 第3章 平安時代の遺構と遺物

測るものの、傾斜の関係で北壁周辺は残存しておらず、床面によって範囲を確認しえた。床面は貼り床が施されており、堅くしまっており、殊に中央部では顕著である。一部は擾乱を受けている。貯蔵穴は南西隅に設けられており、直径50cmの円形を呈する。深さは58cmと深く、断面は下部で膨らむ袋状を成す。その他、南西隅には、直径80cm、深さ18cmの円形の掘り込みが検出されており、貯蔵穴の可能性もある。なお柱穴、周溝は検出されなかった。

掘り方面はほぼ平坦であり、明瞭な掘り込みは認められない。

覆土は、僅かに残存するのみだが、2層に分層された。

竈は、東壁の中央よりもやや南に寄った位置に構築されている。残存状況は不良である。燃焼部は壁の外に張り出しており、幅65cm、煙道方向50cmを測る。火床面はやや焼土化している。

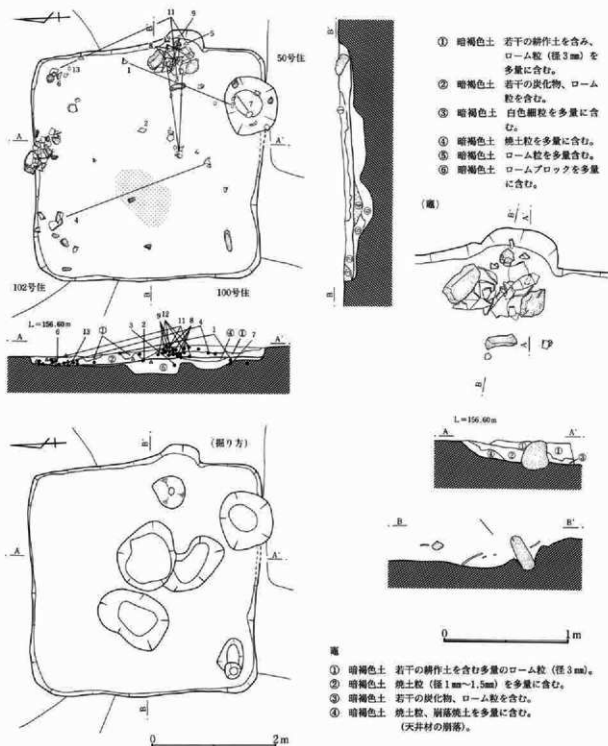
遺物は、竈脇の貯蔵穴内で、完形の須恵器・坏が6個体重ね合わせた状況で出土している。この上面には板状の石が乗っており、蓋となっているようである。

42号住居跡出土遺物観察表

探検番号 図版番号	土器類別 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (K)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
22-1 59	土師 甕	竈内～床 面+18 片残存	口(21.6) 底— 高(13.0)	①砂粒～小石、褐色粒子 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい褐色～にぶい褐色	「コ」字状口縁に近いがやや不明瞭。口縁部 横方向の撫で。胴部 外面直削り。内面直削 り、工具痕明瞭。	内面に付着物
22-2	土師 甕	竈内～床 面+4 片残存	口(22.4) 底— 高(10.0)	①砂粒～小石 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい赤褐色	「コ」字状口縁に近いが胴部への移行は不明 瞭。口縁部横撫で。胴部 外面直削り。内面 横撫で。	内面に付着物、 器面やや剥離、 外面に厚付着 体部外面に墨書 「子」
22-3 59・96	須恵 器 坏	貯蔵穴内 完形	口(12.2) 底 5.4 高 3.9	①砂粒～小石、白色胎粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色～緑灰色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部 は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形 (右回転)。底部は回転糸切り無調整。	体部外面に墨書 「子」
22-4 59	須恵 器 埴	貯蔵穴内 完形	口(13.4) 底 5.8 高 5.0	①砂粒～小石 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端 部はわずかに外反する。内外面ともにロクロ 整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
22-5 59	須恵 器 高台付埴	貯蔵穴内 口縁部欠 欠損	口(14.2) 底 7.3 高 5.4	①砂粒～小石 ②酸化焰気味、やや軟質 ③淡黄色～浅黄色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端 部は外反する。内外面ともにロクロ整形(右 回転)。底部は回転糸切り無調整。付高台。	
22-6 59	須恵 器 高台付埴	貯蔵穴内 完形	口(14.4) 底 7.1 高 5.6	①砂粒～小石 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色～灰色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端 部は外反する。内外面ともにロクロ整形(右 回転)。底部は回転糸切り無調整。付高台。	一部黒斑あり
22-7 60	須恵 器 高台付埴	貯蔵穴内 完形	口(14.0) 底 6.8 高 5.8	①砂粒～小石 ②還元焰気 味、やや軟質 ③灰白色 ～灰オリーブ色 底部黒変	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端 部は外反。内外面ともにロクロ整形。底部は 回転糸切り無調整。内面は煙撫で。付高台。	表面はやや摩滅
22-8 60	須恵 器 高台付埴	貯蔵穴内 片残存	口(15.0) 底 7.2 高 5.5	①砂粒～小石、雲母薄片 ②還元焰気味、やや軟質 ③灰白色 大半が黒変	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端 部は外反する。内外面ともにロクロ整形(右 回転)。底部は回転糸切り無調整。付高台。	内外面の多くは 燻し気味に黒色 している
22-9 60	須恵 器 高台付埴	貯蔵穴内 ～竈内 片残存	口(15.2) 底 7.3 高 5.7	①砂粒～小石 ②酸化焰気味、やや軟質 ③にぶい褐色～にぶい褐色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端 部は外反する。内外面ともにロクロ整形(左 回転)。底部は回転糸切り無調整。付高台。	底部内外面円形の 黒斑(重ね焼 き部分)か
22-10 60	須恵 器 埴	貯蔵穴内 片残存	口(15.0) 底 6.7 高 5.5	①砂粒～小石 ②還元焰気味、やや軟質 ③にぶい黄褐色～明黄褐色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端 部は外反する。内外面ともにロクロ整形(右 回転)。底部は回転糸切り無調整。付高台。	
22-11	須恵 器 高台付埴	竈周辺部 片残存	口(14.4) 底(6.8) 高(5.1)	①砂粒 ②還元焰気味、やや軟質 ③灰白色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部 は小さく外反する。内外面ロクロ整形(右 回転)。底部は回転糸切り無調整。付高台。	外面一部黒変
22-12 60	須恵 器 高台付埴	貯蔵穴内 口縁部欠 欠損	口(16.8) 底 7.0 高 6.6	①砂粒～小石、白色胎粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰 白色～黄白色 大半が黒変	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端 部はわずかに外反する。内外面ロクロ整形(右 回転)。底部は回転糸切り無調整。付高台。	
22-13	須恵 器 高台付埴	貯蔵穴内 片残存	口(16.6) 底— 高(6.1)	①砂粒～小石、白色胎粒 ②還元焰気味、やや軟質 ③淡黄色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端 部はわずかに外反する。内外面ともにロクロ 整形。	外面一部黒斑

46号住居跡 (第23~25図、図版11・60・91)

本住居跡は、第4次調査区の東側の平坦地にあり、35・36-33・34グリッドに位置する。重複関係としては、先行する100号・102号(古墳後期)と264号住居跡(平安)の一部を掘り込んで構築している状況が確認されている。



第23図 46号住居跡実測図

### 第3章 平安時代の遺構と遺物

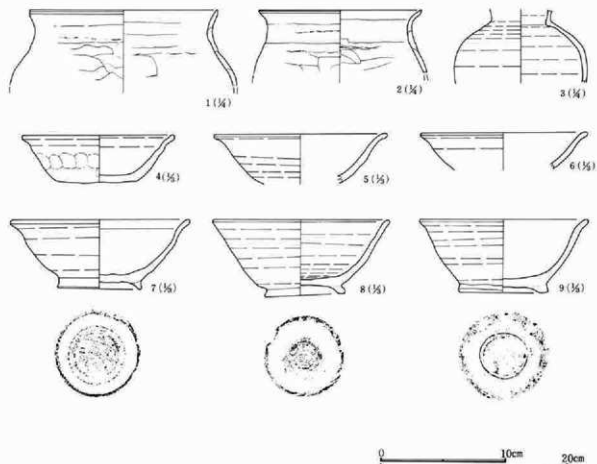
住居の掘り込みは黄褐色ローム層までおよび、比較的遺存状況は良好である。平面形は隅丸のほぼ正方形を呈し、南北3m50cm、東西3m60cmを測る。なお主軸方向はN-36°-Eを示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、20cmほどが残存する。床面は貼り床が施されているが、中央部付近がやや硬質であるものの全体的に軟弱である。貯蔵穴は東南コーナー近くの南壁際に設けられている。やや壁の外側に張り出しており、直径84cmの円形を呈し、深さは27cmを測る。柱穴や周溝は検出されなかった。

床面中央やや西よりの位置に焼土の分布が認められたが、掘り方調査の段階で床下に掘り込まれた土坑に充填された埋土であることが判明した。これを含め床面中央部には直径1mほどの土坑が掘り込まれている。

覆土は、3層に分層された。

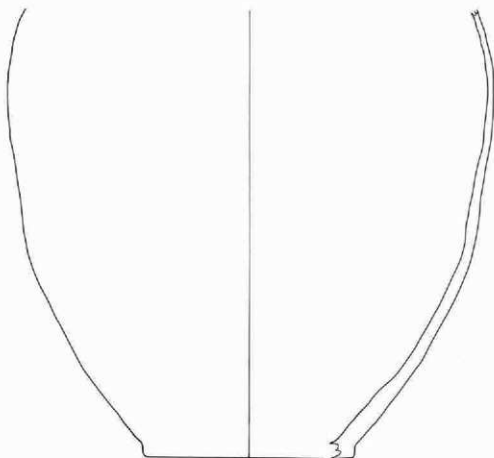
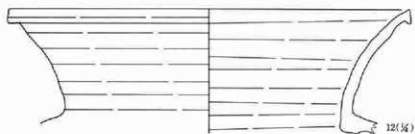
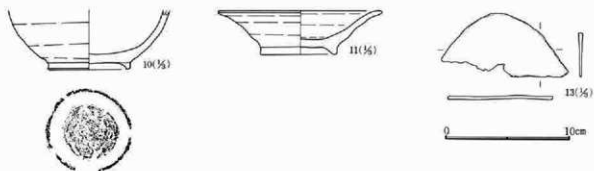
竈は、東壁の中央よりやや南寄りの位置に構築されている。左右の袖石はいずれも埋設された状態で検出されており、焚き口部は壁の内部に位置する。また燃焼部も大部分が壁の内側になり、わずかな張り出しがあるにとどまる。焚き口部の幅40cm、張り出し方向は焚き口部から70cmを測る。火床面は摺鉢状にやや窪み若干焼土化している。なお燃焼部中央には支脚が遺存している。

遺物は、竈内の他、北壁中央際で変形部の破片が多数出土している。他は覆土中のものが多い。



第24図 46号住居跡出土遺物実測図(1)

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第25図 46号住居跡出土遺物実測図(2)

第3章 平安時代の遺構と遺物

46号住居跡出土遺物観察表

採回番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状況 残存状況	法量(cm) (容 積)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備 考
24-1 60	土 師 器 壺	床面+6 〜7 片残存	口(29.0) 底 ー 高(8.0)	①砂粒、雲母 ②酸化焙、やや硬質 ③褐色〜暗褐色	不明瞭な「コ」字状口縁。口縁部横撫で。胴部 外面磨削り。内面荒撫で。	内面に付着物
24-2	土 師 器 壺	床面+12 片残存	口(17.4) 底 ー 高(6.5)	①砂粒 ②酸化焙、やや硬質 ③(外)明赤褐色 (内) によい黄褐色	「コ」字状口縁。口縁部横撫で。胴部 外面磨削り。内面荒撫で。	
24-3 60	須 恵 器 瓶	甕内へ覆 胴部片残 存	口 ー 底 ー 高(7.8)	①砂粒、白色細粒 ②還元焙、硬質 ③灰色	胴部上部は丸く膨らみ、やや外傾する胴部へ屈曲して移行する。内外面ともにロクロ整形。輪横撫で一部に認められる。	
24-4 60	土 師 器 坏	床面 片残存	口 12.2 底(6.7) 高 3.8	①砂粒 ②酸化焙、やや硬質 ③によい赤褐色〜明赤褐色	体部は直線的に立ち上がり、端部はわずかに外反する。口縁部強い横撫で。体部外面指頭痕を残す。内面横撫で。底部磨削り。	
24-5	須 恵 器 坏	甕内へ覆 土中 片残存	口(13.6) 底 ー 高(3.9)	①砂粒 ②酸化焙気味、やや硬質 ③によい黄褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。	
24-6	須 恵 器 坏	床面+10 片残存	口(13.2) 底 ー 高(2.9)	①砂粒 ②酸化焙気味、やや軟質 ③灰白色 一部黒炭	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。	
24-7 60	須 恵 器 高台付埴	貯蔵穴内 高台部片 欠損	口 14.4 底 6.7 高 5.5	①砂粒 ②還元焙気味、やや軟質 ③灰白色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端部は緩やかに外反する。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。付高台。	部分的に黒炭あり
24-8	須 恵 器 高台付埴	甕内へ 高台部片 残存	口(14.2) 底 6.4 高 6.0	①砂粒、白色細粒 ②酸化焙気味、やや軟質 ③によい黄褐色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端部はわずかに外反する。内外面ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。付高台。	黒炭、赤炭あり
24-9	須 恵 器 高台付埴	甕内へ 片残存	口(13.6) 底(7.1) 高 5.7	①砂粒 ②酸化焙気味、やや軟質 ③灰黄褐色 底部黒炭	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端部はわずかに外反する。内外面ともにロクロ整形。底部は回転糸切り無調整。付高台。	底部内面に黒炭
25-10 60	須 恵 器 高台付埴	覆土中 上半分欠 損	口 ー 底(6.5) 高(4.7)	①砂粒 ②燻し気味、やや軟質 ③燻し部分以外は浅黄色〜によい黄褐色	体部は緩やかに内湾して立ち上がる。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。付高台。	
25-11 60	須 恵 器 台付皿	甕内へ ほぼ完形	口 13.2 底 6.1 高 3.5	①砂粒、雲母 ②酸化焙気味、やや軟質 ③によい黄褐色	体部は大きく開き、口縁部は水平に近く外反する。内外面ともにロクロ整形。底部無で調整。付高台。	
25-12 60	須 恵 器 口縁〜底 部の一部	甕内へ 口縁〜底 部の一部	口(42.6) 底 ー 高 13/12	①砂粒〜小石 ②酸化焙、硬質 ③によい褐色〜藍色	口縁部は胴部で屈曲して外反、端部は突帯状。胴部は上位で張り長胴。口縁部内外面ロクロ整形。胴部内外面叩き整形。内面一部横撫で。	俵の付着等から破片状態で甕の補強材への転用
25-13 91	用途不明 鉄 製品	床面	最大縦10.2 最大幅 4.7 厚さ16~17	重量(38)	実測図左下部分は欠損するが、他は製品の形状を残す。残存部は刃部をなぞき、図上側の湾曲部が最も厚い。	

47号住居跡 (第26図、図版12)

本住居跡は、第4次調査区東側の平坦部にあり、34-32・33グリッドに位置する。

重複関係としては、先行する44号住居跡(古墳後期)を掘り込んでいる状況が確認されている。

住居の掘り込みは、44号住居跡の覆土内に施されているため確認は困難であった。また、残存状況も極めて不良である。

住居の範囲は床面や遺物の分布状況から、南北3m30cm、東西2m40cmを測る南北方向に長辺をもつ長方形を呈するものと判断した。主軸方向はN-90°-Eを示す。壁はわずかに数cmほどが認められるにすぎず、部分的には検出されなかった。床面は不明瞭であり、多くは攪乱等の影響を受けているようである。なお、貯蔵穴や、柱穴、周溝は確認されなかった。

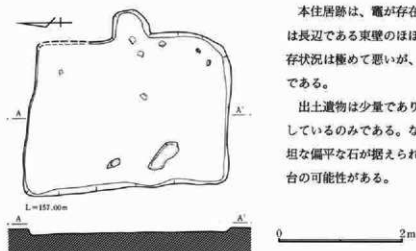
掘り方や覆土は、判然としなかった。



## 第2節 竪穴住居跡と出土遺物

本住居跡は、竈が存在することから認識された。竈は長辺である東壁のほぼ中央部に構築されている。残存状況は極めて悪いが、火床面の焼土化は非常に顕著である。

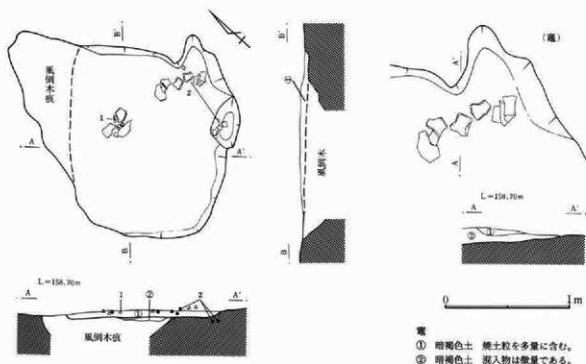
出土遺物は少量であり、羽釜の破片がわずかに出土しているのみである。なお西壁際の床面には上面が平坦な偏平な石が据えられた状況で出土しており、作業台の可能性はある。



第26図 47号住居跡実測図

### 48号住居跡 (第27・28回、図版12・61)

本住居跡は、第4次調査区の南東部の、北側への緩やかな傾斜部にあり、27-35-36グリッドに位置する。他の住居跡との重複関係は認められないが、本住居跡の下部には風倒木痕が存在する。住居の掘り込みは、主に風倒木痕の擾乱上に施されており、確認は困難であった。北壁は判然としなかったが、南北3m、東西2m60cmのやや隅丸の長方形を呈し、主軸方向はN-42°-Eを示す。残存状況は不良であり、壁は最大でも9cmを検出したにとどまる。床面はわずかに貼り床が施されており、全体に堅く締まっており殊に中央部は堅



- ① 暗褐色土 焼土粒を多量に含む。  
② 暗褐色土 粘性の強い貼り床面。

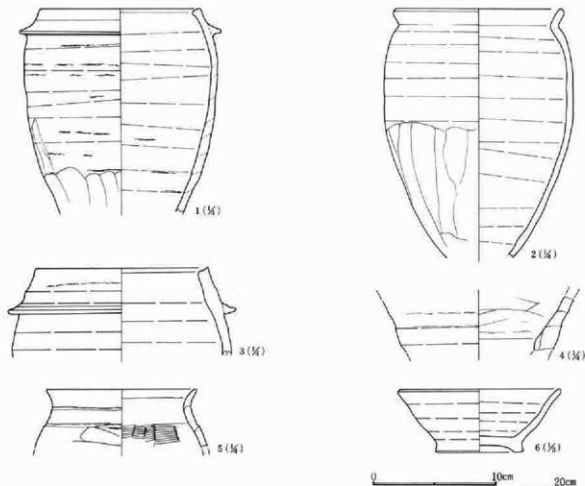
第27図 48号住居跡実測図

### 第3章 平安時代の遺構と遺物

敵である。貯蔵穴は南東隅の壁際に設けられ、径83cm×42cmの楕円形を呈し、深さは20cmである。なお柱穴や周溝は検出されなかった。掘り方や、覆土は風倒木痕の關係で不明瞭である。

竈は南東コーナーに寄った位置に構築されている。残存状況は不良で詳細は不明だが、燃焼部は壁の内外にわたると考えられる。火床面はわずかに焼土化している。

遺物は、竈周辺の他に床面中央北寄りの位置で、羽釜や甕が出土している。



第28図 48号住居跡出土遺物実測図

48号住居跡出土遺物観察表

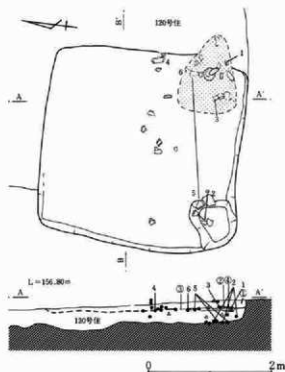
検出番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備 考
28-1 61	須恵器 羽 釜	床面+8 %残存	口(17.1) 底 — 高(22.0)	①砂粒~小石 ②還元焙気味、やや軟質 ③灰白色 一部黒変	口縁部は短く内傾し端部は面取り。胴はやや下方を向く。輪横痕を残す。内外面ロクロ整形。胴下部は置刷り。	
28-2 61	須恵器 甕	竈内~貯 蔵穴内 %残存	口(17.8) 底 — 高(26.5)	①砂粒~小石 ②酸化焙気味、やや軟質 ③浅黄褐色~におい黄褐色	口縁部は「く」字に屈曲して短く外反。口縁部横痕で、胴部 外面上半部・内面ロクロ整形。外面下半部置刷り。	

採回番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状況 残存状況	法量(cm) (長)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備 考
28-3 61	須恵器 羽 蓋	覆土中 瓦残存	口(18.5) 底 — 高 (9.4)	①砂粒 ②酸化焙気味、やや軟質 ③浅黄褐色	口縁部はやや肥厚して内傾する。端部は面取り。踵は丁寧に張り付けられやや下方をむく。内外面ともにクロコ整形。	内面に付着物
28-4	須恵器 甕	覆土中 瓦残存	口 — 底(15.7) 高 (5.4)	①砂粒 ②酸化焙気味、やや硬質 ③オリーブ褐色	胴下部は「ハ」字状に広がる。輪横線を残す。内外面ともにクロコ整形。	
28-5	土師器 甕	覆土中 瓦残存	口 16.0 底 — 高 (6.2)	①砂粒 ②酸化焙、やや硬質 ③にょい赤褐色～明赤褐色	不明瞭な「コ」字状口縁。「コ」字屈曲部に太い寛骨の沈線。口縁部横断で、胴部 外面張り有り。内面直施で。	
28-6 61	須恵器 高台付埴	覆土中 瓦残存	口(13.0) 底 7.0 高 (5.0)	①砂粒、黄母 ②還元焙気味、やや軟質 ③灰白色～灰オリーブ色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反する。内外面クロコ整形(左回転)。底部は回転糸切り無調整。付高台。	一部横し状を呈する

## 50号住居跡 (第29～31図、図版12・61・92・97)

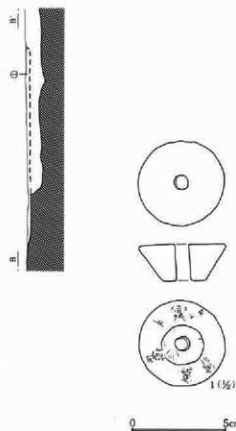
本住居跡は、第4次調査区東側の平坦部にあり、34・35-33・34グリッドに位置する。重複関係としては、先行する120号住居跡(奈良)の北西部、および101号住居跡(平安)の竈部分を掘り込んで構築されている状況が確認された。

住居の掘り込みのほとんどは、120号住居跡の覆土中に施されており、また残存状況が極めて不良であることから、確認は困難であった。竈部分の焼土範囲や遺物出土状況から、本住居は南北3m17cm、東西3mのほぼ正方形を呈するものと考えられ、主軸方向はN-100°-Eを示す。壁は明瞭に確認された西壁で10cm程度で



- ① 暗褐色土 多量のローム粒、炭化粒、微量の焼土粒を含む。  
② 灰層  
③ 暗褐色土 微量のローム粒を含む。  
④ 焼土層

第29図 50号住居跡実測図



第30図 50号住居跡出土遺物実測図(1)

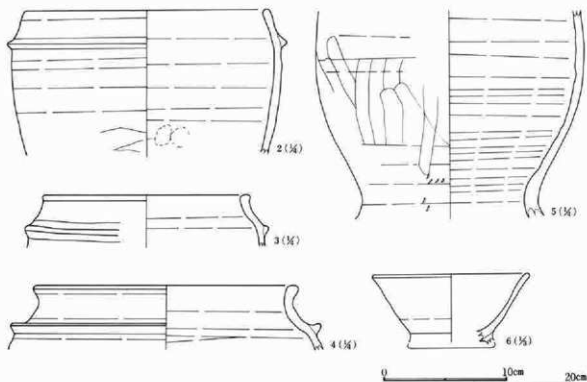
### 第3章 平安時代の遺構と遺物

ある。床面は貼り床は施されておらず軟弱で判然としなかった。貯蔵穴は、南西コーナー部分に設けられており、60cm×80cmのやや不整な円形を呈する。深さは13cmを測る。なお、柱穴、周溝は検出されなかった。

覆土はわずかに残存する程度で、堆積状況は窺えない。

竈は東南コーナーに寄った位置に築かれており、多量の灰および焼土の分布が認められた。残存状況が不良なため竈の形状・規模等は不明な点が多い。

遺物は、竈周辺と貯蔵穴の周辺に集中している。竈の掘り方部分においては、「八田郷 八田郷 八田郷家郷」の線刻を有する石製紡錘車が出土しているが、出土状況に関しては検討の余地が残る。



第31図 50号住居跡出土遺物実測図(2)

50号住居跡出土遺物観察表

押収番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備 考
30-1 92-97	石 製 品 紡 錘 車	電掘り方 内か 完形	径 4.56/2.33 厚 1.94 孔径0.7 重49.2		断面は台形。表面は丁寧に研磨されており、光沢をもつ。黒褐色。同心円状の使用痕あり 下面も磨滅。孔から8mmは磨滅でやや窪む。	滑石質の蛇紋岩 線刻あり
31-2	須 恵 器 羽 釜	貯蔵穴内 5/6残存	口(26.0) 底 — 高(15.2)	①砂粒～小石 ②酸化焰、やや硬質 ③よじり褐色～橙色	口縁部は胴部から緩やかに内湾し、端部は丸くおさめる。脚は断面三角形の使用痕あり 下面も磨滅。孔から8mmは磨滅でやや窪む。	
31-3	須 恵 器 羽 釜	床面+13 5/6残存	口(22.2) 底 — 高(5.5)	①砂粒～小石、石英 ②酸化焰、やや軟質 ③褐色～明赤褐色	口縁部は両曲して内傾する。端部は面取りされやや外反する。脚は断面三角形で低い。内外面ともにロクロ整形。	
31-4 61	須 恵 器 羽 釜	床面+13 ～掘り方 中5/6残存	口(28.4) 底 — 高(6.7)	①砂粒～小石 ②酸化焰、やや硬質 ③明赤褐色 大半が黒炭	口縁部は大きく内傾し、端部は強く外反する。脚は断面三角形。内外面ともにロクロ整形。丁寧な造り。	
31-5	須 恵 器 甌	床面+13 ～掘り方 中5/6残存	口 — 底 — 高(21.6)	①砂粒～小石 ②酸化焰、やや硬質 ③褐色～明赤褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。外面下部はさらに寛輪で、爪型の押圧あり。	

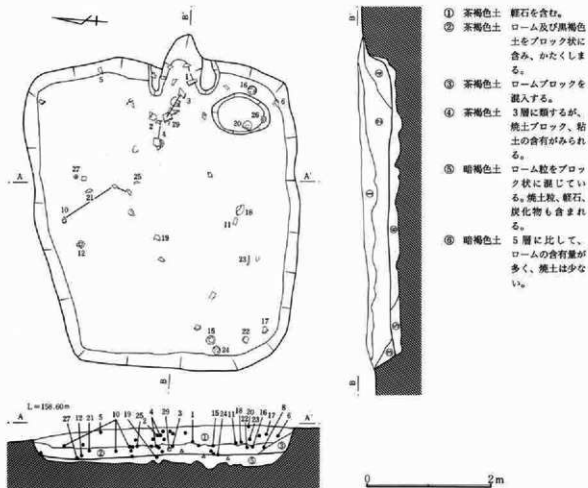
## 第2節 竪穴住居跡と出土遺物

探跡番号 図版番号	土器類別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (#)	①粘土 ②焼成 ③色調	器形・整・成形技法の特徴	備考
31-6	須恵器 高台付埴	床面+13 瓦残存	口(12.5) 底一 高(5.3)	①砂粒、雲母少量 ②酸化鉛気味、やや軟質 ③よい黄褐色 一部黒変	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。付高台。	

## 75号住居跡 (第32~36図、図版13・61・62・91・92・96)

本住居跡は、第4次調査区南東部の北側へ向かう緩傾斜部にあり、26・27-33・34グリッドに位置する。他の住居跡との重複関係は認められない。

住居の掘り込みは黄褐色ローム層におよび、残存状況は良好である。東西4m85cm、南北4m38cmの規模をもつが、西壁はやや短く平面形は細長い台形状を呈する。主軸方向は、N-88°-Eを示す。壁はやや開き気味の部分もあるが全体としてはほぼ垂直に立ち上がり、最大で39cmが残存している。床面は、貼り床が施されており叩き締められているが、周辺部はやや軟弱である。貯蔵穴は南東コーナー一部分に設けられており、径94cm×66cmの楕円形を呈し、深さは13cmと浅い。なお柱穴、周溝は検出されなかった。



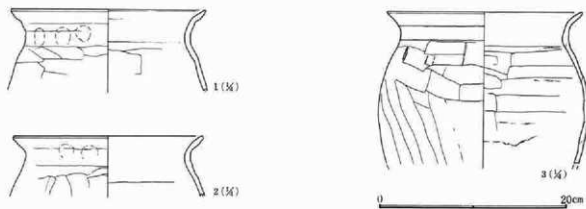
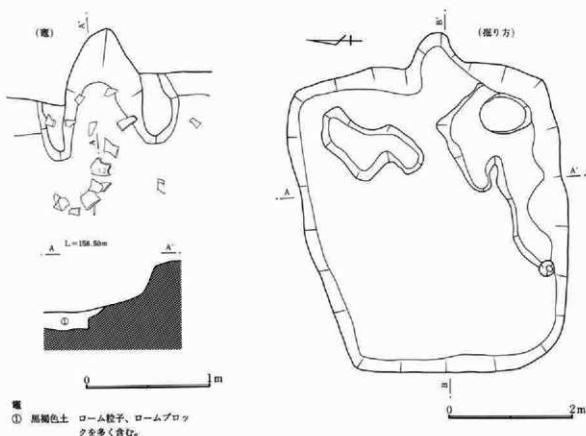
第32図 75号住居跡実測図(1)

### 第3章 平安時代の遺構と遺物

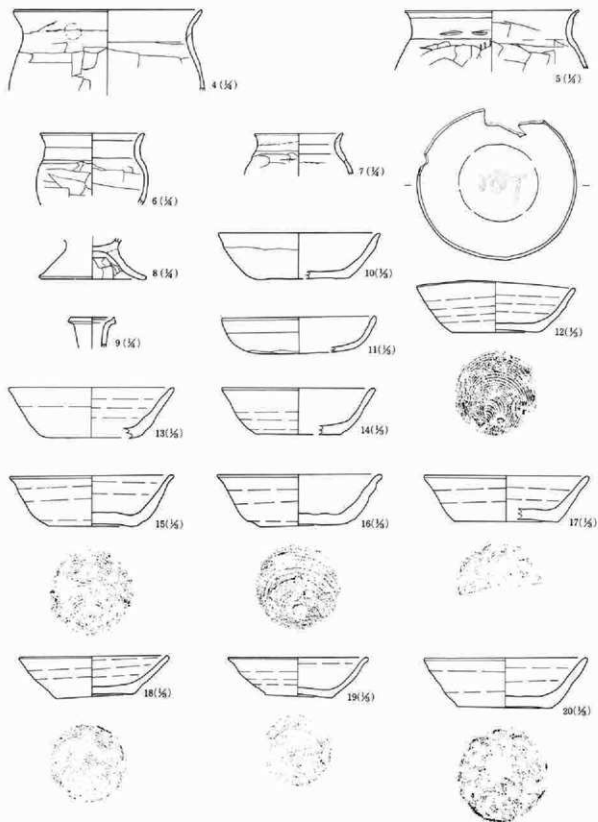
掘り方面には小さな凹凸と不定型の窪みは見られるが、明瞭な形状をもつ土坑は掘り込まれていない。覆土は、3層に分層され自然堆積状況を示している。

竈は東壁のほぼ中央部に構築されている。焚き口部および燃焼部はほぼ壁の内側に位置する。暗褐色粘質土で築かれた両袖部分が残存し、焚き口幅54cm、煙道方向90cmを測る。燃焼部の焼土化はさほど顕著ではなく、また支脚等の残存は認められなかった。

出土遺物は、埴類は竈内とその周辺で、埴類は貯蔵穴周辺と南西コーナー際に多い。覆土中を含め破片数は土師器埴1,130点、埴69点で、須恵器埴・埴類は31点である。石製紡錘車、鈎帯具、刀子も出土している。

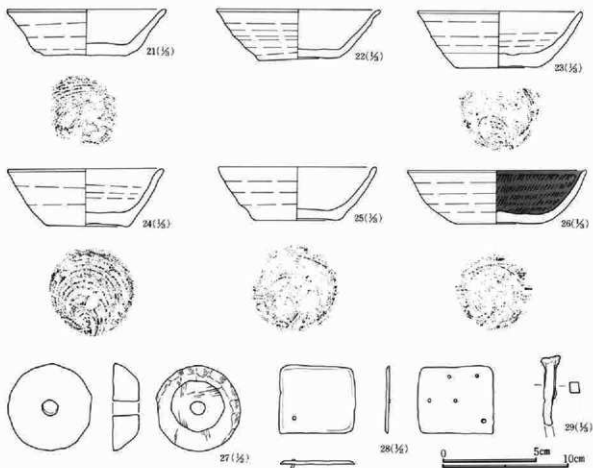


第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第35図 75号住居跡出土遺物実測図(2)

第3章 平安時代の遺構と遺物



第36図 75号住居跡出土遺物実測図(3)

75号住居跡出土遺物観察表

押図番号 図版番号	土器類別	出土状況 残存状況	法量(cm) (K)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整・成形法の特徴	備考
34-1 61	土師器 壺	甕内 瓦残存	口(20.8) 底— 高(8.5)	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③橙色~明赤褐色	「コ」字状口縁。内面の壁はやや固い。口縁部は横撫で。胴部 外面直削り。内面直撫で。	
34-2 61	土師器 壺	甕内~ 土中 瓦残存	口(20.2) 底— 高(6.3)	①砂粒、雲母少量 ②酸化焰、やや軟質 ③橙色	「コ」字状口縁だがやや不明瞭。口縁部横撫で。胴部 外面直削り。内面直撫で。	
34-3 61	土師器 壺	床面+13 瓦残存	口(21.0) 底— 高(16.0)	①砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③(外)にふい赤褐色 (内)暗赤褐色	「コ」字状口縁。胴上部に最大径を置く。口縁部横撫で。胴部 外面直削り。内面直撫で。内面下部に接合痕。	胴部外面に粘土付着
35-4	土師器 壺	覆土中 瓦残存	口(20.2) 底— 高(8.5)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③橙色	「コ」字状口縁だがやや不明瞭。口縁部横撫で。胴部 外面直削り。内面直撫で。	
35-5	土師器 壺	床面+38 瓦残存	口(18.6) 底— 高(6.3)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③明赤褐色	「コ」字状口縁だがやや不明瞭な部分あり。口縁部横撫で。胴部 外面直削り。内面直撫で。	
35-6	土師器 小形壺	甕内~ 土中 瓦残存	口(11.1) 底— 高(6.2)	①小石、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③明赤褐色 口縁一部黒変	「コ」字状口縁。胴上部は丸く膨らむ。口縁部は横撫で。胴部 外面直削り。内面直撫で。	
35-7 61	土師器 壺	床面+20 瓦残存	口(9.4) 底— 高(4.3)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③にふい赤褐色	「コ」字状口縁。胴上部が狭る。口縁部に輪横撫。口縁部横撫で。胴部 外面直削り。内面直撫で。	



## 第2節 竅穴住居跡と出土遺物

押印番号 図版番号	土器類別 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (重)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
35-8 61	土師器 小形 台付壺	床面+10 台部残存	口 一 底 8.6 高 3.3	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③灰色～明赤褐色	台部の裾は反って開く。内外面ともに横溝で が施される。	
35-9	須恵器 瓶	覆土中 片残存	口 4.7 底 一 高 3.2	①砂粒少量 ②還元焰、硬質 ③オリーブ黒色	口縁部はやや外反して立ち上がった後に強く 外反し、端部は上部へつまみあげた口縁帯を 形成する。	内外面ともに釉 がかかる
35-10 61	土師器 環	床面+9 ~14 片残存	口 12.8 底 7.5 高 3.6	①砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③灰色	体部は直線的に立ち上がり、口縁部強い横 溝で、内部横溝で。底部側で調整。	
35-11 61	土師器 環	床面+14 片残存	口(12.4) 底 一 高 2.9	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい赤褐色 一部黒炭	体部はやや内湾気味に立ち上がる。底部は平 底気味になるが、口縁部および内面横溝で。 体部下半部削り後側面無調整。底部削り無。	
35-12 61・96	須恵器 環	床面+5 口縁部一 部欠損	口 12.6 底 7.0 高 3.7	①砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰白色～灰オリーブ色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部 はわずかに外反する。内外面ともに口クロ整 形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	底部内面に黒書 「町」
35-13 61	須恵器 環	覆土中 片残存	口(13.2) 底 (7.5) 高 (3.9)	①砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰白色	体部はほぼ直線的に立ち上がる。内外面とも に口クロ整形。	
35-14 61	須恵器 環	覆土中 片残存	口(15.2) 底 (7.0) 高 3.7	①砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰白色	体部はほぼ直線的に立ち上がる。内外面とも に口クロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無 調整。	
35-15 61	須恵器 環	床面+13 ほぼ完整	口 13.0 底 7.0 高 4.0	①砂粒～小石、石英 ②酸化焰、硬質 ③内面と 底部赤褐色 (外)黒色化	体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁端部は 小さく外反する。内外面口クロ整形(右回 転)。底部は回転糸切り無調整。上げ底気味。	外側黒色処理 16・17と類似
35-16 62	須恵器 環	床面+16 ほぼ完整	口 15.1 底 7.0 高 4.1	①砂粒～小石、石英 ②酸化焰、硬質 ③(内)赤 褐色 (外・底)黒色化	体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁端部は 小さく外反する。内外面ともに口クロ整形(右 回転)。底部は回転糸切り無調整。	
35-17 62	須恵器 環	床面+31 片残存	口(13.2) 底 (8.4) 高 (3.6)	①砂粒～小石、石英 ②酸化焰、硬質 ③(内・底) 赤褐色 (外)黒色化	体部はほぼ直線的に立ち上がる。内外面とも に口クロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無 調整。	
35-18 62	須恵器 環	床面+18 完整	口 11.8 底 6.1 高 3.4	①砂粒～小石 ②還元焰、硬質 ③灰色	体部はほぼ直線的に立ち上がる。内外面とも に口クロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無 調整。上げ底気味。	
35-19 62	須恵器 環	床面 完整	口 11.2 底 5.4 高 3.3	①砂粒～小石、石英 ②還元焰、硬質 ③灰色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部 は小さく外反する。内外面口クロ整形(右回 転)。底部は回転糸切り無調整。上げ底気味。	
35-20 62	須恵器 環	貯蔵穴内 完整	口 13.0 底 7.5 高 4.0	①砂粒 ②還元焰気味、やや硬質 ③灰白色	体部はやや外側へ反り気味に立ち上がる。内 外面ともに口クロ整形(右回転)。底部は回転 糸切り無調整。	器面の磨減顯著
35-21 62	須恵器 環	床面 片残存	口(12.6) 底 (6.6) 高 3.6	①砂粒～小石 ②酸化焰、やや硬質 ③明黄褐色	体部はやや外側へ反り気味に立ち上がる。内 外面ともに口クロ整形(右回転)。底部は回転 糸切り無調整。	器面磨減
35-22 62	須恵器 環	床面+12 片残存	口(13.0) 底 6.3 高 4.0	①砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰白色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部 は小さく外反する。内外面ともに口クロ整形 (右回転)。底部は回転糸切り無調整。	器面磨減
35-23 62	須恵器 環	床面+20 片残存	口 13.1 底 7.0 高 4.5	①砂粒～小石 ②還元焰気 味、硬質 ③灰白色～灰オ リーブ色 (内)にぶい橙色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面と ともに口クロ整形(右回転)。底部は回転糸切 り無調整。	器面磨減
35-24 62	須恵器 環	床面+6 完整	口 12.4 底 6.5 高 4.5	①砂粒～小石 ②還元焰、やや硬質 ③灰白色～灰色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面と ともに口クロ整形(右回転)。底部は回転糸切 り無調整。	器面磨減
35-25 62	須恵器 環	床面 片残存	口(12.6) 底 6.7 高 4.2	①砂粒 ②還元焰、体部外面磨し ③磨し面以外は灰白色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面と ともに口クロ整形(右回転)。底部は回転糸切 り無調整。	
35-26 62	須恵器 壺	壺内 完整	口 14.4 底 6.5 高 4.2	①砂粒～小石 ②酸化焰、 硬質 ③(外)にぶい黄褐色 内面→口縁部黒色処理	体部は緩やかに内湾して立ち上がる。外面口 クロ整形(右回転)。内面磨き。底部は回転 糸切り無調整。	
35-27 92	土製品 紡錘車	床面 完整	径 4.59/2.94 厚 1.36 重 42.3 孔径0.72		断面はやや低い台形。穿孔は上部から。広面 は同心円状の磨減がみられ、孔から8mmの磨 面は殊に顯著。下面もやや磨減。	片割りの強い蛇 紋岩

### 第3章 平安時代の遺構と遺物

採掘番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状況 残存状況	法量(cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備 考
36-28 91	青銅製品 銚 哥 貝 蛇 尾	床面+3 完形	辺 3.5×4.1 厚 0.55 重14.6		ほぼ正方形を呈するが、一辺はやや丸味をもつ。縁辺は斜めに調整。2つの突起が残存するが、他は錆化で、やや不明瞭。	
36-29 91	鉄 製 品 釘	覆土中	長 (5.4) 幅 0.8 重 15.2		断断面はほぼ正方形。	

#### 76号住居跡 (第37～40図、図版14・62・63)

本住居跡は、第4次調査区南東部の北側へ向かう緩傾斜部にあり、25・26—34グリッドに位置する。

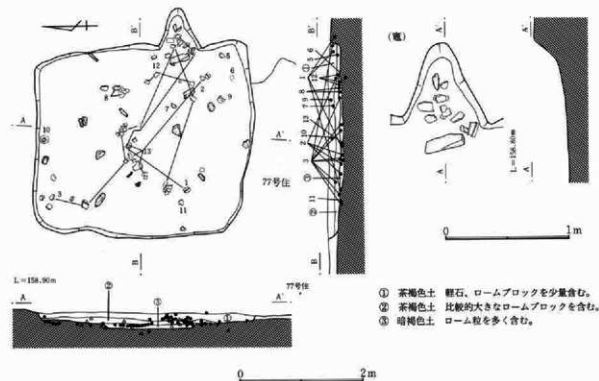
重複関係としては、先行する77号住居跡（古墳後期）の北東部を壊して築かれている状況が確認されている。

住居の掘り込みは黄褐色ローム層に及び、残存状況は比較的良好である。壁はほぼ垂直気味に立ち上がり、最大で28cmが残存している。平面形はわずかに南北方向に長い長方形を呈し、規模は東西3m48cm、南北3mを測る。床面は、床下の土坑部分を除くと貼り床は施されており、全体的に叩き締められているが、中央部は特に堅緻である。なお、柱穴、周溝は検出されなかった。

床下の土坑は床面中央部に密集しており、径110cm×130cm、径140cm×120cmの楕円形の浅い土坑の重複と、これらに切られた土坑の一部が確認された。

覆土は、2層に分層されており、自然堆積状況を示すものと考えられる。

竈は、長辺である東壁の中央よりやや南によった位置に構築されている。焚き口部はほぼ壁の位置に当た

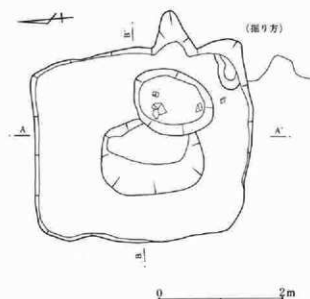


第37図 76号住居跡実測図(1)

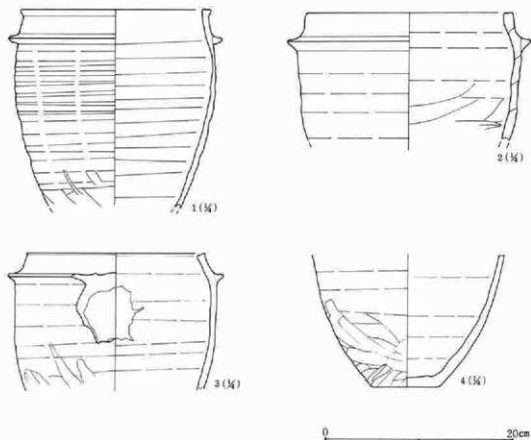
第2節 竪穴住居跡と出土遺物

るとみられ、その前部には天井石が転落した状況で出土している。焚き口部の幅は60cmを測る。燃焼部は壁の外側へ張り出しており、張り出し長は66cmである。袖石・支脚等は認められなかった。

出土遺物は、羽釜と坏・埴類が主であり、竈内の他に住居内全域から出土している。土器は破片状態で散乱しており、接合関係は住居内に広がっている。羽釜(3)は内面から打ち欠かれたような在り方を示す。住居廃絶直後の廃棄行為が窺われる。

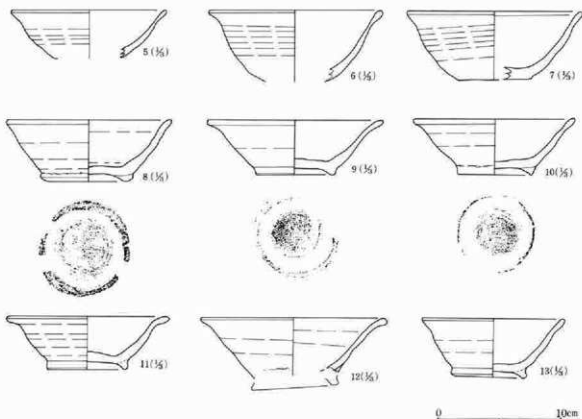


第38図 76号住居跡実測図(2)



第39図 76号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物



第40図 76号住居跡出土遺物実測図(2)

76号住居跡出土遺物観察表

調査番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
39-1 62	須恵器 羽蓋	床面周辺 片残存	口(20.3) 底 一 高 20.9	①砂粒～小石 ②酸化焰気味、やや軟質 ③灰黄色 大半が黒変	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。 内外面ともにロクロ整形。胴下部は旋削り。	
39-2 62	須恵器 羽蓋	床面周辺 片残存	口(22.0) 底 一 高(13.4)	①砂粒～小石 ②酸化焰気 味、やや軟質 ③(外)浅黄 色 一部黒変 (内)明褐色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。 内外面ともにロクロ整形。内面下部は旋削り。	内面に付着物
39-3 62	須恵器 羽蓋	床面 胴下半部 欠損	口 19.0 底 一 高(14.5)	①砂粒～小石 ②還元焰気味、やや軟質 ③灰白色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り で下方を向く。内外面ともにロクロ整形。胴 下半部旋削り。	内部からの破壊 による穿孔あり
39-4 62	須恵器 羽蓋	甕内～覆 土中 片残存	口 一 底(6.7) 高(13.9)	①砂粒～小石 ②還元焰気味、やや軟質 ③灰白色～灰色	胴下半部はわずかに内湾して立ち上がる。内 外面ともにロクロ整形。胴下半部は旋削り。 底部は旋削り。	
40-5	須恵器 埴	床面 片残存	口(10.3) 底 一 高(3.7)	①砂粒 ②還元焰気味、やや硬質 ③灰オリーブ色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端 部はわずかに外反する。内外面ともにロクロ 整形。	
40-6	須恵器 埴	掘り方中 片残存	口(14.0) 底 一 高(5.6)	①砂粒、白色細粒 ②還元焰気味、やや軟質 ③灰白色 一部黒変	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端 部はわずかに外反する。内外面ともにロクロ 整形。	
40-7 62	須恵器 埴	床面+10 片残存	口(14.0) 底(5.8) 高(5.4)	①砂粒、黄母 ②焼し焼成、やや軟質 ③オリーブ黒色～黒色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端 部はわずかに外反する。内外面ともにロクロ 整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
40-8 62	須恵器 高台付埴	床面 片残存	口 13.2 底 7.3 高 4.9	①砂粒 ②還元焰気味、やや軟質 ③灰白色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部 は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。 底部は回転糸切り無調整。付高台。	

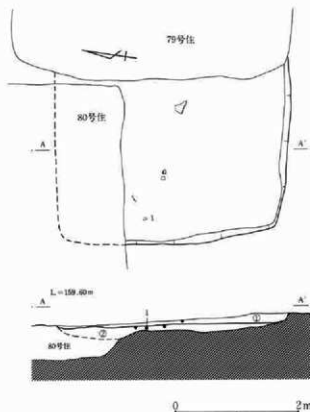
第2節 竪穴住居跡と出土遺物

縄文番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
40-9 62	須恵器 高台付埴	床面+18 与残存	口(14.0) 底(6.4) 高(4.3)	①砂粒 ②還元焰気味、やや軟質 ③灰白色 底面黒変	体部はやや内湾気味に開き、口縁端部は外反する。内外面ともにロクロ整形。底部は回転未切り無調整。付高台。	底部内外面黒変
40-10 63	須恵器 高台付埴	床面+15 完形	口12.8 底5.9 高4.5	①砂粒～小石、白色細粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端部はわずかに外反する。内外面ともにロクロ整形。底部は回転未切り無調整。付高台。	
40-11	須恵器 高台付埴	床面 与残存	口(13.0) 底6.4 高4.2	①砂粒～小石 ②還元焰気味、やや軟質 ③灰白色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端部は外反する。内外面ともにロクロ整形。底部無。付高台。	
40-12 63	須恵器 高台付埴	床面 高台部欠 損	口14.6 底— 高4.8	①砂粒～小石、石英 ②還元焰気味、やや軟質 ③灰白色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部はやや肥厚して外反する。内外面ともにロクロ整形。	
40-13 63	須恵器 高台付埴	床面 完形	口11.4 底6.1 高4.6	①砂粒～小石 ②酸化焰気味、やや軟質 ③黄灰色 瓦位黒変	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端部はわずかに外反する。内外面ともにロクロ整形。底部は回転未切り無調整。付高台。	瓦は、僅し焼成状で、黒変している

78号住居跡 (第41・42図、図版14・63)

本住居跡は、第4次調査区南東部の北側へ向かう緩傾斜部にあり、23・24-33グリッドに位置する。

重複関係としては、北側は先行する80号住居跡(平安)の覆土を掘り込み、また東半部ははや後出する79号住居跡(平安)によって破壊されている状況が確認されている。



- ① 茶褐色土 ロームブロック、軽石を含む。  
② 1層に類するが、焼土粒を多く含む。

第41図 78号住居跡実測図

住居の掘り込みは黄褐色ローム層に及ぶが残存状況は不良で、さらに重複関係から全体像は把握されなかった。しかし、南北方向はほぼ3m75cmを測るものとみられる。東西方向は2m60cmが確認できる。壁はやや開き気味の立ち上がり部が残存し13cmを測る。床面は貼り床が施されているが、全体に軟弱であり、殊に80号住居跡重複部は不明瞭であった。貯蔵穴や柱穴、周溝は検出されなかった。

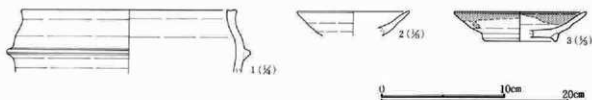
掘り方面はわずかな凹凸が認められる程度である。

覆土は、わずかに残存するのみで堆積状況は不明である。

竈は検出されなかったが、北壁もしくは東壁に位置するものと考えられる。

遺物は、羽釜、皿の小破片が少量出土したのみである。

### 第3章 平安時代の遺構と遺物



第42図 78号住居跡出土遺物実測図

#### 78号住居跡出土遺物観察表

押図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
42-1	須恵器 羽釜	床面+2 3/4残存	口(23.0) 底— 高(6.6)	①砂粒、白色細粒 ②酸化 焰、硬質 ③(外)橙色~明 褐色 (内)ぶい褐色	口縁部はわずかに内傾し、底部は強い面取り。 脚は断面台形に近い。内外面ともにロクロ整 形。	
42-2	須恵器 皿	覆土中 1/4残存	口(9.0) 底— 高(1.9)	①砂粒 ②酸化焰、やや硬 質 ③(外)ぶい黄褐色 (内)ぶい黄褐色	体部はやや内湾気味に開く。内外面ともにロ クロ整形。	
42-3 63	灰釉陶器 高台付皿	覆土中 1/4残存	口(10.6) 底(5.6) 高 2.3	①緻密 ②還元焰、黴紋 ③灰白色	体部はやや内湾気味に開く。内外面ともにロ クロ整形。高台部は低く断面三角形。	

#### 79号住居跡（第43~46図、図版15・63・92・95・97）

本住居跡は、第4次調査区南部のほぼ平坦面にあり、24-33・34グリッドに位置する。

重複関係としては、先行する78号住居跡（平安）の東半部を破壊して構築されている状況が確認されてい

る。住居の掘り込みは、黄褐色ローム層に施されており、明瞭に確認された。平面形は、東西4m58cm、南北4m64cmを測るほぼ正方形を呈し、主軸方向はN-60°-Eを示す。壁はほぼ垂直気味に立ち上がり、最大24cmが残存している。床面は平坦面をなし、貼り床が施されており全体的に堅く締まっており、特に中央部から電周辺部にかけては堅緻である。床面上には貯蔵穴や柱穴、周溝は検出されなかった。

掘り方は、緩やかな起伏をもち、床面中央部周辺には直径70cmから1m程度の円形もしくは不整形を呈する土坑が掘り込まれている。また、南西コーナー部分にも直径65cmの土坑が検出されている。

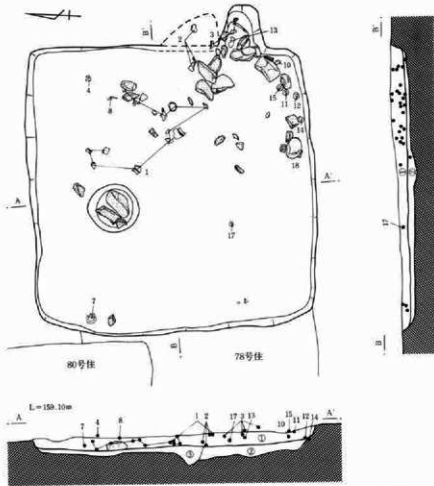
覆土は、1層のみ確認されたにとどまり堆積状況は不明だが、自然堆積と考えられる。

竈は、東壁に2カ所確認されており、造り変えが行われたものとみられる。切り合い関係はやや不明瞭ではあるが、諸状況から新旧を判断した。

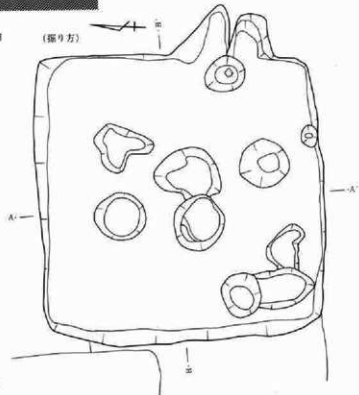
先行する竈は、東壁の中央部からやや南によった位置に築かれている。石組の構造をとり袖石や支脚が埋設された状況で残存している。焚き口部は壁際的位置になり幅36cm、燃焼部は突出し、張り出し長は60cmである。燃焼部は焼土化が著しい。支脚を残した状況で造り変えを行っていることは注意される。

後出する竈は、旧竈の南側に隣接して構築されている。やはり石組の構造であり、構築材として使用された石が竈内部から竈前部にかけて崩落した状況で多数出土している。支脚は残存しないがより最終使用の在り方を遺しているものと考えられる。焚き口部は壁際にあり旧竈同様に鳥居状の石組をなすが、左側の袖石は旧竈の右側の袖石を転用しているようである。右袖が南側に押された状況でずれており、これにともない天井石が崩れている。焚き口部の幅は36cmであり、張り出しは63cmである。火床面の焼土化は著しい。

遺物は、床面東半部に散乱して出土している。羽釜、土釜、埴などの他に、土師器の皿の出土が目立つ。なお縄文時代（中期か）の所産と考えられる窪石が出土しており、転用が行われたと考えられる。また床面上からは「八田郷 八田郷 八田郷 大」と線刻された石製紡錘車が出土しているのが特筆される。

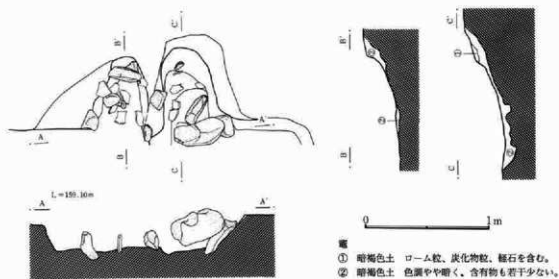


- ① 暗褐色土 ローム粒(径8mm)、炭化物、焼土粒、白色軽石を含む。粘土質。  
 ② 暗褐色土 ロームブロックを含む。  
 ③ 茶褐色土 ロームブロックを多量に混じる。

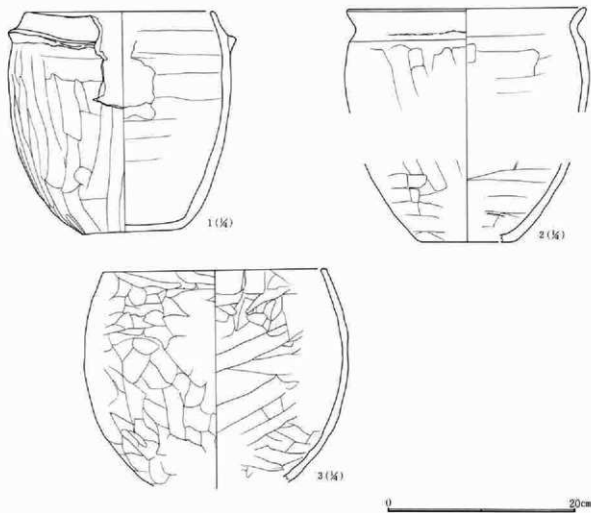


第43図 79号住居跡実測図

第3章 平安時代の遺構と遺物



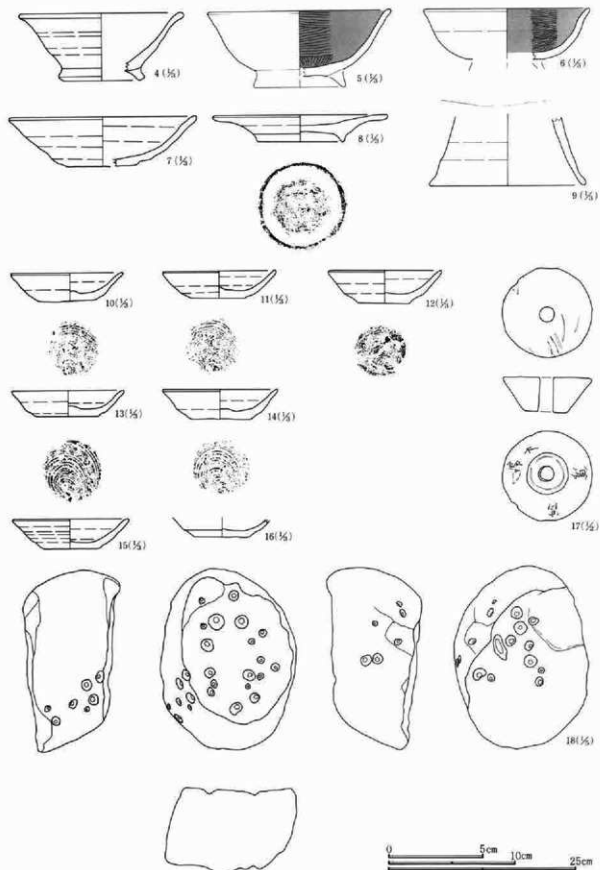
第44図 79号住居跡遺実測図



第45図 79号住居跡出土遺物実測図(1)



第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第46図 79号住居跡出土遺物実測図(2)

第3章 平安時代の遺構と遺物

79号住居跡出土遺物観察表

押出番号 図版番号	土器類別 種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (重)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
45-1 63	須恵器 羽 釜	床面～十 10に散乱 一部欠損	口 19.9 底 10.5 高 23.6	①砂粒～小石 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい褐色	やや短胴で大きな平底。口縁部はわずかに内湾。口縁部横断で。外面ロクロ整形後、削削り。内面ロクロ整形。底部横断で調整。	内面からの硬質穿孔孔。内面磨面剥落。付着物
45-2	須恵器 壺	床面 口縁・胴 下部破片	口(25.9) 底(10.2) 高—	①砂粒～小石、石英 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい黄褐色	口縁部は短く「く」字に外反。胴上部はわずかに膨らむ。口縁部横断で。胴部 外面削削り。内面置辦で。	
45-3 63	土師器 壺	甕内 瓦残存	口(24.0) 底— 高(22.5)	①砂粒～小石、石英多量 ②酸化焰、やや硬質 ③褐色 口縁一部橙褐色	胴部は緩やかに内湾して口縁部は内傾する。端部は面取り。外面は不整方向の寛削り。内面は置辦で。	内面に付着物
46-4	須恵器 高台付埴	床面+14 瓦残存	口(13.2) 底(6.8) 高(5.3)	①砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③暗オリーブ灰色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。付高台。	
46-5	須恵器 高台付埴	覆土中 瓦残存 底部欠損	口(14.8) 底(7.0) 高(5.1)	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③(外)橙褐色 (内)黒色処理	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端部はわずかに外反する。外面ロクロ整形。内面磨き調整。	
46-6 63	須恵器 高台付埴	覆土中～ 掘り方中 瓦残存	口(13.2) 底— 高(4.0)	①砂粒 ②酸化焰気味、やや硬質 ③(外)浅黄色～にぶい黄色 (内)黒色処理	体部は胴部に張りをもち緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端部はわずかに外反する。外面ロクロ整形。内面磨き調整。	
46-7 63	須恵器 坏	床面+3 ほぼ完形	口 15.0 底 5.6 高 3.9	①砂粒～小石 ②酸化焰、やや硬質 ③(外)橙褐色 (内)明赤褐色	体部はやや内湾気味に開く、口縁端部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転余切り無調整。	内面磨面剥落
46-8	須恵器 高台付皿	床面+20 瓦残存	口 14.0 底 7.0 高 2.1	①砂粒～小石、石英 ②還元焰、やや硬質 ③灰白色～灰色	体部は外面に反って大きく開く。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転余切り無調整。付高台、断面三角形。	
46-9	須恵器 高台付埴	甕内 瓦残存	口— 底(12.4) 高(5.4)	①砂粒 ②酸化焰気味、やや硬質 ③浅黄色～にぶい黄色	台部は「ハ」字に高く立ち上がり、端部は小さく外反。内外面ともにロクロ整形。	
46-10 63	須恵器 皿	床面 口縁部瓦 欠損	口 9.0 底 4.3 高 2.2	①砂粒、白色胎土 ②酸化焰、やや硬質 ③明褐色 一部黒変	体部はやや内湾気味に開く。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転余切り無調整。	内面に付着物
46-11 63	須恵器 皿	床面 完形	口 9.1 底 4.4 高 2.1	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③橙褐色	体部はやや内湾気味に開く。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転余切り無調整。	内面に付着物
46-12 63	須恵器 皿	床面 口縁部一 部欠損	口 9.0 底 4.0 高 2.6	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③明赤褐色	体部はやや内湾気味に開く。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転余切り無調整。	
46-13 63	須恵器 皿	甕内 口縁部瓦 欠損	口 9.0 底 4.8 高 2.0	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③橙褐色 一部黒変	体部はやや内湾気味に開く。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転余切り無調整。	内面に付着物
46-14 63	須恵器 皿	床面 口縁部瓦 欠損	口 9.2 底 4.7 高 2.3	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③明赤褐色	体部はやや内湾気味に開く、口縁端部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転余切り無調整。	
46-15 63	須恵器 皿	床面+12 口縁部瓦 欠損	口 9.2 底 4.5 高 2.4	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい赤褐色 一部黒変	体部はやや内湾気味に開く。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転余切り無調整。	内面に付着物
46-16 63	須恵器 皿	覆土中 底部～体 部下平	口— 底 4.2 高(1.5)	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③橙褐色	体部下半部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転余切り無調整。	
46-17 92・97	石製品 紡錘車	床面+3 完形	径 4.67/2.32 厚 1.87 重52.3 孔径φ.72		縦円形断面。表面やや研磨。表面には一条の沈線がめぐる。黒褐色。使用による磨減は弱いが、孔から3mmは強い光沢をもつ。	滑石質の蛇紋岩縁刻あり。穿孔は上方向
46-18 95	多孔石 (作業台)	床面+2	長 24.0 重6.88kg 幅 18.3 厚 13.0		上下面に加え側面にも円形磨面の窪みがある。上面は転用による磨痕、光沢部分が認められる。	縄文中期(?)の転用品

## 83号住居跡 (第47・48図、図版16・63・91・92・97)

本住居跡は、第4次調査区南東部の北側へ向かう緩傾斜部にあり、23-30・31グリッドに位置する。

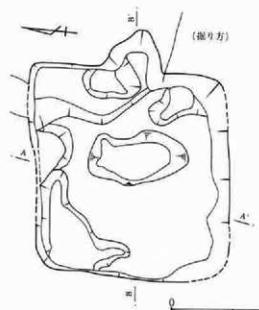
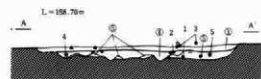
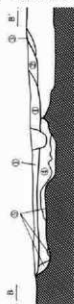
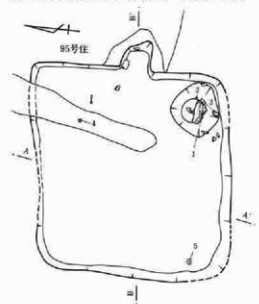
重複関係としては、北西コーナー部分で先行する95号住居跡(奈良)を破壊している状況が確認されている。

住居の掘り込みは、黄褐色ローム層に及び比較的良好な残存状況を示す。東西3m30cm、南北3m20cmのやや歪んだ正方形に近い形状で、主軸方向はN-84°-Eを示す。壁はやや開き気味に立ち上がり、21cmが残存する。

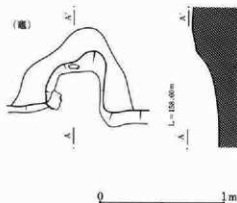
床面は、貼り床が施され全体に叩き締められているが、中央部から電周辺部は特に堅緻である。貯蔵穴は、南東コーナー部分に設けられており、径77cm×85cmのほぼ円形の形状を示し、深さは20cmを測る。なお、柱穴および周溝は検出されなかった。

掘り方面は起伏に富み、中央部には140cm×80cmの楕円形で摺鉢状の浅い掘り込みがみられる。この他、北東と北西のコーナー部分には不整形の窪みがある。

覆土は、わずかに認められたが、堆積状況は不明である。



- ① 茶褐色土 軽石、ローム粒を含む。
- ② 電
- ③ 電掘り方部
- ④ 暗褐色土 ローム粒、白色軽石を含む。
- ⑤ 明褐色土 少量のロームブロックと少量の白色軽石を含む。

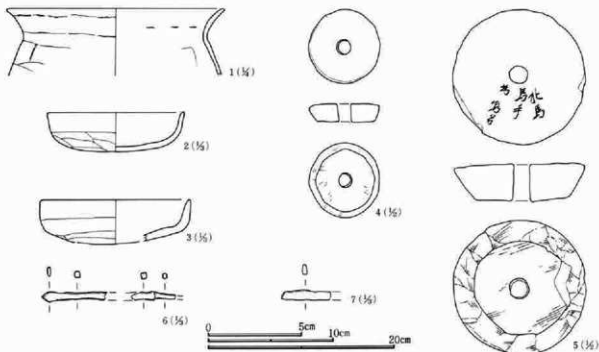


第47図 83号住居跡実測図

### 第3章 平安時代の遺構と遺物

竈は、東壁のほぼ中央に構築されている。焚き口部は壁のやや内側になるとみられ、燃焼部は壁の外側に張り出している。火床面の焼土化はあまり認められなかった。燃焼部の幅は40cm、張り出し方向45cmを測る。燃焼部を構築した暗褐色粘質土による掘り方部分の範囲は上面でも明瞭に確認された。

出土遺物は少なく、土器は土師器の甕・坏の破片のみである。注目されるのは「北馬 馬手 為嶋名」と線刻された石製紡錘車が出土していることである。なお耕作による攪乱中であるが石製紡錘車が出土しており、本住居に伴う可能性が高い。その他、鉄製の鍔2点がみられる。



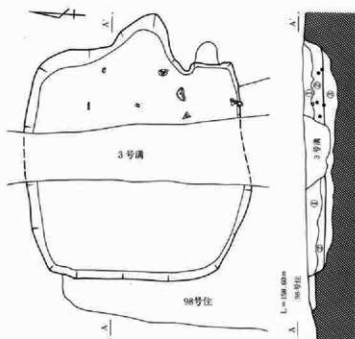
第48図 83号住居跡出土遺物実測図

83号住居跡出土遺物観察表

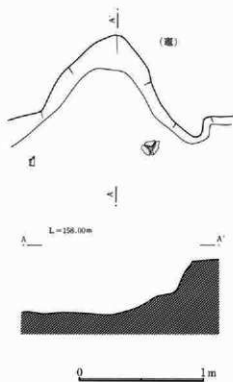
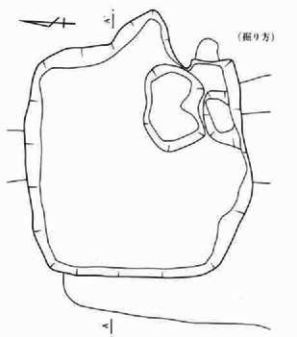
押図番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状況 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼色 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備 考
48-1	土 師 器 甕	貯蔵穴内 %残存	口(23.2) 底 — 高(7.0)	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③橙色	口縁部は「く」字に屈曲して外反。口縁部横無で、胴部 外面既削り。内面既削り。	
48-2 63	土 師 器 坏	貯蔵穴内 %残存	口(11.0) 底(7.0) 高(3.1)	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③ ③にぶい褐色	底部は緩やかに湾曲するが平底気味。口縁部、内面横無で。底部既削り。	内面付着物(塗布物の痕跡)
48-3 63	土 師 器 坏	貯蔵穴内 %残存	口12.0 底 — 高(3.3)	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい褐色	底部は緩やかに湾曲するが平底気味。口縁部、内面横無で。底部既削り。	内面付着物(塗布物の痕跡)
48-4 92	石 製 品 紡 錘 車	攪乱中 完形	径 3.87/3.24 孔径0.69 厚 1.1 重27.6		断面は低い台形。広面は同心円状の磨滅。穿孔は上方から。下面も磨滅。	滑石質の蛇紋岩
48-5 92・97	石 製 品 紡 錘 車	床面 完形	径 7.11/5.0 重145.9 厚 1.83 孔径0.81		断面は低い台形。広面は孔から1.8cmの範囲に同心円状の磨滅。狭面に製作時の設計線。広面・狭面と種に磨滅あり。	滑石質の蛇紋岩 線刻あり
48-6 91	鉄 製 品 鍔	覆土中	長 5.2/3.6 幅 0.8 重(7.1)		鍔先は削型。断面は方形。	
48-7 91	鉄 製 品 鍔	覆土中	長(3.9) 重(3.5) 幅 0.8		鍔先は刀身型。断面は扁平。	

86号住居跡 (第49・50図、図版16・63・64・87)

本住居跡は、第4次調査区南東部の北西方向へ向かう緩傾斜部分にあり、24—31・32グリッドに位置する。重複関係としては、98号住居跡 (平安) との切り合いが認められ、直接土層観察は成し得なかったが状況的に本住居跡が後出するものと考えられる。なお、住居の中央部に南北方向に3号溝が掘り抜いている。



- ① 茶褐色土 軽石を混じる。
- ② 茶褐色土 ロームブロックを少量含み、1層に比してしまりがある。
- ③ 暗褐色土 ロームブロック (~5mm) が多数に混じる。白色軽石と焼土は少量。



第49図 86号住居跡実測図

### 第3章 平安時代の遺構と遺物

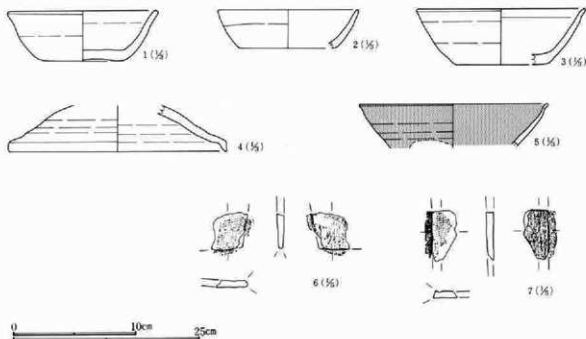
住居の掘り込みは、黄褐色ローム層に及び残存状況もやや良好であり、重複部分を除き明瞭に確認された。東西3m60cm、南北3m54cmの東西方向に長軸をもつやや胴張りの長方形を呈し、主軸方向はN-82°-Eを示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、最大31cmが残存している。床面は貼り床が施されており、堅く踏み締められている。特に床面中央部から、竈の前方にかけては堅緻である。なお貯蔵穴や柱穴、周溝などは検出されなかった。

掘り方面には、南東コーナー部分に径90cmほどの、やや楕円形を呈する浅い窪みが確認されたが、全体的に緩やかな起伏をもち、明瞭な土坑は認められない。

覆土は、2層に分層され、自然堆積状況を示している。

竈は、短辺である東壁のほぼ中央部に構築されている。燃焼部は壁の外側に張り出しており、幅は75cmと広く、張りだし長65cmを測る。火床面の焼土化はさほど顕著ではない。なお焚き口部右側にはわずかな袖状の張り出しがみられる。

遺物は、床面および覆土内から少量出土している。



第50図 86号住居跡出土遺物実測図

#### 86号住居跡出土遺物観察表

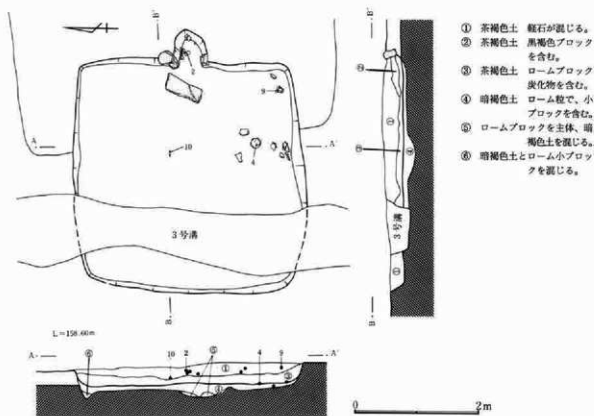
探検番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	流量(cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整・成形技法の特徴	備考
50-1 63	須恵器 坏	覆土中 底面~口縁 部に残存	口(11.8) 底 6.7 高 4.0	①砂粒~小石、白色細粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰白色~灰オリーブ色	体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁端部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転余切り無調整。	口縁部に保存費
50-2	土器 坏	覆土中 に残存	口(11.2) 底 — 高(3.0)	①砂粒、青母 ②還元焰、やや硬質 ③にょい橙色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。胴部 外面旋削り後削り調整。内面磨き調整。底部旋削り。	
50-3	須恵器 坏	覆土中 に残存	口(13.4) 底(7.4) 高(4.5)	①砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰白色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。	

押図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (口)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
50-4	須恵器 蓋	覆土中 4/残存	口(17.4) 底— 高(3.6)	①砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰白色、口縁灰色	やや内湾する天井部から口縁部は水平気味に反る。内外面ともにロクロ整形。	
50-5 64	灰輪陶器 埴	覆土中 4/残存	口(15.1) 底— 高(3.4)	①緻密 ②還元焰、堅緻 ③灰白色～灰オリーブ色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。	
50-6 87	瓦 平瓦	覆土中 破片	長— 幅— 厚0.9	①砂粒、白色細粒 ②還元焰、やや硬質 ③におい黄褐色	一枚造り。側面、鈍端部は凹取り。凸面端叩き。凹面布目。	古井・藤岡系
50-7 87	瓦 平瓦	覆土中 破片	長— 幅— 厚0.9	①砂粒、白色細粒 ②還元焰、やや硬質 ③明赤褐色	一枚造り。側面凹面取り。凸面端叩き後無で。凹面布目。	古井・藤岡系

## 87号住居跡 (第51～54図、図版17・64・91)

本住居跡は、第4次調査区南東部の北側へ向かう緩傾斜部にあり、24・25—30・31グリッドに位置する。重複関係としては、先行する88号住居跡(奈良)を掘り込んで築かれている状況が確認されている。また、西側部分を後出する3号溝により破壊されている。

住居の掘り込みは黄褐色ローム層まで及び、残存状況はやや良好である。平面形は東西3m66cm、南北3m70cmのやや胴張りの正方形を呈し、主軸方向はN—94°—Eを示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり最大26cmが残存する。床面は、貼り床が施され叩き締められており、中央部から電周辺部にかけては特に堅緻である。貯蔵穴や柱穴、周溝は検出されなかった。



第51図 87号住居跡実測図(1)

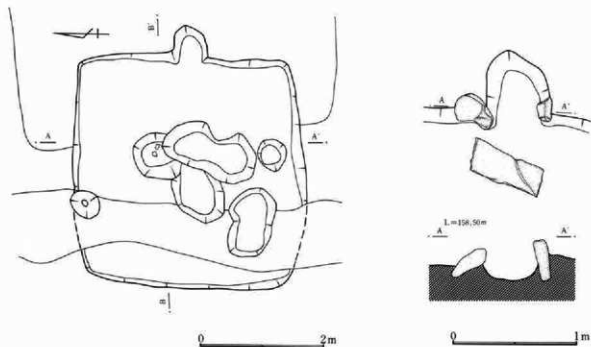
### 第3章 平安時代の遺構と遺物

掘り方面には、中央部周辺に数基の土坑が重複した状況で検出された。

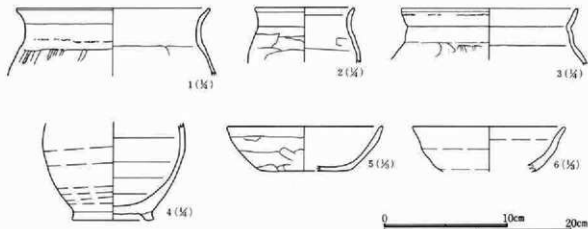
覆土は、3層に分層され自然堆積状況を示している。

竈は、東壁のほぼ中央部に構築されており、焚き口部は壁の位置にあり、燃焼部は壁の外側に張り出している。焚き口部には左右とも埋設された袖石が残存し、幅36cmを測る。その前部には転落した天井石が出土している。なお袖石、天井石ともに砂岩であり、火熱により赤化している。燃焼部の張り出しは60cmにおよぶ。火床面の焼土化はさほど顕著でない。

遺物は、竈内と南壁際から出土している。土師器の甕・坏、須恵器の坏・高台付皿・長頸壺の他、鉄製の刀子と鎌がある。

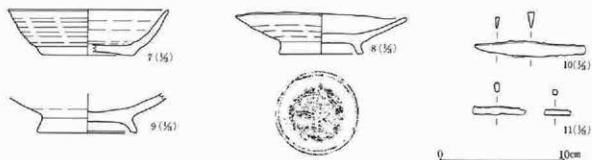


第52図 87号住居跡実測図(2)



第53図 87号住居跡出土遺物実測図(1)





第54図 87号住居跡出土遺物実測図(2)

87号住居跡出土遺物観察表

拝還番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (#)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
53-1	土師器 壺	覆土中 片残存	口(20.6) 底 — 高 (7.2)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③褐色～明褐色	「コ」字状口縁。輪轆痕一部残存。口縁部は横撫で。胴部 外面寛削り。内面寛撫で。	
53-2	土師器 壺	覆土中 片残存	口(10.6) 底 — 高 (5.8)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③におい赤褐色	「コ」字状口縁に近いが不明瞭。口縁部横撫で。胴部 寛削り。内面寛撫で。	
53-3	土師器 壺	床面+11 片残存	口(18.8) 底 — 高 (6.0)	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③明赤褐色	「コ」字状口縁、内外共に明瞭な線をなす。口縁部横撫で。胴部 外面寛削り。内面寛撫で。	内面に付着物
53-4 64	須恵器 瓶	床面 胴部下平 残存	口 — 底 8.6 高(10.3)	①砂粒～小石、石英 ②還元焰気味、やや硬質 ③灰 オリーブ色～オリーブ黄色	胴部は丸く膨らむ。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。付高台、断面台形。	
53-5 64	土師器 坏	覆土中 片残存	口(12.4) 底 (7.4) 高 3.5	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③におい褐色、大宇が黒変	体部はやや内湾気味に立ち上がる。体部 外面寛削り後弱い撫で。内面丁寧な撫で。底部寛削り。	
53-6	須恵器 坏	甕内 片残存	口 12.2 底 — 高 3.6	①細砂粒少 ②還元焰、やや軟質 ③黄灰色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は小さく反する。内外面ともにロクロ整形。	
54-7	須恵器 坏	覆土中 片残存	口(12.8) 底 (7.4) 高 (3.6)	①砂粒 ②還元焰気味、やや軟質 ③灰白色～灰黄色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
54-8 64	須恵器 台付皿	甕内 口縁部片 欠損	口(13.6) 底 6.8 高 3.3	①砂粒～小石、石英 ②還元焰、硬質 ③灰白色～灰黄色	体部はやや内湾気味に開く。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。付高台。	
54-9 64	須恵器 高台付皿	覆土中 下部残存	口 — 底 8.0 高 (3.1)	①砂粒、雲母 ②還元焰気味、やや硬質 ③暗灰黄色 底部浅黄色	体部はやや内湾気味に開く。内外面ともにロクロ整形。付高台。	
54-10 91	鉄製品 刀子	床面+8	長 8.7 幅 1.2	厚 0.45	基部は欠損する。断面は扁平な三角形。	
54-11 91	鉄製品 鏝	床面+6	長 4.25/2.1 幅 0.65		鏝先等を欠損する。	

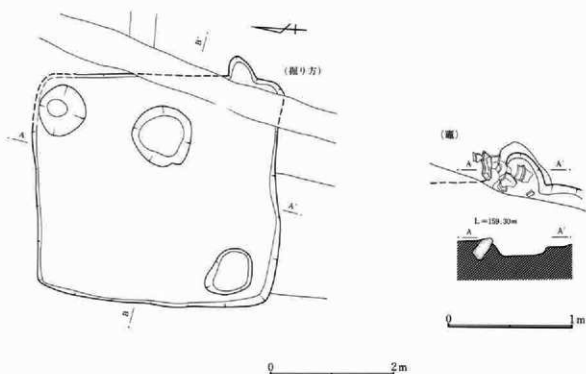
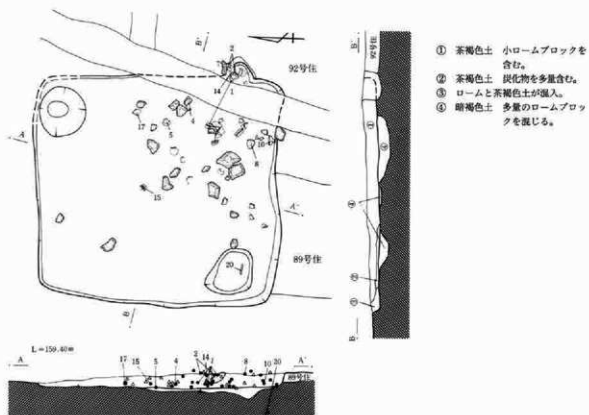
## 90号住居跡 (第55～57図、図版17・64・65・87・91・92)

本住居跡は、第4次調査区の南東部、北側に緩やかに傾斜する斜面上にあり、23・24～34・35グリッドに位置している。

重複関係としては、先行する89号住居跡(古墳後期)、92号住居跡(平安)の一部を破壊して築かれている状況が確認された。なお南東部は耕作による擾乱を受ける。

住居の掘り込みは、黄褐色ローム層にまで及ぶが重複関係によりやや確認は困難であった。南北3m90cm、東西3m60cmのわずかに南北方向に長い長方形を呈する。西壁はやや胴張り状になる。主軸方向はN-81°

第3章 平安時代の遺構と遺物



第55図 90号住居跡実測図

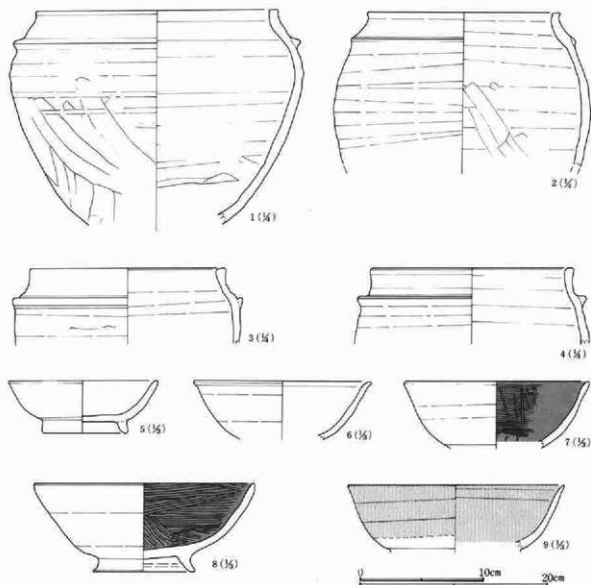
第2節 竪穴住居跡と出土遺物

一Eを示す。壁は傾斜上部の南東部に最大12cmが残存する。床面は部分的に貼り床が施されており堅く締まり、特に中央部から竪周辺部にかけては堅緻である。貯蔵穴としてはやや疑問があるが、北東隅と南西隅に土坑が検出されている。前者は径76cmの円形を呈し、深さは24cmで、後者は58cm×78cmの楕円形を呈し、深さは28cmを測る。柱穴や周溝は検出されなかった。

掘り方はわずかな窪みの他、中央より東側の位置に径90cm、深さ33cmの円形の土坑が掘り込まれている。覆土は、3層に分層される。堆積状況は自然堆積の可能性もあるが不明瞭である。

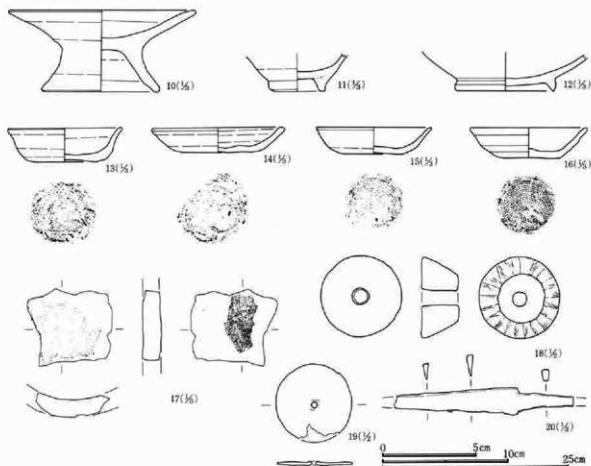
竪は、南東コーナーに寄った位置に構築されている。焼き口部周辺は攪乱を受け詳細は不明であるが、やや壁の内側になるものと想定される。燃焼部は壁の内側からやや外側へ張り出している。張り出しの長さは25cmである。火床面の焼土化はさほど顕著ではない。

遺物は、竪内および住居南半部に集中している。石製と鉄製の紡錘車の他、鉄製の刀子が目される。また竪構築材と考えられる石をはじめとして多数の石が散乱した状況で出土している。



第56図 90号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物



第57図 90号住居跡出土遺物実測図(2)

90号住居跡出土遺物観察表

押図番号 図版番号	土器種別	出土状況 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
56-1 64	須恵器 羽蓋	甕内 瓦残存	口 30.4 底 — 高 16.1	①砂粒～小石、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③橙色～明赤褐色	口縁部は内傾し、端部は強い面取り。脚は断面三角形。内外面ともにロクロ整形。胴部外面下部は弱い面取り。	内面やや付着物
56-2 64	須恵器 羽蓋	床面+5 瓦残存	口 25.6 底 — 高 22.3	①砂粒～小石 ②酸化焰、やや硬質 ③橙色、黒味がかかる	わずかに内傾する口縁部から端部は外反し強い面取り。脚は低く形軟化。内外面ともにロクロ整形。内面一部煎焼で。	内面の器面やや荒れている
56-3 64	須恵器 羽蓋	覆土中 瓦残存	口(21.0) 底 — 高(8.0)	①砂粒～小石、石英 ②酸化焰、やや軟質 ③明褐色、大半が黒炭	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。脚は上向き。内外面ともにロクロ整形。	
56-4	須恵器 羽蓋	床面～覆 土中 瓦残存	口(21.4) 底 — 高(8.1)	①砂粒～小石、雲母 ②酸化焰、硬質 ③橙色～明褐色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。脚は断面三角形。内外面ともにロクロ整形。	
56-5 64	須恵器 高台付埴	床面 口縁部瓦 欠損	口 11.9 底 6.9 高 4.1	①砂粒、石英 ②酸化焰気味、やや軟質 ③よび典褐色	体部は緩やかに内湾して立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。底部は回転製で、付高台。	内面一部黒炭
56-6	須恵器 高台付埴	覆土中 瓦残存	口(14.2) 底 — 高(4.6)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③橙色～明赤褐色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端部はわずかに外反する。内外面ともにロクロ整形。	
56-7 64	須恵器 埴	覆土中 瓦残存	口(14.6) 底 — 高(5.3)	①砂粒 ②酸化焰、硬質 ③(外)橙色 口縁黒炭 (内)黒色結理	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端部はわずかに外反する。外面ロクロ整形。内面磨き調整。	

## 第2節 竪穴住居跡と出土遺物

坪原番号 図版番号	土器種類 器 種	出土状況 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備 考
56-8 64	須恵器 高台付埴	床面+20 体部写欠	口(17.6) 底 8.1 高 7.0	①砂粒～小石 ②酸化焰 硬質 ③(外)明褐色 口縁 部変 (内)黒色地味	体部は腹やかに内湾して立ち上がる。高台部「ハ」状に広がる。体部外面ロクロ整形。口縁部、内面磨き調整。底部回転製で、付高台。	
56-9 64	灰輪陶器 埴	覆土中 写欠	口(17.2) 底 一 高 (5.3)	①緻密 ②還元焰、堅緻 ③灰白色	体部は腹やかに内湾して立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。	
57-10 64	須恵器 高台付埴	床面 ほぼ完形	口 14.9 底 9.2 高 6.4	①砂粒～小石、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③褐色	体部はやや外反気味に開く。台部は高く「ハ」字状に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。付高台。底部磨で。	
57-11 64	須恵器 高台付埴	覆土中 底部周辺 残存	口 一 底 4.5 高 (3.0)	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい黄褐色	小さい複雑な高台部から体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。付高台。	
57-12 64	灰輪陶器 高台付埴	床面～覆 土中 底部周辺	口 一 底 (8.0) 高 (3.0)	①緻密 ②還元焰、やや不良 ③灰白色	体部は腹やかに内湾して立ち上がる。高台部は断面三日月形。内外面ともにロクロ整形。底部回転製で。	
57-13 64	須恵器 埴	貯蔵穴内 口縁部写 欠	口 9.1 底 5.3 高 2.6	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい黄褐色	体部は腹やかに内湾して立ち上がり、口縁部は外反する。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
57-14 65	須恵器 皿	甕内 写欠	口(16.6) 底 (5.7) 高 1.9	①砂粒～小石 ②酸化焰、やや硬質 ③褐色～明褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
57-15 65	須恵器 皿	床面+5 完形	口 9.2 底 5.0 高 2.1	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
57-16 65	須恵器 皿	床面+3 完形	口 9.4 底 4.9 高 2.4	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③黄褐色～にぶい黄褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
57-17 87	瓦	床面+8 破片	長 一 幅 一 厚 1.8	①砂粒、粘状粘土 ②還元焰気味、硬質 ③黄褐色	一枚造り。凸面側で、凹面布目。	吉井・藤岡系
57-18 92	石製品 紡錘車	覆土中 完形	径 4.26/2.68 孔径0.67 重 2.65 重 55.4		断面台形。広面は磨孔し、孔から5mmの範囲は顕著。上方から穿孔し、狭面も磨孔。	帯石質の強い蛇紋岩
57-19 91	鉄製品 紡錘車	覆土中 紡錘車 残存	径 4.14/一 孔径0.26 厚 0.21 重 9.9		薄い円形の紡錘。孔の片面はやや窪み、逆側は突出する。	
57-20 91	鉄製品 刀子	貯蔵穴内	長 13.0 厚 4.5 幅 2.0		両端部を欠損。	

## 91号住居跡(第58・59図、図版18・65・87)

本住居跡は、第4次調査区南東部の北側へ向かう緩傾斜部にあり、23・24—36グリッドに位置する。

他の住居跡との重複関係は認められない。

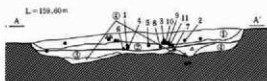
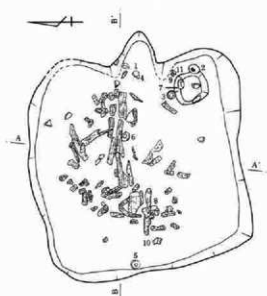
住居の掘り込みは、黄褐色ローム層におよび残存状況はやや良好である。南北3m30cm、東西3m50cmのやや膨張りの正方形に近い形状をとり、主軸方向はN-95°-Eを示す。壁はやや開き気味に立ち上がり、最大25cmが残存する。床面は貼り床が施されており堅く叩き締められ、特に中央部から甕周辺は堅緻である。貯蔵穴は南東コーナー部分に設けられており、直径50cmほどのやや不整形円形を呈し、深さは40cmを測る。なお柱穴、周溝は検出されなかった。

掘り方は起伏に富み、複数の土坑が重複した状態で検出された。

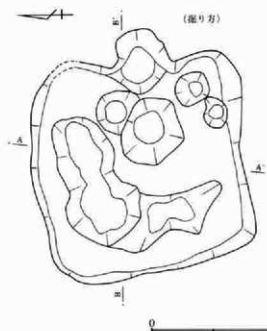
覆土は、2層に分層され自然堆積状況を示す。

甕は、短辺である東壁のほぼ中央部に構築されている。暗褐色粘質土によって構築されており、わずかに袖の張り出しの痕跡が認められた。燃焼部は壁の外側に張り出している。燃焼部の幅は54cmで、張り出しは50cmである。燃焼部の焼土化はさほど顕著ではない。

第3章 平安時代の遺構と遺物

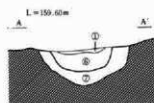
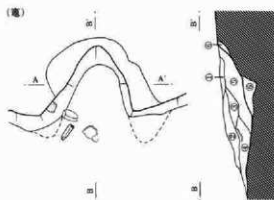


- ① 茶褐色土 軽石を含む。
- ② 茶褐色土 ロームブロックを含む。
- ③ 暗褐色土 軽石、ローム粒（～5mm）と上面には焼土、灰、炭化物が分布。
- ④ 3層に比して、ローム粒の含有が著しく高い。



遺物は竈と貯蔵穴周辺に多く、その他床面に分布が広がる。土師器の甕・坏と須恵器の坏が主で、小形の長頸壺もみられる。

なお、本住居跡は非常に多量の炭化材が床面を中心に出土していることから、焼失家屋と考えられる。床面のほぼ中央部では東西方向に横たわるやや太い炭化材が認められ、棟木と想定される。これに向かって架けられたとみられる重木も検出されている。

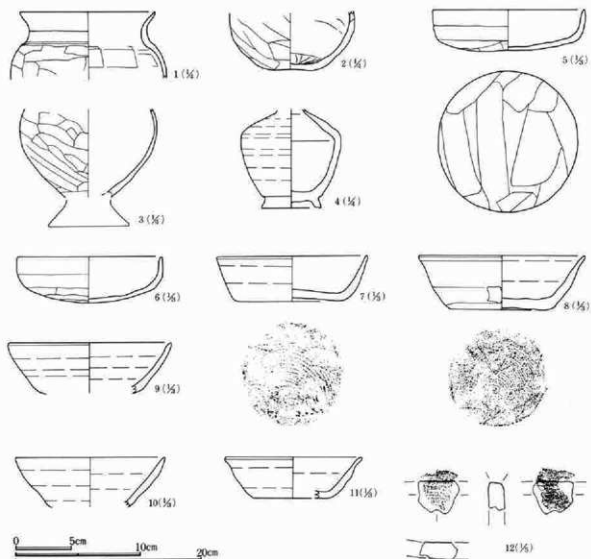


0 1 m

- ① ローム主体、天井材。
- ② 茶褐色土 焼土ブロックを含む。
- ③ 茶褐色土 くずれた焼土ブロックを含む。
- ④ 茶褐色土 炭化物、ローム粒を含む。
- ⑤ 黒褐色土 焼土ブロックを含む。
- ⑥ 焼土とロームブロックを含む。

第54図 91号住居跡実測図

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第59図 91号住居跡出土遺物実測図

91号住居跡出土遺物観察表

押戻番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色面	器形、整・成形技法の特徴	備考
59-1 65	土師器 壺	床面+4 片残存	口(14.2) 底 - 高(7.2)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③明赤褐色、一部黒変	「コ」字状口縁気味だが不明瞭。口縁部横溝で。胴部 外面荒削り。	器面やや荒れる
59-2 65	土師器 壺	床面+2 胴下部残存	口 - 底 6.5 高(6.5)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③いぼい褐色	胴下部は丸みをもつ。平底。胴部 外面荒削り。内面荒撫で。底部荒削り。	
59-3 65	土師器 壺	甕内 胴下半片残存	口 - 底 - 高(9.3)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③明赤褐色	胴上部は丸く膨らむ。胴部 外面荒削り。内面荒撫で。	内面器面やや剥落。付着物あり
59-4 65	須恵器 瓶	床面+3 口縁部欠損	口 - 底 6.4 高(10.4)	①砂粒~小石 ②還元焰、硬質 ③灰色 一部オリブ灰色	胴上部に最大径を置き屈曲して頸部へ至る。高台部は断面三角形で「ハ」字に開く。内外面ともにクロコ整形。底部撫で調整。	外面黒斑あり
59-5 65	土師器 杯	床面+2 ほぼ完形	口 12.0 底 11.1 高 3.3	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③明赤褐色	体部は強い横撫でされ直線的に立ち上がる。底部はやや丸みをもつが平底気味。内面丁寧な撫で。底部荒削り。	

### 第3章 平安時代の遺構と遺物

棟回番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
59-6 65	土師器 環	床面 欠残存	口 11.6 底 10.4 高 3.7	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③褐色～明赤褐色	体部は横撫でされ直線的に立ち上がる。底部は丸みをもつ。内面丁寧な撫で。底部は削り後弱い撫で。	
59-7 65	須恵器 環	貯蔵穴内 ほぼ完形	口 12.2 底 8.7 高 3.6	①砂粒～小石 ②還元焰、やや硬質 ③灰色～灰白色	体部はほぼ直線的に立ち上がる。やや上げ底。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	表面やや磨滅
59-8 65	須恵器 環	床面 ほぼ完形	口 13.3 底 7.8 高 4.2	①砂粒、白色細粒 ②還元焰、堅緻 ③灰色	体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り後、周辺削り。	
59-9	須恵器 環	床面 欠残存	口(13.2) 底— 高(4.0)	①砂粒～小石、白色細粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰色	体部はやや内筒気味に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。	
59-10	須恵器 環	床面 欠残存	口(12.0) 底— 高(3.8)	①砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰白色	体部はほぼ直線的に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。	
59-11	須恵器 環	覆土中 欠残存	口(11.0) 底(6.1) 高(3.3)	①砂粒～小石、石英 ②酸化焰、硬質 ③(外)灰色 (内)口縁部に明赤褐色	体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。内外面ともにロクロ整形。	外面黒変
59-12 87	瓦	覆土中 破片	長— 幅— 厚 2.1	①砂粒、白色細粒 ②酸化焰、硬質 ③褐色	凸面撫で。凹面に布目肌。端面はやや斜な削り。	吉井・藤岡系

#### 92号住居跡・311号住居跡 (第60～62図、図版19・65・66・87)

本住居跡は、第4次調査区南東部の北側に緩やかに傾斜する斜面上にあり、23-35グリッドに位置する。

重複関係としては、先行する89号住居跡(古墳後期)を掘り込んで構築されており、この後、後出する90号住居跡によって北西部分が破壊されている状況が確認されている。

住居の掘り込みは、89号住居跡の覆土中にとどまっていることにより確認は困難であった。平面形は東西3m50cm、南北3m85cmを測る正方形に近い形状をとり、主軸方向はN-85°-Eを示している。壁は垂直気味に立ち上がり、30cmが残存している。床面は、叩き締められており特に中央部から竈周辺にかけては堅緻であるが、明瞭な貼り床は確認されなかった。貯蔵穴と考えられる施設は南壁際の南西コーナー寄りの位置に設けられている。形状は、55cm×80cmの隅丸の長方形を呈し、深さは22cmを測る。なお柱穴や周溝は検出されなかった。

掘り方と覆土に関しては不明確であった。

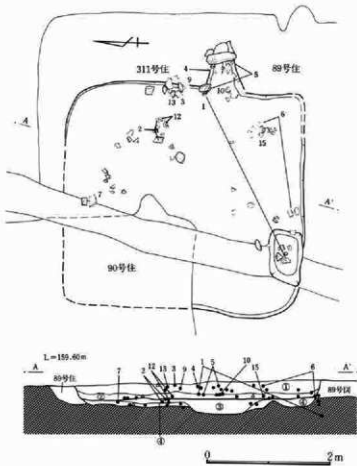
竈は東壁の中央部よりもやや南側に寄った位置に構築されている。残存状況はやや良好であり、石組の竈の構造が窺える。焚き口部は壁際になり、左側の袖石が埋設された状態で検出されている。右側の袖石は残存しないが、焚き口部の幅は45cmを測る。燃焼部から煙道部にかけては緩やかに傾斜して、壁穴の壁外に張り出している。火床面の焼土化はさほど顕著ではなく、また支脚も遺存していない。張り出しの長さは75cmにおよぶ。煙道部への移行部には鳥居状の石組による施設が設けられている。

竈の北側に隣接して、砂岩が2カ所埋設されて検出されており、竈に関連するものとも考えられる。本住居跡に先行する住居跡の煙道部先端の石組の可能性が高く、311号住居跡とする。

遺物は、竈内、貯蔵穴内の他、床面周辺から多数の土器片が出土している。須恵器の羽釜、環・埴類の出土が多い。311号住居跡に伴う遺物は、不明確である。

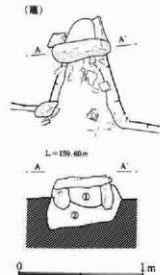


第2節 竪穴住居跡と出土遺物

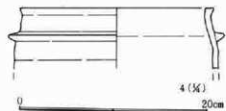
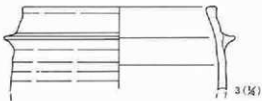
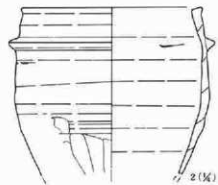
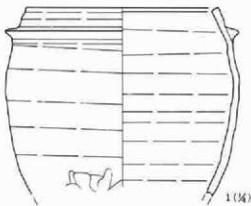


第60図 92号-(311号)住居跡実測図

- ① 暗茶褐色土 軽石を含む。
- ② 暗茶褐色土 ローム粒を含み、軽石は少ない。
- ③ 暗褐色土 ローム粒を多量に含む。
- ④ ロームブロックと暗褐色土を混じる。軽石、焼土粒を若干含む。

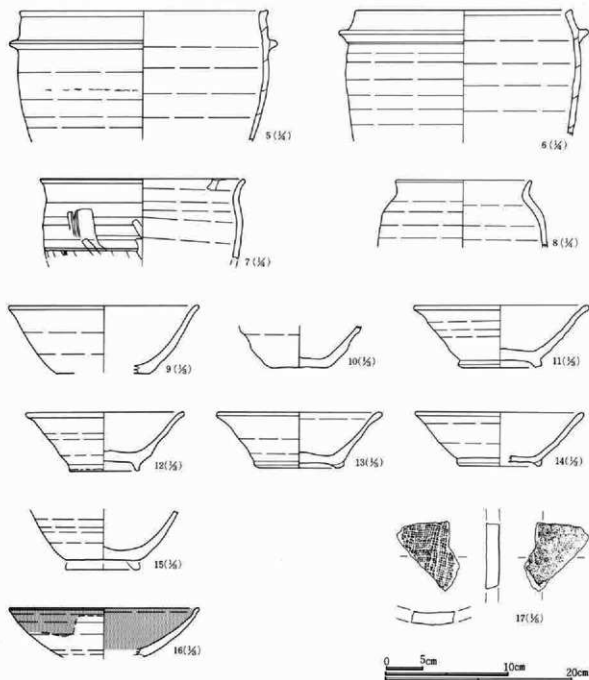


- 竪
- ① 茶褐色土 軽石、焼土粒をわずかに含む。
  - ② 茶褐色土 焼土粒、炭化物粒を少量含む。



第61図 92号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物



第62図 92号住居跡出土遺物実測図(2)

92号住居跡出土遺物観察表

棟図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (K)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
61-1 65	須恵器 羽釜	竈内一貯 底一 %残存	口(20.4) 底一 高(19.7)	①砂粒~小石、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③暗灰黄色、橙色	口縁部はわずかに内傾し、端部は面取り。脚は断面三角形。内外面ともにクロコ型。胴下部直削り。	
61-2 65	須恵器 羽釜	床面+4 底一 %残存	口(19.2) 底一 高(17.7)	①砂粒、雲母 ②酸化焰気味、やや硬質 ③(外)浅黄色 (内)灰白色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。脚は断面三角形。内外面ともにクロコ型。胴下半部直削り。	

## 第2節 竪穴住居跡と出土遺物

採回番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状況 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、壺・成形技法の特徴	備 考
61-3	須恵器 羽 釜	床面+21 瓦残存	口(20.8) 底 — 高(8.8)	①砂粒、石英、白色細粒 ②酸化焰気味、やや硬質 ③灰白色、一部黒変	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。 内外面ともにロクロ整形。	粘土、煤付着 電材への転用
61-4 65	須恵器 羽 釜	壺内 瓦残存	口(20.6) 底 — 高(6.5)	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③黄～明褐色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。 内外面ともにロクロ整形。	電材への転用
62-5 65	須恵器 羽 釜	壺内 瓦残存	口(26.6) 底 — 高(13.6)	①砂粒 ②酸化焰気味、やや硬質 ③灰白色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。 内外面ともにロクロ整形。	電材への転用
62-6 65	須恵器 羽 釜	床面+6 瓦残存	口(23.2) 底 — 高(13.2)	①砂粒 ②還元焰気味、やや硬質 ③灰白色～灰オリーブ色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。 内外面ともにロクロ整形。	
62-7 66	須恵器 羽 釜	床面 瓦残存	口(22.0) 底 — 高(8.4)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③褐色 部分的に黒変	胴部は丸く膨らみ、口縁部は緩やかに外反する。 内外面ともにロクロ整形。胴部外面一部 磨削り。	外面に煤付着
62-8 66	須恵器 壺	壺内 瓦残存	口(14.6) 底 — 高(7.2)	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③におい黄褐色	口縁部は短く「く」字に外反する。内外面と ともにロクロ整形。	
62-9 66	須恵器 坏	床面+16 瓦残存	口(15.2) 底 — 高(5.3)	①砂粒 ②還元焰気味、やや軟質 ③灰白色 一部黒変	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部 は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。 底部は回転未切り無調整。	
62-10 66	須恵器 坏	床面+7 下半部残存	口 — 底(4.8) 高(3.3)	①砂粒～小石 ②酸化焰、やや硬質 ③黄～明褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面と ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転未切り 無調整。	
62-11 66	須恵器 高台付埴 瓦	貯蔵穴内 口縁部瓦 欠損	口 14.0 底 6.7 高 4.9	①砂粒、雲母 ②還元焰気味、やや軟質 ③灰白色 一部黒変	体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は小さ く外反する。内外面ともにロクロ整形。底部 無で、雑な付高台。	
62-12 66	須恵器 高台付埴 瓦	床面+6 瓦残存	口(12.6) 底 5.7 高(4.6)	①砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は小さ く外反する。内外面ともにロクロ整形。底部 は回転未切り無調整。雑な付高台。	
62-13 66	土師器 高台付埴 瓦	床面+20 口縁部瓦 欠損	口 13.2 底 7.2 高 4.4	①砂粒～小石 ②還元焰気味、やや軟質 ③におい明褐色	体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部は外 反する。内外面ともにロクロ整形。底部無で。 雑な付高台。	
62-14 66	須恵器 高台付埴 瓦	覆土中 瓦残存	口(13.4) 底(6.8) 高(5.2)	①砂粒～小石 ②還元焰気味、やや軟質 ③灰白色 一部黒変	体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部はや や外反する。内外面ともにロクロ整形。底部 は回転未切り無調整。雑な付高台。	
62-15 66	須恵器 高台付埴 瓦	床面 体部下平 残存	口 — 底(5.8) 高(4.6)	①砂粒 ②還元焰気味、やや軟質 ③淡黄色～浅黄色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面と ともにロクロ整形。付高台剥落。	
62-16 66	灰輪陶器 埴	貯蔵穴内 瓦残存	口(15.2) 底 — 高(3.8)	①緻密 ②還元焰、堅緻 ③灰白色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部 は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。 施釉は裏け掛け。	
62-17 87	瓦	覆土中 破片	厚(1.5)	①砂粒、白色細粒 ②還元焰気味、硬質 ③灰オリーブ色	凸面無で、凹面に布目飯。	吉井・藤原系

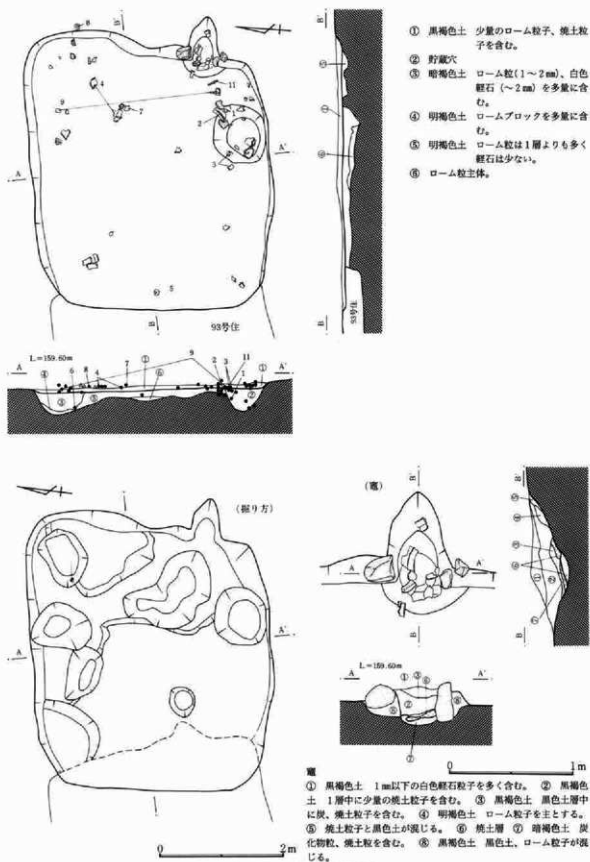
## 94号住居跡(第63～65図、図版19・66・67・91・93)

本住居跡は、第4次調査区南東部の北へ向かう緩傾斜面にあり、21-33グリッドに位置する。

重複関係としては、先行する93号住居跡(奈良)の東側上部を破壊して構築されている状況が確認されて  
いる。

住居の掘り込みは、黄褐色ローム層に施されており、重複部分以外は明瞭に確認された。竪穴部の規模は  
東西4 m40cm、南北3 m90cmを測り、平面形は東西方向に長い長方形を呈するが、北東コーナー部分はやや張  
り出している。主軸方向はN-89°-Eを示している。壁はやや開き気味に立ち上がる部分のみが認められ、

第3章 平安時代の遺構と遺物



第63図 94号住層跡実測図

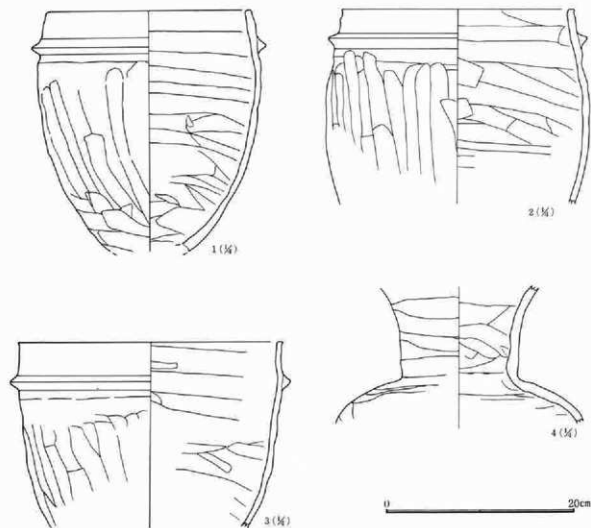
最大でも23cmが残存する程度である。床面は貼り床が施されており、全体に叩き締められているが、中央部から竪穴周辺部にかけては殊に堅緻である。貯蔵穴は、南壁際の南東コーナー寄りの位置に設けられている。85cm×94cmのやや楕円形を呈し、深さは27cmである。なお、柱穴や周溝は検出されなかった。

掘り方面は起伏に富んでおり、特に東半部には掘り込みが集中している。北壁際には楕円形の土坑が数基確認されている。

覆土は、わずかに残存するのみで堆積状況は不明である。

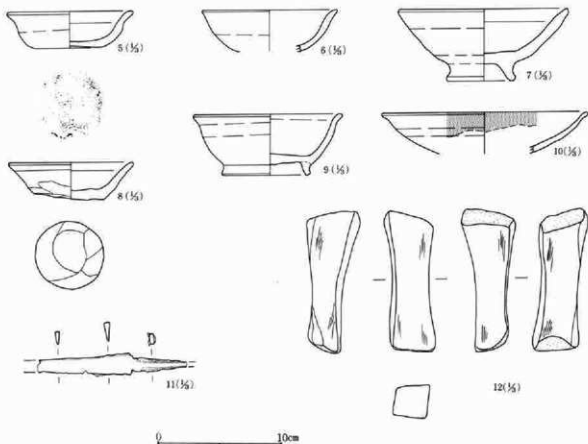
竈は、短辺である東壁の南東コーナー寄りの位置に構築されている。焚き口部は壁の部分にあり、燃焼部は壁の外側に張り出している。焚き口部には左右とも袖石が埋設された状況で残存しており、幅は36cmを測る。火床面は摺鉢状に窪んでおり、燃焼部の張り出しは66cmにおよぶ。火床面は焼土化が著しく、下部にまで及んでいる。

遺物は、竈内と貯蔵穴周辺部に集中しており、そのほかにも北東コーナー寄りの部分からの出土が多い。羽釜は貯蔵穴付近から認められた。接合関係が広くに互るものが注意される。他に、砥石や刀子の出土が知られる。



第64図 94号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物



第65図 94号住居跡出土遺物実測図(2)

94号住居跡出土遺物観察表

採掘番号 図版番号	土器種別 器 型	出土状況 残存状況	法量 (cm) (長)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備 考
64-1 66	須恵器 羽 釜	貯藏穴内 片残存	口22.0 底 — 高25.4	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい黄褐色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。 踵は断面三角形。口縁部、内部横無で、胴部 外面直削り。	
64-2 66	須恵器 羽 釜	貯藏穴内 片残存	口24.8 底 — 高20.5	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい褐色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。 踵は断面三角形。口縁部、内部横無で、胴部 外面直削り。	
64-3 66	須恵器 羽 釜	貯藏穴周 辺 片残存	口28.4 底 — 高19.5	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい褐色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。 踵は断面三角形。口縁部、内部横無で、胴部 外面直削り。	
64-4 66	須恵器 栗 鉢	床面+3 片残存	口 — 底 — 高14.8	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③褐色	口縁部は頸部から直立気味に立ち上がり、上 部は外反。内外側方向の直削り。	
65-5 67	須恵器 坏	床面 口縁部一 部欠割	口10.1 底 5.4 高 2.9	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい黄褐色 一部黒変	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端 部は大きく外反する。内外面ロクロ整形(右 回転)。底部は回転糸切り無調整、上げ底。	
65-6	須恵器 坏	掘り方中 片残存	口10.8 底 — 高3.3	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや軟質 ③浅黄褐色~にぶい褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部 は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。	
65-7 66	須恵器 高台付碗	床面+10 片残存	口13.6 底 5.5 高5.7	①砂粒~小石 ②酸化焰、やや軟質 ③浅黄褐色~にぶい黄褐色	体部は下部にやや張りもち、直線的に開く。 高台部は小さく開く。内外面ともにロクロ整 形。底部は無で、付高台。	

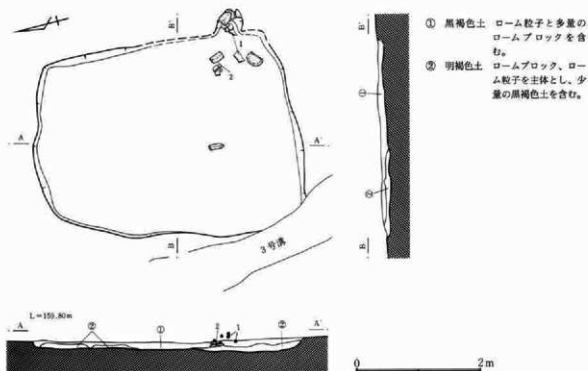
## 第2節 竪穴住居跡と出土遺物

押出番号 図版番号	土器種別 種	出土状況 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整・成形技法の特徴	備 考
65-8 67	須恵器 杯	床面+12 口縁部一 部欠損	口(9.8) 底 5.5 高 2.9	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい橙色	体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部は強い横撫でで薄くそがれる。体部横撫で。底部周辺直垂り。	
65-9 67	須恵器 高台付埴 土	床面～ +4 片残存	口(11.9) 底(7.0) 高(4.8)	①砂粒、雲母 ②酸化焰気味 ③にぶい黄褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。	
65-10	灰釉陶器 皿	覆土中 片残存	口(16.4) 底 — 高(3.2)	①緻密 ②還元焰、堅緻 ③灰白色	体部はやや内湾気味に開き、口縁部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。横け掛け。	
65-11 91	鉄製品 刀	床面	長 11.8 幅 1.8 厚 0.4		基部に木貫付着	
65-12 93	砥石	覆土中 完形	長 11.3 重 183 幅 4.0 厚 3.85		柱状の砥石。両側面は自然面を残す。4面とも使用されている。	石英安山岩(朽石)

## 97号住居跡(第66～68図、図版20・67)

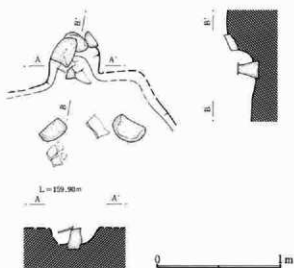
本住居跡は、第4次調査区南東部の北側へ向かう緩傾斜面にあり、19・20-33グリッドに位置する。

他の住居跡との重複関係は認められないが、後出する3号溝によって南西コーナー部分を破壊されている。住居の掘り込みは、黄褐色ローム層に施されており、明瞭に確認された。東西は3m10cm、南北4m40cmの南北方向に長軸を持つが、南西コーナー周辺が張り出した台形に近い形状をとる。壁は残存状況は不良で特に南西部は状況が悪い。壁の立ち上がりはほぼ垂直で、最大12cmが残存している。床面は、貼り床は施されており、全体に叩き締められているが、床面中央部から竈周辺部にかけては殊



第66図 97号住居跡実測図

### 第3章 平安時代の遺構と遺物



第67図 97号住居跡竈実測図

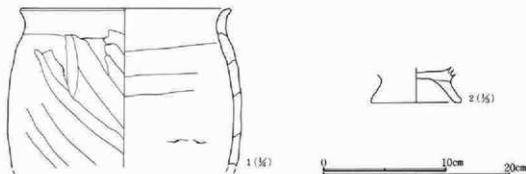
に堅緻である。なお貯蔵穴や柱穴、周溝は検出されなかった。

覆土は、わずかに認められたのみで堆積状況は不明である。

竈は、長辺である東壁の東南コーナーにほぼ寄った位置に構築されている。竈周辺部は、耕作溝による擾乱を受けていることにより不明な点が多い。焚き口部はやや壁の内側になるものとみられ、燃焼部は壁の外側へ小さく張り出している。燃焼部の幅は40cmであり、張り出しは42cmを測る。竈は石組の構造をとり、燃焼部の外縁部には石が配された状況で残存している。また竈前部にも竈構築材に使用されたと考えられるやや焼土化の認められる石が出土している。壁との境界にあたる

燃焼部の中央部には、支脚として利用された石が遺存している。火床面の焼土化はさほど顕著ではない。

出土遺物は、竈周辺部に土釜などがわずかに認められる程度である。



第68図 97号住居跡出土遺物実測図

#### 97号住居跡出土遺物観察表

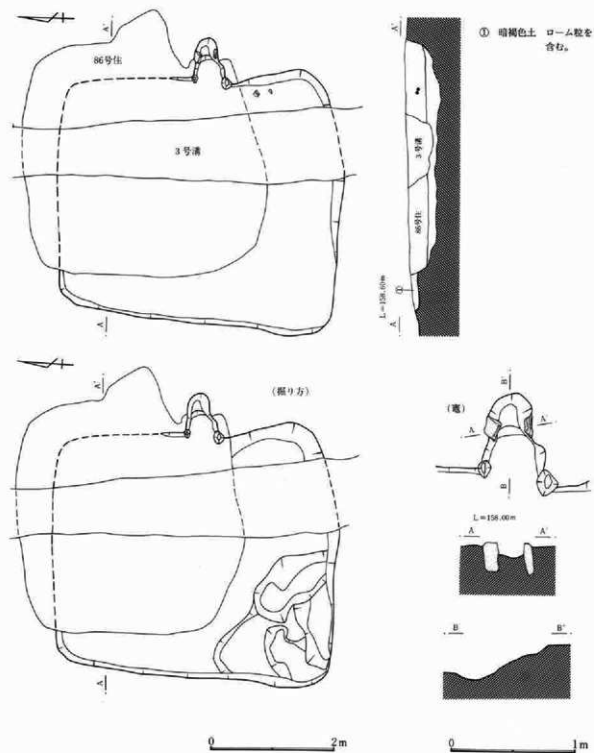
探図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
68-1 67	土 罎 甕	竈内 瓦残存	口(22.4) 底 一 高(16.7)	①砂粒～小石、雲母 ②酸化焰、やや軟質 ③暗灰黄色～黒褐色	胴部の張りは弱く、口縁部は小さく外反する。 口縁部横撫で。胴部 外面荒削り。内面荒撫で。	
68-2	須恵系 高台付埴	床圍+3 瓦残存	口 一 底 (7.2) 高 (2.8)	①砂粒、雲母 ②酸化焰気味、やや硬質 ③灰白色～灰黄色	高台部は「ハ」字に開く。内外側ともに口ク 口整形。底部撫で。	

#### 98号住居跡 (第69図、図版16)

本住居跡は、第4次調査区南東部の北西方向へ向かう緩傾斜部分にあり、23・24-31グリッドに位置する。重複関係としては、先行すると思われる86号住居跡(平安)に北西部の大半を破壊されている状況が考えられる。また、中央部を南北方向に3号溝が掘り抜いている。



住居の掘り込みは、黄褐色ローム層に及ぶが重複により不明瞭な点が多い。平面形は東西3m90cm、南北4m50cmの南北方向にやや長い長方形を呈し、主軸方向はN-80°-Eを示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、18cmが残存する。床面は部分的に貼り床が施される程度で、大部分は直接ローム面を叩き締めている。貯蔵穴や柱穴、周溝は検出されなかった。



第69図 98号住居跡実測図

### 第3章 平安時代の遺構と遺物

掘り方部分はほぼ平坦面を成すが、南西コーナー際には不整な窪みが重複した状況で認められた。深さは、10cm程度から、20cmほどでいずれも浅い摺鉢状を呈する。

覆土は、わずかに観察されたのみで堆積状況等は不明である。

竈は、長辺にあたる東壁のほぼ中央部に構築されている。86号住居跡により破壊され火床面は残存しないが、掘り方部分はかろうじて確認された。焚き口部は壁の境界に位置し、両袖に用いられた袖石の埋設底が左右ともに検出されている。焚き口幅37cm、燃焼部長42cmを測る。なお、煙道部分の張りだしの一部が認められており、左右に石が埋設された石組の構造が窺われる。煙道部の幅は30cm、確認長27cmである。

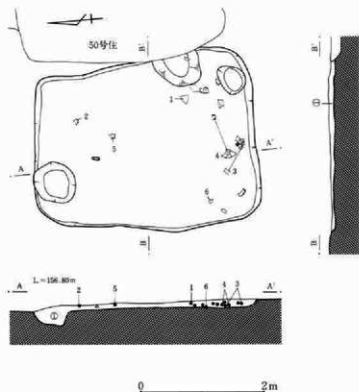
遺物は、平安時代に属する土師器類などの破片が少量出土したのみである。

#### 101号住居跡（第70・71図、図版20・67）

本住居跡は、第4次調査区東側の平坦部分にあり、34・35—33グリッドに位置する。

重複関係としては、後出する50号住居跡（平安）によって竈部分が破壊されている状況が確認されている。

住居の掘り込みは、黄褐色ローム層中に施されており、明瞭に確認された。東西2m80cm、南北3m65cmを測る南北方向に長軸をもつやや歪んだ長方形を呈し、主軸方向はN-90°-Eを示す。壁はほぼ垂直気味に立ち上がり、最大21cmが残存する。床面には貼り床は施されず、直接ローム面を叩き締めており中央部周辺は特に堅緻であった。貯蔵穴は、南東コーナー部分の壁際に設けられており、径40cm×45cmのほぼ円形を呈し、深さは20cmである。この他に北西コーナー付近に直径68cm、深さ22cmの円形の掘り込みが検出されているが、性格は不明である。なお、柱穴や周溝は検出されなかった。



① 暗褐色土 多量の白色細粒、ローム粒を含む。堅緻。

第70図 101号住居跡実測図

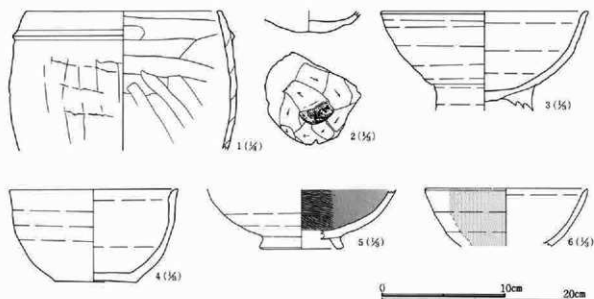
床面下の掘り込みは、認められなかった。

覆土は、暗褐色土層が観察されたが堆積状況は不明である。

竈は、長辺である東壁の中央よりも南側に寄った位置に構築されている。50号住居跡によってほとんどが破壊されており、詳細は不明である。燃焼部から焚き口部に想定される部分は、摺鉢状の浅い窪みとなっている。火床面の焼土化はさほど顕著ではない。

遺物は、竈周辺から床面南半部にかけて出土している。(4)の塊は器面の煤の付着と摩滅の状況から竈の支脚に転用されたものとみられる。

## 第2節 整穴住居跡と出土遺物



第71図 101号住居跡出土遺物実測図

101号住居跡出土遺物観察表

検出番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (口・底・高)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整・成形技法の特徴	備考
71-1	須恵器 羽釜	床面+3 片残存	口(21.0) 底— 高(14.7)	①砂粒~小石、石英 ②酸化焰、やや硬質 ③明赤褐色	口縁部はわずかに内傾し、底部は弱い凹取り、輪痕あり。口縁部横断で、割部 外面弱い凹削り。内面直線。	
71-2 67	須恵器 環	床面+3 底部残存	口— 底(2.5) 高(1.8)	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい黄褐色	内面ロクロ整形。底部外面回転余切り後、周辺直削り。	
71-3 67	須恵器 高台付埴	床面+3 ~6 片残存	口16.4 底— 高(7.9)	①砂粒~小石 ②酸化焰、やや硬質 ③明褐色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。内外面ともにロクロ整形。付高台。	外面に赤褐色あり
71-4 67	須恵器 埴	床面+4 ~5 ほぼ完形	口(13.4) 底6.5 高7.2	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい黄褐色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転余切り無調整。	外面に赤付着、内面底部にスレ。支脚に転用か。
71-5 67	須恵器 高台付埴	床面+4 片残存	口— 底(6.8) 高(4.7)	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③(外)にぶい黄褐色一部黒変 (内)黒色結理	体部は緩やかに内湾して立ち上がる。体部外面ロクロ整形。内面直削り。付高台。	
71-6 67	灰釉陶器 埴	床面+4 片残存	口(13.0) 底— 高(4.6)	①緻密 ②還元焰、堅緻 ③灰白色	体部は緩やかに内湾して立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。	

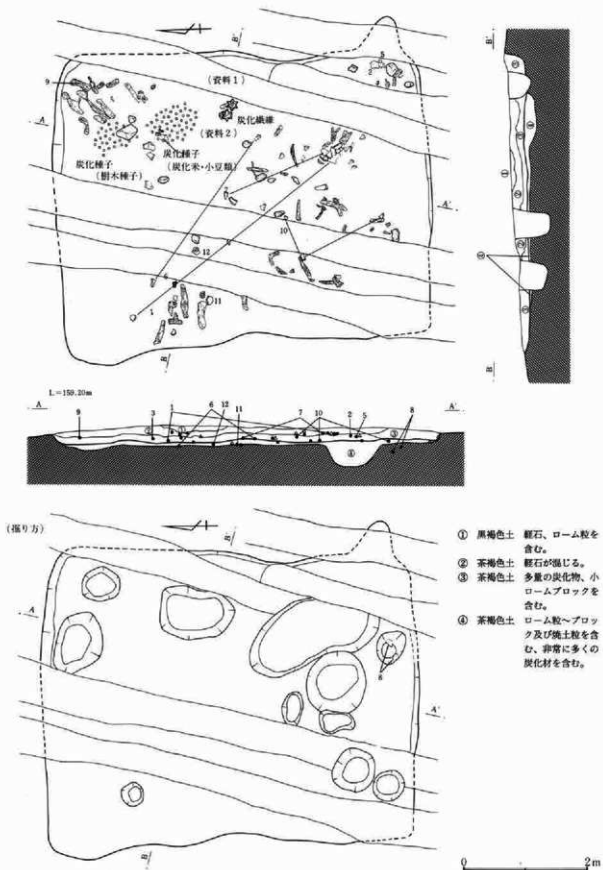
## 121号住居跡 (第73・74図、図版20・67・68・98)

本住居跡は、第4次調査区南部のほぼ平坦な地点にあり、21-29・30グリッドに位置する。

重複する住居跡等は認められず、単独で存在するが、主要部分の多くは耕作溝による深い攪乱を受ける。

住居の掘り込みは、黄褐色ローム層に施されるが全体的にやや不明瞭な状況であり、特に西壁方向は緩やかな傾斜の関係で確認は困難であった。東西4m65cm、南北6mの南北方向に長軸をもつ長方形を呈し、主軸方向は、N-94°-Eを示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、傾斜上位の東壁際に最大23cmが残存しているが部分的には不明瞭であった。床面には貼り床が施されており、中央付近は特に堅く踏み締められているが、壁際はやや軟弱であった。貯蔵穴や柱穴、周溝は検出されなかった。

第3章 平安時代の遺構と遺物



第72図 121号住居跡実測図

掘り方部分は全体的に平坦な部分が多くを占めるが、竪前部および北東コーナー周辺部には円形もしくは楕円形を呈する明瞭な掘り込みをもつ土坑が確認されている。

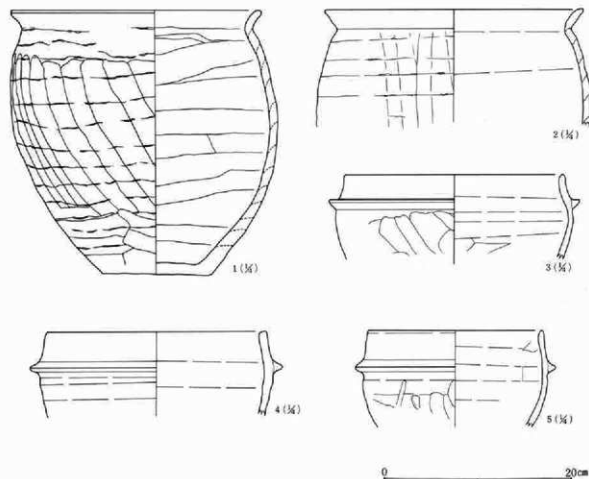
覆土は、3層に分層され、自然堆積状況を示している。

竪は、長辺である東壁の南東コーナー際に寄った位置に構築されている。しかし、耕作溝による擾乱が竪の大部分を破壊しており、わずかに先端部の焼土化部分と、焚き口周辺の竪構築材に使用されたと考えられる石材の出土が確認されたにとどまる。

本住居跡は、火災を被ったものと考えられ、床面上を中心として非常に多量の炭化材と焼土が出土している。炭化材の分布は散乱した状況にあるが、中央部へ向かった傾向の認められるものも見られる。多くは垂木にあたるものと想定され、棟木に想定される炭化材は確認されなかった。

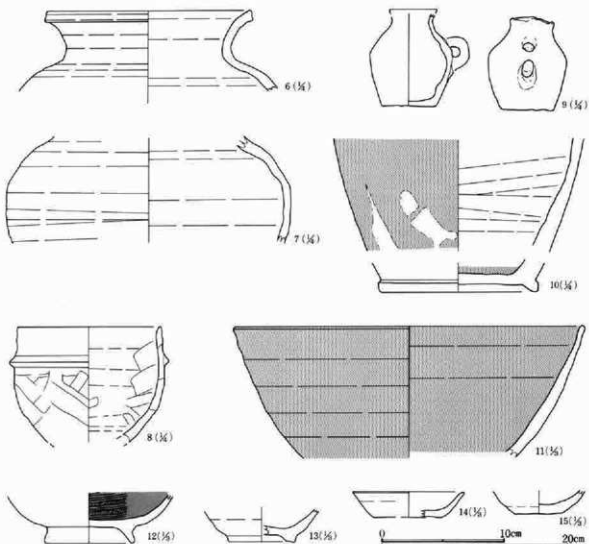
炭化材の下部からは、同じく炭化した有機質遺物の出土が認められた。炭化材と床面に圧着された状況で、炭化繊維が出土しており、絹の平織の布や真綿状製品をはじめとした4種類の製品であることが判明した。この他、炭化繊維の北側には炭化した植物種子の分布が認められた。炭化米と小豆状のマメ類が混在した集中部と、数種類の大型の炭化種子のまとまった分布が確認された。いずれも食用として住居内に持ち込まれた状況にあると考えられる。一軒の住居跡で衣食住に関する情報が得られたことは興味深い。

土器は、床面に散乱して出土しており、多くの器種の存在が知られる。



第73図 121号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物



第74図 121号住居跡出土遺物実測図(2)

121号住居跡出土遺物観察表

標記番号 図版番号	土器種別 器	出土状況 残存状況	法量 (cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
73-1 67	土師器 甕	床面+3 ~11 一部欠損	口 26.6 底 11.2 高 28.2	①砂粒~小石 ②酸化焙、やや軟質 ③淡赤褐色~褐色	胴部は丸く膨らみ、口縁部は短く屈曲して外反。口縁部横溝で、胴部 外面覆削り。内面荒撫で。底部無で。	内面に付着物 外面に煤付着 内面やや磨滅
73-2 67	土師器 甕	床面+6 3/6残存	口 27.4 底 - 高 (12.4)	①砂粒~小石、雲母 ②酸化焙、やや硬質 ③におい褐色~褐色 部分的に黒変	口縁部は屈曲して外反する。輪積痕顕著。口縁部側で、胴部 外面弱い削り状の痕で、内面荒撫で。	
73-3	須恵器 羽蓋	床面+11 3/6残存	口(23.4) 底 - 高 (8.9)	①砂粒~小石、石英 ②酸化焙気味、やや硬質 ③(外)淡黄褐色 (内)大平が黒変	口縁部はわずかに内傾する。口縁部横溝で、胴部 外面覆削り。内面荒撫で。	
73-4	須恵器 羽蓋	覆土中 3/6残存	口(23.4) 底 - 高 (8.9)	①砂粒~小石 ②酸化焙気味、やや硬質 ③(外)淡黄褐色 (内)大平が黒変	口縁部はわずかに内傾し、端部は面取り。内外面ともにロゴロ整形。	
73-5 67	須恵器 羽蓋	床面+6 3/6残存	口(18.6) 底 - 高 (10.2)	①砂粒~小石 ②酸化焙、やや硬質 ③におい黄褐色~褐色	口縁部はわずかに内傾する。脚は断面三角形だが歪みあり。内外面ともにロゴロ整形。胴部外面は覆削りが加わる。	

## 第2節 竪穴住居跡と出土遺物

探検番号 図版番号	土器種類 器 種	出土状況 残存状況	法量(cm) (#)	①胎土 ②構成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備 考
74-6 68	須恵器 壺	床面+1 ~2 互残存	口(22.0) 底— 高(8.5)	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい褐色~にぶい褐色	口縁部は外湾して開く。頸部は狭い面取り。 内外面ともにロクロ整形。	
74-7	須恵器 壺	床面+6 ~11 互残存	口— 底— 高(11.4)	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③ 褐色~明褐色 大半が黒変	胴部は丸く膨らむ。内外面ともにロクロ整形。	内面に被熱による 円形剥落
74-8 68	須恵器 羽 蓋	掘り方中 互残存	口(15.2) 底— 高(12.2)	①砂粒~小石、石英 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい褐色~にぶい褐色	胴部は丸く膨らみ、口縁部はわずかに内傾す る。口縁部横溝で、胴部 外面部削り。内面 荒面。	
74-9 68	須恵器 壺	床面+10 口縁部一 部欠損	口— 底 5.9 高(9.8)	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③洗黄褐色~にぶい褐色	胴上部が直る。胴部を取っ手の痕跡あり。口 縁部は短く外反気味に立ち上がる。内外面、 底部ともに施で。	外面傷付着顕 著。内面に沈着 物付着
74-10	須恵器 瓶	床面+3 互残存	口— 底(12.8) 高(8.8/2.3)	①緻密 ②還元焰、堅緻 ③明オリーブ灰色	胴部はわずかに内湾して立ち上がる。内外面 ともにロクロ整形。	
74-11	灰陶器 大形 瓶	掘り方中 互残存	口(28.0) 底— 高(10.3)	①緻密 ②還元焰、堅緻 ③灰白色	体部は緩やかに内湾して立ち上がる。内外面 ともにロクロ整形。	
74-12	須恵器 高台付壺	床面 底部周辺 残存	口— 底 7.3 高(3.9)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、 やや硬質 ③(外)にぶい褐 色 (内)黒色処理	体部は緩やかに内湾して立ち上がる。体部 外面ロクロ整形。内面磨き。底部無で。付高 台。	
74-13	須恵器 高台付壺	覆土中 互残存	口— 底(5.4) 高(2.5)	①砂粒 ②還元焰気味、やや軟質 ③灰白色~灰黄色	体部は緩やかに内湾して立ち上がる。内外面 ともにロクロ整形。底部無で。付高台。	
74-14	須恵器 皿	覆土中 互残存	口(9.0) 底(5.6) 高(2.0)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③明赤褐色 底部黒変	体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部はや や外反する。内外面ともにロクロ整形(右回 転)。底部は回転未切り無調整。	
74-15	須恵器 皿	覆土中 互残存	口— 底(3.8) 高(1.9)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、 やや軟質 ③(外)にぶい黄 褐色 (内)黒味がかかる	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面と ともにロクロ整形。底部は回転未切り無調整。	

## 122号住居跡(第75~77図、図版21・68)

本住居跡は、第4次調査区の南東部の緩傾斜面にあり、17・18—30・31グリッドに位置する。

重複関係としては、後出する264号住居跡(平安)を破壊して構築されている状況が確認されている。

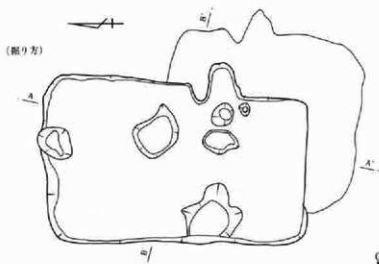
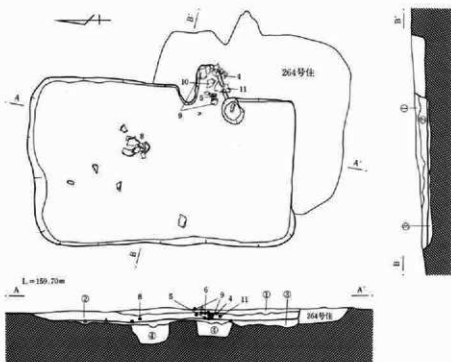
住居の掘り込みは、黄褐色ローム層にまで及び残存状況はやや良好である。南北4m26cm、東西2m67cmの南北方向に細長い長方形の平面形を呈し、主軸方向はN-90°-Eを示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、最大9cmが残存する。なお南壁は重複関係により不明瞭な部分が多い。床面には貼り床が施されており、全体に叩き締められているが、中央部から電周辺部にかけてはより堅緻であった。電の右脇には小さなビットが掘り込まれているが、貯蔵穴とは考えられない。その他、柱穴や周溝も検出されなかった。

掘り方面には、複数の土坑が確認された。床面中央東よりの位置には、径70cmほどのやや不整な円形の土坑があり、西壁際にも同様の土坑が掘り込まれている。

覆土は、2層に分層され、自然堆積状況を示している。

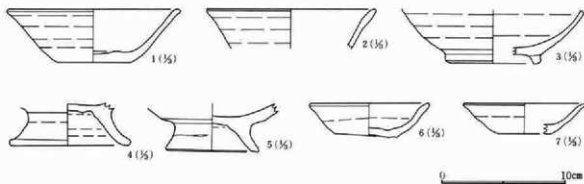
竈は、長辺である東壁の中央よりもやや南よりの位置に構築されている。焚き口部は壁の内側にやや入り込んでおり、袖の痕跡が確認されている。燃焼部は、壁の内側から外側へと張り出す。焚き口部の幅は50cm、燃焼部の長さは50cmを測る。なお、火床面の焼土化はあまりみられない。

遺物は、竈内から羽蓋2点と、土蓋が出土している。また、床面のほぼ中央部からは大形の甔の下半部が潰れた状況で出土している。他に環・埴・皿の出土が知られる。



- ① 茶褐色土 緑石を混じる。
- ② 茶褐色土 ロームブロックを含む。
- ③ 茶褐色土 2層に比して、含有物が少ない。
- ④ 黒褐色土 ローム小ブロックを多量に含む。

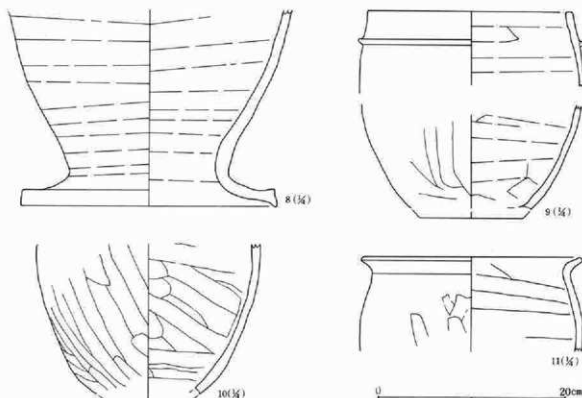
第75図 122号住跡実測図



第76図 122号住跡出土遺物実測図(1)



## 第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第77図 122号住居跡出土遺物実測図(2)

## 122号住居跡出土遺物観察表

標高番号 図版番号	土器類別 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (#)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
76-1 68	須恵器 坏	覆土中 片残存	口 13.9 底 6.0 高 4.2	①砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰白色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
76-2	須恵器 埴	覆土中 片残存	口(13.5) 底 — 高(3.1)	①砂粒 ②還元焰気味、やや硬質 ③浅黄色～にぶい黄色 一部黒変	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。	
76-3	須恵器 高台付埴	覆土中 片残存	口 — 底(7.6) 高(4.4)	①砂粒、白色面粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	体部は緩やかに内湾して立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。付高台。	
76-4	須恵器 高台付埴	竈内 高台付埴 残存	口 — 底 9.6 高(3.3)	①砂粒、雲母 ②還元焰、やや硬質 ③(外)にぶい黄色 ④(内)明褐色	高台部は外反して大きく開く。内外面ともにロクロ整形。	
76-5	須恵器 高台付埴	床面 高台部片 残存	口 — 底 7.5 高(3.8)	①砂粒、雲母 ②還元焰、やや硬質 ③浅黄褐色～にぶい黄色	体部は下半におずかに横をなして開く。高台部は「ハ」字に開く。内外面ともにロクロ整形。	
76-6 68	須恵器 皿	覆土中 完形	口 9.5 底 5.0 高 2.7	①砂粒～雲母 ②還元焰、やや硬質 ③(外)にぶい黄色 ④(内)にぶい褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
76-7	須恵器 皿	覆土中 片残存	口 9.8 底 4.3 高 2.4	①砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③褐色～明褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
77-8 68	須恵器 甗	床面 下半部残 存	口 — 底 27.4 高(20.7)	①砂粒、雲母 ②還元焰気味、やや硬質 ③灰白色～灰オレンジ色 一部黒変	胴部はやや内湾気味に立ち上がり、裾部は屈曲して広がり、肩部取り。内外面ともにロクロ整形。	内面に付着物

### 第3章 平安時代の遺構と遺物

採回番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (K)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
77-9	須志 甕 羽 蓋	甕内 残存	口(21.7) 底(12.8) 高(7.9)	①砂粒～小石 ②酸化焰 やや硬質 ③(外)にぶい橙 色 (内)暗褐色	口縁部はわずかに内傾し、端部は面取り。口 縁部横溝で、胴部 外面側へ面取り。内面側 溝で。	外面黒変あり
77-10	須志 甕 羽 蓋	甕内 残存	口— 底— 高(15.8)	①砂粒～小石 ②酸化焰、 やや硬質 ③橙 色～明赤褐色 一部黒変	胴部はやや内湾気味に立ち上がる。胴部 外 面側面取り。内面側溝で。	断面にも煤付着 甕材への転用
77-11	土師 甕 葉	甕内 残存	口(23.1) 底— 高(10.0)	①砂粒～小石、雲母 ②酸 化焰、やや硬質 ③(外)明 褐色 (内)にぶい橙色	口縁部は「く」字に強く外反する。口縁部横 溝で。胴部 外面側で、一部面取り。内面側 溝で。	

#### 123号住居跡 (第78～80図、図版21・68)

本住居跡は、第4次調査区南東隅のほぼ平坦面にあり、16-31グリッドに位置する。

他の住居跡との重複関係は認められず単独で存在している。

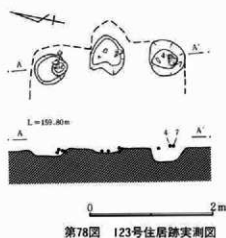
住居の掘り込みは、黄褐色ローム層の上面にとどまり残存状況は極めて不良といえる。住居の平面形や規模などに関しては不明な点が大部分である。ローム面が露出しており、床面は残存していないものと考えら

れる。貯蔵穴は、北東コーナー部分と南東コーナー部分の2カ所で検出された。北東隅のものは直径50cm、深さ7cmで、南西隅のものは直径58cm、深さ10cmを測り、いずれもほぼ円形を呈する。これらから南北の壁の幅は2m50cm程度と想定される。なお柱穴と周溝は検出されなかった。

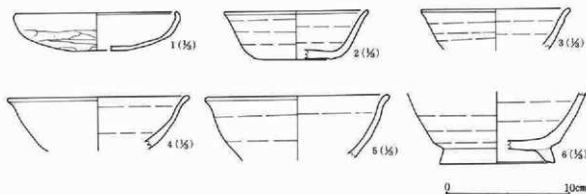
掘り方や覆土に関しては不明である。

甕は、東壁に構築されている。火床面等は残存せず、燃焼部下面の掘り込みのみが確認された。

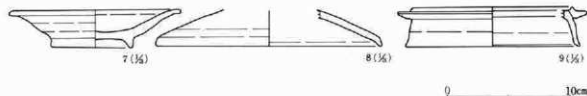
遺物は、両側の貯蔵穴内と甕部分から坏・埴類の他、蓋が出土している。



第78図 123号住居跡実測図



第79図 123号住居跡出土遺物実測図(1)



第80図 123号住居跡出土遺物実測図②

123号住居跡出土遺物観察表

採掘番号 図版番号	土器類別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
79-1	土師器 坏	覆土中 片残存	口(13.0) 底(10.0) 高(3.0)	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい褐色～橙色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部 はやや内傾する。口縁部、内面横溝で。底部 整形。	
79-2 68	須恵器 坏	覆土中 片残存	口(11.6) 底(6.8) 高(3.8)	①砂粒、白色細粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰白色～灰色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部 は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形 (右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
79-3	須恵器 坏	覆土中 片残存	口(12.0) 底— 高(3.2)	①砂粒 ②還元焰気味、やや軟質 ③灰白色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部 は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。	
79-4	須恵器 坏	貯蔵穴内 片残存	口(14.6) 底— 高(4.2)	①砂粒、雲母 ②還元焰気味、やや硬質 ③浅黄色～にぶい黄色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部 は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。	
79-5	須恵器 坏	窰内 片残存	口(14.6) 底— 高(5.6)	①砂粒、雲母 ②還元焰、焼し やや硬質 ③灰オリーブ色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部 は小さく外反する。内外面ともにロクロ整 形。	
79-6 68	須恵器 高台付埴	覆土中 片残存	口— 底(9.2) 高(5.5)	①砂粒 ②還元焰気味、やや軟質 ③灰白色	体部は緩やかに内湾して立ち上がる。内外面 ともにロクロ整形。底部横溝。付高台。	
80-7 68	須恵器 高台付皿	貯蔵穴内 口縁部一 部欠損	口13.8 底6.6 高3.0	①砂粒、雲母 ②還元焰気 味、やや軟質 ③(外)灰オ リーブ色 (内)大半が黒変	体部は直線的に開き、口縁部は水平気味に強 く外反。内外面ともにロクロ整形。底部は回 転糸切り無調整。付高台。	
80-8	須恵器 蓋	覆土中 片残存	口(18.1) 底— 高(2.8)	①砂粒～小石、白色細粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰白色	天井部はわずかに内湾して開く。内外面とも にロクロ整形。	
80-9 68	須恵器 (短頸壺) 蓋	覆土中 片残存	口(14.0) 底— 高(3.1)	①細砂粒、白色細粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色～灰色	天井部平坦。肩部に肩と上面に1条の突帯を 有する。口縁部は外傾する。内外面ともにロ クロ整形。	

## 133号住居跡 (第81～83図、図版21・68)

本住居跡は、第4次調査区南部の西側に緩やかに傾斜する部分にあり、20・21～28・29グリッドに位置する。

重複関係としては、先行する137号住居跡(平安)の北西部分を破壊して構築されている状況が確認されている。

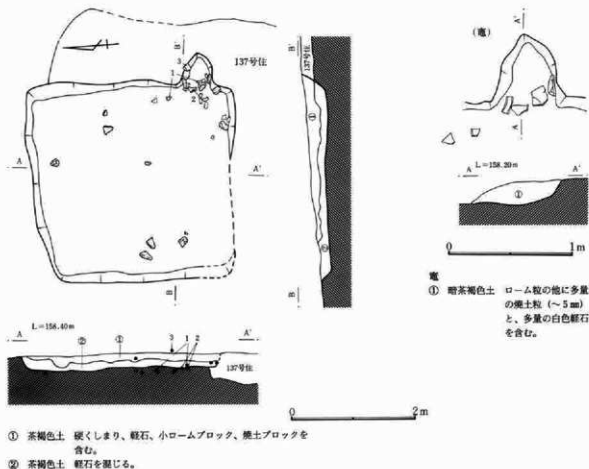
住居の掘り込みは黄褐色ローム層に施されており重複部分を除き明瞭に確認された。東西3m15cm、南北3m36cmを測るほぼ正方形に近い平面形をとり、主軸方向はN-90°-Eを示す。壁はやや開き気味に立ち上がり最大20cmが残存する。床面は、貼り床は施されておらず、ローム面を直接叩き締めて使用している。床面中央部から竈周辺部にかけては特に堅緻である。床面上には貯蔵穴や、柱穴、周溝などの施設は検出されなかった。

覆土は、2層に分層され自然堆積状況を示している。

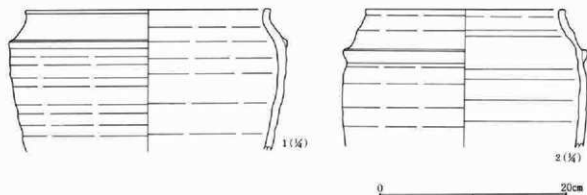
### 第3章 平安時代の遺構と遺物

竈は、東壁の南東コーナー部分に構築されている。焚き口部をはじめとし埋設された石が残存しており、石組の構造をもつ竈である。焚き口部は壁際の部分にあり、燃焼部は、壁の外側に張り出し、幅約50cm、張り出し長は60cmに及ぶ。火床面はほぼ平坦であり、煙道部へは段状をなして移行するとみられるが、煙道部は残存していない。火床面の焼土化はさほど顕著ではない。また支脚や天井石などは検出されなかった。床面上に散乱する石は電構築材の可能性がある。

遺物は、竈内を中心に出土しており、羽釜の他に須恵器の坏・埴類が認められた。

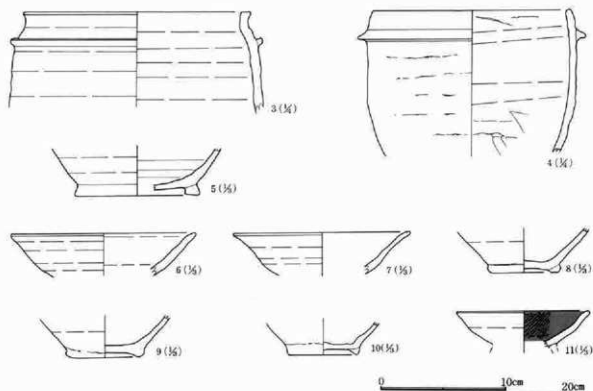


第81図 133号住居跡実測図



第82図 133号住居跡出土遺物実測図(1)

## 第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第83図 133号住居跡出土遺物実測図(2)

133号住居跡出土遺物観察表

押図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	流量(cm) (#)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
82-1 68	須恵器 羽釜	竈内 瓦残存	口(26.2) 底— 高(14.9)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや軟質 ③褐色～暗褐色	口縁部は内傾し、肩部は直立気味に立ち強い面取り。踵は低く不明瞭。内外面ともにロクロ整形。	画面やや磨滅
82-2	須恵器 羽釜	竈内 瓦残存	口 21.3 底— 高 14.6	①砂粒～小石 ②酸化焰、やや硬質 ③褐色～明赤褐色	口縁部は内傾し、肩部は直立気味に立ち強い面取り。踵はやや上向き。内外面ともにロクロ整形。	
83-3 68	須恵器 羽釜	竈内 瓦残存	口(24.2) 底— 高(10.8)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、 やや硬質 ③(外)黄褐色 ～褐色 (内)一部黒変	口縁部はわずかに内傾し、肩部は直立気味に立ち強い面取り。内外面ともにロクロ整形。	
83-4	須恵器 羽釜	竈土中 瓦残存	口 21.0 底— 高 15.4	①砂粒～小石、石英 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい赤褐色	口縁部はわずかに内傾し、肩部は弱い面取り。踵は粗雑、外面倒い無でにより輪痕を残す。内面荒磨で。	
83-5 68	須恵器 瓶	竈内 瓦残存	口— 底 13.4 高(5.1)	①砂粒、白色細粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	断面台形の高台部。胴部下半は内湾気味に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。	
83-6 68	須恵器 埴壇	竈土中 瓦残存	口(14.8) 底— 高(3.4)	①砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③明赤褐色～赤褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部内面は強い横磨でにより面取り状になる。内外面ともにロクロ整形。	
83-7	須恵器 坏	竈土中 瓦残存	口(14.2) 底— 高(3.3)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい黄褐色～褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。	
83-8 68	須恵器 高台付埴壇	竈土中 瓦残存	口— 底(5.8) 高(3.5)	①砂粒～小石 ②還元焰気味、やや軟質 ③(外)灰白色 (内)灰色	体部は緩やかに内湾して立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。底部は回転糸切り無調整。付高台。	内面は横し状
83-9 68	須恵器 高台付埴壇	竈土中 瓦残存	口— 底(6.2) 高(3.2)	①砂粒 ②還元焰気味、や や軟質 ③(外)浅黄色～ にぶい黄色 (内)一部黒変	体部は緩やかに内湾して立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。底部無で。付高台。	

第3章 平安時代の遺構と遺物

探訪番号 図版番号	土器種類 器	出土状況 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
83-10 68	須恵器 高台付埴	覆土中 底部周辺 残存	口一 底 (5.6) 高 (2.6)	①砂粒～小石、雲母 ②還元焰気味、やや軟質 ③灰白色 大半が黒変	体部は緩やかに内湾して立ち上がる。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。付高台。	大半が横し状
83-11	須恵器 高台付埴	覆土中 片残存	口(10.6) 底一 高 (2.7)	①砂粒、雲母 ②還元焰、 やや硬質 ③(外)明褐色 口縁黒褐色 (内)黒色処理	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。体部 外面横撫で内面直磨き。	

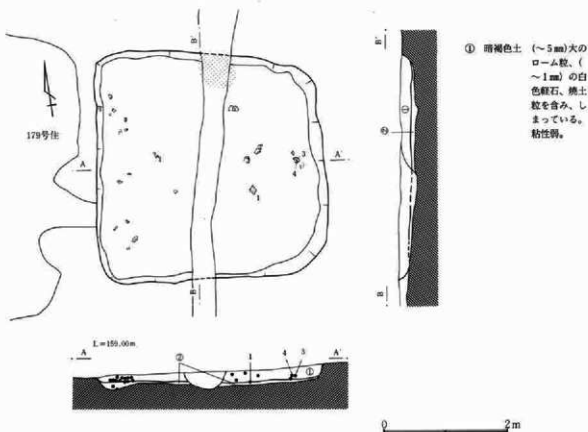
134号住居跡 (第84～86図、図版22・69・92)

本住居跡は、第4次調査区南部のほぼ平坦部にあり、18・19-29・30グリッドに位置する。

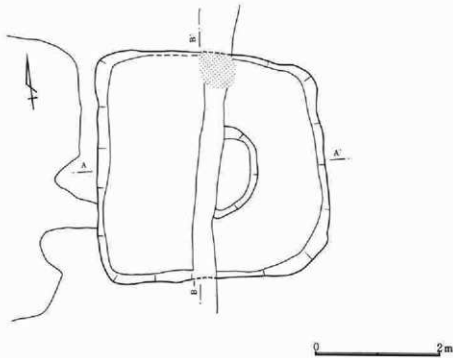
重複関係としては、先行する179号住居跡(奈良)の竈煙道先端部分を破壊している状況が確認されている。また床面中央部には、溝状の遺構が南北方向に掘り抜いている。

住居の掘り込みは、黄褐色ローム層に施されており、明瞭に確認された。規模は南北2 m45cm、東西2 m50 cmを測り、平面形はやや台形状の正方形に近い形状を呈し、主軸方向はN-50°-Eを示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、最大24cmが残存している。床面には、わずかながら貼り床が施されているが、全体的にやや軟弱である。床面上では、貯蔵穴や柱穴、周溝などの施設は検出されなかった。

掘り方は、緩やかな起伏をもつ程度である。なお床面のほぼ中央部には南北1 m36cm、深さ18cmほどの円



第84図 134号住居跡実測図(1)

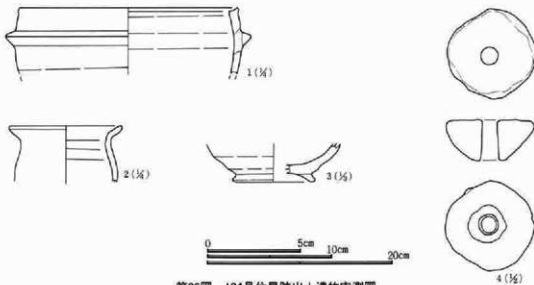


第85図 134号住居跡実測図(2)

形を呈すると思われる溜鉢状の土坑が検出されたが、西半部は溝の擾乱により確認されなかった。

覆土は、暗褐色土の1層が確認されたのみである。

竈は、明瞭には確認されなかった。しかし北壁のほぼ中央部の溝状遺構に掘り抜かれた下面には、わずかに焼土化した部分が認められていることから、この部分に竈が構築されていた可能性が高い。竈の構造や規模に関しては不明である。遺物は、土器の小破片が散乱している程度である。なお石製紡錘車も出土している他に、瓦の小破片は、188号住居跡との遺構間接合が認められた。

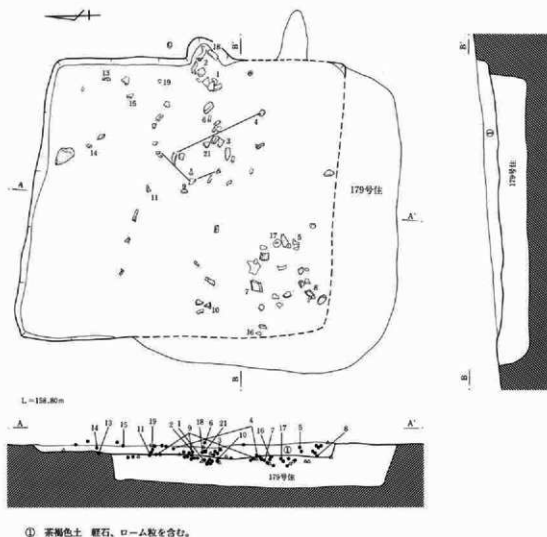


第86図 134号住居跡出土遺物実測図

第3章 平安時代の遺構と遺物

134号住居跡出土遺物観察表

採回番号 図版番号	土器類別 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整・成形技法の特徴	備考
86-1 69	須恵郡 羽釜	床面 瓦残存	口(23.4) 底— 高(7.0)	①砂粒 ②酸化焙気味、やや硬質 ③によい黄褐色～浅黄褐色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。 脚は断面三角形。内外面ともにロクロ整形。	
86-2	土師郡 小形壺	覆土中 瓦残存	口(12.2) 底— 高(6.0)	①砂粒～小石、石英 ②酸化焙、やや硬質 ③暗赤褐色～赤褐色	口縁部は「く」字に屈曲して外反する。口縁部横無で、胴部内面寛無で。	外面器面剝落あり
86-3	須恵郡 高台付埴	覆土中 瓦残存	口— 底(5.6) 高(3.0)	①砂粒、白色細粒 ②還元焙、やや硬質 ③灰色～灰オリーブ色	体部は緩やかに内傾して立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。付高台。	
86-4 92	石製品 紡錘車	床面+3 完形	径 4.77/2.07 厚 2.17 重54.0 孔径0.75		やや不整な断面台形。下方からの穿孔。広面は使用による同心円状の磨滅がわずかに認められる。下面・稜も磨滅。	凝灰岩



第87図 135号住居跡実測図



## 135号住居跡 (第87～89図、図版22・69・87・91・92・93)

本住居跡は、第4次調査区南部のほぼ平坦な部分にあり、18・19-28・29グリッドに位置する。

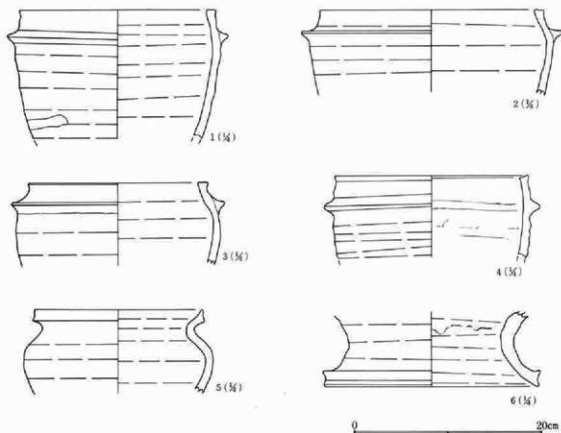
重複関係としては、大部分が先行する179号住居跡(奈良)の上部に築かれている状況が確認されている。

住居の掘り込みは、ほとんどが179号住居跡の覆土中に施されているため確認は困難であった。住居の範囲は、土層観察に加え遺物の分布状況から判断した。規模は、東西4m47cm、南北4m97cmを測り、平面形はやや歪んだ正方形を呈する。なお主軸方向はN-82°-Eを示す。壁はやや開き気味に立ち上がる部分が検出されており、最大21cmが残存している。床面は、ローム面に掘り込んでいる部分では貼り床は施されてはならず、また179号住居跡覆土部分でも貼り床の痕跡は判然としなかった。床面上には貯蔵穴や柱穴、周溝は検出されなかった。

覆土は、1層が認められたが堆積状況は明瞭でない。

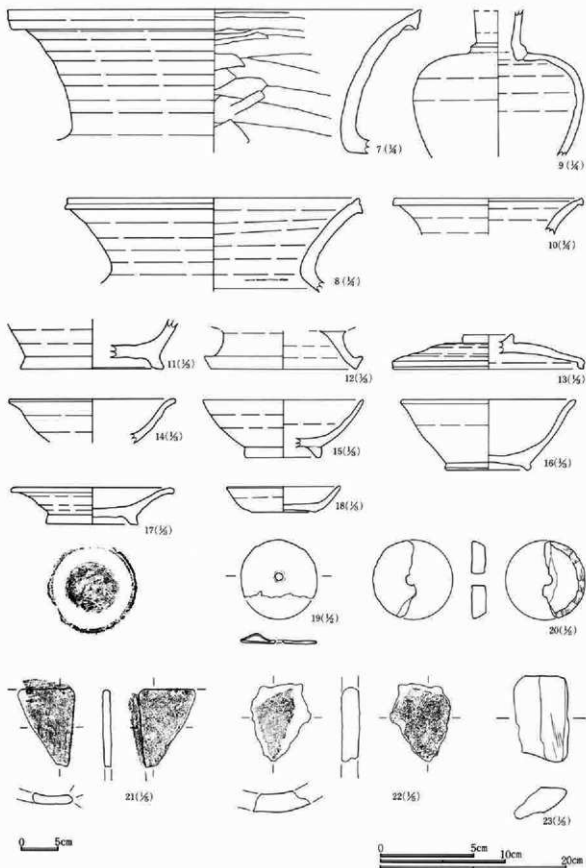
竈は、東壁のほぼ中央部分に構築されている。焚き口部分はやや壁の内側になると考えられる。燃焼部は壁の外側に張り出しており、幅は55cm、張り出し長は36cmを測る。火床面に支脚は遺存せず、また焼土化はさほど顕著ではない。

遺物は、竈内のほかに、床面周辺を中心として多量の土器が出土している。須恵器の羽釜・甕・甕・壺・瓶などに加え、埴・皿・蓋など多器種が出土している。さらに、瓦の破片、砥石も認められる。出土状況からは、廃棄行為の所産と考えられる。



第88図 135号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物



第89図 135号住居跡出土遺物実測図(2)

135号住居跡出土遺物観察表

調査番号 図版番号	土器種別	出土状況 残存状況	法量(cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
88-1 69	須恵器 羽蓋	床面 瓦残存	口(21.0) 底— 高(13.5)	①砂粒～小石、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③灰色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り、 脚は断面三角形。内外面ともにロクロ整形。	外面に黒斑、内 面に付着物、器 面やや荒れる
88-2 69	須恵器 羽蓋	竈内 瓦残存	口(23.8) 底— 高(9.0)	①砂粒 ②酸化焰気味、やや軟質 ③黒褐色～黄灰色	口縁部は内傾し、端部は強い面取り、脚は高 く整う。内外面ともにロクロ整形。	窯等の付着あり 電材への転用
88-3 69	須恵器 羽蓋	床面+6 瓦残存	口(19.2) 底— 高(8.7)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい黄褐色 一部黒変	口縁部は内傾し、端部は強い面取り、脚は断 面三角形。内外面ともにロクロ整形。	内面に付着物
88-4 69	須恵器 羽蓋	竈内 瓦残存	口(20.6) 底— 高(8.7)	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③灰褐色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り、 脚は断面三角形。内外面ともにロクロ整形。	
88-5	須恵器 罍	床面+22 瓦残存	口(18.0) 底— 高(8.8)	①砂粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	胴上部は丸く膨らみ、口縁部は「く」字に強 く屈曲して外反、端部は強い面取りされ口縁 帯をなす。内外面ともにロクロ整形。	
88-6	須恵器 甌	床面+24 瓦残存	口(22.8) 底— 高(7.9)	①砂粒～小石 ②酸化焰気味、やや硬質 ③黄褐色～にぶい黄色	胴部から底部へは外湾して開き、端部は強い 面取りがなされる。内外面ともにロクロ整形。 内面に輪轡痕を残す。	
89-7 69	須恵器 罍	床面 瓦残存	口(44.0) 底— 高(15.0)	①砂粒～小石 ②酸化焰、硬質 ③明褐色～棕色	口縁部は頸部で屈曲して大きく外反し立ち上 がる。口縁端部は粘土帯が付けられ口縁帯をな す。内外面ロクロ整形。内面一部黒変。	内面やや煤付着
89-8	須恵器 罍	床面 瓦残存	口(31.2) 底— 高(9.9)	①砂粒～小石、白色細粒 ②還元焰、堅緻 ③灰色	口縁部は頸部で屈曲して大きく外反し立ち上 がる。口縁部は粘土帯が付けられ口縁帯をなす。 内外面ともにロクロ整形。	
89-9 69	須恵器 甌	床面 瓦残存	口— 底— 高(15.5)	①細砂粒 ②還元焰、硬質 ③灰色～灰白色	頸部に断面三角形の突帯がめぐり、口縁部は 直立気味に立ち上がる。胴部は上位が強く張 る。内外面ともにロクロ整形。	口縁部は92号住 居跡出土 物がかかる
89-10	須恵器 罍	床面 瓦残存	口(20.2) 底— 高(3.8)	①砂粒～小石、白色細粒 ②還元焰、堅緻 ③灰色	口縁部は外反して開き、端部は粘土の積み出 しによる小さな口縁帯をなす。内外面ともに ロクロ整形。	内面に自然隆状 による飛状の 物が見られる
89-11	須恵器 甌	床面 瓦残存	口— 底(11.4) 高(3.9)	①砂粒～小石、白色細粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰色 底部明オリブ色	胴部は外反して立ち上がる。高台部は「ハ」 字状に開く。内外面ともにロクロ整形。	
89-12	須恵器 甌	竈上中 瓦残存	口— 底(11.6) 高(3.0)	①砂粒、白色細粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	高台部は「ハ」字状に開き、底部は積み出さ れ端部をなす。内外面ともにロクロ整形。	高台部外面に自 然物がかかる
89-13	須恵器 蓋	床面 瓦残存	筒(4.0) 口(15.2) 高(2.7)	①砂粒～小石、白色細粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	天井部はあまり張らず低い。環状構み、口縁 部はやや外反。内外面ともにロクロ整形。	
89-14	須恵器 坏	床面+4 瓦残存	口(13.2) 底— 高(3.4)	①砂粒、白色細粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部 は強く外反する。内外面ともにロクロ整形。	
89-15	須恵器 高台付埴	床面+12 瓦残存	口(12.8) 底(6.0) 高(4.5)	①砂粒～小石、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③赤褐色～明赤褐色	体部は腰やかに内湾して立ち上がる。内外面 ともにロクロ整形、底部は回転糸切り無調整。 付高台。	
89-16 69	須恵器 高台付埴	床面 瓦残存	口(14.0) 底(6.9) 高(5.5)	①砂粒 ②還元焰気味、やや軟質 ③灰オリブ色～灰白色	体部は腰やかに内湾して立ち上がり、口縁端 部はわずかに外反する。内外面ともにロクロ 整形。底部は回転糸切り無調整。付高台。	
89-17 69	須恵器 高台付皿	床面 瓦残存	口(13.0) 底7.3 高(2.9)	①砂粒～小石、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい褐色～にぶい棕色	体部はやや外反気味に反って開く。内外面と ともにロクロ整形。底部は回転糸切り無調整。 付高台。	
89-18 69	須恵器 皿	竈内 瓦残存	口(9.2) 底(5.1) 高(2.0)	①砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③明赤褐色～棕色	体部はほぼ直線的に開く。内外面ともにロク ロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。 やや上底気味。	
89-19 91	鉄製品 紡錘車	床面+20 瓦残存	径 4.13 厚 0.18 孔径 0.3×0.4	重 6.1	紡錘部分。錆化が著しい。孔の周縁は片面が 盛り上がり、逆は窪む。	

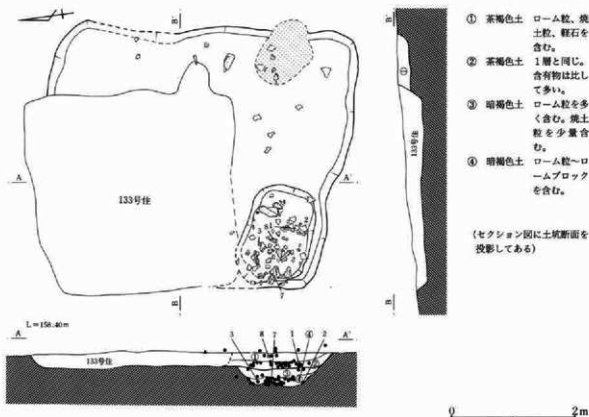
### 第3章 平安時代の遺構と遺物

採出番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (#)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備 考
89-20 92	石製品 紡錘車	覆土中 残存	径 4.12/3.52 厚 0.74 孔径0.56		低い断面台形。使用による磨減は不明瞭。下面は欠損する。	滑石質の蛇紋岩
89-21 87	瓦 平瓦	床面+5 破片	厚 1.2	①砂粒、雲母 ②酸化焰、 やや軟質 ③によい黄褐色	一枚造り。凸面側で。凹面布目。側面面取り 2回。広範囲面取り。	吉井・藤岡系
89-22 87	瓦 平瓦	覆土中 破片	厚 2.1	①砂粒、白色細粒 ②酸化 焰、やや硬質 ③明褐色	一枚造り。凸面側で。凹面布目	吉井・藤岡系
89-23 93	砥石 破片	覆土中 破片	長 6.6 幅 (4.8) 厚 2.1 重 (80)		断面変形。両端部平滑。全面を使用。	石美安山岩 (門石)

#### 137号住居跡 (第90～92図、図版21・69・93)

本住居跡は、第4次調査区南部の西側へ向かう緩傾斜面にあり、20・21-28・29グリッドに位置する。重複関係としては、後出する133号住居跡(平安)により、北西部分の多くを破壊されている。

住居の掘り込みは、黄褐色ローム層に施されるが、133号住居跡との重複関係に加え、攪乱を多く受けていることから確認は困難であった。確認部分からは、東西4m10cm、南北4m95cmを測り、平面形は南北方向に長軸をもつやや重んだ長方形を呈するものと見られる。主軸方向はN-110°-Eを示す。壁はやや開き気味に立ち上がり、最大20cmが残存する。床面は、部分的に貼り床が施されているが、他はローム面を叩き締めてある。床面中央部以外はやや軟弱といえる。南西コーナー部分には、東西130cm、南北106cmの隅丸長方形、深さ30cmの土坑が設けられているが、貯蔵穴としてはやや疑問も残る。柱穴や周溝は検出されていない。



第90図 137号住居跡実測図(1)

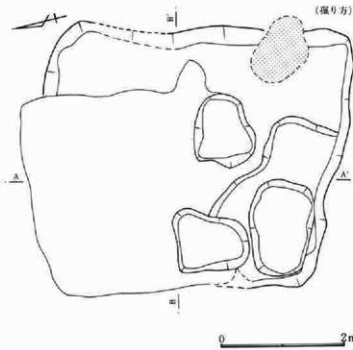
第2節 竪穴住居跡と出土遺物

掘り方面は、南西部分から中央部にかけてやや不整な円形の土坑が掘り込まれている。

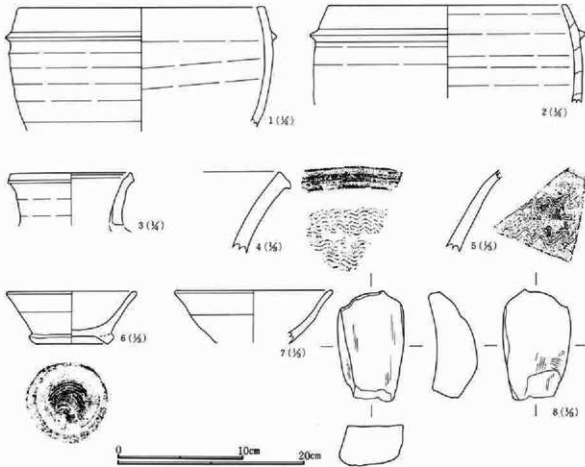
覆土は、観察部分が限られているが、2層に分層され、自然堆積状況を示している。

竈は、南東コーナー付近に焼土の分布が認められているが、風倒木の攪乱の影響を受け、明瞭には確認されなかった。しかし、焼土の範囲からは竈の存在する可能性が高い。

遺物は、竈想定部分周辺と、他に南西隅の土坑内に投棄されたかのような状況で、土器片が下部から上部まで充填された状況で集中して出土している。なお復元率は低い。



第91図 137号住居跡実測図(2)



第92図 137号住居跡出土遺物実測図

## 第3章 平安時代の遺構と遺物

137号住居跡出土遺物観察表

探検番号 採取番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	流量(cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
92-1 69	須恵器 羽蓋	土坑内 瓦残存	口(26.4) 底— 高(13.0)	①砂粒~小石 ②酸化焙灰味、やや硬質 ③淡黄褐色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り、 脚は断面三角形。内外面ともにロクロ整形。	内面に帯付番。 甍材への転用
92-2 69	須恵器 羽蓋	土坑内 瓦残存	口(25.4) 底— 高(10.4)	①砂粒、雲母 ②酸化焙、やや硬質 ③褐色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り、 脚は断面三角形。内外面ともにロクロ整形。	外面粘土付番
92-3	須恵器 甍	土坑内 瓦残存	口12.8 底— 高(5.5)	①砂粒、白色細粒、黒色鉱物 ②還元焙、硬質 ③(外)灰色 (内)自然釉	口縁部はわずかに外反して立ち上がり、端部 は粘土を積み出して口縁帯をなす。内面には 1乗の沈線がめぐる。内外面ロクロ整形。	口縁部内面、外 面裏部に自然釉 がかかる
92-4	須恵器 甍	竈周辺 口縁部破片	口— 底— 高(5.5)	①砂粒、白色細粒 ②還元焙、硬質 ③灰色	口縁部は大きく外反し、端部は粘土を積み出 し口縁帯をなす。内外面ともにロクロ整形。 外面に波状文。	
92-5	須恵器 甍	掘り方中 口縁部破片	口— 底— 高(7.9)	①砂粒、白色細粒、石英 ②酸化焙、硬質 ③にぶい褐色	口縁部は大きく外反して立ち上がる。内外面 ともにロクロ整形。外面に波状文。	
92-6 69	須恵器 高台付埴	覆土中 瓦残存	口(10.3) 底 6.8 高 4.1	①砂粒、雲母 ②酸化焙、 やや硬質 ③内外面焼し状 で黒色化 一部黄褐色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端 部は外反する。内外面ロクロ整形(右回転)。 底部は回転糸切り無調整。粗雑な付台。	
92-7	須恵器 埴	土坑内 瓦残存	口(12.6) 底— 高(4.2)	①砂粒~小石、雲母 ②還元焙灰味、やや軟質 ③灰白色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部 は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。	
92-8 93	磁石	土坑内	長 8.5 幅 5.2 厚 3.4	重 210	上面と左側面は使用により平滑。右側面と裏 面に刀拭しの線条痕。	石英安山岩

## 138号住居跡(第93~95図、図版22・69・87・91・93)

本住居跡は、第4次調査区南部の西側へ向かう緩傾斜部分にあり、18・19-27グリッドに位置する。

重複関係としては、先行する136号住居跡(奈良)の西側を、また205号住居跡(平安)の南半部を破壊して築かれている状況が確認されている。西側は後出する4号溝によって一部掘り抜かれている。

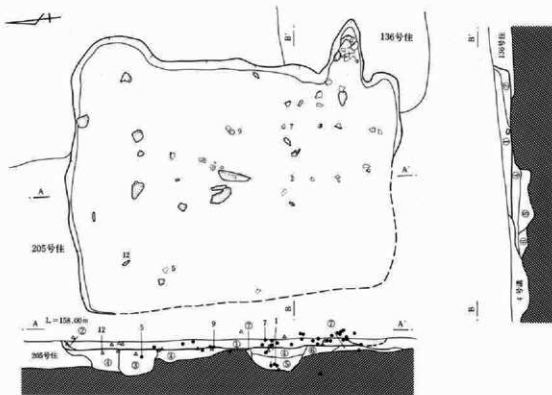
住居の掘り込みは、黄褐色ローム層に施されており、明瞭に確認されている。西壁は4号溝の攪乱によりやや不明瞭だが、北西コーナーからみて南北5m34cm、東西3m35cmを測るとみられる。平面形は南北方向に長軸をもつ長方形を呈するが、北東コーナー部分はやや歪んで張り出している。主軸方向はN-105°-Eを示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、傾斜上位の東壁で最大19cmが残存している。床面は、貼り床が施されており、全体に強く叩き締められているが、特に床面中央部から竈周辺にかけては堅緻である。床面上には貯蔵穴や柱穴、周溝などの施設は検出されなかった。

掘り方は、起伏に富んでいるが、東壁周辺部は一段高まる平坦面をなしている。中央部やや南寄りの位置には110cm×85cm、深さ19cmを測る楕円形の土坑があり、また南西コーナー寄りに85cm×65cm、深さ25cmの土坑があり、内部からはやや大きな石が検出されている。北壁の周辺には不整形な掘り込みが認められる。

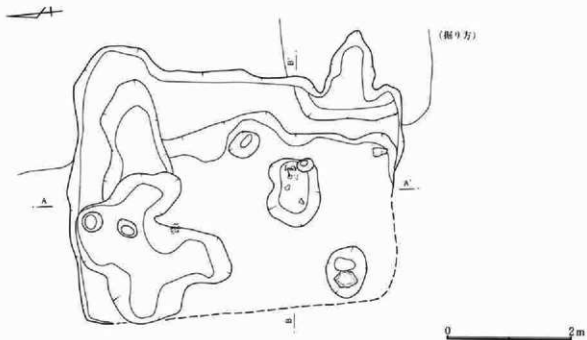
覆土は、2層に分層されており、自然堆積状況を示していると考えられる。

竈は、長辺である東壁の南東コーナーにほぼよった位置に構築されている。焚き口部分は、わずかに袖が壁の内側に張り出している痕跡が認められている。幅は50cmを測る。燃焼部から煙道部は壁の外側に突出している。燃焼部からやや段をなして煙道部分へと移行しており102cmが張り出している。燃焼部の焼土化はさほど顕著ではない。なお床面上に散乱して竈構築材の可能性のある石が出土している。

遺物は、竈内の他は、全体的に散乱した分布状況を示す。

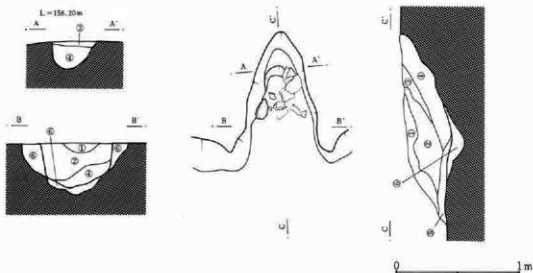


- ① 黒褐色土 白色軽石粒子、ローム粒子を少量含む。 ② 黒褐色土 多量のローム粒子、ロームブロックを含む。  
 ③ 黒褐色土 焼土粒子、ローム小ブロック、ローム粒子を含む。 ④ 黒褐色土 多量のローム粒子をほぼ均一に含む。  
 ⑤ 黒褐色土 多量のローム粒子と少量の焼土ブロックを含む。 ⑥ 黒褐色土 ローム粒子、白色軽石粒子を混じる。  
 ⑦ 明褐色土 ローム粒子、ロームブロックを多量に含む。



第93図 138号住居跡実測図

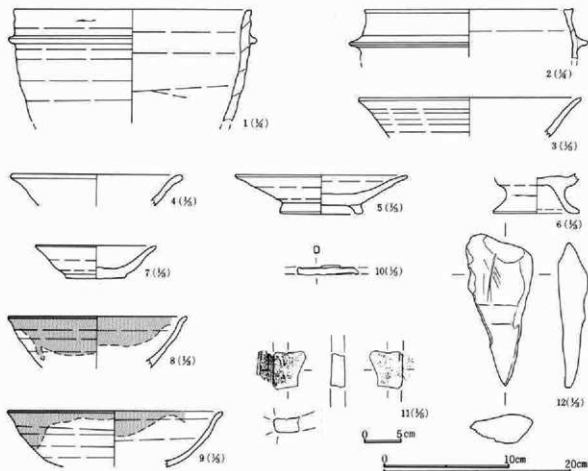
第3章 平安時代の遺構と遺物



図

① 明褐色土 ローム粒子を主として、少量の黒色土を含む。 ② 黒褐色土 焼土粒子、炭を少量含む。 ③ 赤褐色土 焼土粒子を主とし、焼土ブロック、黒色土を混入する。 ④ 黒褐色土 少量の焼土粒子と多量のローム粒子を含む。 ⑤ 黒褐色土 多量の炭を混じる。 ⑥ 黒褐色土 焼土粒子、ローム粒子を含む。

第94図 138号住居跡踏査実測図



第95図 138号住居跡出土遺物実測図



139号住居跡出土遺物観察表

神原番号 図版番号	土器種別 器	出土状況 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②施文 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
95-1 69	須恵器 羽蓋	掘り方中 片残存	口(25.2) 底— 高(11.7)	①砂粒~小石 ②酸化焰、やや軟質 ③明赤褐色	口縁部はわずかに内傾し、肩部は強い面取り。 筒は粗雑。口縁部、内面横撫で。胴部外面弱い横撫で。	
95-2	須恵器 羽蓋	覆土中 片残存	口(22.2) 底— 高(5.3)	①砂粒、雲母 ②還元焰気味、やや軟質 ③灰白色	口縁部はわずかに内傾し、肩部は強い面取り。 内外面ともにクロコ整形。	
95-3	須恵器 埴	覆土中 片残存	口(17.8) 底— 高(3.2)	①砂粒 ②還元焰気味、やや軟質 ③黄褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。内外面ともにクロコ整形。	
95-4	須恵器 坏	竈内 片残存	口(13.6) 底— 高(2.5)	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。内外面ともにクロコ整形。	
95-5 69	須恵器 高台付皿	掘り方中 片残存	口(13.6) 底(6.6) 高(3.1)	①砂粒、雲母 ②還元焰、やや硬質 ③灰色~灰白色 一部黒変	体部はほぼ直線的に開き、肩部はわずかに外反気味になる。内外面ともにクロコ整形。底部は回転糸切り無調整。付高台。	
95-6	須恵器 高台付埴	覆土中 高台付残存	口— 底(6.8) 高(3.2)	①砂粒、白色細粒 ②酸化焰、やや硬質 ③褐色	体部は下半に段をなして立ち上がる。高台部は外灣して開く。内外面ともにクロコ整形。	
95-7 69	須恵器 皿	床面+7 片残存	口(9.6) 底(6.6) 高(3.6)	①砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③明黄褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。内外面ともにクロコ整形。底部は回転糸切り無調整。	
95-8 69	灰釉陶器 埴	覆土中 片残存	口(14.4) 底— 高(4.1)	①緑青 ②還元焰、堅緻 ③灰白色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。内外面ともにクロコ整形。施釉は掛け掛け。	
95-9	灰釉陶器 埴	床面 片残存	口(17.2) 底— 高(4.4)	①緑青 ②還元焰、堅緻 ③灰白色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。内外面ともにクロコ整形。施釉は掛け掛け。	
95-10 91	鉄製品 鉄鏝	覆土中 鏝	長(4.9) 重(3.8) 幅0.6		断面方形。	
95-11 87	瓦	覆土中 破片	厚1.8	①砂粒、白色細粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	一枚取り。凸面撫で。凹面布目。側面面取り3回。	吉井・藤岡系
95-12 93	砥石	床面 完形	長11.9 幅5.5 重147		上面に刃試しの条線	緑黄緑泥片岩

## 139号住居跡 (第96~100図、図版23・69~71・87・93)

本住居跡は、第4次調査区南部の西側へ向かう緩傾斜部にあり、16・17~28・29グリッドに位置する。

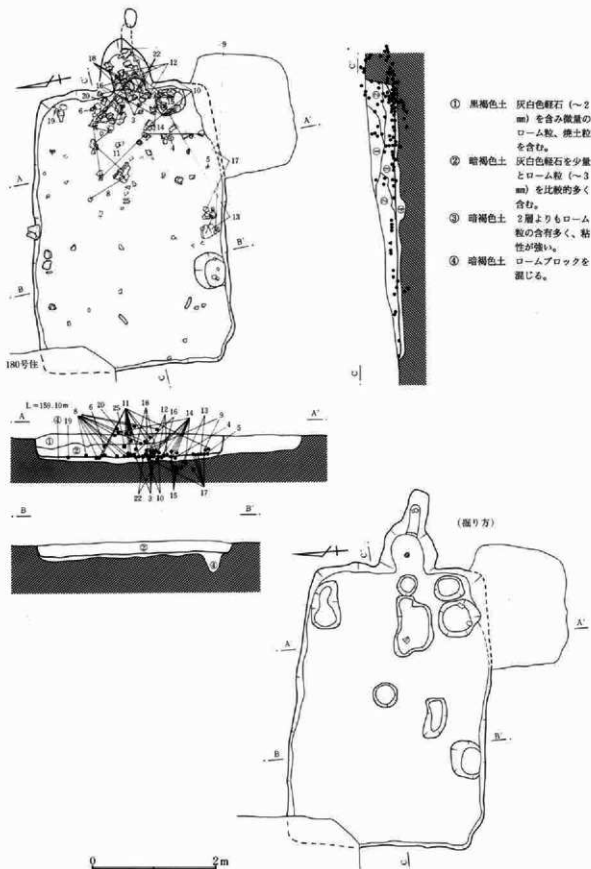
重複関係としては、先行する180号住居跡(奈良)の南東コーナー部分を一部破壊して築かれている。

住居の掘り込みは、黄褐色ローム層に深く施されており、明瞭に確認された。東西4m46cm、南北3m10cmと、長軸である東西方向の比率が大きい長方形の平面形を呈し、主軸方向はN-100°-Eを示す。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、傾斜上位の東壁は39cmが残存する。床面には、貼り床が施されているが、中央部と竈周辺部を除いてやや軟弱である。貯蔵穴は南東コーナー部分の竈脇にあり、径43cm×40cmのやや楕円形を呈し、深さは18cmを測る。また掘り方段階でこの貯蔵穴の西側に隣接して直径68cm、深さ19cmの円形の土坑が検出され、同様に貯蔵用の施設である可能性が認められる。なお柱穴や周溝は検出されなかった。

掘り方面は、比較的平坦面をなすが、部分的に円形の小ピットが確認された。

覆土は、3層に分層され自然堆積状況を示しているものと考えられる。

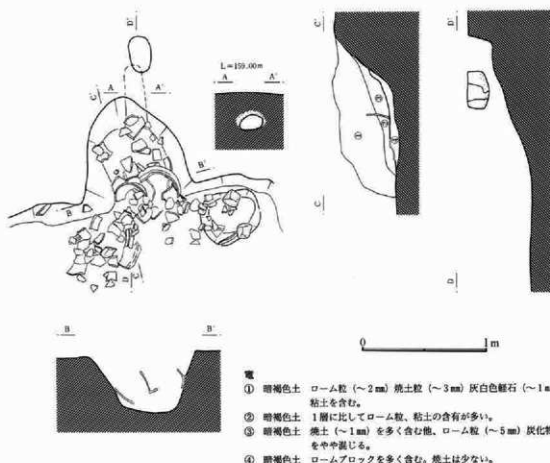
竈は、短辺である東壁のほぼ中央部に構築されている。焚き口部は壁際にあたり、右袖部分には瓦が埋設されている。燃焼部は壁の外側に張り出している。燃焼部から煙道部は緩やかに段をなして移行し、煙道部は天井部が残存しトンネル状を呈し、壁際から105cm、燃焼部先端から約30cmの位置には径28cm×18cmの楕円形の煙出し部分が確認された。火床面はやや焼土化が認められる程度だが、側壁部と煙道部は良く焼土化し



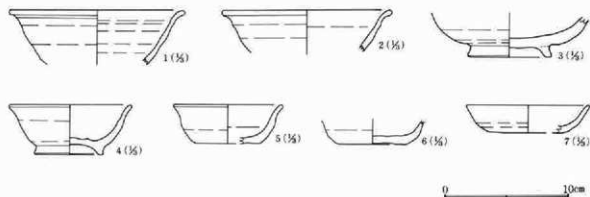
第96図 139号住居跡実測図

ている。燃焼部の中央部には支脚の埋設痕が認められた。焚き口部の幅は42cm、燃焼部長は90cmである。

遺物は、竪周辺部を中心に東半部に集中している。竪内から竪前部にかけて崩れ出したような状況で、多数の羽釜と大形の甕が出土しており、使用状況を窺わせるが、羽釜の破片で復元不能のものも多く、竪の補強材として転用されたものと考えられる。

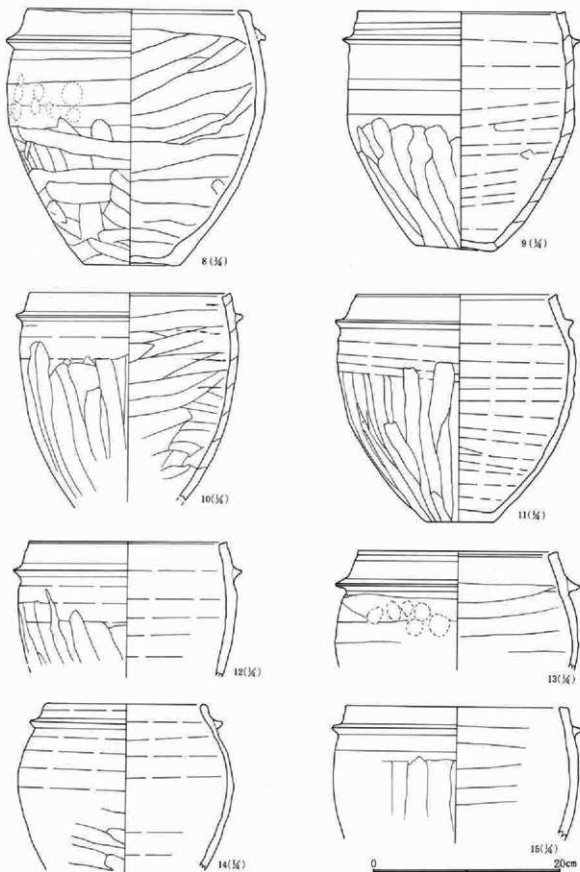


第97図 139号住居跡竪実測図



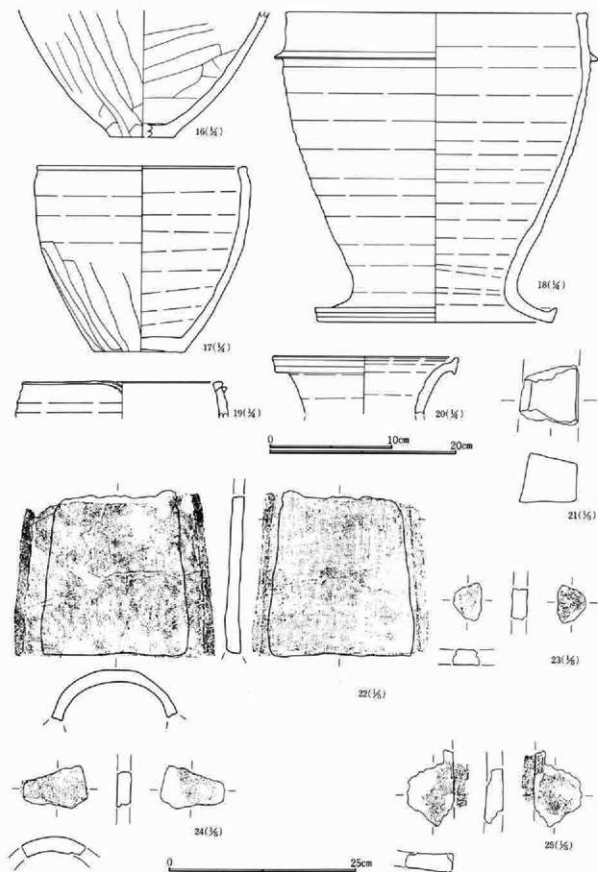
第98図 139号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物



第99図 139号住居跡出土遺物実測図(2)

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第100図 139号住居跡出土遺物実測図(3)

第3章 平安時代の遺構と遺物

139号住居跡出土遺物観察表

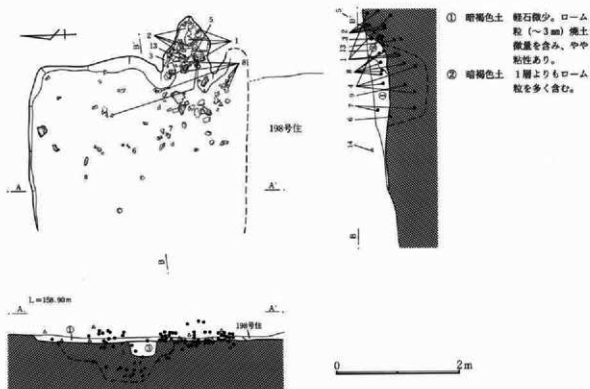
標記番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	流量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整・成形技法の特徴	備考
98-1	須恵器 埴	甕内 片残存	口(14.0) 底— 高(4.3)	①砂粒、雲母 ②還元焰、やや軟質 ③灰色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。	
98-2	須恵器 埴	甕内 片残存	口(13.5) 底— 高(3.3)	①砂粒 ②還元焰気味 ③灰白色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。	
98-3 69	須恵器 高台付埴	床面 下半部残 存	口— 底6.7 高(3.4)	①砂粒、雲母 ②還元焰、やや硬質 ③明褐色～褐色 一部黒変	体部は緩やかに内湾して立ち上がる。高台部は「ハ」字に開く。外面ロクロ整形。内面磨き。底部無で。	
98-4 69	須恵器 高台付埴	床面 充分形	口9.8 底5.5 高3.9	①砂粒、雲母 ②還元焰気味、やや軟質 ③浅黄色～淡黄色 口縁～底部片黒変	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。底部は回転糸切り無調整。付高台。	
98-5	須恵器 埴	床面 片残存	口(8.6) 底(5.0) 高(3.0)	①砂粒、白色細粒 ②還元焰、やや硬質 ③褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。底部は回転糸切り無調整。	
98-6	須恵器 埴	床面+25 底部片残 存	口— 底(5.5) 高(1.8)	①砂粒、雲母 ②還元焰、やや硬質 ③褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。底部は回転糸切り無調整。	
98-7	須恵器 皿	覆土中 片残存	口(9.7) 底(5.1) 高(2.2)	①砂粒、雲母 ②還元焰、やや軟質 ③褐色	体部はほぼ直線的に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。底部は回転糸切り無調整。	
99-8 70	須恵器 羽釜	甕内～床 面 胴部 一部欠損	口23.8 底10.2 高27.1	①砂粒～小石、雲母 ②還元焰、やや軟質 ③灰黄色 一部黒変	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。口縁部、胴上半部、内面は横溝で、下半部縦溝方向の瓦割り。	胴部外面煤付 内面に付着物。 底部被熱の新痕
99-9 70	須恵器 羽釜	甕内～床 面 片残存	口(22.0) 底8.7 高25.3	①砂粒、雲母 ②還元焰、やや硬質 ③にじい赤褐色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。胴は断面三角形。内外面ともにロクロ整形。胴部外面瓦割り。	内面全体・断面 に煤付着。甕材 への転用
99-10 70	須恵器 羽釜	甕内～床 面 片残存	口(21.4) 底— 高(21.8)	①砂粒～小石 ②還元焰、やや軟質 ③にじい黄褐色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。胴は断面三角形。胴部内面、外面上半部横溝で、下半部瓦割り。底部無調整。	
99-11 70	須恵器 羽釜	床面～25 胴部 一部欠損	口21.4 底7.2 高24.1	①砂粒、雲母 ②還元焰、やや軟質 ③褐色 一部黒変	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。胴は断面三角形。胴部外面上半、内面ロクロ整形。胴部外面下半部瓦割り。底部無調整。	内面下半部磨減、 付着物。 外面煤付着
99-12 71	須恵器 羽釜	床面 片残存	口(21.1) 底— 高(14.2)	①砂粒、雲母 ②還元焰、やや硬質 ③褐色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。胴は断面三角形。胴部外面上半、内面ロクロ整形。下半部瓦割り。	甕面やや磨減 内面煤付着
99-13 71	須恵器 羽釜	床面 片残存	口(21.4) 底— 高(12.3)	①砂粒、雲母 ②還元焰、やや硬質 ③にじい黄色～浅黄色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。内外面ともにロクロ整形。一部指痕。	
99-14 70	須恵器 羽釜	甕内～貯 蔵穴 胴部欠損	口17.6 底— 高(17.5)	①砂粒、雲母 ②還元焰、やや軟質 ③褐色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。胴上半部は丸く膨らむ。胴部外面上部、内面ロクロ整形。下半部瓦割り。	
99-15 71	須恵器 羽釜	貯蔵穴内 片残存	口(23.8) 底— 高(13.9)	①砂粒、雲母 ②還元焰気味、やや軟質 ③灰白色 一部黒変	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。胴は断面三角形。胴部外面上半、内面ロクロ整形。外面下半部瓦割り。	
100-16	須恵器 羽釜	甕内 片残存	口— 底(9.0) 高(12.2)	①砂粒～小石 ②還元焰、やや軟質 ③明 赤褐色～褐色 大半が黒変	胴部はやや内湾気味に立ち上がる。内面横溝で。外面瓦割り。	甕材に転用
100-17 70	須恵器 鉢	甕内～床 面 片残存	口(22.5) 底9.7 高19.5	①砂粒、雲母 ②還元焰、やや硬質 ③明 赤褐色～褐色 大半が黒変	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部はわずかに内傾する。体部外面上半、内面ロクロ整形。外面下半部瓦割り。	甕材に転用
100-18 71	須恵器 甕	甕内 片残存	口(32.4) 底(26.0) 高(32.8)	①砂粒、白色細粒、雲母 ②還元焰気味 ③浅黄色	胴部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。端部は面取り。腹部は屈曲して外反。内外面ともにロクロ整形。	内面に付着物 外面黒変
100-19	須恵器 片口鉢(?)	床面 片残存	口(21.5) 底— 高(3.8)	①砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③(外)灰色 (内)黒変	口縁部は緩やかに内湾し、一部に片口を付す。内外面ともにロクロ整形。	内外面煤付着

採掘番号 図版番号	土器種別 種	出土状況 残存状況	法量(cm) (E)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備 考
100-20 71	須志器 甕	甕付近 3/6残存	口(19.8) 底 — 高(6.0)	①砂粒 ②還元焰気味、やや軟質 ③にぶい黄色～浅黄色	口縁部は外捲して開き、底部は上端を揃みあげ、下端に粘土帯を付し口縁帯をなす。内外面ともにクロコ整形。	
100-21 93	磁石 瓦	覆土中 破片	長(4.6) 幅 3.9 厚 3.85	重 115	4面とも使用により平滑。	石英安山岩 (野石)
100-22 87	瓦 丸瓦	竈内 3/6残存	径 19.1 狭 — 厚 1.4	①砂粒、黒色鉱物、雲母 ②還元焰、やや軟質 ③にぶい明褐色	一枚造り(粘土組によるか)。凸面側で、凹面布目、一部無で。広扁面、側面は部取り。	吉井・藤岡系 竈の右袖部に埋設
100-23 87	瓦 瓦	覆土中 破片	厚 1.8	①砂粒、白色細粒、繻状粘土 ②還元焰気味、硬質 ③オリブ灰色	一枚造り。凸面側で。凹面布目。	吉井・藤岡系
100-24 87	瓦 丸瓦	覆土中 破片	厚 1.8	①砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③オリブ灰色	一枚造り。凸面側で。凹面布目。	吉井・藤岡系
100-25 87	瓦 平瓦	覆土中 破片	厚 2.2	①砂粒、繻状粘土 ②還元焰気味 ③明褐色	一枚造り。凸面側で。凹面布目、一部無で。	吉井・藤岡系

## 140号住居跡 (第101～104図、図版24・71・72・90・93)

本住居跡は、第4次調査区南部の緩傾斜部にあり、15・16～27～29グリッドに位置する。重複関係としては、後出する198号住居跡(平安)により南壁の周辺部が失われている状況が確認された。

住居の掘り込みは、黄褐色ローム層に及び明瞭に確認されたが、傾斜下部の西側部分は浸食を受け残存し



第101図 140号住居跡実測図(1)

### 第3章 平安時代の遺構と遺物

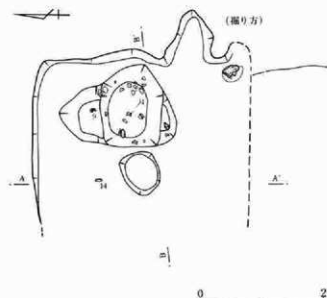
ない。南北方向は約3m50cmを測るとみられ、主軸方向はN-98°-Eを示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、東壁で32cmが認められた。床面はローム面を直接叩き締めており、全体として堅緻である。貯蔵穴や柱穴・周溝は検出されなかった。

床下部分には1m25cm×90cm、深さ58cmの土坑があり、重複して浅い土坑もみられる。

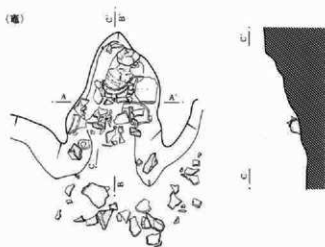
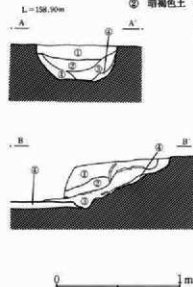
覆土は、2層に分層された。

竈は、東壁の南東コーナー寄りの位置に構築されている。焚き口部分は壁のやや内側にあり、左右の袖には石が埋設されており、幅51cmを測る。燃焼部から煙道部は壁の外側に張り出し、煙道方向の張り出しは110cmを測る。支脚は、燃焼部の左右に2カ所棒状の石が埋設されている。なお左側の支脚の上部には台付境が伏せた状態で乗せてあった。また、煙道部分では羽釜が、口縁部を焚き口側に向けた状況で出土しており、煙道としての使用も考えられる。火床面の焼土化はさほど著しくないが、側壁部の焼土化は非常に顕著であった。

遺物は、羽釜が多数出土しているが多くは竈の補強材として転用されたものであり、残存率の低いものが主である。その他に、須恵器の坏や磁石がみられる。また、床下の土坑内からも土器片が出土している。

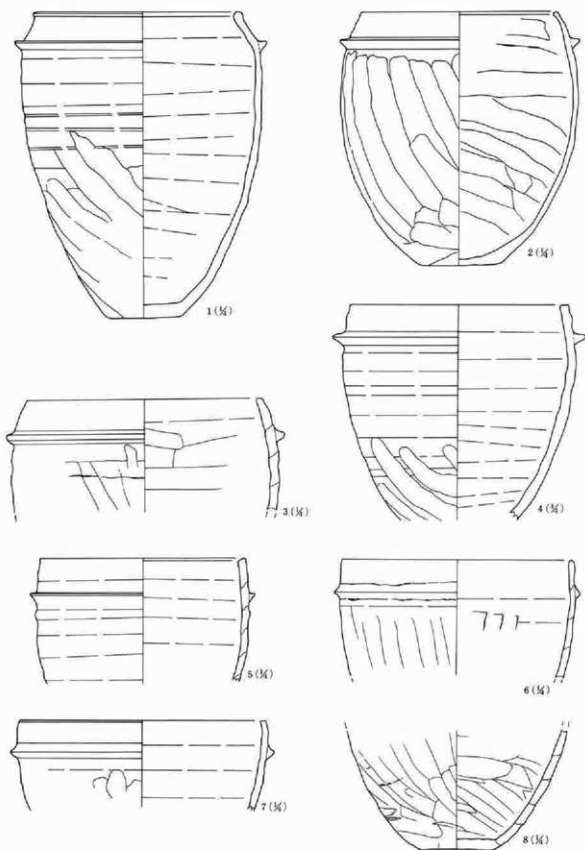


- 竈
- ① 暗褐色土 ローム粒(~2mm)、灰白色軽石(~2mm)、焼土粒(~1cm)と少量の炭化物を含む。やや砂質。
  - ② 暗褐色土 軽石は微量、粘性あり。ローム粒(~3mm)焼土粒(~3mm)を多く含む。
  - ③ 暗褐色土 2層に比して含有物が多い。
  - ④ 暗褐色土 焼土粒、炭化物粒を多量に含む。
  - ⑤ 暗褐色土 (~3mm)大のローム粒、焼土粒、炭化物粒が混在。



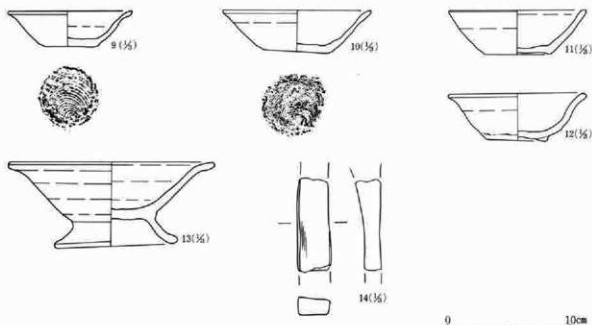
第102図 140号住居跡実測図(2)





第103図 140号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物



第104図 140号住居跡出土遺物実測図(2)

140号住居跡出土遺物観察表

調査番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (g)	①粘土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備 考
103-1 71	須恵器 羽蓋	甕内 片残存	口 22.2 底 7.6 高 32.5	①砂粒～小石、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③(外)橙色 (内)明赤褐色	唇らみの無いやや長い胴部から口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。胴部外面上部、内面ロクロ整形。外面下半部磨削り。	内面割面やや磨減、付着物あり
103-2 71	須恵器 羽蓋	甕内 片残存	口 20.9 底 9.0 高 26.8	①砂粒～小石、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③褐色	唇らみのある胴部から、口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。口縁部、胴部内面は横撫で。胴部外面は磨削り。	内面に付着物
103-3	須恵器 羽蓋	甕内 片残存	口 25.2 底 — 高 11.8	①砂粒～小石 ②酸化焰、やや硬質 ③褐色 口縁～胴 一部黒変	口縁部はわずかに内傾し、端部は弱い面取り。口縁部、胴部外面横撫で。外面弱い磨削り。	口縁部黒変
103-4 72	須恵器 羽蓋	甕内 片残存	口 23.4 底 — 高 22.7	①砂粒、石英 ②酸化焰、やや軟質 ③明赤褐色 大半が黒変	胴部はやや内湾して立ち上がり、口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。胴部上半、内面はロクロ整形。下半部は気附り。	
103-5 72	須恵器 羽蓋	甕内 片残存	口 22.0 底 — 高 13.2	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい橙色～褐色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。唇はやや細く粗撫で。内外面ともにロクロ整形。	
103-6 72	須恵器 羽蓋	床面 片残存	口 24.6 底 — 高 12.4	①砂粒～小石、雲母、白色細粒 ②酸化焰、やや硬質 ③褐色	口縁部はわずかに内傾し、端部は面取りされず丸くおさめる。口縁部、胴部内面はロクロ整形。胴部外面は弱い削り状の横撫で。	
103-7 72	須恵器 羽蓋	床面～掘り方中 片残存	口 26.4 底 — 高 9.5	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい橙色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。口縁部、胴部内面ロクロ整形。胴部外面は磨削り。	電材への転用か底部はスレあり
103-8	須恵器 羽蓋	床面～10 片残存	口 — 底 8.0 高 12.9	①砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③明赤褐色 大半が黒変	胴部はやや内湾気味に立ち上がる。外面磨削り。内湾磨削で。底部は横撫で。	
104-9 72	須恵器 坏	掘り方中 片残存	口 9.9 底 4.6 高 2.9	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや軟質 ③浅黄褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は外反する。内外面ともにロクロ整形 (右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
104-10 72	須恵器 坏	覆土中 片残存	口 11.9 底 5.2 高 3.3	①砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形 (右回転)。底部は回転糸切り無調整。	

採回番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (R)	①粘土 ②焼成 ③色調	器形、蓋・成形技法の特徴	備 考
104-11 72	須恵器 坏	甕周辺 片残存	口(11.0) 底(5.2) 高(3.5)	①砂粒~小石 ②還元焰、 やや軟質 ③暗灰黄色~灰 黄色 大平が固定	体部はほぼ直線的に立ち上がる。内外面とも にロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無 調整。	
104-12 72	須恵器 高台付埴	甕周辺 片残存	口(11.0) 底(4.8) 高(3.8)	①砂粒~小石、石英 ②還元焰気味、軟質 ③灰白色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端 部はわずかに外反する。内外面ともにロクロ 整形。粘土をわずかに付した粗雑な付高台。	
104-13 72	須恵器 高台付埴	甕内 片残存	口(16.3) 底(9.8) 高(6.8)	①砂粒 ②酸化焰気味、やや軟質 ③に濃い褐色~に濃い橙色	体部はほぼ直線的に開き、端部は大きく外反 する。内外面ともにロクロ整形。底部は無で、 付高台は大きく外反して開く。	甕支脚に遺位で 使用。外面に煤、 内面に粘土付着
104-14 93	砥石	床面+20	長(9.6) 幅(2.6) 厚(2.0)	重(54)	柱状の砥石。片面に自然面を残す。4面とも 使用により平滑。中央部の使い減り顯著。	石英安山岩 (礫石)

## 141号住居跡 (第105~108図、図版25・72)

本住居跡は、第4次調査区南部の傾斜部分にあり、17-27・28グリッドに位置する。

重複関係としては、先行する180号住居跡(奈良)の上部に築かれている状況が認められた。

住居の掘り込みは、180号住居跡の覆土中に行われており、確認は困難であった。規模は東西3m43cm、南北3m80cmを測り、平面形は長方形を呈し、主軸方向はN-90°-Eを示す。壁はやや不明瞭だが20cmを測る。床面は軟割であり、貼り床の有無は不明である。貯蔵穴や柱穴・周溝は検出されなかった。

覆土は、黒褐色土で2層に分かれる。

竈は、長辺である東壁の南東コーナーに寄った位置に構築されている。石組の構造で、石が埋設された状況で残る。焚き口部は壁のやや内側にあり、左右の袖が僅かに残存する。左袖には粘土が認められた。燃焼部は壁の外側に張り出し、幅40cm、張り出し長60cmを測る。燃焼部中央には支脚が検出された。なお火床面の周辺部は焼土化が著しい。

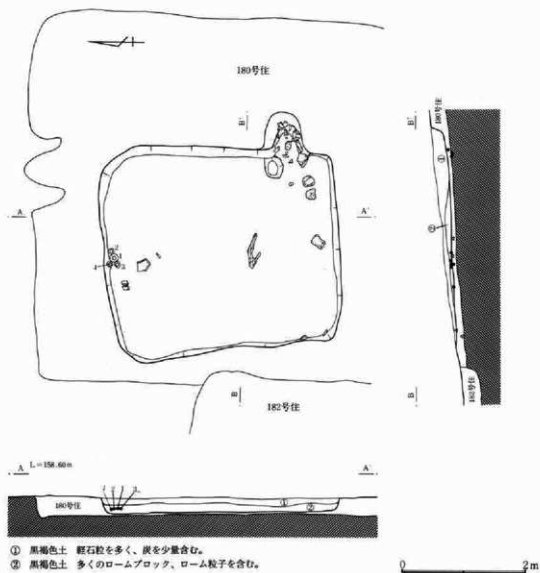
床面の中央部からは、炭化材が出土しているが、単独の出土であり、また床面上や覆土中にも炭化物や焼土の分布・含有が認められないことから、本住居が火災を受けたものとは考えられない。

遺物量は少ないが、北壁際の中央部には須恵器の坏と、土師器の皿3点が据え置かれた状態で認められた。他に竈内にも土器片が出土している。

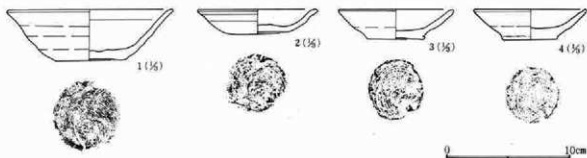


第105図 141号住居跡竈実測図

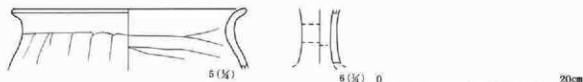
第3章 平安時代の遺構と遺物



第106図 141号住居跡実測図



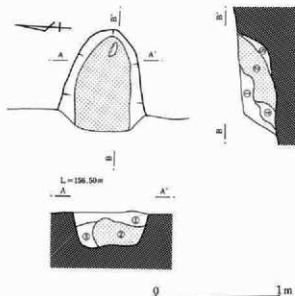
第107図 141号住居跡出土遺物実測図(1)



第108図 141号住居跡出土遺物実測図(2)

141号住居跡出土遺物観察表

発掘番号 図版番号	土器類別 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
107-1 72	須恵器 坏	ほぼ床面 片残存	口 13.3 底 5.7 高 4.0	①砂粒～小石 ②酸化焰気味、やや軟質 ③にぶい黄褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
107-2 72	須恵器 皿	ほぼ床面 ほぼ完整	口 9.6 底 4.6 高 2.0	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい黄褐色	体部はほぼ直線的に開く。口縁部はやや外反。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。やや上げ底。	
107-3 72	須恵器 皿	ほぼ床面 完整	口 9.2 底 4.5 高 2.4	①砂粒～小石 ②酸化焰、やや硬質 ③明褐色～橙褐色	体部はほぼ直線的に開く。底部やや突出。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
107-4 72	須恵器 皿	ほぼ床面 完整	口 9.0 底 4.4 高 2.3	①砂粒～小石 ②酸化焰、やや硬質 ③橙褐色	体部はほぼ直線的に開く。底部やや突出。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	内面に赤色顔料付着
108-5 72	土師器 甕	甕内 片残存	口 25.2 底 — 高 (6.4)	①砂粒～小石 ②酸化焰、やや硬質 ③明赤褐色 大半が黒変	口縁部は緩やかに外湾して開く。口縁部微塵で。胴部 外面削り削り。内面荒削り。	
108-6	須恵器 瓶	甕土中 片残存	口 — 底 — 高 (5.8)	①砂粒、白色顔料 ②還元焰、硬質 ③灰褐色	頸部から口縁部はやや外反気味に立ち上がり。内外面ともにロクロ整形。	輪がかかる



- ① 黒褐色土 白色粒子 (～1mm) を多く含む。焼土、炭をまったく含まず。 ② 赤褐色土 ローム粒子、焼土ブロック、焼土粒を多く含む。 ③ 黒褐色土 ロームブロック、焼土粒を少量含む。 ④ 黒褐色土 1層に近いごく少量の焼土粒子を含む。 ⑤ 黒褐色土 少量の焼土粒子を含む。

第109図 142号住居跡竪穴実測図

## 142号住居跡 (第109・110図、図版25・72・88)

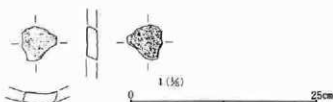
本住居跡は、第4次調査区南西部の傾斜地にあり、17-23グリッドに位置する。

重複関係としては、先行する143号住居跡(平安)の覆土上に築かれ、また後出する201号住居跡(平安)によって住居の大部分が破壊されている状況にある。

本住居跡は、甕の一部のみが残存するにとどまり詳細は不明である。

甕は東壁に構築されたと考えられ、幅69cm、煙道方向50cmを測る。火床面は焼土化が認められた。

遺物は、瓦の破片が出土しているのみだが、重複関係から平安時代に属すると考える。



第110図 142号住居跡出土遺物実測図

142号住居跡出土遺物観察表

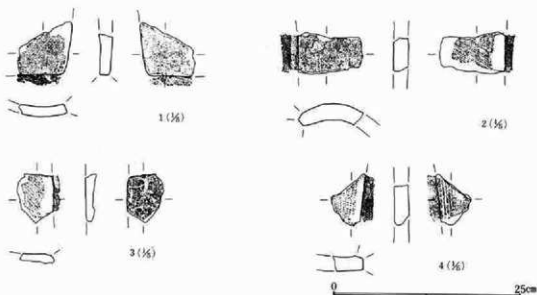
検出番号 図版番号	土器種別 種	出土状況 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整・成形技法の特徴	備考
110-1 88	瓦	窠内 破片	厚 1.3	①砂粒、白色細粒 ②酸化焙灰味、やや硬質 ③灰白色	一枚造り。凸面無で。凹面布目。	吉井・藤岡系

143号住居跡 (第111~115図、図版25・26・72・73・87・91・92・94)

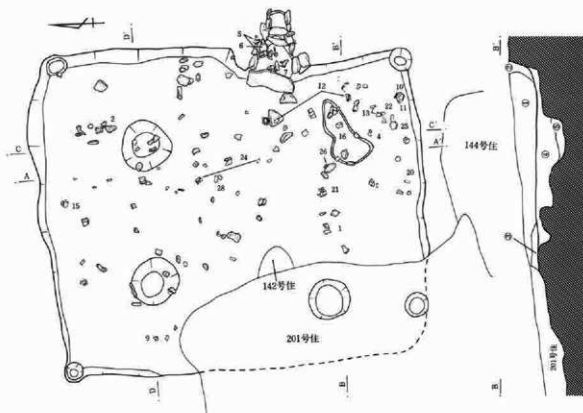
本住居跡は、第4次調査区南西部の西へ下る傾斜部にあり、17・18-23・24グリッドに位置する。

重複関係としては、南西部を後出する142号・201号住居跡(平安)により掘り込まれている状況が確認された。

住居の掘り込みは黄褐色ローム層まで及び、明瞭に確認された。平面形は東西5m18cm、南北6m15cmの長方形を呈し、主軸方向はN-93°-Eを示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、傾斜上位の東壁は41cmが残存する。床面は貼り床が施されており、平坦面をなし明瞭である。主柱穴は4本検出された。このうち南西部のものは201号住居跡との重複により、掘り方段階で確認された。また住居のコーナー部分には壁柱穴が配されている。なお貯蔵穴・周溝は検出されなかった。



第111図 143号住居跡出土遺物実測図(1)

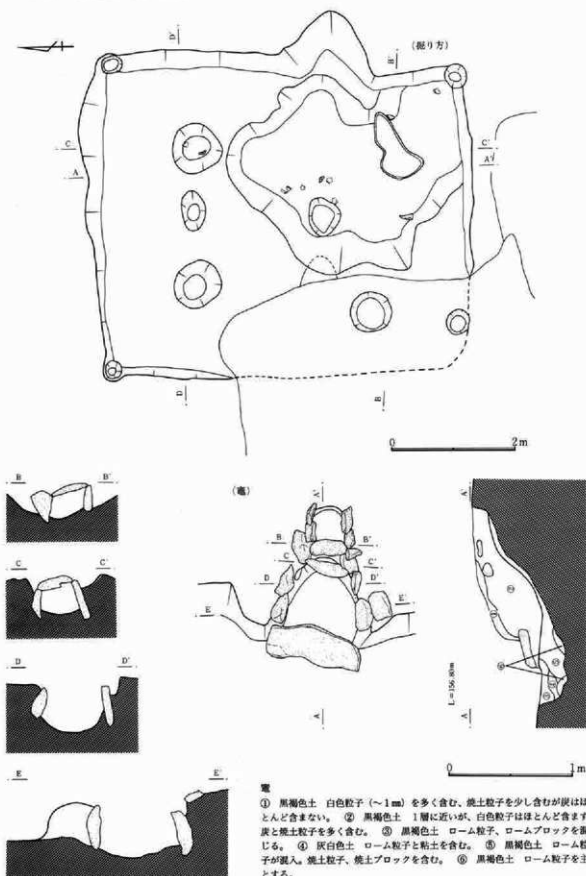


① 黒褐色土 ローム小粒子、ローム小ブロックを多く、炭と少量の焼土粒子を全体に含む。② 灰白色土 粘土を主とする。③ 暗褐色土 ローム粒子と黒褐色土の混入。④ 黒褐色土 焼土粒子、炭の小ブロック、ロームブロックをほぼ均一に混入。⑤ 灰褐色土 灰色の砂質、粘性ロームを主とし、少量の黒褐色土を含む。



0 2m

第112図 143号住居跡実測図(1)



第113図 143号住居跡実測図(2)

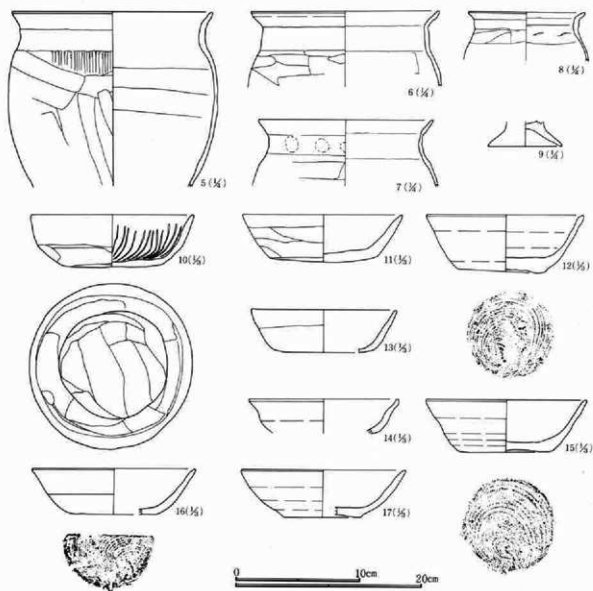


掘り方面は比較的平坦だが、南東部は全体に窪んでいる。

覆土は、3層に分かれ、東壁の際には粘土層が認められる。

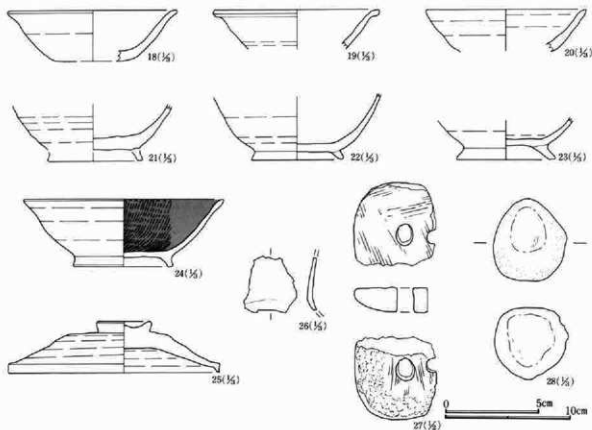
竈は、長辺の東壁の中央よりもやや南よりの位置に構築されており、良好な残存状況がみられる。竈は石組の構造であり、燃焼部から煙道部の側面には柱状の石が埋設されている。天井部に用いられた石2点がほぼ原位置をとどめて遺存する他、焚き口部の板状の天井石が転落した状況で出土している。焚き口部は壁の内側にあり袖の張り出しが確認されている。燃焼部は主に壁の外側に張り出し、煙道部は段状になり突出する。焚き口部の幅54cm、燃焼部の長さ57cm、煙道幅21cm、長さ42cmを測る。火床面の焼土化はさほど認められず、また焚き口部の周辺には灰の分布がわずかにみられた。

遺物は、竈内から土師器の甕が出土している。これ以外は明瞭に本住居跡に直接伴うと考えられると認められる遺物は少ない。多くは床面上から覆土内に広く分布し、また接合関係も余りみられない。破片数は土師器甕2,062点、坏1,075点が主で、須恵器坏・埴輪198点や蓋21点などがある。



第114図 143号住居跡出土遺物実測図(2)

### 第3章 平安時代の遺構と遺物



第115図 143号住居跡出土遺物実測図(3)

143号住居跡出土遺物観察表

押図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
111-1 87	瓦 平瓦	床面+18 破片	厚 1.8	①砂粒、白色細粒 ③還元焰気味、やや硬質 ④灰白色	一枚造り。凸面無で。凹面布目。筑端面、側面とも面取り。	吉井・藤岡系
111-2 87	瓦 丸瓦	床面+20 破片	厚 2.1	①砂粒、白色細粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	一枚造り。凸面無で。凹面に粘土板未切り痕あり。布目。築部無で。側面は面取り2回。	吉井・藤岡系
111-3 87	瓦	覆土中 破片	厚 —	①砂粒～小石、白色細粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	一枚造り。凸面割落。凹面に粘土板未切り痕あり。布目。築部無で。側面は面取り。	吉井・藤岡系
111-4 87	瓦	床面+30 破片	厚 1.9	①砂粒～小石、白色細粒 ②還元焰気味、硬質 ③暗灰色	一枚造り。凸面は無でだが、端部未切り痕を残す。凹面は布目。側面は面取り2回。	吉井・藤岡系
114-5 73	土師 甕 壺	甕内 片残存	口(21.4) 底 — 高(18.6)	①砂粒、褐色粒子 ②酸化焰、やや硬質 ③明赤褐色～橙色	「コ」字状口縁に近いが不明瞭。口縁部横撫で。胴部 外面磨削り。内面無撫で。	内面の器面やや磨滅。外面一部黒変
114-6 73	土師 甕 壺	甕内 片残存	口(20.2) 底 — 高(8.0)	①砂粒、雷母 ②酸化焰、やや硬質 ③褐色	「コ」字状口縁。口縁部横撫で。胴部 外面磨削り。内面無撫で。	内面に付着物
114-7 73	土師 甕 壺	甕内 片残存	口(18.7) 底 — 高(7.0)	①砂粒、雷母、褐色粒子 ②酸化焰、やや硬質 ③褐色	「コ」字状口縁。口縁部横撫で。胴部 外面磨削り。内面無撫で。	
114-8 73	土師 甕 壺	甕り方中 片残存	口(12.4) 底 — 高(5.1)	①砂粒、雷母 ②酸化焰、やや硬質 ③明赤褐色	「コ」字状口縁。内面の横切線。口縁部横撫で。胴部 外面磨削り。内面無撫で。	

## 第2節 竪穴住居跡と出土遺物

発掘番号 図版番号	土器類別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (#)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
114-9	土師器 台付壺	床面 片残存	口 — 底 (8.0) 高 (2.7)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい褐色～にぶい褐色	上部は「ハ」字状に大きく広がる。内外面横断で。	
114-10 72	土師器 坏	床面+6 ほぼ完整	口 13.0 底 8.1 高 4.2	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③明赤褐色～褐色	ほぼ平底の底部から、体部下半に弱い稜をなして外傾する口縁部へ移行する。口縁部横断で。内面横断でに暗文状の磨き。底部寛削り。	内面と口縁部外面に塗布物状の付着
114-11 72	土師器 坏	床面+30 片残存	口(12.8) 底 8.6 高 3.7	①砂粒～小石 ②酸化焰、やや軟質 ③褐色	体部はほぼ直線的に立ち上がり、端部は細くそがれる内面横断で。体部外面寛削り。底部寛削り。	
114-12 72	須恵器 坏	床面～+27 ほぼ完整	口 12.5 底 7.0 高 4.5	①砂粒～小石 ②還元焰、やや硬質 ③灰色～灰白色	体部はほぼ直線的に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。やや上げ底。	
114-13 73	土師器 坏	床面 底部欠損	口(11.6) 底 (8.0) 高 (3.4)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや軟質 ③褐色	体部はほぼ直線的に立ち上がる。口縁部、内面横断で。体部寛削り。	
114-14	土師器 坏	覆土中 片残存	口(12.0) 底 — 高 (2.7)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや軟質 ③暗灰褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反する。内面、口縁部は横断で。体部寛削り。	
114-15 73	須恵器 坏	床面 片残存	口(12.8) 底 7.4 高 4.2	①砂粒～小石 ②横し状、やや軟質 ③暗灰褐色	体部はほぼ直線的に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
114-16	須恵器 坏	床面+3 片残存	口(13.0) 底 (7.2) 高 3.6	①砂粒～小石 ②酸化焰、硬質 ③赤褐色～明赤褐色	体部はほぼ直線的に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
114-17 73	須恵器 坏	掘り方中 片残存	口(13.2) 底 (5.2) 高 3.7	①砂粒～小石 ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	体部はほぼ直線的に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。底部は回転糸切り無調整。	
115-18	須恵器 坏	覆土中 片残存	口 13.6 底 (6.0) 高 (4.0)	①砂粒～小石 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。	
115-19	須恵器 坏	覆土中 片残存	口(13.2) 底 — 高 (3.0)	①砂粒、雲母 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は強く外反する。内外面ともにロクロ整形。	
115-20	須恵器 坏	床面+6 片残存	口 12.8 底 — 高 (3.4)	①砂粒～小石 ②還元焰、やや硬質 ③灰白色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。	
115-21	須恵器 高台付埴	床面 下半部残存	口 — 底 — 高 (3.6)	①砂粒～小石、褐色粒子 ②酸化還元、やや硬質 ③オリーブ色～にぶい褐色	体部は緩やかに内湾して立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。底部無断で。付高台。	内面酸化焰、外面は還元焰気味に分れる
115-22	須恵器 高台付埴	床面+10 下半部片残存	口 — 底 7.4 高 (5.2)	①砂粒～小石、白色細粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	体部は緩やかに内湾して立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。底部無断で。付高台。	
115-23	須恵器 高台付埴	覆土中 片残存	口 — 底 7.9 高 (3.3)	①砂粒～小石、白色細粒 ②還元焰、硬質 ③暗緑灰色～緑灰色	体部は緩やかに内湾して立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。底部は回転糸切り無調整。付高台。	
115-24	須恵器 高台付埴	床面+20 ～30 片残存	口(16.0) 底 (8.0) 高 5.4	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③(外)明褐色～褐色 (内)黒色処理	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端部はわずかに外反する。外面ロクロ整形(右回転)。内面磨き。底部は回転糸切り無調整。	
115-25 73	須恵器 蓋	床面+20 片残存	径 4.3 口(16.8) 高 4.0	①砂粒～小石 ②酸化焰、硬質 ③赤褐色	天井部上面は回転糸切り痕を残し平坦。口縁部はやや外反して開く。内外面ともにロクロ整形。	
115-26 91	用途不明 鉄製品	覆土中	幅1.1×3 厚2.1～4.3	重21.6	薄い板状で、弱い屈曲をもつ。	
115-27 92	石製品 紡錘車	床面+25	径 — 孔径0.8 厚 1.27 重 42.7		穿孔2ヶ所。製作時の欠損か。使用痕は認められない。	網罟母礫片岩
115-28 94	擦石?		径6.5×6.1×5.6 重 166		部分的に磨滅によるツブレがある。	軽石

### 第3章 平安時代の遺構と遺物

#### 144号住居跡 (第116～119図、図版27・73・74・94)

本住居跡は、第4次調査区南部の傾斜部にあり、16・17-24グリッドに位置する。

北西コーナー部分で201号住居跡(平安)との重複関係が認められ本住居が後出するとみられる。

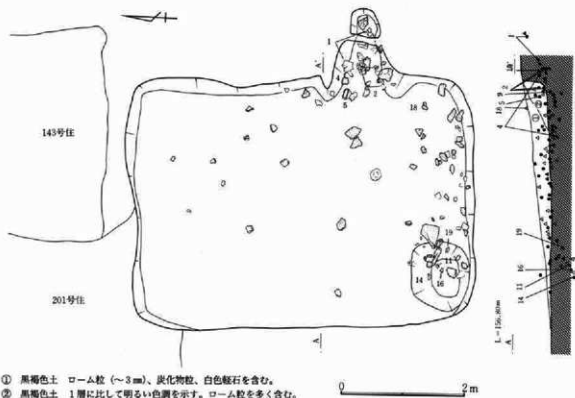
住居の掘り込みは、黄褐色ローム層まで及び明瞭に確認された。東西3m93cm、南北5m60cmの長方形の形状を呈し、主軸方向はN-80°-Eを示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、東壁で最大37cmが残存するが、西壁は傾斜の関係で浸食が著しくほとんど残存しない。床面はローム面を直接使用しており、貼り床は施されていない。床面は全面堅く踏みまわっており、殊に竈周辺から中央部、南壁際は堅緻である。貯蔵穴は、南西コーナー部分に設けられており、径47cm×54cmのやや不整な円形を呈し、深さは41cmを測る。なお柱穴・周溝は検出されなかった。

床下の土坑は、南東コーナー部分に複数が重複した状況で確認された。

覆土は2層に分層され、自然堆積状況を示している。

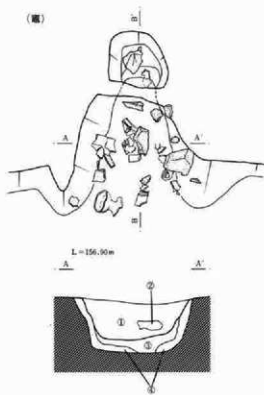
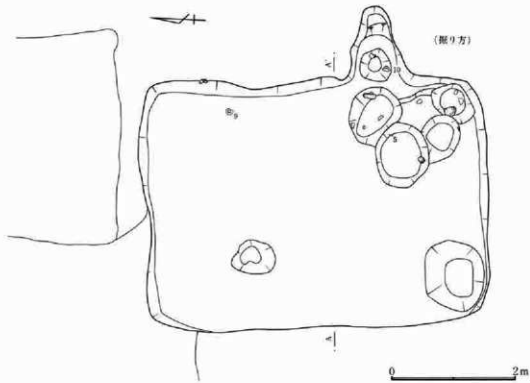
竈は、長辺である東壁の中央よりも南側によった位置に構築されている。焚き口部はほぼ壁際にあり、左右の袖石が残存し、幅46cmを測る。燃焼部から煙道部は長く壁の外側に張り出しており、張り出し長110cmを測る。煙道はやや段状をなして突出している。燃焼部から煙道部にかけての天井部分が一部残存しており、また竈覆土内にも天井材の崩落状況が確認された。火床面はさほど焼土化は顕著でない。

遺物は、竈周辺部や貯蔵穴から出土している。また南壁際にも多量の遺物の分布が見られるが、石と土器の小破片が多くいずれも覆土内であり、壁際ほど高い位置にある。



第116図 144号住居跡実測図(1)

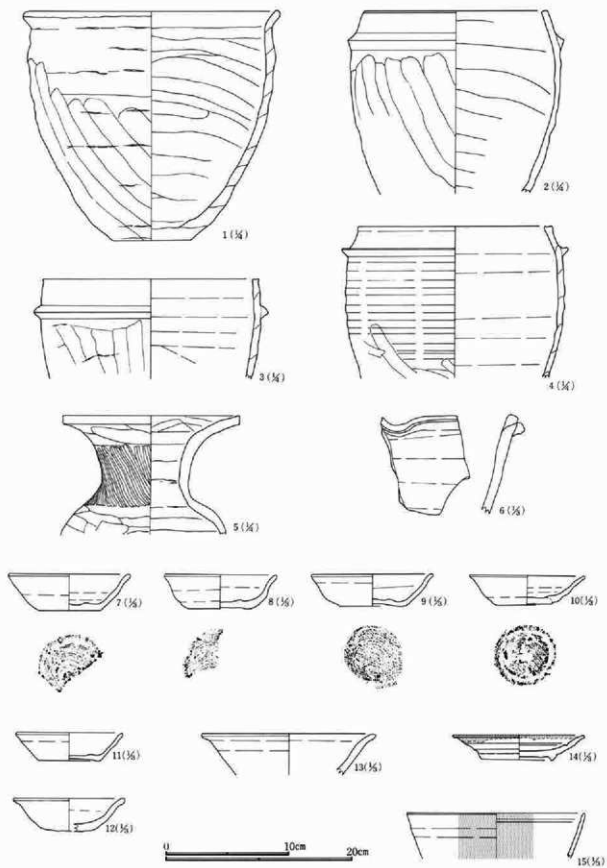
第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第117図 144号住居跡実測図(2)

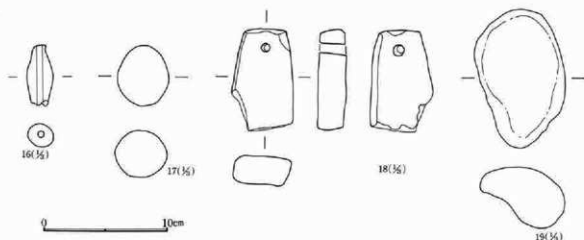
- 
- ① 暗褐色土 しまっている砂質、ローム粒(～3mm)を多量、焼土粒(～3mm)白色軽石(～1m)を含む。
  - ② 灰黄褐色粘質土 天井材。
  - ③ 黒褐色土 ローム粒(～2mm)焼土粒(～3mm)炭化物(～1mm)を多量に含む。
  - ④ 暗褐色土 (～5cm)ロームブロックを混じる。

第3章 平安時代の遺構と遺物



第118図 144号住居跡出土遺物実測図(1)

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第119図 144号住居跡出土遺物実測図(2)

144号住居跡出土遺物観察表

標記番号 図版番号	土器種別	出土状況 残存状況	法量(cm) (R)	①胎土 ②構成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
118-1 73	須恵器 壺	甕内 片残存	口(27.2) 底(8.4) 高(24.2)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや軟質 ③によい褐色	胴部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部は短く外反する。口縁部横撫で。胴部 内面直撫で。外面上半面直撫で。下半部直削り。	胴部下半～底部に粘土付着物 内面に付着物
118-2 73	須恵器 羽蓋	甕内 片残存	口(19.6) 底— 高(19.2)	①砂粒～小石 ②酸化焰、やや硬質 ③によい褐色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。口縁部横撫で。胴部 外面直削り。内面直撫で。	内面直撫で 扉付着
118-3 73	須恵器 羽蓋	甕土中 片残存	口(23.1) 底— 高(10.6)	①砂粒～小石 ②酸化焰、やや硬質 ③(外)褐色 (内)によい褐色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。口縁部は横撫で。胴部 外面直削り。内面直撫で。	
118-4 73	須恵器 羽蓋	甕内 片残存	口(20.9) 底— 高(16.0)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや軟質 ③褐色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。内外面ともにロクロ整形。胴下半部は直削り。	
118-5 73	須恵器 壺	甕前部 下半部欠損	口(19.0) 底— 高(12.5)	①砂粒～小石、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③明褐色～褐色	胴上部は丸く膨らみ、口縁部は頸部で屈曲して直立気味に立ち、上半は外反して開く。端部は面取り。頸部磨き状の撫で、以外は直撫で。	
118-6 73	須恵器 片口鉢(7)	甕土中 口縁部破片	口— 底— 高(7.7)	①砂粒、雲母 ②酸化焰気味、やや硬質 ③によい褐色～によい褐色	口縁部を揃い出して片口をつくる。内外面ともにロクロ整形。	
118-7 74	須恵器 坏	甕内 片残存	口(9.8) 底(5.0) 高(2.9)	①砂粒～小石 ②酸化焰、やや軟質 ③褐色	体部はほぼ直線的に立ち上がり、端部はわずかに外反。内外面ともにロクロ整形。底部は回転糸切り無調整。	
118-8 74	須恵器 坏	甕土中 片残存	口(9.0) 底(5.0) 高(2.7)	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③褐色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部は外反する。内外面ともにロクロ整形。底部は回転糸切り無調整。	
118-9 74	須恵器 坏	掘り方中 ほぼ完成形	口(9.8) 底(5.1) 高(2.5)	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③褐色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部は外反する。やや上げ底。内外面ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
118-10 74	須恵器 坏	掘り方中 片残存	口(9.2) 底(4.9) 高(2.4)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③によい褐色～によい褐色	体部はほぼ直線的に開き、端部はやや外反。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
118-11 74	須恵器 坏	貯蔵穴内 片残存	口(8.5) 底(4.7) 高(2.2)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③褐色	体部はほぼ直線的に開く。やや上げ底。内外面ともにロクロ整形。底部は回転糸切り無調整。	
118-12 74	須恵器 坏	甕内 片残存	口(9.0) 底(4.4) 高(2.6)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③褐色	体部は緩やかに内湾して開き、口縁部はわずかに外反する。内外面ともにロクロ整形。底部は回転糸切り無調整。	
118-13	須恵器 坏	貯蔵穴内 片残存	口(13.9) 底— 高(3.3)	①砂粒、褐色粒子 ②酸化焰、やや硬質 ③褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。	

### 第3章 平安時代の遺構と遺物

探区番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
118-14	灰釉陶器 甕	貯蔵穴内 完形	口 10.5 底 5.7 高 2.0	①細砂粒、緻密 ②一部やや酸化焙気味、堅緻 ③淡黄色	体部はほぼ直線的に開き口縁端部は外反する。やや粗雑で低い断面三角形の付高台。内外面ともにロクロ整形。底部は回転糸切り無調整。	濱け掛け指輪。内面に一条の沈線がめぐる。
118-15 74	灰釉陶器 埴	覆土中 瓦残存	口(14.2) 底 一 高 (3.5)	①細砂粒、緻密 ②還元焙、堅緻 ③灰白色	体部は緩やかに内湾して立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。口縁部内面に1条の沈線がめぐる。	
119-16 90	土 甕	貯蔵穴内 一部欠損	長 (4.8) 径 2.1 重 (14.8)	①砂粒 ②酸化焙、やや硬質 ③褐色	全体的に雑な器で。孔径0.5cm	
119-17	掘 石	覆土中 完存	径4.7×4.1×3.6 重 88		歪んだ球状。全体的にツブレがみられる。	安山岩
119-18 94	砥 石	床面+33 一部欠損	長 (7.8) 厚 2.3 幅 4.9 重 120		台形の板状の砥石。上部に孔が穿れる。孔径15.6cm。	砂岩
119-19 94	砥 石	貯蔵穴内 完存	長 10.7 厚 4.5 幅 8.3 重 184		正面のみ磨減によるツブレがみられる。砥石	

#### 145号住居跡 (第120~125図、図版28・74・75・88・90・94)

本住居跡は、第4次調査区南西部の西側へ下る傾斜部にあり、18~20-22・23グリッドに位置する。

重複関係としては、北東コーナー部分の壁柱穴の一部が後出する200号住居跡(平安)により破壊されている。

住居の掘り込みは、黄褐色ローム層に深く施されており、明瞭に確認された。平面形は東西および南北方向ともに6m90cmの正方形を呈し、主軸方向はN-60°-Eを示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、65cmが残存している。床には非常に厚く貼り床が施されている。床面は中央部から竈周辺部がやや堅く締まっているが、全体としては軟弱な部分が多い。柱穴は、床面に4本が確認されており、南西の柱穴はやや北側にずれている。深さは60~80cmである。またこの他に、四方のコナー部分と四辺の壁のほぼ中央部には、直径35cmから50cmほどの円形の壁柱穴が認められており、規模の大きな住居の上屋構造の在り方を示している。なお東壁の壁柱穴は竈の制約を受け北側にずれている。貯蔵穴と周溝は検出されなかった。

掘り方は、非常に起伏に富んでおり、ほぼ全面に直径1m50cm前後の床下土坑が掘り込まれており、土坑どうしの重複も認められる。なお、掘り方調査の段階で、住居の建て変え前の柱穴と考えられるピットが床面で確認された柱穴の内側に認められた。

覆土は、4層に分層され自然堆積状況を示している。

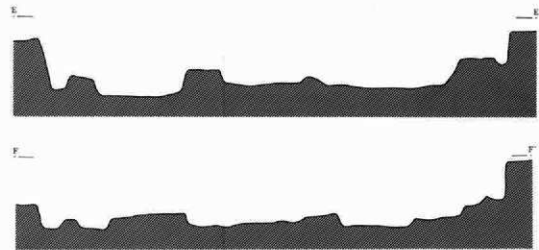
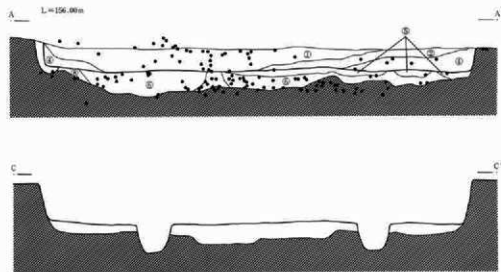
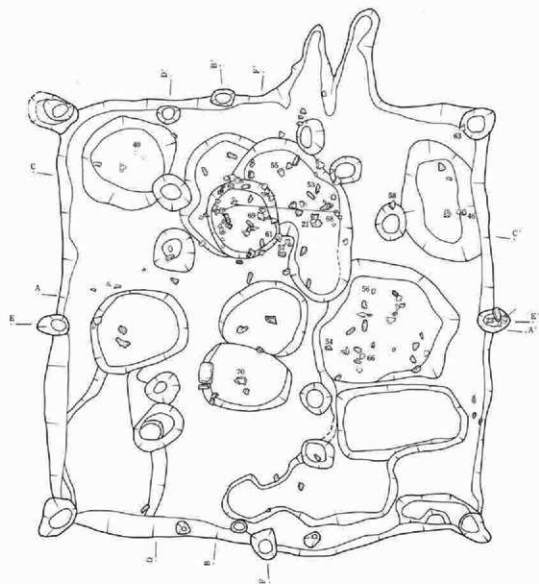
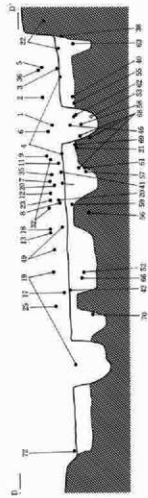
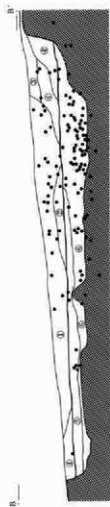
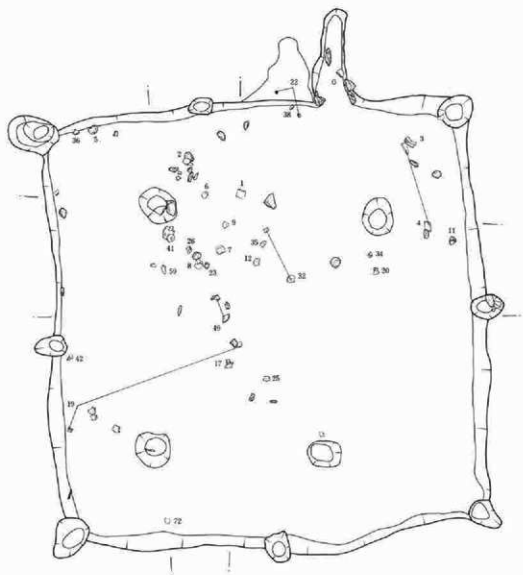
竈は、住居の建て変えにともなう造り変えが行われており、2カ所確認された。

先行する竈は東壁の中央からやや南に寄った位置に築かれている。焚き口は壁際の部分にあり、燃焼部、煙道部は長く壁の外側へ張り出している。張り出し長は燃焼部45cm、煙道部60cmである。火床面の焼土化はさほど顕著ではないが、側壁から煙道部は焼土化している。

後出する竈は、旧竈の南側に隣接して築かれている。焚き口部は壁際であり、左右の袖石が残存している。焚き口幅は40cmである。燃焼部から煙道部は長く壁の外側に張り出している。張り出し長は150cmである。火床面の焼土化はさほど顕著ではないが、燃焼部側壁から煙道部は焼土化が著しい。

遺物は、覆土中を主に非常に多量出土している。また貼り床土内からも多くの土器片が混入していた。図示した遺物を含め、土師器は壁の小破片が2,083点、坏・埴類499点であり、須臾器は壁類41点、坏・埴類162点、蓋39点を数える。土師器壁をはじめとし、いずれも残存率は低く、また接合関係もほとんど認められないことから、本住居が廃絶後に継続的に土器破片などの廃棄空間として意識されたものと考えられる。





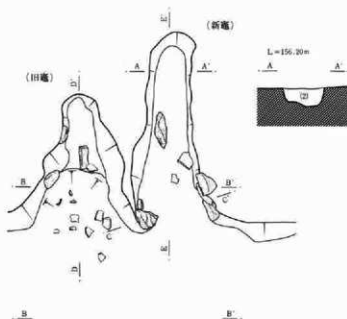
145号住

- ① 黒褐色土 ロームブロック、炭、焼土粒を少し含む。
- ② 黒褐色土 ローム粒を含む。
- ③ 黒褐色土 白色軽石を多く含む。
- ④ 黒褐色土 ローム粒、ロームブロックを多量に含む。
- ⑤ 黒褐色土 4層に類するが、少量の焼土粒を混入する。
- ⑥ 暗褐色土 ローム粒、焼土粒を多量に含む。
- ⑦ 暗茶褐色土 ローム粒、炭化物粒を含み、比較的少量の焼土粒を含む。
- ⑧ 暗褐色土 ローム粒を多量に含む、焼土粒も含む。
- ⑨ 明黄褐色土 ロームブロックが主体、少量の暗褐色土が混じる。

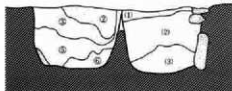
第120図 145号住居跡実測図



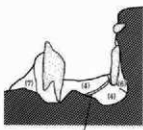
第2節 竪穴住居跡と出土遺物



L=156.20m



C C'

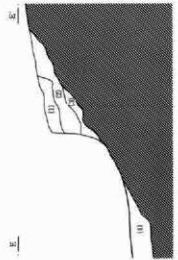


145号住

- ① 黒褐色土 ロームブロック、炭、焼土粒を少し含む。
- ② 黒褐色土 ローム粒を含む。
- ③ 黒褐色土 白色軽石を多く含む。
- ④ 黒褐色土 ローム粒、ロームブロックを多量に含む。
- ⑤ 黒褐色土 4層に類するが、少量の焼土粒を混入する。
- ⑥ 暗褐色土 ローム粒、焼土粒を多量に含む。
- ⑦ 暗褐色土 ローム粒を多量に含む、焼土粒も含む。
- ⑧ 明黄褐色土 ロームブロックが主体、少量の暗褐色土が混じる。

旧竪

- ① 暗褐色土 焼土粒、炭化物を含み、白色軽石の含有が高い。



0 1 m

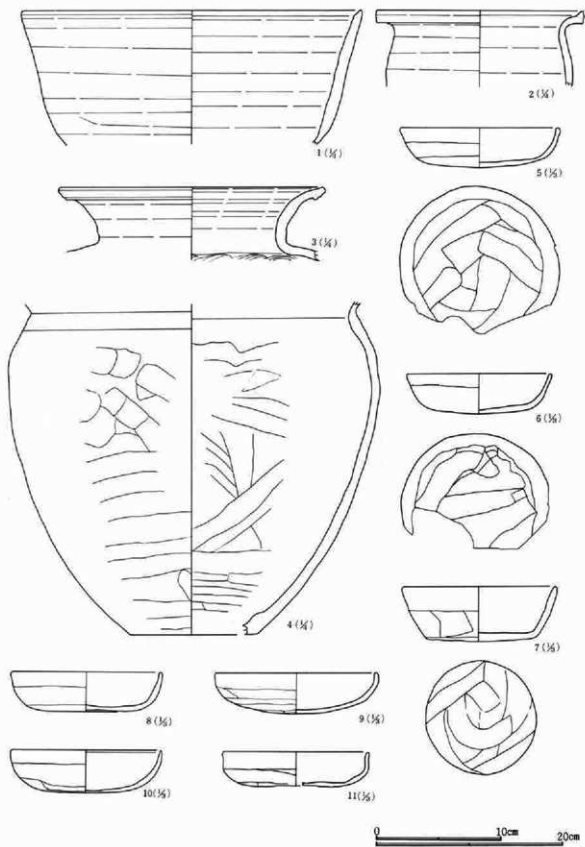
- ② 暗褐色土 焼土粒を多量、炭化物を少量含む。
- ③ 暗褐色土 ローム粒を多量に含み、焼土粒は上下層よりかなり少ない。
- ④ 暗褐色土 2層に類する。焼土粒はやや粒径大。
- ⑤ 暗褐色土 粘性が強く、硬化している。焼土粒を多量、ローム粒、白色軽石を含む。
- ⑥ 明黄褐色土 ローム粒、ロームブロック、焼土粒を多量含み黒褐色土を少量混入。
- ⑦ 5層に類する。
- ⑧ 暗黄褐色土 ロームブロックを含み、粘質。

新竪

- (1) 黒褐色土 (2~3mm)の砂粒を含む、やや軟質で粗な土層。
- (2) 黒褐色土 ローム粒を多く、焼土ブロックを少し含む微な層。
- (3) 黒褐色土 多くの黒色土を含む。(確道使用中の境膜?)
- (4) 暗褐色土 ロームブロック、ローム粒、焼土粒、炭の粒子が混入。
- (5) 焼土
- (6) 明褐色土 ローム粒を主とし、少量の黒褐色土を含む。
- (7) 黒褐色土 ローム粒、黒色土が混じる。

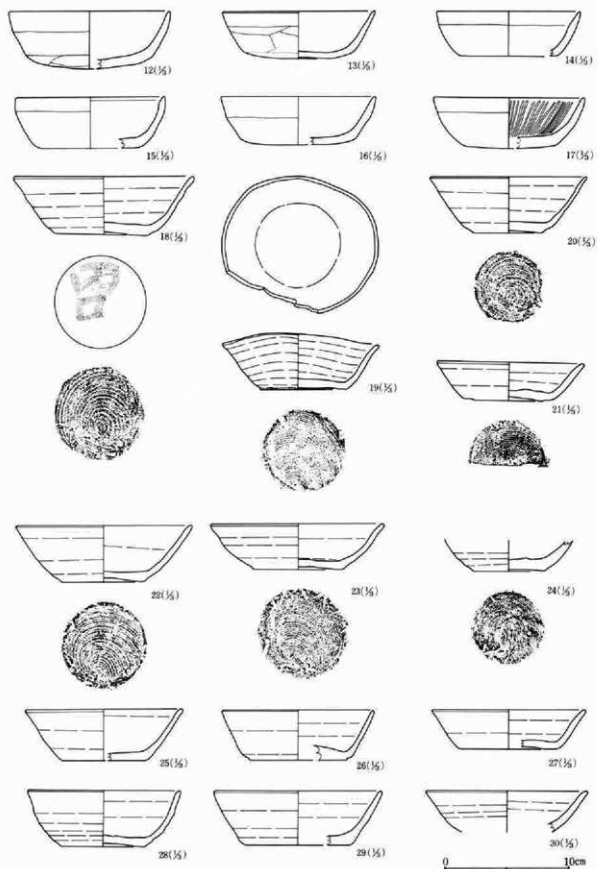
第121図 145号住居跡調査測図

第3章 平安時代の遺構と遺物



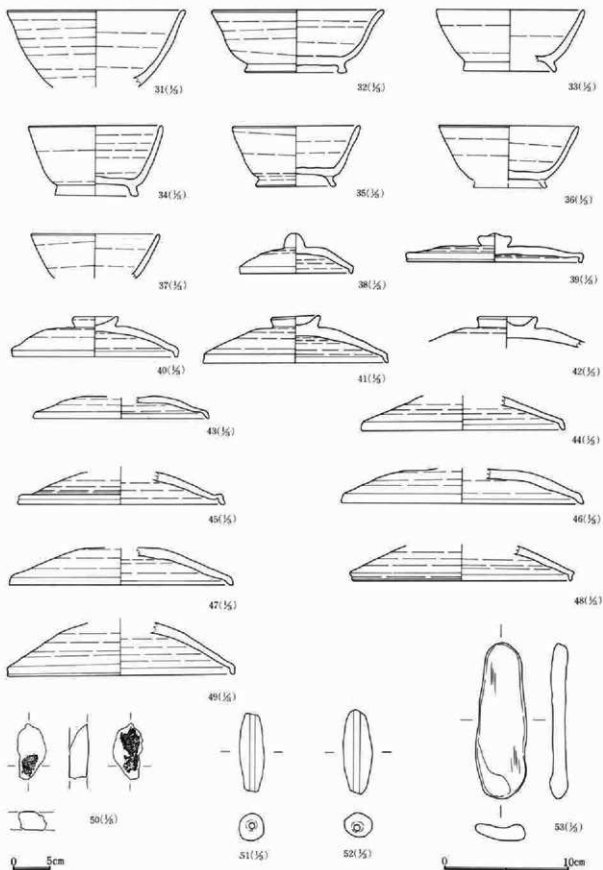
第122図 145号住居跡出土遺物実測図(1)

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



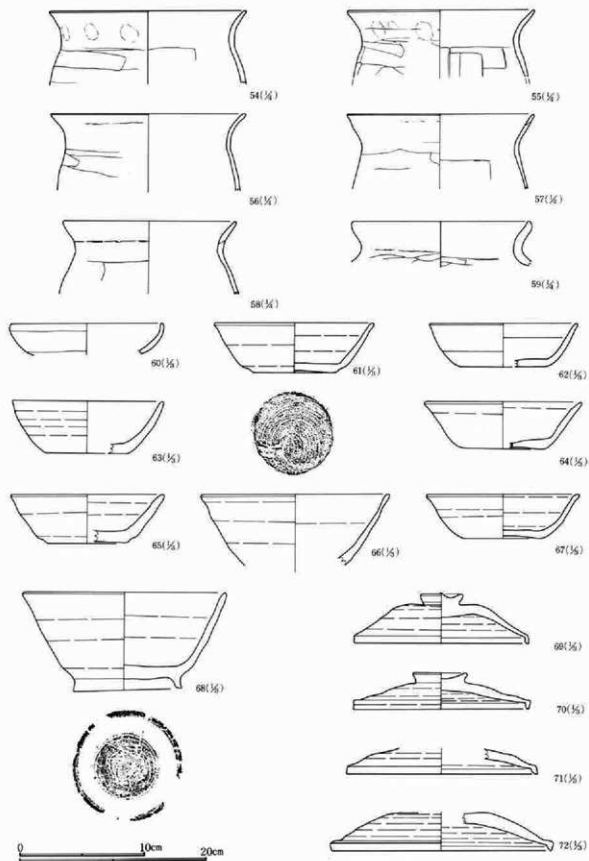
第123図 145号住居跡出土遺物実測図(2)

第3章 平安時代の遺構と遺物



第124図 145号住居跡出土遺物実測図(3)

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第125図 145号住居跡(掘り方)出土遺物実測図(4)

第3章 平安時代の遺構と遺物

145号住居跡出土遺物観察表

棟号 図版番号	土器種類	出土状況 残存状況	法量(cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
122-1 74	須恵器 鉢	床面+8 片残存	口(36.6) 底— 高(14.2)	①砂粒～小石、白色細粒 ②酸化焙、堅緻 ③黄灰色～暗灰黄色	体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部内面は強い楕円でそがれる。内外面ともにロクロ整形。下部には笠削りが加わる。	
122-2	須恵器 壺	床面+31 片残存	口(22.2) 底— 高(8.0)	①砂粒～小石、石英、白色細粒 ②還元焙、硬質 ③オリーブ灰色	口縁部は「く」字に屈曲して短く外反し、肩部は上方に狭みあげられ面取り。内外面ともにロクロ整形。	
122-3 74	須恵器 壺	床面 片残存	口(28.4) 底— 高(7.7)	①砂粒～小石、白色細粒 ②還元焙、硬質 ③(外)灰色 (内)赤灰色	口縁部は頸部で強く屈曲し外湾して立ち上がる。口縁部には1条の沈線がめぐる。口縁部内外面ロクロ整形。胴部外面無で。内面叩き。	
122-4 74	須恵器 床面～着 内 片残存	口— 底(9.2) 高(23.3)	①砂粒～小石 白色細粒 ②還元焙、硬質 ③灰色	胴部は緩やかに内湾して立ち上がり、頸部は屈曲。内外面ともにロクロ整形。外面上部叩き後無で。内面一部無で。	一部保存着	
122-5 74	土師器 坏	床面+34 片残存	口(12.8) 底(10.4) 高 3.1	①砂粒、雲母 ②酸化焙、やや硬質 ③明褐色～橙色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。口縁部、内面横撫で。底部寛削り。	内面に褐色の塗布物の痕跡
122-6 74	土師器 坏	床面+24 片残存	口 11.7 底(8.0) 高 3.2	①砂粒、雲母 ②酸化焙、やや硬質 ③ぶい褐色～ぶい橙色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。口縁部、内面横撫で。底部寛削り。	内面に褐色の塗布物の痕跡
122-7 74	土師器 坏	床面+31 完整	口 12.4 底 8.8 高 4.4	①砂粒、雲母 ②酸化焙、やや硬質 ③明褐色～橙色	体部は直線的に立ち上がる。口縁部、内面横撫で。底部寛削り。	器面磨滅 黒色の塗布物の痕跡か
122-8 74	土師器 坏	床面+15 片残存	口(12.2) 底(9.6) 高 3.1	①砂粒、雲母 ②酸化焙、やや硬質 ③明褐色～橙色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。口縁部、内面横撫で。底部寛削り。	内面に褐色の塗布物の痕跡
122-9	土師器 坏	床面+30 片残存	口(13.0) 底 丸底 高 3.3	①砂粒、雲母 ②酸化焙、やや硬質 ③橙色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。口縁部、内面横撫で。底部寛削り。	内面に褐色の塗布物の痕跡
122-10 74	土師器 坏	覆土中 片残存	口(12.2) 底 8.8 高 3.4	①砂粒、雲母 ②酸化焙、やや軟質 ③明褐色～橙色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。口縁部、内面横撫で。底部寛削り。	内面に褐色の塗布物の痕跡
122-11 74	土師器 坏	床面+8 片残存	口(11.8) 底(9.4) 高 2.8	①砂粒、雲母 ②酸化焙、やや硬質 ③橙色	口縁部は強い楕円で直線的に立ち上がる。内面横撫で。底部寛削り。	内面に褐色の塗布物の痕跡
123-12 74	土師器 坏	床面+31 片残存	口(12.8) 底 丸底 高 4.5	①砂粒、雲母 ②酸化焙、やや軟質 ③ぶい黄褐色	体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部は横撫でにより薄くそがれる。内面横撫で。体部外面、底部は寛削り。	器面磨滅
123-13 74	土師器 坏	南中央壁 柱穴内 片残存	口(12.2) 底(8.5) 高 3.7	①砂粒、雲母 ②還元焙、やや硬質 ③暗褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。口縁部、内面は横撫で。体部外面、底部は寛削り後に弱い無で。	
123-14	土師器 坏	覆土中 片残存	口(11.4) 底(7.8) 高 3.5	①砂粒少 微細 ②還元焙、やや軟質 ③橙色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。口縁部は強い楕円で。内面横撫で。外面は寛削り後弱い無で。	器面磨滅
123-15	土師器 坏	覆土中 片残存	口(12.0) 底(8.0) 高 4.0	①細砂粒少 ②還元焙、やや軟質 ③ぶい黄褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。口縁部は強い楕円で。内面横撫で。外面は寛削り後弱い無で。	器面磨滅
123-16 74	土師器 坏	覆土中 片残存	口(12.4) 底(9.3) 高 3.8	①砂粒～小石、雲母 ②還元焙、やや軟質 ③橙色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。口縁部は強い楕円で。内面横撫で。外面、底部は寛削り。	器面磨滅
123-17	土師器 坏	床面+9 片残存	口(12.0) 底(7.0) 高 4.0	①砂粒～小石、雲母 ②還元焙、やや硬質 ③明赤褐色～橙色	体部は緩やかに内湾して立ち上がる。口縁部横撫で。内面横撫で後置跡き。外面、底部は撫で。	
123-18 75-56	須恵器 坏	床面+30 口縁部欠損	口(14.3) 底 7.3 高 4.7	①砂粒、雲母 ②還元焙気味、やや硬質 ③灰白色 一部黒変	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	底部外面に墨書「田口」
123-19 75	須恵器 坏	床面～24 口縁部欠損	口 12.6 底 6.5 高 4.4	①砂粒、白色細粒 ②還元焙、堅緻 ③灰色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	浜み顕著



## 第2節 竪穴住居跡と出土遺物

押印番号 図版番号	土器種別 種	出土状況 残存状況	法量(cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、型・成形技法の特徴	備考
123-20 75	須恵器 坏	床面+12 口縁部欠 大欠損	口(12.5) 底 5.5 高 4.4	①砂粒～小石、白色細粒多 ②還元焰、堅緻 ③暗青灰色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面ともロクロ整形(右回転)。底部は回転余切り無調整。一部磨削。	
123-21	須恵器 坏	掘り方中 互残存	口(11.6) 底 5.7 高 3.0	①砂粒、白色細粒 ②還元焰、堅緻 ③緑黒色～暗緑灰色	体部はほぼ直線的に立ち上がり、端部はわずかに外反する。内外面ともにロクロ整形。底部は回転余切り無調整。	
123-22 75	須恵器 坏	床面+旧 口縁欠損 緑欠損	口 14.0 底 6.6 高 4.4	①砂粒 ②還元焰気味、やや軟質 ③灰白色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転余切り無調整。	器面磨減
123-23	須恵器 坏	床面+32 口縁部大 平欠損	口(13.9) 底 7.1 高 3.6	①砂粒、白色細粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転余切り無調整。	
123-24	須恵器 坏	覆土中 下半部残 存	口 — 底 5.6 高(2.4)	①砂粒、雲母 ②還元焰、やや軟質 ③(外)灰白色 (内)増灰色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転余切り無調整。	
123-25 75	須恵器 坏	床面+21 互残存	口(12.6) 底(6.8) 高 4.0	①砂粒、白色細粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	体部はほぼ直線的に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。底部は回転余切り無調整。	
123-26	須恵器 坏	床面+20 互残存	口(12.2) 底(7.8) 高 4.0	①砂粒、雲母 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	体部はほぼ直線的に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転余切り無調整。	
123-27	須恵器 坏	覆土中 互残存	口(12.2) 底(8.0) 高 3.1	①砂粒、白色細粒 ②還元 焰、堅緻 ③(外)増オリ ブ灰色 (内)緑灰色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。底部は回転余切り無調整。	
123-28 75	須恵器 坏	旧覆内 口縁部欠 大欠損	口(12.2) 底 6.7 高 4.4	①砂粒、白色細粒 ②還元焰、堅緻 ③灰色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。底部は側で。	
123-29	須恵器 坏	覆土中 互残存	口(13.5) 底(8.5) 高 4.3	①砂粒～小石 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。	
123-30	須恵器 坏	覆土中 互残存	口(12.8) 底 — 高(3.2)	①砂粒 ②還元焰、軟質 ③灰白色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。	
124-31	須恵器 坏	覆土中 互残存	口(14.6) 底 — 高(6.0)	①砂粒、雲母 ②還元焰、やや硬質 ③(外)灰色 (内)灰白色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。内外面ともにロクロ整形。	混入か
124-32 75	須恵器 高台付埴 輪欠損	床面+31 口 — 高(8.2) 緑欠損	口 13.8 底(8.2) 高 4.9	①砂粒、雲母 ②還元焰気味、やや軟質 ③灰黄色～灰白色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。底部は回転余切り無調整。付高台。	器面磨減
124-33	須恵器 高台付埴 輪欠損	覆土中 互残存	口(11.8) 底(7.4) 高 4.8	①砂粒、白色細粒 ②還元焰、堅緻 ③灰色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。付高台。	
124-34 75	須恵器 高台付埴 輪欠損	床面+3 互残存	口(10.8) 底(6.7) 高 5.5	①砂粒、雲母 ②還元焰、軟質 ③灰白色	体部は直線的に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。底部は回転余切り無調整。付高台。	器面磨減
124-35 75	須恵器 高台付埴 輪欠損	床面+29 互残存	口 10.2 底 6.4 高 4.7	①砂粒、白色細粒 ②還元焰、硬質 ③オリブ灰色	体部は直線的に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。底部側で、付高台。	
124-36 75	須恵器 高台付埴 輪欠損	床面+48 互残存 高台欠損	口(11.2) 底(5.6) 高(4.3)	①砂粒～小石、白色細粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	体部は緩やかに内湾して立ち上がる。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転余切り無調整。付高台。	
124-37	須恵器 坏	覆土中 互残存	口(10.2) 底 — 高(3.5)	①砂粒、白色細粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。	
124-38 75	須恵器 蓋	旧覆内～ 掘り方中 完形	横 1.7 口 9.2 高 3.1	①砂粒～小石、白色細粒 ②還元焰、硬質 ③暗青灰色～青灰色	天井部は直線的に口縁部へ至り、先端は小さく突出する。横み部はやや粗視。内外面ともにロクロ整形。	
124-39 75	須恵器 蓋	床面+40 互残存	横 2.6 口 14.2 高 2.2	①砂粒～小石、白色細粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰白色	天井部の膨らみは小さく直線的に開く。横みは中央部が突出する。口縁部先端は丸い紐状にまわる。	

第3章 平安時代の遺構と遺物

探検番号 図版番号	土器種別 器	出土状況 残存状況	量量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
124-40 75	須恵器 蓋	覆土中～ 掘り方中 互残存	横 3.6 口 13.4 高 3.2	①砂粒、白色細粒 ②還元焰、硬質 ③暗青灰色～青灰色	天井部はわずかに外反して開き、端部は垂直気味に下がる。内外面ともにロクロ整形。	
124-41 75	須恵器 蓋	床面+3 互残存	横 4.0 口 14.8 高 3.7	①砂粒～小石、雲母、白色細粒 ②還元焰気味、やや軟質 ③灰白色	天井部は直線的に開き、口縁部は外傾して下がる。内外面ともにロクロ整形。	胴部の窪みに赤色顔料残存。 内面中央磨減
124-42	須恵器 蓋	床面+1 天井部破片	横 4.8 口 — 高 (2.3)	①砂粒～小石、白色細粒 ②還元焰、硬質 ③灰色～オリーブ灰色	胴部中央は小さく突出。内外面ともにロクロ整形。	
124-43	須恵器 蓋	覆土中 互残存	横 — 口(14.2) 高(1.8)	①砂粒、白色細粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰色	天井部は直線的に開いた後やや外反し、先端は外傾気味に下がる。内外面ともにロクロ整形。	
124-44	須恵器 蓋	覆土中 互残存	横 — 口(16.3) 高(2.7)	①砂粒、白色細粒 ②還元焰、やや硬質 ③明オリーブ灰色～灰白色	天井部は直線的に開き、先端は外傾して下がる。内外面ともにロクロ整形。	
124-45	須恵器 蓋	覆土中 互残存	横 — 口(16.6) 高(2.6)	①砂粒 ②還元焰気味、やや軟質 ③灰白色	天井部は直線的に開き、端部は外反し、先端は外傾して下がる。内外面ともにロクロ整形。	器面磨減
124-46	須恵器 蓋	覆土中 互残存	横 — 口(19.3) 高(2.7)	①砂粒～小石、白色細粒多 ②還元焰、硬質 ③灰色	天井部は直線的に開き、先端は外傾して下がる。内外面ともにロクロ整形。	内面に軸がかか る。
124-47	須恵器 蓋	覆土中 互残存	横 — 口(17.8) 高(2.9)	①砂粒～小石 ②還元焰気味、やや軟質 ③明オリーブ灰色～灰白色	天井部は直線的に開き、先端は外傾してわずかに下がる。内外面ともにロクロ整形。	
124-48	須恵器 蓋	覆土中	横 — 口(18.0) 高(2.7)	①砂粒～小石、白色細粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	天井部は直線的に開き、先端はやや湾曲して垂下する。内外面ともにロクロ整形。	
124-49 75	須恵器 蓋	床面+6 ～24 互残存	横 — 口(18.2) 高(4.1)	①砂粒 ②還元焰気味、やや軟質 ③灰白色	天井部はやや外反して開き、先端部はやや外傾して下がる。内外面ともにロクロ整形。扁平な自然礫を使用。図の左面に磨減あり。	
124-50 88	瓦	覆土中 破片	長 — 幅 — 厚 2.5	①砂粒、白色細粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰色	一枚造り。凸面無で。凹面布目。	吉井・藤岡系
124-51 90	土 罎	覆土中 宛形	長 6.25 径 1.9 重 22.6	①砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③褐色	全面に雑な撫で。穿孔は図の上部からか。孔径0.4cm	
124-52 90	土 罎	覆土中 宛形	長 6.8 径 2.3 重 25.6	①砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③褐色	全面に雑な撫で。穿孔は図の下部からか。孔径0.5cm	
124-53 94	砥 石	掘り方中 宛形	長 12.5 幅 4.0 厚 1.35	重 123	長円形で板状の自然石を利用。一面に不明礫だが、擦痕・磨減が認められる。	刷書母線泥片岩
125-54 74	土 師 器 壺	掘り方中 互残存	口(21.0) 底 — 高(7.8)	①砂粒、雲母 ②還元焰、やや軟質 ③褐色	「コ」字状口縁への途上にある形状をとる。口縁部横撫で。胴部 外面荒削り。内面直撫で。	
125-55 74	土 師 器 壺	掘り方中 互残存	口(20.0) 底 — 高(7.2)	①砂粒、雲母 ②還元焰、やや軟質 ③明赤褐色～褐色	口縁部は緩やかに屈曲して外反。口縁部横撫で。胴部 外面荒削り。内面直撫で。	
125-56 74	土 師 器 壺	掘り方中 互残存	口(20.7) 底 — 高(8.1)	①砂粒、雲母 ②還元焰、やや軟質 ③明赤褐色～褐色	「コ」字状口縁への途上にある形状をとる。口縁部横撫で。胴部 外面荒削り。内面直撫で。	
125-57 74	土 師 器 壺	掘り方中 互残存	口(20.0) 底 — 高(7.9)	①砂粒、雲母 ②還元焰、やや軟質 ③明赤褐色～褐色	口縁部は「く」字に緩やかに外反する。輪痕を残す。口縁部横撫で。胴部 外面荒削り。内面直撫で。	
125-58	土 師 器 壺	掘り方中 互残存	口(18.6) 底 — 高(7.7)	①砂粒、雲母 ②還元焰、やや硬質 ③明赤褐色～褐色	口縁部は「く」字に緩やかに外反。口縁部横撫で。胴部 外面荒削り。内面直撫で。	
125-59	土 師 器 壺	掘り方中 互残存	口(19.0) 底 — 高(4.7)	①砂粒～小石、雲母 ②還元焰、やや硬質 ③明赤褐色～褐色	口縁部は「く」字に屈曲して外反。口縁部は横撫で。外面荒削り。内面直撫で。	

押出番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状況 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備 考
125-60	土師器 坏	覆土中～ 掘り方中 片残存	口(12.0) 底 一 高 (2.5)	①砂粒、黄母 ②酸化焰、やや軟質 ③褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は小さく直立気味。口縁部、内面横撫で。外面高部より後深い撫で。	内面に褐色の塗布物の痕跡
125-61 75	須恵器 坏	掘り方中 口縁部多 く欠損	口(12.8) 底 6.5 高 3.9	①砂粒、白色細粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰色～灰白色	体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに外反。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。上げ底。	
125-62	須恵器 坏	掘り方中 片残存	口(11.8) 底 (6.8) 高 3.4	①砂粒、白色細粒 ②還元焰、硬質 ③暗緑灰色～緑灰色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
125-63	土師器 坏	掘り方中 片残存	口(12.0) 底 (6.6) 高 4.1	①砂粒、白色細粒 ②酸化焰、やや軟質 ③褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面横撫で、外面は強い撫でがロクロ整形に類するがやや不明瞭。	
125-64	須恵器 坏	掘り方中 片残存	口(12.6) 底 (6.8) 高 3.7	①砂粒、白色細粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰色	体部はやや外反気味に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。底部は回転糸切り無調整。	断面は明赤褐色
125-65	須恵器 坏	掘り方中 片残存	口(12.2) 底 (6.2) 高 3.8	①砂粒、白色細粒 ②酸化 焰気味、硬質 ③(外)灰オ リーブ色 (内)明赤褐色	体部はほぼ直線的に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。底部は回転糸切り無調整。	
125-66	須恵器 坏	掘り方中 片残存	口(15.2) 底 一 高 (5.6)	①砂粒、白色細粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。内外面ともにロクロ整形。	
125-67	須恵器 坏	掘り方中 片残存	口(12.6) 底 6.4 高 3.5	①砂粒、白色細粒 ②還元 焰、硬質 ③暗オリーブ灰 色～オリーブ灰色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
125-68 75	須恵器 高台付埴	覆土中～ 掘り方中 片残存	口(16.2) 底 (8.7) 高 7.8	①砂粒、白色細粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	体部は緩やかに内湾して立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。底部は回転糸切り無調整。付高台。	外面に傷付着
125-69 75	須恵器 蓋	掘り方中 片残存	横 3.4 口(14.0) 高 3.9	①砂粒、白色細粒 ②還元 焰、やや硬質 ③オリーブ 灰色～明オリーブ灰色	天井部は直線的に開き、肩部はやや外反。先端はほぼ垂直に下がる。内外面ともにロクロ整形。	
125-70 75	須恵器 蓋	掘り方中 片残存	横 4.3 口 14.1 高 2.9	①砂粒～小石、白色細粒 ②還元焰、硬質 ③灰色～灰白色	天井部は低くわずかに外反して開く。先端はやや湾曲して下がる。内外面ともにロクロ整形。	
125-71	須恵器 蓋	掘り方中 片残存	横 一 口(15.2) 高 (2.0)	①砂粒、白色細粒 ②還元焰、硬質 ③黒褐色～暗緑灰色	天井部はわずかに内湾して開き、先端部は外傾する。内外面ともにロクロ整形。	
125-72	須恵器 蓋	床面直下 片残存	横 一 口(17.8) 高 (3.0)	①砂粒、白色細粒 ②還元焰、硬質 ③灰色～灰白色	天井部は直線的に開き、肩部はやや外反。先端は短く垂下する。内外面ともにロクロ整形。	

## 182号住居跡 (第126・127図、図版29・75)

本住居跡は、第4次調査区南部の西側へ下る傾斜地にあり、17-27グリッドに位置する。重複関係としては、先行する180号住居跡の西壁を壊して築かれていることが認められている。また本住居跡の東壁周辺を除きほとんどの部分は4号溝によって、潰滅している。

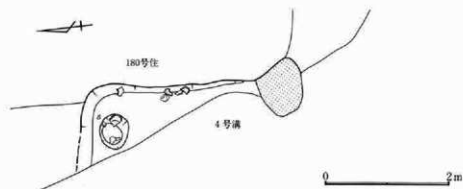
住居は黄褐色ローム層にまでおよび、残存部は明瞭に確認されたが、住居の全体像は把握できない。床面はローム面を使用しており、貼り床は施されていない。北東コーナー付近には直径24cm、深さ21cmの円形のピットが認められた。

覆土はほとんど残存しない。

竈の残存状況は非常に不良であるが、東壁の南側に確認された風倒木埋土上に非常に焼土化しており、火床面の下部と認められた。

遺物は、壁際とピット周辺から出土している。

### 第3章 平安時代の遺構と遺物



第126図 182号住居跡実測図



第127図 182号住居跡出土遺物実測図

#### 182号住居跡出土遺物観察表

採回番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (重)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
127-1 75	須恵器 羽釜	貯蔵穴内 片残存	口 — 底 (9.0) 高 (8.6)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや軟質 ③暗褐色～にぶい黄褐色	胴部はやや内湾して立ち上がる、外面直削り、 内面荒削りで、底平盤で。	底部片程に砂粒 多量付着
127-2 75	須恵器 高台付埴	床面+18 片残存	口 (14.4) 底 (7.8) 高 5.8	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい黄褐色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端 部はわずかに外反する。内外面ともに口クロ 整形。底平盤で、付高台。	

#### 183号住居跡 (第128～133図、図版29・76・77・94)

本住居跡は、第4次調査区の南西部のほぼ平坦な地点にあり、20-25・26グリッドに位置する。

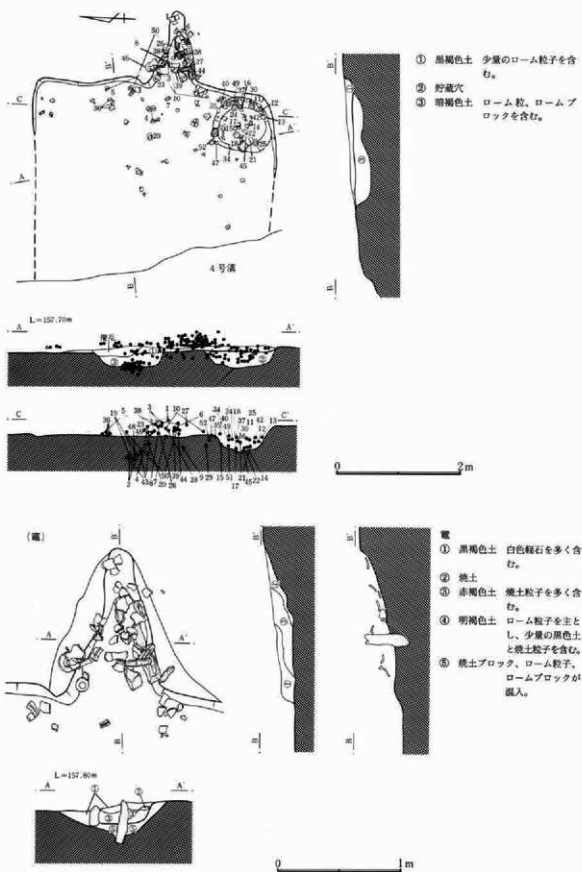
重複関係としては、205号住居跡の上部に架かっていることが確認されており、また西半部は調査区を南北に横切る4号溝によって失っている。

住居の掘り込みは黄褐色ローム層中に及んでいるが、遺存状況は不良であり、確認は困難であった。傾斜の関係もあり東壁周辺部を除くと壁は検出されなかったが、南北方向は3m85cmを測り、主軸方向はN-85°-Eを示すものとみられる。壁は最大でも20cmが確認されたにとどまる。床面は床下の土坑部分を除くと、ローム面を直接叩き締めて使用している。貯蔵穴は南東コーナー部分に設けられており、直径94cm、深さ16cmのほぼ円形の形状を呈する。柱穴や周溝は検出されなかった。

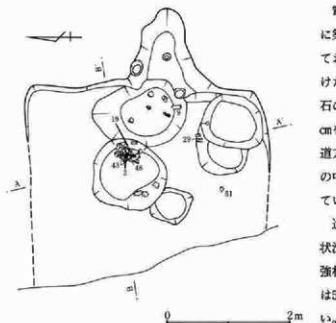
掘り方部分には、中央部付近に直径90cm、深さ24cmの明瞭な円形の土坑が掘り込まれているほか、竈前部および貯蔵穴周辺に摺鉢状の掘り込みが検出された。

覆土は、黒褐色土層が僅かに残存するのみである。

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



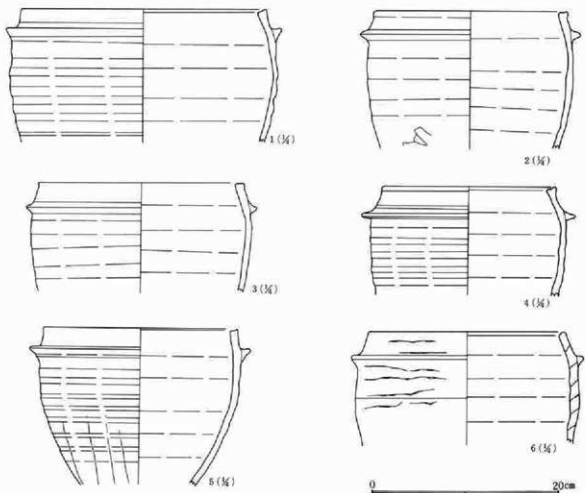
第128図 183号住居跡実測図(1)



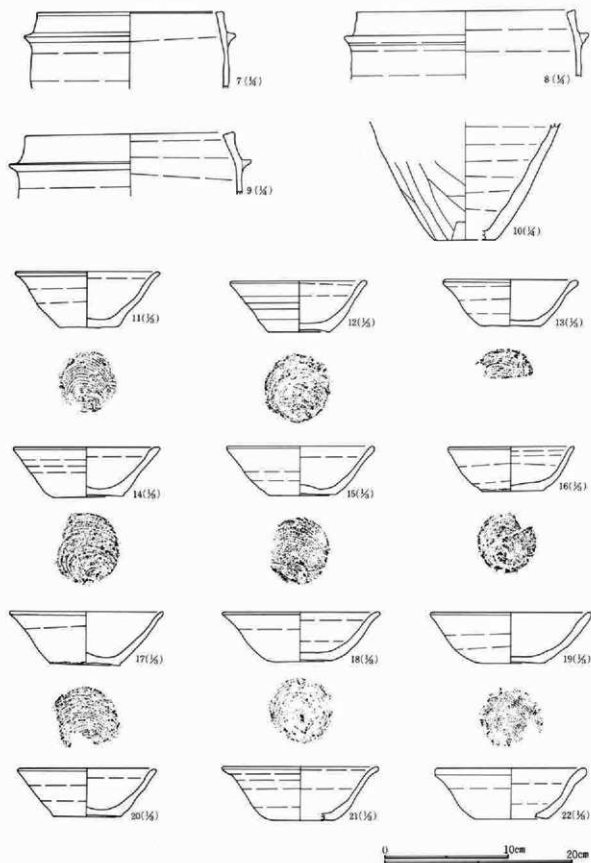
第129図 183号住居跡実測図(2)

竈は、東壁の中央よりもやや南側に寄った位置に築かれている。竈は石組みによる構築がなされており、埋設された状況にある石の他、火熱を受けた数点の石が出土している。また掘り方面には石の埋設痕も残る。焚き口部は壁際にあり幅約60cmを測る。燃焼部は壁外に張り出しており、煙道方向への張り出しは120cmが検出された。燃焼部の中央部には、使用状況をとどめた支脚が遺存している。火床面の焼土化はさほど顕著ではない。

遺物は、竈内と貯蔵穴周辺部に非常に集中した状況で出土している。羽釜は127点を数えるが竈補強材としての転用品などが含まれ、また坏・埴類は547点で破片が主だが、遺存率が高いものも多

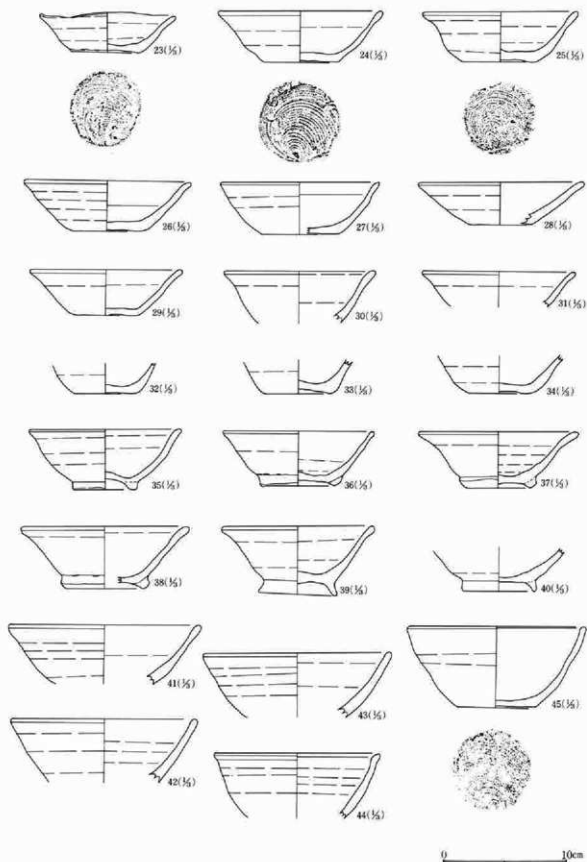


第130図 183号住居跡出土遺物実測図(1)



第131図 183号住居跡出土遺物実測図(2)

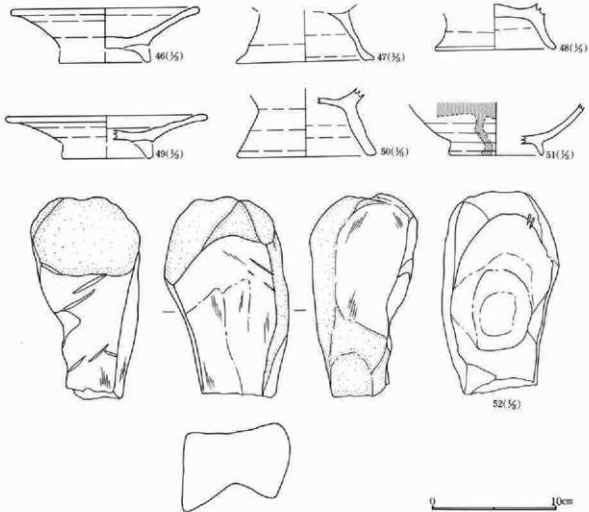
第3章 平安時代の遺構と遺物



第132図 183号住居跡出土遺物実測図(3)



第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第133図 183号住居跡出土遺物実測図(4)

183号住居跡出土遺物観察表

検出番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
130-1 76	須恵器 羽蓋	竈内 片残存	口(26.4) 底— 高(14.1)	①砂粒～小石 ②還元焰気味、軟質 ③灰白色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。 内外面ともにロクロ整形。	
130-2 76	須恵器 羽蓋	床下土坑 内 片残存	口(21.0) 底— 高(14.5)	①砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい褐色～にぶい橙色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。 内外面ともにロクロ整形。胴部外面下部は旋 削り。	
130-3 76	須恵器 羽蓋	竈内 片残存	口(22.0) 底— 高(11.5)	①砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい褐色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。 内外面ともにロクロ整形。	
130-4 76	須恵器 羽蓋	床面～十 3 片残存	口(18.6) 底— 高(11.5)	①砂粒～小石 ②還元焰、軟質 ③灰白色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。 内外面ともにロクロ整形。	
130-5 76	須恵器 羽蓋	竈内～床 面 片残存	口(20.8) 底— 高(16.5)	①砂粒～小石 ②酸化焰、やや軟質 ③橙色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。 内外面ともにロクロ整形。胴部外面下部は弱 い旋削り。	
130-6 76	須恵器 羽蓋	竈内 片残存	口(21.2) 底— 高(11.8)	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③橙色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。 内外面ともにロクロ整形。輪痕が顕著に認 められる。	

第3章 平安時代の遺構と遺物

採掘番号 図版番号	土器類別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
131-7 76	須恵器 羽蓋	床面～掘り方中 残存	口(20.0) 底— 高(8.1)	①砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	口縁部はわずかに内傾し、肩部は強い面取り。内外面ともにロクロ整形。	
131-8	須恵器 羽蓋	床面～3 残存	口(23.2) 底— 高(7.2)	①砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	口縁部はわずかに内傾し、肩部は強い面取り。内外面ともにロクロ整形。	
131-9 76	須恵器 羽蓋	掘り方中 残存	口(22.4) 底— 高(6.5)	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい橙色	口縁部はわずかに内傾し、肩部は強い面取り。内外面ともにロクロ整形。	内外面に厚付着
131-10	須恵器 羽蓋	壺岡辺部 残存	口— 底(6.4) 高(12.5)	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③(外)橙色 (内)にぶい黄褐色	胴部はやや内湾気味に立ち上がる。外面は高削り。内面はロクロ整形。底部磨で。	
131-11 76	須恵器 坏	貯蔵穴内 口縁部一部欠損	口11.6 底4.8 高4.4	①砂粒、雲母 ②還元焰、やや軟質 ③橙色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
131-12 76	須恵器 坏	貯蔵穴内 完形	口10.9 底5.0 高4.0	①砂粒、雲母、白色細粒 ②還元焰、軟質 ③灰白色	体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	外面一部剥落
131-13 76	須恵器 坏	貯蔵穴内 残存	口(10.8) 底(4.9) 高3.7	①砂粒～小石、雲母 ②還元焰、やや軟質 ③明オリブ灰色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。底部は回転糸切り無調整。	
131-14 76	須恵器 坏	貯蔵穴内 残存	口(11.6) 底5.5 高4.0	①砂粒～小石、雲母 ②還元焰気味、やや軟質 ③灰白色	体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
131-15 76	須恵器 坏	貯蔵穴内 残存	口11.8 底5.4 高3.9	①砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③にぶい橙色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	器面磨減
131-16 76	須恵器 坏	貯蔵穴内 残存	口(10.0) 底4.9 高3.5	①砂粒 ②還元焰気味、やや硬質 ③にぶい黄色～淡黄褐色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
131-17 76	須恵器 坏	貯蔵穴内 残存	口12.3 底5.6 高4.2	①砂粒、雲母 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	器面磨減
131-18 76	須恵器 坏	貯蔵穴内 完形	口12.6 底5.4 高3.9	①砂粒～小石 ②還元焰気味、軟質 ③灰白色	体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	器面や磨減
131-19 76	須恵器 坏	床下土坑 残存	口12.8 底5.3 高4.0	①砂粒～小石 ②還元焰気味、やや軟質 ③灰黄色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	器面磨減
131-20 76	須恵器 坏	床面 口縁部一部欠損	口11.2 底5.4 高3.8	①砂粒～小石、雲母 ②還元焰気味、やや軟質 ③にぶい黄褐色	体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	器面磨減
131-21 76	須恵器 坏	貯蔵穴内 残存	口(12.6) 底(5.5) 高4.2	①砂粒～小石 ②還元焰、軟質 ③灰白色	体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。内外面ともにロクロ整形。底部は回転糸切り無調整。	器面磨減
131-22 76	須恵器 坏	貯蔵穴内 残存	口(11.8) 底(6.0) 高(4.0)	①砂粒、雲母 ②還元焰気味、やや軟質 ③にぶい黄褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。底部は回転糸切り無調整。	
132-23 77	須恵器 坏	壺内 完形	口10.9 底5.6 高3.1	①砂粒～小石、雲母 ②還元焰気味、やや軟質 ③灰白色 一部黒変	体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。近んでおり粗雑。内外面ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	器面磨減
132-24 77	須恵器 坏	貯蔵穴内 口縁部欠損	口(13.2) 底6.2 高4.0	①砂粒～小石、白色細粒 ②焼し焼成、やや軟質 ③暗灰色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
132-25 77	須恵器 坏	貯蔵穴内 口縁部欠損	口(12.4) 底6.0 高3.9	①砂粒 ②焼し焼成、やや軟質 ③黒色～オリブ灰色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
132-26 77	須恵器 坏	壺内 残存	口(13.4) 底(5.2) 高(4.0)	①砂粒～小石、雲母 ②還元焰、やや軟質 ③(外)橙色 (内)にぶい黄褐色	体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。内外面ともにロクロ整形。底部は回転糸切り無調整。	器面磨減

## 第2節 竪穴住居跡と出土遺物

探洞番号 図説番号	土器類別 題	出土状況 残存状況	法量(cm) (#)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、装・成形技法の特徴	備 考
132-27 77	須志器 坏	甕内 瓦残存	口(12.8) 底(6.2) 高 4.1	①砂粒-小石 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい黄褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。内外面ともにロクロ整形。底部は回転糸切り無調整。	
132-28	須志器 坏	甕内 瓦残存	口(13.2) 底(5.6) 高(3.4)	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③明黄褐色	体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。内外面ともにロクロ整形。底部は回転糸切り無調整。	
132-29 77	須志器 坏	掘り方中 瓦残存	口(12.3) 底(5.2) 高 3.7	①砂粒-小石、石英 ②還元焰気味、やや軟質 ③青黒色～暗青灰色	体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。内外面ともにロクロ整形。底部は回転糸切り無調整。	大半が黒変し、横し状を呈す。器面磨減
132-30	須志器 坏	貯蔵穴内 瓦残存	口(12.2) 底 - 高 4.1	①砂粒-小石 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい黄褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。	
132-31	須志器 坏	覆土中 瓦残存	口(12.4) 底 - 高(2.8)	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。	
132-32 77	須志器 坏	覆土中 底部破片	口 - 底 5.1 高(2.4)	①砂粒 ②焼し焼成、やや軟質 ③緑黒色～暗緑灰色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	器面磨減
132-33 77	須志器 坏	覆土中 底部残存	口 - 底 5.6 高(2.7)	①砂粒 ②焼し焼成 ③暗灰色～灰色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	器面磨減
132-34 77	須志器 坏	甕内～貯 蔵穴内 底部残存	口 - 底 5.0 高(3.0)	①砂粒 ②酸化焰焼成 ③明黄褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	器面磨減
132-35 77	須志器 高台付埴	床面 瓦残存	口(12.2) 底 5.2 高 4.7	①砂粒-小石 ②焼し焼成、やや軟質 ③灰色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。粗雑な付高台。底部撫で。	器面磨減
132-36 77	須志器 高台付埴	床面～3 瓦残存	口(12.1) 底 6.5 高 4.3	①砂粒-小石、雲母 ②還元焰気味、やや軟質 ③灰白色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。内外面ロクロ整形。底部は回転糸切り無調整。粗雑な付高台。	
132-37 77	須志器 高台付埴	貯蔵穴内 口縁部欠 損	口(12.8) 底 6.1 高 4.4	①砂粒-小石 ②酸化焰気味、やや硬質 ③にぶい黄褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は大きく外反する。内外面ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。粗雑な付高台。	
132-38 77	須志器 高台付埴	甕内 瓦残存	口(13.6) 底(7.0) 高 4.9	①砂粒 ②酸化焰気味、軟質 ③(外)淡黄色(内)にぶい黄褐色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。内外面ロクロ整形。底部は回転糸切り無調整。粗雑な付高台。	器面磨減し、粘土付着
132-39 77	須志器 高台付埴	甕内 口縁部瓦 欠損	口(12.2) 底 6.3 高 5.5	①砂粒 ②還元焰気味、やや軟質 ③灰白色	体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。内外面ともにロクロ整形。底部は回転糸切り無調整。粗雑な付高台。	
132-40 77	須志器 高台付埴	口 - 下半部残 存	口 - 底(6.0) 高(3.5)	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい黄褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。底部は回転糸切り無調整。付高台。	
132-41	須志器 埴	覆土～掘 り方中 瓦残存	口(15.4) 底 - 高(4.7)	①砂粒 ②焼し焼成、やや軟質 ③緑黒色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。	
132-42	須志器 埴	貯蔵穴内 瓦残存	口(14.8) 底 - 高(4.9)	①砂粒、雲母 ②酸化焰気味、やや硬質 ③黄褐色～にぶい黄色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。	
132-43 77	須志器 埴	床下土坑 内 瓦残存	口(15.0) 底 - 高(5.1)	①砂粒 ②酸化焰気味、や や硬質 ③にぶい黄褐色～ にぶい黄褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。	
132-44	須志器 埴	甕内 瓦残存	口(13.2) 底 - 高(5.1)	①砂粒、白色顔料 ②酸化焰、やや軟質 ③明黄褐色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部は強い撫でにより外反する。内外面ともにロクロ整形。	粘土付着
132-45 77	須志器 坏	貯蔵穴内 瓦残存	口(14.3) 底 6.5 高 6.4	①砂粒 ②還元焰、軟質 ③灰白色	体部は緩やかに内湾して立ち上がる。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	器面磨減
132-46 77	須志器 高台付埴	甕内 高台部欠 損	口 15.0 底 - 高(3.1)	①砂粒-小石、石英 ②酸化焰気味、やや軟質 ③褐色	体部はやや外反して開き、口縁部は大きく外反する。内外面ともにロクロ整形。付高台。	

### 第3章 平安時代の遺構と遺物

採掘番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状況 残存状況	法量(cm) (K)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整・成形技法の特徴	備 考
133-47	須恵器 高台付埴	床面 与残存	口 一 底(11.2) 高(3.9)	①砂粒、白色細粒 ②酸化焰、やや軟質 ③明褐色～橙色	高台部は高く開き端部は外反する。内外面ともにロクロ整形。	
133-48 77	須恵器 高台付埴	床下土坑 内 底部残存	口 一 底 9.7 高(3.6)	①砂粒、雲母 ②酸化焰気味、やや軟質 ③黒褐色～黄灰色	高台部は高く開き端部は外反する。内外面ともにロクロ整形。	
133-49	須恵器 高台付皿	貯蔵穴内 与残存	口(16.2) 底 一 高(2.2)	①砂粒～小石、白色細粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	体部はやや外反して開き、口縁部は大きく外反する。	
133-50 77	須恵器 高台付埴	竈内 高台部残 存	口 一 底 11.2 高(5.4)	①砂粒、白色細粒 ②酸化焰、やや軟質 ③明褐色～橙色	足高の高台で「ハ」字に開く。内外面ともにロクロ整形。	
133-51 77	灰釉陶器 埴	掘り方中 与残存	口 一 底(7.6) 高(4.1)	①緻密 ②還元焰、堅緻 ③灰白色	体部は緩やかに内湾して立ち上がる。高台端部はやや強い横撫で。	
133-52 94	磁 石	貯蔵穴際	長(15.9) 幅 8.6 厚 6.3	重(1200)	端部などに自然面を残す。一面に叩き穿った窪みをもつ。使用面には被碇物の当りによる段差がある。一部に瓦製の線索痕。	砂岩

#### 186号住居跡（第134・135図、図版30・77・78・88・91）

本住居跡は、第4次調査区南東部の平坦部にあり17・18-31・32グリッドに位置する。

重複関係としては、先行する187号住居跡の上部に築かれている状況が確認された。

住居の掘り込みは、黄褐色ローム層まで及ぶが、重複部分は判然としなかった。東西2m70cm、南北3m83cmの長方形を呈し、主軸方向はN-73°-Eを示す。壁は25cmが残存する。床面は貼り床が施されており明確であったが、重複部は軟弱であった。貯蔵穴や柱穴・周溝は検出されなかった。

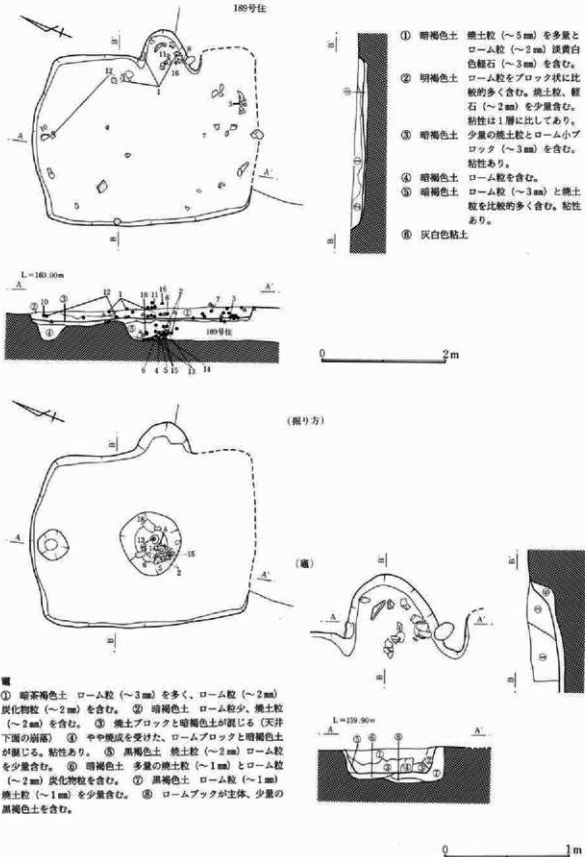
掘り方はほぼ平坦であり、中央部には直径1mの土坑が、北壁際には直径50cmの小ピットが確認された。中央の土坑の側面および底面は灰白色粘土が貼り込まれている。

覆土は、3層に分けられ自然堆積状況を示す。

竈は、長辺である東壁の中央やや南寄りに構築されているが、残存状況は不良である。焚き口部は不明だが、燃焼部は壁の内側から外側に張り出しており、煙道方向の張り出しは48cmを測る。なお天井部分の崩落とみられる焼土化したロームが確認された。火床面の焼土化は著しい。

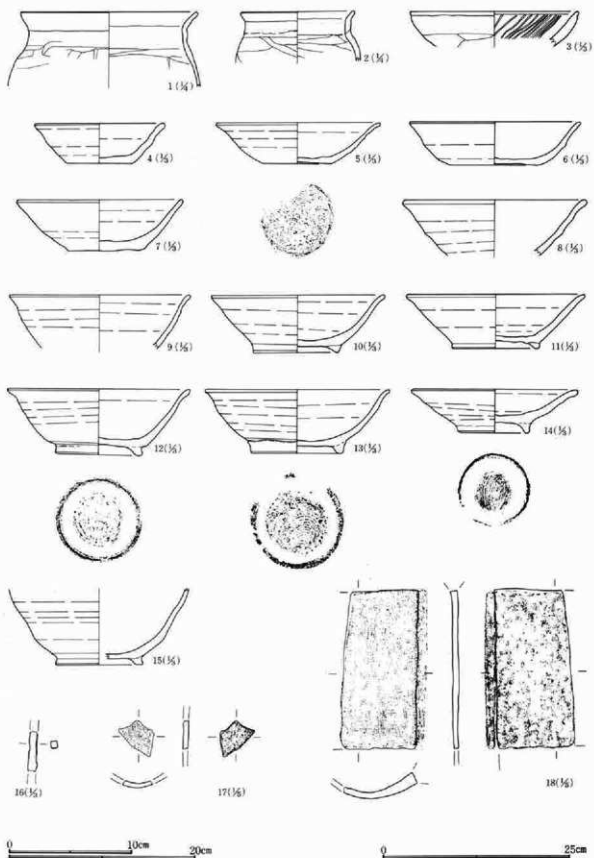
遺物は、竈内および南壁周辺部などに分布が見られる。竈内からは土師器の甕が出土しており、また他は坏・埴類が多い。なお、掘り方の床面中央部から検出された土坑内からは、坏・埴類の他に、瓦の破片が出土した。

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第134図 186号住居跡実測図

第3章 平安時代の遺構と遺物



第135図 186号住居跡出土遺物実測図

186号住居跡出土遺物観察表

検出番号 図版番号	土器類別 器	出土状況 残存状況	法量(cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
135-1 77	土師器 壺	壺内 口縁部周 辺残存	口 19.0 底 一 高 (7.9)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③に よい赤褐色～よい橙色	「コ」字状口縁。口縁部横撫で。胴部 外面 荒削り。内面荒撫で。	内面に付着物
135-2 77	土師器 小型壺	床下土坑 内 上半 部残存	口 12.2 底 一 高 (5.3)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③明赤褐色～橙色	「コ」字状口縁。内面の横明撫で。口縁部横撫 で。胴部 外面荒削り。内面荒撫で。	
135-3	土師器 坏	床面 互残存	口(13.4) 底 一 高 (2.7)	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③よい褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部 は小さく外反する。口縁部横撫で。体部 外面荒削 り。内面横撫で後に暗文状の磨き。	
135-4 77	須恵器 坏	床下土坑 内 互残存	口 10.4 底 5.2 高 3.1	①砂粒、白色顔料、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③橙色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部 は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。 底部は回転余切り無調整。	
135-5 78	須恵器 坏	床下土坑 内 互残存	口(13.2) 底 (5.6) 高 3.2	①砂粒～小石 ②酸化焰気味、やや軟質 ③よい黄褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部 は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形 (右回転)。底部は回転余切り無調整。	
135-6 78	須恵器 坏	床下土坑 内 互残存	口(13.6) 底 (7.0) 高 (3.4)	①砂粒、雲母 ②酸化焰気味、やや軟質 ③よい褐色～よい橙色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部 は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。 底部は回転余切り無調整。	
135-7 78	須恵器 坏	床面+10 互残存	口(13.3) 底 (7.0) 高 4.0	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③よい橙色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面と ともにロクロ整形。底部は回転余切り無調整。	
135-8 78	須恵器 埴	壺内 互残存	口(14.6) 底 一 高 (4.5)	①砂粒、雲母 ②酸化焰気味、やや軟質 ③浅黄色～淡黄褐色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端 部はわずかに外反する。内外面ともにロクロ 整形。	
135-9	須恵器 埴	覆土中 互残存	口(14.4) 底 一 高 (4.2)	①砂粒 ②還元焰気味、やや軟質 ③浅黄褐色	体部は緩やかに内湾して立ち上がる。内外面 ともにロクロ整形。	
135-10 78	須恵器 高台付埴	床面+10 互残存	口 13.8 底 6.8 高 4.5	①砂粒、雲母 ②焼し焼成、やや硬質 ③黒色～黒褐色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端 部はわずかに外反する。内外面ともにロクロ 整形。底部は回転余切り無調整。付高台。	
135-11 78	須恵器 高台付埴	壺内 互残存	口(14.2) 底 (7.0) 高 4.2	①砂粒、雲母 ②還元焰、やや軟質 ③灰色～灰白色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部 は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。 底部は回転余切り無調整。付高台。	
135-12 78	須恵器 高台付埴	床面～+ 8 ほぼ完整	口 14.6 底 6.9 高 5.2	①砂粒～小石 ②還元焰気味、やや軟質 ③黄褐色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端 部はわずかに外反する。内外面ともにロクロ 整形。底部は回転余切り無調整。付高台。	
135-13 78	須恵器 高台付埴	床下土坑 内 互残存	口(14.8) 底 7.4 高 5.0	①砂粒、雲母 ②酸化焰気 味、やや硬質 ③よい褐 色 大半が黒褐色～黒灰色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端 部はわずかに外反する。内外面ロクロ整形(右 回転)。底部は回転余切り無調整。付高台。	
135-14 78	須恵器 高台付埴	床下土坑 内 ほぼ完整	口 13.3 底 5.6 高 3.4	①砂粒、雲母 ②還元焰気 味、やや軟質 ③よい黄 色～黄褐色 一部黒変	体部はやや内湾気味に開き、口縁端部は小さ く外反する。内外面ともにロクロ整形。底部 は回転余切り無調整。	
135-15	須恵器 高台付埴	床下土坑 内 互残存	口 一 底 (6.9) 高 (6.0)	①砂粒～小石 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	体部は緩やかに内湾して立ち上がる。内外面 ともにロクロ整形。底部は回転余切り無調整。 付高台。	
135-16 91	鉄製品 鉄 鏝	電線	長(3.1) 幅 0.6	重(3.7)	断面は方形。	
135-17 88	瓦	覆土中 破片	厚 0.7	①砂粒、白色顔料 ②酸化焰、やや硬質 ③黄褐色	一枚造り。凸面撫で。凹面布目。	吉井・藤岡系
135-18 88	瓦 平瓦	床下土坑 内	長(20.8) 幅(9.7) 厚 1.0	①砂粒、白色顔料 ②酸化焰気味、硬質 ③橙色	一枚造り。凸面撫で。凹面布目。広端部、側 面は面取り。	吉井・藤岡系

### 第3章 平安時代の遺構と遺物

#### 188号住居跡 (第136～140図、図版31・78・88)

本住居跡は、第4次調査区の南部の平坦部にあり、16・17-31グリッドに位置している。

重複関係としては、先行する187号(奈良)・189号住居跡(平安)を掘り込み、また後出する191号住居跡により上面を失っている。

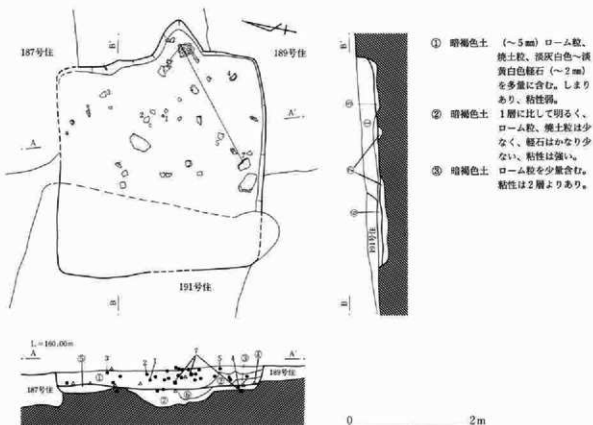
住居の掘り込みは黄褐色ローム層に及ぶが重複により確認は困難であった。平面形は東西3m56cm、南北2m95cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-80°-Eを示す。壁は最も状況の良い東壁では、ほぼ垂直に立ち上がり24cmを測る。床面は貼り床が施されているが、やや軟弱である。貯蔵穴や柱穴、周溝は検出されなかった。

掘り方面は比較的平坦であり、中央部には径106cmほどのやや不整な円形の土坑が設けられている。

覆土は、暗褐色土であり部分的に三角堆積が認められる。

竈は、短辺である東壁の中央やや南寄りの位置に構築されている。燃焼部は、壁の外側に張り出し、最大幅90cm、煙道方向への張り出しは50cmを測る。焚き口部の右袖部分には平瓦が埋設され、また燃焼部内から別個体の瓦も出土しており、本竈の構築には瓦を使用している状況が認められる。火床面の焼土化は顕著で、非常に硬化している。

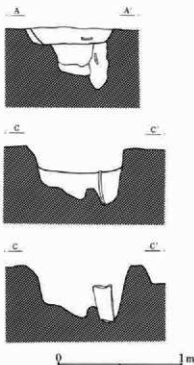
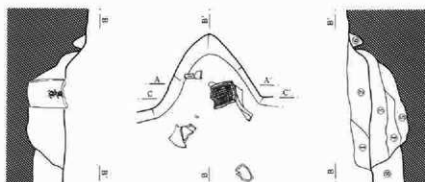
出土遺物の中で、竈に埋設された平瓦には「八中寸」と筧書きされ、また南壁際出土の丸瓦にも「八井」と記されており、注目される。なお「八井」の瓦は10m離れた134号住居跡との住居間接合が確認された。土器片は、主に覆土中から散漫な状況で出土しており、土師器壺や須恵器の甕・坏・埴が出土しているが、いずれも残存率は低い。



第136図 188号住居跡実測図(i)

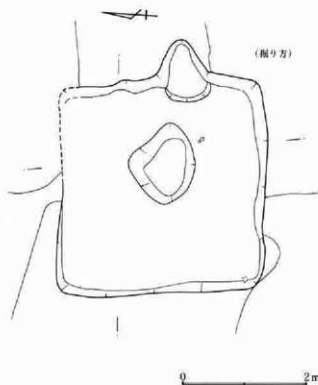


第2節 竪穴住居跡と出土遺物



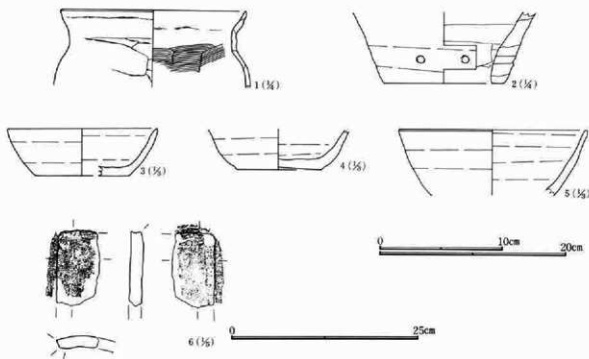
竪

- ① 暗褐色土 ローム粒、淡黄白色軽石、焼土粒を含む、しまりあり、粘性弱。
- ② 暗茶褐色土 ローム粒を比較的多く、軽石、焼土粒（～5mm）を含む。しまりあり、粘性は1層よりやや強い。
- ③ 暗褐色土 ローム粒、焼土粒を含む。
- ④ 暗褐色土 多量のローム粒、焼土粒を含む。
- ⑤ 暗褐色土 4層に類するが、含有物がより多く含まれる。
- ⑥ 暗褐色土 ローム粒、ロームブロックを含む。
- ⑦ 暗褐色土 ローム粒（～1cm）を凝じて、互を埋め込んでいる。
- ⑧ 暗褐色土 ローム粒（～5mm）を多量、焼土粒（～3mm）を含む。



第137図 188号住居跡実測図(2)

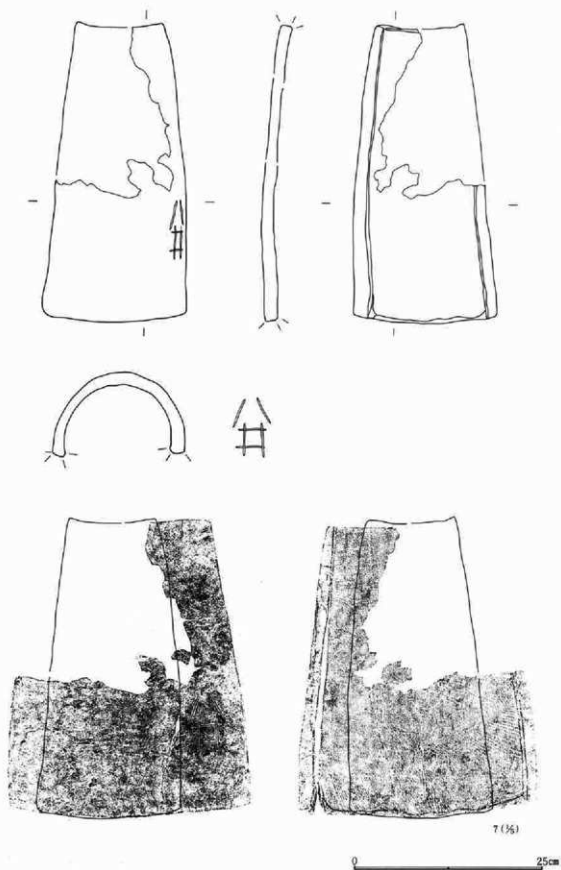
第3章 平安時代の遺構と遺物



第138図 188号住居跡出土遺物実測図(1)

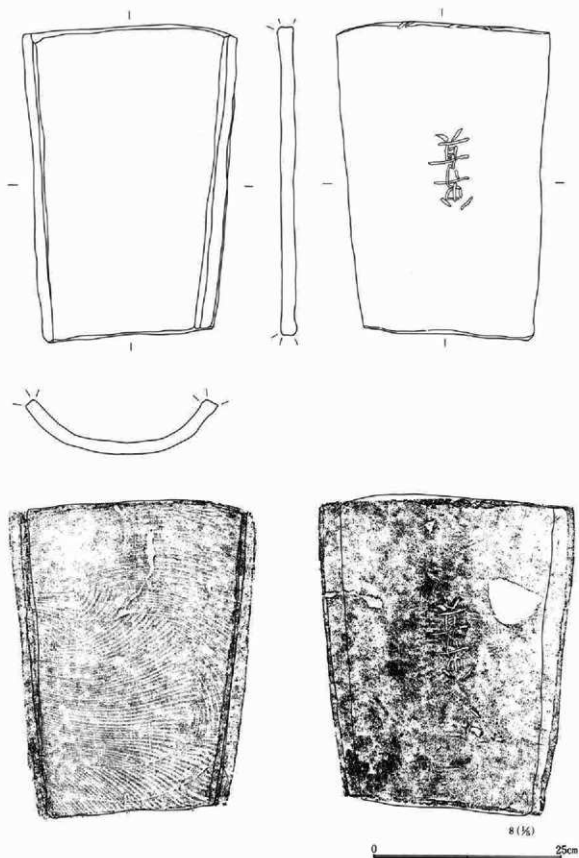
188号住居跡出土遺物観察表

標記番号 図版番号	土器類別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (8)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
138-1	土器 壺	床面+8 瓦残存	口(20.0) 底— 高(8.1)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③赤褐色～明赤褐色	「コ」字状口縁だがやや不明瞭。口縁部横線で、一部輪痕を残す。割部 外面磨削り。内面荒磨で。	
138-2 78	須恵器 甕	床面+12 瓦残存	口— 底(13.0) 高(7.5)	①砂粒～小石、白色細粒 ②還元焰、硬質 ③暗緑灰色～緑灰色	底部からやや外反気味に立ち上がる。外面横磨で。内面荒磨で。下部に2か所穿孔あり。	
138-3	須恵器 坏	床面+14 瓦残存	口(12.0) 底(7.4) 高(3.7)	①砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰白色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。底部回転糸切り後、周辺部磨削り。	
138-4	須恵器 坏	床面 瓦残存	口— 底(6.6) 高(3.1)	①砂粒～小石、白色細粒 ②還元焰、硬質 ③暗青灰色～青灰色	体部は緩やかに内湾して立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。底部は回転糸切り無調整。	
138-5	須恵器 坏	床面+18 瓦残存	口(15.0) 底— 高(5.2)	①砂粒、白色細粒 ②還元焰、硬質 ③(外)緑黒色 (内)緑灰色	体部は緩やかに内湾して立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。	
138-6 88	瓦 丸瓦	覆土中 破片	厚 1.5	①砂粒～小石、白色細粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰色	一枚造り。凸面無で。凹面布目。狭端面面取り。側面部面取り2面。	吉井・藤岡系
138-7 88・97	瓦 丸瓦	竈内～床 面 瓦残存	長 39.2 幅①18.8 厚 1.5	①砂粒、白色細粒 ②酸化焰、硬質 ③黄褐色	一枚造り。凸面無で。凹面に粘土板糸切り痕あり。布目。両端面、側面は面取り2回。	凸面に「八#」の残積き 吉井・藤岡系
140-8 88・97	瓦 平瓦	竈内 完形	長 41.1 幅 2.2/23 厚 2.1	①砂粒、白色細粒 ②還元焰、硬質 ③黄褐色～暗灰色	一枚造り。凸面、凹面に粘土板糸切り痕あり。凸面は無で。凹面布目。面取りは両端面2回、側面は3回。(7)ともに竈材へ転用される。	凸面に残積き 「八中真」か 吉井・藤岡系



第139図 188号住居跡出土遺物実測図(2)

第3章 平安時代の遺構と遺物



第140図 188号住居跡出土遺物実測図(3)

## 189号住居跡 (第141~143図、図版32・78・88・93・95・97)

本住居跡は、第4次調査区南部の緩傾斜地にあり、16-32グリッドに位置する。

重複関係としては、後出する188号住居跡(平安)に北西コーナー部分を壊されている。また上部を5号溝が掘り込んでいる。

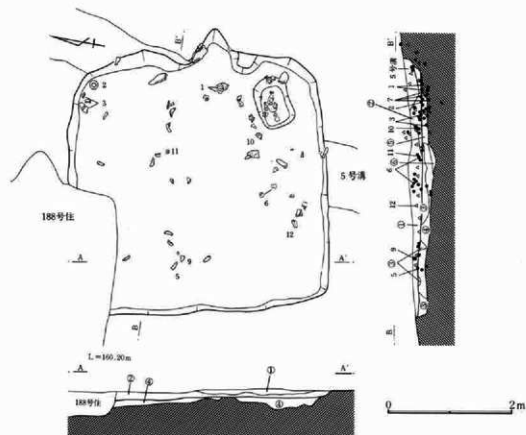
住居の掘り込みは、黄褐色ローム層まで及び明瞭に確認された。東西4 m20cm、南北4 m12cmの長方形の形状を呈し、主軸方向はN-67°-Eを示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、最大14cmが残存する。床面は貼り床が施されており、竈前部から床面中央部にかけては堅緻である。貯蔵穴は、南東コーナー部分に設けられており、82cm×54cmの小判形状を呈し、深さ31cmを測る。なお柱穴や周溝は検出されなかった。

掘り方は起伏に富み、中央部には複数の土坑が重複した状況で検出された。

覆土は、2層に分けられる。

竈は、短辺の東壁のほぼ中央に構築されている。焚き口部は、壁の内側にあり、ローム面を掘り残した袖部分認められた。燃焼部は壁の内外にわたるものと見られ、幅約45cm、煙道方向への張り出しは60cmを測る。燃焼部左側面には板状の砂岩が用いられ、火熱を受け赤化している。

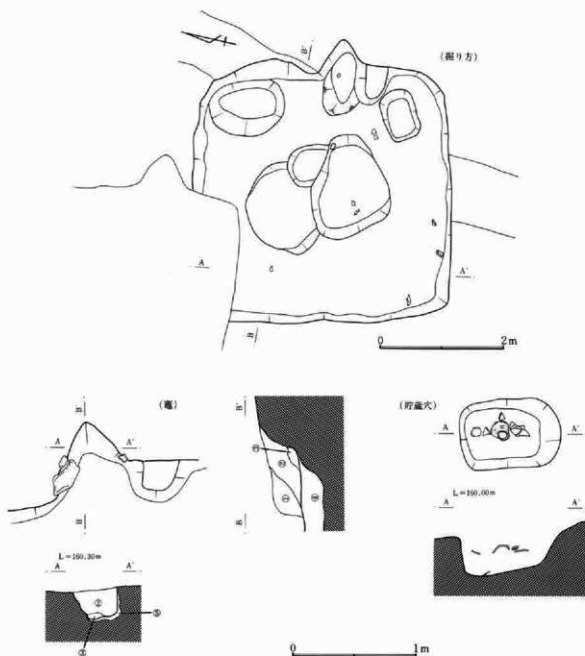
遺物は、貯蔵穴覆土中には須恵器の埴などがまとまって見られた。他には、床面もしくはやや浮いた状態で土器片が出土している。また編み物石に類する棒状の石も10点が散乱して出土した。



- ① 暗褐色土 ローム粒(～5mm)少量、焼土粒(～3mm)を比較的多く淡黄白色軽石(～3mm)を多く含み、しまりあり、粘性弱。  
 ② 暗褐色土 1層に比してローム粒(～3mm)を多量に含むため色調は明るい。 ③ 黒褐色土 多量のロームブロック(～3mm)ローム粒を混じる。 ④ 暗褐色土 多量のローム粒(～5mm)を混じる他、若干の灰白色粘土が含まれる。 ⑤ 暗褐色土 ローム粒を少量含むが、含有物は全体に少ない。 ⑥ 灰白色粘土

第141図 189号住居跡実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物

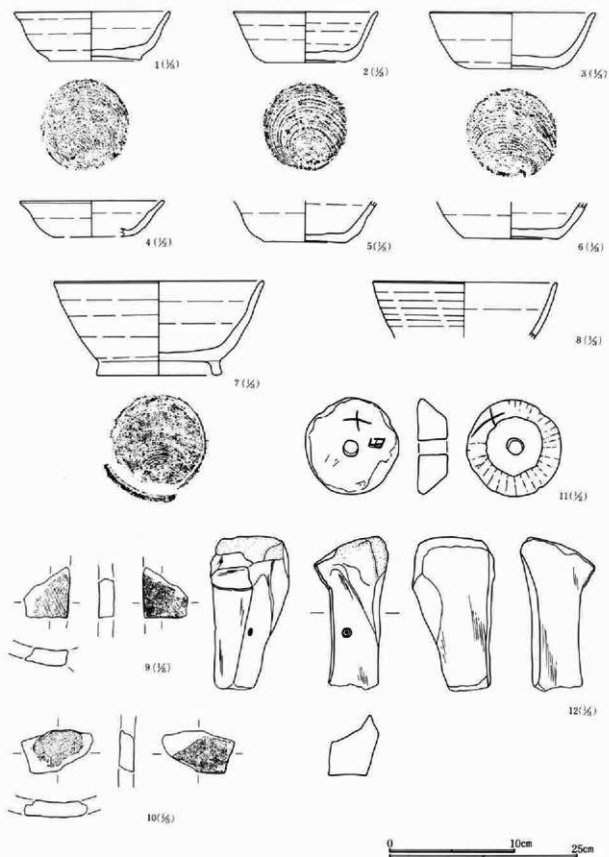


竈

- ① 暗褐色土 ローム粒(～5mm)少量、焼土粒(～3mm)を比較的多く淡黄白色軽石(～3mm)を多く含む。しまりあり、粘性弱。
- ② 暗褐色土 多量の焼土粒(～3mm)とローム粒(～3mm)炭化物粒及び灰を含む。
- ③ 暗褐色土 1層に比して、ローム粒の含有が高い、焼土粒は少量。
- ④ 暗褐色土 ローム粒(～3mm)焼土粒(～2mm)を少量含む。
- ⑤ 暗褐色土 ローム粒(～5mm)焼土粒(～3mm)を多く含む。

第142図 189号住居跡実測図(2)

第2節 整穴住居跡と出土遺物



第143図 189号住居跡出土遺物実測図

## 第3章 平安時代の遺構と遺物

189号住居跡出土遺物観察表

押戻番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状況 残存状況	法量(cm) (高さ)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備 考
143-1 78	須恵器 坏	床面 口縁部一 部欠損	口(12.4) 底 7.3 高 3.9	①砂粒～小石、白色細粒 ②還元焰、硬質 ③暗灰色～灰色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。内外面口口整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。やや上げ底。	外面～底部の一部に自然釉がかかる
143-2 78	須恵器 坏	床面 完形	口 11.6 底 6.7 高 4.0	①砂粒～小石、白色細粒 ②還元焰、硬質 ③青黒色～暗青灰色	体部はほぼ直線的に立ち上がり縁部はやや外反。内外面ともに口口整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。やや上げ底。	
143-3 78	須恵器 坏	床面 口縁部欠 損	口 13.2 底 7.0 高 4.5	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③明褐色～褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、内外面ともに口口整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。やや上げ底。	内面に傷付着、 器面剥落あり
143-4 78	須恵器 坏	覆土中 瓦残存	口(11.5) 底(6.6) 高 2.8	①砂粒、白色細粒 ②酸化 焰、やや硬質 ③暗オリーブ 灰色～オリーブ灰色	体部はやや内湾気味に開き、口縁部は小さく外反する。内外面ともに口口整形。底部は回転糸切り無調整。	
143-5 78	須恵器 坏	床面 瓦残存	口 — 底 6.7 高(3.2)	①砂粒、白色細粒 ②還元焰、硬質 ③暗緑灰色～緑灰色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面ともに口口整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
143-6 78	須恵器 坏	床面+6 瓦残存	口 — 底(7.6) 高(2.9)	①砂粒、石英、白色細粒 ②還元焰、やや硬質 ③オリーブ灰色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面ともに口口整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
143-7 78	須恵器 高台付境	貯蔵穴内 高台付境	口(16.7) 底(10.0) 高 7.4	①砂粒～小石、白色細粒 ②還元焰、硬質 ③暗緑灰色	体部は腰やかに内湾して立ち上がる。内外面ともに口口整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。付高台。	
143-8 78	須恵器 坏	貯蔵穴内 瓦残存	口(14.7) 底 — 高(4.4)	①砂粒～小石、白色細粒 ②還元焰、やや硬質 ③暗オリーブ灰色	体部は緩やかに内湾して立ち上がる。内外面ともに口口整形。	
143-9 88	瓦 平瓦	床面+3 破片	厚 2.0	①砂粒、輪状粘土 ②還元焰気味、硬質 ③灰白色	一枚造り。凹面に粘土板糸切り痕あり。布目。凸面は無で。側面は面取り、一部2回。	吉井・藤岡系 凸面に黄褐色、 不明
143-10 88	瓦	床面+6 破片	厚 1.8	①砂粒、輪状粘土 ②還元焰気味、硬質 ③灰白色	一枚造り。凸面は無で。凹面は布目。	吉井・藤岡系 例と同一個体か
143-11 93-97	石製品 紡錘車	床面+3 完形	径 5.07/3.05 厚 1.64 孔径0.81 重54.8		断面台形。穿孔は上方から。広面に使用による同心円状の磨痕。孔から1.6cmは特に顕著。	側面と広面に磨 痕。滑石質の蛇 紋岩、片岩的
143-12 95	砥石	床面+6	長(12.2) 重 350 幅 6.2 厚 5.55		端部に自然面を残す。全体的に平滑。一部に線痕がある。鎌(三叉鎌)状の工具痕が認められる。径約6.5cm。	石英安山岩

## 191号住居跡 (第144・145図、図版33・89・91～93)

本住居跡は、第4次調査区の南部の平坦部にあり、16・17-32グリッドに位置する。

重複関係としては、先行する264号・188号住居跡(平安)を切り込んでいる状況が確認された。住居の掘り込みは、黄褐色ローム層まで及ぶが、上面の浸食が著しく確認は困難であった。188号住居跡との境界は判然としないが、東西3m45cm、南北3m30cmの長方形を呈するものと考えられ、主軸方向はN-90°Eを示す。壁はほとんど残存せず、部分的に28cmが認められたにとどまる。床面は基本的にローム面を直接使用している。貯蔵穴は、南西コーナー際に設けられており、直径68cm、深さ27cmの円形を呈する。柱穴、周溝は検出されなかった。

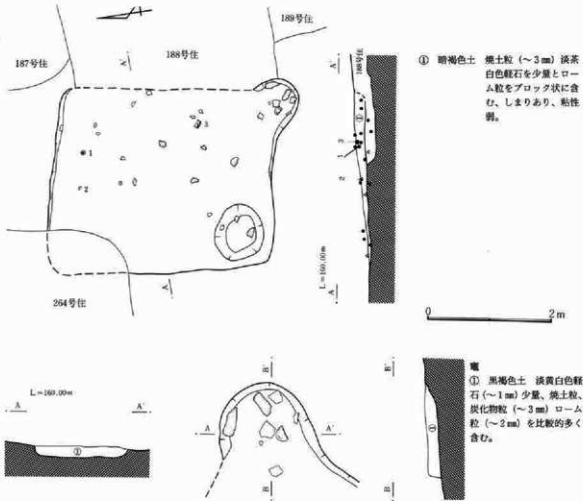
覆土は、わずかに残存するのみである。

竈は、南東コーナー部分に構築されており、対角線方向に張り出している。残存状況が不良で詳細は不明だが、燃焼部幅75cm、煙道方向の張り出しは42cmを測るとみられる。火床面はわずかに焼土化している。

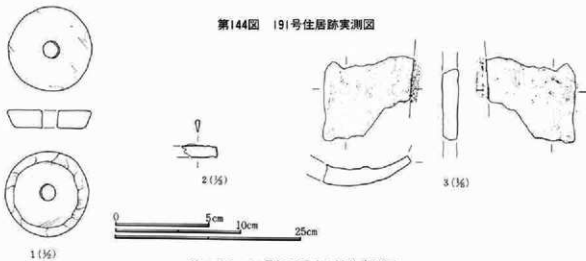


第2節 竪穴住居跡と出土遺物

出土遺物は少量で、また土器小破片が主で残存率も全体に低い。鉄鍔や石製紡錘車、瓦の破片などはいずれも覆土内から認められた。



第144図 191号住居跡実測図



第145図 191号住居跡出土遺物実測図

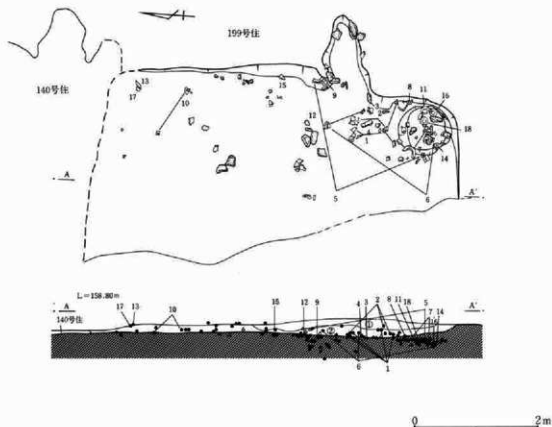
191号住居跡出土遺物観察表

検出番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状況 残存状況	法量(cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備 考
145-1 93	石製 品 紡 車 車	床面+5 完形	径 4.4/3.55 厚 0.98	孔径0.72 重 32.4	低い断面台形の広面・狭面ともに縁条状。狭面縁に強い光沢。	滑石質の蛇紋岩
145-2 92	鉄製 品 刀 子 か	床面+9	長 2.8 幅 0.9		断面は扁平三角形。	
145-3 89	瓦 平 瓦	床面+8 破片	厚 2.2	①砂粒、雲母、白色細粒 ②酸化鉛、硬質 ③褐色	側面面取り、凹面目取。凸面無で。	吉井・藤岡系

198号住居跡 (第146~149図、図版33・78・79)

本住居跡は、第4次調査区南部の西へ下る傾斜地にあり、14・15-27~29グリッドに位置する。重複関係としては、先行する199号住居跡(古墳後期)・140号住居跡(平安)を切り込んで構築されている。また西半部は4号溝により失われている。

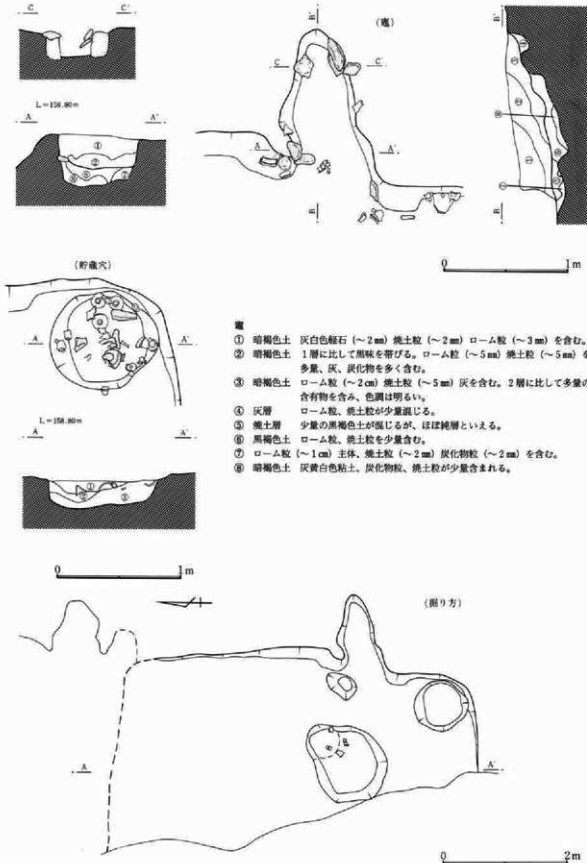
住居の掘り込みは黄褐色ローム層まで及び、明瞭に確認されたが浸食の関係で傾斜下部の残存状況は不良である。北壁はやや判然としないが南北方向は5m50cmを測るとみられる。主軸方向はN-90°-Eを示す。壁は東壁際で最大35cmを測る。床はローム面を直接叩き締めており、基本的に貼り床は施されていない。竈



- ① 暗褐色土 ローム粒 (~5mm) 焼土粒 (~2mm) 炭化物粒 (~2mm) 灰白色軽石を少量含む。  
 ② 暗褐色土 1層よりも明るく、軽石は少ない。ローム粒、ロームブロック (~3cm) を多量、焼土粒 (~5mm) を少量含む。

第146図 198号住居跡実測図(1)

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第147図 198号住居跡実測図(2)

### 第3章 平安時代の遺構と遺物

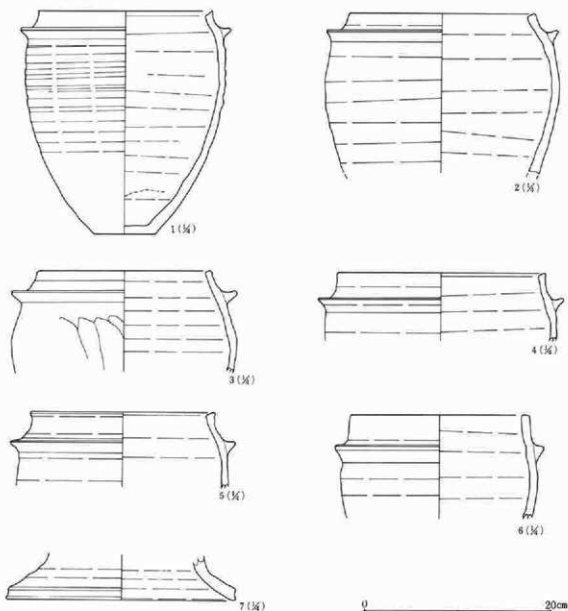
周辺から中央部にかけては非常に堅緻であった。貯蔵穴は南東コーナー部分に設けられており、直径96cm、深さ22cmの円形の形状をとる。なお柱穴・周溝は検出されなかった。

竈前方の床下部分には、直径114cm、深さ16cmの円形の土坑が掘られている。

覆土は、2層に分かれる。

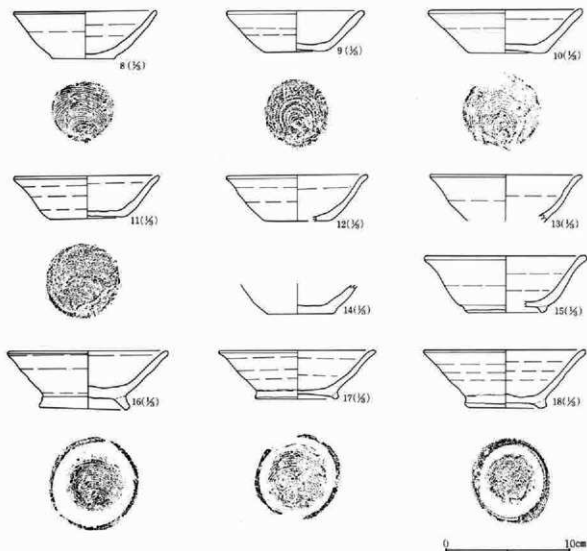
竈は、東壁中央から南寄りの位置に構築されている。焚き口部は壁際にあり左右の袖石が埋設された状況で残存しており、幅54cmを測る。燃焼部から煙道は壁の外側に張り出しており、煙道方向の張り出し長は約120cmである。火床面には多量の灰が分布し、また火熱による焼土化は著しく、下面5cmまでおよぶ。なお煙道の先端部には埋設された石が残存している。

遺物は貯蔵穴周辺に集中しており、羽釜は28点と須恵器の環・埴は234点と破片数が多いが残存率は低い。



第148図 198号住居跡出土遺物実測図(1)

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第149図 198号住居跡出土遺物実測図(2)

198号住居跡出土遺物観察表

押印番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状況 残存状況	法量(cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・装・成形技法の特徴	備 考
148-1 78	須恵器 羽 蓋	床面～+ 12 瓦残存	口(18.6) 底 6.8 高 23.5	①砂粒 ②酸化焰気味、やや軟質 ③灰白色	胴部は内湾して立ち上がり、口縁部は内傾して端部は強い面取り。内外面ともにロクロ整形。底部無で。	外面に粘土付着。内面に付着物。底部にスレ。
148-2 79	須恵器 羽 蓋	床面+2 ～8 瓦残存	口(19.8) 底 — 高 16.8	①砂粒～小石、石英 ②酸化焰気味、やや軟質 ③にょい黄褐色～浅黄色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。内外面ともにロクロ整形。	
148-3 79	須恵器 羽 蓋	床面 瓦残存	口(18.6) 底 — 高(10.7)	①砂粒 ②還元焰気味、やや軟質 ③灰白色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。口縁部、内面ロクロ整形。胴部外面荒削り。	
148-4 78	須恵器 羽 蓋	床面+4 瓦残存	口 22.2 底 — 高 7.1	①砂粒、雲母 ②酸化焰気味、やや軟質 ③浅黄色～浅黄色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。内外面ともにロクロ整形。	
148-5 79	須恵器 羽 蓋	竈部～床 面+20 瓦残存	口(19.8) 底 — 高 (8.0)	①砂粒～小石、雲母 ②酸化焰気味、やや軟質 ③にょい黄褐色～浅黄褐色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。胴は断面三角形。内外面ともにロクロ整形。	

第3章 平安時代の遺構と遺物

跡番号 図版番号	土器種別	出土状況 残存状況	法量 (cm) (E)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
148-6 78	須恵器 羽蓋	床面 3/4残存	口 19(2.2) 底 — 高 10(9.9)	①砂粒 ②還元焰気味、やや硬質 ③にぶい橙色～浅黄褐色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。 脚は断面三角形。内外面ともにロクロ整形。	
148-7 78	須恵器 甕	貯蔵穴～ 床面+4 3/4残存	口 — 底 0(4.4) 高 4(4.8)	①砂粒、白色細粒 ②還元焰気味、やや硬質 ③灰色～灰白色	肩部は外反して開く。端部は面取り。内外面ともにロクロ整形。	
149-8 79	須恵器 坏	床面 完全	口 11.5 底 5.0 高 3.8	①砂粒～小石 ②還元焰気味、やや軟質 ③淡黄色	体部はほぼ直線的に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	外面の大半～内面一部黒炭
149-9 79	須恵器 坏	床面 完全	口 11.1 底 5.1 高 3.2	①砂粒～小石、白色細粒 ②還元焰気味、軟質 ③灰白色～灰黄色	体部はほぼ直線的に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。内厚で粗雑。	
149-10 79	須恵器 坏	床面+2 3/4残存	口 12.2 底 6.1 高 3.4	①砂粒、雲母 ②還元焰気味、軟質 ③灰白色	体部はほぼ直線的に立ち上がり、端部はわずかに外反。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。内厚で粗雑。	外面一部保付着
149-11 79	須恵器 坏	貯蔵穴内 口縁部一 部欠損	口 11.6 底 5.9 高 3.2	①砂粒～小石、雲母 ②還元焰気味、やや軟質 ③灰オリーブ色～灰白色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
149-12 79	須恵器 坏	床面 3/4残存	口 11.2 底 5.2 高 3.6	①砂粒 ②還元焰気味、やや軟質 ③明オリーブ灰色～灰白色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。底部は回転糸切り無調整。	
149-13 79	須恵器 坏	床面+8 3/4残存	口 12(7.7) 底 — 高 3(2.7)	①砂粒 ②還元焰気味、やや軟質 ③黒褐色～黄灰色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。	
149-14 79	須恵器 埴	貯蔵穴内 下半部残 存	口 — 底 5.3 高 2(3.0)	①砂粒～小石 ②焼し焼成、やや軟質 ③黒褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
149-15 79	須恵器 高台付埴	床面+5 3/4残存	口 12.3 底 6.5 高 4.5	①砂粒、雲母 ②還元焰気味、やや軟質 ③オリーブ黒色～灰色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。底部は回転糸切り無調整。	黒炭あり
149-16 79	須恵器 高台付埴	貯蔵穴内 口縁部一 部欠損	口 12.8 底 7.3 高 4.6	①砂粒～小石、白色細粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰オリーブ色～灰白色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。底部は回転糸切り無調整。付高台。	
149-17 79	須恵器 高台付埴	床面+8 3/4残存	口 12(6.6) 底 6.6 高 3.8	①砂粒、雲母 ②還元焰気味、やや軟質 ③灰色～灰白色一部黒炭	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。底部は回転糸切り無調整。粗雑な付高台。	保付着
149-18 79	須恵器 高台付埴	貯蔵穴内 完全	口 12.9 底 6.5 高 4.6	①砂粒～小石、白色細粒 ②還元焰気味、軟質 ③灰白色	体部はほぼ直線的に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。底部は回転糸切り無調整。粗雑な付高台。	

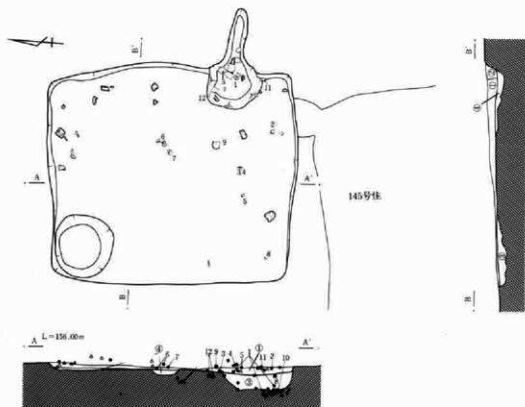
200号住居跡 (第150～153図、図版34・79・89)

本住居跡は、第4次調査区西南部の傾斜地にあり20-22・23グリッドに位置している。

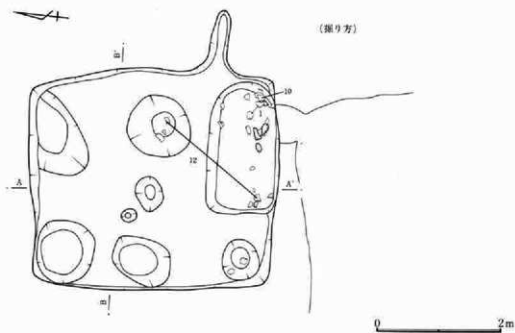
重複関係としては、先行する145号住居跡(平安)の一部を壊している状況が確認された。

住居の掘り込みは黄褐色ローム層まで及び、良好に確認された。平面形は長方形を呈し、規模は東西3m53cm、南北4m2cmを測り、主軸方向はN-80°Eを示す。壁は東壁際で17cmが残るが、傾斜下部の西壁は浸食によりほとんど残存しない。床面はローム面を直接使用している部分が主で、平坦面を成し堅緻である。貯蔵穴と考えられる掘り込みは北西コーナーに設けられており、直径93cm、深さ49cmの円形を呈する。なお柱穴、周溝は検出されなかった。

掘り方面には、南東コーナー際に長辺105cm、短辺57cm、深さ31cmの長方形を呈する土坑が掘り込まれている。その他にもやや浅い楕円状の土坑も検出された。



- ① 黒褐色土 白色軽石粒子とローム小粒子を多く含む。② 黒褐色土 少量のローム粒子を含む。③ 黒褐色土 1層に類するが、白色軽石粒子の含有が少ない、硬く締まっている。④ 暗褐色土 ローム小ブロック、ローム粒子、黒褐色土が混じる。



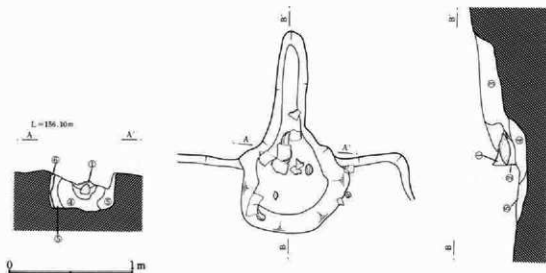
第150図 200号住居跡実測図

### 第3章 平安時代の遺構と遺物

覆土は、黒褐色土を主とし、壁際には三角堆積の発達が見られる。

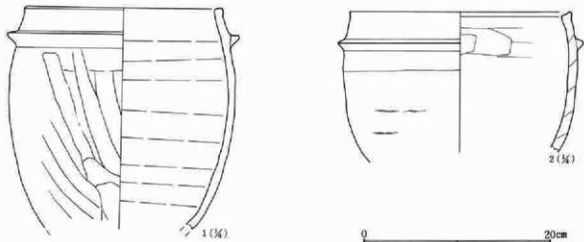
竈は、長辺である東壁の中央よりも南よりの位置に構築されている。燃焼部は壁の内外にわたり、やや床面よりも窪んでいる。煙道は細長く張り出し、幅24cm、長さ75cmが検出された。全体の張り出しは壁から96cmである。火床面および側壁部は一部に焼土化が確認された。燃焼部内では支脚に使用された棒状の石が倒れて出土した。

遺物は、竈内の他に床面に散漫な状況で出土している。この他に、南東コーナー部分の土坑底面からは土器片の他に瓦の破片が出土している。



- 竈
- ① 黒褐色土 少量の炭と焼土粒子を含む。
  - ② 黒褐色土 ローム粒子、ロームブロックが混じる。
  - ③ 赤褐色土 多くの焼土粒子、焼土ブロックを含む。
  - ④ 赤褐色土 少量の焼土粒子を含む。
  - ⑤ 黄褐色土 ローム小ブロック、ローム粒子を多く含む。
  - ⑥ 赤色土 焼土ブロック。

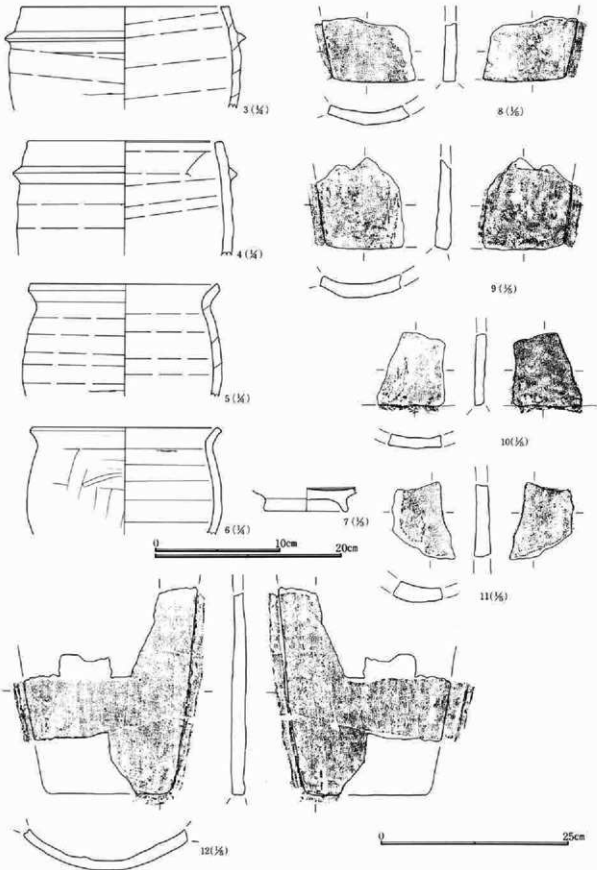
第151図 200号住居跡竈実測図



第152図 200号住居跡出土遺物実測図(1)



第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第153図 200号住居跡出土遺物実測図(2)

第3章 平安時代の遺構と遺物

200号住居跡出土遺物観察表

押図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (g)	①粘土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
152-1 79	須恵器 羽蓋	土坑内 瓦残存	口(21.6) 底— 高(23.6)	①砂粒~小石、白色細粒、 褐色粒子、雲母 ②酸化焙 やや軟質 ③褐色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。 脚は断面三角形。口縁部、胴部ロクロ整形。 外面はさらに磨削り。	内面に付着物
152-2 79	須恵器 羽蓋	床面+6 瓦残存	口(23.6) 底— 高(14.8)	①砂粒 ②酸化焙、やや硬質 ③褐色~にぶい褐色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。 口縁部横撫で。胴部 外面磨い無で。内面度 が粗。	煤付着。 竊材への転用か 無で。
153-3 79	須恵器 羽蓋	甕内 瓦残存	口(22.3) 底— 高(10.7)	①砂粒、雲母 ②酸化焙気味、やや硬質③ (外)灰黄色 (内)浅黄褐色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。 内外面ともにロクロ整形。	
153-4 79	須恵器 羽蓋	甕内~床 面 瓦残存	口(20.6) 底— 高(12.2)	①砂粒、雲母 ②酸化焙、やや硬質 ③褐色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。 脚は断面三角形。内外面ともにロクロ整形。	内外面に煤付着 竊材への転用か
153-5 79	須恵器 壺	床面+6 瓦残存	口(20.4) 底— 高(11.8)	①砂粒、雲母 ②酸化焙、やや硬質 ③にぶい褐色~にぶい褐色	緩やかに膨らむ胴部から口縁部は屈曲して短 く外反。内外面ともにロクロ整形。	外面に煤付着
153-6 79	須恵器 壺	床面+1 4 瓦残存	口(20.0) 底— 高(11.3)	①砂粒~小石、雲母 ②酸 化焙、やや軟質 ③(外)明 赤褐色 (内)にぶい黄褐色	緩やかに膨らむ胴部から口縁部は屈曲して短 く外反。ロクロ整形。外面は一部磨削り。	
153-7	須恵器 高台付埴 瓦	床面+4 底面残存	口— 底(6.8) 高(11.9)	①砂粒、雲母 ②酸化焙、 やや硬質 ③(外)にぶい黄 褐色 (内)黒色色染	付高台は「ハ」字に開く。外面ロクロ整形。 底面無で。内面磨き。	
153-8 89	瓦 平瓦	覆土中 破片	厚 1.7	①砂粒、白色細粒、雲母 ②酸化焙、やや硬質 ③褐色	一枚造り。凸面無で。凹面布目。狭端面と側 面は面取り。	吉井・藤岡系
153-9 89	瓦 平瓦	床面+5 破片	厚 1.9	①砂粒~小石、白色細粒、 雲母 ②還元焙、硬質 ③灰色	一枚造り。凸面無で。凹面布目。狭端面、側 面は面取り。	吉井・藤岡系
153-10 89	瓦 平瓦	土坑内 破片	厚 1.4	①砂粒、白色細粒 ②酸化焙、やや硬質 ③褐色	一枚造り。凸面無で。凹面布目。狭端面の整 形は粗。	吉井・藤岡系
153-11 89	瓦 平瓦	床面+5 破片	厚 1.9	①砂粒~小石、白色細粒 ②酸化焙、やや硬質 ③褐色~にぶい黄褐色	一枚造り。凸面無で。凹面布目。	吉井・藤岡系
153-12 89	瓦 平瓦	掘り方中 瓦割残存	厚 1.2	①砂粒~小石、白色細粒 ②酸化焙、硬質 ③褐色	一枚造り(粘土層によるか)。凸面無で。 凹面布目。狭端面と側面は弱い面取り。	吉井・藤岡系

201号住居跡 (第154~157図、図版34・80・90・92・94)

本住居跡は、第4次調査区南西部の緩傾斜地にあり17・18-23グリッドに位置する。

重複関係としては、先行する142号・143号・144号住居跡 (いずれも平安時代) を切り込んで構築されている状況が確認された。

住居の掘り込みは黄褐色ローム層に及ぶが、重複のため確認は困難であった。東西3m47cm、南北5m40cmの長方形の形状を呈し、主軸方向はN-95-Eを示す。壁は最大で16cmが残る。床面には貼り床が施されているが、やや軟弱で不明瞭であった。貯蔵穴は南西コーナー部分に設けられており、直径36cm、深さ23cmの円形を呈する。柱穴・周溝は検出されなかった。

掘り方は、不整形な掘り込みが認められる。また数基のピットが検出されたが、本住居には伴わない可能性が強い。

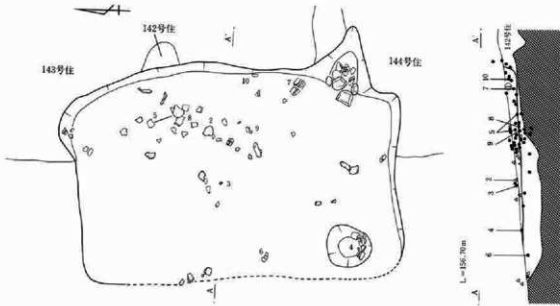
覆土は、黒褐色土層1層が認められた。

竈は、長辺である東壁の南東コーナー部分に構築されている。焚き口部は壁際的位置にあり、幅は36cmで、

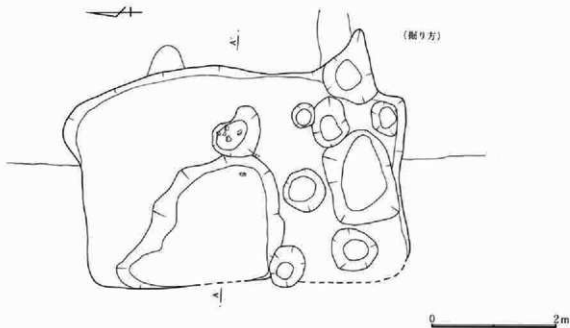
第2節 竪穴住居跡と出土遺物

左右には袖石が埋設状態で残存する。燃焼部は壁の外側に張り出しており、煙道方向の張り出しは130cmを測る。燃焼部中央には、ほぼ完形の羽口が支脚に転用された状態で出土している。なお火床面の焼土化は顕著である。

遺物は、床面上に散乱しており、全体として残存率は低い。磁石の他に、床面中央部からは石製紡錘車が出土している。

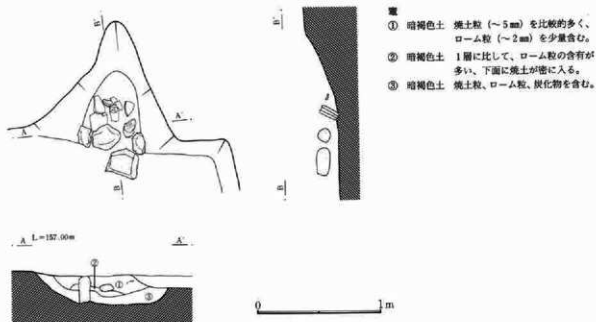


① 黒褐色土 ローム粒、ローム小ブロックを多く含む。

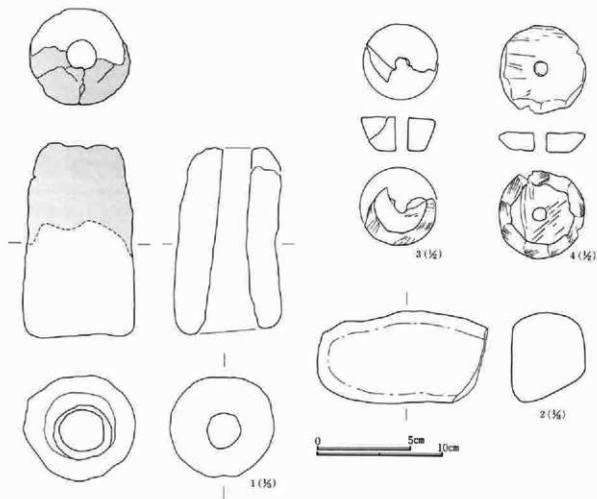


第154図 201号住居跡実測図

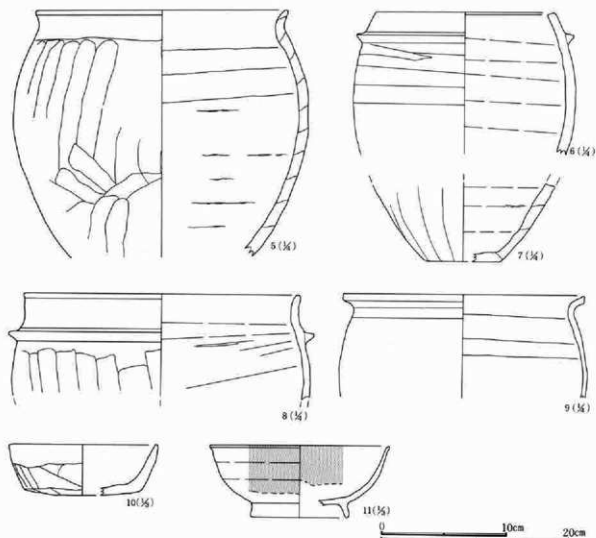
第3章 平安時代の遺構と遺物



第155図 201号住居跡竪実測図



第156図 201号住居跡出土遺物実測図(1)



第157図 201号住居跡出土遺物実測図(2)

201号住居跡出土遺物観察表

押附番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	流量(cm) (#)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整・成形技法の特徴	備考
156-1 90	羽 口	甕内 ほぼ完形	長 15.4 幅 8.9 穴径φ2.4	①砂粒、雲母 ②酸化焰、硬質 ③褐色～黒色	全体的に雑な態で、先端は高温により融解し、突起。穿孔は下方から行われる。	甕の支脚に転用
156-2 94	砥 石	床面	長(13.6) 幅 7.0 重 990	厚 6.0	ほぼ全面の表面はスレテツブれており、正面と背面は殊に顕著。	安山岩
156-3 92	石製品 紡錘車	床面 片残存	径 4.71/3.11 孔径 0.66 厚 1.03 重 35.2		断面台形。広面に同心円状の使用磨滅、孔から1.5cmの範圍。穿孔は上方から。	磨石質の蛇紋岩
156-4 92	石製品 紡錘車	覆土中 完形	径 4.2/2.8 孔径 0.66 厚 1.74 重 25.8		断面は低い台形。広面に同心円状の使用磨滅が認められる。穿孔は下方から。	磨石質の蛇紋岩
157-5 80	土師器 甕	貯蔵穴内 片残存	口(27.0) 底 - 高(26.0)	①砂粒～小石多量 ②酸化焰、やや軟質 ③(外)明褐色 (内)褐色	胴部は丸く膨らみ口縁部は短く外開する。輪稜痕が残る。口縁部横断で、胴部 外面直張り。内面直断で。	内面やや磨滅 外面保付着
157-6 80	須恵器 羽 釜	床面+6 片残存	口(19.2) 底 - 高(15.0)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③によい黄褐色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。脚は断面三角形、内外面ともにロクロ整形。	

### 第3章 平安時代の遺構と遺物

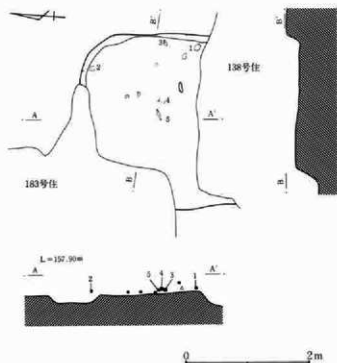
探出番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整・成形技法の特徴	備考
157-7	須恵器 羽蓋	床面 瓦残存	□ — 高(8.2) 高(8.2)	①砂粒・雲母 ②酸化焰、やや軟質 ③におい黄褐色～淡黄褐色	胴部 内面ロクロ整形。外面荒削り。底部無 で。	
157-8 80	須恵器 羽蓋	床面 瓦残存	□(29.6) 高 — 高(11.0)	①砂粒～小石・雲母 ②還元焰気味、やや軟質 ③灰白色～にょい黄色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。 胴は断面三角形。口縁部横撫で。胴部 外面 荒削り。内面荒撫で。	内面に付着物
157-9 80	土器 壺	床面 瓦残存	□(25.8) 底 — 高(10.8)	①砂粒～小石・雲母 ②酸化焰、やや軟質 ③明褐色～橙色	わずかに膨らみをもつ胴部から、口縁部は屈 曲して短く外反。端部は面取り。口縁部横撫 で。内面荒撫で。	外面に粘土付着
157-10 80	土器 環	床面 下半部残 存	□(12.0) 底(9.4) 高 4.0	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③橙色～黄褐色	体部はほぼ直線的に立ち上がり、端部は強い 横撫でによりそがれる。体部 内面横撫で。 外面、底部荒削り。	
157-11 80	灰釉陶器 高台付埴 瓦	床面+5 瓦残存	□(14.6) 底(8.0) 高(5.7)	①緻密 ②還元焰、堅緻 ③灰白色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部 はわずかに外反する。高台部は「ハ」字に 開き外面端部はやや強い撫で。	

#### 205号住居跡(第158・159図、図版35・80・89)

本住居跡は、第4次調査区の南部の緩傾斜部にあり19-26グリッドに位置する。

重複関係としては、後出する183号住居跡(平安)によって北西部を、138号住居跡(平安)により南半部を破壊されている。

住居の掘り込みは黄褐色ローム層まで及ぶ。重複により詳細は不明だが、東西は2m76cmを測る。壁はやや開き気味に立ち上がり、27cmが残存する。床面はローム面を直接使用し平坦面を成すが、やや軟弱である。残存部分では貯蔵穴・柱穴・周溝とも検出されなかった。



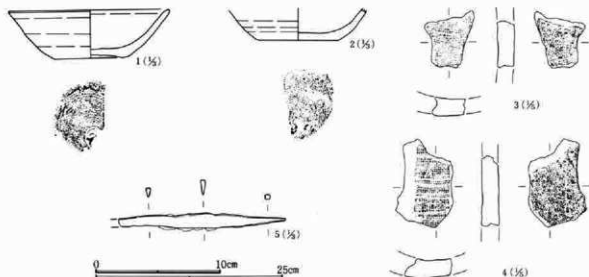
第158図 205号住居跡実測図

覆土は、暗褐色土が観察されたが不明な部分が多い。

竈は検出されなかったが、東壁に構築されている可能性がある。

遺物は、床面上に分布している。遺物量は少ないが須恵器の坏の他に、瓦の破片や鉄製の刀子が出土している。

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第159図 205号住居跡出土遺物実測図

205号住居跡出土遺物観察表

扉原番号 図版番号	土器類別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (#)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、壁・成形技法の特徴	備考
159-1 80	須恵器 坏	床面 写残存	口(12.9) 底 5.8 高(3.8)	①砂粒、雲母 ②酸化焰気味、やや硬質 ③オリーブ黒色～淡黄色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。底部は回転糸切り無調整。	内面に付着物
159-2	須恵器 坏	床面+3 写残存	口 — 底 6.5 高(2.5)	①砂粒、雲母 ②僅し焼成気味、やや硬質 ③オリーブ黒色～灰色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
159-3 89	瓦	床面+3 破片	厚 2.0	①砂粒、白色細粒 ②還元 焼、硬質 ③暗灰色	一枚造り。凸面無。凹面布目。	吉井・藤岡系
159-4 89	瓦	床面+5 破片	厚 2.1	①砂粒、白色細粒 ②還元 焼、硬質 ③暗灰色	一枚造り。凸面無。凹面布目。	吉井・藤岡系 3と同一個体か
159-5 91	鉄製品 刀子	床面+4	長 19.8 幅 1.6	重 8.5	基部は断面方型	

206号住居跡 (第160図、図版35)

本住居跡は、第4次調査区南西端の横斜部にあり15・16—21・22グリッドに位置する。

他の住居跡との重複関係は認められない。

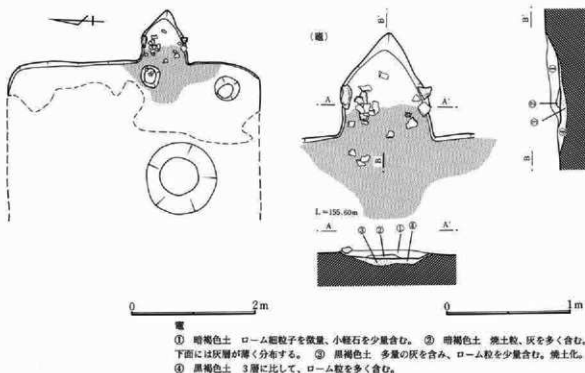
住居の掘り込みは、黄褐色ローム層にまで及ぶが、上部の浸食が著しく、東壁の周辺部が残存するのみである。残存部についても確認段階ですでに床面が露出している状況であった。床面はローム面を叩き締めており、硬化している。壁は東壁でわずかな段差が確認されたのみである。南東コーナー際に、直径40cm、深さ22cmの円形を呈するピットが検出された。

床面下には直径108cm、深さ28cmの円形の土坑が設けられている。

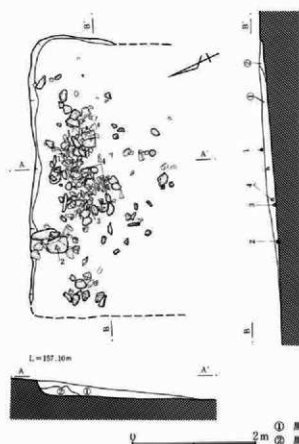
覆土は、ほとんど残存しない。

竈は、東壁の中央やや南寄りに構築されている。燃焼部は壁の外側に張り出している。燃焼部の幅は50cm、煙道方向の張り出しは50cmを測る。焚き口部から竈前部にかけては、多量の灰の分布が見られる。火床面は著しく火熱を受けており、下部のローム面の焼土化は顕著である。

遺物は、竈内から羽釜の小破片が出土したが図示しえなかった。



第160図 206号住居跡実測図



第161図 207号住居跡実測図

### 207号住居跡

(第161・162図、図版35・89・94・95)

本住居跡は、第4次調査区南西端部の南側の谷に面した傾斜地にあり、12・13-27・28グリッドに位置している。

他の住居跡との重複関係は認められない。

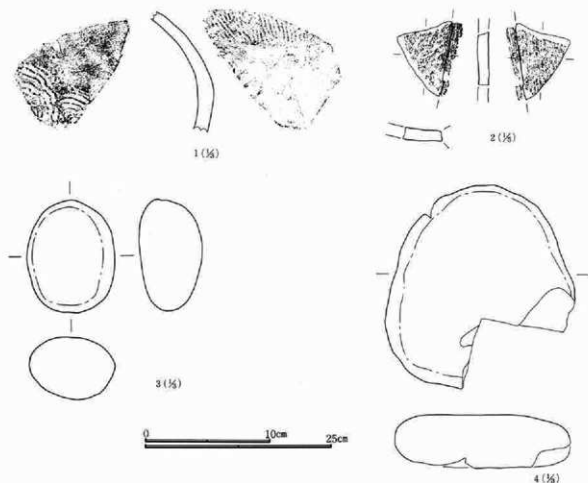
住居の掘り込みは暗灰褐色粘質土に施されており、明瞭に確認された。谷への南西方向への傾斜に沿い浸食を受け、北壁周辺部を除く住居の大半を失っているため詳細は不明であるが、東西方向は3mを測ると見られる。壁の残存状況も不良で、最大19cmが残るにすぎない。床面は貼り床は施されておらず、粘質土の面を叩き締めており、残存部は堅緻である。貯蔵穴や柱穴、周溝は検出されなかった。

覆土はわずかに残る程度だが、部分的に三角堆積状を示す。



甕は、残存部分では検出されなかった。

床面上には、195点の礫が廃棄された状態で出土している。編物石と言われる形状のものは少数で、大半は使用目的の不明なものである。土器は礫に混入して16点の小破片が出土したのみである。瓦の小破片も含まれている。他に、台石と、擦石とみられる製品が出土した。



第162図 207号住居跡出土遺物実測図

207号住居跡出土遺物観察表

拝啓番号 図原番号	土器類別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整・成形技法の特徴	備考
162-1	須恵器 甕	床面+10 割部破片	口 — 底 — 高 —	①砂粒、白色細粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	割部は丸く膨らむ。内外面に叩き整形痕。他は無し。	
162-2 89	瓦	床面 破片	長(10.0) 幅 — 厚 1.7	①砂粒、白色細粒 ②還元焰気味、やや硬質 ③灰白色	凸面は隅叩き後、撫で。凹面布目痕。側面面取り。	吉井・藤岡系
162-3 94	擦石	床面 完形	長 9.0 重 445 幅 7.0 厚 4.9		両面に使用による磨減あり。	安山岩
162-4 95	砥石	床面+3 ~5	長(16.3) 重 1100 幅(15.0) 厚(4.7)		両面に使用による磨減あり。	石英安山岩 下面に麻付着

### 第3章 平安時代の遺構と遺物

#### 208号住居跡 (第163図、図版35・80)

本住居跡は、第4次調査区の南端部の傾斜地にあり、13・14-27グリッドに位置する。

他の住居跡との重複関係は認められないが、東側は4号溝によって壊されているようである。

住居の掘り込みは、黄褐色ローム層中に及ぶが、ほとんどの部分は浸食を受け、僅かに南西コーナーの掘り方と考えられる部分が確認された。詳細は把握できないが、残存部分の形状と、掘り方面の状況、遺物出土状況などから堅穴住居跡の一部と認定した。貯蔵穴の底面の可能性もある。

遺物は、ほぼ完形の高台付埴と礫1点が掘り方面に密着して出土している。



第163図 208号住居跡および出土遺物実測図

#### 208号住居跡出土遺物観察表

発掘番号 図版番号	土器類別 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
163-1 80	須恵形 埴	掘り方面 ほぼ完形	口 11.8 底 6.7 高 4.5	①砂粒～小石、雲母 ②還元焰気味、やや硬質 ③暗灰褐色～灰黄色	体部はほぼ直線的に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。底部は回転未切り無調整。付高台。やや粗雑なつくり。	内面黒変

#### 221号住居跡 (第164図、図版36)

本住居跡は、第4次調査区の南西部の谷に面した傾斜変換点にあり、10-25・26グリッドに位置する。

他の住居跡との重複関係は確認されなかった。

住居の掘り込みは、暗褐色粘質土の中に施されており、明瞭に確認された。しかし遺存状況は極めて不良であり、南半部は谷の浸食によって失っている。全体の規模、平面形は不明だが、東西は3m86cmを測り、主軸方向はN-120°-Eを示すものと想定される。壁は最大でも11cmが残るのみである。床面は貼り床は施されておらず、ほぼ平坦であり、全体的に堅く締まっている。残存部分には貯蔵穴や柱穴・周溝などの掘り込みは検出されなかった。

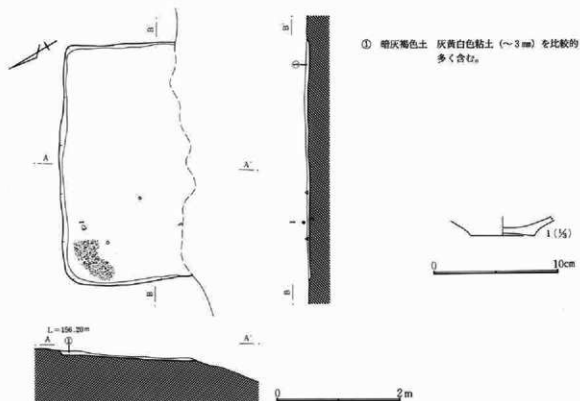
なお北西コーナー部分の床面上には灰白色粘土が出土している。

覆土は、ほとんど残存していない。

本住居の残存部分では甕は検出されなかったが、東壁の欠失部分に位置する可能性が高い。

遺物は、非常に少ない。

## 第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第164図 221号住居跡および出土遺物実測図

### 221号住居跡出土遺物観察表

発掘番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (厚)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整・成形技法の特徴	備考
164-1	須恵器 坏	床面 片残存	口一 底(5.2) 高(1.5)	①砂粒 ②酸化銅、やや硬質 ③明褐色	内外面ともにロクロ整形。底部は回転糸切り無調整。	

### 225号住居跡 (第165・166図、図版36・80)

本住居跡は、第5次調査区東南部14・15-17・18グリッドに位置し、東西方向に入る埋没谷の谷頭部分の緩傾斜部にある。

重複関係としては、先行する224号住居跡(奈良)を掘り込んで営まれている。

住居の掘り込みはローム層中までおよんでいるが、上面の多くは浸食によって流出しており、西側へ下る傾斜の関係から、東半部分のみが確認されたにとどまる。

竪穴部分の形態や規模について全貌はしりえないが、南北方向は3m33cmを測り、主軸方向はN-85°-Eを示すものと見られる。壁は東壁部分でも8cmが残存するにすぎない。床面はやや軟弱である。貯蔵穴とされる土坑は南東のコーナー部分に設けられており、70cm×86cmの楕円形を呈する。深さは16cmを測る。柱穴、周溝は検出されなかった。

掘り方としては竪穴前に径110cm、深さ22cmの円形の土坑が掘られている。

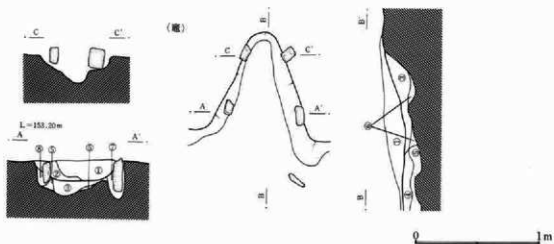
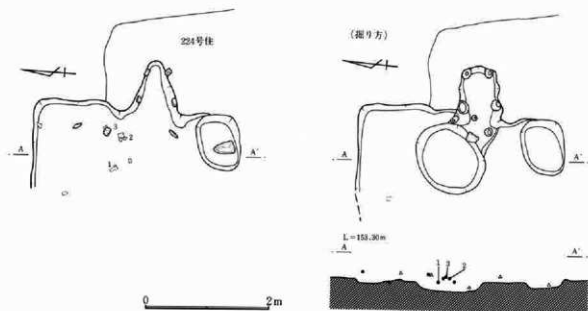
覆土は、暗褐色土がみられたが状況は把握されなかった。

竪は東壁中央よりもやや南に寄った位置に構築されている。燃焼部は壁の外側に張り出し、幅48cm、煙道

### 第3章 平安時代の遺構と遺物

方向への張り出し54cmを測る。燃焼部および煙道部の側壁には石材が埋設されている。石の埋設には小ピットを穿ち丁寧に差し込んでいる。火床面はさほど焼土化していない。なお貯蔵穴内からは、竈の天井材に使用されたと考えられる熱を受け赤化した板状の砂岩が出土している。

遺物は、竈周辺部に散乱している程度で少量である。

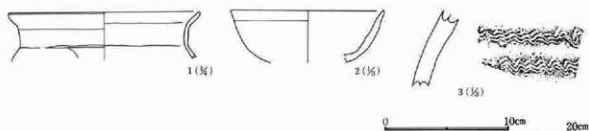


竈

① 黒褐色土 焼土粒 (~5mm) を比較的多く、炭化物粒 (~3mm) を含む。② 黒褐色土 1層に比して、含有物の量が少ない。③ 暗褐色土 ローム粒 (~1cm) 焼土粒 (~2mm) 炭化物 (~5mm) をそれぞれ比較的多く含む。④ 暗褐色土 ローム粒 (~3cm) を多く含む。焼土粒 (~2mm) 炭化物粒 (~3mm) も比較的多く含んでいる。しまっている。⑤ 暗褐色土 (やや黒軟がかかる) 焼土粒、炭化物粒、ローム粒 (~2mm) をそれぞれ含む。⑥ 暗褐色土 1層に比して、焼土粒は少なく、ローム粒が多い。⑦ 黒褐色土 3層より暗く、含有物が少ない。⑧ 暗褐色土 ローム粒 (~2mm) 炭化物粒 (~2mm) を少量含む。

第165図 225号住居跡実測図

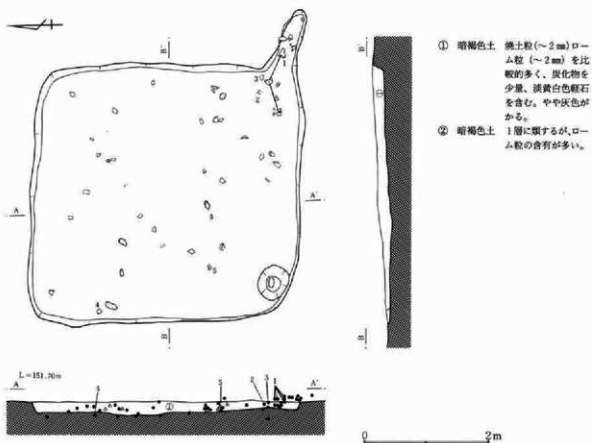
第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第166図 225号住居跡出土遺物実測図

225号住居跡出土遺物観察表

検出番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (口)	①胎土 ②構成 ③色調	器形、器・成形技法の特徴	備 考
166-1 80	土 師 器 壺	床面 瓦残存	口(20.6) 底 — 高 (5.0)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③赤褐色～明赤褐色	「コ」字状口縁。口縁部微曲で、胴部 外面 磨削り。内面磨削で。	
166-2	土 師 器 坏	床面 瓦残存	口(12.2) 底 — 高 (4.1)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③明褐色～橙色	体部はやや内筒気味に立ち上がる。内外面磨 削で。底部磨削り。	
166-3	須 恵 器 壺	床面+2 口縁部破 片	口 — 底 — 高 —	①砂粒、白色細粒 ②還元焰、硬質 ③暗灰黄色～灰黄色	外面に波状文。ロクロ製形。	



第167図 226号住居跡実測図

第3章 平安時代の遺構と遺物

226号住居跡 (第167～170図、図版36・80・90・93)

本住居跡は、第5次調査区南部の緩傾斜地にあり、14・15-14グリッドに位置する。

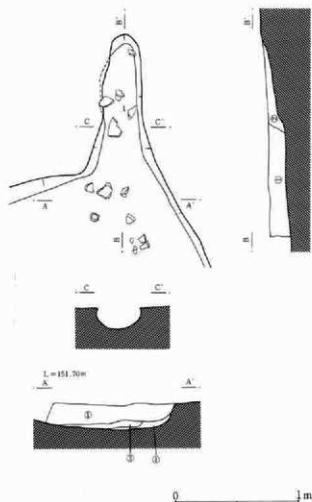
他の住居跡との重複関係は認められない。

住居の掘り込みは、暗褐色粘質ローム層中に施されているが、明瞭に確認された。ほぼ正方形の形状を取り、規模は東西4 m12cm、南北4 m36cmを測り、主軸方向はN-100°-Eを示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、15cmが残存する。床面は貼り床は施されておらず、地山の粘質土を直接叩き締めており、堅緻である。貯蔵穴は南西コーナー際に設けられており、直径50cm、深さ25cmのほぼ円形の形状を呈する。なお柱穴や周溝は検出されなかった。

覆土は、やや灰色がかった暗褐色土層であり、部分的に壁際にローム粒の含有が多い箇所が認められた。

竈は、東壁の南東コーナーに最も寄った場所に構築されており、煙道方向の軸は住居の中心軸よりも対角線方向に傾いている。燃焼部は壁の内外にわたるようで、煙道方向の張り出しは110cmと長く伸びる。焚き口部周辺には多量の灰が分布しており、燃焼部から煙道部にかけては焼土化が著しく硬化している。なお竈内には多数の円筒埴輪の破片が出土しており、竈構築材として転用された可能性も認められる。

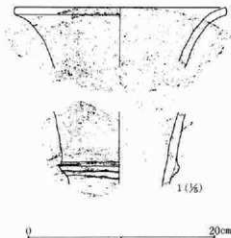
遺物は、竈内の他は全体的に小破片が散乱した状況である。



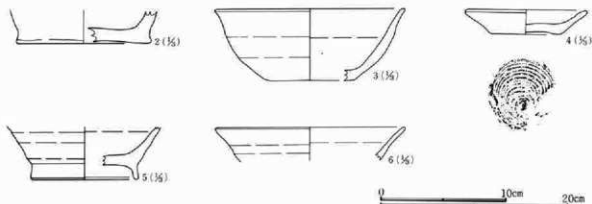
第168図 226号住居跡竈実測図

竈

- ① 暗褐色土 焼土粒(～5mm) 灰白色礫石(～2mm)を比較的多く、ローム粒(～3mm)を少量含む。単純な1層の覆土である。やや灰色がかる。
- ② 灰黄褐色ロームブロック
- ③ 暗褐色土 ローム粒(～2mm) 焼土粒(～2mm)を少量含む。1層と同じ。
- ④ 暗褐色土 焼土粒を多く含む。



第169図 226号住居跡出土遺物実測図(1)



第170図 226号住居跡出土遺物実測図(2)

226号住居跡出土遺物観察表

標頭番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (長)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
169-1 90	磁 輪	甕内～床 面+12 破片	口(33.8) 底 — 高(9.1)	①砂粒～小石 ②酸化箱、硬質 ③褐色	口縁部は外反して大きく開く。外面は縦方向のハケ目。内面は横撫で。	
170-2	土 器 壺	床面+5 片残存	口 — 底(14.4) 高(3.5)	①砂粒～小石、雲母 ②酸化箱、やや硬質 ③ (外)明赤褐色 (内)褐色	底部はやや張り出す。内外両面撫で。	砂面
170-3 80	須 恵 器 埴 地	床面+6 片残存	口 15.2 底 (7.4) 高 5.6	①砂粒 ②還元箱、やや軟質 ③灰色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。内外面ともにロクロ整形。	高台部剥落か
170-4 80	須 恵 器 皿	床面 片残存	口 9.8 底 5.7 高 1.9	①砂粒、雲母、白色細粒 ②還元箱、やや硬質 ③明褐色～褐色	体部はほぼ直線的に開く。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
170-5 80	須 恵 器 高台付埴 地	床面+4 片残存	口 — 底(8.6) 高(4.2)	①砂粒、白色細粒 ②還元箱、硬質 ③(外)暗灰色 (内)灰色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。底部は回転糸切り無調整。付高台。	
170-6	須 恵 器 埴 地	甕土中 片残存	口 15.2 底 — 高(2.6)	①砂粒、雲母 ②還元箱気 味、やや軟質 ③にぶい黄 褐色～にぶい黄褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。	

## 227号住居跡 (第171～173図、図版37・80)

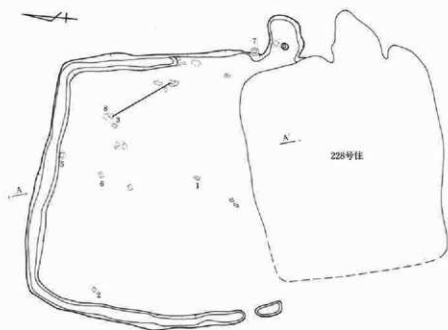
本住居跡は、第5次調査区南東部の埋没谷の谷頭部に面した傾斜部にあり、14・15-16・17グリッドに位置する。

南壁周辺を後出する228号住居跡(平安)によって切られている重複関係が確認されている。この他に浸食による欠失で確認されなかったが、位置関係からみて、先行する224号住居跡との重複が想定される。

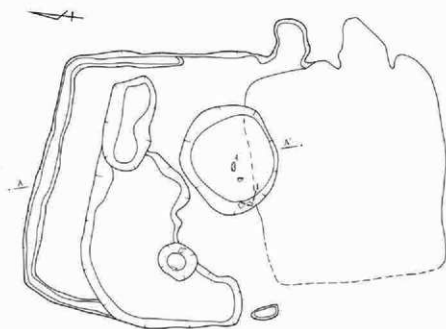
住居の掘り込みは黄褐色ローム層に及ぶが、残存状況が不良であり、確認は困難であった。壁際に掘り込まれた周溝の範囲から、東西方向は4m20cmを測り、主軸方向はN-100°-Eを示すとみられる。なお本住居は拡張が行われた状況が確認されており、拡張前の北壁方向は90cmほど狭い。床面は、拡張前の部分に貼り床を施し、拡張部分についてはローム面を直接使用しているが、全体にやや軟弱である。貯蔵穴や周溝は検出されなかった。

掘り方は、拡張前の部分にのみ確認され、中央部には直径1m72cm、深さ17cmの円形の土坑が検出された。北壁際には拡張前にも周溝が掘り込まれていた痕跡がある。

第3章 平安時代の遺構と遺物



- ① 暗褐色土 ローム粒及びロームブロックを比較的多く含む、しまっている。
- ② 暗褐色土 1層より明るい、ローム粒(1~2cm)を含む。
- ③ 黒褐色土 少量のローム粒を含む。

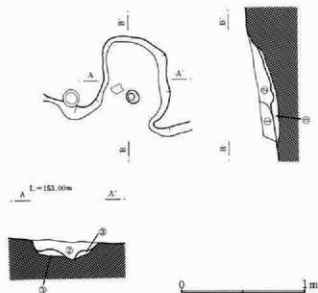


0 2m

第171図 227号住居跡実測図



## 第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第172図 227号住居跡遺実測図

### 竈

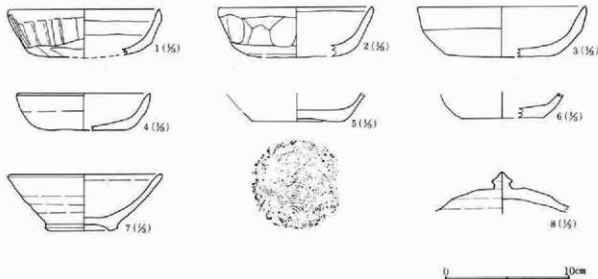
- ① 暗褐色土 少量の焼土粒（～2mm）と（～5mm）のローム粒を含む。
- ② 暗褐色土 1層より暗い、焼土粒（～7mm）ローム粒（～3mm）多く、（～2mm）炭化物粒を少量含む。
- ③ 暗褐色土 焼土粒（～5mm）と少量の（～2mm）炭化物粒を含み、（～3mm）の淡黄白色ローム粒を多量に含む。

覆土はほとんど残存していない。

竈は東壁に構築されている。部分的に擾乱を受け、遺存状況は不良である。燃焼部は壁の内外にわたり、中央部には支脚の埋設痕が確認された。燃焼部の幅は50cm、煙道方向の張り出しは60cmを測る。火床面の焼土化はさほど顕著でない。

なお拡張に伴う竈の造り変えの痕跡は認められなかった。

遺物は、小破片が床面上に散乱した状況で出土しており、土師器の坏、須恵器の坏・埴・蓋などが認められた。



第173図 227号住居跡出土遺物実測図

## 第3章 平安時代の遺構と遺物

227号住居跡出土遺物観察表

検出番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (K)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
173-1 80	土師器 坏	床面～+ 4 互残存	口12.1 底(9.7) 高(3.8)	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③黄褐色	平底気味の底部から稜をなして口縁部は立ち上がる。外面直削り。内面横撫で。	
173-2 80	土師器 坏	床面+ 4 互残存	口(12.3) 底(8.0) 高3.9	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③褐色	平底気味の底部から稜をなして口縁部は立ち上がる。外面直削り。内面横撫で。	
173-3 80	土師器 坏	床面 互残存	口(13.4) 底(9.3) 高2.9	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③褐色	平底気味の底部から稜をなして口縁部は立ち上がる。口縁部、内面横撫で。外面直削り。	
173-4 80	土師器 坏	床下土坑 中 互残存	口(10.8) 底(7.2) 高2.9	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③明褐色～褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。口縁部横撫で。他はやや弱い推で。	
173-5 80	須恵器 坏	床面 底部残存	口— 底7.2 高(2.4)	①砂粒、雲母 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	内外面ともにクロコ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。上げ底気味。	
173-6	須恵器 坏	床面 互残存	口— 底(6.8) 高(2.0)	①砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面ともにクロコ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
173-7 80	須恵器 坏	竈跡 完形	口12.3 底5.8 高4.4	①砂粒～小石、雲母 ②還元焰気味、やや軟質 ③灰白色、黒炭がみられる	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面ともにクロコ整形。底部撫で。粗雑な付高台。	
173-8 80	須恵器 蓋	床面 互残存	横1.6 口(11.1) 高(2.5)	①砂粒～小石、黒色・白色 鉱物 ②還元焰、硬質 ③灰白色	擬宝珠状の積み。内外面ともにクロコ整形。	

## 228号住居跡(第174・175図、図版37・81)

本住居跡は、第5次調査区南部の埋没谷の谷頭部に面した傾斜地にあり、14-17グリッドに位置する。重複関係としては、先行する227号・261号住居跡(平安)の上部に築かれていることが確認されている。なお浸食により残存しないが、やはり先行する224号住居跡(平安)との重複が想定される。

住居の掘り込みは、黄褐色ローム層中に及ぶが、他住居跡との重複部分が多く、確認は困難であった。しかし床面には非常に堅緻に貼り床が施されており、住居の範囲が把握された。長方形の形状を呈し、規模は東西3m37cm、南北3m10cmを測り、主軸方向はN-70°-Eを示す。残存状況は不良で、壁は4cmが確認されたにとどまる。なお貯蔵穴・柱穴・周溝は検出されなかった。

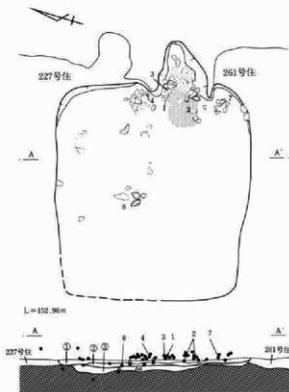
掘り方は起伏に富み、北西部を除き全体に不整形な掘り込みが認められる。北西コーナーのピットは本住居に伴わない可能性が高い。

覆土は、ほとんど残存していない。貼り床は、ロームを混入した暗褐色土を主とする。

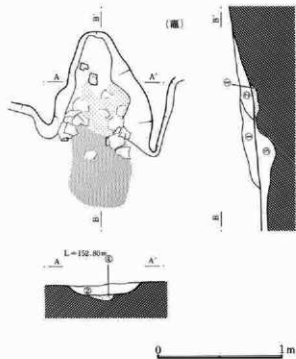
竈は、東壁の中央や南寄りに構築されている。左右の袖部分は僅かながら残存しており、燃焼部は壁の内側から外側へ張り出している。燃焼部の幅は約60cmで、緩やかに傾斜して上がる煙道方向の張り出しは80cmを測る。焚き口部分には灰の分布が見られ、また火床面は焼土化が顕著であり、下部の5cmほどが焼土化している。

遺物は、竈内および周辺部にまとまった分布がみられ、その他床面北東部に散乱しているが、土器の小破片が主である。須恵器の羽釜や坏・埴が認められる。

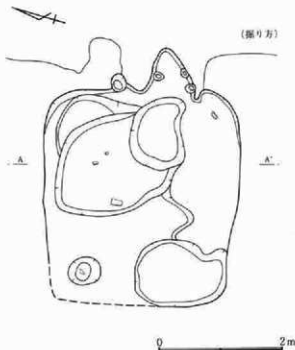
第2節 竪穴住居跡と出土遺物



- ① 黒褐色土 ローム粒 (~5mm) 粘土粒 (~1cm) 炭化物粒 (~2mm) を含む。
- ② 黒褐色土 1層より多くの含有物を含み、しまりがある。
- ③ 暗褐色土 ローム粒 (~2mm) 灰白色軽石少量、焼土粒子 (~2mm) を含む。

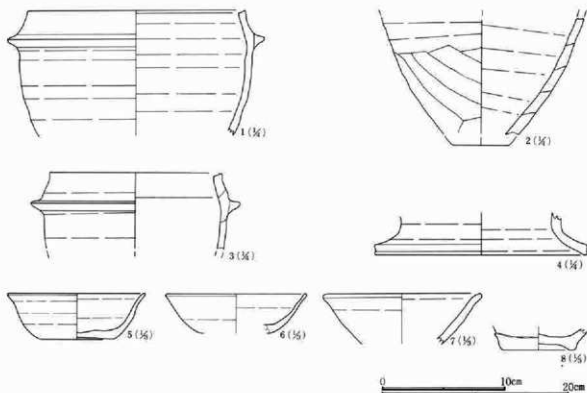


- ④ 地山焼土化部分



第174図 228号住居跡実測図

第3章 平安時代の遺構と遺物



第175図 228号住居跡出土遺物実測図

228号住居跡出土遺物観察表

押印番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
175-1 81	須恵器 羽蓋	甕内 残存	口(23.3) 底— 高(13.2)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、 やや軟質 ③(外)灰白色 (内)オリーブ黒色～灰色	口縁部はわずかに内傾し、築部は強い面取り、 内外面ともにロクロ整形。	内面、断面に保 付着。甕材への 転用
175-2	須恵器 羽蓋	床面～+ 6 瓦残存	口— 底— 高(12.3)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③に よび黄褐色～よび黄褐色	胴部はやや内湾気味に立ち上がる。外面下半 部磨削り。上半部、内面はロクロ整形。	保付着、甕材へ の転用
175-3	須恵器 羽蓋	甕内 残存	口(18.4) 底— 高(8.0)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、 やや硬質 ③(外)よび黄 褐色(内)灰オリーブ色	口縁部はわずかに内傾し、築部は強い面取り、 胴は断面三角形。内外面ともにロクロ整形。	
175-4	須恵器 甕	甕壁 残存	口— 底(22.8) 高(4.5)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③藍色	胴部は外反して開く。胴部は面取り。内外面 ともにロクロ整形。	
175-5 81	須恵器 坏	掘り方中 残存	口(11.0) 底(5.9) 高(3.6)	①砂粒～小石 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部 は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。 底部は回転糸切り無調整。	
175-6	須恵器 坏	掘り方中 残存	口(11.8) 底— 高(3.1)	①砂粒 ②酸化焰、やや硬 質 ③(外)暗灰色(内)黄褐 色～よび黄色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部 は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。	
175-7	須恵器 坏	床面+2 瓦残存	口(12.6) 底— 高(4.0)	①砂粒、白色細粒 ②還元焰、やや軟質 ③黄灰色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部 は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。	
175-8	須恵器 高台付埋 存	床面 底(6.0) 高(1.8)	口— 底(6.0) 高(1.8)	①砂粒、雲母、白色細粒 ②還元焰気味、やや軟質 ③灰色～灰白色	粗雑な付高台。内外面ともにロクロ整形(右 回転)。底部は回転糸切り無調整。	

## 229号住居跡 (第176・177図、図版38・81)

本住居跡は、第5次調査区南西部の埋没谷に向かう緩傾斜部にあり、14・15-8グリッドに位置する。

重複関係としては、先行する273号住居跡(奈良)の覆土上部に築かれている状況である。また、274号住居跡(平安)との重複も想定される。

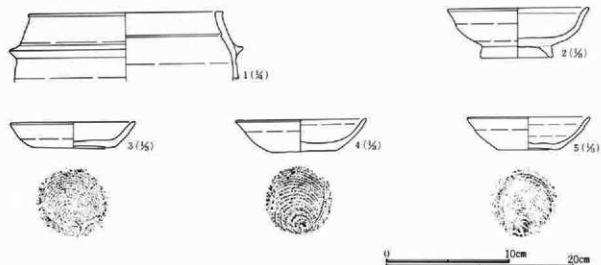
住居の掘り込みは、273号住居跡の覆土中にとどまり、また攪乱を受けもし、残存状況が極めて不良であるため確認は困難で、住居の全体像は把握できなかった。壁は検出されない。堅く踏み締められた床面が一部確認されたが、貯蔵穴や柱穴、周溝などの施設は認められない。

竪の位置は不明であるが、東側にやや焼土化した石が出土しており、また若干ではあるが焼土の分布もみられる。

遺物は、床面上と思われる位置で皿、高台付埴などが出土している。



第176図 229号住居跡実測図



第177図 229号住居跡出土遺物実測図

229号住居跡出土遺物観察表

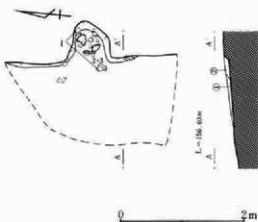
検出番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整・成形技法の特徴	備考
177-1	須恵器 羽蓋	床面? 瓦残存	口(21.0) 底 一 高 (7.3)	①砂粒 ②酸化焙、やや硬質 ③淡黄褐色	口縁部はわずかに内傾し、頸部は強い面取り、内外面ともにロクロ整形。	
177-2 81	須恵器 高台付埴	床面 口縁部一 部欠損	口 11.3 底 5.8 高 3.9	①砂粒 ②酸化焙、やや硬質 ③藍色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。内外面ともにロクロ整形。底部整で、付高台。	
177-3	須恵器 81	床面 光形	口 9.9 底 6.0 高 1.9	①砂粒 ②酸化焙、やや硬質 ③藍色	体部はほぼ直線的に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転余切り無調整。	
177-4 81	須恵器 坏	床面 ほぼ光形	口 10.5 底 5.4 高 2.5	①砂粒 ②酸化焙気味、やや軟質 ③浅色褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転余切り無調整。	器面の磨滅あり
177-5 81	須恵器 坏	床面 口縁部欠 損	口 9.8 底 5.0 高 2.6	①砂粒 ②酸化焙、やや硬質 ③藍色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転余切り無調整。	

## 230号住居跡 (第178・179図、図版38・81)

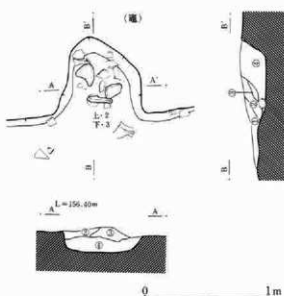
本住居跡は、第4次調査区の西南部の西側へ下る緩やかな傾斜地にあり、15・16-23・24グリッドに位置している。

他の住居との重複関係は見られない。

住居の掘り込みは、黄褐色ローム層まで及ぶが、上部の浸食による流出が著しく、傾斜の関係で竈と東壁の一部と、踏み締められて硬化した床面の範囲が確認されたにとどまる。竈穴の形態や規模等は不明である。壁は、最大でも9cm確認できたのみである。床面は、直接ローム面を使用しており、貼り床の痕跡は認めら



- ① 黒褐色土 多くのローム粒子と少量の1mm以下の白色粒子を含む。  
② 黒褐色土 炭を多量に含む、焼土粒子はほとんど含まない。



竈

- ① 黒褐色土 ローム粒子、ローム小ブロックを多く含む。灰色粘土を多く含む。  
② 赤褐色土 焼土層  
③ 黒褐色土 焼土粒子、炭を混じる。  
④ 黒褐色土 多くのローム粒子と焼土粒子を少量含む。

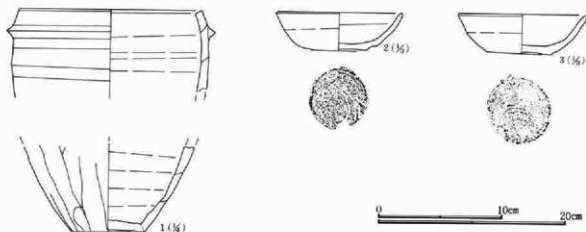
第178図 230号住居跡実測図

れない。床面上には部分的に灰白色粘土がブロック状に散布していた。なお貯蔵穴や柱穴、周溝は検出されなかった。

覆土は僅かに見られるが、攪乱も多い。

竈は、東壁に構築されている。燃焼部は壁の外側に張り出しており、幅60cm、煙道方向の張り出し長60cmを測る。竈内には構築材に使用された可能性のある石が出土している。この他に、支脚と考えられる棒状の石が倒れて出土している。

遺物は、竈及びその周辺に限られている。竈の中央部の火床面上に小形の坏2個体が合わせ口の状況で出土しているのが注目される。なおその内部には締まりに欠ける土が流入していた。



第179図 230号住居跡出土遺物実測図

230号住居跡出土遺物観察表

検出番号 図版番号	土器種類	出土状況 残存状況	法量(cm) (K)	①粘土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
179-1 81	須恵器 羽釜	竈内 片残存	口(19.4) 底(8.0) 高(7.4)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや軟質 ③(外)褐色(内)明褐色	膨らみの小さな胴部から口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。胴部 上部、内面はロクロ整形。下半部置削り。底部磨で。	外側に保付着
179-2 81	須恵器 坏	竈内 完形	口 10.2 底 4.7 高 3.0	①砂粒、雲母、白色細粒 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい黄褐色～黄橙色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転余切り無調整。	竈内に3と口縁部を合わせて出土。2が上
179-3 81	須恵器 坏	竈内 完形	口 10.3 底 5.3 高 3.1	①砂粒、雲母、白色細粒 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい黄褐色～黄橙色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転余切り無調整。	2は内外面に、3は外側に保付着

### 231号住居跡 (第180・181図、図版38・81)

本住居跡は、第5次調査区の東南端の傾斜地にあり、本調査区中央に入る小さな埋没谷の谷頭部から僅か東になる、16・17-19グリッドに位置する。

住居の掘り込みは、黄褐色ローム層まで及ぶが、上面の浸食が著しいために、傾斜上部の竈および東壁と南壁の一部が残存するのみである。また耕作による攪乱も受けていることから、住居の平面形・規模等は不明である。

床面はほとんど残存していないが、貼り床の痕跡は見られない。硬質面は認められなかった。貯蔵穴は南

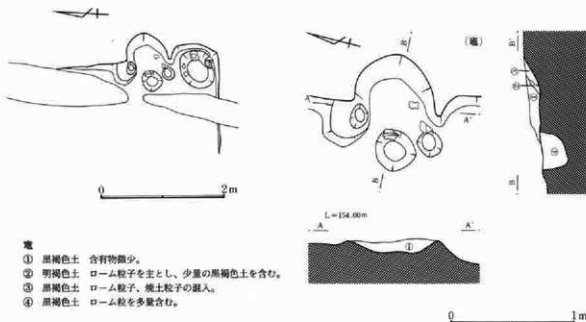
### 第3章 平安時代の遺構と遺物

東コーナー部分に設けられており、径50cm×60cmの楕円形を呈しており、深さは13cmを測る。なお、柱穴や周溝は検出されなかった。

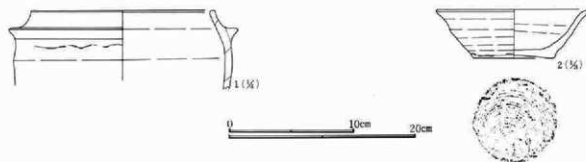
覆土はほとんど残存していない。

竈は東壁に構築されており、貯蔵穴に寄った位置にある。遺存状況は不良であるが、壁のやや内側には、左右の袖を埋設した掘り込みの痕跡が残っており、また左側の袖部分には僅かに袖の一部が確認されている。焚き口部の幅は約42cmである。燃焼部の大部分は壁の外側に張り出しており、煙道方向は54cmを測る。なお竈の焚き口部前の床面下には径30cmの円形のピットが見られる。

遺物は、竈および貯蔵穴周辺から少量出土している。



第180図 231号住居跡実測図



第181図 231号住居跡出土遺物実測図

231号住居跡出土遺物観察表

押出番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (K)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
181-1 81	須恵器 羽釜	竈内 瓦残存	口(19.8) 底— 高(7.4)	①砂粒~小石 ②還元焰気味、やや硬質 ③(外)灰色 (内)オリブ黄色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。踵は断面三角形。内外面ともにロクロ整形。	
181-2 81	須恵器 坏	貯蔵穴内 瓦残存	口(12.2) 底 6.6 高 3.8	①砂粒、雲母 ②還元焰気味、やや軟質 ③灰オリブ色~灰白色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転余切り無調整。	



## 233号住居跡 (第182・183図、図版39)

本住居跡は、第4次調査区南西部の緩傾斜地にあり、20・21—24グリッドに位置する。

他の住居跡との重複関係は見られないが、東西方向に傾斜に沿って刻まれた自然流路によって北壁周辺部は浸食され残存しない。

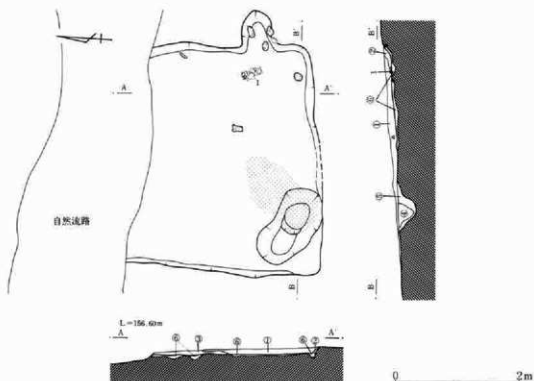
住居の掘り込みは、黄褐色ローム層中に施されており、明瞭に確認された。南北方向は不明であるが、東西3m50cmを測り、主軸方向はN-90°-Eを示す。壁は垂直近く立ち上がり、傾斜上位の東辺で12cmが残る。床面は部分的に貼り床が施されており、中央部周辺は殊に堅緻である。南西コーナー部分には、貯蔵穴と思われる掘り込みが見られるが、径50~60cmのピット2基が重複したような状況で検出された。深さは最深部で50cmである。柱穴、周溝は認められない。なお貯蔵穴周辺部を中心として焼土の分布がみられる。

掘り方は、緩やかな起伏をもつ程度であり、ピットについては帰属は不明な点が多い。

覆土は3層に分層され、いわゆる三角堆積の発達も見られ、自然堆積状況を示す。

竈は東壁の南東コーナー部分に構築されている。竈の構築材として使用された石材が埋設された状況で3箇所遺存している。燃焼部および煙道部は壁の外側に突出している。焚き口部の幅は約45cmで、煙道方向の張り出しは60cmを測る。燃焼部の中央から右側に寄った位置に石の支脚が埋設された状況で残存している。なお燃焼部の焼土化はさほど顕著ではない。

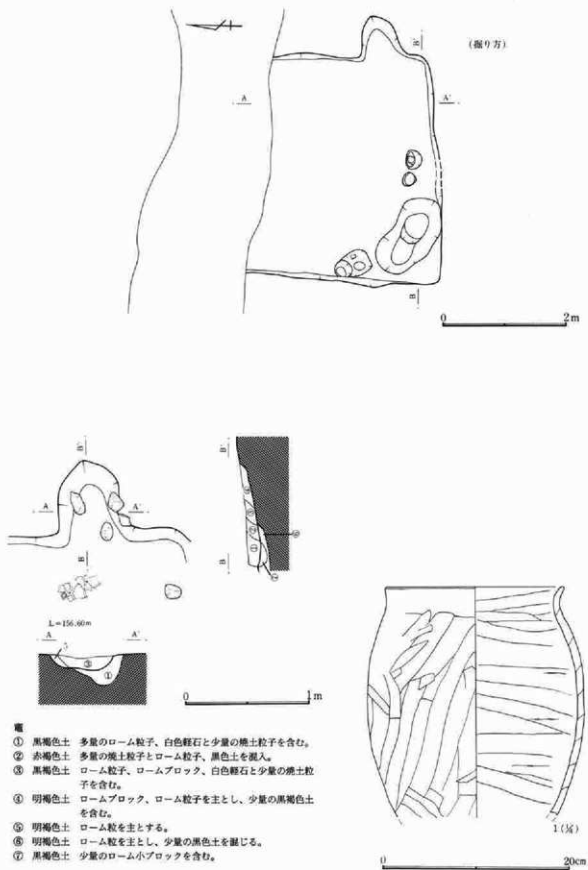
遺物は、竈前部に土釜が潰れた状況で出土しているのみである。



- ① 黒褐色土 多数のローム粒子と少量のローム小ブロックを含む。 ② 暗褐色土 多数のローム粒子、ロームブロックを含む。  
 ③ 黒褐色土 ローム粒子、ロームブロックを多量含む。 ④ 黒褐色土 ローム粒子と1mm以下の白色粒子を多く、機土粒子を少量含む。  
 ⑤ 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロックを主とし、少量の機土粒子、炭を含む。 ⑥ 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロックを主とし、少量の黒褐色土を含む。

第182図 233号住居跡実測図(1)

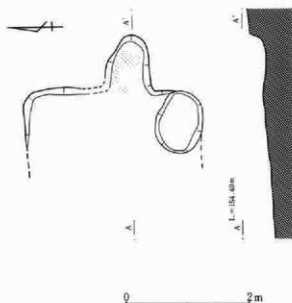
第3章 平安時代の遺構と遺物



第183図 233号住居跡実測図(2)および出土遺物実測図

## 233号住居跡出土遺物観察表

押出番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
183-1 81	土師器 甕	床面 瓦残存	口(19.0) 底— 高(24.4)	①砂粒~小石、器母 ②酸化焙、やや硬質 ③(外)赤 褐色 (内)暗赤褐色	緩やかに膨らむ胴部から口縁部は鋭く弱く外 反する。口縁部横溝で、胴部 外面泥削り。 内面直線。	内面付着物 内面器面に磨滅 あり



## 234号住居跡 (第184・185図、図版39)

本住居跡は、第5次調査区南東端の緩傾斜部にあたり、15-20グリッドに位置している。

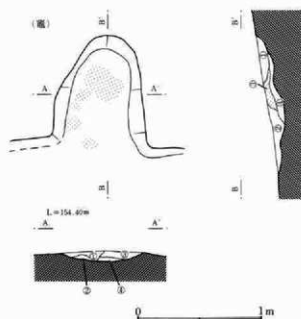
他の住居との重複関係は見られず、単独で存在している。

住居は、黄褐色ローム層を掘り込んで築かれているものの、上部の浸食が著しく、西へ下がる傾斜の関係で東壁周辺が僅かに残存しているのみである。住居の全体像は窺い知れないが、南北の壁は2m88cmを測り、主軸方向はN-76°-Eを示している。床面は攪乱を受けており、凹凸が激しいが、特に貼り床を施したという状況は確認されなかった。貯蔵穴は、東南のコーナー部分には径75cm×97cmの楕円形を呈し、深さは25cmあり、立ち上がりはほぼ垂直直くなっている。なお、柱穴や周溝は検出されなかった。

覆土は、住居の遺存が悪く、また攪乱土が多かったことにより状況は不明である。

竈は、東壁の中央よりもやや南へ寄った位置に構築されている。燃焼部は壁の外側へ張り出しており、幅は65cmを測る。煙道方向への張り出しは85cmが残存する。竈内には、中央部を中心として多くの焼土が、また、左側を主として多量の粘土が検出された。なお、貯蔵穴にもその覆土中には焼土が多く混入しており、竈との関係が考えられる。

遺物は、ほとんど認められず覆土中から土師器の坏が出土している。



竈

- ① 黒褐色土 ローム粒子を多く、焼土粒子を少量含む。
- ② 黒褐色土 砂粒(2-4mm)を多く含む。
- ③ 赤褐色土 焼土粒子を多く含む。
- ④ 黒褐色土 焼土、ローム、灰白色粘土の混入。

第184図 234号住居跡実測図

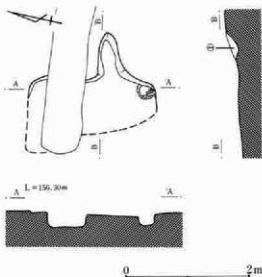
### 第3章 平安時代の遺構と遺物



第185図 234号住居跡出土遺物実測図

#### 234号住居跡出土遺物観察表

押附番号 図版番号	土器種別 器	出土状況 残存状況	法量(cm) (R)	①胎土 ②構成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
185-1	土 鉢 器 坏	覆土中 残存	口(11.4) 底(8.2) 高(2.7)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質③(外) 黄褐色 (内)に薄い褐色	平底気味の底部から口縁部は外傾して立ち上 がる。口縁部、内面横断で。底部鈍削り。	



① 暗褐色土、ローム粒子、焼土粒子を少量含む。

第186図 235号住居跡実測図

#### 235号住居跡 (第186図、図版39)

本住居跡は、第4次調査区南西部の西側へ下る傾斜地にあり、15-24グリッドに位置する。

他の住居跡との重複関係は見られないが、北半部は耕作による溝の攪乱を受ける。

住居の掘り込みは、黄褐色ローム層に及ぶが、上部の浸食が著しく残存状況は不良である。傾斜上位の東壁周辺のみが確認されたが、北壁は不明瞭である。主軸方向はN-80°-Eを示すものとみられる。壁高は、最大でも8cmを測るのみである。床面は、貼り床は施されておらず、直接ローム面を使用しているが、やや軟弱である。南東コーナーには直径25cm、深さ12cmの円形の小ピットが設けられている。

竈は、東壁の南東コーナー寄りに構築されている。燃焼部は、壁の内外にわたり煙道部は外側へ突出する。燃

焼部の幅は40cm、煙道方向の張り出しは67cmが残存する。燃焼部の焼土化はさほど顕著でない。

遺物は、南東壁際のピットから羽釜の小破片が出土しているが図示し得なかった。

#### 236号住居跡 (第187・188図、図版39・81)

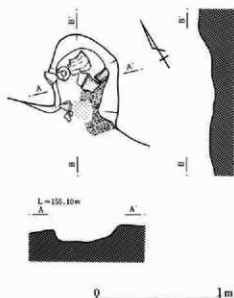
本住居跡は、第4次調査区南西端の西側へ下る傾斜地の13-21グリッドに位置している。

他の住居との重複関係は確認されなかった。

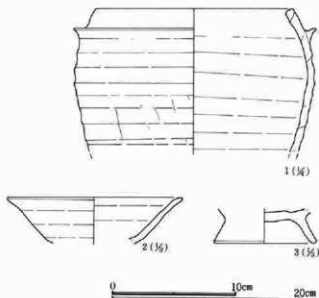
住居の掘り込みは、黄褐色ローム層中にまで及ぶが、上部の浸食が著しく、傾斜の関係から僅かに竈のみが残存しているだけの住居跡で、全体は窺い知れない。

竈は、東壁に築かれていたものとみられる。左袖の石材は埋設状況をとどめており、燃焼部の幅50cm、煙道方向への張り出しは60cmを測る。燃焼部の火床面は焼土化が著しい。また竈の前部を中心に粘土の散布がみられ、竈の構築に使用されたものと考えられる。

遺物は、竈の燃焼部内から羽釜、坏、埴の破片が出土している。



第187図 236号住居跡電気測定図



第188図 236号住居跡出土遺物実測図

## 236号住居跡出土遺物観察表

押込番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状況 残存状況	法量(cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備 考
188-1 81	須恵器 羽 釜	竈内 片残存	口(21.0) 底 — 高(15.2)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや軟質 ③赤褐色	口縁部はわずかに内傾し、器部は強い面取り。 内外面ともにロクロ整形。胴下半部是削り。	外面に漆付着
188-2	須恵器 坏	竈内 片残存	口(14.1) 底 — 高(3.7)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや軟質 ③明褐色～橙色	体部はやや内筒気味に立ち上がり、口縁部 は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。	
188-3 81	須恵器 高台付埴 存	竈内 高台部残 存	口 — 底 8.2 高(2.8)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい橙褐色～橙色	高台部は外反気味に開く。内外面ともにロクロ 整形。	

## 237号住居跡 (第189～191図、図版40・81)

本住居跡は、第5次調査区南東部、埋没谷谷頭部にあたる16・17—18・19グリッドの傾斜部に位置する。重複関係としては、先行する238号住居跡(古墳後期)の上部に築かれているとみられるが、浸食が著しく、傾斜の関係で西半部を失っていることにより、切り合い状況の観察は成し得なかった。

住居の掘り込みは、埋没谷の埋土と黄褐色ローム層との境界部分に施されており、浸食の関係もあり、西側は不明瞭であった。全体の形状、規模は把握できないが、南北は5m07cmを測り、主軸方向はN-90°-Eを示す。壁は最大20cmが残るにすぎない。床面は一部に貼り床の状況も確認されたが、全体としては判然としなかった。貯蔵穴と考えられる掘り込みは、竈の左右の両脇に設けられている。右側のものは直径78cm、深さ13cmの円形の形状を取り、左側のものは直径85cm、深さ25cmのやや大きな円形の形状を呈する。なお柱穴や周溝は検出されなかった。

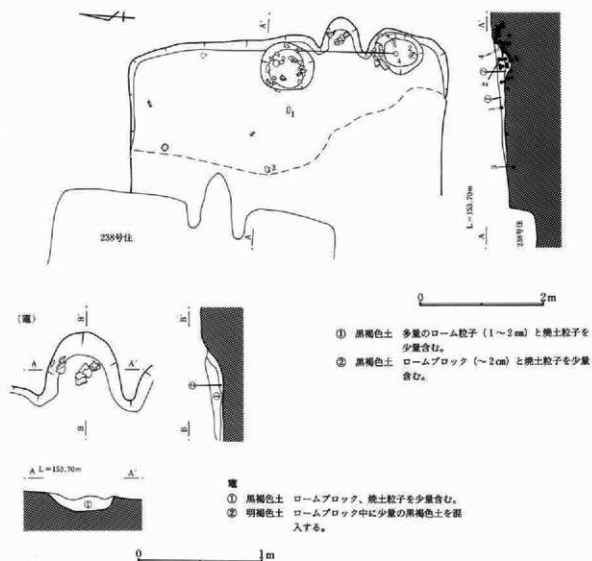
覆土は、黒褐色土層が確認されたのみである。

竈は、東壁の中央より南よりの位置に築かれている。焚き口は竪穴内部にあり、袖の張り出しが僅かに残存している。燃焼部は壁の内外にわたり、幅57cm、煙道方向の張り出しは50cmを測る。火床面の焼土化はさ

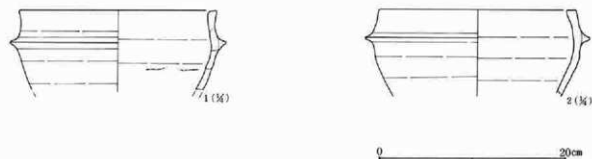
第3章 平安時代の遺構と遺物

ほど顕著ではない。

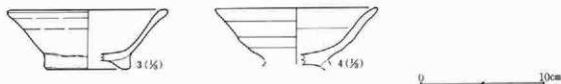
遺物は竈内および2カ所の貯蔵穴と考えられる掘り込み内から出土している。須恵器の羽釜、坏、埴輪が認められるが残存率は低い。



第189図 237号住居跡実測図



第190図 237号住居跡出土遺物実測図(1)



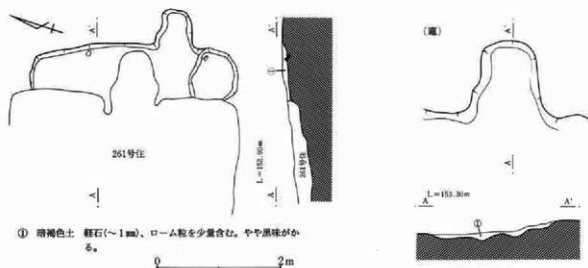
第191図 237号住居跡出土遺物実測図(2)

## 237号住居跡出土遺物観察表

押印番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (#)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整・成形技法の特徴	備 考
190-1 81	須恵器 羽 釜	床面+7 写残存	口(21.2) 底 - 高(8.4)	①砂粒、雲母 ②還元焰気味、やや軟質 ③オリーブ黒色～灰色	口縁部はわずかに内傾し、肩部は強い面取り。 内外面ともにロクロ整形。	
190-2	須恵器 羽 釜	貯蔵穴内 写残存	口(21.2) 底 - 高(9.2)	①砂粒、雲母 ②還元焰気味、やや軟質 ③灰白色、一部黒実	口縁部はわずかに内傾し、肩部は強い面取り。 内外面ともにロクロ整形。	
191-3 81	須恵器 高台付埴	床面 写残存	口(12.8) 底(6.8) 高(4.7)	①砂粒、雲母 ②焼し焼成、 やや軟質 ③灰色、口縁の 一部にぶい橙色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部 は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。 底部應で、粗雑な付高台。	
191-4	須恵器 高台付埴	貯蔵穴内 写残存	口(13.0) 底 - 高(4.8)	①砂粒、雲母 ②還元焰気味、やや軟質 ③灰白色～淡黄色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部 は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。	

## 260号住居跡 (第192・193図、図版40・81)

本住居跡は、第5次調査区南端の西側に傾斜する地形を成す13・14-17・18グリッドに位置している。竈および東壁周辺部を残して西側の大半は、後出する261号住居跡(平安)によって掘り抜かれている。住居の掘り込みは、やや粘質化したローム層中に行われているが、残存状況は非常に悪く範囲は不明瞭で



第192図 260号住居跡実測図

① 暗褐色土 ローム粒(～3mm) 焼土粒(～3mm)と炭化物粒を混じる。

あった。

竪穴部分の形態、規模についての詳細は不明であるが、南北方向は約3m32cmであり、主軸方向は概ねN-76°-Eの方向を示す。壁は最大でも5cmのみで、南の壁は残存しておらず、南東コーナーに設けられたと見られる土坑の位置から範囲を想定した。土坑は径75cmのほぼ円形を呈し、11cmの深さをもつ。貼り床は施されていないものと見られ、柱穴や周溝も認められないと見られる。

覆土は、軽石を含む暗褐色土が見られるだけである。

竈は東壁の南東コーナー寄りに構築されている。遺存状況が不良であり火床面の一部が露出している。燃焼部は壁の内部から外部におよび、幅は45cmを測る。竪穴外への張り出しは60cmが残存している。なお、火床面の焼土化は認められた。

住居跡の残存状況が極めて不良なこともあり、遺物は少量である。



第193図 260号住居跡出土遺物実測図

#### 260号住居跡出土遺物観察表

神田番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備 考
193-1 81	土 師 器 壺	貯蔵穴内 1/2残存	口(18.8) 底 一 高 (8.2)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや軟質 ③赤褐色～明赤褐色	「コ」字状口縁的だが胴部との境界不明瞭。 口縁部横断で、胴部 外面寛削り。内面寛削り。	
193-2	須 恵 器 坏	貯蔵穴内 1/2残存	口(13.2) 底 一 高 (2.7)	①砂粒、雲母 ②還元焰気味、やや軟質 ③灰白色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反する。内外面ともにクロコ整形。	

#### 261号住居跡 (第194～196図、図版40・81・82)

本住居跡は、第5次調査区の南端の西側へ下る緩やかな斜面上にあり、13・14-17に位置している。

重複関係としては、先行する260号住居跡(平安)の西半部を切り込んでおり、また北壁周辺は後出する228号住居跡(平安)によって切られている状況が確認されている。

住居の掘り込みは、黄褐色ローム中に施されているが残存状況が不良であったため確認は困難であった。西壁は土砂の流出によって遺存せず、全体像は不明であるが、長方形に近い平面形をとるものと見られ、主軸方向はN-76°-Eを示す。規模は、南北方向で3m70cmを測る。壁は最もよく残っている東辺でも22cmを測るに過ぎない。床面には貼り床が施されており、竈周辺から床面中央部にかけては強く踏み締められている。床面は平坦面をなし、柱穴、貯蔵穴等の掘り込みは認められなかった。

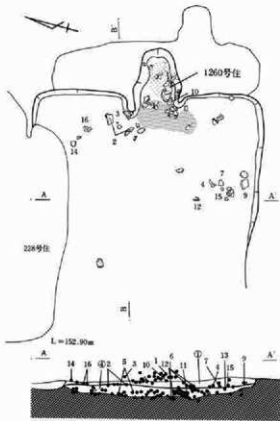
掘り方の掘り込みは、住居の中央部にやや不整な円形の土坑が多く占め、他にも小さな土坑が見られる。西側の細長い窪みは西壁の範囲に対応する可能性もある。

覆土は、2層に分かれ、東壁方向ではいわずゆる三角堆積が見られ、自然堆積の状況を示す。

竈は、東壁のほぼ中央部に築かれている。燃焼部は主に住居の壁外に張り出しているが、焚き口部はほぼ



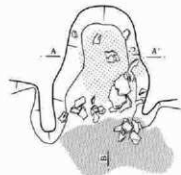
第2節 竪穴住居跡と出土遺物



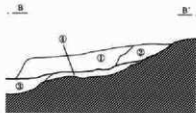
- ① 暗褐色土 ローム粒(～2mm)を多く含み、ロームブロック(～5cm)を混じる。
- ② 暗黄褐色土 ローム粒が多く混じる。
- ③ 暗褐色土 焼土粒(～1cm)炭化物粒(～5mm)を比較的多く含み、(～1cm)のローム粒を多量に含む。
- ④ 暗褐色土 ローム粒(～5mm)炭化物粒(～5mm)と少量の焼土粒(～2mm)とを含み、灰白色礫石と灰黄白色の粘質を含む。



(竪)



L=153.00m



0 1m

竪

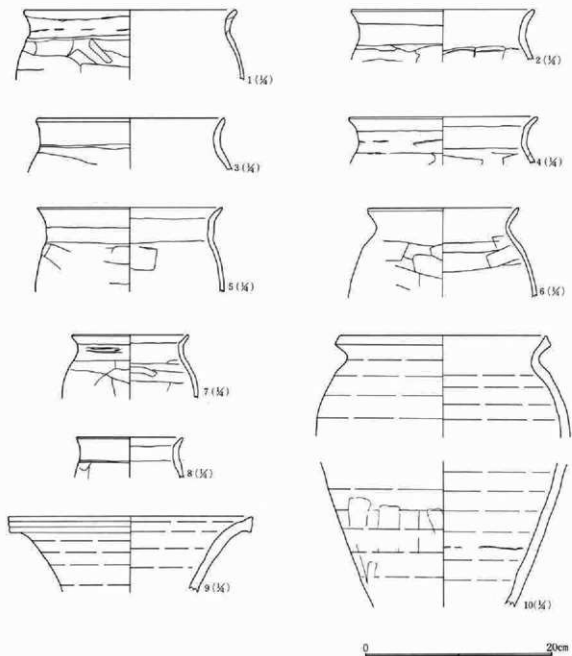
- ① 暗褐色土 ローム粒と少量の焼土粒、炭化物粒を含む。
- ② 暗褐色土 多量の焼土粒とローム粒、炭化物粒を含む。
- ③ 暗褐色土 焼土粒、炭化物粒を含む。
- ④ 焼土粒、地山の灰白色粘土を混じる。

第194図 261号住居跡実測図

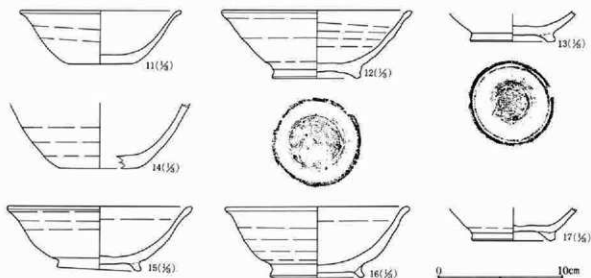
第3章 平安時代の遺構と遺物

壁の位置にあり、僅かながら袖状の張り出しの痕跡も確認された。燃焼部の幅は70cmであり、煙道方向の張り出しは80cmが残存している。火床面は非常に熱を受けており、焼土化が著しい。また焚き口部にかけては、灰が多量分布している。覆土からは竈の天井材の崩落の状況が見られる。

遺物は、竈内の他にその周辺部と南壁際の床面上からも土師器甕や、須恵器の坏・壺が出土している。またこれ以外に掘り方部分の窪みや埋土中からも多量の土器片が出土している。



第195図 261号住居跡出土遺物実測図(1)



第196図 261号住居跡出土遺物実測図(2)

261号住居跡出土遺物観察表

検出番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整・成形技法の特徴	備考
195-1 81	土器 甕	甕内 瓦残存	口(22.8) 底— 高(7.4)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい褐色	崩壊した「コ」字状口縁。口縁部に輪痕を残し、横線で。胴部 外面蹴削り。内面蹴削り。	内面に付着物
195-2 81	土器 甕	床面 瓦残存	口(19.6) 底— 高(5.3)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい褐色	「コ」字状口縁。口縁部横線で。胴部 外面蹴削り。内面蹴削り。	
195-3	土器 甕	床面+12 瓦残存	口(20.2) 底— 高(5.6)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③褐色	崩壊した「コ」字状口縁。口縁部横線で。胴部 外面蹴削り。内面蹴削り。	
195-4	土器 甕	床面 瓦残存	口(20.4) 底— 高(5.6)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい褐色	「コ」字状口縁。口縁部横線で。胴部 外面蹴削り。内面蹴削り。	
195-5 81	土器 甕	振り方中 瓦残存	口(19.6) 底— 高(8.9)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい褐色へにぶい褐色	崩壊した「コ」字状口縁。口縁部横線で。胴部 外面蹴削り。内面蹴削り。	
195-6	土器 甕	振り方中 瓦残存	口(16.2) 底— 高(9.4)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい褐色	崩壊した「コ」字状口縁。口縁部横線で。胴部 外面蹴削り。内面蹴削り。	
195-7	土器 甕	床面 瓦残存	口(12.6) 底— 高(6.8)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい褐色へにぶい褐色	「コ」字状口縁。口縁部横線で。胴部 外面蹴削り。内面蹴削り。	
195-8	土器 甕	覆土中 瓦残存	口(11.4) 底— 高(4.3)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや軟質 ③褐色へにぶい褐色	口縁部は外反して開き、底部は口縁部をなす。内外面ともにクロコ整形。	
195-9 81	須恵器 甕	床面+5 瓦残存	口(26.0) 底— 高(8.0)	①砂粒、白色細粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	「コ」字状口縁。口縁部横線で。胴部 外面蹴削り。内面蹴削り。	
195-10 81	須恵器 甕	甕内 瓦残存	口(22.0) 底— 高(11.1/13)	①砂粒、白色細粒 ②酸化焰気味、やや軟質 ③明褐色～褐色	胴上部に最大径を置き、口縁部は屈曲して短く外反。底部は皿取り。内外面ともにクロコ整形。胴下半部は一部弱い蹴削り。	
196-11 82	須恵器 坏	振り方中 瓦残存	口(13.0) 底(5.2) 高(4.3)	①砂粒～小石、雲母 ②酸化焰気味、やや軟質 ③(外)黒褐色 (内)浅黄色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。内外面ともにクロコ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	

### 第3章 平安時代の遺構と遺物

拝固番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状況 残存状況	法量(cm) (長)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整・成形技法の特徴	備 考
196-12 82	須恵器 高台付埴	掘り方中 残存	口 15.2 底 7.2 高 5.4	①砂粒、白色細粒 ②還元焰味、やや軟質 ③灰色～灰白色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端部はわずかに外反する。内外面ロクロ整形(右回転)。底部は回転未切り無調整。付高台。	
196-13 82	須恵器 高台付埴	掘り方中 底部残存	口 — 底 6.8 高 (2.4)	①砂粒、霏母 ②還元焰成、やや軟質 ③黒色～オリーブ黒色	体部は緩やかに内湾して立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。底部は回転未切り無調整。付高台。	
196-14	須恵器 埴	床面+7 残存	口 — 底 (6.6) 高 (5.2)	①砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰白色	体部は緩やかに内湾して立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。底部は回転未切り無調整。	
196-15 82	須恵器 高台付埴	床面 残存	口 (14.8) 底 6.8 高 5.1	①砂粒～小石 ②還元焰、やや軟質 ③灰色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端部はわずかに外反する。内外面ともにロクロ整形。底部は回転未切り無調整。	
196-16 82	須恵器 高台付埴	床面 残存	口 (14.8) 底 (7.7) 高 5.6	①砂粒、霏母 ②還元焰、やや軟質 ③灰色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端部はわずかに外反する。内外面ともにロクロ整形。底部は削て、付高台。	
196-17 82	須恵器 高台付埴	床面+3 下半部残 存	口 — 底 (6.6) 高 (2.6)	①砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	体部は緩やかに内湾して立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。底部は回転未切り無調整。付高台。	

#### 263号住居跡 (第197・198図、図版41・82・90・96)

本住居跡は、第5次調査区南の緩傾斜地に営まれており、12・13-14・15グリッドに位置している。

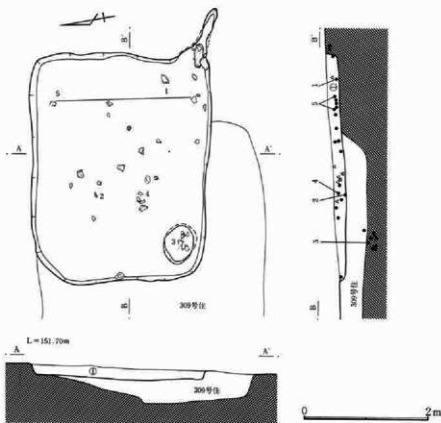
住居は暗灰褐色を呈する粘質土中に掘り込まれており、また西半部は309号住居跡(平安)の上部に重複している。確認段階においてすでに309号住居跡を切り込んで構築されている関係が明瞭に観察されている。

規模は東西3m60cm、南北2m85cmを測り、平面形は長方形を呈する。なお主軸方向は先行する309号住居跡とほぼ同一のN-120°Eを示す。壁は垂直に近く立ち上がり、11cmの残存が見られる。貼り床は確認されておらず、地山の粘質土及び309号住居跡の覆土を叩き締めて使用している。床面はほぼ平坦であるが、南壁際中央部に微高部が認められ、入り口に伴う可能性も窺われる。本住居の床面には、削平された309号住居跡の電の焼土化した断面が露出した状況であった。貯蔵穴は南西コーナーに位置しており、径50cm×60cmのやや楕円形の形状を取り、深さは45cmと深い。柱穴、周溝は認められない。

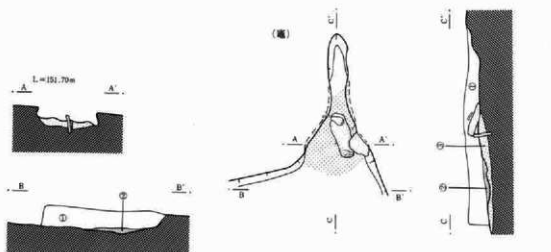
覆土は、やや黒みがあった暗褐色土のほぼ単一の土層よりなる。

竈は南東隅に最も寄った場所に築かれており、斜めに張り出す。燃焼部は壁の外側に突出しており、火床面は非常に熱を受けており、焼土化が著しく硬化している。燃焼部の幅は約50cmであり、中央には樺状の石を地山に突き立てた支脚が遺されていた。右側壁に用いられた石材2つが斜めにずれて、また天井石と見られる板状の石材は崩落したように出土している。煙道部は細長く約60cm残存しており、特に側面部の焼土化が激しい。なお焚き口部周辺には多量の灰が検出されている。

遺物は、全体として少なく覆土中から散漫な状況で出土している。土釜や須恵器・埴類の破片の他に埴輪の破片が出土している。埴輪は226号住居跡から出土したものと同一個体の可能性がある。なお、「測」の墨書がある須恵器の坏底部が貯蔵穴内から出土している。



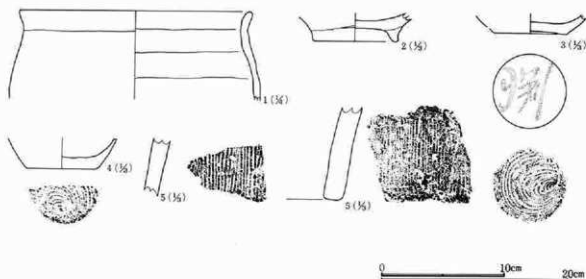
- ① 暗褐色土 ローム粒（～3mm）焼土粒（～2mm）炭化物粒（～2mm）を少量と灰黄白色軽石（～2mm）を含む。やや黒味がかかる。



- ① 暗褐色土 ローム粒、炭化物粒（～2mm）焼土粒（～3mm）と微量の灰白色軽石（～1mm）を含む。  
 ② 灰層  
 ③ 地山焼土化部分

第197図 263号住居跡実測図

### 第3章 平安時代の遺構と遺物



第198図 263号住居跡出土遺物実測図

263号住居跡出土遺物観察表

検出番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (K)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整・成形技法の特徴	備考
198-1 82	土師器 壺	床面+1 片残存	口(25.0) 底— 高(9.4)	①砂粒～小石多量、石英 ②酸化焰、硬質 ③赤褐色～明赤褐色	緩やかに膨らむ胴部から口縁部はわずかに外反して短く立ち上がる。口縁部横撫で。胴部外面は弱い撫で、内面直撫で。	226号住-2と同一個体か
198-2	須恵器 高台付埴	床面 底部残存	口— 底(6.8) 高(2.3)	①砂粒、雲母 ②酸化焰気味、やや軟質 ③による黄褐色	内外面ともにロクロ整形。底部は回転ネ切り無調整。付高台。	
198-3 82・96	須恵器 埴	貯蔵穴内 底部残存	口— 底5.9 高(1.6)	①砂粒～小石、白色細粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転ネ切り無調整。	底部に墨書「洞」
198-4	須恵器 埴	床面+12 片残存	口— 底(5.8) 高(2.5)	①砂粒、雲母 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転ネ切り無調整。	
198-5 90	埴 輪	床面+5 破片	口— 底— 高(7.4)	①砂粒～小石 ②酸化焰、やや硬質 ③明赤褐色～橙色	外面は縦方向のハケ目。内面は弱い撫で調整。	同一個体

#### 264号住居跡 (第199・200図、図版21・82・93)

本住居跡は、第4次調査区の南東部の緩傾斜部分にあり、16・17-30グリッドに位置する。

重複関係としては、後出する122号住居跡(平安)によって北西方向を破壊されている状況が確認されている。

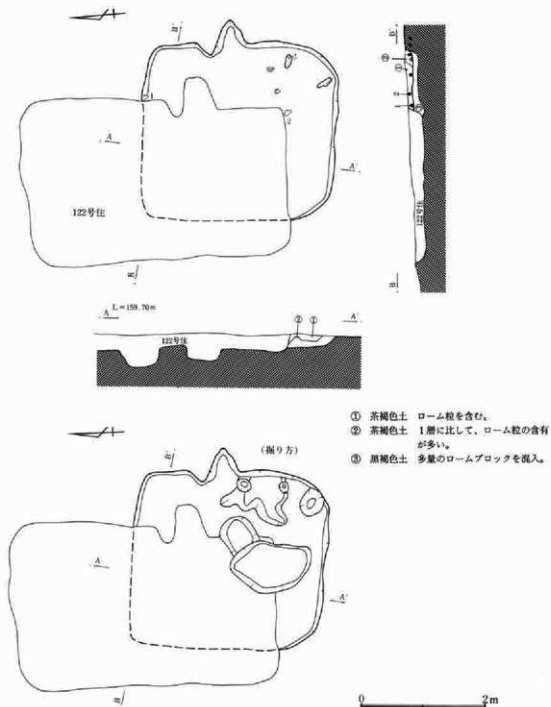
住居の掘り込みは、黄褐色ローム層に及ぶが、重複関係と周辺の擾乱により確認は困難であった。平面形は、東西3m38cm、南北3m14cmのほぼ正方形を呈するものとみられる。壁は、垂直気味に立ち上がり、32cmが残存する。床面は一部を除き直接ローム面を叩き締めて使用しているが、全体的にやや軟弱といえる。貯蔵穴や柱穴、周溝は検出されなかった。

床下には、幾つかの掘り込みが認められた。床面中央部には、120cm×80cm、深さ15cmの楕円形を呈する摺鉢状の土坑が検出された。またこれと重複する土坑も認められた。南東コーナー部分には小さい円形ピットが掘り込まれているが、規模等からみて貯蔵穴とは考えられない。

覆土は、122号住居跡との重複関係によりわずかに観察されたのみだが、3層に分層された。

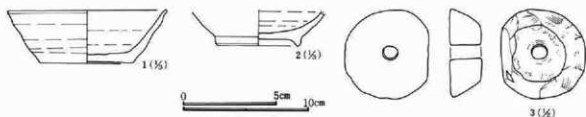
竪は、東壁の中央よりもやや北側に寄った位置に構築されている。燃焼部は壁の外側に張り出しているが、状況的に焚き口部はやや壁の内側になるものと想定される。残存する燃焼部の幅は45cmであり、壁の外側への張り出しは47cmを測る。燃焼部の焼土化はさほど顕著ではない。

遺物量は、全体に少なく、南東部分で坏・埴等の破片が出土している。また、このほかに石製の紡錘車が出土しており、注目される。



第199図 264号住居跡実測図

第3章 平安時代の遺構と遺物



第200図 264号住居跡出土遺物実測図

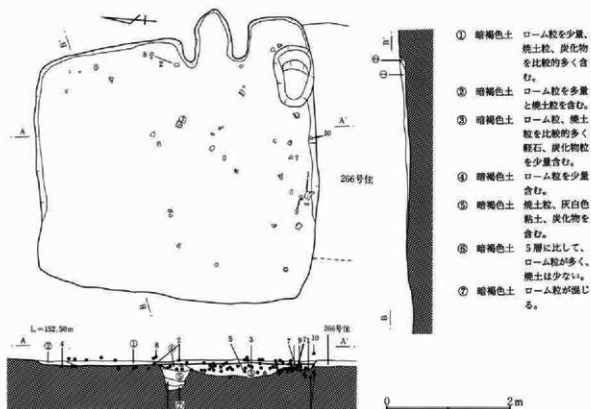
264号住居跡出土遺物観察表

採掘番号 図版番号	土器類別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (#)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整・成形技法の特徴	備考
200-1 82	須恵器 坏	床面 片残存	口(12.8) 底(7.6)	①砂粒、白色細粒 ②還元焼、硬質 ③青灰色	体部はほぼ直線的に立ち上がる。内外面クロコ整形(右回転)。底部は回転余切り無調整。	高 4.1cm
200-2	須恵器 高台付埴 瓦残存	床面+6 片残存	底(6.7) 高(2.8)	①砂粒、骨母 ②酸化焼気 味、やや軟質 ③灰白色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面クロコ整形。底部は回転余切り無調整。付高台。	
200-3 93	石製 紡錘車	覆土中 完形	径 4.65/2.95 孔径 0.70 厚 1.79 重 60.3		断面台形。正面の他、狭面にも同心円状の磨減あり。穿孔は下方からか。	滑石質の蛇紋岩

265号住居跡 (第201~203図、図版42・82・91)

本住居跡は、第5次調査区の南端部の緩傾斜地に築かれており、13・14-16・17グリッドに位置している。重複関係としては、先行する266号住居跡(平安)を切り込んでいる状況が確認されている。

住居の掘り込みは、やや粘質化した黄褐色ローム層まで行われている。全体に残存状況は不良であり、殊に西壁は遺っておらず床面の状況からろうじて範囲を確認し得た。やや正方形に近い形状をとり、規模は



第201図 265号住居跡実測図(1)



## 第2節 竪穴住居跡と出土遺物

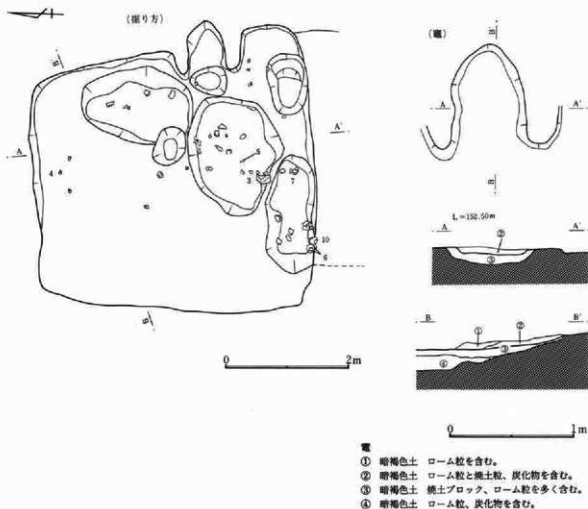
東西4m47cm、南北4m50cmを測る。主軸方向はN-81°-Eを示す。壁は僅かに遺存するのみで、最大でも3cmが認められたのみである。床面は基本的にはローム面を直接使用しているが、部分的には貼り床も見られる。貯蔵穴は南東コーナーに設けられており、66cm×98cmの楕円形を呈する。底面はわずかに段を成し、最深部は27cmを測る。柱穴や周溝は検出されなかった。

掘り方面の東南部は起伏に富んでおり、東・南の壁際、竈前部に不整形形の浅い摺鉢状の土坑がみられる。これに対して北西部は比較的平坦面をなす。

覆土は、2層に分層され壁際には三角堆積の発達が認められた。

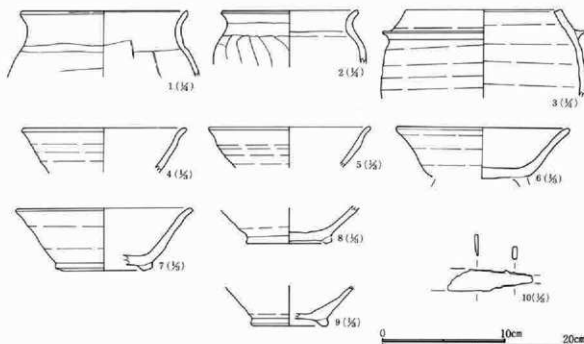
竈は東壁中央よりも南寄りの位置に築かれている。焚き口部は壁の内側にあり、わずかに袖の痕跡と見られる隆起が確認されている。燃焼部は壁の内側から外にわたり張り出している。焚き口部の幅は45cm、煙道方向の張り出しは68cmが認められる。火床面はさほど焼土化していないが、焼土粒・炭化物粒は多量検出されている。

遺物は、床面上に散乱した状況で出土している。須恵器の境が多いがいずれも残存率は低い。また鉄製の刀子が南壁際で出土した。なお掘り方埋土中からも多数の土器小片が出土した。



第202図 265号住居跡実測図(2)

第3章 平安時代の遺構と遺物



第203図 265号住居跡出土遺物実測図

265号住居跡出土遺物観察表

採回番号 図版番号	土器類別 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
203-1	土師器 壺	床面+8 瓦残存	口(17.8) 底— 高(7.0)	①砂粒~小石 ②酸化焰、やや軟質 ③明赤褐色~橙色	崩壊した「コ」字状口縁。口縁部狭無で。胴部外面磨削り。内面瓦無で。	
203-2 82	土師器 壺	床面~+13 瓦残存	口(14.5) 底— 高(5.7)	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③赤褐色~明赤褐色	口縁部は「く」字に短く外反する。口縁部狭無で。胴部外面磨削り。内面瓦無で。	内面に付着物
203-3 82	須恵器 羽釜	掘り方中 瓦残存	口(16.7) 底— 高(9.3)	①砂粒~小石 ②酸化焰気味、やや軟質 ③灰白色~淡黄色	口縁部はわずかに内傾し、肩部は強い面取り。内外面ともにロクロ整形。	
203-4	須恵器 坏	床面 瓦残存	口(13.2) 底— 高(3.5)	①砂粒 ②強し焼成、やや軟質 ③黒色~オリーブ黒色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。	
203-5	須恵器 坏	掘り方中 瓦残存	口(13.0) 底— 高(3.2)	①砂粒~雲母 ②酸化焰気味、やや軟質 ③にぶい黄褐色~にぶい黄褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。	
203-6 82	須恵器 高台付埴	掘り方中 瓦残存	口14.0 底7.3 高4.0	①砂粒~小石、白色細粒 ②還元焰気味、やや軟質 ③灰白色	体部は外反して立ち上がる。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。付高台の痕跡。	
203-7 82	須恵器 高台付埴	床面+4 ~掘り方中 瓦残存	口(14.2) 底— 高4.9	①砂粒、雲母 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	体部はやや外反して立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。付高台。	
203-8 82	須恵器 高台付埴	床面+12 瓦残存	口— 底(6.8) 高(2.7)	①砂粒、白色細粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。付高台。	
203-9 82	須恵器 高台付埴	床面+3 瓦残存	口— 底(6.2) 高(3.1)	①砂粒 ②酸化焰気味、やや軟質 ③黄褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。付高台。	
203-10 91	鉄製品 刀子	床面+15	長6.8 幅1.7		両端部を欠損する。刃部は尖鋭。	

## 266号住居跡 (第204・205図、図版42・82・91)

本住居跡は、第5次調査区南端の西側へ向かう緩傾斜部にあり、12・13-16・17グリッドに位置している。重複関係としては、北壁周辺部が後出する265号住居跡(平安)によって切られていることが確認されている。

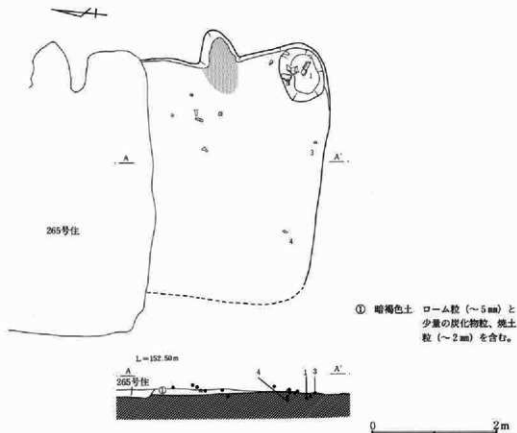
住居の掘り込みは、黄褐色ローム層中に施されているが、上面の浸食が著しく残存状況は不良である。殊に西壁については検出し得なかった。

平面形は、265号住居跡により北辺を破壊されていることから、全貌は知り得ないが、長方形のプランを呈するものと思われる。東西方向は3m70cmを測り、主軸方向はN-79°-Eを示す。壁は東壁でわずか1cmが確認されたにとどまり、また南側は床面の範囲のみが確認された。床面はローム面を直接使用しており、貼り床は施されていない。平坦な床面を成すがさほど踏み固められてはおらず、やや軟弱といえる。貯蔵穴は南東コーナーに掘り込まれており、80cm×88cmの長方形で、22cmの深さをもつ。なお柱穴や周溝などの施設は見られない。

覆土は若干確認されたにすぎず、埋没状況は窺われない。

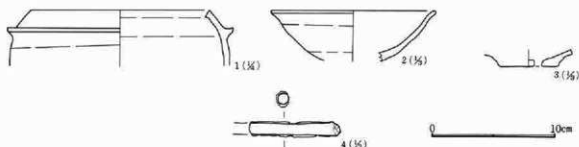
竪は東壁に構築されている。焚き口部は竪穴内部にあり、燃焼部は壁の内側から外側にかけて設けられている。燃焼部の幅は60cmを測り、竪穴からの張り出し方向は50cmが残存する。最終使用面には薄く灰の分布が見られるが、焼土化はあまり顕著ではない。

遺物は、住居の残存状況が極めて不良なこともあり少量の破片が出土しているにとどまる。耳皿や鉄製の刀子がみられる。



第204図 266号住居跡実測図

### 第3章 平安時代の遺構と遺物



第205図 266号住居跡出土遺物実測図

#### 266号住居跡出土遺物観察表

標頭番号 図版番号	土器種類 種	出土状況 残存状況	法量(cm) (#)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
205-1 82	須恵器 羽 釜	貯蔵穴内 片残存	口(19.2) 底 一 高(5.9)	①砂粒、雲母 ②酸化焙気味、やや軟質 ③にぶい褐色~にぶい橙色	口縁部は内傾し、端部は強い面取りで下方を向く。脚の上端は弱い面取り。内外面ともにロクロ整形。	
205-2	須恵器 埴 埴	覆土中 片残存	口 一 底 4.8 高(1.3)	①砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。	
205-3 82	須恵器 耳 皿	床面 片残存	口(13.2) 底 一 高(3.9)	①砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	内外面ともにロクロ整形。底部は回転糸切り無調整。底部中央に上方から焼成前の穿孔。	
205-4 91	不 明 鉄 製品	掘り方中 か	長 7.3 径 0.9		丸棒状の鉄製品。端部は細かい面取り状の調整が施される。	

#### 266号住居跡(第206・207図、図版43)

本住居跡は、第5次調査区南端の東西に入る谷に面した傾斜地にあり、10・11-10・11グリッドに位置する。

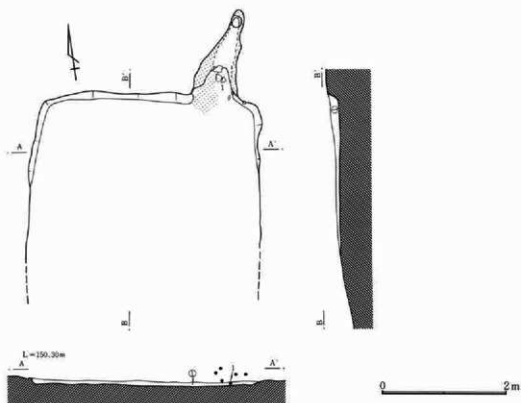
重複関係としては、16号住居状遺構の覆土を切り込んで竈が構築されている状況が確認された。

住居の掘り込みは砂礫まじりの暗灰褐色粘質土中に施されており、確認は困難であった。南半部は南側の谷の浸食により遺存しない。全体の形状は不明であるが、東西は3m32cmを測り、主軸方向はN-30°-Eを示すものと見られる。傾斜の関係で最も壁が残存する北壁はほとんど垂直に立ち上がっており、高さは23cmである。床面は貼り床は施されず地山を直接使用しているが、湧水の関係で湿気を帯びる。貯蔵穴や柱穴、周溝は認められなかった。

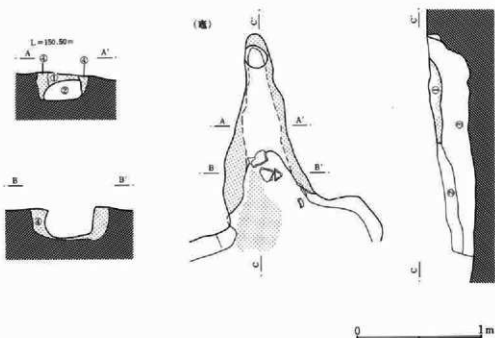
覆土は、砂礫を含まないが地山に類する粘質土1層であり、区分が困難であった。

竈は、北壁の北東コーナー際に構築されている。焚き口部は竈穴内部にあり、燃焼部は壁際から外側にわたり、煙道は長く突出している。地山の粘質土は非常に過熱を受け赤化・硬化が著しく、くりぬかれた煙道の天井部が残存している。煙道の側面は焼土化しており、また煙出しの径18cmの孔も認められた。燃焼部も著しく焼けている。燃焼部の幅は70cm、煙道方向の張り出しは1m50cmを測る。

出土した遺物は、非常に少量であり、須恵器の羽釜や埴埴の破片が知られるにとどまる。



① 黒褐色土 ローム（～1cm）を比較的多く含む。焼土粒（～5mm）を少量含む、やや茶色がかる。



電

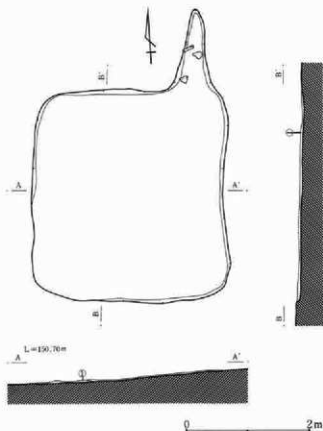
① 暗褐色粘性土 灰白色礫石（～2mm）と焼土粒（～2mm）を含む。② 暗褐色土 灰黄白色礫石、焼土粒、ローム粒（～2mm）を比較的多く含む。③ 1層に比して、多量の灰黄白色ロームブロックと焼土粒（～3mm）を含む。④ 地山焼土化。



第207図 268号住居跡出土遺物実測図

268号住居跡出土遺物観察表

跡図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
207-1	土器器 蓋	竈内 互残存	口 — 底 (10.0) 高 (8.0)	①砂粒～小石、白色細粒 ②酸化鉛、やや軟質 ③明赤褐色	外面磨り。内面無磨で。底部は多量の砂粒～小石が付着する砂底。	
207-2	須志器 坏	覆土中 互残存	口 (13.0) 底 — 高 (3.3)	①砂粒、雲母 ②還元鉛灰味、やや軟質 ③におい黄褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。内外面ともにクロコ整形。	
207-3	須志器 高台付椀	覆土中 3/6残存	口 (10.8) 底 (6.6) 高 4.2	①砂粒、雲母 ②酸化鉛灰味、やや軟質 ③明褐色～橙色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。内外面ともにクロコ整形。付高台。	



① 明褐色土 ローム層 (~1cm) を含む (やや茶色がかかる)。

第208図 269号住居跡実測図

## 269号住居跡 (第208・209図、図版44)

本住居跡は、第5次調査区南端の緩傾斜地にあり、12・13-10・11グリッドに位置している。

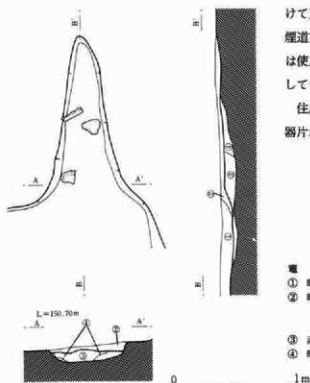
他の住居との重複関係は見られない。

住居の掘り込みは暗灰褐色粘質ローム層中に施されているが、明瞭に確認された。規模は東西3m35cm、南北3m10cmを割り、平面形は長方形を呈する。なお主軸方向はN-7'-Eを示す。残存状況は不良であり、壁高は最大でも6cmを測るにすぎない。床面は貼り床が施されておらず、直接地山の粘質ローム面を叩き締めて使用している。平坦な床面には貯蔵穴や柱穴、周溝は、設けられていない。

覆土は僅かに遺存するのみであり、草根の擾乱が著しい。

竈は北壁の北東コーナーに寄って構築されている。燃焼部は壁の内側から外側に

## 第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第209図 269号住居跡実測図

けて及び、煙道部は長く突出する。燃焼部の幅は60cm、煙道方向への張り出しは細長く1m45cmを測る。燃焼部は使用の痕跡が顕著であり、火床面下10cmほどが焼土化している。

住居の残存状況が極めて不良で、平安時代に属する土器片が数点出土したものの図示し得なかった。

### 電

- ① 暗褐色土 灰白色軽石を少量含む。
- ② 暗褐色土 1層に比し、灰黄色がかる。焼土粒（～5mm）を比較的多く、ローム粒（～2mm）炭化物粒（～2mm）と少量の軽石を含む。
- ③ 赤化硬化した粘質土。
- ④ 暗褐色土 軽石（～2mm）焼土粒（～2mm）を若干含む。

## 270号住居跡（第210・211図、図版44・82）

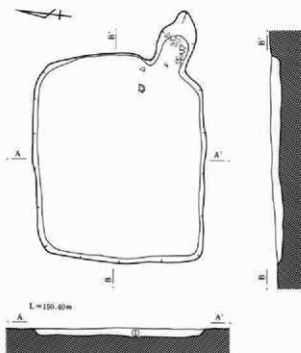
本住居跡は、第5次調査区南部の西側へ下る緩斜面がほぼ平坦面をなす所にあたり、13・14-9・10グリッドに位置する。

他の住居との重複関係は認められない。

住居の掘り込みは粘質の灰黄褐色ローム層中に施されており、明瞭に確認された。長方形の平面形を取り、規模は東西3m35cm、南北2m80cmを測る。主軸方向はN-80°-Eを示す。壁の下端はやや開きみであるが、徐々に垂直に近く立ち上がる。最大で15cmが残存する。床面はローム面を直接使用しておりやや軟弱であるが、平坦面を成し、柱穴や貯蔵穴、周溝は検出されなかった。

覆土は1層であり、草根の浸入により攪乱が著しい。

竈は東壁のほぼ南東コーナーに寄った位置に築かれている。燃焼部、煙道部は壁の外側へ張り出している。燃焼部の幅は54cmを測り、煙道方向の張り出しは90cmが遺る。燃焼部は火熱を受け焼土



- ① 黒褐色土 少量のローム粒子を含み、しまりは弱い。

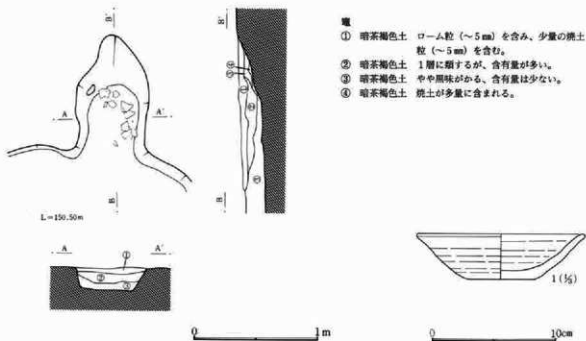
0 2m

第210図 270号住居跡実測図

### 第3章 平安時代の遺構と遺物

化が顕著である。

出土遺物は、土器片が竈内から出土しているのみで、非常に少量である。しかし、覆土内から須恵器の坏が出土した。



第211図 270号住居跡竈および出土遺物実測図

#### 270号住居跡出土遺物観察表

棟号 図版番号	土器種別 器 種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (#)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備 考
211-1 82	須恵器 坏	覆土中 片残存	口 13.4 底 5.8 高 3.6	①砂粒、雲母 ②酸化鉛気味、やや硬質 ③にぶい黄褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。内外面ともにクロコ整形。底部は回転糸切り無調整。	

#### 271号住居跡（第212図、図版44）

本住居跡は、第5次調査区西南端の比較的平坦な部分を占め、14・15-7・8グリッドに位置する。

先行する275号住居跡（平安）の南壁の上部分を切っている関係が、土層観察により認められた。

住居の掘り込みは、黄褐色ローム層中に行われており、明瞭に確認された。東西2m83cm、南北3m62cmの横長の長方形の平面形を取り、主軸方向はN-80°-Eを示す。壁は、最大で9cm程が残存しているにすぎない。床面はローム面を直接平坦化して使用しているが、中央部がやや堅く踏み締まっているほかは、全体にやや軟弱といえる。なお柱穴、周溝や貯蔵穴などは認められなかった。

覆土は僅かに残存する程度であり、締まりかける。

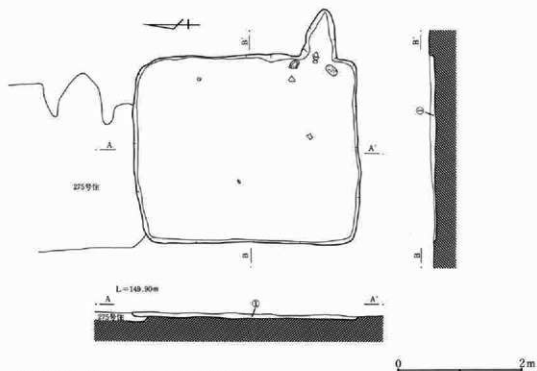
竈は、東壁のほぼ南東コーナーに寄った位置に構築されている。焚き口部はほぼ壁のラインにあり、左右両袖にあたる砂岩製の切石が上部は欠損しているものの、埋設された状況で残存していた。焚き口部の幅は



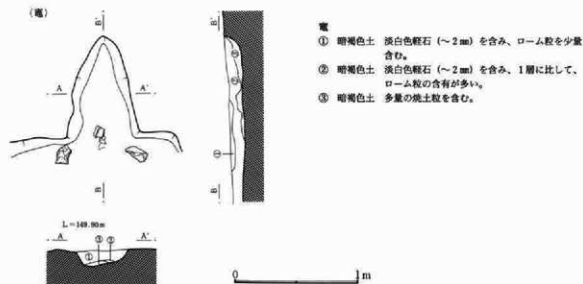
## 第2節 竪穴住居跡と出土遺物

42cmを測り、燃焼部の幅もほぼこれに等しい。燃焼部は壁の外側に張り出しており、煙道方向の張り出しは98cmが残存している。なお竪内の焼土化はさほど顕著でない。

遺物は、土釜の小破片(263号住居跡1)と同一固体の可能性あり)が出土しているが図示し得なかった。



① 黒褐色土 少量のローム粒子を含み、練まりが弱い。



第212図 271号住居跡実測図

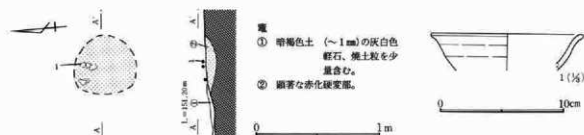
### 第3章 平安時代の遺構と遺物

#### 272号住居跡 (第213図、図版45)

本住居跡は、第5次調査区で確認された埋没谷南縁のほぼ中間地域にあり、14・15-12・13グリッドに位置している。

竈の火床面のみが残存しており、径54cm×42cmの範囲で確認された。住居の全体像は把握できないが、西方向へ下がる傾斜の状況からは、東に竈を有する可能性がある。火床面の焼土化は非常に顕著である。

遺物は、須恵器の坏の小破片が出土した。



第213図 272号住居跡および出土遺物実測図

#### 272号住居跡出土遺物観察表

埋没番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (径)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備 考
213-1	須恵器 坏	竈内 に残存	口(12.2) 底一 高(2.9)	①砂粒、雲母 ②酸化焙焼味 ③にぶい黄色～浅黄色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。	

#### 274号住居跡 (第214・215図、図版45・82)

本住居跡は、第5次調査区南西、埋没谷南縁の緩傾斜部にあり、14・15-8グリッドに位置している。

重複関係としては、東壁竈周辺部は273号住居跡(奈良)の覆土上面に築かれ、また同部分周辺は229号住居跡(平安)によって破壊されていると想定される。

竈穴は埋没谷周縁部に発達したやや粘質なローム層中に掘り込まれている。

ほぼ正方形に近い平面形を呈する竈穴部分は、東西2m77cm、南北3m20cmを測り、垂直気味に立ち上がる壁は21cmの高さが残存している。主軸方向はN-110°-Eを示すものとみられる。床面は貼り床が施され平坦化されているが、中央部以外はやや軟弱である。なお柱穴、周溝、貯蔵穴などは掘り込まれていない。

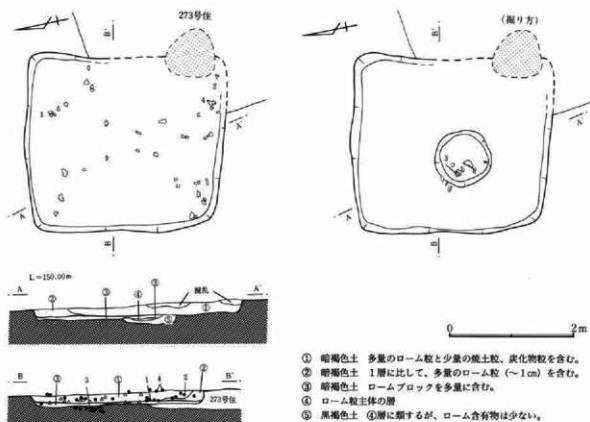
掘り方は、概ね平坦である。中央やや西寄りには径90cm、深さ9cmの円形の土坑が検出された。

覆土は2層に分けられ、自然堆積状況を示している。

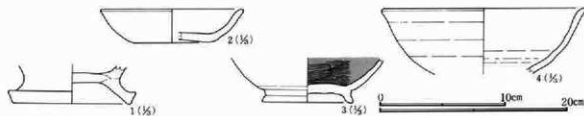
竈は、229号住居跡により大部分壊されているようだが、東壁の南東隅に近い部分で焼土の分布が確認されており、竈の痕跡の可能性が高い。

遺物は、ほとんどが覆土中から出土しており、また掘り方部分の土坑内からも小破片が出土した。いずれも残存率は低い。

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第214図 274号住居跡実測図



第215図 274号住居跡出土遺物実測図

274号住居跡出土遺物観察表

押図番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状況 残存状況	法量(cm) (R)	①粘土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備 考
215-1 82	須恵器 高台付瓶	床面 瓦残存	口 — 底(12.6) 高(4.0)	①砂粒 ②還元焼、硬質 ③灰色	高台部は「ハ」字に開き端部は断面三角形に張り出す。内外面ともにロクロ整形。	高台端部と内面底部に、自然降灰の軸
215-2 82	須恵器 坏	床面+6 瓦残存	口(11.4) 底(6.6) 高(2.7)	①砂粒、雲母 ②酸化焼、やや軟質 ③黄褐色～にぶい黄色	体部はやや内筒気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
215-3	須恵器 高台付埴	床下土坑 下半部残存	口 — 底 7.2 高(3.4)	①砂粒、雲母 ②酸化焼、 やや軟質 ③(外)にぶい黄色 (内)黒色処理か	体部は緩やかに内筒して立ち上がる。外面ともにロクロ整形。内面磨き。底部磨で。付高台。	
215-4	須恵器 埴	床面+15 瓦残存	口(16.2) 底 — 高(5.2)	①砂粒～小石 ②酸化焼、やや軟質 ③にぶい黄色～浅黄色	体部は緩やかに内筒して立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。	器面一部新磨

### 第3章 平安時代の遺構と遺物

#### 275号住居跡 (第216図、図版46)

本住居跡は、第5次調査区西南端部の崖線部に迫った15-7・8グリッドに位置する。台地の末端部にあたるが、周辺は比較的平坦な面をなしている。

重複関係としては、北壁周辺を276号住居跡(平安)に、南壁を271号住居跡(平安)によって掘り込まれている状況が土層観察の結果確認されている。

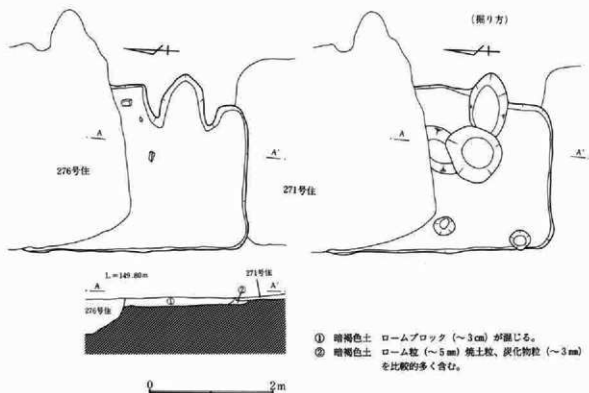
本住居跡は、276号住居跡との重複により全体像は把握できないが、平面形は長方形を呈し、主軸方向はN-85°-Eを向くものと見られる。規模は東西方向2m57cmだが、南北方向は不明である。全体的に残存状況は不良であるが、壁の高さは12cmが確認された。竪穴部分は黄褐色ローム層を掘り込んでおり、床面は貼り床を施さず直接ローム面を使用しているが全体にやや軟弱である。床面残存部分においては柱穴、周溝などは検出されなかった。

掘り方としては、竪前部にある径90cmの円形の土坑が特徴的である。また、これと重複して浅い皿状の窪みも見られる。

覆土は僅かに確認されたのみであり詳細は不明であるが、三角堆積が形成された痕跡は確認された。

竪は東壁の中央よりも南寄りに築かれている。遺存状況は悪いが、焼土化した範囲からみて燃焼部は竪穴の壁の内外にわたることが確認された。この両端には袖の痕跡とみられる微高な部分も検出されているが、やや不明確である。燃焼部の長軸は42cmであり、先端は壁外に張り出すが、煙道は残存していない。竪の掘り方は摺鉢状の掘り込みになっている。

遺物は出土していないが、住居の形態等から平安時代に属するものと考えられる。



第216図 275号住居跡実測図

## 276号住居跡 (第217~220図、図版46・82・83)

本住居跡は、第5次調査区西南隅の平坦面に築かれている。西側の崖線に近接する15・16-7・8グリッドに位置している。

275号住居跡(平安)と重複するが、土層断面の観察からは本住居が後出することが知られる。

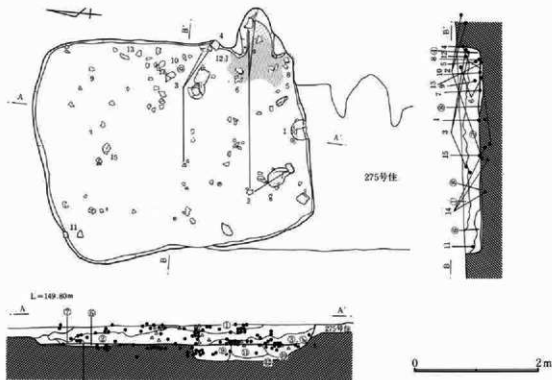
住居の掘り込みは、黄褐色ローム層中に施されており明瞭に確認された。

竪穴部の平面形は長方形を呈し、主軸方向はN-80°-Eを示しており、また規模は東西3m50cm、南北4m36cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がっており、22cmが残存している。床面はロームブロックを主として薄く貼り床が施されており、平坦面をなす。全体的に良く締まっており、殊に床面中央部周辺や竪穴前は堅硬である。なお貯蔵穴、柱穴や周溝は検出されなかった。

掘り方面には複数の円形の摺鉢状の窪みが見られる。南西コーナー部分の土坑は直径90cmの円形を呈し、貯蔵穴の可能性もある。

覆土は、自然堆積状況を示しており、5層に分層される。

竪は、東壁の東南隅に最も寄った位置に構築されている。燃焼部は壁の内部からやや外部にまで張り出ししており、煙道はさらに突出するようであるが残存していない。燃焼部の幅は54cm、張り出し方向の長さは60



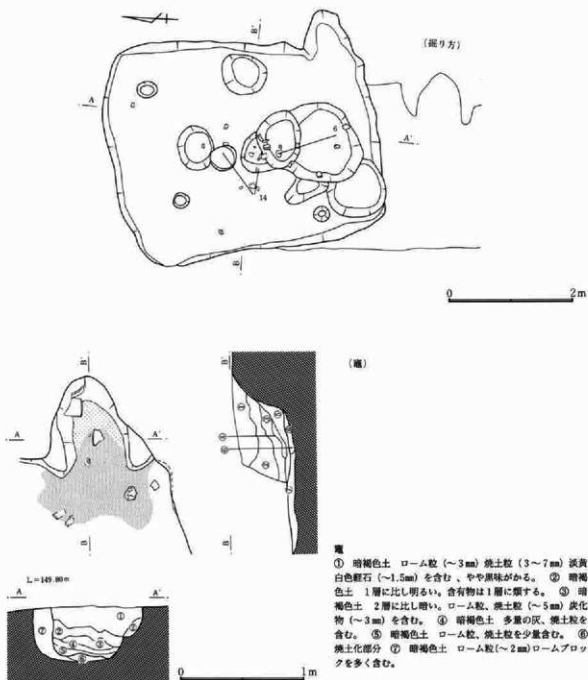
- ① 暗褐色土 ローム粒(～3mm)少量と、灰白色軽石(～1.5mm)を多量に含む。炭化物、焼土粒(～2mm)は微量。② 暗褐色土 1層に比して暗い、ローム粒(～1cm)を多量に含む。軽石、焼土粒、炭化物粒(～2mm)を少量含む。③ 暗褐色土 1層に比して、やや暗い、ローム粒(～5mm)を多量に含む。(2層より多い)軽石はほとんど含まれない。④ 暗褐色土 ローム粒を少量含む、含有物はみられない。⑤ 暗褐色土 多量のローム粒(～3mm)を含む。⑥ 暗褐色土 ローム粒(～2mm)を少量含む、上層に比し、細かい粒子を含む、やや異味がある。⑦ 暗褐色土 多量のローム粒(～3mm)を含む。⑧ 暗褐色土 ロームブロック(～3mm)を張じる。⑨ 暗褐色土 ローム粒(～5mm)焼土粒(～3mm)炭化物粒(～7mm)を多く含む。⑩ 暗褐色土 多量にローム粒～小ブロック(～2cm)を張じる。やや灰黄色がある。⑪ 暗褐色土 ローム粒(～1cm)を比較的多く含む。⑫ 暗褐色土 ローム粒主体。

第217図 276号住居跡実測図(1)

### 第3章 平安時代の遺構と遺物

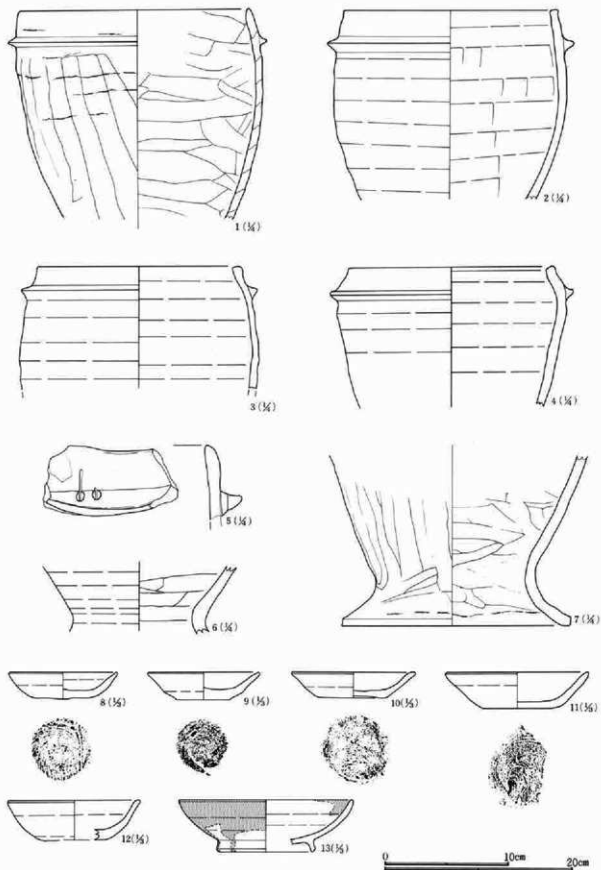
cmを測り、深さは40cmと良好な残存状況がある。火床面は非常に火熱を受けており、焼土化が著しい。また、焚き口部にかけては灰層の分布が見られる。

遺物は、床面上に散乱しているほかに、覆土中にも多量の土器片が分布している。須恵器・羽釜・甗や塊、小形の皿、灰釉陶器の塊が出土した。



第218図 276号住居跡実測図(2)

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第219図 276号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物



0 10cm

第220図 276号住居跡出土遺物実測図(2)

276号住居跡出土遺物観察表

詳細番号 図版番号	土器類別 器	出土状況 残存状況	法量(cm) (ま)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
219-1 83	須恵器 羽蓋	床面 写残存	口 24.6 底 — 高 (22.2)	①砂粒~小石 ②酸化焰、やや軟質 ③褐色	口縁部はわずかに内傾し、端部は丸くおさめ る。口縁部横撫で。胴部 外面強い直削り、 輪襷痕を残す。内面は広い直撫で。	内面に付着物 外面に保付着
219-2 83	須恵器 羽蓋	床面+20 写残存	口(22.4) 底 — 高(20.0)	①砂粒~小石、雲母 ②酸化焰、やや軟質 ③褐色	口縁部はわずかに内傾し、端部は面取り。胴 は断面三角形でやや歪む。口縁部横撫で。胴 部内外面ともにロクロ整形。	内面に付着物 外面に保付着
219-3 83	須恵器 羽蓋	床面+20 写残存	口 22.0 底 — 高(13.0)	①砂粒 ②酸化焰気味、やや軟質 ③にぶい褐色	口縁部はわずかに内傾し、端部は面取り。内 外面ともにロクロ整形。	内面に付着物
219-4 83	須恵器 羽蓋	床面+20 写残存	口 22.0 底 — 高(14.8)	①砂粒~小石 ②還元焰気 味、やや軟質 ③(外)灰白 色 (内)にぶい黄褐色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。 内外面ともにロクロ整形。	内外面に保付着 電材への転用
219-5 83	須恵器 羽蓋	床面+6 口縁部破 片	口 — 底 — 高(5.0)	①砂粒~小石 ②酸化焰、やや硬質 ③褐色	口縁部はわずかに内傾し、端部は丸くおさめ る。口縁部横撫で。内面直撫で。胴の張り出し は大きく、2孔一対の穿孔(上方から)あり。	
219-6 83	須恵器 瓶	床面+10 写残存	口 — 底 — 高(7.2)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③明赤褐色	胴下部から頸部は屈曲する。内外面ともにロ クロ整形。	
219-7 83	須恵器 瓶	床面 下半部残 存	口 — 底 24.5 高(18.0)	①砂粒~小石、白色細粒 ②酸化焰、やや硬質 ③褐色	胴部から頸は緩やかに屈曲して外反する。外 面直削り。内面広い直撫で。	
219-8 82	須恵器 皿	床面 写残存	口(8.6) 底 4.6 高 2.1	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③明赤褐色~褐色	体部はほぼ直線的に開き、端部はやや外反。 内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回 転糸切り無調整。	
219-9 82	須恵器 皿	床面+8 口縁部欠 損多	口 9.0 底 4.3 高 2.1	①砂粒、雲母、褐色粒子 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい黄褐色	体部はほぼ直線的に開き、端部はやや外反。 内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回 転糸切り無調整。	
219-10 82	須恵器 碗	床面 完形	口 10.0 底 5.5 高 2.0	①砂粒~小石、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③明赤褐色~褐色	体部はやや内湾気味に開き、口縁部は小さ く外反する。内外面ともにロクロ整形(右回 転)。底部は回転糸切り無調整。	
219-11 82	須恵器 杯	床面+8 写残存	口 11.4 底 5.6 高 2.9	①砂粒、雲母 ②還元焰気味 ③淡黄色大半が黒変	体部は直線的に開く。内外面ともにロクロ整 形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
219-12 82	須恵器 杯	床面+25 写残存	口(10.6) 底(5.2) 高 3.1	①砂粒、雲母 ②還元焰気味、やや軟質 ③淡黄色~淡黄色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部 は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。	
219-13 83	須恵器 高台付埴	床面 写残存	口(14.0) 底(7.9) 高 4.1	①締密 ②還元焰、堅緻 ③灰白色	体部は緩やかに内湾して立ち上がる。内外面 ともにロクロ整形。高台部はやや強い直撫で。 張り掛け。	
220-14 83	須恵器 高台付埴	掘り方中 写残存	口(14.1) 底(6.2) 高(4.6)	①砂粒 ②還元焰、軟質 ③灰白色~淡黄色	体部は外反気味に立ち上がる。内外面ともに ロクロ整形。付高台。	
220-15 83	須恵器 高台付埴	床面写残 存	口 15.2 底 7.2 高 6.5	①砂粒、雲母 ②還元焰、 やや硬質 ③(外)明褐色 (内)黒色処理	体部は緩やかに内湾して立ち上がる。外面と ともにロクロ整形。底部は直撫で。付高台。	



## 277号住居跡 (第221~224図、図版47・83・84)

本住居跡は、第5次調査区南西部の埋没谷南縁部のほぼ平坦な地点にあり、16・17-7グリッドに位置する。

先行する312号住居跡(古墳後期)と近接するが、重複関係は認められない。

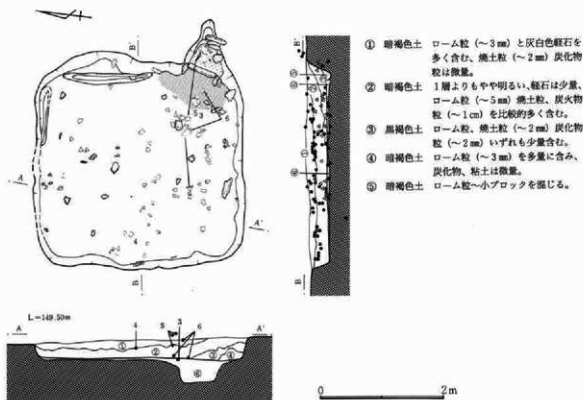
住居の掘り込みは、埋没谷埋土である暗茶褐色粘質土中に施されているが、明瞭な状況で検出されている。東西3m40cm、南北3m32cmの正方形に近い形状を呈し、主軸方向はN-80°-Eを示す。壁の残存状況は良好であり36cmを測る。床面は僅かに貼り床が施されており、堅く踏み締められており、特に中央部周辺は顕著である。床の南西部には径74cmのほぼ円形の掘り込みが見られ、貯蔵穴の可能性がある。また北東コーナー付近の壁際には幅16cm、深さ8cmほどの周溝が検出された。なお柱穴は認められない。

掘り方面は比較的平坦で、複数的小ピットが検出されたものの大部分は本住居には伴わない後出するものである。

覆土は4層に分層され、自然堆積状況を示している。

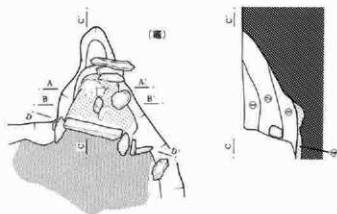
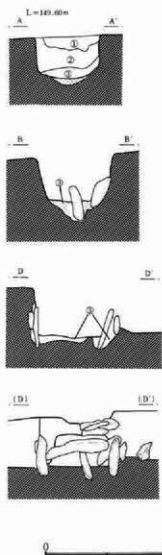
竈は、東壁の南東コーナーに寄った位置に構築されている。焚き口部は壁際になり、燃焼部、煙道部は竪穴外に突出する。竈の構築には石材が使用されており、焚き口部の左右の袖石とそこから転落した状況の天井石、また燃焼部から煙道部にかけての天井石が残存している。燃焼部から焚き口部の前面には多量の灰が分布している。燃焼部の焼土化は非常に顕著であり、その中央部には使用状況にある支脚が遺存している。焚き口部の幅は42cmを測り、燃焼部は66cm張り出しており、煙道部はさらに33cm突出した状況が確認された。

遺物は、床面上に散乱した状況の一群と、時間の隔絶を経て住居の埋没過程に流入した一群が認められる。破片数は土師器壺245点、坏48点と須恵器羽釜32点、坏・埴輪60点などがいずれも残存率は低い。



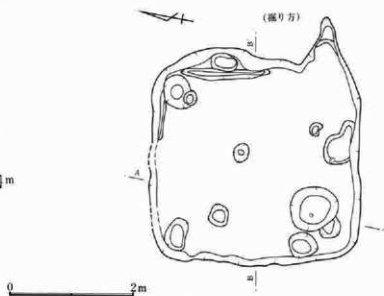
第221図 277号住居跡実測図(i)

第3章 平安時代の遺構と遺物

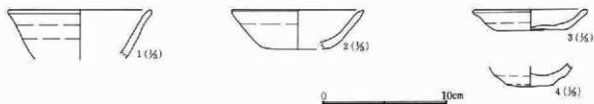


■

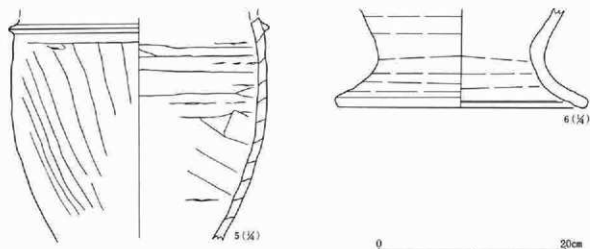
- ① 暗褐色土 磁石 (~1.5mm) ローム粒 (~2mm) 焼土粒 (~2mm) を含む。
- ② 暗褐色土 1層に比し、黒味がかり暗い、含有物は1層より少ない。
- ③ 暗褐色土 ロームブロック (~3mm) 焼土ブロック (~3cm) 炭化物を含む。
- ④ 暗褐色土 火床面赤化部分



第222図 277号住居跡実測図(2)



第223図 277号住居跡出土遺物実測図(1)



第224図 277号住居跡出土遺物実測図(2)

277号住居跡出土遺物観察表

検出番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
223-1	須恵器 坏	覆土中 互残存	口(11.6) 底— 高(3.9)	①砂粒 ②還元焰気味、やや軟質 ③灰白色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。内外面ともにロクロ整形。	
223-2	須恵器 坏	覆土中 互残存	口(10.6) 底— 高 3.1	①砂粒、雲母 ②還元焰気味、やや軟質 ③灰オリーブ色	体部はほぼ直線的に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。	
223-3 84	須恵器 皿	床面 互残存	口(9.2) 底(5.6) 高(1.7)	①砂粒～小石、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③明褐色～橙色	体部は外反して開く。内外面ともにロクロ整形。底部は回転余切り後に削いで。	内面に赤色顔料が付着する
223-4	須恵器 皿	床面+12 下半部残存	口— 底(3.6) 高(1.7)	①砂粒、雲母、褐色粒子 ②酸化焰、やや軟質 ③橙色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転余切り無調整。	胴上部傷付着 内面下半の器面磨滅
224-5 83	須恵器 羽蓋	甕内～床 面+24 互残存	口— 底— 高(23.5)	①砂粒～小石、雲母 ②酸化焰、やや軟質 ③明赤褐色～橙色	緩やかに膨らむ胴部から口縁部はわずかに内傾するとみられる。肩は粗粒。輪痕を残す。外面直削り。内面広い置腫で。	
224-6 83	須恵器 甕	床面 互残存	口— 底(26.4) 高(10.5)	①砂粒～小石 ②酸化焰、やや硬質 ③橙色	腹部は緩やかに外湾して開く。端部は面取り。内外面ともにロクロ整形。	

## 280号住居跡 (第225・226図、図版48・84)

本住居跡は、第5次調査区の中央に入る埋没谷の谷頭部からやや東の緩傾斜部にあり、17・18～18・19グリップに位置している。

先行する284号・281号住居跡(平安)の一部を掘り込んでいる重複関係が認められた。また本住居は、廃絶後に小鍛冶(2号小鍛冶)として空間転用されている。

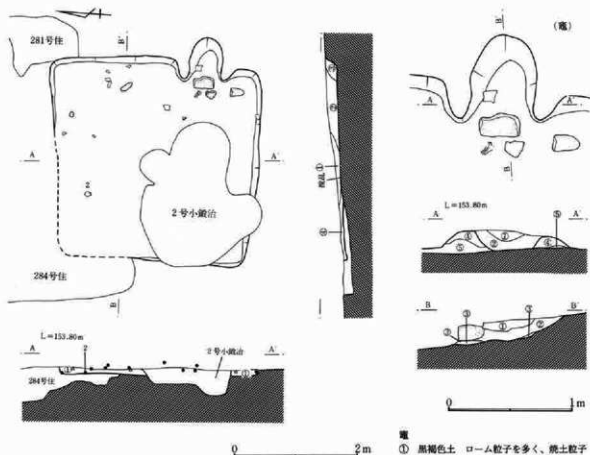
住居の掘り込みは、黄褐色ローム層まで及んでおり、他の住居との重複部分以外は明瞭に確認された。東西3m28cm、南北3m22cmのほぼ正方形の形状をとり、主軸方向はN-90°Eを示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、21cmの残存が認められた。床面は、掘り込んだ面を直接使用しており、貼り床は認められなかった。なお貯蔵穴や柱穴、周溝は検出されなかった。

覆土は、3層に分層され自然堆積状況を示す。

### 第3章 平安時代の遺構と遺物

竈は、東壁の中央よりも南側のコーナー寄りに構築されている。焚き口部は竈穴内部であり、左右の袖が残存している。袖はローム層を一部掘り残したものを基に造り出している。燃焼部は壁の内外にわたり、煙道は外側に張り出している。燃焼部の幅は50cmを測り、煙道方向の張り出しは70cmが残存する。燃焼部には炭化物が散布しており、煙道方向に向かってローム面は焼土化が著しい。竈周辺には火熱を受けた石材が数点散乱している。

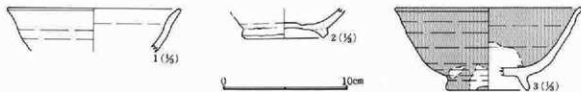
遺物は、少量の須恵器環・埴類が出土したにとどまる。



- ① 黒褐色土 ローム小ブロックと炭の小ブロックを均一に含む。
- ② 黒褐色土 ローム粒子を多く含む。
- ③ 黒褐色土 ローム粒子を少量含む。
- ④ 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロックを主とし、黒褐色土を少量混入する。

- 竈
- ① 黒褐色土 ローム粒子を多く、焼土粒子を少量含む。粘土質。
  - ② 黒褐色土 ローム粒子と焼土粒子を少量含む。
  - ③ 黒褐色土 炭を主とし、少量の焼土粒子を含む。
  - ④ 黒褐色土 白色軽石粒とローム粒子、ロームブロックを少量含む。
  - ⑤ 暗褐色土 ロームブロックを含む。

第225図 280号住居跡実測図



第226図 280号住居跡出土遺物実測図

280号住居跡出土遺物観察表

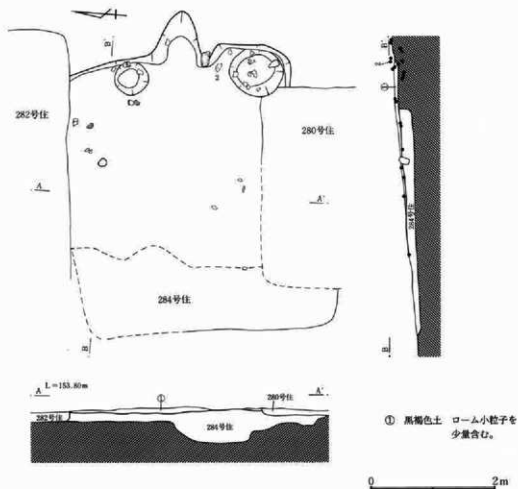
標記番号 図版番号	土器類別 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (長)	①治土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
226-1	須恵器 坪	覆土中 反残存	口(13.8) 底— 高(3.4)	①砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。	
226-2 84	須恵器 高台付埴	床面 底部残存	口— 底6.9 高(2.3)	①砂粒、白色細粒、雲母 ②還元焰気味、やや軟質 ③にぶい黄色～灰白色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。付高台。	
226-3 84	灰釉陶器 高台付埴	床面+1 反残存	口(14.9) 底(6.6) 高6.5	①緻密 ②やや還元焰気味、堅緻 ③にぶい黄褐色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端部はわずかに外反する。内外面ともにロクロ整形。付高台、端部は弱い傾度。	

## 281号住居跡(第227～229図、図版48・84)

本住居跡は、第5次調査区東端の埋没谷谷頭部よりやや上部にあり、18-18・19グリッドに位置している。谷部へ向かってやや傾斜は強くなっている。

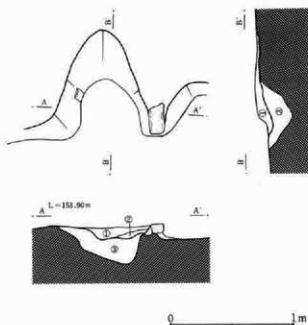
他の住居との重複関係は多く見られる。先行する284号住居跡(平安)の上部に築かれ、後出する282号住居跡(平安)に北壁周辺を、また280号住居跡(平安)に南壁周辺を壊されている。

住居の掘り込みは、東壁方向では黄褐色ローム層まで及ぶことが見られたが、その他は284号住居跡の覆土



第227図 281号住居跡実測図

### 第3章 平安時代の遺構と遺物



竈

- ① 赤褐色土 多量の焼土粒子、焼土ブロックを含む。
- ② 黒褐色土 ローム粒子を多く、炭の粒子を少量含む。
- ③ 黒褐色土 少量のローム粒子を含む。

第228図 281号住居跡竈実測図

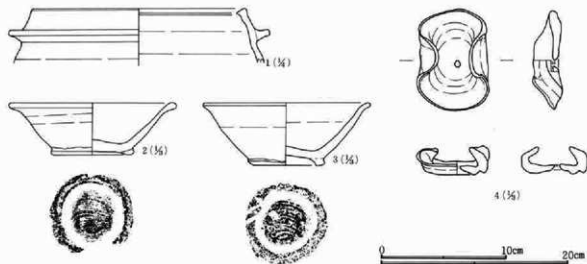
張り出している。右袖には風化して脆くなっているものの、砂岩が埋設された状況で残存していた。燃焼部の幅は70cm、煙道方向85cmを測る。火床面は焼土化している。燃焼部下部にはピット状の窪みが認められた。

遺物は、竈左右の貯蔵穴の周辺から出土しており、多くは小破片である。須恵器の羽釜、埴の他に耳皿が認められる。

内にとどまっている。住居の遺存状況は不良であり、殊に西側へ下る傾斜との関係もあり西壁は確認されなかった。重複状況もあり、本住居跡の平面形・規模等についての詳細は不明である。主軸方向についてはN-80'-Eを示すものと推定される。壁は東壁方向で最大12cmを測る。床面はローム面を掘り込んでいる部分では、貼り床は施されておらず、掘り込み面を直接叩き締めて使用している。これに対し、284号住居跡の覆土を掘り込んだ部分では、ロームブロックを混入させ貼り床を行っているようであるが、明瞭に覆土との区別はされなかった。貯蔵穴は南東コーナーに設けられており、東西72cm、南北86cmのほぼ円形を呈し、深さは14cmを測る。他に、竈左脇の壁際にも径50cm、深さ13cmの円形のピットが確認された。なお柱穴や周溝は認められなかった。

覆土は、僅かに残存するのみである。

竈は東壁の中央よりもやや南側に偏して築かれているものと見られる。燃焼部は壁の外側に



第229図 281号住居跡出土遺物実測図

281号住居跡出土遺物観察表

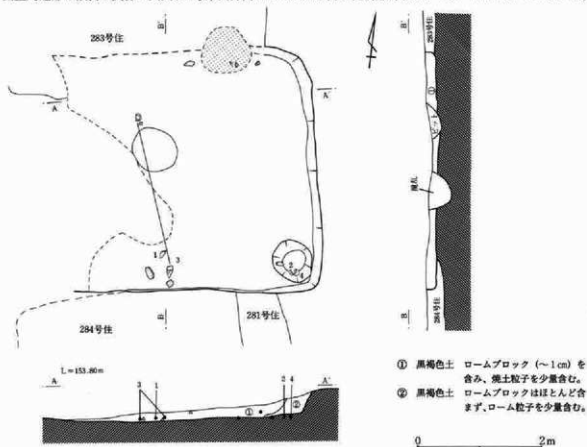
押出番号 図版番号	土器種類 器 種	出土状況 残存状況	法量(cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、蓋・成形技法の特徴	備 考
229-1 84	須恵器 羽 蓋	貯蔵穴内 写残存	口(23.0) 底 一 高 (5.7)	①砂粒 ②還元焰気味、やや軟質 ③灰白色～灰色	口縁部はわずかに内傾し、底部は強い面取り。 踵は高く上端は面取り。内外面ともにロクロ 整形。	
229-2 84	須恵器 高台付埴	床面 写残存	口(13.4) 底 6.6 高 4.1	①砂粒、雲母 ②還元焰気味、やや軟質 ③灰黄色～浅黄色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端 部はわずかに外反する。内外面ロクロ整形。 底部は回転糸切り無調整。粗雑な付高台。	器型磨滅
229-3 84	須恵器 高台付埴	貯蔵穴内 写残存	口(13.2) 底 6.1 高 4.9	①砂粒～小石、雲母 ②還元焰気味、軟質 ③灰色～灰オリーブ色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端 部はわずかに外反する。内外面ロクロ整形。 底部は回転糸切り無調整。粗雑な付高台。	口縁へ割にかけ 黒変
229-4 84	須恵器 耳 皿	貯蔵穴内 写形	口 8.0 底 5.0 高 2.3	①砂粒～小石、雲母 ②酸化焰気味、やや硬質 ③にょい黄褐色	口縁部は横に開き、両端を揃らあげている。 内外面ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切 り無調整。底部中央に下方からの穿孔あり。	穴の径0.53

## 282号住居跡 (第230・231図、図版48・84・89)

本住居跡は、第5次調査区南東部の埋没谷谷頭部に面した西側へ下る傾斜地にあり、18・19-18・19グリッドに位置する。

重複関係としては、先行する283号住居跡(古墳後期)および281号・284号住居跡(平安)の一部を掘り込んで築かれていることが確認された。なお本住居跡の上部は東西方向に刻まれる自然流路により浸食を受ける。

住居の掘り込みは黄褐色ローム層中におよび東壁周辺は明瞭に確認されたが、重複部分は判然としな。西壁周辺部は傾斜の関係で欠失する。東西方向は3m90cmを測り、主軸方向はN-10°-Wを示すとみられる。



第230図 282号住居跡実測図

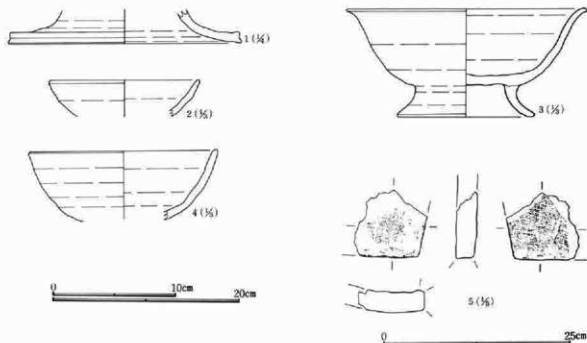
### 第3章 平安時代の遺構と遺物

壁はほぼ垂直に立ち上がり、最大で32cmが残存する。床面はローム面を直接使用しており、貼り床は施されていない。貯蔵穴は南東コーナー際に設けられており、直径15cm、深さ18cmの円形を呈する。複数のピットが確認されたが本住居には伴わず、柱穴は認められなかった。また周溝も検出されない。

覆土は、2層に分層され東壁際ではいわゆる三角堆積の発達が認められた。

竈は、明確に確認されなかったが、北壁北東コーナー寄りに焼土の分布が広がっており、北竈であることが想定される。

遺物は、少量だが床面と貯蔵穴周辺から出土している。



第231図 282号住居跡出土遺物実測図

282号住居跡出土遺物観察表

検出番号 図取番号	土器類別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整・成形技法の特徴	備考
231-1	須恵器 甕	床面+2 片残存	口— 底 25.0 高 3.5	①砂粒、白粉細粒 ②酸化焰、やや硬質 ③にじみ黄褐色	胴部は胴部から屈曲して大きく開く。端部は面取り。内外面ともにロクロ整形。	
231-2	須恵器 坪	貯蔵穴内 片残存	口(12.0) 底— 高 2.9	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③に じみ黄褐色～にじみ黄褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。	
231-3 84	須恵器 高台付埴	床面+2 片残存	口(19.2) 底 11.0 高 8.5	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③褐色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。付高台は高く外反して開く。内外面ともにロクロ整形。底部無で。	
231-4 84	須恵器 埴	貯蔵穴内 片残存	口(15.2) 底— 高 5.4	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③明褐色～褐色	体部は緩やかに内湾して立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。	
231-5 89	瓦 平瓦	覆土中	厚 2.5	①砂粒、白色細粒、雲母 ②還元焰気味、やや硬質 ③灰白色	一枚造り。凸面は無で、一部に粘土板糸切り痕あり。面取りは狭端部、側面は2回。	吉井・藤岡系



## 284号住居跡 (第232~235図、図版49・84・85・89)

本住居跡は、第5次調査区南東部の埋没谷谷頭部に面した傾斜地にあり、18-18・19グリッドに位置する。重複関係としては、本住居跡埋没後に上部に281号住居跡(平安)が築かれており、また南壁周辺部は280号住居跡(平安)により切り込まれている。更に北東コーナー部分は282号住居跡(平安)により欠失している。

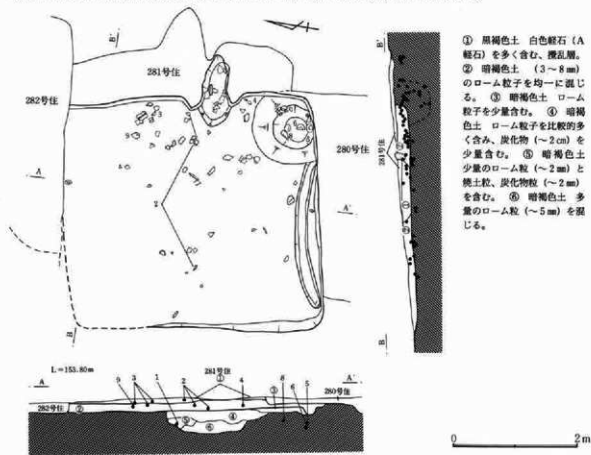
住居の掘り込みは黄褐色ローム層におよび、重複住居跡に比べ深いこともあり大部分が把握できる。東西3m65cm、南北4m08cmのほぼ正方形の形状を呈し、主軸方向はN-80°-Eを示す。壁高は最大で17cmを測る。床面は部分的に張り床が施されており、中央部および竈周辺部は踏みまじっており堅緻である。貯蔵穴は南東コーナー際に設けられている。直径65cm、深さ30cmの円形を呈し、外周部には微高な突帯がみられる。周溝は南壁沿いで検出された。なお柱穴は認められなかった。

掘り方面には、中央部および東半部を主として不整形の掘り込みが設けられている。竈の左側には直径50cmの円形のピットが掘り込まれている。

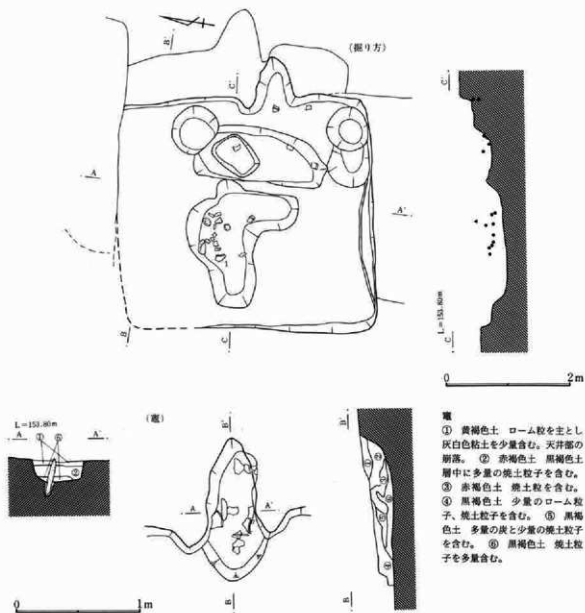
覆土は、281号住居跡に掘り込まれるなどして堆積状況は判然としなかった。

竈は、東壁の中央よりやや南よりに構築されている。焚き口部には僅かに左右の袖部が認められ、燃焼部は壁のやや内側から外側に張り出している。燃焼部の幅は45cm、煙道方向の張り出しは85cmを測る。燃焼部は床面よりやや窪んでおり、左よりの位置に埋設され使用状況を示す支脚が残存している。覆土には焼土化した天井の崩落が認められる。火床面は焼土化が認められる。

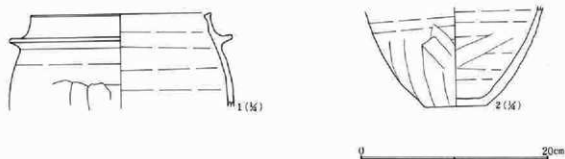
遺物は、床面上、貯蔵穴周辺などから出土している。耳皿や瓦の破片などもみられる。



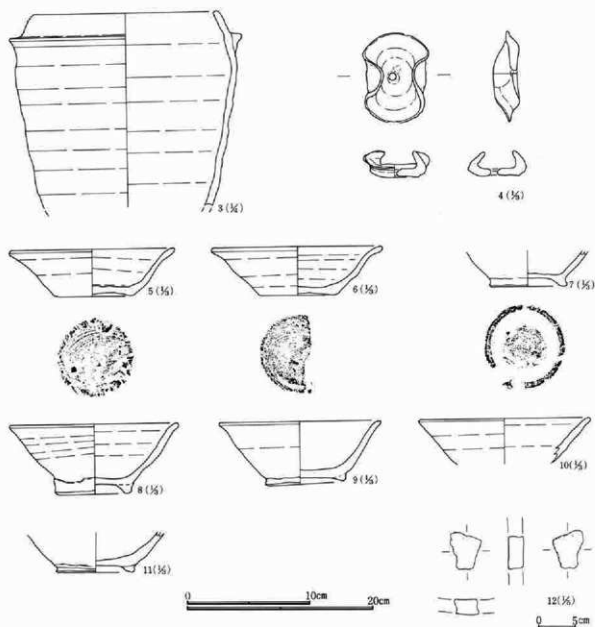
第232図 284号住居跡実測図(1)



第233図 284号住居跡実測図(2)



第234図 284号住居跡出土遺物実測図(1)



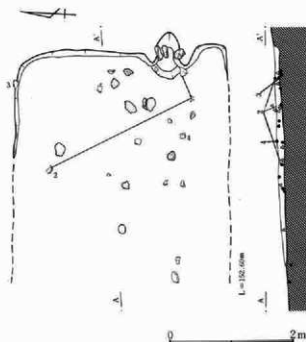
第235図 284号住居跡出土遺物実測図(2)

284号住居跡出土遺物観察表

検出番号 図版番号	土器類別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (#)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、装・成形技法の特徴	備考
234-1 84	須恵器 羽釜	掘り方中 互残存	口(19.4) 底— 高(10.0)	①砂粒～小石 ②酸化硝、やや軟質 ③灰白色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。 内外面ともにロクロ整形。	
234-2 84	須恵器 羽釜	床面+2 ～24 互残存	口— 底(6.6) 高(10.4)	①砂粒 ②還元焰気味、やや軟質 ③灰白色	胴部は内湾気味に立ち上がる。外面ロクロ整形後、下部は彫削り。内面ロクロ整形。底部無で。	
235-3 84	須恵器 羽釜	床面+12 ～15 互残存	口(20.0) 底— 高(20.5)	①砂粒 ②酸化硝、やや軟質 ③ (外)橙色 (内)にぶい褐色	口縁部はわずかに内傾し、端部は弱い面取り。 内外面ともにロクロ整形。	

第3章 平安時代の遺構と遺物

押出番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
235-4 84	須恵器 耳 皿	床面+5 片残	口 7.1 底 4.6 高 2.1	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや軟質 ③よい黄褐色	体部は横方向に開き、両端をつまみあげて内側に折り曲げている。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
235-5 84	須恵器 杯	貯蔵穴内 片残存	口(13.3) 底 6.3 高 3.7	①砂粒 ②焼し焼成、やや軟質 ③オリブ黒色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は大きく外反する。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
235-6 84	須恵器 杯	貯蔵穴内 片残存	口(13.6) 底(6.1) 高 3.8	①砂粒、褐色粒子 ②酸化焰、やや軟質 ③よい褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は大きく外反する。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
235-7	須恵器 高台付埴	掘り方中 下半部残存	口 — 底(6.2) 高(2.8)	①砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③よい黄褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。底部は回転糸切り無調整。粗雑な付高台。	
235-8 84	須恵器 高台付埴	貯蔵穴内 片残存	口 13.5 底 6.1 高 5.5	①砂粒～小石 ②還元焰気味、軟質 ③灰白色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端部はわずかに外反する。内外面ともにロクロ整形。底部削て、粗雑な付高台。	
235-9 85	須恵器 高台付埴	床面 片残存	口(13.6) 底(6.4) 高 4.9	①砂粒 ②焼し焼成、やや軟質 ③オリブ黒色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端部はわずかに外反する。内外面ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。付高台。	
235-10	須恵器 杯	貯蔵穴 片残存	口(13.6) 底 — 高(3.6)	①砂粒～小石 ②酸化焰、やや軟質 ③黒褐色～灰黄褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。	
235-11	須恵器 高台付埴	覆土中 片残存	口 — 底(6.2) 高(3.1)	①砂粒 ②酸化焰気味、やや軟質 ③(外)黄褐色 (内)黄灰色	体部は緩やかに内湾して立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。粗雑な付高台。	大半が黒炭
235-12 89	瓦	竈内 破片	厚 1.8	①砂粒、白色細粒 ②還元焰、硬質 ③暗灰色	一枚造り。凸面側で、凹面布目。	吉井・藤岡系



① 黒褐色土 少量の炭を含む、しまりは弱い。

第236図 285号住居跡実測図

285号住居跡 (第236～238図、図版49・85)

本住居跡は、第5次調査区南東部の埋没谷頭部分の傾斜地にあり、17・18—17グリッドに位置する。

先行する319号住居跡(古墳後期)と一部重複するとみられる。

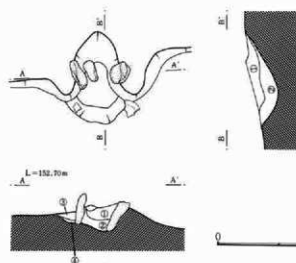
住居の掘り込みが谷の埋土中に施されており、確認は困難であった。特に西半部は不明であり、全体は把握はできないが、南北は3m44cmを測り、主軸方向はN-80°-Eを示す。床面は明確な貼り床は検出されず、谷の埋土面を使用しているものとみられるが、軟弱で不明瞭である。壁は東壁の部分で6cmが残存するにすぎない。柱穴や貯蔵穴、周溝も検出されなかった。

覆土は、谷の埋没土と類似し判別は困難であった。

第2節 竪穴住居跡と出土遺物

竪は、東壁の南東コーナー寄りに築かれている。竪の範囲も不明瞭であったが、燃焼部は壁の内外にわたると考えられる。袖状の張り出しが僅かに残り、また構築材に用いられた石が埋設された状態で検出された。火床面はやや床面よりも窪んでおり、焼土化はほとんど認められなかった。なお竪の構築に用いられたと考えられる石が床面に散乱している。

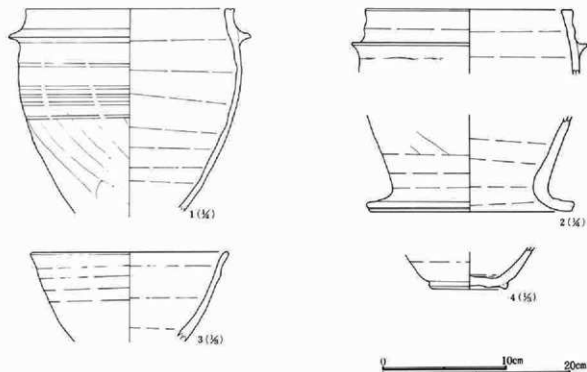
遺物は、羽釜や甗が認められる。



竪

- ① 黒褐色土 焼土ブロックと焼土粒子を多く含む。
- ② 黒褐色土 ローム粒子、焼土粒子を少量含む。
- ③ 黒褐色土 ローム粒子を少量、焼土粒子をやや多く含む。
- ④ 赤褐色土 焼土粒子を多く含む。

第237図 285号住居跡竪実測図



第238図 285号住居跡出土遺物実測図

### 第3章 平安時代の遺構と遺物

#### 285号住居跡出土遺物観察表

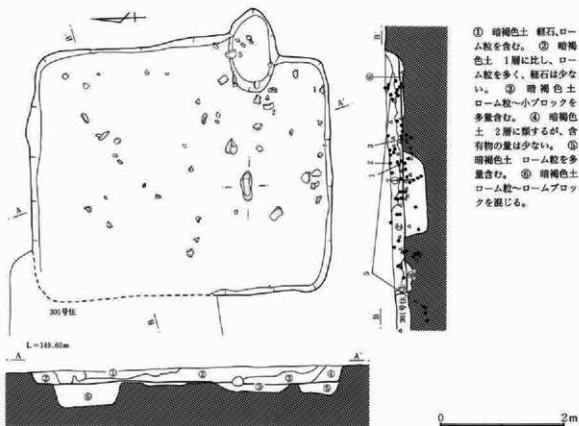
探検番号 図版番号	土器種類	出土状況 残存状況	法量 (cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
238-1 85	須恵器 羽蓋	甕周辺 瓦残存	口(22.4) 底— 高(21.4)	①砂粒~小石、雲母 ②還元焰気味、軟質 ③(外)灰白色 (内)オリーブ黒色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。内外面ともにロクロ整形。外面下半部は塗有り。	内外面に付着 甕材への転用あり。
238-2 85	須恵器 甕	床面+6 瓦残存	口(22.0) 底 21.6 高(7.4)	①砂粒 ②還元焰気味、やや軟質 ③にぶい黄褐色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。内外面ともにロクロ整形。胴下部に焼成前の円形の窪みあり。	
238-3	須恵器 甕	床面+6 瓦残存	口(15.8) 底— 高(7.0)	①砂粒 ②還元焰気味、やや軟質 ③(外)淡黄色~淡黄色 (内)灰白色	体部は緩やかに内湾して立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。	
238-4 85	須恵器 高台付甕	床面+12 下部残存	口— 底(6.2) 高(3.2)	①砂粒 ②還元焰気味、やや軟質 ③灰白色	体部は緩やかに内湾して立ち上がる。内外面ともにロクロ整形。付高台。	

#### 300号住居跡 (第239~241図、図版50・85)

本住居跡は、第5次調査区西南端部の崖線間近の平坦面を占め、14・15—6・7グリッドに位置する。

先行する301号住居跡(奈良)と北西コーナー周辺で重複する。

住居の掘り込みは、黄褐色ローム中に施されており甕以外は明瞭に確認された。東西4 m03cm、南北4 m90 cmの長方形の平面形を呈し、主軸方向はN-97°-Eを示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、22cmの残存が確認された。床面は平坦面をなし、部分的に貼り床が施されている。柱穴や周溝は掘り込まれていない。なお、明瞭な貯蔵穴は確認されなかったが、掘り方段階で南西コーナーに径60cmの円形のピットが検出されており、



第239図 300号住居跡実測図(1)

第2節 竪穴住居跡と出土遺物

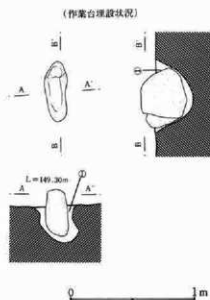
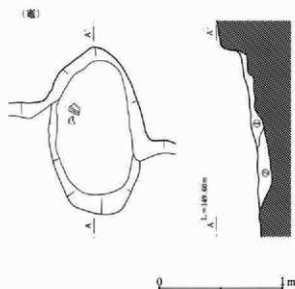
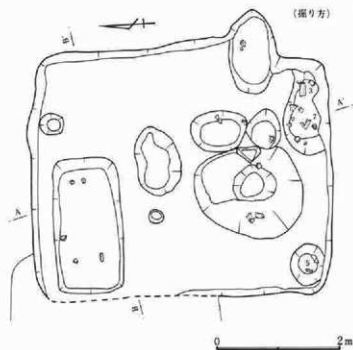
貯蔵穴の可能性も窺われる。床面の中央やや南側においては、作業台として使用されたと考えられる長辺48cm、短辺50cm、高さ37cmの石が縦方向に埋設されている状況が検出された。石の頂が床面の上に露出しており、上面は敲打痕がみられる。

掘り方は幾つかの土坑が見られるが、それ以外は比較的平坦である。西北壁際の土坑は1m10cm×2m14cm、深さ36cmの長方形を呈する整然とした掘り込みである。南東壁際には不整形の窪みがみられるが、貯蔵穴といった状況ではない。床面中央よりも南側には大小の楕円状の土坑が重複した状況で検出されている。

覆土は、自然堆積状況を示しており、4層に分層される。

竪は、東壁の南東コーナー寄りに構築されているが、遺存状況は不良であり、焼土化した部分が確認されたにとどまる。燃焼部は壁外にやや張り出して設けられているが、煙道の壁外への張り出しは判然としない。燃焼部の幅は約50cmである。

遺物は、大部分が覆土中に含まれており、掘り方中からも出土しているが全体として残存率は低い。

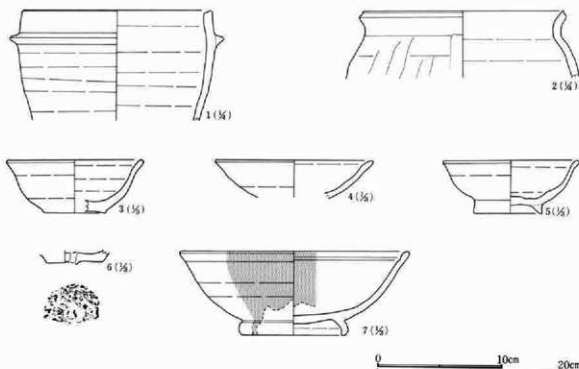


- ① 暗褐色土 軽石、ローム粒、焼土粒を含む。  
 ② 黒褐色土 焼土粒を少量、ローム粒を少量含む。

- ① 暗茶褐色土 ローム粒を含み、下部には、黒褐色土を覆じる。

第240図 300号住居跡実測図(2)

第3章 平安時代の遺構と遺物



第241図 300号住居跡出土遺物実測図

300号住居跡出土遺物観察表

標記番号 図版番号	土器類別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
241-1	須恵器 羽釜	床面+6 片残存	口(20.4) 底— 高(11.6)	①砂粒 ②酸化焰気味、やや硬質 ③黒褐色	口縁部はわずかに内傾し、輪部は強い面取り。 脚は断面三角形。内外面ともにロクロ整形。	
241-2 85	須恵器 甕	床面+24 片残存	口(21.4) 底— 高(7.1)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③褐色	口縁部は緩やかに屈曲して短く外反。内外面 ともにロクロ整形。胴上部外面は弱い面取り。	
241-3 85	須恵器 坏	掘り方中 片残存	口(11.0) 底(4.9) 高4.2	①砂粒、雲母 ②酸化焰気味、やや軟質 ③淡黄色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部 は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。 底部は回転糸切り無調整。	
241-4	須恵器 坏	覆土中 片残存	口(12.6) 底— 高(3.0)	①砂粒—小石 ②酸化焰、やや軟質 ③褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部 は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。	
241-5 85	須恵器 高台付埴	床面+16 ～掘り方 中片残存	口(10.8) 底(5.5) 高4.2	①砂粒多量 ②酸化焰、やや硬質 ③赤褐色～明赤褐色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端 部はわずかに外反する。内外面ともにロクロ 整形。底部は無調整。付高台。	
241-6 85	須恵器 耳皿(?)	覆土中 底部片残 存	口— 底4.5 高(0.9)	①砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③におい黄褐色	底部は回転糸切り無調整。底部中央に焼成前 の穿孔(上方から)あり。	
241-7 85	灰輪陶器 高台付埴	掘り方中 片残存	口(18.3) 底(8.8) 高6.6	①緻密 ②還元焰、堅緻 ③灰白色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端 部はわずかに外反する。内面に1条の比輪が めぐる。付高台、断面三日月形を呈する。	底部内面磨滅 痕として転用 か。蓋(?)付着



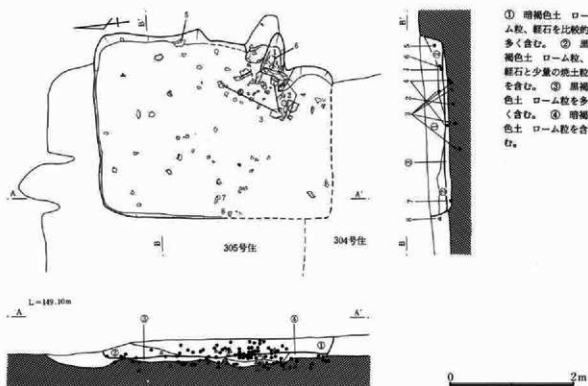
## 306号住居跡 (第242~245図、図版51・85・94)

本住居跡は、第5次調査区西南端部の崖線部に迫る平坦面にあり、16・17-5・6グリッドに位置する。先行する305号(奈良)・304号・310号住居跡(古墳後期)との重複関係が見られ、東壁と竈部分以外は、それらの住居跡の覆土を掘り込んで築かれている。このため南西コーナー周辺の範囲はやや不明瞭であった。東西2m90cm、南北3m37cmの長方形の平面形を呈し、主軸方向はN-83°-Eを示す。壁はほぼ垂直に立ち上がっており、40cmの残存が確認されている。床面はロームを多量含む明褐色土を主として貼り床が施されているが、やや軟弱である。柱穴、貯蔵穴や周溝などの掘り込みは認められない。10cmほどの貼り床材の下面では径1m60cmほどの不整形形の土坑と、径90cmの円形の土坑が確認された。

覆土は、自然堆積状況を示し、2層に分層された。

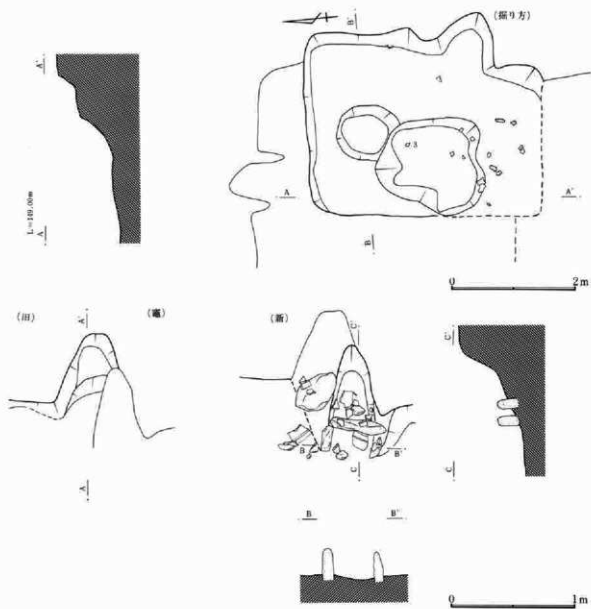
竈は、東壁中央よりも南東コーナー寄りに築かれている。焚き口部および燃焼部の大半は竪穴の壁内部にあり、煙道部は燃焼部から段状に高くなって壁の外側に張り出している。竈の焚き口部には、板状の牛伏砂岩の切り石を用いた袖石が左右とも残存している。また燃焼部内では、袖石から転落した状態で天井石が検出されている。なお燃焼部の中央部には、支脚が使用状態で残存している。火床面の焼土化はさほど顕著ではない。本竈は、確認段階で煙道など北側に寄った状況があったが、掘り方段階で左袖北側においても、非常に焼土化が著しい範囲が認められ、竈の造り変えが行われたことが判明した。新しい時期の竈の焚き口幅35cm、煙道方向の長さは85cmを測る。竈を造り変える段階で、東壁の位置が変化したのかは不明であり、やや疑問も残る。

遺物は、竈内や床面上の他、覆土中から多量の土器片が出土している。

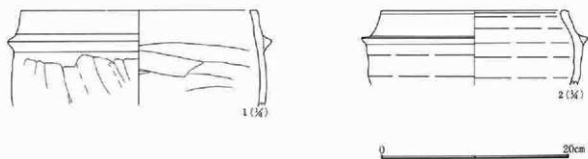


第242図 306号住居跡実測図(1)

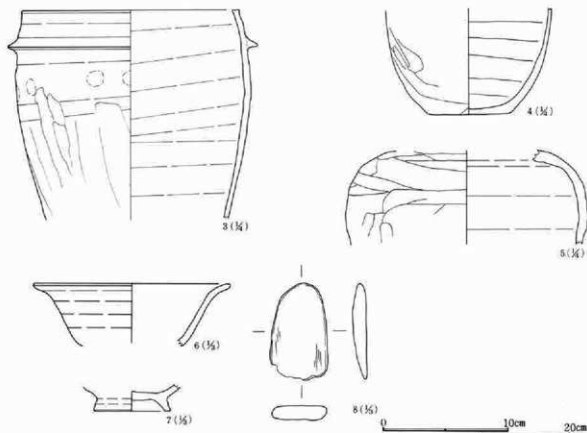
第3章 平安時代の遺構と遺物



第243図 306号住居跡実測図(2)



第244図 306号住居跡出土遺物実測図(1)



第245図 306号住居跡出土遺物実測図(2)

306号住居跡出土遺物観察表

採掘番号 図版番号	土器種別 器	出土状況 残存状況	法量(cm) (#)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
244-1 85	須恵器 羽蓋	甕内 瓦残存	口(25.3) 底— 高(10.2)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③暗褐色～褐色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。 口縁部横溝で。胴部 外面直削り。内面直削り。	
244-2	須恵器 羽蓋	床面 瓦残存	口(20.2) 底— 高(7.8)	①砂粒、雲母 ②酸化焰 やや軟質 ③(外)褐色(内) 褐色～明褐色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。 胴は断面三角形。内外面ともにロクロ整形。	
245-3 85	須恵器 羽蓋	甕内～床 面+28 下半欠損	口(23.2) 底— 高(22.0)	①砂粒～小石 ②酸化焰、やや軟質 ③にぶい黄褐色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。 内外面ともにロクロ整形。胴外面下半部は直削り。	内面下半部やや磨減。外面に黒斑、赤斑あり
245-4	須恵器 羽蓋	甕内～ 床面+10 瓦残存	口— 底 8.4 高(11.2)	①砂粒～小石 ②酸化焰、やや軟質 ③黄褐色～黄褐色	胴部は緩やかに内湾して立ち上がる。内面ロクロ整形。外面はさらに直削り。底部直削り。	内外面に保付器
245-5	須恵器 壺	床面+32 瓦残存	口— 底— 高(10.0)	①砂粒～小石 ②酸化焰、やや硬質 ③褐色	胴上部に強い張りをも有する。外面直削り。内面ロクロ整形。	内面に二次焼成による凹形割落あり
245-6	須恵器 埴	甕内 瓦残存	口(15.8) 底— 高(4.9)	①砂粒～小石、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③明褐色～褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は大きく外反する。内外面ともにロクロ整形。高台が付けられるとみられる。	
245-7	須恵器 高台付埴	床面+12 底部残存	口— 底(6.2) 高(2.1)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③褐色	内外面ともにロクロ整形。底部は直削り。付高台。	
245-8 94	砥石	床面+8	長 7.5 幅 4.8 厚 1.1	重 51	両面にわずかな割罫が認められる。	砂研

### 第3章 平安時代の遺構と遺物

#### 308号住居跡 (第246図、図版51)

本住居跡は、第5次調査区の南部、12・13-18・19グリッドに位置する。南北を埋没谷により東西方向に浸食される緩傾斜部分に占地する。

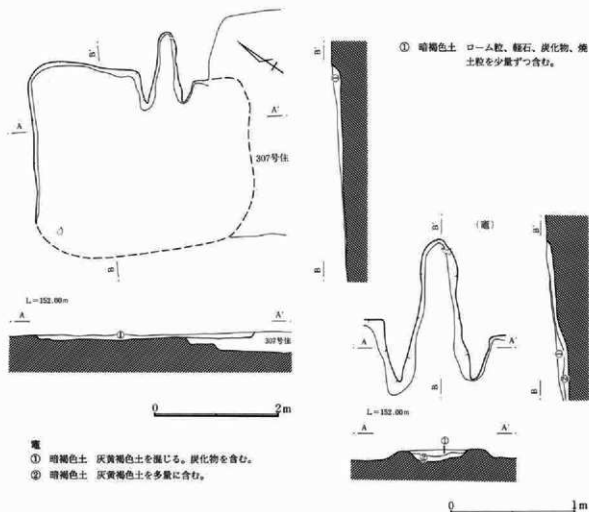
重複関係としては先行する307号住居跡(奈良)と一部重複している状況にある。

住居の掘り込みは、灰黄褐色を呈する粘質土中に行われている。全体に遺存状況は不良だが東西3m10cm、南北3m45cmの長方形の平面形を取ることが確認された。主軸方向はN-45°-Eを示す。壁の残存状況は最大でも10cm程度であり、西壁は残存せず床面の範囲が確認し得たのみである。床面には貼り床は施されておらず直接地山を使用している。中央部分周辺以外はやや軟弱である。周溝、柱穴ともに認められない。

覆土は、僅かに観察されたのみであり埋没状況は窺われない。

竈は、東壁の中央より南寄り位置に築かれている。焚き口部および燃焼部はやや壁の内側に入っており、左右の袖の痕跡とみられる高まりがわずかながら残存している。燃焼部と煙道部との境界は判然としなないが、全体的にやや焼土化している。燃焼部に相当する部分の幅は不明瞭だが、煙道部の幅は27cm、煙道張り出し方向1m10cmが残存している。

遺物は、平安時代に属する土器片が数点出土したが図示し得なかった。



第246図 308号住居跡実測図

## 309号住居跡 (第247~250図、図版52・85・89・90・93・96)

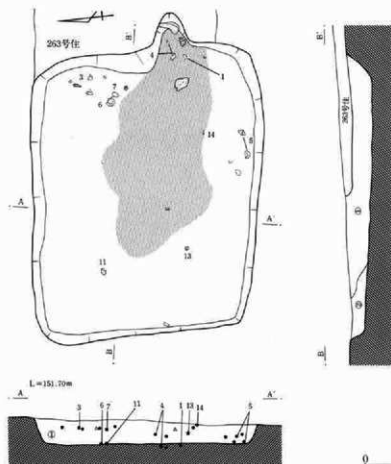
本住居跡は、第5次調査区南端12・13-17・18グリッドに位置する。東西方向に入る小支谷にはさまれた緩やかな鞍部の中央部分の傾斜地に築かれている。

本住居の上部にはほぼ主軸を等しくする263号住居跡(平安)が東側にずれた位置で築かれており、これに先行して営まれたことが分かる。

住居は暗灰褐色粘質土の面に掘り込まれており、明瞭にプランが確認された。東西4m50cm、南北3m73cmの長方形の平面形を取り、主軸方向はN-96°-Eを示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、最大で40cmの遺存が確認された。床面は地山を直接利用しており、平坦面をなす。壁・床面のいずれも明瞭に確認された。柱穴や周溝は認められなかった。

覆土は、2層に分層されるが比較的類似した土層である。263号住居の構築に際しての埋め立て行為などに因っては、土層観察からは窺われなかった。

竈は、東壁の中央よりもやや南に寄った位置に築かれている。焚き口部は壁の内部にあるものと思われ、燃焼部はわずかに張り出している。煙道部は壁外に張り出すようだが、上面を263号住居跡の掘り込みに削られている。竈内からは被熱による赤化の見られる石が出土しており、竈の構築に使用されたものと考えられる。燃焼部周辺は焼土化が著しい。なお燃焼部から焚き口部を含めそこから流出した状況の灰が、床面中央部まで薄く分布しているのが確認された。



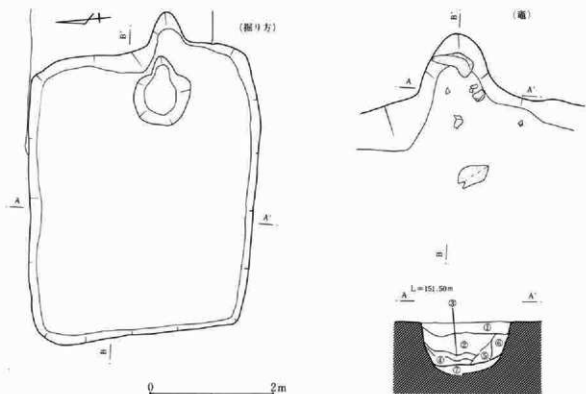
第247図 309号住居跡実測図(1)

竈前部下面には径80cm~90cmの摺鉢状の窪みが見られ、多量の焼土粒や灰が混入している。

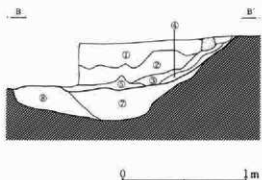
遺物は、床面上に散漫に分布する他、覆土中から紡錘車や土鍾などが出土している。また底部に「測」と墨書された須恵器坏が出土しているが、状況的には、263号住居跡に帰属する可能性が高い。

- ① 暗茶褐色粘質土 ローム粒、炭化物粒(〜2mm)を少量と灰黄白色礫石を含み、灰黄褐色土の小ブロックが混じる。
- ② ①層に比して、含有物を多く含み、明色を呈する。

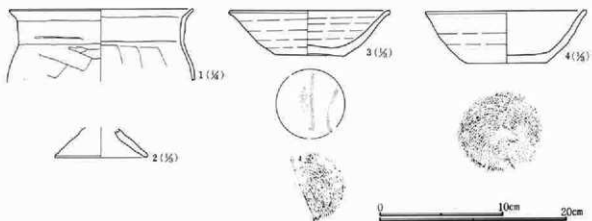
第3章 平安時代の遺構と遺物



- 堀
- ① 暗褐色土 軽石、ローム粒、焼土粒（～2mm）を含み、灰黄褐色粘土を混じる。
  - ② 暗褐色土 1層に類するが、軽石は少ない。
  - ③ 暗褐色土 多量の焼土ブロックを含む。（天井材の崩落）。
  - ④ 暗褐色土 色調は3層に類するが、焼土粒（～5mm）を含む。
  - ⑤ 暗褐色土 軽石、焼土粒を含み、ローム粒を若干含む。
  - ⑥ 暗褐色土 灰黄褐色粘土を含む。
  - ⑦ 暗褐色土 6層に類するが、多量の焼土粒（～5mm）を含む。
  - ⑧ 暗褐色土 ローム粒、焼土粒、炭化物粒を多量に含む。

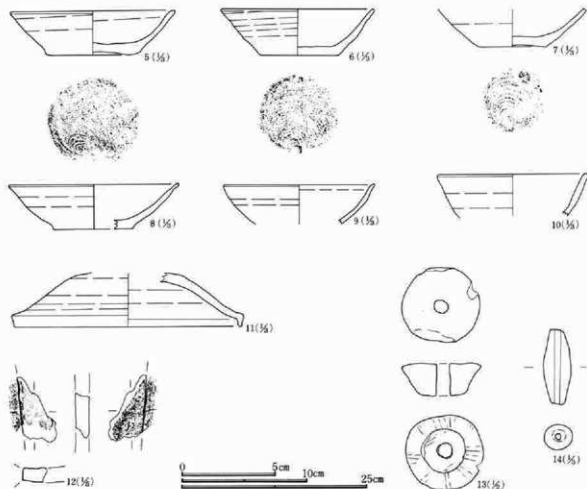


第248図 309号住居跡実測図(2)



第249図 309号住居跡出土遺物実測図(1)

## 第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第250図 309号住居跡出土遺物実測図(2)

## 309号住居跡出土遺物観察表

押出番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備 考
249-1 85	土器器 壺	甕内 片残存	口(19.8) 底 — 高 (7.6)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや軟質 ③明赤褐色～褐色	「コ」字状口縁。口縁部横溝で、胴部 外面 直削り。内面直削り。	
249-2	土器器 台付 壺	甕土中 片残存	口 — 底 10.0 高 (3.1)	①砂粒、雲母 ②還元焰、やや軟質 ③明赤褐色	右部は広く「ハ」字に開く。内外面横溝で。	
249-3 85・96	須恵器 坏	甕土上部 片残存	口 13.0 底 5.5 高 3.6	①砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰色	体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁端部は 小さく外反する。内外面ともにクロコ整形。 底部は回転糸切り無調整。	263号住に帰属 するとみられる 遺書「面」
249-4 85	須恵器 坏	甕内 片残存	口(12.9) 底 6.5 高 4.1	①砂粒 ②還元焰、軟質 ③灰白色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部 は小さく外反する。内外面ともにクロコ整形 (右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
250-5 85	須恵器 坏	灰面+3 ~6 片残存	口(13.2) 底 7.5 高 3.5	①砂粒、雲母 ②還元焰、やや軟質 ③灰色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部 は小さく外反する。内外面ともにクロコ整形 (右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
250-6 85	須恵器 坏	灰面 片残存	口(12.3) 底 6.3 高 3.6	①砂粒、褐色粒子 ②酸化焰、やや軟質 ③褐色	体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部はや や外反する。内外面ともにクロコ整形 (右回 転)。底部は回転糸切り無調整。	

第3章 平安時代の遺構と遺物

棟号番号 図版番号	土器種別 器	出土状況 残存状況	法量(cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
250-7	須恵器 坏	覆土上部 下半部残 存	口 — 底 5.4 高 3.0	①砂粒、雲母 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	263号住に帰属 すると思われる
250-8	須恵器 坏	覆土中 瓦残存	口(13.6) 底 (6.5) 高 3.5	①砂粒、雲母 ②酸化焰気 味、やや硬質 ③にぶい褐色 色~にぶい褐色、口縁灰色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。底部は回転糸切り無調整。	
250-9	須恵器 坏	甕内 瓦残存	口 12.2 底 — 高 (3.1)	①砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部はわずかに外反する。内外面ともにロクロ整形。	
250-10	須恵器 坏	覆土中 瓦残存	口 12.0 底 — 高 (3.3)	①砂粒、雲母 ②酸化焰気味、やや軟質 ③洗貴橙色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形。	
250-11	須恵器 甕	床面 瓦残存	筒 — 口(18.2) 高 4.2	①砂粒、白色細粒 ②酸化焰気味、やや軟質 ③にぶい黄褐色~洗貴橙色	天井部は高く膨らみ口縁部は外反する。内外面ともにロクロ整形。	
250-12 89	瓦	覆土中 破片	厚 1.8	①砂粒~小石、白色細粒 ②酸化焰気味、やや硬質 ③暗灰黄色	一枚造り。凸面無で。凹面布目。側面面取り。	
250-13 93	石製 紡錘車	床面+20 ほぼ完形	径 4.1/2.4 厚 1.35 孔径0.7	重 39.0	断面台形。広面に使用痕とみられる磨滅がわずかに認められる。	磨石質の蛇紋岩
250-14 90	土 鍾	床面+30 完形	長 5.9 径 2.2 重 24.9	①砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③褐色	表面は雑な無で。図の上方から穿孔。孔径0.5	

314号住居跡(第251~253図、図版53・85・86)

本住居跡は、第5次調査区西南隅、18-5グリッドに位置する。台地の西端部に近く、西谷川の崖線までに20mほどである。埋没谷の端部南縁の比較的平坦な面を占める。

305号住居跡(奈良)に近接するが、重複関係は認められない。

住居の掘り込みは、埋没谷埋土である黒褐色粘質土中に施されておりプラン確認は困難であったが、壁・床面ともに明瞭な状況で検出された。

東西3m50cm×南北3m30cmの長方形の平面形を呈し、主軸方向はN-100°-Eを示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり28cmほどの残存が認められた。床面貼り床は施されておらず地山の粘質土の面を直接利用しており、比較的強く叩き締められている。平坦な床面上には柱穴、周溝とも認められなかった。甕前部の南壁際には径53cm、深さ40cmを測る円形のピットが見られ、いわゆる貯蔵穴の可能性はある。なお、掘り方は認められない。

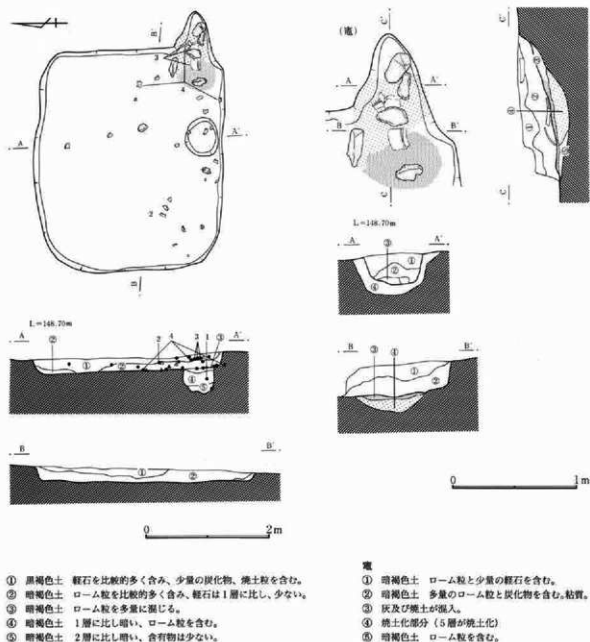
覆土は、地山の黒褐色土に類する土が流入している状況が見られ、2層に分層された。

甕は、住居南東隅に構築されている。焚き口部は竪穴内と考えられるが、燃焼部は壁外に張り出している。燃焼部の幅は最大57cmであり、煙道方向の張り出しは60cmが残存している。燃焼部は非常に使用の痕跡が顕著であり、燃焼面下10cmほどが焼土化していた。また灰層も焚き口部から燃焼部にかけて分布しており、現状で2cm~3cmほどの厚さを測るほどである。

甕内および周辺には甕構築に用いられたと考えられる、表面が被熱によって赤化した石が出土している。

遺物は、甕周辺および南壁際の床面上から出土しているが、いずれも残存率は低い。



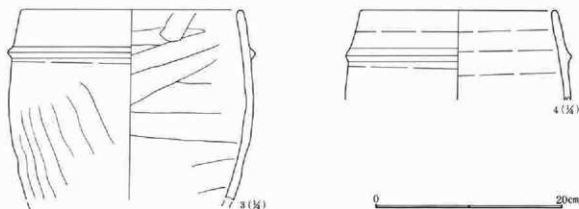


第251図 314号住居跡実測図



第252図 314号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物



第253図 314号住居跡出土遺物実測図(2)

314号住居跡出土遺物観察表

調査番号 図版番号	土器種類 器	出土状況 残存状況	法量 (cm) (尺)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
252-1 85	灰輪海胆 埴	貯蔵穴内 瓦残存	口(14.4) 底 — 高(5.2)	①精密 ②還元焰、やや硬質 ③黄褐色	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端部はわずかに外反する。内外面ともにロクロ整形。横付け掛け。	
252-2	須志器 高台付埴	床面+10 瓦残存	口 — 底 8.8 高(2.9)	①砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③褐色	高台部は外反して開く。内外面ともにロクロ整形。	
253-3 86	須志器 羽蓋	竈内 瓦残存	口(23.8) 底 — 高(20.0)	①砂粒～小石 ②還元焰、やや硬質 ③褐色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。踵は広く形骸化。口縁部横無で。外面貫筋有り。内面腹無で。	内面にも保付着 電材への転用
253-4 86	須志器 甌か	床面 瓦残存	口(21.0) 底 — 高(9.4)	①砂粒～小石 ②還元焰気味、やや軟質 ③淡黄褐色	口縁部はやや内傾するが直線的。踵は広く形骸化。内外面ともにロクロ整形。	

316号住居跡 (第254・255図、図版54)

本住居跡は、第5次調査区西南部16・17-7・8グリッドに位置する。東西方向に刻まれた埋没谷の端部の南縁の緩斜面にある。

312号住居跡(古墳後期)、277号住居跡(平安)に近接するが、住居どうしの重複は見られない。

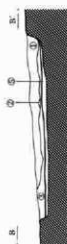
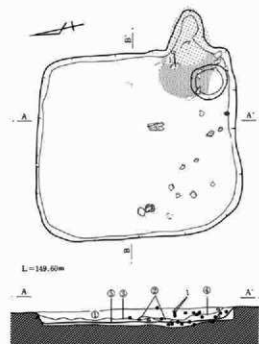
住居の掘り込みは、埋没谷埋土の暗灰黄褐色粘土中に行われている。このため住居の範囲は確認しにくく、殊に北壁方向では不明瞭であった。本住居は東西2m43cm、南北3m20cmのほぼ正方形に近い形状をとり、主軸方向はN-110°-Eを示す。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、床面まで約18cm残存している。床面は非常に不明瞭であったが、比較的平坦な面をなすものと考えられる。貼り床は地山の粘質土を主として施されている。南東隅壁際の電器には径50cm、深さ20cmの円形ピットが掘られている。なお柱穴、周溝は認められない。

掘り方では、南西隅において径約1mの浅い楕円状の掘り込みと、竈正面に、やはり小さな円形の窪みが検出された。その他の部分はほぼ平坦である。

住居跡の覆土は、4層に分層される。住居南半部には炭化物粒・焼土粒・灰を多く含む土層の分布が見られる。少量ではあるが、炭化材料も出土している。

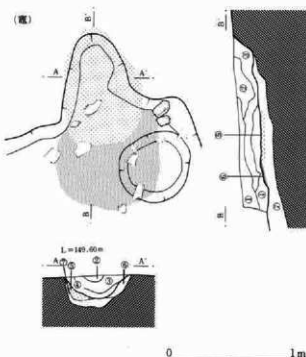
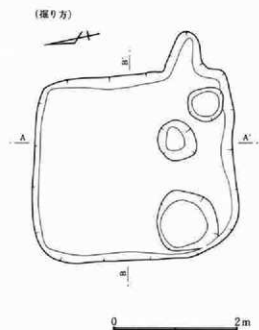
竈は、東壁の南隅にほぼ寄った位置に築かれている。燃焼部は壁外に張り出しており、全体に焼土化が著しい。また焚き口部周辺には多量の灰の分布が認められる。燃焼部の幅は48cm、煙道方向の張り出しは70cmを測る。

遺物は、竈周辺部と南壁際から少量の土器片の分布がみられたが、いずれも小破片で残存率は低い。羽釜や埴がある。



- ① 黒褐色土 軽石、焼土粒、炭化物粒を含み、多量のローム粒を含む。
- ② 黒褐色土 多量の灰を含む。
- ③ 暗茶褐色土 灰黄褐色土を多く含む粘質。
- ④ 暗褐色土 軽石、焼土粒を多く含む。ローム粒、炭化物は少量。
- ⑤ 暗褐色土 軽石を含み、灰黄褐色粘質土を混じる。

- 竈
- ① 暗茶褐色土 軽石を含み、少量のローム粒、焼土粒を含む。
  - ② 暗茶褐色土 軽石、焼土粒を含む。1層に類するが、含有物は多い。
  - ③ 暗茶褐色土 多量の焼土ブロックを混じる。天井材が板状に崩落したものと思われ、広い面で確認された。
  - ④ 暗茶褐色土 多層に比して黒味が著る。焼土粒ローム粒を少量含む。
  - ⑤ 赤化硬皮部 (赤褐色土)
  - ⑥ 暗褐色土 ローム粒、軽石を含む。
  - ⑦ 暗茶褐色土 ローム粒を含む。



第254図 316号住居跡実測図

第3章 平安時代の遺構と遺物



第255図 316号住居跡出土遺物実測図

316号住居跡出土遺物観察表

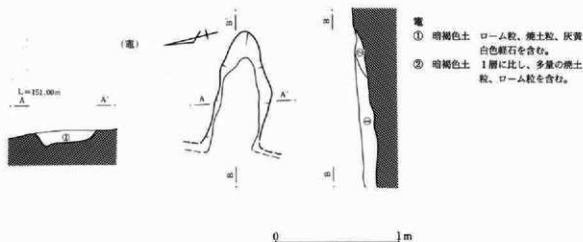
検出番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (K)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備 考
255-1 86	須恵器 羽 釜	竈内 瓦残存	口(25.2) 底 — 高(14.8)	①彩粉～小石 ②酸化焰、やや軟質 ③赤褐色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。 口縁部は横断で。胴部 外面覆削り。内面瓦 痕で。	
255-2	須恵器 埴	覆土中 瓦残存	口(14.0) 底 — 高(3.7)	①砂粒 ②酸化焰、やや硬 質 ③(外)橙色 口縁黒褐 色 (内)黒色処理	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端 部は小さく外反する。	

317号住居跡 (第256図、図版54)

本住居跡は、竈燃焼部および煙道部の焼土化した面のみが残存しているのみである。第5次調査区南の小支谷に面する傾斜部、11-12グリッドに位置する。

大部分が浸食をうけ詳細は不明であるが、東向き竈の煙道は細長く残存長60cmを測る。先端部の焼土化が顕著である。

遺存状況が悪く、遺物は認められなかったが、竈の形状等から平安時代の所産である可能性が高い。



第256図 317号住居跡実測図

## 331号住居跡 (第257~259図、図版55・86・96・97)

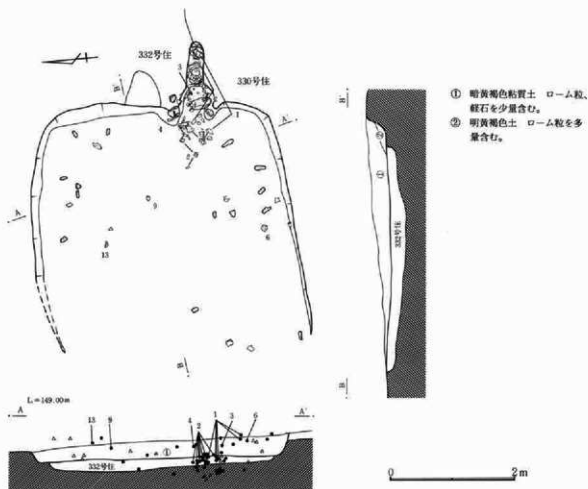
本住居跡は、第5次調査区南西隅の西谷川が刻む崖線際の緩傾斜面にあり、16-4グリッドに位置する。重複関係としては、先行する330号住居跡(古墳後期)の一部を破壊し、また332号住居跡(平安)の上部にほぼ重なって築かれている状況が確認されている。

住居の掘り込みは、大部分が332号住居跡の覆土中にとどまるが、外周部は暗灰褐色粘質土に施されている。西壁周辺は崖線の崩落により残存しないが、南北4m18cmを測り、長方形の平面形を呈すると考えられる。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、最大28cmが残存している。床面には貼り床の形跡は認められず、全体的に軟弱であった。床面上には貯蔵穴や柱穴、周溝などは検出されなかった。

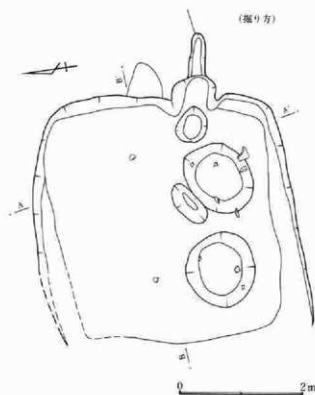
掘り方面には、南壁寄りの東側に直径120cmほどの円形の土坑と、西側に120cm×100cmのやや楕円形の土坑が掘り込まれている。また竪前部は円形に窪んでいる。

覆土は、2層に分層され、自然堆積状況を示している。

竪は、短辺である東壁の中央よりもやや南に寄った位置に構築されている。焚き口部はほぼ壁の位置にあるが、わずかに壁の内側に張り出している。燃焼部から煙道部は壁の外側に突出している。焚き口部には袖石が埋設されて残存しており、また天井石が燃焼部内に転落した状況だけが認められており、石組の構造であることがわかる。焚き口部の幅は42cm、燃焼部の張り出しは50cmである。また煙道部は燃焼部から段状に移

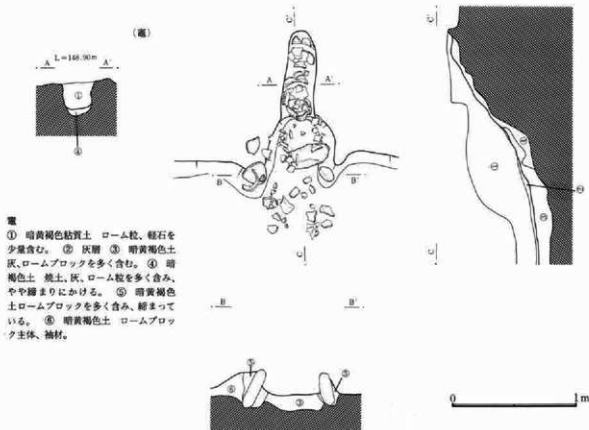


第257図 331号住居跡実測図(1)



行し、緩やかに傾斜して上方へ向かっている。煙道の掘り込みの幅は24cmで、長さは68cmを測る。なお煙道部分には、底部のない土師器の甕を組み合わせて使用している。甕の口縁部は燃焼部側を向いており、最低2個体が組合わされている。

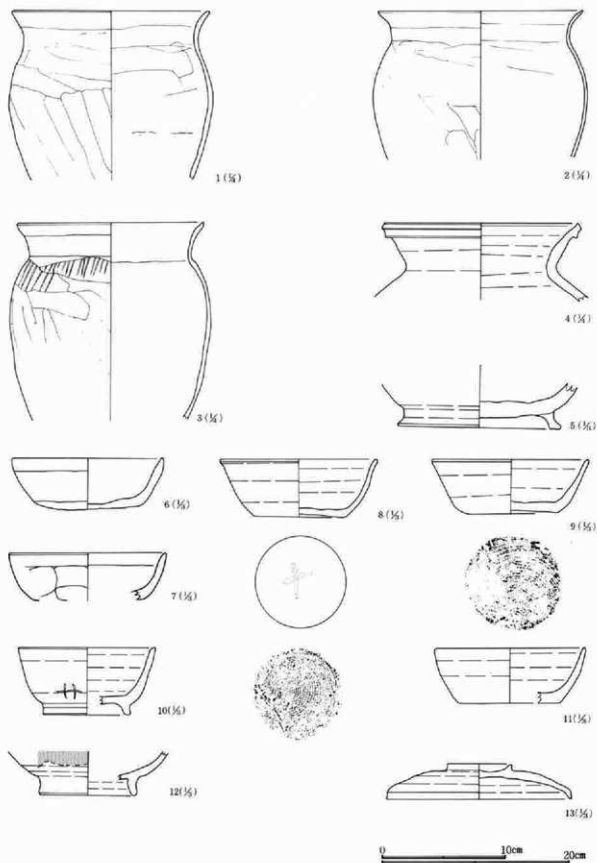
遺物は、ほとんどが竈内に集中し、土師器の甕が多い。この他に、床面上に土師器の坏、須恵器の坏・埴・埴・蓋と、灰軸陶器の埴が散漫に出土している。底部に「十」の墨書のある坏も含まれている。これ以外に、蔦編み石と考えられる棒状を呈する石の出土が南壁際から出土している。



竈  
 ① 暗黄褐色粘質土 ローム粒、軽石を少量含む。 ② 灰層 ③ 暗黄褐色土灰、ロームブロックを多く含む。 ④ 暗褐色土 焼土、灰、ローム粒を多く含む、やや締まりにかけらる。 ⑤ 暗黄褐色土ロームブロックを多く含む、締まっている。 ⑥ 暗黄褐色土 ロームブロック主体、袖材。

第258図 331号住居跡実測図(2)

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第259図 331号住居跡出土遺物実測図

### 第3章 平安時代の遺構と遺物

#### 331号住居跡出土遺物観察表

押図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、整・成形技法の特徴	備考
259-1 86	土師器 甕	甕内 下半部欠損	口 20.6 底 — 高(18.0)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③にぶい赤褐色	口縁部は強い横溝でにより「コ」字状口縁への途上にある形状をとる。口縁部横溝で、胴部 外面磨り。内面磨面無。	甕の煙道に転用 内外面に保付着 内面磨面あり
259-2 86	土師器 甕	甕内 下半部欠損	口(22.0) 底 — 高(15.5)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや軟質 ③赤褐色	「コ」字状口縁。口縁部横溝で、胴部 外面磨り。内面磨面無。	内外面に保付着 内面磨面あり
259-3 86	土師器 甕	甕内 下半部欠損	口(20.0) 底 — 高(20.8)	①砂粒、雲母 ②酸化焰、やや軟質 ③(外)明赤褐色 (内)褐色	「コ」字状口縁。口縁部横溝で、胴部 外面磨り。内面磨面無。	甕の煙道に転用 内面磨面あり
259-4 86	須恵器 壺	甕内 片残存	口(20.6) 底 — 高(8.2)	①砂粒～小石、石英 ②還元焰、硬質 ③(外)暗灰色 (内)暗オリーブ灰色	口縁部は頸部で強く屈曲して外反して立ち上がる。底部は口縁部をなす。内外面ともにロクロ整形。	
254-5	須恵器 瓶	張り方中 片残存	口 — 底(13.0) 高(3.7)	①砂粒、雲母 ②還元焰気味、やや軟質 ③にぶい黄褐色	高台部はやや外反して開く。内外面ともにロクロ整形。	
259-6 86	土師器 坏	床面+30 ほぼ完形	口 12.2 底 8.8 高 4.1	①砂粒～小石、白色細粒 ②酸化焰、やや軟質 ③褐色～黄褐色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は強い腹で薄くそがれる。内面横溝で、外面磨り。	
259-7	土師器 坏	床面+3 片残存	口(12.3) 底 — 高 —	①砂粒、白色細粒、雲母 ②酸化焰、硬質 ③褐色	体部はやや内湾して立ち上がる。口縁部横溝で、内面丁寧な磨で、外面磨り。	
259-8 86・96	須恵器 坏	不明 片残存	口(12.5) 底 7.3 高 4.6	①砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③(外)灰色 (内)灰白色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	底部に黒着「+」
259-9 86	須恵器 坏	床面+20 口縁部欠損	口 12.5 底(7.5) 高 4.3	①砂粒～小石 ②還元焰、やや軟質 ③灰色～灰白色	体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部は外反。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
259-10 86・97	須恵器 高台付埴	不明 片残存	口(11.0) 底(7.3) 高 5.3	①砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③(外)灰色 (内)灰白色	体部は下部に張りをもち直線的に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形、付高台。	外面下部に「竹」 線刻
259-11	須恵器 坏	不明 片残存	口(12.2) 底(8.6) 高 4.2	①砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰オリーブ色～灰白色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面ともにロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	
259-12	灰釉陶器 高台付埴	覆土中 片残存	口 — 底(8.0) 高(3.6)	①轆轤 ②還元焰、堅緻 ③灰白色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。高台部はやや強い腹で、内外面ともにロクロ整形。横け掛け。	
259-13	須恵器 蓋	床面+30 片残存	筒 5.2 口 14.8 高 2.8	①砂粒、黒色鉱物 ②還元焰、硬質 ③灰色	天井部は低く碗状の筒のみが付く。内外面ともにロクロ整形。	外面に自然降灰 の輪がかかる

#### 335号住居跡 (第260～262図、図版56・86)

本住居跡は、第5次調査区南西部の台地の末端にあり、16-4グリッドに位置する。

他の住居跡との重複関係はみられない。

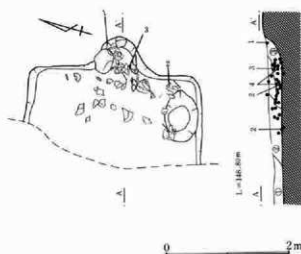
当地点は埋没谷の端部にあたり、住居の掘り込みは谷の埋没土である暗灰茶褐色粘質土に施されているため、確認は困難であった。住居の西半部は現在の西谷川の壁線外になり残存しない。残存する部分は南北2m80cmで、主軸方向はN-72°-Eを示す。壁は垂直に立ち上がり17cmを測る。床面には貼り床は施されず、やや不明瞭である。南東コーナー際には、径82cm×50cm、深さ23cmの楕円形の形状を呈する貯蔵穴が設けられている。柱穴や周溝は認められない。

覆土は、谷埋土に類し、不明瞭である。

甕は、東壁の中央部に構築されている。燃焼部の多くは壁の外側に張り出しており、周囲は大小の石を使

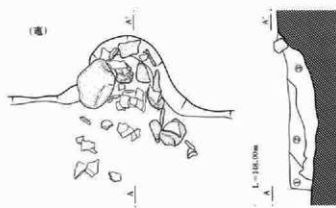


## 第2節 竪穴住居跡と出土遺物



用して囲んでいる石組の構造を示す。燃烧部の張り出しは57cmを測る。火床面は部分的に焼土化が認められる。

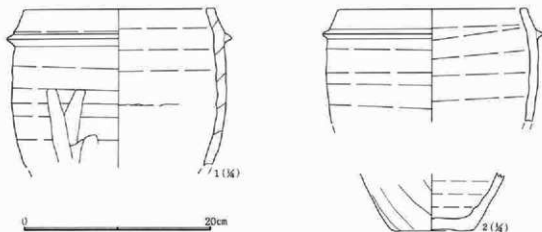
遺物は、竪内および貯蔵穴周辺でまとまった分布がみられる。特に羽釜の個体数が多く、竪の補強材として転用されたものが主体と考えられる。



- ① 暗黄褐色土 ロームブロックをわずかに含む。
- ② 黒褐色土 丘陵上部からの流出土の再堆積でもろい。
- ③ 暗褐色土 焼土、灰を含まずやや締まっている。

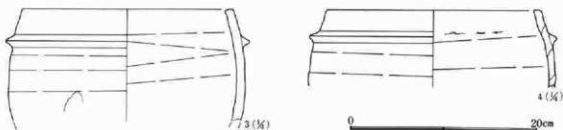
竪の土層は、住居覆土のNoと対応する。

第260図 335号住居跡実測図



第261図 335号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物



第262図 335号住居跡出土遺物実測図2)

335号住居跡出土遺物観察表

挿入番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (8)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形、装・成形技法の特徴	備 考
261-1 86	須恵器 羽 蓋	甕内 瓦残存	口(20.4) 底 — 高(16.7)	①砂粒～小石 ②酸化焙気 味、やや軟質 ③によい黄 褐色～によい黄褐色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。 内外面ともにロクロ整形。外面下半部は削削 り。	内外面に煤付着 薬材への転用
261-2 86	須恵器 羽 蓋	甕り方中 瓦残存	口(20.2) 底 (8.7) 高(16.7)	①砂粒 ②酸化焙気味、や や軟質 ③(外)暗灰黄色 (内)灰黄褐色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。 内外面ロクロ整形。外面下部は削削り。	煤付着
262-3	須恵器 羽 蓋	床面+3 瓦残存	口(22.6) 底 — 高(11.8)	①砂粒、雷母 ②酸化焙気味、やや硬質 ③浅黄褐色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。 内外面ともにロクロ整形。	煤付着
262-4	須恵器 羽 蓋	床面+10 瓦残存	口(23.0) 底 — 高(8.1)	①砂粒～小石、白色細粒 ②酸化焙気味、やや軟質 ③褐色～浅黄褐色	口縁部はわずかに内傾し、端部は強い面取り。 輪横直あり。内外面ともにロクロ整形。	内面に粘土付着 薬材への転用

## 第4章 ま と め

### 第1節 矢田遺跡の平安時代のカマドと煮沸具

#### 煮沸具の使用痕跡の観察結果から

外山 政子

#### 1 はじめに

矢田遺跡は縄文時代から中世、近世に至るまでほぼ継続して人々が住み続けた集落遺跡である。特に古墳時代後期から奈良、平安時代終末期にかけての竪穴住居跡が多数認められている。その総数は600軒をこえており、現在もなお調査中である。

今回報告を行うのは、既調査区域のうちの南西部分で、しかも平安時代と認定できる竪穴住居跡を対象としている。調査継続中の遺跡でもあり、一部分で全体を語るべきではないが、この南西部分周辺は平安時代の遺構分布が濃密で、当時期の集落を構成する主要部分と推定される。この区域の検討から矢田遺跡の平安時代の全体様相を類推することも、あながち無駄なこととはいえないだろう。

古代の人々がどのような生活をしていたのかは、近年の資料の集積や調査方法の進展の結果によって明らかにされつつある。本遺跡からも炭化米や炭化穀類が出土し、その食生活の一端を垣間見せている。また、炭化した布や糸作りのための紡錘車の出土、あるいは須恵器の蓋のつまみや土師器の小皿に残された赤色顔料は、古代の矢田遺跡の人々の生活が多様であったことを示している。生活は細かい具体的な作業や行動の集積であり、私達が手にする資料にも古代の人々の作業と行動の結果が詰め込まれていると言ってよいだろう。だとすれば、その資料の検討から当時の人々の作業や行動を明らかにすることも可能だろう。

想定される多様な生産活動、生活作業の場面で、加熱作業は重要な役割を果たしたと思われる。今回の矢田遺跡の調査報告にあたっては、加熱作業に関する遺構と遺物を検討して、当地域における古代の生活復原の一助としたい。

本遺跡で確認されている加熱作業に関する遺構は、竪穴住居に作り付けられているカマドと小鍛冶施設である。このうち小鍛冶施設は今回の報告対象地区内では一ヶ所で、不整形の土坑に焼土と鉄滓が認められている。遺構数も少なく、ルツボなどの存在も明確でなく、わずかにフイゴの羽口がカマドの支脚として転用されているのみであるので、資料の増加を待って検討することとする。従って、ここではカマドをとりあげて、主にその構造について検討を加える。

土器類は生活用具の重要な一部で、当然使用痕跡を止めていていると思われる。また、使用方法と使用痕跡は相関関係にあり、密接に結び付いている。ある特定の使用方法によれば、その痕跡は特定の形を示すだろう。その使用痕跡の形を抽出することが出来れば、逆に使用方法や使用施設の特定が出来ると考えられる。このような考えのもとに、ここでは土器の使用痕跡を手掛かりに使用施設との関連を検討することとする。

#### 2 矢田遺跡の平安時代のカマドについて

群馬県地域で住居内にカマドを造り付けるようになるのは、古墳時代中期から後期にかけてである。その後、平安時代の終末にいたるまで、カマドは加熱施設の主体をなしている。

本遺跡においても、古墳時代後期から奈良・平安時代までの竪穴住居跡にカマドが確認されている。住居間や他の遺構の重複、あるいは後世の耕作によって攪乱を受け確認できないものを除くと、ほぼ100パーセン

ト付設されているといつて良いだろう。

しかし、一般的に平安時代の住居跡は確認面から床面までが浅く、後世の耕作による影響も受けやすいのか、遺存状態が良くない。従ってカマドの残りも同様で、使用状態が推定できるほど構造が残っている例は希である。本遺跡で今回報告する住居跡95軒のうち、使用時点に近い状態を示している例は皆無である。そうした中でも、焚き口先端部に据えた石や支脚が残っていて、構造が推測できるカマドの例をあつめたものが第263図と第264図である。

本遺跡の当期のカマドの設置状態と構造を列挙すれば次のようなことが言えるだろう。

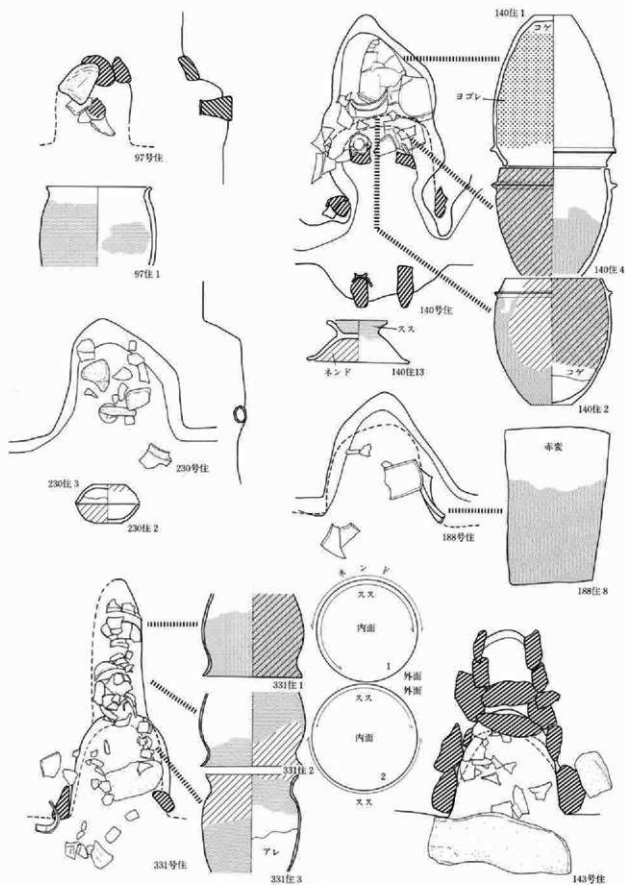
- 1、住居東辺やや南よりに設置している。
- 2、住居の壁を掘り込んで燃焼部と煙道部をつくりだす。従って焚き口先端は、ほぼ住居壁のラインにそろう。
- 3、壁構造材としては、
  - a 素掘り、b 粘土を張る、c 石組み、d 石と土器の破片を土および粘土で固める、などが認められている。
- 4、焚き口部は左右先端に石を埋め込んで、そのうえにやや長めの石を乗せて鳥居状に組む。石の代わりに瓦や大形土器の破片を補強材として使う場合(188号住)も認められる。
- 5、燃焼部は古墳時代のカマドに比べて奥行きが短くなるが、幅は大きな変化を見せない。  
平面形状はやや長めの半円状である。
- 6、支脚は残っている例が少なく、カマド86基のうち僅か13基である。そのうち1基は(139号住)痕跡で推定している。やや細長い石を使い、燃焼部幅のほぼ中央に位置し、一個であることが多い。二個支脚が置かれていた例は本遺跡では一例のみであった(140号住)。フィゴの羽口を使っている例もある(201号住)。また支脚石の上に塊を伏せたり、土器の破片を乗せて高さの調整をしている場合(97号住、140号住)が見られる。
- 7、煙道部は燃焼部底面より高く段をもって、長く壁外につくり出している<sup>(註3)</sup>。傾斜はやや斜め上方に導く程度で、遺存状態が悪いこともあって、特別な法則は見いだせない。  
煙道部の両脇に石を据えて、そのうえに石を渡して蓋状にしたもの(143号住)、燃焼部との境にのみ石を据えて鳥居状しているもの(79号住北、141号住、263号住、277号住)もある。底部及び下胴部を欠いた土器器カメや羽釜を重ねてならべ、煙突の補強としたもの(140号住、331号住)も認められた。
- 8、燃焼部天井の構造は、崩壊状態から石と羽釜、土釜などの破片を粘土でとめたものと推測できる。おもに煮沸具に羽釜や土釜が使われている時期のカマドの特徴と思われる。

大まかに言って当地域の平安時代は、煮沸具が土器器カメの時期から羽釜が主体になる時期、さらに土釜が主体となる時期の3期に分離<sup>(註4)</sup>できる。煮沸具の形態や材質の変化が、カマドの構造変化ともかかわっている可能性があると考えているが、今回の検討資料のなかでは具体的に変化を抽出できなかった。

しかし、強いて言えば、羽釜と土釜の時期のカマドは、ほぼ同一構造と見て良く、それに対して土器器カメが煮沸具の主体である時期のカマド(第263図、第264図、46号住、143号住、188号住、331号住)は、次のような傾向が指摘できる。



第263図 矢田遺跡・平安時代のカマド (1)



第264図 矢田遺跡・平安時代のカマド (2)

- ア、しっかりした石組みで構築するカマドが見られる。
- イ、カメを重ねて煙道としている例がある。
- ウ、補強の構造材として須恵器カメや瓦を使う例がある。
- エ、燃焼部天井材は粘土を使ったと思われる。

上記の事例は、前代の古墳時代や奈良時代のカマド構造から引き継いでいるものもあり、平安時代の一時期的みの特徴としてとらえられない可能性があるが、エ、で取り上げた燃焼部天井材は、8、でも指摘している羽釜や土釜の時期のカマドと大きな違いになるだろう。カマド構造を基準として画期を設定するとすれば、一つは煮沸具が土師器カメから羽釜に交替する時期と出来ると考えている。カマド構造の変遷とその意義については、別の機会に検討をすることとして、ここでは軒数も多く、構造がより分かりやすいと思われる羽釜と土釜の時期のカマド構造について確認しておく。

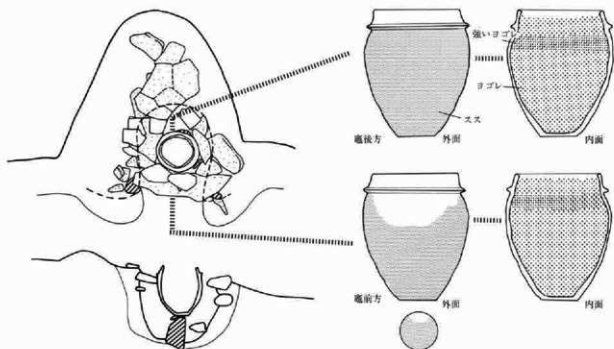
1、のカマド設置位置は、時期によって指向が変化する場合と、地域の自然環境に因る場合とが有るよう<sup>(註5)</sup>だ。矢田遺跡の西方に位置する羽田倉遺跡では、北東から北に向かった傾斜地に、等高線にそって住居をつくり、山側にカマドを設置している。しかし同じ遺跡内の平坦部や西斜面では、東カマドである。藤岡市中大塚遺跡、下大塚遺跡、上栗須遺跡、高崎市下佐野遺跡、群馬町三ツ寺山遺跡などで当期のカマドは東に設置されている。概ね平安時代には東カマドが定形化していて、矢田遺跡の集落もまた例外ではなかったと言えるだろう。

2から8、は構造の特徴にあたるが、同じような構造の特徴をそなえていて、遺存状態が良好なカマドの例を示したのが第265区上段である。群馬県北部の月夜野町村主遺跡3号住居跡のカマドで、羽釜が懸かったまま出土している。当期のカマド使用状態を示す良好な資料である。住居東辺南寄りに、壁を掘り込んで設置している。焚き口先端に石をおき、細長い石を渡して鳥居状にし、支脚は燃焼部幅のほぼ中央である。燃焼部天井は石と土器を粘土でとめて、羽釜をおさえている。羽釜は1個懸けである。この村主遺跡3号住居跡のカマドが崩壊した状態を想定してみると、矢田遺跡やその他の遺跡の当期のカマドの状態とよく対応してくる。やや離れた地域で確認されているカマドの構造がほぼ同じであるという事は、平安時代のカマドの構造が基本的に規格性があり、定形化していた可能性がたかいたといえるだろう。本遺跡のカマド構造も、特異なものではなく、当期に一般的なものであったと言える。

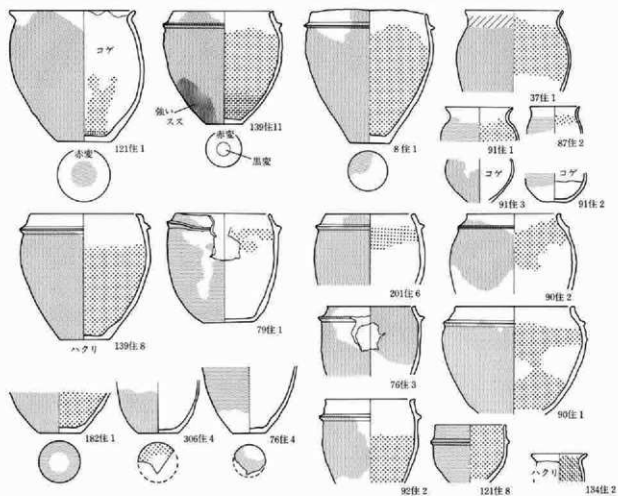
比較資料として、古墳時代後期のカマドの代表例を示したものが第266区である。長根羽田倉遺跡74号住居跡のカマドである。住居内にカマド本体を作り付けていること、燃焼部の奥行きがやや長いこと、支脚が極端に左に寄っていること、燃焼部内に土器片や石の落ち込みが見られないこと、長カメが2個懸けてあること、などが構造的な特徴といえる。このタイプのカマドは、カメを複数(2個から3個)懸けるのが基本である。しかも、カメを粘土でくるむように張り、固定している。カマドの壁と複数のカメと天井材として充填する粘土とで重量を拡散させて、バランスをとった構造である。懸けは<sup>(註12)</sup>ずしは可能であるが、通常は「はめごろし」の状態といえる。

これにたいして、村主遺跡3号住居跡に代表される平安時代のカマドは、羽釜を1個だけ懸けている。羽釜は粘土で固定するのではなく、まわりからせりださせた石や土器片で支えるだけである。煮沸具の重量は、支脚が支えており、カマドの懸け口は重量を受けない。粘土で煮沸具を固定しない分だけ、懸けは<sup>(註12)</sup>ずしが簡便になったと思われるが、懸け口と煮沸具が密着しにくいので、多少のススめれが生じただろうと考えられる。また、煮沸具を1個懸けとするためには、当然支脚の位置も変わってくる訳で、支脚が燃焼部幅のほぼ

第4章 若干の考察およびまとめ

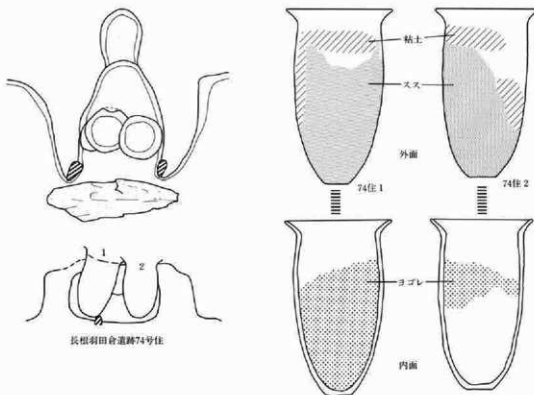


羽葉をかいたまま確認されたカマド（月夜野町 村主道隆3号住）



第265図 煮沸用土器の使用痕





第266図 古墳時代後期のカマドとカメ

真ん中に設置していることは注目される。

このように構造が異なる古墳時代のカマドに使われた煮沸具と、平安時代のカマドで使われた煮沸具とはその使用痕跡も違って来る筈である。そこで、次に煮沸具の使用痕跡について検討することとする。

### 3 煮沸具と使用痕跡について

土器は長期間土中に埋まっていたことによって、土質や雨水、植物、動物など多くの自然要素の作用を受けて変質し、本来の使用痕跡が失われてしまったり、あるいは全く異なった物質が付加されている場合もあり得る。そこで、使用痕跡を認定するにあたっては二次加熱の痕跡を中心にし、次の点に留意した。

外面は二次加熱痕跡

- ① ススの付着（はっきりした強いススだけでなく、土器の表面に吸着しているうすいススも含む）
- ② 繰り返して行われる加熱によって生じた器面の変色（赤色に変化する場合と黒色に変化する場合がある）と器面の剝離

内面は内容物があって加熱された場合を想定して

- ① オコグなどの炭化状のこびりつき
- ② 内容物が加熱されて器面にしみこむヨゴレ
- ③ 器面の剝離と荒れ

である。内面の痕跡のうちオコグは比較的明確に認定できるが、ヨゴレについては土器を焼成するさいの変色や土中で受けた変化と混同しやすい。しかし、土器の胴部が口縁部へむけて内湾するあたりに帯状にめぐること、胴部から底部にかけて観察できること、外面の加熱痕跡と対応していることから「ヨゴレ」を使用

痕跡とした。内面の器面の剝離と荒れは、内容を掻き回したりする作業を想定して観察した。土師器のカメ類の場合は観察できたが、羽釜や土釜では確認できなかった。土師器と羽釜類の強度の違いに寄るものだろう。

◎ 転用の使用痕跡

こうした基準によって観察をおこなったところ、内面にススが附着しているもの、粘土が附着しているもの、粘土とススが附着しているものがかなりの割合で認められた(第267図)。外面にもススと粘土が認められ、特に粘土の附着の様子に規則性が見られない。また、断面にまでススや粘土が附着している。これらの土器は接合率も悪く、完形と出来ないものが多い。このような痕跡は、器本来の使いかたに因って出来るものとは認められない。多くは破片状態で転用されたものだろう。出土地点を調べてみると圧倒的にカマド内が多く、ついで貯蔵穴周辺が多い。カマド材として土器が転用されていたことが、二次的な使用痕跡の観察からも検証される。第264図に示した97号住居跡のカマドは支脚の高き調整用として土釜の破片(97-6)をのせている。この土器片には、外面と内面の一部にススの附着が見られる。また140号住居跡でも支脚の上に塊を伏せて乗せている。この塊(140-13)は内面に粘土が、高台外面と底部外面にはススが附着している。230号住居跡のカマド内から出土している坏(230-2・3)や、第267図に示した坏、壊塊(92-13、94-9など)も同様に内外面にススや粘土が附着し、転用の痕跡を残している。第264図に示したものは出土位置と転用の痕跡との関連が説明しやすい例であるが、出土地点に拘わらず、転用の痕跡から、その器が置かれていた最終的な位置に戻せる可能性もあるだろう。カマド材としての転用だけでなく、カマドまわりや貯蔵穴まわりで敷き台や置き台としての用途も考えられる。転用には羽釜、土釜だけでなく、甕や須恵器大カメなど身のまわりにある材料を有効に再利用している。

◎ カマド使用の煮沸具の使用痕跡

煮沸具として通常の使用状態であれば、少なくとも内面にススや粘土は附着しないだろう。内面の焦げ付き、あるいは底部から口縁部のやや下あたりにかけて認められるヨグレが、外面の加熱痕跡とともに煮沸具の使用痕跡であろう。本来の使用痕跡をのこしていると思われる土器を示したものが、第265図下段である。これらの土器の使用痕跡が、カマドに懸けることによって生じたものであるかどうか、矢田遺跡での出土状況からは検証できない。そこで、さきの村主遺跡3号住居跡のカマドにかかったままの羽釜の使用痕跡と対比して検討する。(第265図上段)

村主遺跡3号住居跡の羽釜は、

☆外面は、鉦下までまんべんなくススがまわる。焚き口に向いた正面の胴部上方はススが薄く、炎が左右に分かれて後方に導かれていくようすが見られる。羽釜が燃焼部のほぼ真中に据えられていて、壁との間の空間が均一に保たれて居るため、ススが左右偏りなくまわるようだ。

☆外面に粘土は附着していない。燃焼部天井の構造が羽釜を粘土で固定していないことに因るのであろう。

☆内面はまんべんなく小さいヨグレが口縁部下までみとめられるが、胴部が口縁部にむけてすばまりかけあたりに帯状に強いヨグレがめぐる。ちょうど外面の鉦下のあたりに対応する。

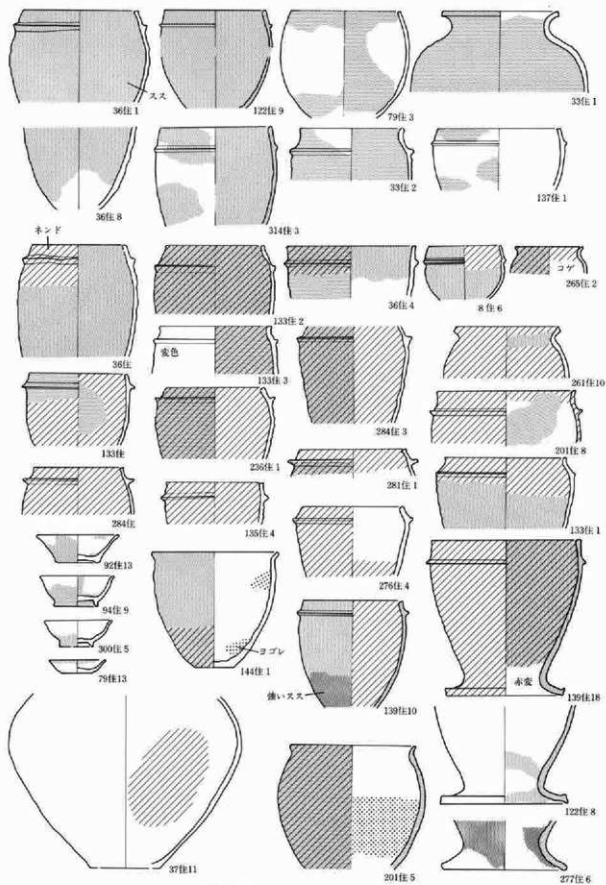
☆底部はススが着かない部分が半円状に残る。これは支脚に乗っていた位置を良く示している。

のような使用痕跡が観察できる。

これに対して矢田遺跡の煮沸具は、

☆外面は鉦下まではほぼまんべんなくススが見られるが、一部分鉦をこえて口縁部にススが附着する。ある程度密閉されていた炎が隙間から漏れ出した「スス漏れ」状態のようである。土釜でも同様である。

第1節 矢田遺跡の平安時代のカマドと煮湯具



第267図 転用した土器の使用痕

☆外面に粘土は付着していない。

☆内面はヨゴレが外面の加熱痕跡に対応して見られる。上胴部から口縁部にかかるあたりから底部にかけてあり、内底面にはオコゲや強いヨゴレが見られる。

☆底部には支脚の痕跡を残すものが多い。

のような使用痕跡を観察できる。

村主遺跡の例ではスス漏れ状態を観察できなかったが、先に述べたカマドの天井部構造から考えれば、スス漏れ状態は当然起ころう。がやいろりのような、炎を閉じ込めないオープンシステムの加熱施設を使用した場合は、ススは口縁部までほぼ全体にまわる。「スス漏れ」は、むしろカマド使用の証拠とできよう。また、底部の痕跡は支脚に乗せて使用した際に着くものであることは明らかである。これもカマド使用の証拠となろう。

以上のことから矢田遺跡で観察できた煮沸具の内、器本来の使われかたをしたと考えられるものは、カマド使用によるものと出来るだろう。しかし、平安時代も羽釜や土釜が煮沸具の主体を占めるようになると、古墳時代後期に見られるほどにはカマドの使用痕跡として明確なパターン(図266)を抽出しにくくなっている。これはカマド構造の変化、特に燃焼部の天井を粘土によって密閉しなくなることに因るものであろう。

#### 4 おわりに

矢田遺跡の平安時代のカマド構造と煮沸具について検討してきたが、カマドの構造は古墳時代のカマドと対比して、幾つかの変化が確認出来た。特に平安時代の羽釜や土釜を使う時期には、一つの焚き口の一つの「ナベ・カマ」のカマドへ変わっていくのではないだろうか。古墳時代後期のカマドに見られるような、幾つかの料理を一緒に加熱するシステムからみれば、大きな変化といえよう。

しかし、矢田遺跡特有の現象として認識できるものは無かったと言って良いだろう。カマドはおそらく日々の生活で必需品であっただろうから、個々の家で工夫が有り、一集落の中でも何か特異な傾向が有るのではないかと内心考えてきていたが、実際には構造上の共通項を改めて確認する結果となった。カマドの構造といえども矢田遺跡だけで完結するものではなく、地域の動向の中でとらえなければならないだろう。

カマド構造の変化にともなう、煮沸具の使用痕跡にも変化が確認できた。この変化も当然ながら、複数懸けのものから、一個懸けのものへの変化を示しているようである。もちろん実際にカマドの中には支脚が2本設置されている例もあり、総て一個懸けになったといえる訳ではない。矢田遺跡の煮沸具はほぼカマドによる使用痕跡をのこしていると言って良く、生活上に必要な加熱作業は、総てカマドで行っていたこととなる。この場合のカマドは、竪穴住居内に作られたものだけではないだろうが、構造的には同一のものであった可能性が高い。これらのことも、矢田遺跡の集落内特有の現象ではないだろう。カマドについては構造上の問題や実際生活面の問題だけでなく、火を取り扱う場合の人々の精神生活に踏み込みうる可能性も持っているようであるが、まずは前者の検討を充分に行いながら、なにか精神生活の分野であるのか、できるだけわけて検討してゆきたいと考えている。

## 注

- 1 ここでは、燃焼部の奥行きが短くなるとしたが、燃焼部を焚き口先端から支脚位置までと、支脚位置から奥壁までとに分けて比較した場合、変化を示すのは後者の数値である。前者、焚き口から支脚までの距離は、大きな変化をみせない。焚き口から支脚までの間は、床も焼土化が著しく、火を焚く場であったとしてよいだろう。この部分に変化が少ないということは、火を焚く際の機能的な、必要最低限の空間であったと言える。
- また、燃焼部の短くなるということは、燃焼部の面積が縮小することであり、同時に、燃焼部天井の面積も小さくなることでもある。天井部分の構造変化ともかかわって、注目したい現象である。
- 2 支脚は、カマドそのものの遺存状態が悪いこともあって、確認できないことが多い。この事実から支脚は、住居廃棄の際にカマド火の移動に伴って、抜き去り、新しいカマドに移すのではないか、という説がある。興味のある解釈だが、住居内に残されている石や、土器には、カマドに使用したと思われる痕跡も認められるので、カマドから「ナベ・カマ」をはずす際に、天井材と共に壊されて、廃棄されている可能性も否定できない。
- 住居の廃棄に当たって、生活用具の移動と廃棄が行われたと思われるが、それに伴ってカマド施設が壊されるのか、壊れるのか、あるいは逆に、現況を保って遺されているのはなぜかを、遺物の検討も含めて細かく検証する必要があるだろう。
- また、支脚は、必ずしっかり埋め込んで使用するものであるのかどうか、遺存状態や、掘り方の痕跡から再確認すべきだろう。カマドにかける「ナベ・カマ」は、支脚の上に乗せて、重量はすべて支脚が支える構造と思われる。火をくべる際に、支脚に当たって、ずれたりすれば危険である。しかし、重量がしっかりとかかっていることがかえって幸いして、そう簡単には動かないのではないだろうか。「ナベ・カマ」の据え直しの際には、支脚の高さを調整した。位置も多少ずらす必要があるはずである。カマドを使う場面で、実際の「使い勝手」の面からも、遺構や遺物の在り方を検討すべきではないだろうか。
- 中沢 悟 「大原II遺跡・村主遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
- 3 カマド本体も勿論であるが、煙り出しの構造は、住居の上層構造、屋根のよきおろし、壁の立ち上がり位置と密接な関係をもって設計されていたと考えられる。また、地域の土質によっても、工夫を余儀なくされただろう。従って、形態変化があるとなれば、時間差のほか、地域差も大きな要素として考える必要があると思われる。
- また、煙道部が、燃焼部床面より段をもって高く作られていることは、燃焼効率の上から有効であるという指摘がある。燃焼部の奥行きが短くなることと、煙道の位置が高くなることは、今のところ直接結びつかないが、支脚位置から奥壁までの空間の在り方と、煙道の作り出し方は、注目しておく必要があるだろう。
- 斎藤利昭 「駒川扇状地における竈穴住居跡の竈構築法について」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 創立十周年記念論集 1988
- 4 ここでは、主に群馬県中央～西部地域をさしている。東部と西部とは、若干様相が異なる。東部では、羽釜の導入をせずに土釜に移行する傾向にあるようだ。
- 小島敦子 「賢茂遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
- 5 鹿沼栄輔 他 「長根羽田倉遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
- 6 斎藤利昭 他 「上栗田遺跡・上大塚遺跡・中大塚遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- 7 女塚和志雄 他 「下佐野遺跡II地区」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
- 8 飯塚 卓 他 「下佐野遺跡I地区」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- 9 井川達雄 他 「三ツ寺田遺跡・保原田遺跡・中里天神塚古墳」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
- 10 中沢 悟 他 「大原II遺跡・村主遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
- 11 註5に同じ
- 12 外山政子 「群馬県地域の土器器種について」 『研究紀要 6』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- 13 註11に同じ
- 粘土で充填して固定したカマは、カマド天井部を水で濡らして力を加えれば、割合簡単にはずれる。この際、天井部分は、かなり大きく壊れる。
- 14 長根羽田倉遺跡の古墳時代後期の土器観察では、「アレ」として観察できた。
- 註5 文献中、外山政子「羽田倉遺跡の煮沸具の観察から 古墳時代を中心として」
- 14 こうした転用可能な土器については、土器片のまま固化する必要もあるかと思う。一方では、器の全体像も提示する必要がある、復元や図化の方法を工夫したい。
- 15 同様の例は、長根羽田倉遺跡第117号住居跡のカマドで確認されている。
- 註5 文献

## 第2節 矢田遺跡出土の紡錘車から

春山秀幸

### 1 はじめに

矢田遺跡の発掘調査が行われる中では、竪穴住居跡をはじめとした多くの遺構と、土器類に代表される生活用品が非常に多数出土している。これらを通して矢田遺跡の集落の構造や変遷、古代の生活のありさまなど様々なことが明らかになってくるものと思われる。

筆者らは、かつてそのような生活用品の中で「紡錘車」に注目し、県内の資料の集積の成果を通して古代の布生産へのアプローチを行った。その結果、紡錘車に関する幾つかの見通しが得られた（中沢・春山・関口 1988）。本文では、その成果をもとに、矢田遺跡出土の紡錘車を対象として、前回ふれられなかったことを含め紡錘車から得られる情報を整理してみたいと思う。

矢田遺跡では、前回の集成段階から調査の進展に伴い多数の資料が増加している。現在も調査が継続している段階であり十分に整理された状況にはないが、必要なデータを抽出することに主眼をおく。

### 2 紡錘車の形状と法量

紡錘車の形状と法量は、製作段階で決定されており、その用途と密接に関連していると考えられる。

紡錘車の形状に関しては、前回大まかにA・B・C類の3分類（第268図参照）を示したが、実際にはA・B類は同一系統の意匠であり両者は漸移的な在り方を示し、区別しがたい中間的なものも存在している。C類に関しては弥生時代の紡錘車で注意されているように、幾つかの細分の余地はあろう。また、D類とした例外的少数例も実際には上記の3類が基本形となっているものが多い。

紡錘車の上下面に関しては、前回はやや不明確なままに、作業状況の想定や絵画などから糸の巻とり面を考えたが、今回は紡錘車に残された使用痕を詳しく観察し作業面を確定することによって、上下面を決定することに努めた。なおこれについては、紡錘車の使用痕の部分で改めて述べる。

紡錘車の法量に関しては、第268図のような重量・最大径の分布がみられる。またこれに厚さを加えた関係図が下図で、紡錘車のプロポーションの差と重量の差が図上で把握される。

古墳時代後期では、描かれる三角形はいずれもほぼ正三角形を呈し、その相似形ともいうべき状況を示している。このことは、矢田遺跡における該期の紡錘車は形状や法量には差異があるものの、比較的類似した要素をもつと言える。A類の製品には厚さがあるものが主で、B類とする薄いものは認められていない。

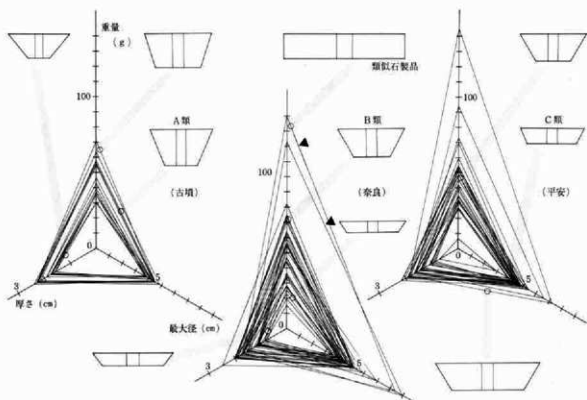
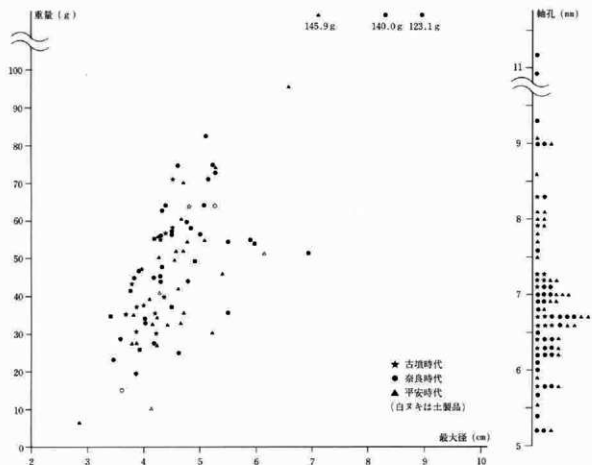
奈良時代には、断面台形のA類が全体に厚さを減少してくる傾向があり、B類の顕在化も認められる。径そのものはやや大形化するものがある。これとかかわって重量のばらつきが大きくなっている。このような製品の多様化と並行して、砂岩や凝灰岩などの滑石製品以外の素材のものや、紡錘車に類似する円盤状石製品も加わっている。

平安時代は、奈良時代に近い傾向を示し、特に最大径については同様な分布がみられる。しかし、厚さが薄いものがより明確化し、それにともなって重量の分布の中心がわずかながら軽量化を示している。

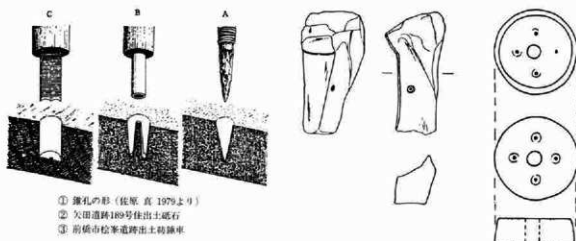
全体的な傾向としては、そのような数値的要素の変遷があるものの、個々ではある形状をもつものが時間的な経過の中で徐々に型式変化をして行くことは認められないようである。<sup>(註1)</sup>

重量の分布は、明確な群はなきないが複数のまとまりが存在するようである。重量に関しては、わずかな差が燃られる製品（糸）に影響するようなデリケートなものであるのが、使用時のいわゆる“使い勝手”のような中で取られるものかは、単純な実験結果からは読み取れない側面があろう。分布の漸移性からはあ

第2節 矢田遺跡出土の紡錘車から



第268図 矢田遺跡出土紡錘車の計測値



① 鎌孔の形（佐草 真 1979より）  
 ② 矢田遺跡189号住出土砥石  
 ③ 前橋市松峯遺跡出土紡錘車

第269図 穿孔具に関する資料

る程度のばらつきの許容範囲は想定される。

なお、紡錘車を使用する作業には、片撚りと、諸撚りがあり、2つの工程では重量の異なる紡錘車を使用する事例が知られている。いずれにしても紡錘車の使用の段階や撚る繊維の種類などにより、重量の異なる紡錘車が存在するものと考えられる。

第268図に示した孔径の分布に関しては、前回でも述べたようにまとまった分布があり、図のように、6.7mm～7.3mmの範囲内に孔径分布のピークが認められる。孔径は軸棒の買入部分の径に対応することが知られるが、これ以外の部分もほぼ近い太さを示すであろう。この数値が近似しているのは、やはり軸棒の強度と使い易さの関連で決定されていると考えられる。

一方、孔の形状には、複数のものが見られる。穿孔具としての錐には石製品や鉄製品、その他に木質のものも想定できる。錐の種類によっては孔の形状にも差があり（第269図）、実際に矢田遺跡出土の紡錘車の穿孔孔に使用された穿孔具にも複数のものが存在していることが判明している。

189号住居跡から出土した凝灰岩製の砥石の一面には、三又錐と考えられる痕跡が残されている。本例は三又錐（第269図C）の存在を示す資料であるが、前橋市松峯遺跡出土の石製紡錘車の上下面には孔と同径の三又錐の痕跡が4単位ずつ配されている。孔が先端で先細りしない特徴をもつこの錐は、穿孔具のひとつとして考えられる。なお両側からの穿孔例が多いため孔の断面観察は十分に行われなければならない。

紡錘車の製作址の事例が徐々に増加するなかで、紡錘車の製作に関する情報は徐々に明らかになってきているが、使用にかかわる側面は不明な部分が多いようである。

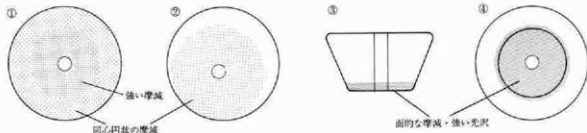
### 3 紡錘車の使用痕に関して

紡錘車が実際に糸に撚りをかける道具なのか、古墳の副葬品や祭祀などの専用の仮・儀器としての性格をもつものか、全く別の用途であるのかに関しての問題は、表面の観察によって判明する部分もある。

鉄製品の場合は、錆化した表面に糸状の繊維が取り込まれている例が認められることから、その用途については限定できよう。また、絵巻物などにも使用の状況を含めた描写があり傍証となる。石製品については使用状況をとどめる製品の遺存は少ないが、これに関しては民俗例や、各国にも同様の事例がある。

しかし、孔を有する円盤状の製品にはこれ以外にも、火鍛具や穿孔具の舞鍛用の弾み車など異なる用途が想定されており、その違いを確認するには、表面に残された使用の痕跡を観察する必要がある。





第270図 紡錘車の使用痕のパターン

石製品に使用されている石材は、圧倒的に滑石質の蛇紋岩が多数を占めている。この材は硬度が低いことから製作が容易で、仕上がりが美しい。これは同時に繊維程度の硬度のものの使用の痕跡を残すこととなる。土製品は余り摩滅などが顕著ではないものの、わずかに光沢などが認められるものも含まれている。なお鉄製品はその硬度や錆化から使用痕は期待されなため除外する。

紡錘車の使用痕に関してはこれまで余り注意がなされてきていないのが実情である。しかし一方、紡錘車の作業工程を、(糸、繊維の固定)→(回転)→(巻き取り)→(巻き戻し)とし、紡錘車の面に残された使用痕の観察から、いずれの工程の使用痕などの視点がすでに示されている(大木 1984)。ここではそれを参考にしながら、また異なる観察を進めようと思う。

使用痕を観察するに当たっては、使用法の問題が関係してくる。つまり、実用性を語るについて、どのような使用方法の結果としての使用痕なのかということが重要となるのである。

紡錘車の使用方法については以外に不明な部分が多いが、幾つかの方法が想定されている。最も一般的とされるのは、「吊り下げ法」という紡錘車を吊り下げて回す方法である。このほかに紡錘車の下端を両手で挟み、手を擦り合わせて回す方法、紡錘車を膝の上で回す方法(手押木・手押台を使用するのは同例とされる)などがある。紡錘車の軸の回転方向は縦・横と異なるものの、糸を巻き取る段階の作業は基本的に同じであり、使用痕はラセン状(細い繊維のため同心円状の線状痕としてみえる)を呈している(第270図①)。同図②の軸孔が中心からずれている例では、軸を中心とした最小径の同心円状の使用痕が残されており、それ以外には及ばないことから、軸挿への巻き取り作業の証左となっている。この使用痕は使用頻度や材質の硬軟で明瞭さが異なり、また径の1/2程度の範囲の摩滅が顕著で、外縁部が弱いのは糸の巻き取りの頻度と糸の締めりによろ。孔の縁辺の摩滅が弱い例も多いこともこれとかわかるものであろう。

しかし、同心円状の使用痕の観察からは、紡錘車が糸を紡ぐための整理器・重りとして使用され、糸の巻き取りが行われたことが知られるが、作業方法までは窺えないのである。

なお、断面台形のA・B類では72例中のすべての個体が、広面にこの同心円状の使用痕が観察されており、使用方法に関しては明確な認識があったことが知られる。この面を上面とする妥当性があるといえる。もっとも、広面と狭面の直径の差がさほど無い紡錘車の場合は、広面の他に狭面にも同心円状の使用痕が観察されるものが少数ながらある。これなどは一般的な使用法にとらわれない「使い勝手」の部分であろう。

断面三角形を呈するものでは多くの場合、広面が巻き取り面になるが、この時、下面である狭面にも光沢をもつものがほとんどの個体で観察される。この使用痕は、広面に残された細い線状のものとは異なり、むしろ面的な摩滅痕跡であり強い光沢を有するものが多い(④)。摩滅の範囲も狭面のみにとどまらず、側面にも若干広がりが見られる(③)。面的な摩滅ではあるがやはり回転運動の形跡が認められている。つま

り、紡錘車の軸轉の回転に伴ってある段階に、高い頻度で何等かの面に接触するものと考えられる。これはすべての紡錘車に共通していることから作業段階の定型的な部分に相当していると見られる。なお、側面部にまで痕跡が及ぶことは、同時に摩滅が起こるならば、接触面が必ずしも硬質な平坦面ではなく、ある程度の柔軟性をもっているものである可能性が高い。

しかし、燃る作業の準備段階では紡錘車そのものに回転による摩滅は起こらず、また燃りをかける作業段階の内、先に述べた“吊り下げ”を行っている状態でも摩滅は起こり得ない。これに対し膝の上で転がして回転を与える場合には稜から側面部は摩滅するが、狭面の全体的な摩滅とはなりにくい。台のうえで回す例は強度の点で鉄製品が適するようだが、いずれにしろ平面に接することになる。両手で挟んで手を磨り合わせる場合は、作業時に常に手との摩擦が起こり面的な摩滅が起こるが、この作業方法が一般的であるかには疑問がある。

これ以外に、紡錘車を使用する工程には、紡錘車に巻き取られた糸を他のもの（カセイなど）へ巻き取って行く事が上げられる。大木はこの（巻き戻し）段階の手ずれを想定している。この場合の痕跡の可能性は高いが、実際には両手で行う作業では機械的な巻き取りの回転は起こりにくいようである。

以上のように使用痕の観察からは、断片的な使用の在り方は想定できるが、現段階では使用の工程や決定的な使用方法は窺えないのが実態である。使用痕の解釈には実験結果の集積と、より具体的な作業方法との対比が必要であろうと考える。

#### 4 紡錘車の出土状況から

紡錘車は、多くの場合竪穴住居跡の中から出土している。しかし、これまでの発掘調査の報告の中では、出土点数が1点であったり、せいぜい数点といったことからその希少性に視点が当てられることが間々あった。これは、石製紡錘車に殊に顕著であり、古墳の副葬品や祭祀のある一部を構成する可能性のある出土例に加えて、製作址において祭祀用具と共に製作されている例から、非実用的なものとして考える向きもあった。もっとも先に述べたように数量的な希少さから十分な観察や検討が加えられなかったことにもよう。

紡錘車の実用性に関しては、使用痕等の観察から“糸を燃る”際に使用されていることが確認された。つまり紡錘車は一義的には生産用具の側面があるといえる。では、これとは異なる側面が認められるだろうか。

矢田遺跡ではこれまでに90点ほどの紡錘車が出土しており、遺跡差・地域差などを差し挟まずに一集落の中でこの紡錘車というものを考えることが可能である。

まず紡錘車は、実際にはどのような状態で出土しているのかを通して検討してみる。

矢田遺跡の紡錘車は、遺構外出土例9点を除けば、大部分が竪穴住居跡から出土している。つまり、矢田遺跡では竪穴住居内から出土することが一般的であるといえる。また、この在り方は、県内の他の遺跡の実態も基本的に同様であった。

しかし、単に竪穴住居内からとは一括して言えない出土状況の差があるものかという点に注目して、製作したのが第271図の遺物分布図である。ここでは紡錘車出土状況に時期による何等かの意図を反映した傾向が認められるものか、古墳時代後期と奈良時代、平安時代とを区分して提示してある。

結果を先に述べるならば、各時期を通じて共通するようなまとまりや傾向は認められないというのが実情のようである。ではその在り方は何を意味するのだろうか。

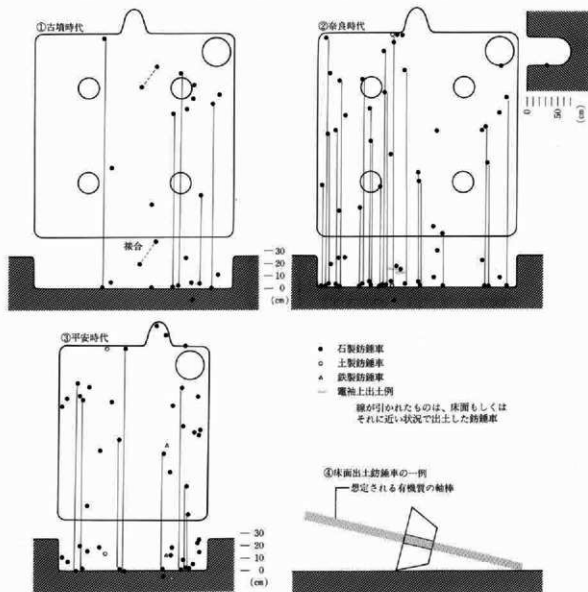
出土位置については、床面直上から出土するものが比較的多く認められるのが注目される。それらは平面的な分布状況は散乱状況を示しているのが印象的である。しいていえば、壁際や電周辺などにやや分布が多く認められている。上屋構造の有無の問題もあり、当初から床面に置いてあるということではないが、作業

空間や収納空間との関連が想定できるものもある。しかし、床面以外からの出土例も多数あり、これらの評価は、紡錘車単体ではなく他の遺物を含めた出土の状況が検討されなければならない。

いずれにしろ、この分布状況が表しているのは厳密には紡錘車が使用放棄された直後の状況、もしくはそれが人為的または自然営力によって移動した結果としての位置を示しているのである。以下のように、

- ①住居廃絶時に使用場所もしくは収納場所に置き去る(遺棄)
- ②火災に伴って偶発的に残される場合
- ③住居廃絶時に壁際に収納されたものが埋没段階に転落(いわゆる三角堆積に対応して出土)
- ④住居廃絶時に廃棄、もしくは意図的にある地点に置き残すこと(祭祀なども想定<sup>(B5)</sup>できる)。
- ⑤住居埋没段階で、人為的に廃棄されたもの
- ⑥住居埋没段階で、自然営力により流入したもの

等々が想定され、当然それぞれの住居への帰属の可能性には差があり、出土した紡錘車の評価は異なって



第271図 矢田遺跡における紡錘車の出土状況

こよう。しかし実際には判別しがたいものも多い。

多くの場合、出土状況からは、出土した紡錘車に付帯する特殊な要素は認められなかった。この点、他の道具類と際立って異なる様ではない。しかし、遺物を廃絶時にほとんど残さないような住居跡の床面に唐突に転がっている紡錘車の単独性が、注意される例もある。

なお出土状況を細かく観察すると、第271図の右下の図のように、紡錘車が床面上に斜めに立った状態で出土する例が何点か認められている。これについては軸棒の貫入された状態で埋没ということも考えられる。調査段階でより詳細な観察を行うことによって、道具としての紡錘車の認識が高められるものとする。

## 5 おわりに

紡錘車の出土が竪穴住居にまとまっており、多くが床面から出土する在り方から、今更ながらのことではあるが紡錘車を使用した糸紡ぎの作業は、竪穴住居内で行われた可能性が非常に高いことが指摘できる。日常的な作業として繊維に燃りをかけていることが考えられる。もっとも、繊維の生産には竪穴住居内では考えにくい作業工程に関する作業の場や、道具類・方法など余りにも不明な点が多い。

さて紡錘車の出土数量からは、紡錘車に巻き付けて糸の保存をすることは想定しにくく、他のものに巻き取っていたと考えられる。そうであるならば、明確に住居跡に残された紡錘車の数量が住居内で同時に作業をする人員の上限にもなる。今回得られた資料の総数のうち、古墳時代後期13点、奈良時代40点、平安時代35点となる。前回の集成結果からも県内における奈良時代からの紡錘車の数字上の増加は注目されていた。あらためて矢田遺跡の場合は特に奈良時代の数量の突出性が目を引く。また、単純な数量以上に住居跡1軒あたりの出土率にいたっては他をはるかに上回るようである。これは一竪穴住居・集落単位の需要を越える単位に属する数量といえそうである。もっとも、出土状況との関連で、「所有」の認識は慎重に行わなければならない。この問題は、調査の終了後に詳細な分析を通して、十分に検討するつもりである。

なお、文字が刻まれた例が認められるが、線刻段階が穿孔前のもの（文字が孔に切られる）や、文字の面が作業面になって摩滅しているものもあり、ことさら文字面を保護してはいないようである。内容は不明なもの、道具としての紡錘車の一義性を損なわない付加的要素といえよう。

取り留めのないことを羅列したが、紡錘車の問題は、繊維、織物の生産にかかわる部分への一つの糸口になるとと思われる。今後の課題は山積しており、資料の蓄積のため、紡錘車にかかわる情報などの御教授・御叱責を賜りたい。

## 註

- 1 県内の集成からも同様な結果が認められている。しかし短期的に限定される形状や、特徴的な製作技法・文様（縞面文など）・文字等の在り方には時間的な特徴は存在するようである。
- 2 加賀ひろこ 「漁村における麻糸撚りの技術」  
シタヨリ（撚んだ糸を撚る、串糸、片撚）、ウワヨリ（シタヨリした糸を2本または3本撚りあわせる、復糸、漂撚）とし、織物の前段階は多くの場合シタヨリであるという。
- 3 実美園、写真観察による。前橋市教育委員会1982 『松本遺跡発掘調査報告書』
- 4 ほは完全に遺存する鬼虎川遺跡出土例（『鬼虎川遺跡第19次発掘調査報告』（財）東大阪市文化財協会・東大阪市教育委員会 1988）を代表として、他にも炭化した軸棒が遺存している例がある。矢田遺跡469号住居跡からも炭化軸が遺存した紡錘車が出土している。
- 5 古墳時代後期の108号住居跡では竪穴内に多量に廃棄された土器類の上部に2つに割れた状況で出土している（第271図参照例）。特殊な例ではあるが、一括して行われた道具類の廃棄行為の中の一部と考えるべきであろう。あえて祭祀行為と結び付けることはできない。

## 参考文献

- 大木幹一郎 1984 「紡錘車の使用状況に関する一考察」『上毛研』創刊号  
 佐原 真 「手から道具へ・石から歴史」『国説 日本文化の歴史 1』 1979  
 鈴木孝之 1983 『後遺跡出土の紡錘車』『後遺 本文編II』  
 竹内品子 1989 『弥生の布を織る 機織りの考古学』  
 中沢・寿山・関口 1988 『古代市生産と在地社会』『群馬の考古学』（財）群馬県縄文文化財調査事業団 創立10周年記念論集  
 布日順郎 1988 『絹と布の考古学』 藤村淳子・竹内品子・布日順郎 1985 『紡織具と製品 紡錘車』『弥生の文化の研究 5』  
 八幡一郎 『紡錘車について』『歴史と地理231号』など多くの業績が『八幡一郎著作集』1979に再録されている。

## 第3節 出土した文字資料

矢田遺跡で検出された堅穴住居跡や、その他の遺構等からは、文字や記号が記された遺物が少なからず、出土している。

本文では、今回提示する資料はあくまでも全体の一部であることから、報告する95軒中から得られた文字・記号資料についての簡単なまとめを行うにとどめる。

出土した資料は、第272・273図に一括して提示してあるように幾つかの種類に分かれる（図版96・97）。

- (1a) 墨書土器……………8点
- (1b) 刻書土器（窠書土器）……………2点
- (2) 文字瓦（窠書文字）……………3点
- (3) 線刻・石製紡錘車……………4点

以上の様に、17点の文字資料は、土器・瓦・紡錘車という3種類のものに異なる方法・工具によって記されている。墨書や線刻などに関しては、記入者の別、記入の段階（製作時、使用時、それ以後）などによって資料の示す内容や性格の差異が存在するのは明らかである。しかし、習書のような例を除けば、いずれにしても多数の類似する道具類の中において、ある「個（またはそれを含む集合）」を自己認識、あるいは相互確認等し合うためなどの特徴付けの方法であることには変わりがない。もっとも、その示す内容はこれまでの研究で表されているように多岐に亘るようである。以下では本報告例に関して若干の検討を述べる。

(1a) の墨書土器の内、⑥の「十」が記号と考えられる以外は、すべて文字が記されている。①②は破片資料のために不明だが、③「子」、④「町」、⑦⑧の「測」といずれも1文字である。2文字が記された⑨は「田口」と釈され、人名と見る可能性もあるものの積極的に肯首しがたい。

(1b) の刻書を有する土器は⑩⑪の2点のみであり、両者ともに焼成前に記されている。いずれも記号で意味・性格ともに不明である。

(2) は188号住居跡の甕の袖に転用されていたほぼ完形の平瓦⑬と、丸瓦⑭の凸面に窠書きされている。⑬は「八井」とも釈せるが、字のはこびなどからみればむしろ意識して記号的に表現しているようである。⑭は「真」は明瞭だが、その上部の文字については疑問が残るものの「八」「中」「寸」と解するのが妥当とされるが、意味は判然としなない。なお、⑮については断片的な資料であり内容等については窺い知れない。本資料は瓦の胎土や焼成などの特徴からは、上野国分寺の補修に際して製作されたとされる瓦の一群と類似している。

(3) については、これまでも多く注目されてきた資料である（井上 1988など）。本報告では4点が該当している。⑯は「八田郷」を3カ所と「家郷」、⑰は「八田郷」3カ所と「大」が極めて細い線と刻まれている。⑯は同一の記入者によるものと見られるが、「郷」の字体が異なる点に注意される。⑰は⑯と比較してやや不鮮明な彫り込みでそれぞれの字体の他、線の太さ（工具の別か、工具の使用部位の差か）にも差異が認められ記入者が複数に亘る可能性も指摘できる。この2点の石製紡錘車は、磨くと黒色の光沢を帯びる特徴的な滑石質の蛇紋岩を使用しており、法量や穿孔具、形状に関しても非常に類似していることから、同一規格による製作の所産の可能性が高い。⑱については50号住居跡への帰属はやや疑問も残るが（住居の構築に先行して使用放棄されていた可能性が強い）、出土土器からも近似する⑲が出土した79号住居跡との関連で10世紀の前半代に位置付けられよう。

⑳は「牝馬 馬手 為嶋名」と7文字が記され、文章の体裁をもつ。製作時の整形の擦痕が顕著に残る広

面に比較的明瞭に線刻されている。「馬手」は馬の調教にあたる職名ともみられるものの不確定である。「嶋名」についても人名・地名の可能性はある。

⑭は広面に「× 田」、側面に「×」と太く刻みこまれていて、いずれも乱雑な刻みで文字とは考えられず、記号として解する。

さて、以上の資料の所属する時期については、出土状況から若干問題のあるものも含まれるが、以下のように分けられる。

	(1)	(2)	(3)
(9世紀前半代)	④ ⑤ ⑥ ⑨		⑩
(9世紀後半代)	③ ⑦ ⑧	⑮ ⑯ ⑰	⑱
(10世紀前半代)			⑪ ⑫
(10世紀後半代)	① ② ⑬		

墨書および刻書土器が矢田遺跡において数量的に顕在化するのには9世紀前半代からと言えそうであり、このことは周辺の遺跡の在り方とも共通している。また、記された文字・記号そのものについても、内容や性格の判断し難いものが多数を占めるという点でも同様の傾向を示している。

文字瓦については、多胡郡から供給されたとされる国分寺補修瓦との共通性が指摘されるが、上野国分寺跡出土の瓦には冒頭に多胡郡に属する郷名を配する例が多く認められる。このことからすれば両資料も第1字が「八」と釈されるならば、多胡郡八田郷との関連が想定されようが、いずれの場合も表記には不明な部分があり疑問がある。

さて、線刻を有する石製紡錘車が明確に出現する時期は、井上氏の集成(27例が提示されている。その後県内における類例は増加している)によれば8世紀の中葉以降とされるが、大半は9世紀代であり、さらに10世紀代にも継続して認められている。矢田遺跡では上記の4例の他にも9世紀前半代には「物部郷長」(12号住)、「物」<sub>リ</sub>、「一八」(647号住)の線刻紡錘車が出土しており集成の結果と対応している。またそれ以外にも時期不明を含め3点があり、合計9点(平成2年1月現在)の出土が知られ、他の遺跡に比較して非常に多く特徴的な在り方を示している。

本報告の、2点の紡錘車に記された「八田郷」の文字は、『純日本紀』和銅四年三月辛亥条や『倭名類聚抄』の記載に見られる上野国多胡郡「八(矢)田郷」に対応すると考えて差し支えなからう。これにより、これまで「多胡碑」『純日本紀』に関連して、八(矢)田郷に推定されてきた吉井町大字矢田の地が、少なくとも調査地域内においては、比定の妥当性が補強されたものといえる。また「家郷」「大」については、2つの紡錘車は規格や文字のパターンの類似があり、4単位の構成で文字が記され、それらがいずれも地名に関連する可能性もあることから、穿った見方をすればいずれも「多胡郡大家郷」に関連するものとも考えられるが限定された資料でもあり今後の課題とされる。

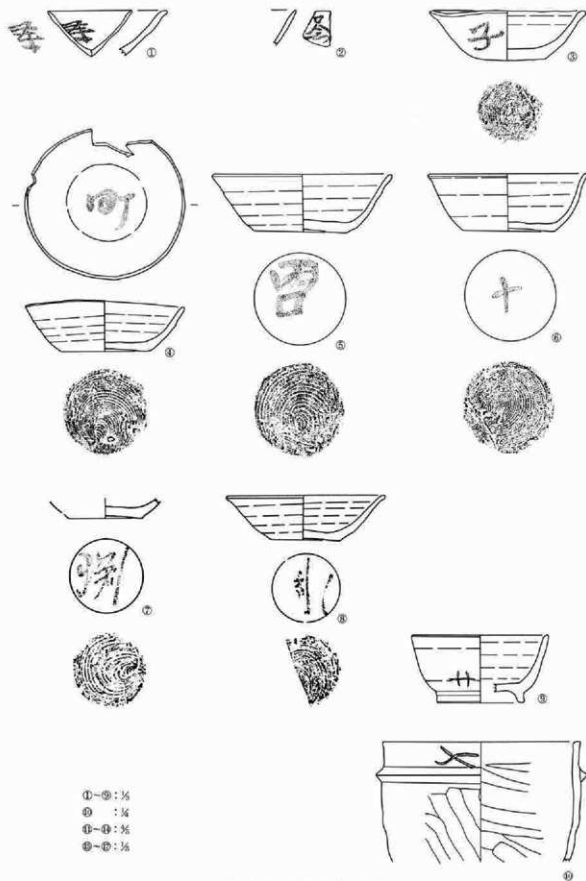
いずれにしる矢田遺跡の調査においては、多様な文字資料が出土しており、調査の終了をまって集落の変遷や内容の分析が行われることにより、さらに明確な性格づけがなされて、本地域の古代史研究に貴重な情報を提供するものと考えられる。

(春山)

参考文献

- 内木・中沢・鬼形 1987 「吉井町矢田遺跡出土の文字資料について」  
井上唯雄 1987 「線刻をもつ紡錘車について—群馬県における事例を中心として—」『古代学研究』第115号

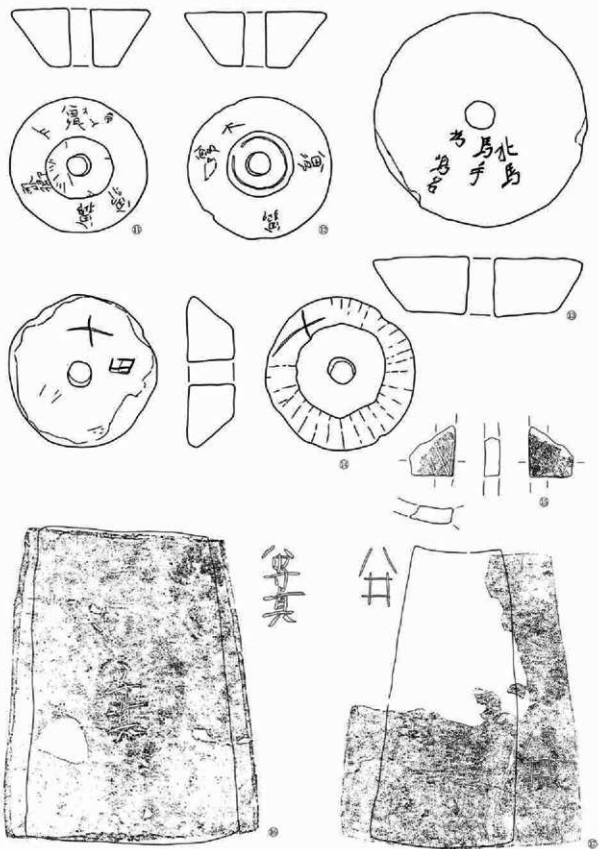
第3節 出土した文字資料



- ①-⑤: ⅓
- ⑥ : ⅓
- ⑦-⑩: ⅓
- ⑪-⑬: ⅓

第272図 文字・記号資料(1)

第4章 若干の考察およびまとめ



第273図 文字・記号資料(2)



## 第4節 ヤタおよびヤタ部について

関口 功一

ヤタ部については、「古事記」（以下「記」と略す）仁徳段にその名代の設置起源に関する伝承があり、

（前略）為八田若郎女之御名代、定八田部也

とする。ただし、ヤタを通称とする皇族には、欽明天皇子「八田王（箭田珠勝大兄皇子）」なども知られており、現状では連続的な史料の残存は認められないものの、通常の名代・子代がそうであったと考えられているように、その名を伝領した皇族に引き継がれたものであろう。その設置起源についても、「記」の主張するところよりは下るものであったろうことは言うまでもない。

また「新撰姓氏録」（以下「姓氏録」と略す）には、

- 1、（左京神別上）矢田部連—伊香我色乎（平）之後也。
- 2、（山城国神別）矢田部 一鴨縣主同祖。鴨建津身（命）之後也。
- 3、（大和国神別）矢田部 一饒速日命七世孫大新河命之後也。
- 4、（摂津国神別）矢田部造一同上（伊香我色雄命之後也）。
- 5、（河内国神別）矢田部首一同（饒速）神六世孫伊香我色雄命之後也。
- 6、（左京皇別下）和爾部宿禰—和安部朝臣同祖。彦妮津命四世孫矢田宿禰之後也。續日本紀合。

などとある。これらのうち6はウジではなくナであろう。1～5の内容に従うならば、畿内地域では、いずれも「神別」ではあるが、少なくとも「鴨建津身」系と「伊香我色雄（ないし大新河）」系との、ふたつの系統を主張するヤタ氏が存在したことになる。

「姓氏録」のウジの配列に、どの程度の規則性があるのかは、なお検討の余地が残されているが、1～5はいずれも同祖・同族関係を主張するグループのなかに含まれている。そのグループには地縁的な結合を示す場合もあるのではないだろうか。それらの集団の規模には大小のばらつきがあるが、順序に従って示せば次のようになる（☆がヤタおよびヤタ部の位置、/は内容の切れ目を表す）。

- 1 を含むグループ…石上朝臣・穗積朝臣・阿刀宿禰・若湯坐宿禰・春米宿禰・小治田宿禰・弓削宿禰/水宿禰/☆・矢束連・物部肩野連・柏原連・依羅連・柴垣連・佐爲連・葛野連・登美連・水取連
- 2 を含むグループ…賀茂縣主・鴨縣主・☆・文部・西泥土部・祝部・稅部・具公
- 3 を含むグループ…佐爲連・志貴連・眞神田首・長谷山直・☆・縣使首・長谷部造・委文宿禰・田邊宿禰・多米宿禰
- 4 を含むグループ…若湯坐宿禰・巫部宿禰・田々内臣・阿刀連・物部饒國連・☆・佐夜部首/（小山連）・多米連・犬養・目色部真時
- 5 を含むグループ…水連・鳥見連・高屋連・高橋連・宇治部連/物部依羅連・☆・物部・物部飛鳥/横組造/日下部・栗栖連/若湯坐連/勇山連・物部首・津門首

これらによれば、カバネを欠いて階層的に下位にあると考えられる2・3を除くそれぞれのグループには、その内部に「石上朝臣（←物部朝臣）」を頂点とする「物部」氏が存在し、そこに地縁・血縁によって結集した集団であることがわかる。ただし、「石上朝臣」が実際に居住するのは都城のみである。同祖関係を主張する各グループのなかで最大の勢力は1グループであり、それにつぐのが5グループである。こうした結び付きは、『先代旧事本紀』天孫本紀にも見られる。移住後に同祖関係を主張するようになった例も絶無ではないだろうが、ある程度の部分までは「姓氏録」成立以前の実情が関係していたと思われる。

2グループについては、平安京の成立後に、祭祀関係の職務に従事するうち新たに発生したもので、本来的な形態とは異なるものなのではないか。幾つかのグループのなかに内容の切れ目が存在するのは、同祖関係を主張するようになった時期の違いによるような、ウジとしての格付けに関係している可能性がある。

1・4・5は各々異なるカバネを持つ。2・3はカバネを欠くので、それらよりも下級の氏族であろう。ヤタ部氏については、『天武八姓』の制定直前の天武12（683）年に「遣一連」という形で改賜姓が行われており、その前後関係を従うならば、4グループ→1グループのような派生関係が想定できる。摂津国に居住していた物部集団の一部が、積極的に律令国家の成立期に参加し、改賜姓の可否は、律令政府にとのかかわり方に関係しているのだろう。

カバネ「首」の5については、その来歴が明確ではないが、おそらく1・4の下位に位置付けられるであろうから、

[4（摂津）→1（左京）]—5（河内）—2（山城）・3（大和）

のような上下関係を示す。それが、実際の移動とどの程度整合的に理解出来るか、なお検討の余地がある。

各地域に居住していた「物部」集団が、都城の成立後に地域での古い存在形態をある程度維持したまま移住したと考えてよければ、それ以前の「物部」集団の地域経営に当たってもこうした形で行われたと考えられる可能性も生じるように思われるのである。こうした同祖関係をひきずっていると見られる地域の実態に、以下注意して考えてみたい。

ヤタおよびヤタ部の地域的分布について『和名類聚抄』（以下『和名抄』と略す）などに見える郡・郷名を基準に、所在の知られるヤタ及びヤタ部を整理してみると第4表のようになる。

まず地名の表記について、本来の「矢（八）田部」が「好字」によって2字に整えられているが、少なくとも古代では、ヤタおよびヤタ部は「矢田」ないし「八田」「八部」と表わされるようであり、全体として見ると前者よりも後二者の方が一般的なようである。ちなみに、矢田遺跡で出土している文字資料では、その所属年代も問題になるが、『続日本紀』の「矢田」より『和名抄』の「八田」の表記のものが多い。

これに対し、人名は「好字」で整える必要がなかったのか、ヤタ部を3文字で表記する例が史料上多く認められる。中世以降見られる地名「矢部」は、こうした原則的用法が崩れてからの所産であろう。字面では音通するようにみえる「八多」「八太」などは、いずれもハタであり、実際「波多」などと書き換えられるようである。

ヤタおよびヤタ部をウジ名として負い、かつヤタあるいはヤタ部の地名に居住する例は、隣接地域への移住を考慮しても多いとは言えない。こうした傾向のなかでは、備中国下道郡八田郷に關係する「矢田部益足之買地券文」の郷長矢田部益足・戸主矢田部石安の例は貴重である。山陽道地域のなかでは、吉備地域に史料上で集中しており、何らかの画期にかかわっている可能性がある。

第4表 ヤタおよびヤタ部の地域的分布

No.	国名	郡名	郷名	備考	(和名類聚抄部名)
	山背	宇治	大田	宇治・實美・岡屋・餘戸・小野・山科・小栗	
①	大和	添下	八田	村岡・佐紀・鳥貝	
②	播磨	八郡	八郡	生田・宇治・神戸・長田	
	伊勢	飯野	黒田	乳統・兄籠・長田・播代・神戸	
③	尾張	海部	八田	新屋・中島・神旗・志摩・伊藤・輪田・海部・日置・三万・三宅	
④	会河	磯豆	八田	熊家・意太・磯田・大川・大瀧・折嶋・修家	
	遠江	磐田		飯賀・曾能・山香・入見・小野・千柄・高花・壬生・野中・久米・小谷・飯賀・神戸・豊園・藤家	
⑤	駿河	益頭	八田	西刀・澤登・朝美・飯波・惣部・益頭・高橋・小阿・新橋	
	伊豆	賀茂	川津	賀茂・月間・川津・三嶋・大社	
	武蔵	入間		麻羽・大家・藤家・高階・安刀・山田・廣瀬・餘戸	
⑥	常陸	河内	八郡	嶋名・河内・大山・真崎・菅田・大村	
⑦		那賀	八郡	入野・朝妻・吉田・岡田・藤田・安賀・大井・河内・川邊・常石・金殿・日部・志万・阿波・芳賀・石上・廣島・茅城・洗井・那珂・武田	
	美濃	本巢	南田	直立・遠市・安堵・美濃・穂積・物部・志木	
⑧	上野	多胡	八田	山(部)・織波・幸科・大家・武美・(浮因)	
		新田	箕甘	新田・苅野・石西・祝人・藤家	
⑨		息家	八田	地田・花田・長柄	
	下野	河内		文部・刑部・大織・酒部・三川・財部・真壁・藤部・池邊・衣川・藤家	
	陸奥	安積		入野・佐戸・芳賀・小野・丸子・小川・重屋・安積	
⑩	加賀	江沼	八田	長江・忍浪・山背・竹原・藤田・郡家・菅波・三枝	
⑪	能登	能登	八田	上日・下日・越橋・加嶋・与木・熊家・長濱・神戸	
⑫	越中	彌波	八田	川上・川合・拜藤・長岡・大岡・高橋・岡知・三野・意巻・大野・小野	
		佐波	加茂	佐波・佐位	
		丹波	何鹿	八田	賀美・拜藤・吉美・物部・吾妻・高階・私部・栗村・高津・志波・文井・小織・藤部・餘部・三方
		丹波	与謝		宮津・日置・拜藤・物部・山田・高敷・神戸
		丹波			大野・新沼・丹波・周坂・三重・神戸・口粒
		熊野	熊野		田村・佐濃・川上・海部・久美
	備前	邑久		邑久・飯島・土師・須藤・長沼・尾沼・尾浪・布梨・石上・服部	
⑬	備中	賀茂	八郡	藤味・飯倉・足守・大井・阿曾・服部・生石・西郡・日野・多気・巨勢・有瀬・大石	
⑭		下道	八田	徳太・逸学・曾能・奉原・水内・新代・近似・成羽・弟籠・穴田・龜野・川邊・星屋・田上	
⑮	周防	吉賀	八田	宇勢・仲河・益必・廣平・神前・多賀・八千・賀賀・浮因	
	紀伊	日高	財部	常水・内原・石洲・南部・全戸	
	阿波	板野	田上	松島・津屋・高野・小島・井原・山下・全戸・新屋	
	讃岐	栗川		栗波・石田・長尾・造太・鶴部・神崎・多和	

■竹内・山田・平野編『日本古代人名辞典』6(吉川弘文館、1973年)を参考に作成。

①～⑮については「和名類聚抄」の地名、それ以外は神社名・人名の所在の知られる地名である。

部姓を負うような「和名抄」郷名は、本来地域名称ではなく人的集団の呼称にかかわるものであったはずであり、こうした不一致は、時期的に近接していれば起こり得ないものであるが、少なくとも10世紀成立の「和名抄」の郷名のようなものに過大な期待を寄せるべきではないだろう。かかる現象は、そのズレが大きいほどその設置起源の古さに由来するのかもしれない。

その分布は、東海道を中心にして東日本に主体がある。西海道地域には、現在までのところ全く分布が知られておらず、このウジがひつには東国計略に大きな役割を果たしていた可能性を示唆している。全般に資料不足の観は免れないが、これまで述べてきたような意味で注意されるのは駿河国益頭郡・常陸国那賀郡・美濃国本巢郡・丹波国何鹿郡・丹波国与謝郡・備前国邑久郡などに見られるように、1グループ(左京在住)の「石上(物部)一穂積……ヤタ(部)」といった形を郡単位で持ち込んでいるように見える場合がそれなりあるということである。すべてがそうであるとは言えないし、組み合わせの斉性があるというわけでもない。また、その相互の結び付きはかなりルーズなものであったろうが、8世紀以降の比較的新しい時期に、活発に地域再編成が行われたとは考えにくい地点がほとんどで、その起源は7世紀以前の地域編成の型に関係しているように思われる。

#### 第4章 若干の考察およびまとめ

このことは、断定は出来ないが、「物部」が単独で関与する段階と、それに幾つかの付随する要素が加わった段階というような時期差が存在するのではなからうか。ヤタおよびヤタ部の設定に関しては、後発するであろう後者の段階に属することで、単独で行われることも絶無ではなかったろうが、主に「物部」集団に追隨して設定されることが多かったのではなからうか。別途に検討を要するが、「物部」集団自体の石上神宮への関与の様式の変化などに注意すれば、その画期は5世紀前半頃に求められるだろう。

このような想定は、上野国の場合にもあてはまるのかどうかを見てみよう。上野国地域のヤタおよびヤタ部について改めて考えてみると、その分布は全国的なレベルから見れば、かなり密なものであることが確認できる。上野国内の事例を地名および人名について、もう少し細かく整理してみたのが第2表である。

第5表 上野国内のヤタおよびヤタ部

郡名	地名	神社名	人名	備考
稚水				②
片岡				
甘栗				物部氏
多胡	八田郷			物部氏、物部明神・徳積明神、②
緑野				物部氏、④
那波				⑤
群馬		矢田部明神		物部氏、⑥
吾妻				
利根				⑦
勢多				⑧
佐位		八田女明神	矢田部船刀自女(?)	徳積明神
新田			矢田部麻呂(麿戸主)	①③
山田				⑨
邑楽	八田郷	八田明神		

①太田市清水田遺跡出土の土器に「矢田」と集書する例が3点。新田郡尾島工業団地遺跡出土の石製紡錘車の刻字に「矢田…」とする例がある。

②稚水郡下後岡村に字石神がある。

③多胡郡に矢田村・石神村字宿地(石上郷)がある。

④緑野郡矢場村に字石上(油戸)がある。

⑤那波郡阿弥大寺に字矢田がある。

⑥西群馬郡来間村に字石神・棟高村に字谷田・西明屋村に字石上寺西・井田村に字下布留がある。また、東群馬郡前代田村に字矢田・市ノ坪村に字石神井・天川原村に字矢田がある。

⑦利根郡真庭村に字石神(窪田)がある。

⑧南勢多郡上田沢村に字石神、上石神・山田村に字石神がある。

⑨新田郡由良村に字谷田がある。

⑩山田郡毛里田村大字以上に字矢部、向矢部、矢田郷下・大字矢田郷・体治村大字電舞に字石神がある。

古代の上野国のヤタおよびヤタ部の分布については、分散的だが、広範囲なものであったと思われる。利根川を境に東・西両地域の間で様々な差異が生じていた可能性が高いが、物部集団とのかかわりの強い事例は右岸地域にあり、そうしたものと関係のやや希薄な例は左岸地域にある。現状では、右岸地域では多胡郡付近に中心があり、左岸地域では新田郡周辺に中心を持つようである。

矢田遺跡は、遺跡名として採用されている大字名の他に、出土した石製紡錘車に「八田郷…」と刻字されたものなどがあって、史料上の「上野国多胡郡八田郷」の何らかの部分であると考えて大過ないと思われる。7世紀後半以降のその地域名称の変遷は、およそ次のように考えられる。

I) 上毛野(国) 甘栗評八田部五十戸

II) 上毛野国甘栗評八田部里

※大宝令制定以前

III) 上毛野国甘栗郡八田部里

(多胡郡の設置)

## IV) 上毛野国多胡郡八田部里

## V) 上野国多胡郡八田里

## VI) 上野国多胡郡八田郷□□里 (または上野国多胡郡□□郷八田里)

## VII) 上野国多胡郡八田郷 (≒「和名抄」郷名)

矢田遺跡の集落の全容は、なお調査の終了をまたざるを得ない部分があるが、調査済みの部分については、こうした変化の画期と考えられるものが集落の実態に影響を与えたようには観察できない。むしろ、集落の大きな展開が6世紀後半にあるような点に注意すべきである。これは、この周辺の全体的な村落の動態にも共通の事実であるようにも思われるが、ヤタ部のような部民の設定のようなもの、人口増加を前提とするような、集落の安定化にかかわっているように思われる。

そのような動向のなかで、矢田遺跡出土紡錘車のなかには「物部郷長」と刻字したものもある。のみならず、多胡・甘楽両郡で構成される銅川流域地域全般にわたって、物部氏の分布が顕著である。時期なども含めたその評価の如何にもよるが、このことは何を意味すると考えられるのだろうか。

想定される多胡郡域のなかには、「穂積明神」「物部明神」や「石神(上)」といった地名も知られているが、それぞれ「多胡碑」に見える「穂積額王」「石上尊(朝臣麻呂)」にかかわっていると考えられている。すなわち、それらは一部では多胡郡の成立以降の事実であると考えられてきたのである。それらの起源がどの程度波及させられるものなのか、なお検討の余地は残るが、これらについてはそのような脈絡で考えるのではなく、7世紀以前の支配関係の投影と考えられるのではなからうか。

旧利根川を境とした東・西両地域の様相の違いは、集団の組成の違いに起因し、そのことは地域編成の時期と内容の相違によって規定されていたものとする。即ち、東部地域のように、ヤタ及びヤタ部が単独に近い形で散在的に残存していればその起源は古く、西部地域のように、「物部」集団とのかかわりが濃密に認められるほど計画的で新しい時期の編成に属していたのではない。ただし、上野国域については、必ずしも整然と区分出来るわけではなく、それほど著しい時期差は無かったかもしれない。

「上野国多胡郡八田郷」の部分であったと考えられる矢田遺跡で、「物部郷長」の刻字の石製紡錘車が発見されたのは決して偶然ではなかったろう。この地域(甘楽郡も含む)のある時期の編成が、物部集団によるものであり、他の時期の他の集団による編成の可能性も絶無ではないが、そういったものよりも深く地域に根差したものであったと考える。そのように考える事が出来るなら、和銅4年の多胡郡設置問題も、そのような部分の克服にかかわっていた可能性があるが、この「物部郷長」の石製紡錘車の出土に端的に示される通り、結果としてそのような部分での目的は完全には達成されることがなかったのではなからうか。

## 註

- 1 例えは豊田善雄「皇祖大兄御名入部について」(『日本古代史研究』増刊号、1981年所収)。
- 2 以上の他に、「姓氏録」新津国皇別に「韓矢田部造」が見える。このウジは、韓入で編成された矢田部の伴造氏族であったと考えられる。新津国八郡(八郡郷)を本拠地とするらしい。同族は、穂積國攝保部の居住が知られる。また、「争矢田部君」というウジは新津国嶋上郡に居住していた。「上毛野朝臣同祖」とする点に注意される。慎重な検討が必要であるが、田辺史氏の冒頭に關係する一連のウジに含まれるのではなからうか。なお、佐伯有清「新羅姓氏録の研究考證編第2」(吉川弘文館、1982年)参照。
- 3 「物部」氏に関する研究は少なくないが、例えは野田敏志「物部氏に関する基礎的考察」(『史料』51-2、1968年)。
- 4 岸俊男「矢田部益足買地券」考察(『遺跡・遺物と古代史学』吉川弘文館、1980年所収)。
- 5 松本健「石上神宮の祭神とその祭祀伝承の実態」(国立歴史民俗博物館「研究報告」第7集、1985年所収)和田草「祭祀の源流」(和田編「大神と石上」筑摩書房、1988年所収)など。
- 6 角川「日本地名大辞典」10、群馬県所収の「小字一覽」に見える小字名を参照した。
- 7 例えは関口「平安中期上野国の一様相」(『群馬県史研究』25号、1987年)。
- 8 この点については、中沢・春山・関口「古代布生産と在地社会」(群馬県埋蔵文化財調査事業団「群馬の考古学」1988年)参照。
- 9 この点については、関口「大宝令制定前後の地域編成政策」(『地方史研究』36巻3号、1986年)参照。

## 第5節 ま と め

鑄川流域に発達した河岸段丘上、殊に矢田遺跡の立地する上位段丘上は、従来から濃密な遺物の分布状況が知られており、県内でも有数の遺跡地帯とされていた。今回の開越道土越線の建設に伴う発掘調査は、本地域の埋蔵文化財に関する情報量を飛躍的に増大させており、多くの成果が期待されている。

矢田遺跡の調査対象面積は約9万㎡という広大な面積に及び、発掘調査は平成2年度まで継続して行われる予定だが、本報告書では先にもふれているように、これまでに終了した地点の内、平安時代住居跡(1)として95軒の竪穴住居跡を取り上げている。

報告した95軒の住居跡は、南側の丘陵地形への移行点に近い矢田の台地主要部分の奥部にあたる部分に分布している。尾根上の比較的平坦部に占地する住居群と、西谷川の刻む西側の谷へ向かって下がる傾斜面にある住居群があり、また埋没谷などの微地形に沿った住居の分布も認められている。集落の変遷や出土遺物の全体的な位置付けなどに関しては、調査の終了を待って総合的に行う方針であるため、今回は言及はしないが、複数の単位からなる集落の展開が判明するものと考えられる。

住居跡の残存状況は表土の風化や流出現象などによって、必ずしも良好とは言えない状況のものも多い。しかし、それらの中にも、平安時代の生活に迫り得る遺構や遺物が多数認められている。

火災があつて廃絶した121号住居跡の床面からは、多量の炭化材や焼土に混ざって、炭化した種子と繊維が出土した。種子は、肉眼でも数種類のものが見られたが、分析の結果、イネとマメ類など遺跡周辺で栽培されていた可能性のある穀物と、周辺から採集してきたと考えられる樹木の種子が確認された。いずれも食用になるものであり、平安時代の食生活の一端を示す好資料と言える。また、炭化した繊維は検討の結果、当初予想していた麻布ではなく、平織りの絹織物であることが判明した。これは赤・青の重ね染めによって紫色に染色されている可能性もあり、直接矢田の集落の人が着用したかは別としても、東国の集落の一般的な竪穴住居跡から出土する繊維への認識を改めさせられた。また、真綿状の繊維も確認されており、繊維製品の製作過程の一部に関する注意も促された。竪穴住居と食器としての土器類、食糧である種子類、衣類に関連する繊維がまとまって確認され、衣食住へのデータがあることは特筆されよう。

他に注目すべき文字資料も多く見られる。土器への墨書・刻書、瓦への刻書、石製紡錘車への線刻が認められる。紡錘車の線刻には「八田郷 八田郷 八田郷 家郷」(50号住居跡)、「八田郷 八田郷 八田郷 大」(79号住居跡)とある。「多胡碑」銘文や「続日本紀」、「倭名類聚抄」に記録の残る、八(矢)田郷の比定地であった本遺跡周辺から、実際にこのような大きな集落が確認され、同時に地名が記された資料が出土したことの意味は大きく、今回の調査地点が少なくとも八(矢)田郷のある部分を占めていることの可能性を極めて高くするものと考えられる。

本遺跡の隣接地も発掘調査がなされ「椿谷戸遺跡」「柳田遺跡」として報告が示されている。しかし、これらは矢田遺跡と同時期に営まれた一連の集落と考えられ、広大な台地上に広がる住居群がどのような単位として構成され、それぞれが有機的な関連をもって展開したのかなどが、明確になって行くものと思われる。

各章でも触れてきたように、矢田遺跡の調査の広範さもあるが、県内でも例を見ないほどの内容の豊富さが知られている。今後、発掘調査・整理作業が進展して行く中で、集落遺跡の一つのモデル・ケースとして様々な視点での分析が可能であると考えている。

この長い年月にわたる発掘調査の中では、関係諸機関の御援助・御協力を賜っており感謝の念に耐えない。また、酷暑あるいは、空っ風の吹きさす厳寒の中、広大な台地上で実際の作業に携わった作業員の皆様に

は謝意を示すとともに、今後のよりいっそう安全で良好な調査を願っている。

#### 参考文献

本書を作成するにあたって参考にさせて戴いた文献は以下のとおりである。

(引用文献については、その都度触れているので省略する)

- 飯田陽一 「土師質土器について」『群馬文化』 1985
- 飯塚 誠 他 「上植木光仙房遺跡」 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- 井上唯雄 「群馬県下の歴史時代の土器」『群馬県史研究 第8号』
- 井上 太 「本宿・郷土遺跡発掘調査報告書」 富岡市教育委員会 1981
- 大塚晶彦・綿貫綾子 他 「有馬条里遺跡」 渋川市教育委員会 1983
- 女屋和志雄 「下佐野遺跡II地区」 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
- 唐澤保之 他 「芳賀東部団地遺跡 I」 前橋市教育委員会 1984・同 「芳賀東部団地遺跡 II」 1988
- 木津博明・板岡正信 「上野園分僧寺・尼寺中間地域」 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- 小島敦子 「賀茂遺跡」 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
- 坂口 一・三浦京子 「中尾(遺物編)」 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
- 坂口 一・三浦京子 「奈良・平安時代の土器の編年—住居の重複関係と共伴関係による土器型式組列の検討—」『群馬県史研究 第24号』 1986
- 下城 正・関 晴彦 他 「藪田遺跡」 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
- 中沢 悟 「清里・陣場遺跡」 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981
- 中沢 悟 「大原II遺跡・村主遺跡」 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
- 松村和男 他 「本郷山根遺跡」 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- 水田 稔・石北直樹 「石墨遺跡」 沼田市教育委員会・群馬県教育委員会・日本道路公団 1985
- 依田治雄 他 「田籙上平遺跡」 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- 『埼玉の古代窯業調査報告書』 埼玉県立歴史資料館 1987

なお、これ以外にも多くの先学の業績を参考にさせて頂きました。





# 付 篇 1 矢田遺跡121号住居跡出土繊維

朝山梨文化財研究所(繊維考古) 中 田 節 子

矢田遺跡121号住居跡、中央部東壁寄りの床面上から出土した繊維片計15点、4種の調査結果を報告する。これらの出土繊維は、すべて炭化しており断片となっているため、もとの形態がわかるものはない。なお調査は次のような方法で行った。

## [調査方法]

法 量	残存部の織目(組目)に平行、あるいは直角に最大長を0.1cmまで割り、たて方向×よこ方向とした。なお、たて・よこのわからないものは、長×短とした。
数 量	同種のもので、接合できないものを一点と数えた。
組 織	炭化、朽壞の度合がはなはだしいが、残存部より繰り返し単位等を推定し判断した。
密 度	顕微鏡、ルーペ等を使用し、3ヶ所以上割り、1cm間でのたて糸とよこ糸の平均値を記した。
撚り方向	撚りの見られないものはなしとし、撚りのあるものはS撚り(右)、Z撚り(左)とした。
撚り角度	一般的には、繊維の撚りを測るときは解撚し単位長さあたりの回転数で示すが、今回の場合は不可能であり、見かけ上の角度で判断した。
糸の直径(太さ)	顕微鏡、ルーペ等を使用し、3ヶ所以上を0.01m/mまで測定し、その平均値を記した。なお糸の直径(太さ)とは糸として使用されているものの太さであり、糸にする前の繊維の太さではない。
材 質	プレパラートを作成し、顕微鏡で側面、断面等を観察し同定した。
	その他、特記すべきことを記した。

## 資料1

資料は、残存部が① 8.8×5.4cm ② 6.6×3.2cm ③ 6.6×3.2cm ④ 3.2×3.0cm ⑤ 4.5×2.5cm ⑥ 6.2×4.0cm ⑦ 3.2×3.0cm ⑧ 3.5×3.5cm の計8点である。

後述するA・B2種類の繊維が重なった状態で出土しており、一番重なるの多い資料は、A-B-A-B-A-B-A-Aの順序でAが4枚、Bが3枚観察できる。ごく少量のものからの判断ではあるが、重なった資料の側面に2ヶ所輪になった部分が残されていること、重なった織目の方向が少ししかずれていないことなどから、AとBを重ね合わせて同方向に巻いた部分が残されたという可能性もある。まず資料1-Aについて詳細を述べる。

### 資料1-A

資料1-Aの組織は平織で、糸の見かけの直径は、たて、よこともに平均値0.4mmであった。密度は1cm間たて20本、よこ16本を数えた。たて、よこともにS撚りがかかり、よこ糸の一部ではあるが、強い撚りのかかっ

大部分も観察された。1本の糸も、織った組織も炭化しているという状態にしては、目がよく揃っている。観察した結果、材質は絹と思われる。なお、断面の中央部から赤と青の色素が観察された。もちろん一番外側は炭化のために黒くなっている。残存状態が悪いので、確認はもてないが、赤（青）で染色した上から青（赤）を重ねたか、赤い糸と青い糸を混ぜて織ったことも考えられる。とするといずれにしても紫色に見えるのではないだろうか。紫色は紫草の根により染められることが多いが、藍と紅花（呉藍ともいう）を重ねた二藍（ふたあい）により紫色にする方法もある。その色は青味がかかった紫色、あるいは赤味がかかった紫色となる。平安時代は紫色の全盛期であるといわれているが、当時どのくらい紫色が普及していたのであろうか。資料1-Aを再検討したうえで、矢田遺跡から出土したという意味も考え合わせ今後の研究課題とした。

#### 資料1-B

資料1-Bは、平織の繊維（1-A）にはさまれていたもので、現状では織ったり編んだような形跡はなく、紙のように平らになっている。顕微鏡で観察すると、繊維は細かくちぎれ糸のような状態ではない。材質は絹の様相を呈していることから真綿の可能性が高い。（真綿とはまゆを糸にしないでそのまま広げたもので、一般的には糸をとったあとのくずれまゆが使われるが、よい真綿のばあいは蚕から糸をとらずにそのまま真綿にしたものもある。）

日本では平安時代までの遺跡から真綿が出土したという例は、筆者の調査のかぎりでは見あたらない。中国では漢代のもので、山西省陽高県「陽高漢墓」「古城堡漢墓」、秦浪「彩霞塚および大正13年度丙墳」「石岩里212号墳」、甘肃省「居延」などから出土している。布目順郎氏が調査された清涼寺釈迦如来像胎内に納入されていた品々の中にも真綿が見られたという（布目 1988）。この像は宋代に造られ、日本へ招来されたもので胎内の真綿も宋代とされている。なお布目氏は、日本での真綿の使用について、『魏志倭人伝』中の「緋衣」を真綿を入れた衣服と解釈して、弥生時代の遺跡からの出土はないが、絹に真綿が付着した衣服を使用していた可能性を指摘している。また「緋織」についても、紵や麻から繊維をつむいだというだけでなく、真綿からの副産物もふくんでいるのではないかと述べている。

矢田遺跡の資料1のように、平絹と真綿が互いに貼りついた状態で出土している例は、衣服として「古城堡漢墓」「石岩里212号墳」にみられるが、矢田遺跡のものが衣服の一部なのか、今から糸にするための真綿であるのかはこれだけでは判断できない。

#### 資料2

資料2は、①5.0×5.2cm ②5.7×3.3cm ③3.2×3.6cm ④2.5×3.4cm ⑤2.5×2.5cm の計5点である。平織を思わせるが、どの資料もよこ糸のみ残存し、たて糸はほとんど残っていない。見かけの直径の平均値が、たて1.0m/mに対し、よこ1.8m/m、たて糸とたて糸の間隔が1cm弱と開いているのに対し、よこ糸は1cm間に5本と密である。一見すると、現在のたたみと似ている。たて、よこともに撚りはない。

材質については、植物繊維を用いていることに間違いはないが、種の同定までは不可能な状態である。なお、植物から繊維になる部分を取り出して使用していると思われる。クワ科カイラクサ科の植物を利用したのではないだろうか。

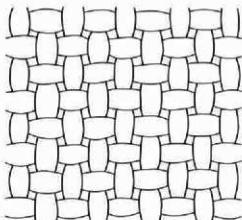
## 資料 3

資料 3 は、①4.7×2.2cm ②5.0×3.1cmが残存している。残存状態が悪いため詳細は不明であるが、4重に重なる部分が観察される。材料は、加工をしていない見かけの直径4m/m、断面の楕円の枝をそのまま使用している。なお資料3-①の上には、資料1-Aの平織の繊維が一部附着していた。

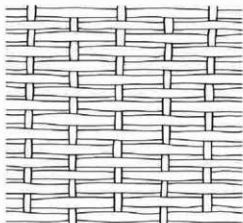
以上、平安時代の出土繊維については、弥生、古墳時代ほど調査も行われていないが、ごく少量の出土繊維であっても調査をすれば考究すべき問題点がでてくる。他の平安時代出土繊維のデータも積み重ねて今後とも詳細な検討を行って行きたいと思っている。

## 参考文献

布目順郎 『絹と布の考古学』 雄山閣考古学選書28 1988、3、5



資料 1-A

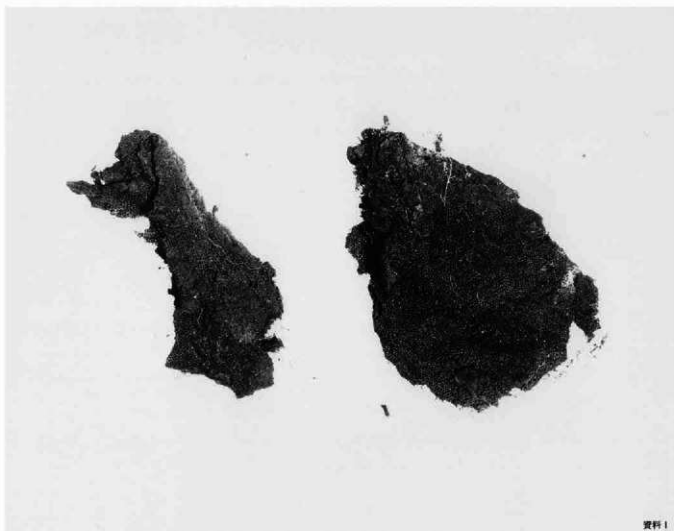


資料 2

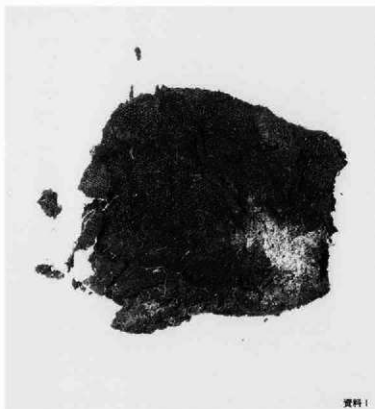


資料 3

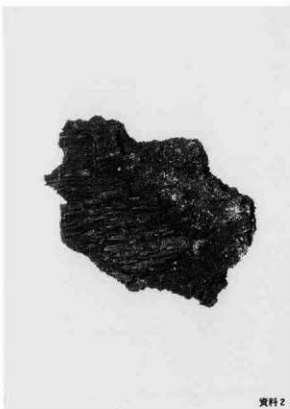
出土繊維模式図



資料 1

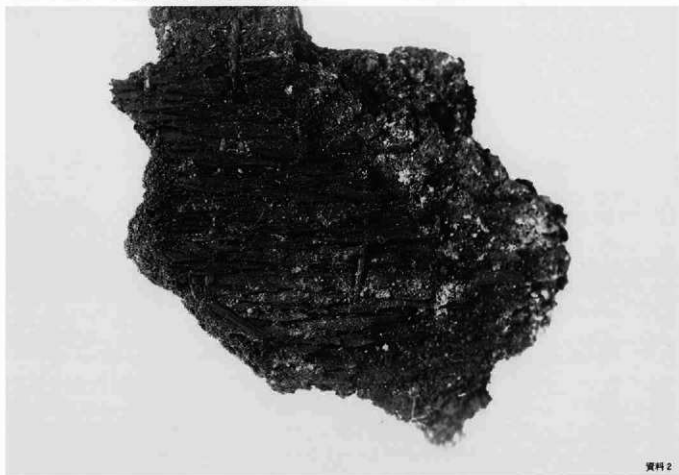
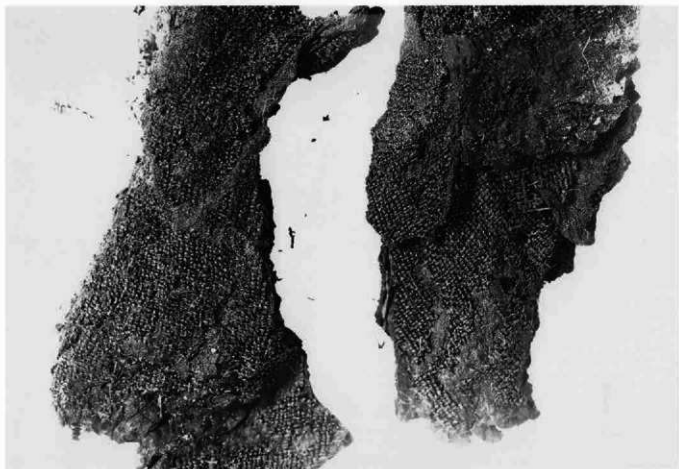


資料 1



資料 2

121号住居跡出土炭化繊維①



資料 2

121号住居跡出土炭化繊維②

## 付 篇 2 矢田遺跡121号住居跡出土炭化種子同定

バリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

矢田遺跡は、関越道上越線吉井インターチェンジ建設予定地にあたり、鑛川右岸の段丘上に立地している。発掘調査によって、古墳時代から平安時代の堅穴住居跡が多数検出された。この中の121号住居跡は、火災を受けたと考えられ、床面に多量の炭化材・炭化繊維・焼土などが確認されている。他に炭化種子が一定の範囲をもって分布していた。

炭化種子は、住居跡北東の床面に2ヶ所の分布（長軸50～60cm程度の楕円状）が認められている。1つの分布は炭化米と炭化小豆が、もう1つの分布は樹木の炭化種子という採取時の所見が得られている。

今回は、これらの炭化種子の同定を行うことが目的である。

### 1 試 料

上記に示した試料には、あらかじめその特徴から次のように区分されている。

- 試料1：炭化米 約1000粒
- 試料2：炭化小豆 約 80粒
- 試料3：炭化樹木種子 約 300粒

### 2 方 法

試料を肉眼及び実体顕微鏡下で同定を行い、写真撮影はすべて実体顕微鏡を用いて行った。

### 3 結果及び考察

試料1・2・3から同定、もしくは分類できたものは、イチイガシ近似種、コナラ、クヌギ、広義のコナラ属A・B・C、マメ類、イネである。

#### ・試料1

炭化米とされた試料約1000粒であったが、ほとんどが顎のないイネ、つまり通常遺跡などという「炭化米」であった。一部、顎の残っている状態のものもあった。さらに、マメ類が約50粒含まれていた。

#### ・試料2

炭化した小豆と考えられた試料約80粒である。ほとんどはアズキ（小豆）と考えられるが、数粒づつイネ（炭化米）と不明植物遺体（おそらく炭化材片）が含まれていた。

#### ・試料3

炭化樹木種子約300粒には、コナラ、広義のコナラ属A・B・Cが全体を占める。他にイチイガシ近似種（2粒）、クヌギ（1粒）、マメ類（おそらく小豆）、微細な植物遺体（おそらくコナラ類の細片）が含まれていた。

これらはすべて炭化状態であり、すべてが食糧となるものである。広義のコナラ類、マメ類は果皮を持たずに産出している。また、果皮片は送られてこなかった。つまり、採集してきたままの状態ではなく、人為的

に利用された真付けとなるものであると考えられる。

イネの産出の場合、穎が残っていたものも存在した。イネの穎は、炭化するとろくなるため、採集後に穎の破損が生じたか、穎を取り去った後のものも一緒にあったのかは不明である。種もみとして保存していたとか、たんに食糧とする前の段階の状態を意味しているかは不明である。

当時の食糧としては、広義のコナラ類の生育より遺跡周辺は暖温帯から冷温帯の植物相であったのではないかと考えられる。他の一般の植物遺体の産出、花粉分析や材同定などに期待したい。また、マメ類、イネは、遺跡周辺で栽培していたものであると考えられる。

以下に、各種類の特徴を述べる。

- ・イチイガシ近似種 (*Quercus* sp. cf. *Q. gilva* BLUME) 果実 (写真No 1a・b)  
果実は炭化状態で黒色。側面観は楕円形、上面観は円形に近い。長さ15mm程度、幅10.5mm程度。コナラよりもやや大型で丸みを帯びる。
- ・コナラ (*Quercus serrata* THUNBERG) 果実 (写真No 2)  
果実は炭化状態で黒色。側面観はやや細長い楕円形、上面観は円形に近い。長さ15mm程度、幅8mm程度。個体変異があり、大きさはばらつく。
- ・クヌギ (*Quercus actissima* CARRUTHERS) 果実 (写真No 3)  
果実は炭化状態で黒色。側面観は球形に近い卵状楕円形、上面観は円形。長さ19.5mm程度、幅13mm程度。他の個体よりも大型で球形に近い。
- ・コナラ属A (*Quercus* sp. A) 果実  
いずれも破損状態で、炭化し、黒色。おそらくコナラ属と考えられる果実で、ここでは広義のコナラ属とする。
- ・コナラ属B (*Quercus* sp. B) 果実 (写真No 4)  
おそらくコナラ属の果実と考えられる破片で、炭化し、黒色。コナラ・クヌギよりも大型。<sup>\*</sup>
- ・コナラ属C (*Quercus* sp. C) 果実 (写真No 5)  
おそらくコナラ属の果実と考えられる破片で、炭化し、黒色。細長く、長さ2cm程度。一般のコナラよりも大型。
- ・マメ科 (Leguminosae) 種子 (子葉) (写真No 6 a~6 d)  
種子 (子葉) は炭化状態で黒色。長さ5mm程度、幅4mm程度、厚さ3.2mm程度。回転楕円体状の依型。へその長さは、種子の半分程度。  
本試料はおそらくアズキ (*Phaseolus angularis* W.F.WIGHT = *Azuki angularis* OHWI) と考えられるが、ここではマメ科にとどめる。
- ・イネ (*Oriza sativa* LINNE) 穎果 (穎の破片、胚乳) (写真No 7 a~7 c)  
穎果は、炭化状態で黒色。穎の部分が残存している個体の他、胚乳のみの個体が存在。穎の表面には、イネ特有の顆粒状突起が規則正しく配列している。胚乳の長さ5mm程度、幅2.7mm程度、厚さ2mm程度。やや偏平な回転楕円体。



1a・b. イナイガシ近似種、2. コナウ、3. クヌギ、4. コナウ属B、5. コナウ属C、  
6a～d. マメ科、7a～c. イネ



写 真 图 版



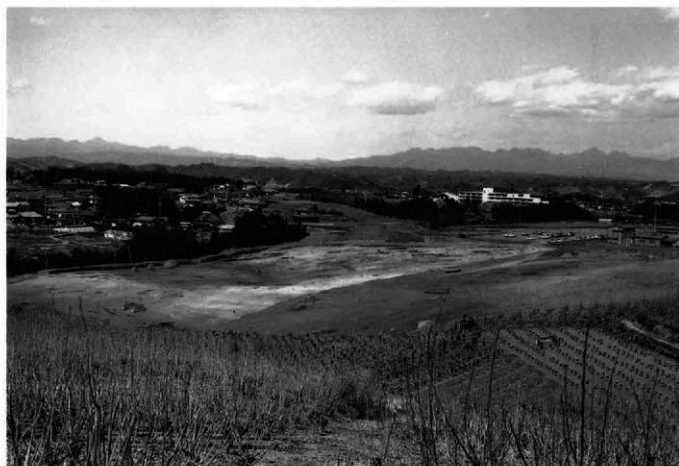


錦川流域航空写真 (国土庁提供)





矢田遺跡遠景（牛伏山より）



矢田遺跡遠景（南側丘陵上より）



矢田遺跡遠景（南側傾斜部より）



矢田遺跡から西谷川の谷を臨む（北から）

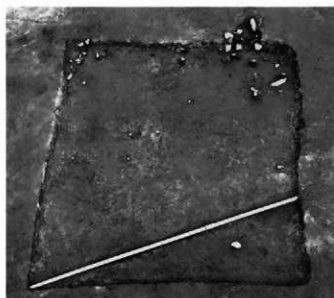


第4次調査区航空写真



第5次調査区航空写真





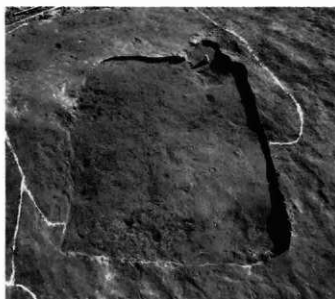
8号住居跡全景（西から）



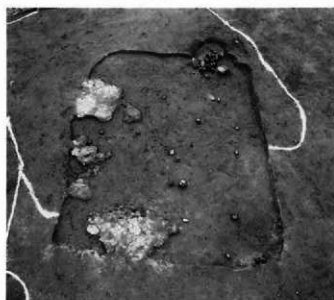
8号住居跡壙（西から）



8号住居跡遺物出土状況（西から）



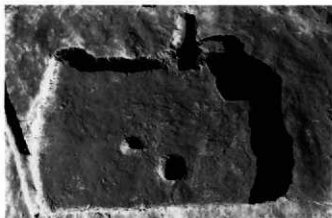
33号住居跡全景（西から）



33号住居跡遺物出土状況全景（西から）



33号住居跡壙（西から）



36号住居跡全景（西から）



36号住居跡窟（西から）



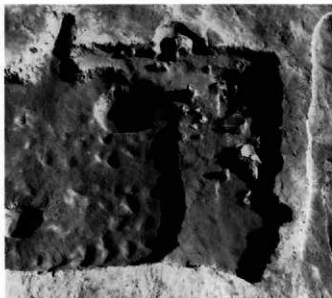
36号住居跡遺物出土状況全景（西から）



36号住居跡遺物出土状況（北から）



36号住居跡土層堆積状況（南から）



37号住居跡遺物出土状況全景（西から）



37号住居跡竈（西から）



37号住居跡貯蔵穴（西から）



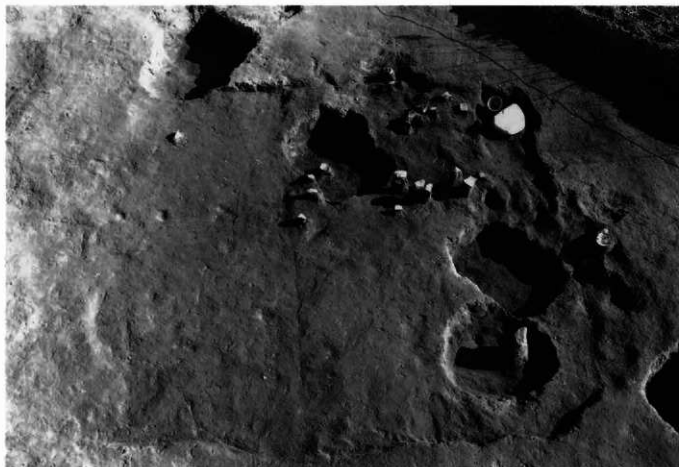
40号住居跡全景（西から）



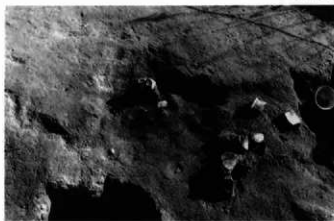
40号住居跡竈（西から）



40号住居跡貯蔵穴遺物出土状況（西から）



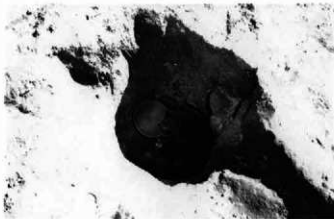
42号住居跡全景（西から）



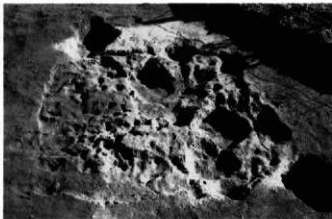
42号住居跡窠（西から）



42号住居跡貯藏穴遺物出土状況（西から）



42号住居跡貯藏穴（西から）



42号住居跡掘り方全景（西から）



46号住居跡全景（西から）



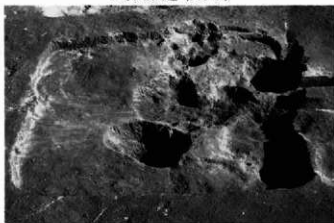
46号住居跡土層堆積状況（西から）



46号住居跡壘（西から）



46号住居跡北壁際遺物出土状況（南から）



46号住居跡掘り方全景（西から）



47号住居跡全景（西から）



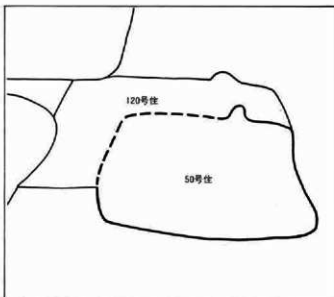
48号住居跡全景（西から）



50号住居跡「八田郷」紡錘車出土状況（北から）



50号住居跡全景（西から）





75号住居跡全景（西から）



75号住居跡竈遺物出土状況（西から）



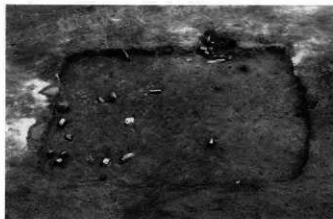
75号住居跡遺構（西から）



75号住居跡遺物出土状況（西から）



75号住居跡掘り方全景（西から）



76号住居跡全景① (西から)



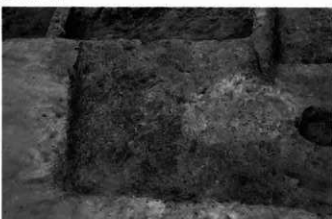
76号住居跡遺 (西から)



76号住居跡全景② (西から)



78号住居跡全景 (中央) (南から)



78号住居跡床面 (南から)





79号住居跡全景（西から）



79号住居跡西（西から）



79号住居跡「八田郷」紡錘車出土状況（西から）



79号住居跡掘り方セクション（西から）



79号住居跡掘り方全景（南から）



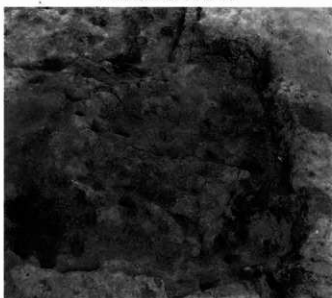
83号住居跡全景（西から）



83号住居跡周辺（西から）



83号住居跡掘り方セクション（南から）



83号住居跡掘り方全景（西から）



86号住居跡（左）98号住居跡全景（西から）



86号住居跡（左）98号住居跡掘り方（西から）



87号住居跡全景（西から）



87号住居跡竈（西から）



87号住居跡竈（南から）



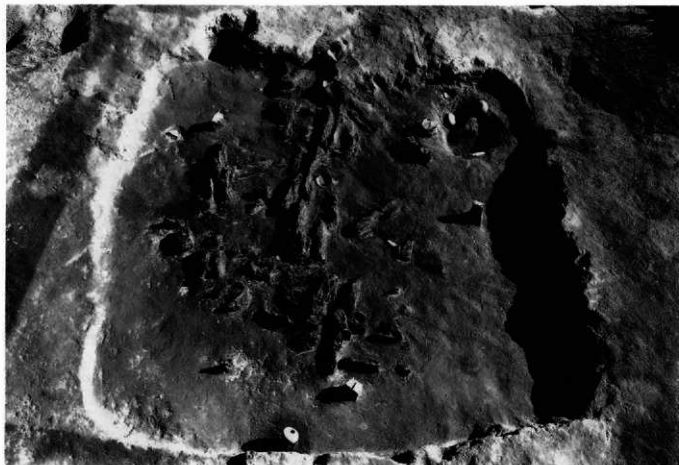
87号住居跡遺物出土状況（西から）



90号住居跡全景（西から）



90号住居跡竈（西から）



91号住居跡全景（西から）



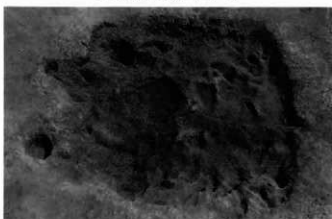
91号住居跡竈（西から）



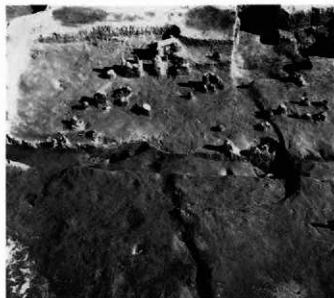
91号住居跡貯蔵穴（西から）



91号住居跡遺物出土状況（西から）



91号住居跡掘り方全景（北から）



92号住居跡全景（西から）



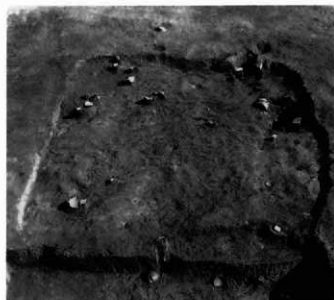
92号住居跡（右）・313号住居跡（左）（西から）



92号住居跡（北から）



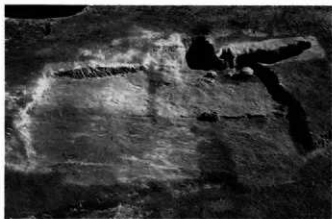
92号住居跡貯蔵穴（北から）



94号住居跡全景（西から）



94号住居跡（西から）



97号住居跡全景（西から）



101号住居跡全景（西から）



121号住居跡全景（西から）



121号住居跡炭化織籠出土状況



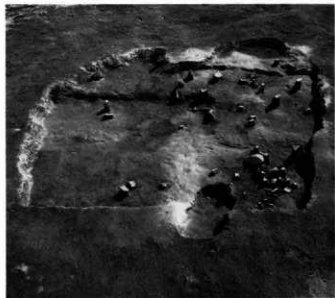
121号住居跡炭化種子出土状況



122号・264号住居跡全景（西から）



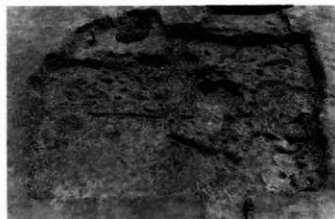
123号住居跡全景（西から）



133号（手前）・137号住居跡全景（西から）



137号住居跡遺物出土状況（東から）



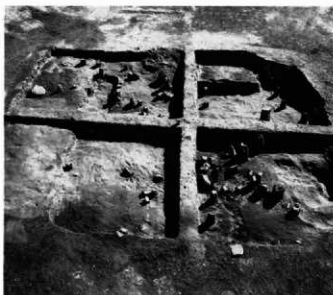
133号・137号住居跡掘り方全景（西から）



134号住居跡全景（南から）



134号住居跡紡錘車出土状況（東から）



135号住居跡全景（西から）



138号住居跡全景（西から）



138号住居跡窟（西から）



138号住居跡掘り方全景（西から）

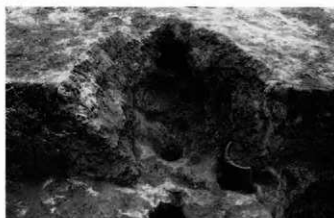




139号住居跡全景（西から）



139号住居跡遺物出土状況（西から）



139号住居跡竈（西から）



139号住居跡遺物出土状況（南から）



139号住居跡掘り方全景（西から）



140号住居跡全景（西から）



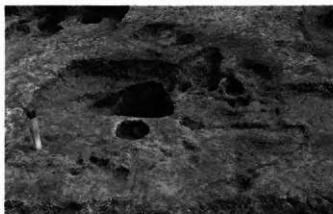
140号住居跡西（西から）



140号住居跡北（北から）



140号住居跡西（西から）



140号住居跡掘り方全景（西から）



141号住居跡全景（西から）



141号住居跡遺物出土状況（西から）



141号住居跡礎（西から）



142号住居跡礎（西から）



142号（手前）・143号住居跡全景（西から）



143号住居跡(西から)



143号住居跡復元状況1(北西から)



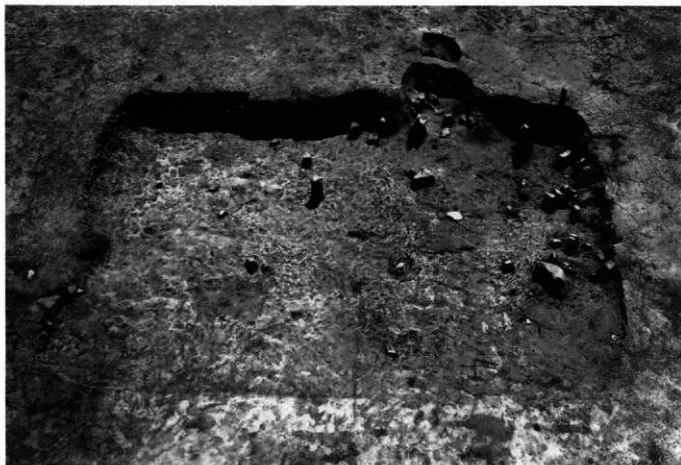
143号住居跡土器除去後(西から)



143号住居跡復元状況2(北上から)



143号住居跡石組(西から)



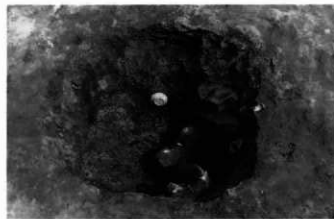
144号住居跡全景（西から）



144号住居跡竈（西から）



144号住居跡遺物出土状況（北から）



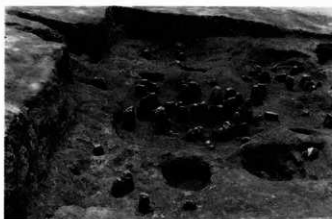
144号住居跡貯蔵穴遺物出土状況（南から）



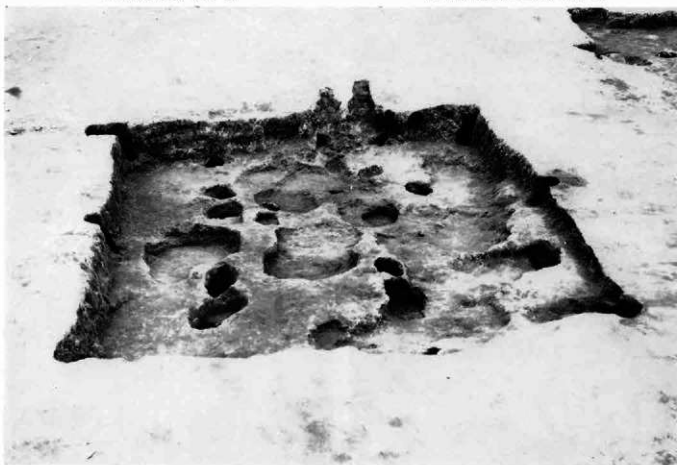
144号住居跡撮り方全景（西から）



145号住居跡全景（西から）



145号住居跡遺物出土状況（北から）



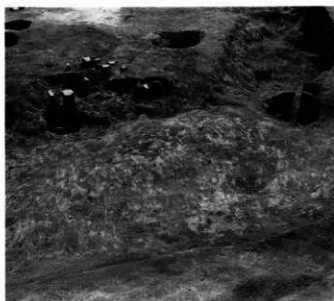
145号住居跡掘り方全景（西から）



145号住居跡竈 新（右）・旧（左）（西から）



145号住居跡掘り方（西から）



182号住居跡全景（西から）



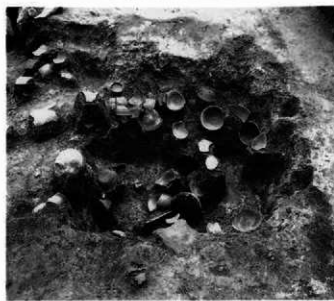
182号住居跡遺物出土状況（西から）



183号住居跡全景（西から）



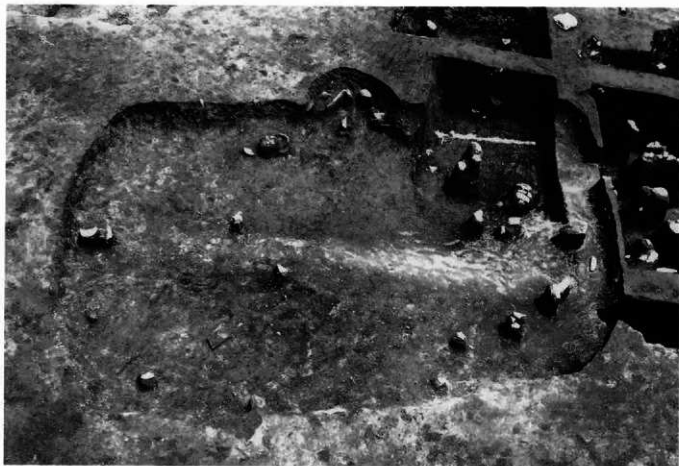
183号住居跡壙（西から）



183号住居跡貯蔵穴周辺遺物出土状況（西から）



183号住居跡掘り方全景（西から）



186号住居跡全景（西から）



186号住居跡土層堆積状況（西から）



186号住居跡竈（西から）



186号住居跡掘り方全景（西から）



186号住居跡床下土坑遺物出土状況（北から）





188号住居跡壙（文字瓦）埋設状況（西から）



188号住居跡壙（文字瓦）埋設状況（北から）



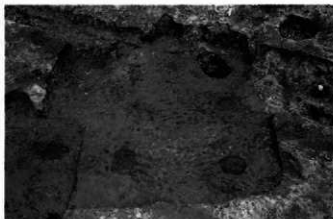
188号住居跡全景（西から）



188号住居跡壙（西から）



188号住居跡掘り方全景（西から）



189号住居跡全景（西から）



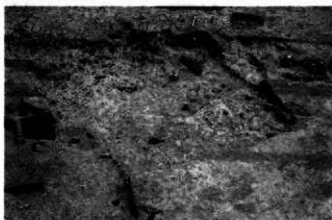
189号住居跡輪（西から）



189号住居跡遺物出土状況全景（西から）



189号住居跡貯蔵穴遺物出土状況（南から）



189号住居跡掘り方全景（西から）



191号住居跡全景（西から）



191号住居跡貯蔵穴（西から）



198号住居跡遺物出土状況全景（西から）



198号住居跡全景（西から）



198号住居跡竈（西から）



198号住居跡貯蔵穴遺物出土状況（東から）



200号住居跡全景（西から）



200号住居跡窟（西から）



200号住居跡掘り方全景（西から）



200号住居跡床下土坑（西から）



201号住居跡全景（西から）



201号住居跡窟（西から）



205号住居跡全景（西から）



206号住居跡全景（西から）



206号住居跡概（西から）



206号住居跡掘り方全景（西から）



207号住居跡遺物出土状況（南から）



208号住居跡残存部全景（西から）



221号住居跡全景（北から）



225号住居跡全景（西から）



225号住居跡竈（西から）



226号住居跡全景（西から）



226号住居跡遺物出土状況（西から）



226号住居跡竈（西から）



227号(左)・228号住居跡(右)全景(西から)



227号住居跡(西から)



228号住居跡(西から)



228号住居跡断セクション(西から)



227号住居跡撮り方全景(西から)



229号住居跡遺物出土状況（西から）



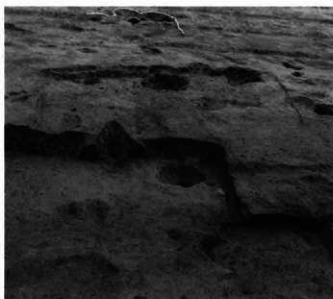
229号住居跡遺物出土状況（西から）



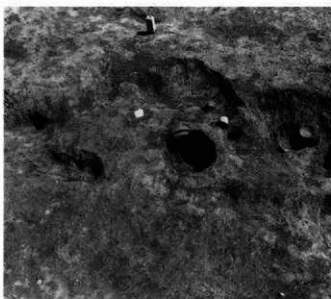
230号住居跡全景（西から）



230号住居跡概（西から）



231号住居跡全景（西から）



231号住居跡概（西から）

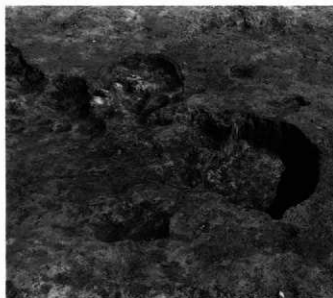




233号住居跡全景（西から）



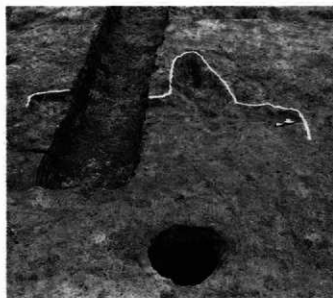
233号住居跡竈（西から）



234号住居跡全景（西から）



234号住居跡竈（西から）



235号住居跡全景（西から）



236号住居跡竈（西から）



237号住居跡全景（西から）



237号住居跡竈（西から）



260号住居跡（手前）・261号住居跡全景（西から）



260号住居跡竈振り方（西から）



261号住居跡竈（西から）



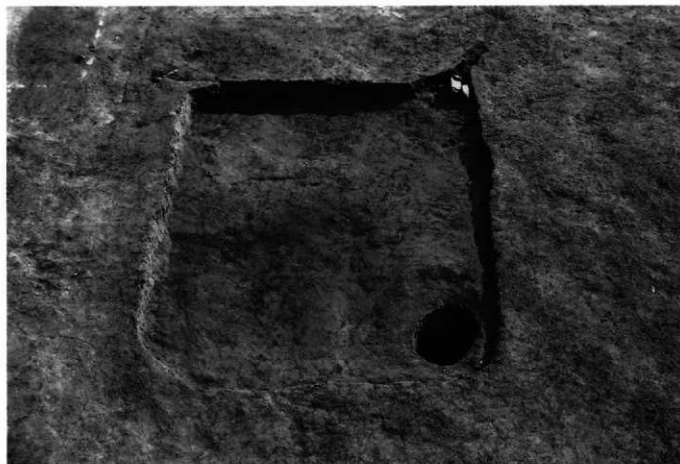
260号・261号住居跡掘り方全景（西から）



263号住居跡竪 (西から)



263号住居跡竪セクション (南から)



263号住居跡全景 (西から)



263号住居跡遺物出土状況全景 (西から)



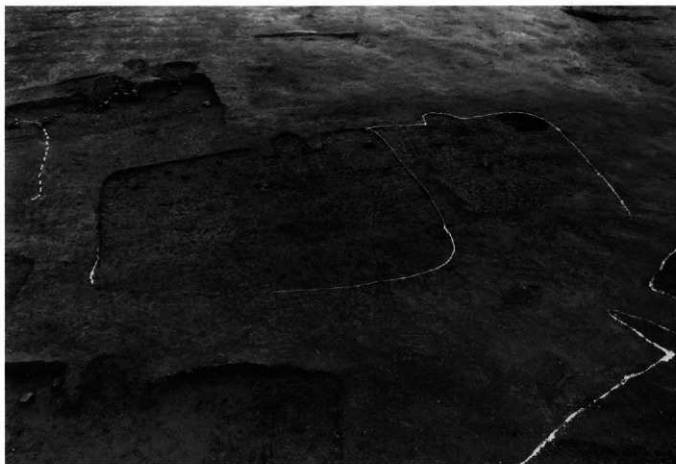
263号住居跡遺物出土状況 (西から)



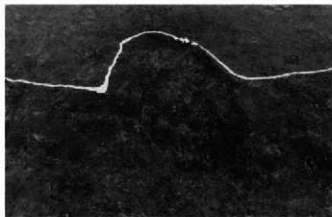
265号住居跡窠（西から）



265号住居跡掘り方全景（西から）



265号住居跡（左）・266号住居跡全景（西から）



266号住居跡窠（西から）



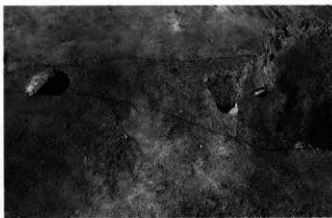
266号住居跡貯蔵穴（西から）



268号住居跡全景（南から）



268号住居跡竈（南から）



268号住居跡竈（西から）



268号住居跡竈（南から）



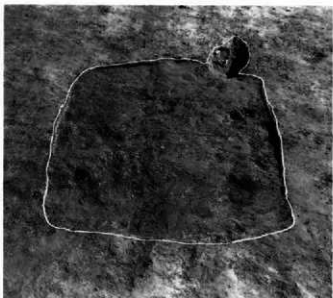
268号住居跡竈撮り方（南から）



269号住居跡全景（南から）



269号住居跡竪（南から）



270号住居跡全景（西から）



270号住居跡竪（西から）



271号住居跡全景（西から）



271号住居跡竪（西から）



272号住居跡（西から）



272号住居跡（南から）



274号住居跡全景（西から）



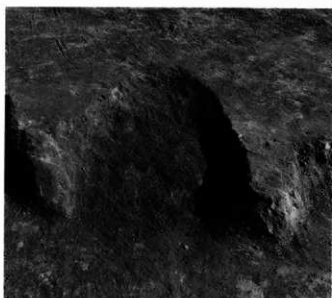
274号住居跡掘り方（西から）



274号住居跡床下土坑（西から）



275号(右)・276号住居跡(左)全景(西から)



275号住居跡(西から)



275号(右)・276号住居跡(左)遺物出土状況全景(西から)



276号住居跡遺物出土状況(西から)



276号住居跡(西から)





277号住居跡竈（西から）



277号住居跡竈（西から）



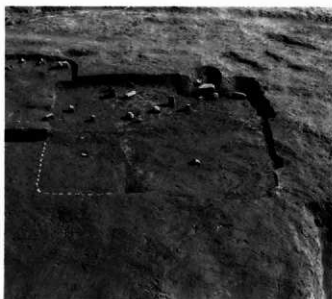
277号住居跡遺物出土状況全景（西から）



277号住居跡全景（西から）



277号住居跡掘り方全景（西から）



280号住居跡全景（西から）



280号住居跡礎（西から）



281号住居跡全景（西から）



281号住居跡礎（西から）



281号住居跡貯蔵穴（西から）



282号住居跡全景（西から）



284号住居跡（西から）



284号住居跡掘り方全景（西から）



284号住居跡全景（西から）



285号住居跡全景（西から）



285号住居跡（西から）



300号住居跡遺物出土状況（西から）



300号住居跡竈（西から）



300号住居跡全景（北から）



300号住居跡作業台埋設状況（北から）



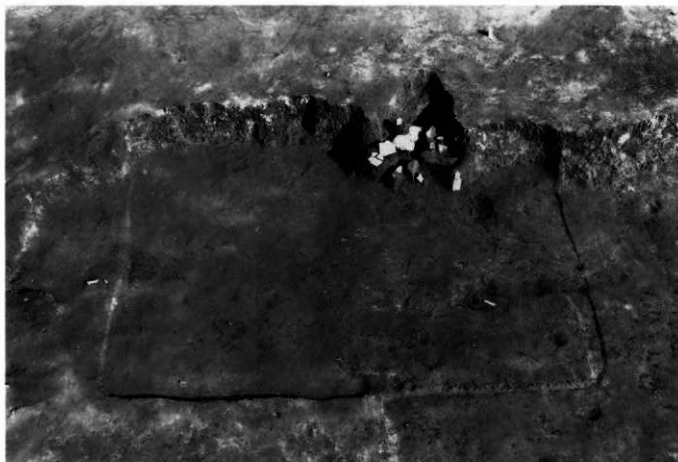
300号住居跡掘り方全景（北から）



306号住居跡遺物出土状況（西から）



306号住居跡（西から）



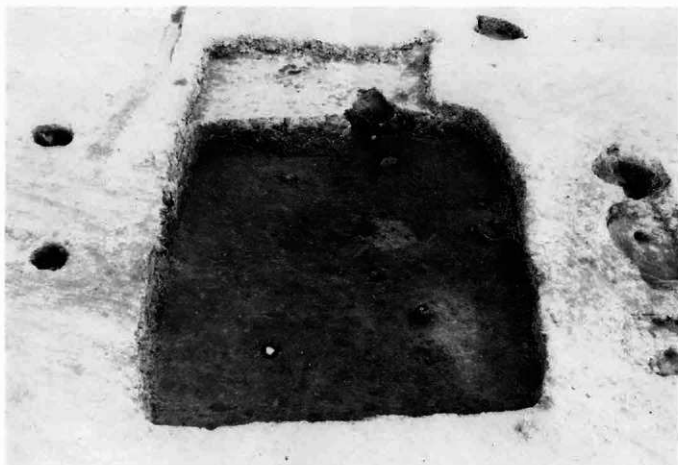
306号住居跡全景（西から）



308号住居跡全景（西から）



308号住居跡（西から）



309号住居跡全景（西から）



309号住居跡竈（西から）



309号住居跡竈掘り方（西から）



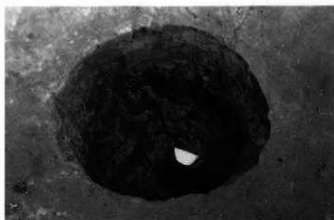
309号住居跡竈遺物出土状況（西から）



309号住居跡紡錘車出土状況（北から）



314号住居跡全景（西から）



314号住居跡貯蔵穴（南から）



314号住居跡全景（西から）



314号住居跡遺（西から）



314号住居跡竪掘り方セクション（西から）



316号住居跡(西から)



316号住居跡撮り方全景(西から)



316号住居跡全景(西から)



317号住居跡(西から)



317号住居跡セクション(南から)





331号住居跡全景（北から）



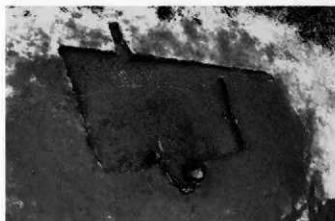
331号住居跡竪（西から）



331号住居跡掘り方全景（北から）



335号住居跡遺物出土状況全景（東から）



335号住居跡全景（東から）



335号住居跡竈セクション（西から）



335号住居跡竈（西から）



335号住居跡竈振り方（西から）



8位-1



8位-2



8位-6



8位-10



33位-1



36位-1



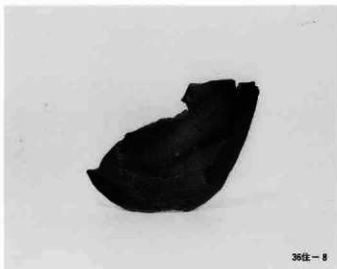
36位-3



36位-4



36住-2



36住-8



36住-7



36住-12



36住-14



36住-15



36住-17



36住-16



36住-18

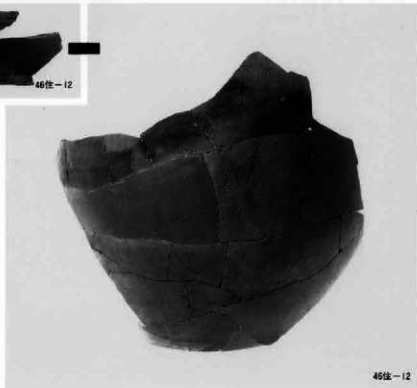


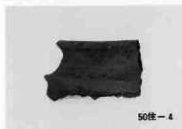
37住-1



37住-3













76 位 - 10



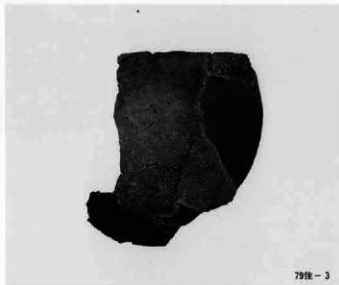
76 位 - 12



76 位 - 13



79 位 - 1



79 位 - 3



79 位 - 7



79 位 - 8



79 位 - 6



79 位 - 10



79 位 - 11



79 位 - 12



79 位 - 13



79 位 - 14



79 位 - 15



79 位 - 16



78 位 - 3



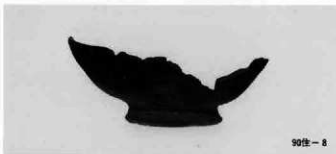
83 位 - 2



83 位 - 3



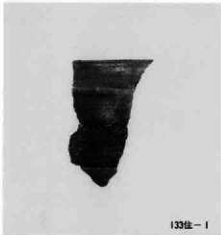
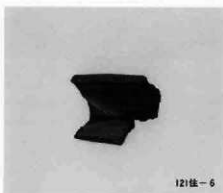
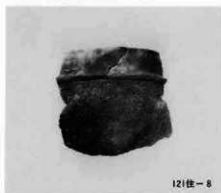
86 位 - 1

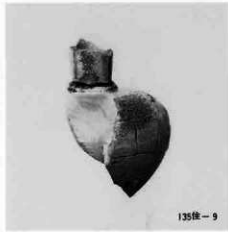
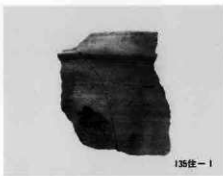


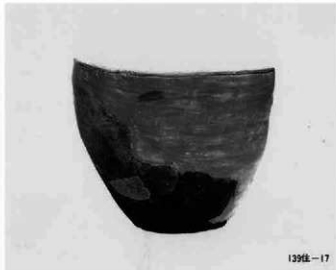


















140位-4



140位-13



140位-5



140位-6



140位-7



140位-9



140位-10



140位-11



140位-12



141位-1



141位-5



141位-2



141位-3



141位-4



143位-10



143位-11



143位-12



143位-13



143位-15



143位-17



143位-25



143位-6



143位-7



143位-5



143位-8



144位-3



144位-4



144位-2



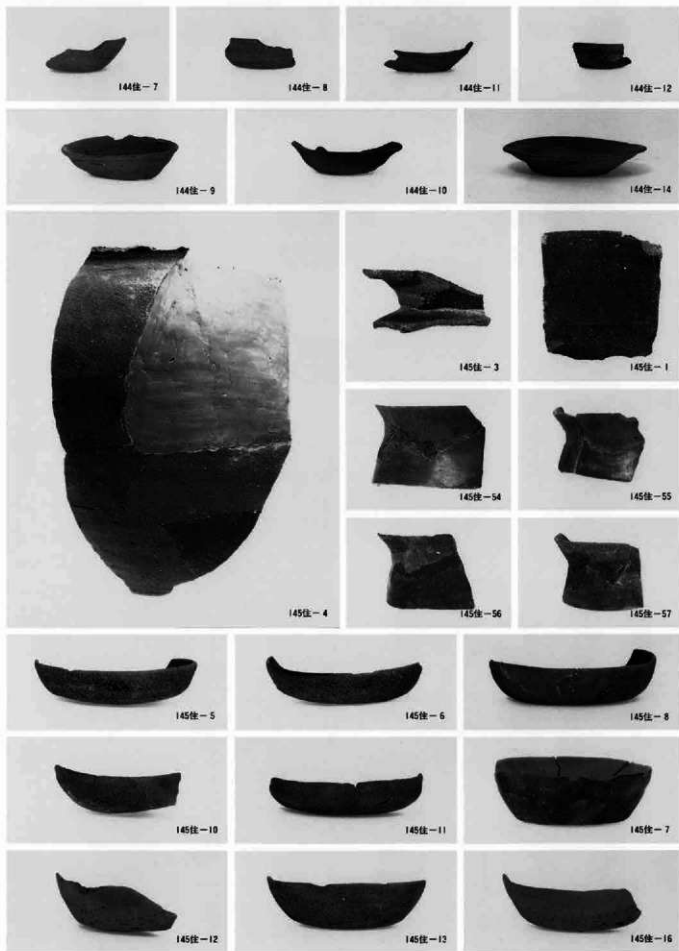
144位-5



144位-6



144位-1





145位-18



145位-19



145位-20



145位-22



145位-25



145位-28



145位-35



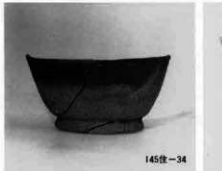
145位-36



145位-61



145位-32



145位-34



145位-68



145位-38



145位-39



145位-40



145位-41



145位-69



145位-70



145位-49



182位-1



182位-2





183住-23



183住-24



183住-25



183住-26



183住-27



183住-29



183住-32



183住-33



183住-34



183住-35



183住-36



183住-37



183住-38



183住-39



183住-40



183住-43



183住-45



183住-46



183住-48



183住-50



183住-51



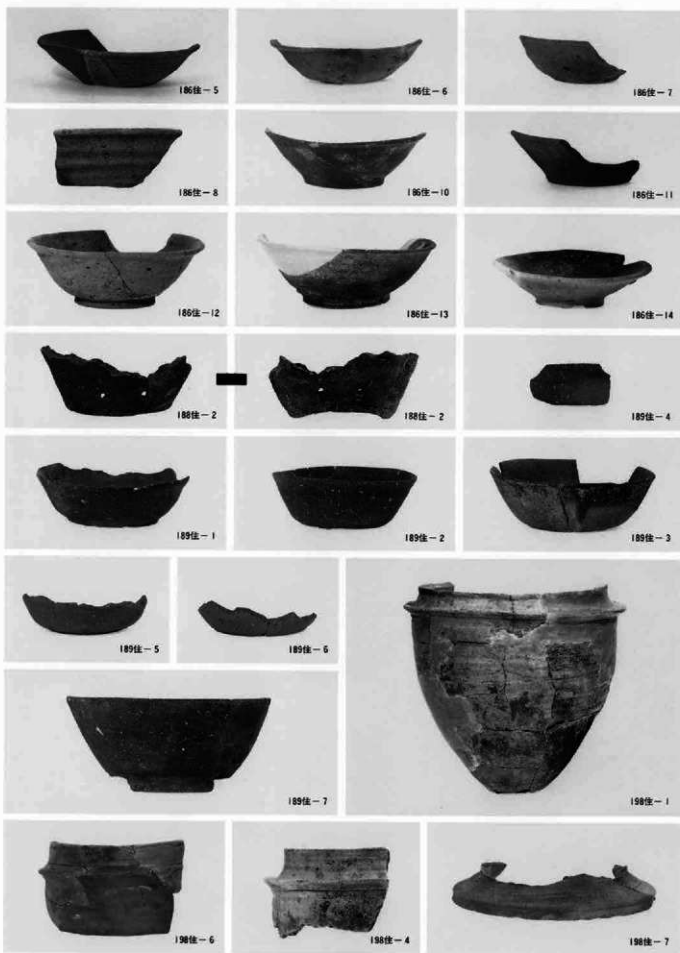
186住-1



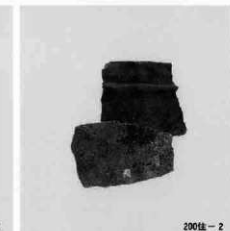
186住-2

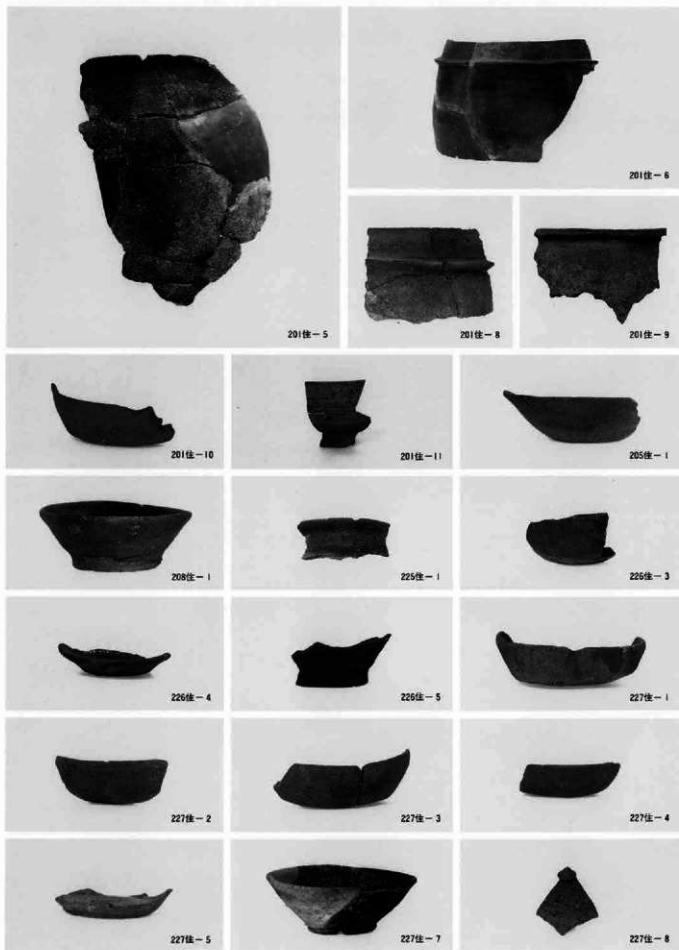


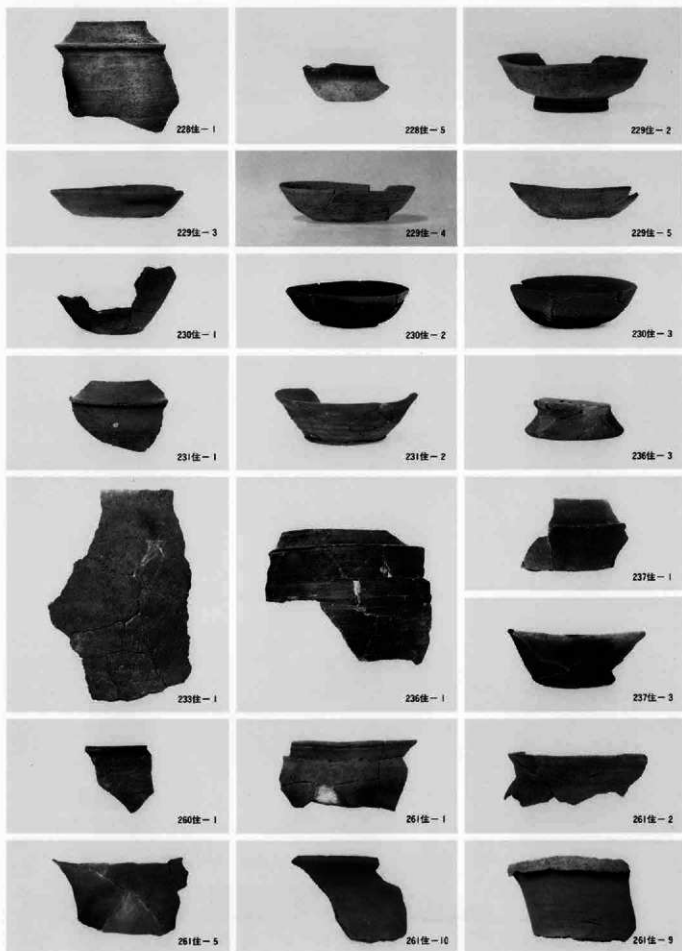
186住-4



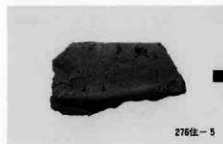
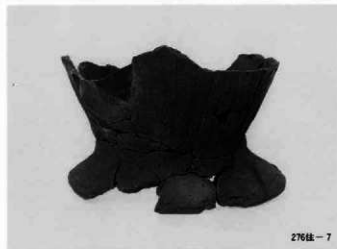










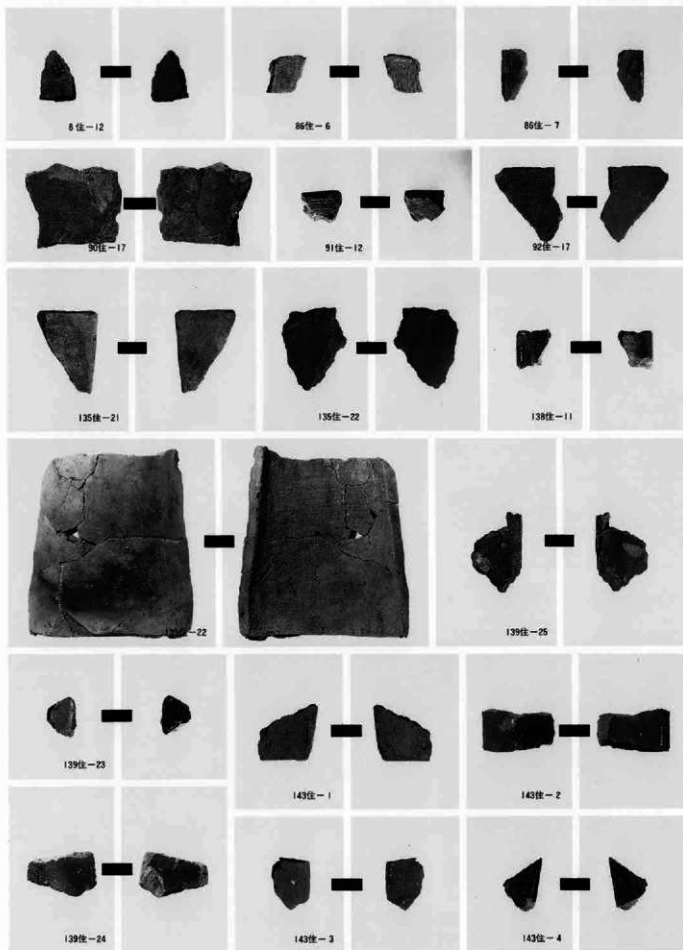


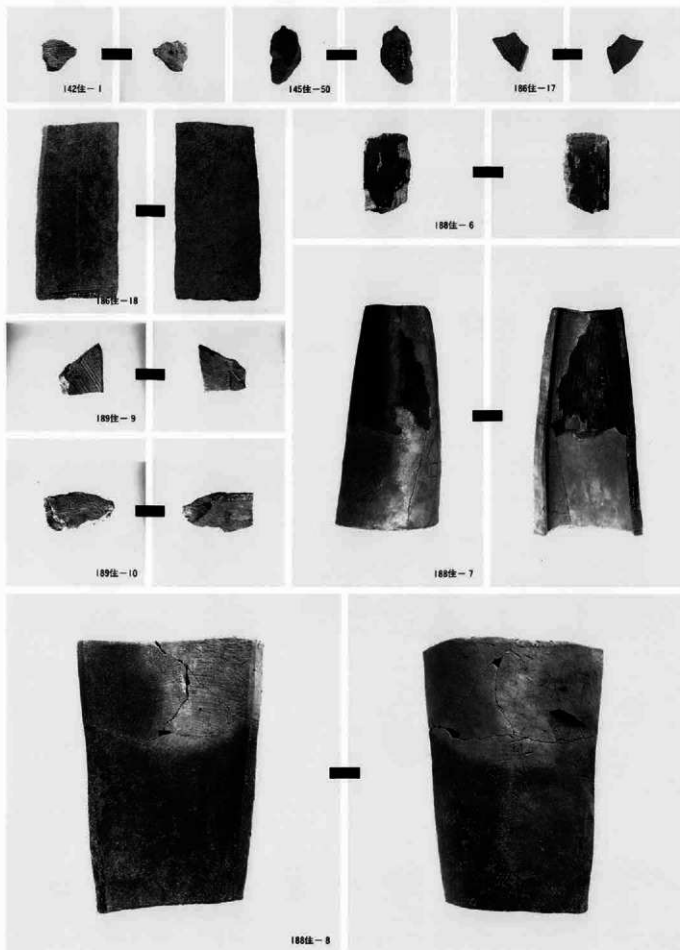


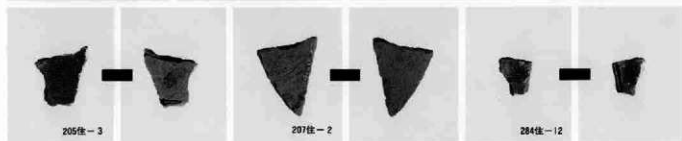
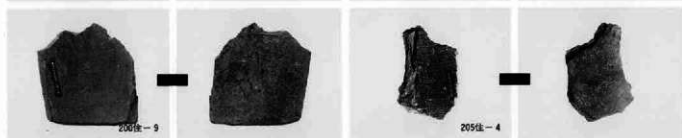
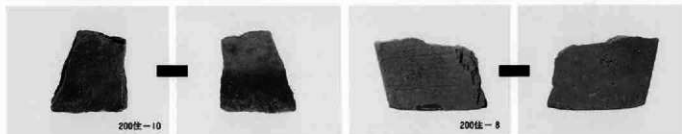
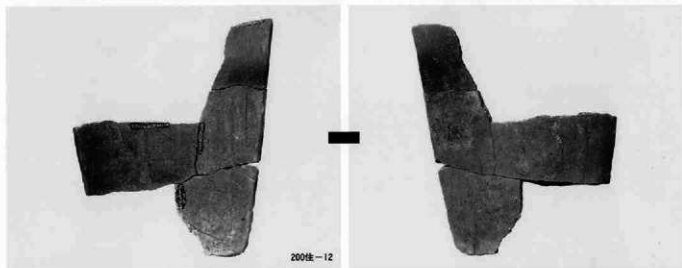
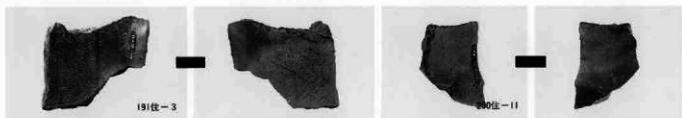


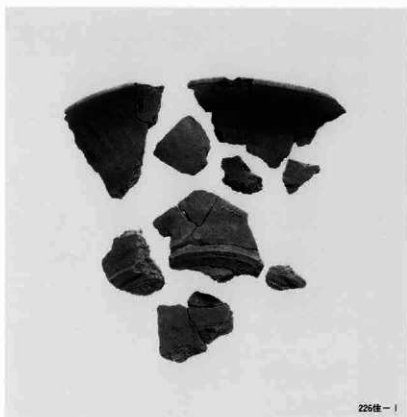


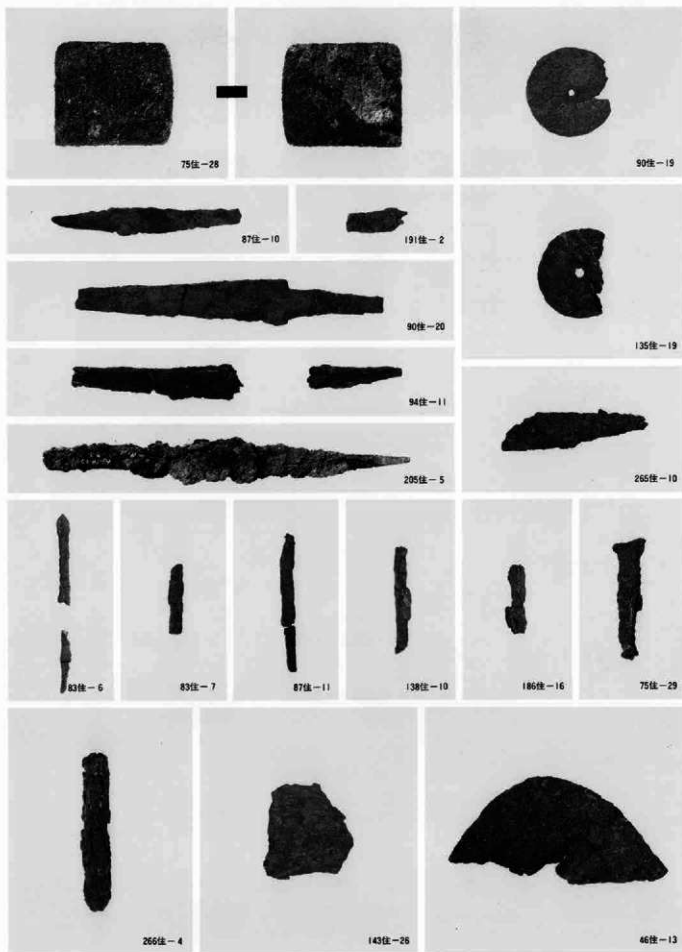


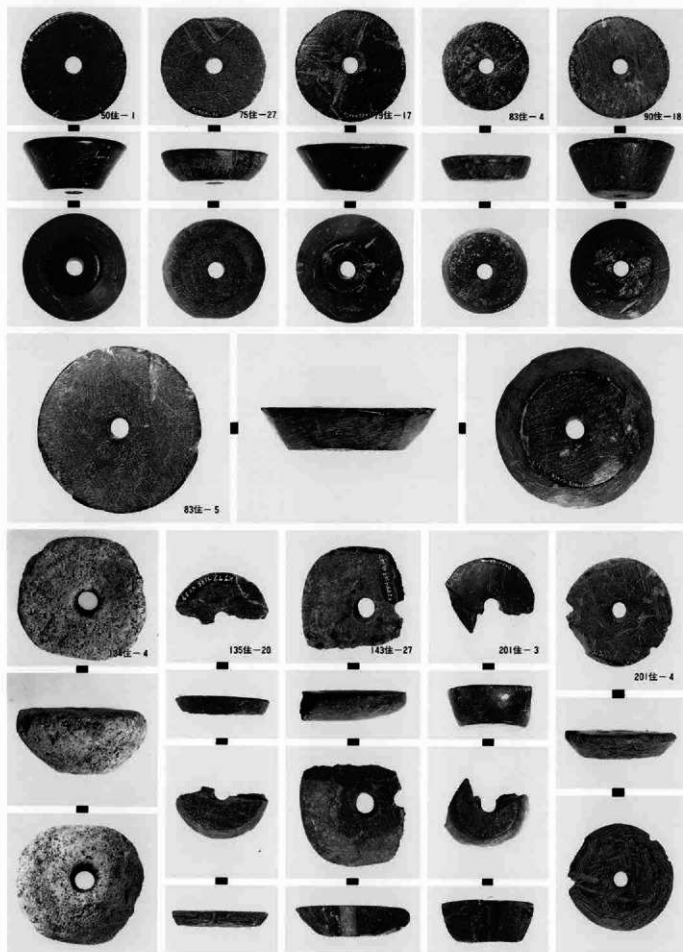


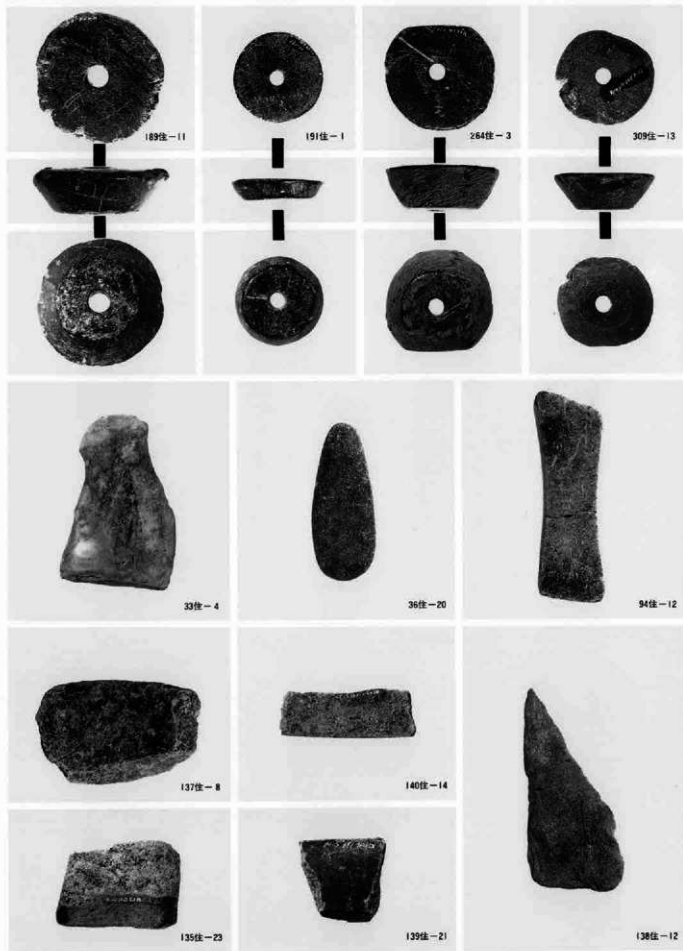


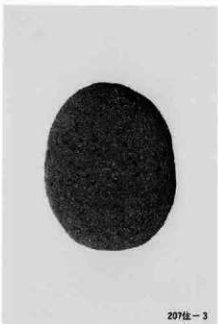
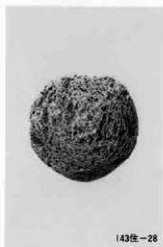




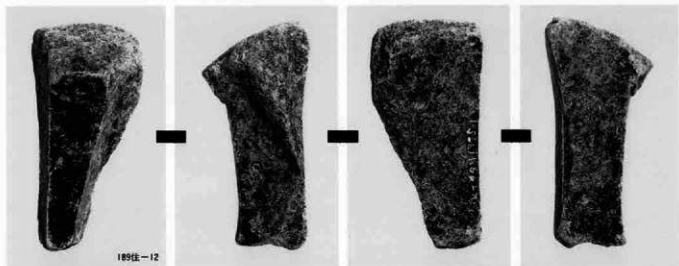








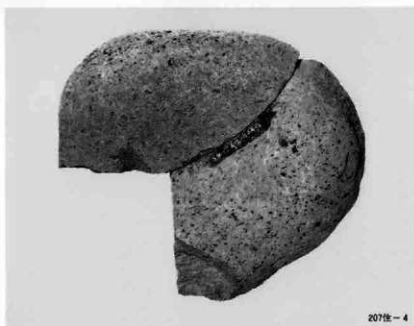




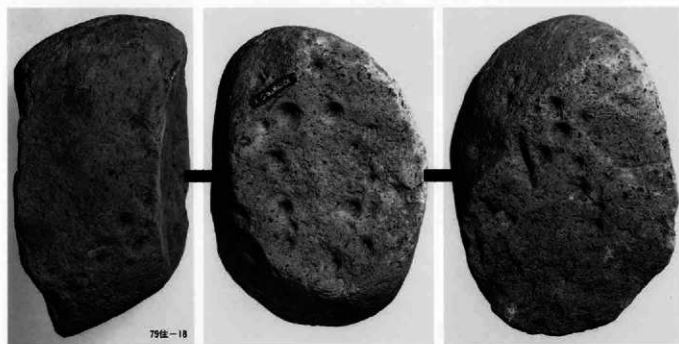
189位-12



189位-12



207位-4



79位-18





7



53住-16



189住-7



189住-1



50住-1



79住-17



83住-5



189住-11





イネ



マメ類



コナラ



コナラ属



調査の打ち合わせ



表土の除去と遺構確認作業



住居跡の調査



調査の進行状況



住居跡の記録と見学者



出土した土器の水洗い



整理作業の状況



出土遺物の整理



矢田の台地西端部と後方は多胡の丘陵（東から）



広大な矢田遺跡と南側にひかえる丘陵（北から）

群馬県埋蔵文化財調査事業団  
調査報告第106集

## 矢田遺跡

関越自動車道(上越線)地域埋蔵  
文化財発掘調査報告書第4集

平成2年3月15日 印刷

平成2年3月20日 発行

編集・発行／群馬県埋蔵文化財調査事業団  
勢多郡北橋村大字下箱田784-2  
電話(0279)52-2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第106集

関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第4集

### 矢田遺跡正誤表

頁・行	誤	正
19頁 第3表92号住 備考		(追加)311号住一部残存
275頁 第268図	B類	A類
”	C類	B類
”	類似石製品	類似石製品(形状はC類)
276頁 第269図		図左から①、②、③



(-75,000)  
100+ (+27,300)  
0

(-75,100)  
+20

(-75,200)  
+40

(-75,300)  
+60

100+  
70



90+

80+ (+27,200)

70+

60+ (+27,100)

50+

40+ (+27,000)

30+

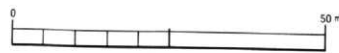
20+ (+26,900)

10+

(-75,000)  
0+ (+26,800)  
0



数字のみは 住居跡番号  
住は 住居状遺構  
楯は 楯立柱建物跡  
井は 井戸  
土坑・ピット等は、本図では省略している。



矢田遺跡遺構分布図(1/600)平成元年12月末現在